616-951
1200501536399
616
951
O
複写

26. 2. 16

26. 2. 16

日本大

第

文

藤村

新朝

日本文學大辭典

第三卷

文學博士
村藤作編

新潮社版

第三卷增補訂正表

頁	段行	誤	正
一二	一ノ一三	「家說林」	「百家說林」
一三	一ノ一七	「漢人漢文手管始」	「韓人漢文手管始」
一二〇	三ノ一	「類燒阿彌陀緣起」	「頬燒阿彌陀緣起」
一九三	三ノ一七	「奇然法橋在唐日記」	「奇然法橋在唐日記」
二七三	一ノ三一	准レ之 豐受宮	豐受宮 准レ之
三九八	二ノ三	「歌舞伎音樂」	「歌舞伎劇音樂」
四四九	四ノ一三	*neveren*	*neueren*
四五二	一ノ九	*Culturentwick*	*Culturentwicke*
四五二	一ノ一〇	*menschheit*	*Menschheit*
五八一	二ノ二一	明かであるが、現存の	明かであり、萬葉集卷十六に出てゐる、豐前・豐後、[illegible]

顧問

早稲田大學名譽教授 文學博士 坪内逍遙

東京帝國大學名譽教授 文學博士 上田萬年

第三卷增補訂正表

頁	段行	誤	正
一二	一ノ一三	「家說林」	「百家說林」
二二	一ノ一七	「漢人漢文手管始」	「韓人漢文手管始」
一二〇	三ノ一	「類燒阿彌陀緣起」	「頰燒阿彌陀緣起」
一九三	三ノ一七	「奇然（てうねん）法橋在唐日記」	「奇然（てうねん）法橋在唐日記」
二七三	一ノ三一	准レ之 豐受宮	豐受宮 准レ之
三九八	二ノ三	「歌舞伎音樂」	「歌舞伎劇音樂」
四四九	四ノ一三	*neveren*	*neueren*
四五二	一ノ九	*Culturentwick*	*Culturentwicke*
四五二	一ノ一〇	*menschheit*	*Menschheit*
五八一	二ノ二一	明かであるが、現存の	明かであり、萬葉集卷十六に出てゐる、豐前・豐後・筑前國の海人の歌の中には船歌もあると思はれるが、確實な船歌の
五八七	四ノ一〇	(Alexundre Duma Père)	(Alexandre Duma Père)
六七七	一ノ一五	諸禪師に つて	諸禪師によつて
九三三	三ノ三二	明治三十六年、	明治三十四年より大正元年まで、
九三九	四ノ二九	(增補)	題名不詳(安永七年刊、横本、百五曲收載、「兎里彌壽袖見臺」の版木を交へ用ひて刊行)
九六五	挿繪說明	肩相色籠戻	肩相色鶴戻

第三巻增補訂正表追加

頁	段・行	誤	正
九七	三ノ一〇	金澤に生れ	會津に生れ
七	三ノ一六	「天山道中栗毛後駿馬」	「天山道中栗毛後駿足」
一四	二ノ一六	「敎育會」	「敎育界」
		明治十七年十一月	明治十七年一月

頁	段・行	誤	正
七三	二段・一ノ二	宅	匠宮地源右衞門が稽古
	一ノ六	約するを	約するを折柄別室で酒
		ち聞きされる。	肴の饗應を受けて居つ
七三	一ノ二	安永七年(一七七八)二月	歿年は天明元年秋か。
		十八日江戸にて歿す。	源右衞門に聞かれる。
七五〇	二上段別刷	松の落葉(おちばのうたがたり)	(削除)
	二ノ八右挿繪	喜年五十八。	匠宮地源右衞門が稽古

頁	段・行	誤	正
七七四	四ノ二	「八柱」	「さよひめ」
七七六	(二)別刷ノ二(下段左挿增)	本	本
七七九	ミノ一	萬葉集を見よ。	萬葉見安」
八〇七	ミノ一(下段左)	萬葉見安」	萬葉見安」
八二八	ミノ一九	名和長年	名和長年
八四六	ミノ一九	その朝妻字が	その妻朝子が
八五五	二ノ一	三のしのびつつ	三のしのびつつ
八六九	同	二十五年	二十四年
八七一	一ノ七	現はれるのみ	傳はれるのみ
八八〇	一ノ八	天保十四年	天保十年
八八二	ミノ一五	有馬私雨	有馬時雨
八九六	ミノ二四	「夢幻境」	「夢覺境」
九三一	ミノ二五	安政十二年(一八五五)	文政十二年(一八二九)
九六九	ミノ二五	「貝覆儀式」	(後に山中竹十郎)
九八九	ミノ二四	「夢幻境」	「夢覺境」
一〇〇一	ミノ二五	安政十二年(一八五五)	文政十二年(一八二九)
一〇二二	ミノ二五	有馬私雨	有馬時雨
一〇二三	ミノ二四	天保十四年	天保十年
一〇三七	ミノ二五	現はれるのみ	傳はれるのみ
一〇四五	ミノ二五	同二十四年	同二十五年
一〇五三	ミノ二五	「古今繁雅抄」	「古今繁雅抄」
一〇五三	ミノ二五	「明神不動北山櫻」	「鳴神不動北山櫻」
一〇六三	ミノ二五	「古今繁雅抄」	「古今繁雅抄」
一〇六三	ミノ二五	「明神不動北山櫻」	「鳴神不動北山櫻」
一〇六四	ミノ二五	「今古繁雅抄」	「古今繁雅抄」
一〇六四	ミノ二五	「元亨綱」	「元亨の木綱」
一〇六五	ミノ二五	口齋	鷺齋
一〇六五	ミノ二五	拾子集	拾子集
一〇六六	ミノ二五	年に第七編	年第十七編
一〇六六	ミノ二五	年に第八編	年第十八編
一〇六六	ミノ二五	安永二	安永二
一〇六六	ミノ二五	汲淺集に	汲淺集の
一〇六六	ミノ二五	年に第六編	年第十六編
一〇六六	ミノ二五	安永二	安永二
一〇六六	ミノ二五	「號」芝園	「號」鈴屋・芝園
一〇六六	ミノ二五	「齋日流」	「齋日流」
一〇六六	ミノ二五	讀史備考	讀史備要
一〇六六	ミノ二五	南溪	南谿
一〇六六	ミノ二五	文明二年(一二三〇)	天明二年(一七八二)
一〇六六	ミノ二五	「敎育會」	「敎育界」
一〇六六	ミノ二五	「天山道中栗毛後駿馬」	「天山道中栗毛後駿足」
一〇六六	ミノ二五	金澤に生れ	會津に生れ
一〇六六	ミノ二五	明治十七年十一月	明治十七年一月

頁	段・行	誤	正
一〇六六	ミノ二五	「古柳」	「古柳」
一〇六六	ミノ二五	「平家部」	「平家一部」
一〇六六	ミノ二五	(藏密究研語國大帝京東)	(藏書圖大帝京東)
一〇六七	ミノ二五	【號】東蒙	【別號】秩都紀南子・東蒙
一〇六九	ミノ二五	二十六年十二月、「文藝倶樂部」	二十八年二月、「讀賣新聞」
一〇七〇	ミノ二五	「怪異談牡丹燈籠」	「怪談牡丹燈籠」
一〇七〇	挿繪說明	(藏密究研語國大帝京東)	(削除)
一〇七一	ミノ二五	「小柳」	「古柳」
一〇七一	ミノ二五	「平家部」	「平家一部」
一〇七一	ミノ二五	難有御江戸の景清	難有御江戸の景清
一〇七一	ミノ二五	【通稱】ノ前ニ增補	【姓】藤原
一〇七一	ミノ二五	武遊緣倉日記	武遊眞砂日記
一〇七一	ミノ二五	源信・惠心	源信(惠心)
一〇七一	ミノ二五	柱	ふつかえ
一〇七一	ミノ二五	「今川忠臣藏」	「今川忠臣傳」
一〇七一	ミノ二五	「東日」の	「東日」に
一〇七一	ミノ二五	「裝束彙」	「裝束色彙」
一〇七一	ミノ二五	「新井白石」	「白石常人」
一〇七一	ミノ二五	世一谷人	世一谷人
一〇七一	ミノ二五	「福翁續百話」	「福翁百餘話」
一〇七一	ミノ二五	Ransch	Rausch
一〇七一	ミノ二五	「藝術論」	「美的同感」
一〇七一	ミノ二五	autouomie	Autonomie
一〇七一	ミノ二五	「和歌」	「短歌」
一〇七一	ミノ二五	「音聲」	「子音」
一〇七一	ミノ二五	承德元年	承應元年
一〇七一	ミノ二五	增山金八	村岡幸次
一〇七一	ミノ二五	「明神不動北山櫻」	「鳴神不動北山櫻」
一〇七一	ミノ二五	「古今繁雅抄」	「古今繁雅抄」
一〇七一	ミノ二五	「元亨の木綱」	「元亨の木綱」
一〇七一	ミノ二五	鷺齋	鷺齋
一〇七一	ミノ二五	拾子集	拾子集
一〇七一	ミノ二五	年第十七編	年第十七編
一〇七一	ミノ二五	年第十八編	年第十八編
一〇七一	ミノ二五	汲淺集の	汲淺集の
一〇七一	ミノ二五	年第十六編	年第十六編
一〇七一	ミノ二五	安永二	安永二
一〇七一	ミノ二五	「號」芝園	「號」鈴屋・芝園
一〇七一	ミノ二五	「齋日流」	「齋日流」
一〇七一	ミノ二五	讀史備要	讀史備要
一〇七一	ミノ二五	南谿	南谿
一〇七一	ミノ二五	文明二年(一二三〇)	天明二年(一七八二)

頁	段・行	誤	正
一一一	二ノ一四	「百合草若大臣」	「百合若大臣」
一一一	二ノ一九	熊野物語	熊野物語
一一一	二ノ二	「制度總體手記」(新井白石全集六)等があるが、	「制度總體手記」(新井白石全集六)等があるが、
一一一	二ノ三	三諱	三諱
一一一	二ノ六	連句連歌	聯句連歌
一一一	二ノ二	天保の末年に歿した。	天保十四年十一月十日
一一一	二ノ一九	左行文字	右行文字
一一一	二ノ一九	享年不詳	享年七十四
一一二	四ノ三	高足馬州	自然庵馬州
一一二	四ノ八	元和四年版	元文四年版
一一二	一ノ九	(國語說叢及び岩波講座日本文學)	(新潮社版日本文學講座總說編所收)
一一二	一ノ四	中島原足	中島廣足

頁	段・行	誤	正
一一一	二ノ一四	「百合草若大臣」	「百合若大臣」
一一一	二ノ一九	熊野物語	熊野物語
一一一	二ノ二	「制度總體手記」(新井白石全集六)等があるが、	「制度總體手記」(新井白石全集六)等があるが、
一一一	二ノ三	三諱	三諱
一一一	二ノ六	連句連歌	聯句連歌
一一一	二ノ二	天保の末年に歿した。	天保十四年十一月十日
一一一	二ノ一九	左行文字	右行文字
一一一	二ノ一九	享年不詳	享年七十四
一一二	四ノ三	高足馬州	自然庵馬州
一一二	四ノ八	元和四年版	元文四年版
一一二	一ノ九	(國語說叢及び岩波講座日本文學)	(新潮社版日本文學講座總說編所收)
一一二	一ノ四	中島原足	中島廣足

616-94

繪圖目次

國書(一)……六
國書(二)……六
國書(三)……六
國書(四)……六
馬琴肖像及び筆蹟……一〇五
芭蕉肖像及び筆蹟……一〇五
平假名諸體及び字源表(一)……一〇五
平假名諸體及び字源表(二)……一〇五
平假名諸體及び字源表(三)……一〇五
平假名諸體及び字源表(四)……一〇五
舞樂面……一〇六
舞樂裝束……一〇六
燕石肖像及び筆蹟……一〇六
古河默阿彌肖像及び筆蹟……一〇六

馬琴自筆八犬傳稿本
國書(一)……本文共紙
國書(二)……本文共紙
國書(三)……本文共紙
國書(四)……本文共紙
平家物語(一)……本文共紙

616-94

挿圖頁數目次

國書（一）……
國書（二）……
馬琴自筆八犬傳稿本……
日本書（一）……
日本書（二）……
日本書（三）……
日本書（四）……
日本書記（一）……
馬琴肖像及び筆蹟……
芭蕉肖像及び筆蹟……
平假名諸體及び字源表（一）……
平假名諸體及び字源表（二）……
平假名諸體及び字源表（三）……
平假名諸體及び字源表（四）……
舞樂面……
舞樂裝束……
蕪村肖像及び筆蹟……
古河黙可彌肖像及び筆蹟……
平家物語（一）……

頁	段・行	誤	正
九七		太政官布達	太政官達
九七	一ノ五	告示	圖書課
九七	一ノ七	文庫課	「政理叢談」
九七	一ノ五	「教理叢談」	天明二年（一七八二）
九七	一ノ八	大明二年（一三〇）	自在雷子賽貨
九七	一ノ九	自在雷子賽貨	南窓
一〇三	一ノ一	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二	「讀史備考」	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三	「號」芝蘭	「春日流」
一〇三	一ノ四	「春日流」	佐佚
一〇三	一ノ五	藏氏鑒訂本	「讀史備要」
一〇三	一ノ六	南窓	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ七	「號」芝蘭	「春日流」
一〇三	一ノ八	「讀史備考」	佐佚
一〇三	一ノ九	「春日流」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ四〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ四一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ四二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ四三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ四四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ四五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ四六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ四七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ四八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ四九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ五〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ五一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ五二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ五三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ五四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ五五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ五六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ五七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ五八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ五九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ六〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ六一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ六二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ六三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ六四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ六五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ六六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ六七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ六八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ六九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ七〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ七一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ七二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ七三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ七四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ七五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ七六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ七七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ七八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ七九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ八〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ八一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ八二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ八三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ八四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ八五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ八六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ八七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ八八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ八九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ九〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ九一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ九二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ九三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ九四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ九五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ九六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ九七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ九八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ九九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一〇〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一〇一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一〇二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一〇三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一〇四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一〇五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一〇六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一〇七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一〇八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一〇九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一一〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一一一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一一二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一一三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一一四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一一五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一一六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一一七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一一八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一一九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一二〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一二一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一二二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一二三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一二四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一二五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一二六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一二七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一二八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一二九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一三〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一三一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一三二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一三三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一三四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一三五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一三六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一三七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一三八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一三九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一四〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一四一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一四二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一四三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一四四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一四五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一四六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一四七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一四八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一四九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一五〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一五一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一五二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一五三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一五四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一五五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一五六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一五七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一五八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一五九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一六〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一六一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一六二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一六三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一六四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一六五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一六六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一六七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一六八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一六九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一七〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一七一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一七二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一七三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一七四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一七五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一七六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一七七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一七八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一七九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一八〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一八一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一八二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一八三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一八四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一八五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一八六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一八七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一八八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一八九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一九〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ一九一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一九二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ一九三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ一九四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ一九五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ一九六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ一九七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ一九八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ一九九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二〇〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二〇一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二〇二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二〇三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二〇四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二〇五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二〇六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二〇七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二〇八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二〇九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二一〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二一一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二一二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二一三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二一四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二一五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二一六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二一七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二一八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二一九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二二〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二二一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二二二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二二三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二二四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二二五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二二六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二二七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二二八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二二九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二三〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二三一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二三二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二三三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二三四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二三五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二三六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二三七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二三八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二三九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二四〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二四一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二四二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二四三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二四四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二四五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二四六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二四七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二四八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二四九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二五〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二五一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二五二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二五三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二五四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二五五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二五六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二五七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二五八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二五九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二六〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二六一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二六二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二六三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二六四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二六五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二六六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二六七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二六八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二六九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二七〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二七一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二七二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二七三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二七四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二七五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二七六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二七七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二七八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二七九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二八〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二八一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二八二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二八三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二八四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二八五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二八六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二八七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二八八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二八九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二九〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ二九一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二九二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ二九三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ二九四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ二九五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ二九六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ二九七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ二九八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ二九九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三〇〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三〇一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三〇二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三〇三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三〇四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三〇五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三〇六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三〇七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三〇八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三〇九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三一〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三一一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三一二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三一三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三一四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三一五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三一六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三一七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三一八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三一九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三二〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三二一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三二二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三二三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三二四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三二五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三二六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三二七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三二八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三二九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三三〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三三一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三三二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三三三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三三四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三三五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三三六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三三七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三三八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三三九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三四〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三四一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三四二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三四三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三四四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三四五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三四六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三四七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三四八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三四九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三五〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三五一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三五二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三五三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三五四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三五五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三五六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三五七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三五八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三五九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三六〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三六一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三六二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三六三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三六四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三六五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三六六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三六七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三六八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三六九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三七〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三七一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三七二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三七三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三	一ノ三七四	自在雷子賽貨	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三七五	「政理叢談」	「讀史備要」
一〇三	一ノ三七六	天明二年（一三一〇）	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三七七	自在雷子賽貨	「春日流」
一〇三	一ノ三七八	南窓	佐佚
一〇三	一ノ三七九	「讀史備要」	藏氏鑒訂本
一〇三	一ノ三八〇	天明二年（一三一〇）	「讀史備要」
一〇三	一ノ三八一	自在雷子賽貨	鈴屋・芝蘭
一〇三	一ノ三八二	「政理叢談」	「春日流」
一〇三	一ノ三八三	天明二年（一三一〇）	佐佚
一〇三

616-94

挿圖版目次

圖書……(一)……六
圖書……(二)……九
馬琴自筆八犬傳稿本……一四
日本書紀……(一)……一〇
日本書紀……(二)……一〇
日本書紀……(三)……一〇
日本書紀……(四)……一〇
日本書紀……(一)……一一
日本書紀……(二)……一一
人形芝居の各様式……一二
人形の頭……一三
人形の構造及び遣ひ方……一三
三人遣人形の機構……一三
人情本……一四〇
能樂……(一)……一四一
能樂……(二)……一四一
能樂……(三)……一四四
能裝束……一四四
能面……一四六
保元物語……(一)……一四七
保元物語……(二)……一四七
保元物語……(三)……一四七
保元物語……(四)……一四七
保元物語……(五)……一四七
保元物語……(六)……一四七
保元物語……(七)……一四七
保元物語……(八)……一四七
保元物語……(九)……一四七
保元物語……(十)……一四七
保元物語……(十一)……一四七
保元物語……(十二)……一四七
保元物語……(十三)……一四七
保元物語……(十四)……一四七
保元物語……(十五)……一四七
保元物語……(十六)……一四七
保元物語……(十七)……一四七
保元物語……(十八)……一四七
保元物語……(十九)……一四七
保元物語……(二十)……一四七
保元物語……(二十一)……一四七
保元物語……(二十二)……一四七
保元物語……(二十三)……一四七
保元物語……(二十四)……一四七
保元物語……(二十五)……一四七
保元物語……(二十六)……一四七
保元物語……(二十七)……一四七
保元物語……(二十八)……一四七
保元物語……(二十九)……一四七
保元物語……(三十)……一四七
保元物語……(三十一)……一四七
保元物語……(三十二)……一四七
保元物語……(三十三)……一四七
保元物語……(三十四)……一四七
保元物語……(三十五)……一四七
保元物語……(三十六)……一四七
保元物語……(三十七)……一四七
保元物語……(三十八)……一四七
保元物語……(三十九)……一四七
保元物語……(四十)……一四七
保元物語……(四十一)……一四七
保元物語……(四十二)……一四七
保元物語……(四十三)……一四七
保元物語……(四十四)……一四七
保元物語……(四十五)……一四七
保元物語……(四十六)……一四七
保元物語……(四十七)……一四七
保元物語……(四十八)……一四七
保元物語……(四十九)……一四七
保元物語……(五十)……一四七
保元物語……(五十一)……一四七
保元物語……(五十二)……一四七
保元物語……(五十三)……一四七
保元物語……(五十四)……一四七
保元物語……(五十五)……一四七
保元物語……(五十六)……一四七
保元物語……(五十七)……一四七
保元物語……(五十八)……一四七
保元物語……(五十九)……一四七
保元物語……(六十)……一四七
保元物語……(六十一)……一四七
保元物語……(六十二)……一四七
保元物語……(六十三)……一四七
保元物語……(六十四)……一四七
保元物語……(六十五)……一四七
保元物語……(六十六)……一四七
保元物語……(六十七)……一四七
保元物語……(六十八)……一四七
保元物語……(六十九)……一四七
保元物語……(七十)……一四七
保元物語……(七十一)……一四七
保元物語……(七十二)……一四七
保元物語……(七十三)……一四七
保元物語……(七十四)……一四七
保元物語……(七十五)……一四七
保元物語……(七十六)……一四七
保元物語……(七十七)……一四七
保元物語……(七十八)……一四七
保元物語……(七十九)……一四七
保元物語……(八十)……一四七
保元物語……(八十一)……一四七
保元物語……(八十二)……一四七
保元物語……(八十三)……一四七
保元物語……(八十四)……一四七
保元物語……(八十五)……一四七
保元物語……(八十六)……一四七
保元物語……(八十七)……一四七
保元物語……(八十八)……一四七
保元物語……(八十九)……一四七
保元物語……(九十)……一四七
保元物語……(九十一)……一四七
保元物語……(九十二)……一四七
保元物語……(九十三)……一四七
保元物語……(九十四)……一四七
保元物語……(九十五)……一四七
保元物語……(九十六)……一四七
保元物語……(九十七)……一四七
保元物語……(九十八)……一四七
保元物語……(九十九)……一四七
保元物語……(一百)……一四七
保元物語……(一百一)……一四七
保元物語……(一百二)……一四七
保元物語……(一百三)……一四七
保元物語……(一百四)……一四七
保元物語……(一百五)……一四七
保元物語……(一百六)……一四七
保元物語……(一百七)……一四七
保元物語……(一百八)……一四七
保元物語……(一百九)……一四七
保元物語……(一百十)……一四七
保元物語……(一百十一)……一四七
保元物語……(一百十二)……一四七
保元物語……(一百十三)……一四七
保元物語……(一百十四)……一四七
保元物語……(一百十五)……一四七
保元物語……(一百十六)……一四七
保元物語……(一百十七)……一四七
保元物語……(一百十八)……一四七
保元物語……(一百十九)……一四七
保元物語……(一百二十)……一四七
保元物語……(一百二十一)……一四七
保元物語……(一百二十二)……一四七
保元物語……(一百二十三)……一四七
保元物語……(一百二十四)……一四七
保元物語……(一百二十五)……一四七
保元物語……(一百二十六)……一四七
保元物語……(一百二十七)……一四七
保元物語……(一百二十八)……一四七
保元物語……(一百二十九)……一四七
保元物語……(一百三十)……一四七
保元物語……(一百三十一)……一四七
保元物語……(一百三十二)……一四七
保元物語……(一百三十三)……一四七
保元物語……(一百三十四)……一四七
保元物語……(一百三十五)……一四七
保元物語……(一百三十六)……一四七
保元物語……(一百三十七)……一四七
保元物語……(一百三十八)……一四七
保元物語……(一百三十九)……一四七
保元物語……(一百四十)……一四七
保元物語……(一百四十一)……一四七
保元物語……(一百四十二)……一四七
保元物語……(一百四十三)……一四七
保元物語……(一百四十四)……一四七
保元物語……(一百四十五)……一四七
保元物語……(一百四十六)……一四七
保元物語……(一百四十七)……一四七
保元物語……(一百四十八)……一四七
保元物語……(一百四十九)……一四七
保元物語……(一百五十)……一四七
保元物語……(一百五十一)……一四七
保元物語……(一百五十二)……一四七
保元物語……(一百五十三)……一四七
保元物語……(一百五十四)……一四七
保元物語……(一百五十五)……一四七
保元物語……(一百五十六)……一四七
保元物語……(一百五十七)……一四七
保元物語……(一百五十八)……一四七
保元物語……(一百五十九)……一四七
保元物語……(一百六十)……一四七
保元物語……(一百六十一)……一四七
保元物語……(一百六十二)……一四七
保元物語……(一百六十三)……一四七
保元物語……(一百六十四)……一四七
保元物語……(一百六十五)……一四七
保元物語……(一百六十六)……一四七
保元物語……(一百六十七)……一四七
保元物語……(一百六十八)……一四七
保元物語……(一百六十九)……一四七
保元物語……(一百七十)……一四七
保元物語……(一百七十一)……一四七
保元物語……(一百七十二)……一四七
保元物語……(一百七十三)……一四七
保元物語……(一百七十四)……一四七
保元物語……(一百七十五)……一四七
保元物語……(一百七十六)……一四七
保元物語……(一百七十七)……一四七
保元物語……(一百七十八)……一四七
保元物語……(一百七十九)……一四七
保元物語……(一百八十)……一四七
保元物語……(一百八十一)……一四七
保元物語……(一百八十二)……一四七
保元物語……(一百八十三)……一四七
保元物語……(一百八十四)……一四七
保元物語……(一百八十五)……一四七
保元物語……(一百八十六)……一四七
保元物語……(一百八十七)……一四七
保元物語……(一百八十八)……一四七
保元物語……(一百八十九)……一四七
保元物語……(一百九十)……一四七
保元物語……(一百九十一)……一四七
保元物語……(一百九十二)……一四七
保元物語……(一百九十三)……一四七
保元物語……(一百九十四)……一四七
保元物語……(一百九十五)……一四七
保元物語……(一百九十六)……一四七
保元物語……(一百九十七)……一四七
保元物語……(一百九十八)……一四七
保元物語……(一百九十九)……一四七
保元物語……(二百)……一四七
保元物語……(二百一)……一四七
保元物語……(二百二)……一四七
保元物語……(二百三)……一四七
保元物語……(二百四)……一四七
保元物語……(二百五)……一四七
保元物語……(二百六)……一四七
保元物語……(二百七)……一四七
保元物語……(二百八)……一四七
保元物語……(二百九)……一四七
保元物語……(二百十)……一四七
保元物語……(二百十一)……一四七
保元物語……(二百十二)……一四七
保元物語……(二百十三)……一四七
保元物語……(二百十四)……一四七
保元物語……(二百十五)……一四七
保元物語……(二百十六)……一四七
保元物語……(二百十七)……一四七
保元物語……(二百十八)……一四七
保元物語……(二百十九)……一四七
保元物語……(二百二十)……一四七
保元物語……(二百二十一)……一四七
保元物語……(二百二十二)……一四七
保元物語……(二百二十三)……一四七
保元物語……(二百二十四)……一四七
保元物語……(二百二十五)……一四七
保元物語……(二百二十六)……一四七
保元物語……(二百二十七)……一四七
保元物語……(二百二十八)……一四七
保元物語……(二百二十九)……一四七
保元物語……(二百三十)……一四七
保元物語……(二百三十一)……一四七
保元物語……(二百三十二)……一四七
保元物語……(二百三十三)……一四七
保元物語……(二百三十四)……一四七
保元物語……(二百三十五)……一四七
保元物語……(二百三十六)……一四七
保元物語……(二百三十七)……一四七
保元物語……(二百三十八)……一四七
保元物語……(二百三十九)……一四七
保元物語……(二百四十)……一四七
保元物語……(二百四十一)……一四七
保元物語……(二百四十二)……一四七
保元物語……(二百四十三)……一四七
保元物語……(二百四十四)……一四七
保元物語……(二百四十五)……一四七
保元物語……(二百四十六)……一四七
保元物語……(二百四十七)……一四七
保元物語……(二百四十八)……一四七
保元物語……(二百四十九)……一四七
保元物語……(二百五十)……一四七
保元物語……(二百五十一)……一四七
保元物語……(二百五十二)……一四七
保元物語……(二百五十三)……一四七
保元物語……(二百五十四)……一四七
保元物語……(二百五十五)……一四七
保元物語……(二百五十六)……一四七
保元物語……(二百五十七)……一四七
保元物語……(二百五十八)……一四七
保元物語……(二百五十九)……一四七
保元物語……(二百六十)……一四七
保元物語……(二百六十一)……一四七
保元物語……(二百六十二)……一四七
保元物語……(二百六十三)……一四七
保元物語……(二百六十四)……一四七
保元物語……(二百六十五)……一四七
保元物語……(二百六十六)……一四七
保元物語……(二百六十七)……一四七
保元物語……(二百六十八)……一四七
保元物語……(二百六十九)……一四七
保元物語……(二百七十)……一四七
保元物語……(二百七十一)……一四七
保元物語……(二百七十二)……一四七
保元物語……(二百七十三)……一四七
保元物語……(二百七十四)……一四七
保元物語……(二百七十五)……一四七
保元物語……(二百七十六)……一四七
保元物語……(二百七十七)……一四七
保元物語……(二百七十八)……一四七
保元物語……(二百七十九)……一四七
保元物語……(二百八十)……一四七
保元物語……(二百八十一)……一四七
保元物語……(二百八十二)……一四七
保元物語……(二百八十三)……一四七
保元物語……(二百八十四)……一四七
保元物語……(二百八十五)……一四七
保元物語……(二百八十六)……一四七
保元物語……(二百八十七)……一四七
保元物語……(二百八十八)……一四七
保元物語……(二百八十九)……一四七
保元物語……(二百九十)……一四七
保元物語……(二百九十一)……一四七
保元物語……(二百九十二)……一四七
保元物語……(二百九十三)……一四七
保元物語……(二百九十四)……一四七
保元物語……(二百九十五)……一四七
保元物語……(二百九十六)……一四七
保元物語……(二百九十七)……一四七
保元物語……(二百九十八)……一四七
保元物語……(二百九十九)……一四七
保元物語……(三百)……一四七
保元物語……(三百一)……一四七
保元物語……(三百二)……一四七
保元物語……(三百三)……一四七
保元物語……(三百四)……一四七
保元物語……(三百五)……一四七
保元物語……(三百六)……一四七
保元物語……(三百七)……一四七
保元物語……(三百八)……一四七
保元物語……(三百九)……一四七
保元物語……(三百十)……一四七
保元物語……(三百十一)……一四七
保元物語……(三百十二)……一四七
保元物語……(三百十三)……一四七
保元物語……(三百十四)……一四七
保元物語……(三百十五)……一四七
保元物語……(三百十六)……一四七
保元物語……(三百十七)……一四七
保元物語……(三百十八)……一四七
保元物語……(三百十九)……一四七
保元物語……(三百二十)……一四七
保元物語……(三百二十一)……一四七
保元物語……(三百二十二)……一四七
保元物語……(三百二十三)……一四七
保元物語……(三百二十四)……一四七
保元物語……(三百二十五)……一四七
保元物語……(三百二十六)……一四七
保元物語……(三百二十七)……一四七
保元物語……(三百二十八)……一四七
保元物語……(三百二十九)……一四七
保元物語……(三百三十)……一四七
保元物語……(三百三十一)……一四七
保元物語……(三百三十二)……一四七
保元物語……(三百三十三)……一四七
保元物語……(三百三十四)……一四七
保元物語……(三百三十五)……一四七
保元物語……(三百三十六)……一四七
保元物語……(三百三十七)……一四七
保元物語……(三百三十八)……一四七
保元物語……(三百三十九)……一四七
保元物語……(三百四十)……一四七
保元物語……(三百四十一)……一四七
保元物語……(三百四十二)……一四七
保元物語……(三百四十三)……一四七
保元物語……(三百四十四)……一四七
保元物語……(三百四十五)……一四七
保元物語……(三百四十六)……一四七
保元物語……(三百四十七)……一四七
保元物語……(三百四十八)……一四七
保元物語……(三百四十九)……一四七
保元物語……(三百五十)……一四七
保元物語……(三百五十一)……一四七
保元物語……(三百五十二)……一四七
保元物語……(三百五十三)……一四七
保元物語……(三百五十四)……一四七
保元物語……(三百五十五)……一四七
保元物語……(三百五十六)……一四七
保元物語……(三百五十七)……一四七
保元物語……(三百五十八)……一四七
保元物語……(三百五十九)……一四七
保元物語……(三百六十)……一四七
保元物語……(三百六十一)……一四七
保元物語……(三百六十二)……一四七
保元物語……(三百六十三)……一四七
保元物語……(三百六十四)……一四七
保元物語……(三百六十五)……一四七
保元物語……(三百六十六)……一四七
保元物語……(三百六十七)……一四七
保元物語……(三百六十八)……一四七
保元物語……(三百六十九)……一四七
保元物語……(三百七十)……一四七
保元物語……(三百七十一)……一四七
保元物語……(三百七十二)……一四七
保元物語……(三百七十三)……一四七
保元物語……(三百七十四)……一四七
保元物語……(三百七十五)……一四七
保元物語……(三百七十六)……一四七
保元物語……(三百七十七)……一四七
保元物語……(三百七十八)……一四七
保元物語……(三百七十九)……一四七
保元物語……(三百八十)……一四七
保元物語……(三百八十一)……一四七
保元物語……(三百八十二)……一四七
保元物語……(三百八十三)……一四七
保元物語……(三百八十四)……一四七
保元物語……(三百八十五)……一四七
保元物語……(三百八十六)……一四七
保元物語……(三百八十七)……一四七
保元物語……(三百八十八)……一四七
保元物語……(三百八十九)……一四七
保元物語……(三百九十)……一四七
保元物語……(三百九十一)……一四七
保元物語……(三百九十二)……一四七
保元物語……(三百九十三)……一四七
保元物語……(三百九十四)……一四七
保元物語……(三百九十五)……一四七
保元物語……(三百九十六)……一四七
保元物語……(三百九十七)……一四七
保元物語……(三百九十八)……一四七
保元物語……(三百九十九)……一四七
保元物語……(四百)……一四七
保元物語……(四百一)……一四七
保元物語……(四百二)……一四七
保元物語……(四百三)……一四七
保元物語……(四百四)……一四七
保元物語……(四百五)……一四七
保元物語……(四百六)……一四七
保元物語……(四百七)……一四七
保元物語……(四百八)……一四七
保元物語……(四百九)……一四七
保元物語……(四百十)……一四七
保元物語……(四百十一)……一四七
保元物語……(四百十二)……一四七
保元物語……(四百十三)……一四七
保元物語……(四百十四)……一四七
保元物語……(四百十五)……一四七
保元物語……(四百十六)……一四七
保元物語……(四百十七)……一四七
保元物語……(四百十八)……一四七
保元物語……(四百十九)……一四七
保元物語……(四百二十)……一四七
保元物語……(四百二十一)……一四七
保元物語……(四百二十二)……一四七
保元物語……(四百二十三)……一四七
保元物語……(四百二十四)……一四七
保元物語……(四百二十五)……一四七
保元物語……(四百二十六)……一四七
保元物語……(四百二十七)……一四七
保元物語……(四百二十八)……一四七
保元物語……(四百二十九)……一四七
保元物語……(四百三十)……一四七
保元物語……(四百三十一)……一四七
保元物語……(四百三十二)……一四七
保元物語……(四百三十三)……一四七
保元物語……(四百三十四)……一四七
保元物語……(四百三十五)……一四七
保元物語……(四百三十六)……一四七
保元物語……(四百三十七)……一四七
保元物語……(四百三十八)……一四七
保元物語……(四百三十九)……一四七
保元物語……(四百四十)……一四七
保元物語……(四百四十一)……一四七
保元物語……(四百四十二)……一四七
保元物語……(四百四十三)……一四七
保元物語……(四百四十四)……一四七
保元物語……(四百四十五)……一四七
保元物語……(四百四十六)……一四七
保元物語……(四百四十七)……一四七
保元物語……(四百四十八)……一四七
保元物語……(四百四十九)……一四七
保元物語……(四百五十)……一四七
保元物語……(四百五十一)……一四七
保元物語……(四百五十二)……一四七
保元物語……(四百五十三)……一四七
保元物語……(四百五十四)……一四七
保元物語……(四百五十五)……一四七
保元物語……(四百五十六)……一四七
保元物語……(四百五十七)……一四七
保元物語……(四百五十八)……一四七
保元物語……(四百五十九)……一四七
保元物語……(四百六十)……一四七
保元物語……(四百六十一)……一四七
保元物語……(四百六十二)……一四七
保元物語……(四百六十三)……一四七
保元物語……(四百六十四)……一四七
保元物語……(四百六十五)……一四七
保元物語……(四百六十六)……一四七
保元物語……(四百六十七)……一四七
保元物語……(四百六十八)……一四七
保元物語……(四百六十九)……一四七
保元物語……(四百七十)……一四七
保元物語……(四百七十一)……一四七
保元物語……(四百七十二)……一四七
保元物語……(四百七十三)……一四七
保元物語……(四百七十四)……一四七
保元物語……(四百七十五)……一四七
保元物語……(四百七十六)……一四七
保元物語……(四百七十七)……一四七
保元物語……(四百七十八)……一四七
保元物語……(四百七十九)……一四七
保元物語……(四百八十)……一四七
保元物語……(四百八十一)……一四七
保元物語……(四百八十二)……一四七
保元物語……(四百八十三)……一四七
保元物語……(四百八十四)……一四七
保元物語……(四百八十五)……一四七
保元物語……(四百八十六)……一四七
保元物語……(四百八十七)……一四七
保元物語……(四百八十八)……一四七
保元物語……(四百八十九)……一四七
保元物語……(四百九十)……一四七
保元物語……(四百九十一)……一四七
保元物語……(四百九十二)……一四七
保元物語……(四百九十三)……一四七
保元物語……(四百九十四)……一四七
保元物語……(四百九十五)……一四七
保元物語……(四百九十六)……一四七
保元物語……(四百九十七)……一四七
保元物語……(四百九十八)……一四七
保元物語……(四百九十九)……一四七
保元物語……(五百)……一四七
保元物語……(五百一)……一四七
保元物語……(五百二)……一四七
保元物語……(五百三)……一四七
保元物語……(五百四)……一四七
保元物語……(五百五)……一四七
保元物語……(五百六)……一四七
保元物語……(五百七)……一四七
保元物語……(五百八)……一四七
保元物語……(五百九)……一四七
保元物語……(五百十)……一四七
保元物語……(五百十一)……一四七
保元物語……(五百十二)……一四七
保元物語……(五百十三)……一四七
保元物語……(五百十四)……一四七
保元物語……(五百十五)……一四七
保元物語……(五百十六)……一四七
保元物語……(五百十七)……一四七
保元物語……(五百十八)……一四七
保元物語……(五百十九)……一四七
保元物語……(五百二十)……一四七
保元物語……(五百二十一)……一四七
保元物語……(五百二十二)……一四七
保元物語……(五百二十三)……一四七
保元物語……(五百二十四)……一四七
保元物語……(五百二十五)……一四七
保元物語……(五百二十六)……一四七
保元物語……(五百二十七)……一四七
保元物語……(五百二十八)……一四七
保元物語……(五百二十九)……一四七
保元物語……(五百三十)……一四七
保元物語……(五百三十一)……一四七
保元物語……(五百三十二)……一四七
保元物語……(五百三十三)……一四七
保元物語……(五百三十四)……一四七
保元物語……(五百三十五)……一四七
保元物語……(五百三十六)……一四七
保元物語……(五百三十七)……一四七
保元物語……(五百三十八)……一四七
保元物語……(五百三十九)……一四七
保元物語……(五百四十)……一四七
保元物語……(五百四十一)……一四七
保元物語……(五百四十二)……一四七
保元物語……(五百四十三)……一四七
保元物語……(五百四十四)……一四七
保元物語……(五百四十五)……一四七
保元物語……(五百四十六)……一四七
保元物語……(五百四十七)……一四七
保元物語……(五百四十八)……一四七
保元物語……(五百四十九)……一四七
保元物語……(五百五十)……一四七
保元物語……(五百五十一)……一四七
保元物語……(五百五十二)……一四七
保元物語……(五百五十三)……一四七
保元物語……(五百五十四)……一四七
保元物語……(五百五十五)……一四七
保元物語……(五百五十六)……一四七
保元物語……(五百五十七)……一四七
保元物語……(五百五十八)……一四七
保元物語……(五百五十九)……一四七
保元物語……(五百六十)……一四七
保元物語……(五百六十一)……一四七
保元物語……(五百六十二)……一四七
保元物語……(五百六十三)……一四七
保元物語……(五百六十四)……一四七
保元物語……(五百六十五)……一四七
保元物語……(五百六十六)……一四七
保元物語……(五百六十七)……一四七
保元物語……(五百六十八)……一四七
保元物語……(五百六十九)……一四七
保元物語……(五百七十)……一四七
保元物語……(五百七十一)……一四七
保元物語……(五百七十二)……一四七
保元物語……(五百七十三)……一四七
保元物語……(五百七十四)……一四七
保元物語……(五百七十五)……一四七
保元物語……(五百七十六)……一四七
保元物語……(五百七十七)……一四七
保元物語……(五百七十八)……一四七
保元物語……(五百七十九)……一四七
保元物語……(五百八十)……一四七
保元物語……(五百八十一)……一四七
保元物語……(五百八十二)……一四七
保元物語……(五百八十三)……一四七
保元物語……(五百八十四)……一四七
保元物語……(五百八十五)……一四七
保元物語……(五百八十六)……一四七
保元物語……(五百八十七)……一四七
保元物語……(五百八十八)……一四七
保元物語……(五百八十九)……一四七
保元物語……(五百九十)……一四七
保元物語……(五百九十一)……一四七
保元物語……(五百九十二)……一四七
保元物語……(五百九十三)……一四七
保元物語……(五百九十四)……一四七
保元物語……(五百九十五)……一四七
保元物語……(五百九十六)……一四七
保元物語……(五百九十七)……一四七
保元物語……(五百九十八)……一四七
保元物語……(五百九十九)……一四七
保元物語……(六百)……一四七
保元物語……(六百一)……一四七
保元物語……(六百二)……一四七
保元物語……(六百三)……一四七
保元物語……(六百四)……一四七
保元物語……(六百五)……一四七
保元物語……(六百六)……一四七
保元物語……(六百七)……一四七
保元物語……(六百八)……一四七
保元物語……(六百九)……一四七
保元物語……(六百十)……一四七
保元物語……(六百十一)……一四七
保元物語……(六百十二)……一四七
保元物語……(六百十三)……一四七
保元物語……(六百十四)……一四七
保元物語……(六百十五)……一四七
保元物語……(六百十六)……一四七
保元物語……(六百十七)……一四七
保元物語……(六百十八)……一四七
保元物語……(六百十九)……一四七
保元物語……(六百二十)……一四七
保元物語……(六百二十一)……一四七
保元物語……(六百二十二)……一四七
保元物語……(六百二十三)……一四七
保元物語……(六百二十四)……一四七
保元物語……(六百二十五)……一四七
保元物語……(六百二十六)……一四七
保元物語……(六百二十七)……一四七
保元物語……(六百二十八)……一四七
保元物語……(六百二十九)……一四七
保元物語……(六百三十)……一四七
保元物語……(六百三十一)……一四七
保元物語……(六百三十二)……一四七
保元物語……(六百三十三)……一四七
保元物語……(六百三十四)……一四七
保元物語……(六百三十五)……一四七
保元物語……(六百三十六)……一四七
保元物語……(六百三十七)……一四七
保元物語……(六百三十八)……一四七
保元物語……(六百三十九)……一四七
保元物語……(六百四十)……一四七
保元物語……(六百四十一)……一四七
保元物語……(六百四十二)……一四七
保元物語……(六百四十三)……一四七
保元物語……(六百四十四)……一四七
保元物語……(六百四十五)……一四七
保元物語……(六百四十六)……一四七
保元物語……(六百四十七)……一四七
保元物語……(六百四十八)……一四七
保元物語……(六百四十九)……一四七
保元物語……(六百五十)……一四七
保元物語……(六百五十一)……一四七
保元物語……(六百五十二)……一四七
保元物語……(六百五十三)……一四七
保元物語……(六百五十四)……一四七
保元物語……(六百五十五)……一四七
保元物語……(六百五十六)……一四七
保元物語……(六百五十七)……一四七
保元物語……(六百五十八)……一四七
保元物語……(六百五十九)……一四七
保元物語……(六百六十)……一四七
保元物語……(六百六十一)……一四七
保元物語……(六百六十二)……一四七
保元物語……(六百六十三)……一四七
保元物語……(六百六十四)……一四七
保元物語……(六百六十五)……一四七
保元物語……(六百六十六)……一四七
保元物語……(六百六十七)……一四七
保元物語……(六百六十八)……一四七
保元物語……(六百六十九)……一四七
保元物語……(六百七十)……一四七
保元物語……(六百七十一)……一四七
保元物語……(六百七十二)……一四七
保元物語……(六百七十三)……一四七
保元物語……(六百七十四)……一四七
保元物語……(六百七十五)……一四七
保元物語……(六百七十六)……一四七
保元物語……(六百七十七)……一四七
保元物語……(六百七十八)……一四七
保元物語……(六百七十九)……一四七
保元物語……(六百八十)……一四七
保元物語……(六百八十一)……一四七
保元物語……(六百八十二)……一四七
保元物語……(六百八十三)……一四七
保元物語……(六百八十四)……一四七
保元物語……(六百八十五)……一四七
保元物語……(六百八十六)……一四七
保元物語……(六百八十七)……一四七
保元物語……(六百八十八)……一四七
保元物語……(六百八十九)……一四七
保元物語……(六百九十)……一四七
保元物語……(六百九十一)……一四七
保元物語……(六百九十二)……一四七
保元物語……(六百九十三)……一四七
保元物語……(六百九十四)……一四七
保元物語……(六百九十五)……一四七
保元物語……(六百九十六)……一四七
保元物語……(六百九十七)……一四七
保元物語……(六百九十八)……一四七
保元物語……(六百九十九)……一四七
保元物語……(七百)……一四七
保元物語……(七百一)……一四七
保元物語……(七百二)……一四七
保元物語……(七百三)……一四七
保元物語……(七百四)……一四七
保元物語……(七百五)……一四七
保元物語……(七百六)……一四七
保元物語……(七百七)……一四七
保元物語……(七百八)……一四七
保元物語……(七百九)……一四七
保元物語……(七百十)……一四七
保元物語……(七百十一)……一四七
保元物語……(七百十二)……一四七
保元物語……(七百十三)……一四七
保元物語……(七百十四)……一四七
保元物語……(七百十五)……一四七
保元物語……(七百十六)……一四七
保元物語……(七百十七)……一四七
保元物語……(七百十八)……一四七
保元物語……(七百十九)……一四七
保元物語……(七百二十)……一四七
保元物語……(七百二十一)……一四七
保元物語……(七百二十二)……一四七
保元物語……(七百二十三)……一四七
保元物語……(七百二十四)……一四七
保元物語……(七百二十五)……一四七
保元物語……(七百二十六)……一四七
保元物語……(七百二十七)……一四七
保元物語……(七百二十八)……一四七
保元物語……(七百二十九)……一四七
保元物語……(七百三十)……一四七
保元物語……(七百三十一)……一四七
保元物語……(七百三十二)……一四七
保元物語……(七百三十三)……一四七
保元物語……(七百三十四)……一四七
保元物語……(七百三十五)……一四七
保元物語……(七百三十六)……一四七
保元物語……(七百三十七)……一四七
保元物語……(七百三十八)……一四七
保元物語……(七百三十九)……一四七
保元物語……(七百四十)……一四七
保元物語……(七百四十一)……一四七
保元物語……(七百四十二)……一四七
保元物語……(七百四十三)……一四七
保元物語……(七百四十四)……一四七
保元物語……(七百四十五)……一四七
保元物語……(七百四十六)……一四七
保元物語……(七百四十七)……一四七
保元物語……(七百四十八)……一四七
保元物語……(七百四十九)……一四七
保元物語……(七百五十)……一四七
保元物語……(七百五十一)……一四七
保元物語……(七百五十二)……一四七
保元物語……(七百五十三)……一四七
保元物語……(七百五十四)……一四七
保元物語……(七百五十五)……一四七
保元物語……(七百五十六)……一四七
保元物語……(七百五十七)……一四七
保元物語……(七百五十八)……一四七
保元物語……(七百五十九)……一四七
保元物語……(七百六十)……一四七
保元物語……(七百六十一)……一四七
保元物語……(七百六十二)……一四七
保元物語……(七百六十三)……一四七
保元物語……(七百六十四)……一四七
保元物語……(七百六十五)……一四七
保元物語……(七百六十六)……一四七
保元物語……(七百六十七)……一四七
保元物語……(七百六十八)……一四七
保元物語……(七百六十九)……一四七
保元物語……(七百七十)……一四七
保元物語……(七百七十一)……一四七
保元物語……(七百七十二)……一四七
保元物語……(七百七十三)……一四七
保元物語……(七百七十四)……一四七
保元物語……(七百七十五)……一四七
保元物語……(七百七十六)……一四七
保元物語……(七百七十七)……一四七
保元物語……(七百七十八)……一四七
保元物語……(七百七十九)……一四七
保元物語……(七百八十)……一四七
保元物語……(七百八十一)……一四七
保元物語……(七百八十二)……一四七
保元物語……(七百八十三)……一四七
保元物語……(七百八十四)……一四七
保元物語……(七百八十五)……一四七
保元物語……(七百八十六)……一四七
保元物語……(七百八十七)……一四七
保元物語……(七百八十八)……一四七
保元物語……(七百八十九)……一四七
保元物語……(七百九十)……一四七
保元物語……(七百九十一)……一四七
保元物語……(七百九十二)……一四七
保元物語……(七百九十三)……一四七
保元物語……(七百九十四)……一四七
保元物語……(七百九十五)……一四七
保元物語……(七百九十六)……一四七
保元物語……(七百九十七)……一四七
保元物語……(七百九十八)……一四七
保元物語……(七百九十九)……一四七
保元物語……(八百)……一四七
保元物語……(八百一)……一四七
保元物語……(八百二)……一四七
保元物語……(八百三)……一四七
保元物語……(八百四)……一四七
保元物語……(八百五)……一四七
保元物語……(八百六)……一四七
保元物語……(八百七)……一四七
保元物語……(八百八)……一四七
保元物語……(八百九)……一四七
保元物語……(八百十)……一四七
保元物語……(八百十一)……一四七
保元物語……(八百十二)……一四七
保元物語……(八百十三)……一四七
保元物語……(八百十四)……一四七
保元物語……(八百十五)……一四七
保元物語……(八百十六)……一四七
保元物語……(八百十七)……一四七
保元物語……(八百十八)……一四七
保元物語……(八百十九)……一四七
保元物語……(八百二十)……一四七
保元物語……(八百二十一)……一四七
保元物語……(八百二十二)……一四七
保元物語……(八百二十三)……一四七
保元物語……(八百二十四)……一四七
保元物語……(八百二十五)……一四七
保元物語……(八百二十六)……一四七
保元物語……(八百二十七)……一四七
保元物語……(八百二十八)……一四七
保元物語……(八百二十九)……一四七
保元物語……(八百三十)……一四七
保元物語……(八百三十一)……一四七
保元物語……(八百三十二)……一四七
保元物語……(八百三十三)……一四七
保元物語……(八百三十四)……一四七
保元物語……(八百三十五)……一四七
保元物語……(八百三十六)……一四七
保元物語……(八百三十七)……一四七
保元物語……(八百三十八)……一四七
保元物語……(八百三十九)……一四七
保元物語……(八百四十)……一四七
保元物語……(八百四十一)……一四七
保元物語……(八百四十二)……一四七
保元物語……(八百四十三)……一四七
保元物語……(八百四十四)……一四七
保元物語……(八百四十五)……一四七
保元物語……(八百四十六)……一四七
保元物語……(八百四十七)……一四七
保元物語……(八百四十八)……一四七
保元物語……(八百四十九)……一四七
保元物語……(八百五十)……一四七
保元物語……(八百五十一)……一四七
保元物語……(八百五十二)……一四七
保元物語……(八百五十三)……一四七
保元物語……(八百五十四)……一四七
保元物語……(八百五十五)……一四七
保元物語……(八百五十六)……一四七
保元物語……(八百五十七)……一四七
保元物語……(八百五十八)……一四七
保元物語……(八百五十九)……一四七
保元物語……(八百六十)……一四七
保元物語……(八百六十一)……一四七
保元物語……(八百六十二)……一四七
保元物語……(八百六十三)……一四七
保元物語……(八百六十四)……一四七
保元物語……(八百六十五)……一四七
保元物語……(八百六十六)……一四七
保元物語……(八百六十七)……一四七
保元物語……(八百六十八)……一四七
保元物語……(八百六十九)……一四七
保元物語……(八百七十)……一四七
保元物語……(八百七十一)……一四七
保元物語……(八百七十二)……一四七
保元物語……(八百七十三)……一四七
保元物語……(八百七十四)……一四七
保元物語……(八百七十五)……一四七
保元物語……(八百七十六)……一四七
保元物語……(八百七十七)……一四七
保元物語……(八百七十八)……一四七
保元物語……(八百七十九)……一四七
保元物語……(八百八十)……一四七
保元物語……(八百八十一)……一四七
保元物語……(八百八十二)……一四七
保元物語……(八百八十三)……一四七
保元物語……(八百八十四)……一四七
保元物語……(八百八十五)……一四七
保元物語……(八百八十六)……一四七
保元物語……(八百八十七)……一四七
保元物語……(八百八十八)……一四七
保元物語……(八百八十九)……一四七
保元物語……(八百九十)……一四七
保元物語……(八百九十一)……一四七
保元物語……(八百九十二)……一四七
保元物語……(八百九十三)……一四七
保元物語……(八百九十四)……一四七
保元物語……(八百九十五)……一四七
保元物語……(八百九十六)……一四七
保元物語……(八百九十七)……一四七
保元物語……(八百九十八)……一四七
保元物語……(八百九十九)……一四七
保元物語……(九百)……一四七
保元物語……(九百一)……一四七
保元物語……(九百二)……一四七
保元物語……(九百三)……一四七
保元物語……(九百四)……一四七
保元物語……(九百五)……一四七
保元物語……(九百六)……一四七
保元物語……(九百七)……一四七
保元物語……(九百八)……一四七
保元物語……(九百九)……一四七
保元物語……(九百十)……一四七
保元物語……(九百十一)……一四七
保元物語……(九百十二)……一四七
保元物語……(九百十三)……一四七
保元物語……(九百十四)……一四七
保元物語……(九百十五)……一四七
保元物語……(九百十六)……一四七
保元物語……(九百十七)……一四七
保元物語……(九百十八)……一四七
保元物語……(九百十九)……一四七
保元物語……(九百二十)……一四七
保元物語……(九百二十一)……一四七
保元物語……(九百二十二)……一四七
保元物語……(九百二十三)……一四七
保元物語……(九百二十四)……一四七
保元物語……(九百二十五)……一四七
保元物語……(九百二十六)……一四七
保元物語……(九百二十七)……一四七
保元物語……(九百二十八)……一四七
保元物語……(九百二十九)……一四七
保元物語……(九百三十)……一四七
保元物語……(九百三十一)……一四七
保元物語……(九百三十二)……一四七
保元物語……(九百三十三)……一四七
保元物語……(九百三十四)……一四七
保元物語……(九百三十五)……一四七
保元物語……(九百三十六)……一四七
保元物語……(九百三十七)……一四七
保元物語……(九百三十八)……一四七
保元物語……(九百三十九)……一四七
保元物語……(九百四十)……一四七
保元物語……(九百四十一)……一四七
保元物語……(九百四十二)……一四七
保元物語……(九百四十三)……一四七
保元物語……(九百四十四)……一四七
保元物語……(九百四十五)……一四七
保元物語……(九百四十六)……一四七
保元物語……(九百四十七)……一四七
保元物語……(九百四十八)……一四七
保元物語……(九百四十九)……一四七
保元物語……(九百五十)……一四七
保元物語……(九百五十一)……一四七
保元物語……(九百五十二)……一四七
保元物語……(九百五十三)……一四七
保元物語……(九百五十四)……一四七
保元物語……(九百五十五)……一四七
保元物語……(九百五十六)……一四七
保元物語……(九百五十七)……一四七
保元物語……(九百五十八)……一四七
保元物語……(九百五十九)……一四七

枕草紙繪卷……七五二
賀茂眞淵肖像及び筆蹟……七七八
萬葉假名表……七九四
桂本萬葉集……七九六
萬葉集（一）……七九八
萬葉集（二）……七九六
紫式部日記繪卷……九二〇
役者評判記……九八四
謠本……一〇五八
柳亭種彥肖像及び筆蹟……一一三八
ローマ字（一）……一一八八
ローマ字（二）……一一八八
ローマ字（三）……一一八八
ローマ字（四）……一一八八
和漢朗詠集……一二二四

—挿畫圖版目次了—

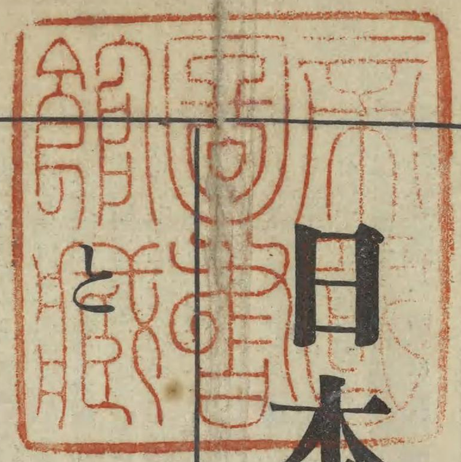
執筆者氏名追加（五十音順）

支那文學……東北帝國大學教授 青木正兒
明治大正時代文學……東京朝日新聞編輯局 石川六郎
說話文學……東京帝國大學史料編纂所 後藤丹治
明治大正時代文學……小牧近江
歌謠……國民精神文化研究所 志田延義
淨瑠璃……東京帝國大學副手 鶴見誠
物語……千代田女子專門學校教授 永積安明

裝幀 吉村忠夫

日本文學大辭典 第三卷

と



堵庵（とあん） 心學者 【姓名】手島信、字は應之。通稱近江屋源右衞門、後嘉右衞門に改めた。【生歿】享保三年五月十三日、京都三條富小路三條の商家に生れ、天明六年（二四四六）二月九日京都に歿した。享年六十九。【墓所】御幸町に設け、期日を定めて一定の書を講じ、更にその翌二年には、居を朝倉街に移して、そこを五樂舍と名づけ、爾後益々講說と著述とを以て民衆の敎化に努めた。梅巖によつて創められた心學（別項）は、堵庵によつて社會を動かす大きな力となつた。【著書】石田梅巖先生事蹟一卷○前訓一卷（別項）○塵計三卷○我律衞三卷（別項）○要草一卷○ありべかゝり二卷○爲學玉箒六卷（別項）○會友大旨一卷（別項）

澤熊山（獨喩集卷三）

獨逸語（どいつご） 「インド・ヨーロッパ語族」を見よ。 【白石・森】

ドイツ文學の影響 【鷗外以前】ドイツ文學が始めて日本に紹介されたのは、佛のジュウル・ヴェルヌの「新說八十日世界一周」（川島忠之助譯）、英のバルワア・リットンの「歐洲奇事花柳春話」（丹羽純一郎譯）、蘭のジォス・コリデヌの「新未來記」（近藤眞琴譯）等の、いづれも明治十一年であるのに、後れること約四文から直接に譯述したかは解らない。しかして明治二十二年三月から讀賣新聞に揭げられた森鷗外・三木竹二譯のホフマンの「玉を懷いて罪あり」は、英・露文學よりもやゝ後れてゐた。なほこの飜譯には、原作者ホフマンの名を擧げてゐなかつた。

【森鷗外と獨文學】明治二十二年、「國民之友」誌上に、S・S・Sなる署名の下に現はれた「於母影」（別項）は、その博識と淸新さにおいて、當時の文壇の驚異であつた。十七篇中十四篇

堵庵（とあん）　心學者【姓名】手島信、字は應之。通稱近江屋源右衞門、後嘉右衞門に改めた。【生歿】享保三年五月十三日、京都三條富小路三條の商家に生れ、天明六年（一七八六）二月九日京都に歿した。享年六十九。【墓所】京都鳥邊山延年寺　【學統】石田梅巖（別項）を師とし、門弟に中澤道二・柴田鳩翁（各別項）等があり、長子手島和庵、次子上河淇水（各別項）また心學者として名がある。【閲歴】堵庵は商家の出で、その家柄がよく、父は蓋岳先生と稱して學を好み、子堵庵の教育には大に力を注いだ。享保二十年十月、十八歳にして梅巖の門に入つて心學に志したが、三年を經た元文二年十一月には、心中大に得るところがあり、師より將來を囑望された。延享元年、二十九の年に梅巖は歿し、梅巖の創設した鬱舍も廢滅に歸さうとしてゐたが、寶暦五年二月以降、堵庵は梅巖門下の人々の請によつて毎朝「中庸」を講じ、明和元年二月以後には、毎夜「中庸」と「徒然草」とを講じたが、この頃には堵庵の名聲は高く擧つて、聽講者も極めて多かつた。よつて同年四月には、講席を三條御幸町に設け、期日を定めて一定の書を講じ、更にその翌二年には、居を朝倉街に移して、そこを五樂舍と名づけ、爾後益々講説と著述とを以て民衆の教化に努めた。梅巖によつて創められた心學（別項）は、堵庵によつて社會を動かす大きな力となつた。【著書】石田梅巖先生事蹟一卷〇前訓一卷（別項）〇塵計三卷〇我律鄙三卷（別項）〇要草一卷〇ありべかゝり二卷〇爲學玉箒六卷（別項）〇會友大旨一卷（別項）

手島堵庵

〇目なし用心抄一卷〇女前訓躾種〇目前一卷〇商人夜話草一卷〇知心辨疑一卷〇眼ざまし一卷〇座談隨筆一卷〇町人身體直し一卷〇新倉新話一卷〇明德和讃一卷〇女冥加訓一卷〇槪要一卷〇新實語教首書一卷〇洙泗要旨一卷〇答問雜話一卷〇大極圖說解一卷〇學庸解一卷〇論孟解一卷〇徒然草解一卷〇至誠一貫圖一卷〇新倉語錄一卷〇東郭先生集一卷。

【參考】石門心學の研究　白石正邦　〇手島堵庵傳　澤熊山（獨嘯集卷三）　【白石・森】

獨逸語（どいつご）「インド・ヨーロッパ語族」を見よ。

ドイツ文學の影響【鷗外以前】ドイツ文學が始めて日本に紹介されたのは、佛のジュウル・ヴェルヌの「新説八十日世界一周」（川島忠之助譯）、英のバルワア・リットンの「歐洲奇事花柳春話」（丹羽純一郎譯）、蘭のジョス・コリデヌの「新未來記」（近藤眞琴譯）等の、いづれも明治十一年であるのに、後れること約四年、同十五年に、シルレルの「ウヰルヘルム・テル」が、「哲爾自由譚」前篇の名で、松湖漁史なる譯者によつて發表されたのが始めてであらう。その以後、森鷗外が「國民之友」で、S・S・Sのサインの下に一黨を糾合し、更に「しがらみ草紙」を創刊した明治二十二年まで、出版界に現はれた獨逸文學を擧げると左の如くである。

獨逸奇書　**狐の裁判**（ゲーテ作　井上勤譯）（明治十七年）
得廉自由の一箭（シルレル作　中川霞城譯）（明治十九年）
字血泪源　**回天之弦聲**（シルレル作　蘆田東雄譯）（明治二十年）
妖怪　船ハウフ作（明治二十一年）
杏堂散史譯　**春雪瑪利御最後**（シルレル作）（明治二十一年）
泰西奇譯　**旅路の空**（ハウフ作　田中紓城譯）（明治二十一年）
（「現代日本文學大年表」に據る）

この間に、グリムの御伽噺も、何人かによつて譯出されてゐるが、その中の何人が、原獨文から直接に譯述したかは解らない。しかして明治二十二年三月から讀賣新聞に掲げられた森鷗外・三木竹二譯のホフマンの「玉を懐いて罪あり」は、英・露文學よりもやゝ後れてゐた。なほこの飜譯には、原作者ホフマンの名を擧げてゐなかつた。

【森鷗外と獨文學】明治二十二年、「國民之友」誌上に、S・S・Sなる署名の下に現はれた「於母影」（別項）は、その博識と清新さにおいて、當時の文壇の驚異であつた。十七篇中十四篇までが鷗外のゲーテ、ハウフ等の作詩の飜譯であつた。同二十二年十月、鷗外は弟三木竹二等と「しがらみ草紙」（別項）を創刊し、鷗外漁史・三木竹二共譯の名で、レッシングの Emilia Galotti（エミリヤ・ガロッテ）の譯、脚本「折薔薇」を連載した。又明治二十三年には、クライストの「悪因縁」を「國民之友」に九回に分載、アドルフ・ステルンの「うきよの波」を「國民之友」に六回に分載、ハックレンデルの「ふた夜」を讀賣新聞に連載した。クライストの「地震」もこの年であらう。またオシップ・シュビンの「うもれ木」（別項）は、この年から「しがらみ草紙」に連載され、明治二十五年四月の第三十一號で完結してゐる。一方に、明治二十三年は、鷗外が處女作「舞姫」（別項）を「國民之友」に發表した年で、それが一月に、第二の創作「うたかたの記」（別項）がその八月に、第三作の「文づかひ」（明治二十

日本文學大辭典　第三卷
和漢朗詠集……一三四
——挿畫圖版目次了——
物語……千代田女子專門學校教授　永積安明
裝幀　吉村忠夫
大學副手　衛見

四年)(別項)と共に、いづれも彼のドイツ留學の記念である。この三作は、單にドイツの異國的な風韻を、いみじく端正優婉な、磨き拔かれた古典的修辭で表現したのみでなく、ドイツ文學の精髓や、ケラーの氣品を思はせる最高度の傑作として、當時の文壇を驚かしたものであつた。この頃から鷗外以外の人々からも、ドイツ文學の詩歌小說の飜譯が諸方に現はれるやうになつた。內田遠湖(周平)のアルントの「雪中松柏愈青々」、中川霞城のシルレルの「自由之一箭」、綠堂野史・小金井きみ子共譯のハイゼの「新學士」、一癖生のチョツケの「何のその」、大江小波(巖谷漣)のリュツケルトの「讐へ草」等、霞城・遠湖・きみ子・小波等はいづれも原文に據つたもので、鷗外のドイツ文學の移植は、次第にドイツ文學の價値をわが國に認めしめるやうになつた。なほ當時の文壇で、原語から直接ドイツ文學を味はつたのは、中川霞城・巖谷漣、評論家石橋忍月程度であり、鷗外のためにみじめなほど叩きつけられた大阪の批評家山田芝廼園も、ドイツ文學に多少の知識があつたといはれる。鷗外は飜譯と創作の外に、美術論及び美學に觸手を伸べた。同二十四年七月の「讀醜論」は、當時の文壇批評家であつた石橋忍月(友吉)の、「醜論」に對する反駁で、國會新聞に載つた。また鷗外が美學(審美學)に殘した功績も忘れてはならない。印象のみを批判の唯一の手段としてゐた當時の混沌たる批評界に、鷗外はハルトマン、ショーペンハウエル等を中心にする美學の理論を武器として與へたのである。その一つの現象が、有名な逍遙との理想、沒理想の論爭である。逍遙は形而上學の上から沒理想を主張し、鷗外はこれに對して敢然アイデアリズムの立場を擁護して應戰し、ハルトマンの美學を根源として「パルメニデス」を論じ、レッシング、ショーペンハウエル、シェークスピアを祖述して、銳鋒當るべからざるものがあつた。鷗外が飜譯したドイツの小說及び戲曲家は、コピッシュ、フレンツェル、リリエンクロオン、シュラアフ、デーメル、ヒッペル、カイザア、ハウプトマン、ズウデルマン、その他古今に亙るが、明治四十年前後からは、更に何人も敢て試みなかつたオーストリーの作家、戲曲家層シュニッツレル、ホフマンシュタール、ウェデギント、モルナアに及んだ。この塙匈文學の新しい紹介は、雜誌「昴」に據る若い戲曲家達、吉井勇・木下杢太郎・長田秀雄・萬造寺齊等に、偉大な刺戟を與へた。殊にハウプトマンの「寂しき人々」等は、名譯として幾度か脚光を浴びた。一幕物は、多く三木竹二の「歌舞伎」及び「昴」に揭載され、後に「一幕物」「續一幕物」「新一幕物」として出版された。大正期は、一時、戲曲熱の高潮を見たが、鷗外のこれ等の譯述と指導にその功を歸すべきものが最も多いのである。なほ「妄人妄語」は、十九世紀末期の世界文學の新潮を報告風に書いてゐるが、やはりドイツ文學を中心とし、批判の精確と知識の豐富において、時代に敎へる暗示に富んでゐた。而して鷗外の最も高い功績は、その圓熟し切つた筆を以て、世界最大の詩人であるゲーテを飜譯紹介して、その巨匠としての最後の大作を完成したことである。第一部は大正二年一月、第二部は同年三月、富山房から出版せられた。殊に「ファウスト」は、原作の神韻を傳へたもので、その第一部は大正二年三月、上山草人等の近代劇協會によつて帝國劇場に上演せられた。次いで鷗外はクノー・フィシャー(Kuno Fischer)の「ファウスト」を研究して「ファウスト考」を書き、ビールショウスキー(Bielschowski)の「ゲーテ傳」を最も適宜なるものとして、これを中心に「ファウスト作者傳」を書いた。「ファウスト考」は同年十一月十七日、富山房から出版せられた。又ゲーテの初期の作品ゲェッツ(Götz)の飜譯は、大正三年「三田文學」に發表せられた。

【樗牛・竹風とニーチエ】次に、文學といふよりも、思想家としてのニーチエズムを日本に紹介し、その個人主義・本能主義を一代の文壇に氾濫せしめたものは、評論家高山樗牛(別項)である。「美的生活を論ず」(別項)を明治三十四年の「太陽」に、「文明批評家としての文學者」(別項)を同八月號に發表した彼は、或は詩的情熱を以てギリシヤ的自然を謳歌し、形式文明の危機に對抗して個人主義・天才主義の解放を叫び、反自然的な形式道德を排擊して、美的生活の福音を主張する等、ニーチエの洗禮を受けてからの彼のポレミツクは、最も華々しい活躍を示した。それだけ樗牛の美的本能生活と超人論の主張は、文壇のみならず、廣く敎育界・思想界の波瀾を呼び起した。まづ起つたのが坪內博士で、彼は讀賣新聞に「馬骨人言」(別項)なる諷刺的論文を揭げて、眞向から樗牛を攻擊し、樗牛もまたそれに應酬した。樗牛と支持する者は、姉崎嘲風・登張竹風(各別項)であり、殊に竹風は「帝國文學」に據つて早稻田派と健鬪したが、それ等の事情もあつて、同三十九年十月、高等師範の敎職を免ぜられた。竹風は、後、大正十年にニーチエの「ツアラッストラ」を「如是經」として發表したが、その外、鏡花と共譯の名でハウプトマンの「沈鐘」をやまと新聞に揭げた。樗牛・竹風によるニーチエの超道德論が當時の傳統道德に與へた刺戟は極めて大きく、それはその時代に勃興しつつあつた個人覺醒の意識に一大口火を點ずる結果になつた。與謝野晶子の詩歌や、小栗風葉の小說は、明かにその影響を受けたもので、殊に風葉の「天才」(別項)は、ニーチエズムを具象した男性を主人公としてゐる。なほ後に生田長江は、ニーチエ全集全十卷を譯出した。また樗牛は、チークラーの「十九世紀文明史」によつて、感化を獲たといはれるが、一方、「月夜の美感に就いて」(明治三十二年「太陽」)等も、ドイツの美學者から暗示されたものが多いやうに思ふ。樗牛はまた詩人ハイネに私淑してゐた。革命詩人としてではなく、病に臥して再び起てない感傷詩人としてのハイネに共鳴したもののやうに思はれる。さう言へば、ハイネの詩は、尾上柴舟その他に飜譯され、ニコラス・レナウと共に、多感な青年期の人々に廣く愛誦されたロマンチシズムの明治年代があつた。又後に生田春月にハイネ詩集・ゲーテ詩集の飜譯があり、かなり廣く讀まれた。

【獨逸文學移植の種々相】なほ、シャミツソの「影の無い人」が雜誌「青年文」かに飜譯され、一部の注意をひいたことがあるが、その以前に、鷺城翁村の小說集「むら竹」(別項)の一篇「影坊子」は、この作物の飜案であつた。明治の作家としてドイツ文學の影響を受けた一人は田山花袋である。花袋は英譯を通じて殊にズウデルマンの「猫橋」を愛讀し、「重右衛門の最後」その他には、ズウデルマンが大きく影を投げてゐる。その外、戲曲家山本有三には、ヘツベルから影響されるものが多いと云はれ、

木下杢太郎等は、オースタリーの戲曲を追蹤してゐた。また阿部次郎の「三太郎日記」を中心として、殊にアカデミックな集團に於けるゲーテの感化力は、最も博大であるらしい。鷗外については、ドイツ文學の移植の高い業績は、小山內薰に寄せられるであらう。彼が明治末期から大正末期に亙り、演劇熱の向上に寄與した熱情は涙ぐましいものがあり、ドイツの古典的な戲曲と共に、表現派の新作も、彼によつて逸早く移植され、上演された。島村抱月・楠山正雄・島村民藏等の早稻田派は、ヘツベル、ズウデルマン等の戲曲を紹介し、松井須磨子が演出の筈だつたズウデルマンの「マグダ」が、我が國の良風美俗を破壞する反抗劇だとして、警視廳から一時その上演を禁止された如きも、我が國思想界及び劇界の一轉機を示すものといはれよう。島村民藏は、藤代素人・成瀨無極・山岸光宣・靑木昌吉・新關良三・櫻井天壇・小牧健夫・茅野蕭々・片山孤村・小池堅治・三浦吉兵衞・橋本靑雨・舟木重信・小宮豐隆・林久男・川口浩・權田保之助等があり、近代文學の紹介もしくは飜譯には秦豐吉がある。秦のルマルクの「西部戰線異狀無し」の飜譯は、その發行部數に於て出版界の奇蹟であつた。秦はドイツ文學と共に、オースタリー文學にも造詣が深い。

【現代のドイツ文學の影響】世界大戰期の表現主義から、新卽物主義へ、昨今はそれも早い頃に崩壞して、ヒツトラー的フアシズム文學の胎生すら、滿更有り得ない事實でないと考へられつつある。表現主義から戰爭物の氾濫、それの後の新卽物主義の作物も、大抵、型通りにわが國に移植された。小池秋草(堅治)の「表現主義文學の研究」、北村喜八の「表現主義の程度と比例するであらう。自然、そこに

レンツ(Florens)の名を忘れてはならない。彼は帝國大學に敎鞭を執る傍ら、わが神話(古事記)・萬葉・俳句・戲曲(寺小屋)等を飜譯した。靑木昌吉・登張竹風等は、その學生であつたし、諸曲を飜譯したグンデルト(Gundert)も、その門下生である。ドイツ本國では、クラブント(Klaiund)があり、日本文學を熱心に紹介してゐる。

【結語】以上は、日本文學におけるドイツ文學の交涉である。ドイツ文學の精神・傾向・樣式が、どれほど深く、また廣く、近代日本文學の臨床たり得たかは、少くともロシヤや、フランスのそれが殘した足跡のやうに、明確に判別され得ないのは殘念である。文學も、國民性としての條件を飛び越し得ない限り、一國民の他國文學の愛好は、國民性同士の近似

七)歿、享年六十。

【和田】

宕陰(たういん) 儒者【姓名】鹽谷世弘、字は毅侯、甲藏と稱した。【別號】九里香園【生歿】文化六年四月十七日、江戶愛宕山下に生れ、慶應三年八月二十八日歿した。享年五十九。【閱歷】幼き時父桃蹊より句讀を受け、十六の時昌平黌に入つて松崎慊堂に師事し、二十一歲の時關西に遊び、當時の碩學と交遊し、歸つて濱松侯水野越前守に仕へて顧問に備はり、後幕府の儒官となつた。大正四年十一月正五位を贈られた。【著書】丙丁燼戒錄二卷〇籌海私議一卷〇隔靴論一卷〇大統歌一卷〇鞭駘錄二卷〇昭代記十卷〇宕陰存稿六卷 別項。【批評】宕陰は少年のころ、賴山陽の門にゐたことがあるので、その感化に由るのであらうか、史學と文章とに長じてゐた。當時我が國

學に多少の知識があつたといはれる。鷗外は飜譯と創作の外に、美術論及び美學に觸手を伸べた。同二十四年七月の「讀醜論」は、當時の文壇批評家であつた石橋忍月(友吉)の、「醜論」に對する反駁で、國會新聞に載つた。また鷗外が美學(審美學)に殘した功績も忘られてはならない。印象のみを批判の唯一の手段としてゐた當時の混沌たる批評界に、鷗外はハルトマン、ショーペンハウエル等を中心にする美學の理論を武器として與へたのである。その一つの現象が、有名な逍遙との理想、沒理想の論爭である。逍遙は形而上學の上から沒理想を主張し、鷗外はこれに對して敢然アイ

が、鷗外のこれ等の譯述と指導にその功を歸すべきものが最も多いのである。なほ「妄人妄語」は、十九世紀末期の世界文學の新潮を報告風に書いてゐるが、やはりドイツ文學を中心とし、批判の精確と知識の豐富において、時代に敎へる暗示に富んでゐた。而して鷗外の最も高い功績は、その圓熟し切つた筆を以て、世界最大の詩人であるゲーテを飜譯紹介して、その巨匠としての最後の大作を完成したことである。第一部は大正二年一月、第二部は同年三月、富山房から出版せられた。殊に「フアウスト」は、原作の神韻を傳へたもので、その第一部は大正二年三月、上山草人等の近代劇協會によつて帝國劇場に上演せられた。次い

を受けてからの彼のポレミツクは、最も華々しい活躍を示した。それだけ樗牛の美的本能生活と超人論の主張は、文壇のみならず、廣く敎育界・思想界の波瀾を呼び起した。まづ起つたのが坪內博士で、彼は讀賣新聞に「馬骨人言」(別項)なる諷刺的論文を揭げて、眞向から樗牛を攻擊し、樗牛もまたそれに應酬した。樗牛を支持する者は、姉崎嘲風・登張竹風(各別項)であり、殊に竹風は「帝國文學」に據つて早稻田派と健鬪したが、それ等の事情もあつて、同三十九年十月、高等師範の敎職を免ぜられた。竹風は、後、大正十年にニーチエの「ツアラッストラ」を「如是經」として發表したが、その外、鏡花と共譯の名でハウプトマン

ムの明治年代があつた。又後に生田春月にハイネ詩集・ゲーテ詩集の飜譯があり、かなり廣く讀まれた。

【獨逸文學移植の種々相】なほ、シャミツソの「影の無い人」が雜誌「青年文」かに飜譯され、一部の注意をひいたことがあるが、その以前に、饗庭篁村の小說集「むら竹」(別項)の一篇「影坊子」は、この作物の飜案であつた。明治の作家としてドイツ文學の影響を受けた一人は田山花袋である。花袋は英譯を通じて殊にズウデルマンの「猫橋」を愛讀し、「重右衞門の最後」その他には、ズウデルマンが大きく影を投げてゐる。その外、戲曲家山本有三には、ヘツベルから影響されるものが多いと云はれ、

木下杢太郎等は、オースタリーの戲曲を追蹤してゐた。また阿部次郎の「三太郎日記」を中心として、殊にアカデミックな集團に於けるゲーテの感化力は、最も博大であるらしい。鷗外についで、ドイツ文學の移植の高い業績は、小山內薰に寄せられるであらう。彼が明治末期から大正末期に亙り、演劇熱の向上に寄與した熱情は涙ぐましいものがあり、ドイツの古典的な戲曲と共に、表現派の新作も、彼によつて逸早く移植され、上演された。島村抱月・楠山正雄・島村民藏等の早稻田派は、ヘツベル、ズウデルマン等の戲曲を紹介し、松井須磨子が演出の筈だつたズウデルマンの「マグダ」が、我が國の良風美俗を破壞する反抗劇だとして、警視廳から一時その上演を禁止された如きも、我が國思想界及び劇界の一轉機を示すものといはれよう。島村民藏は、ヘツベル式の戲曲を作つた。明治四十四・五年頃、書肆南江堂からドラマのセリーズ出版が企てられた。「フラウ・ゾルゲ」の飜譯者小池秋草・林久男等は、シラー、ゲーテ、レッシング等の戲曲を多く紹介した。ヘツベルもまた、この頃から旺んに研究され出した。文學博士青木昌吉等は、シャミツソの「ペーター・シュレミール」を飜譯し、大正十二年には、「ゲーテとクライスト」なる純學的研究を發表した。この頃から學界にドイツ文學の眞摯な研究が次第に旺盛となり、「現代ドイツ戲曲」「ゲーテ研究」(山岸光宣)、「ベルデルソン研究」(小牧健夫)、「ドイツ文學研究」「ヘツベル」(吹田順助)、「ゲーテ」(茅野蕭々)、「フアウスト研究」(木村謹治)、「ドイツ文學研究」等相次いで現はれた。明治期以後今日まで通じて、ドイツ文學の記述・紹介・飜譯に努めた學徒としては、藤代素人・成瀨無極・山岸光宣・青木昌吉・新關良三・櫻井天壇・小牧健夫・茅野蕭々・片山孤村・小池堅治・三浦吉兵衞・橋本青雨・舟木重信・小宮豐隆・林久男・川口浩・權田保之助等があり、近代文學の紹介もしくは飜譯には秦豐吉がある。秦のルマルクの「西部戰線異狀無し」の飜譯は、その發行部數に於て出版界の奇蹟であつた。秦はドイツ文學と共に、オースタリー文學にも造詣が深い。

【現代のドイツ文學の影響】世界大戰期の表現主義から、新卽物主義へ、昨今はそれも早い頃に崩壞して、ヒツトラー的フアシズム文學の胎生すら、滿更有り得ない事實でないと考へられつつある。表現主義から戰爭物の氾濫、それの後の新卽物主義の作物も、大抵、型通りにわが國に移植された。小池秋草(堅治)の「表現主義文學の研究」、北村喜八の「表現主義の戲曲」は、いづれも表現主義の展開及び作物、思想傾向の大樣を知るに便宜な著述であり、ゲーリンク、ウンルー、カイゼル、トルレル、ハーゼンクレーフェル、ブロンネン、ヘツベル等の戲曲は、多くか少くか、わが國に飜譯され、殊に小山內薰の手を經て、築地小劇場に上場された。カイゼル、トルレルは、當時わが國で最も多く飜譯され、讀まれた戲曲家であり、戲曲であつた。次に戰爭文學の飈風的な復活を見た一九二九年からは、ルードウヰヒ・レンの「戰爭」、エルンスト・グレーザーの「一九〇二年組」が、ルマルクの「西部戰線異狀無し」と共に飜譯された。外にトマス・マンなどの飜譯もあり、一部の新しい作家に若干の影響を與へてゐる。

【日本文學の紹介者】日本文學を紹介したドイツ人としては、ハンブルグ大學敎授フローレンツ(Florenz)の名を忘れてはならない。彼は帝國大學に敎鞭を執る傍ら、わが神話(古事記)・萬葉・俳句・戲曲(寺小屋)等を飜譯した。青木昌吉・登張竹風等は、その學生であつたし、謠曲を飜譯したグンデルト(Gundert)も、その門下生である。ドイツ本國では、クラブント(Klabund)があり、日本文學を熱心に紹介してゐる。

【結語】以上は、日本文學におけるドイツ文學の交渉である。ドイツ文學の精神・傾向・樣式が、どれほど深く、また廣く、近代日本文學の臨床たり得たかは、少くともロシヤや、フランスのそれが殘した足跡のやうに、明確に判別され得ないのは殘念である。文學も、國民性としての條件を飛び越し得ない限り、一國民の他國文學の愛好は、國民性同士の近似性の程度と比例するであらう。自然、そこに日本の國民性と、ドイツのそれとの、文化及び國民性の本質の差等比較が課題にもなるわけであるが、ドイツ文學の制作が、佛露のそれよりも、わが國における飜譯率において少く、またドイツ文壇の趨勢も、佛露のそれより、より少く注意されるといふ思想的偏向はあるもののやうに見える。〔千葉〕

侗庵筆記(とうあんひつき)　隨筆　二卷　【著者】古賀煜【刊行】嘉永五年【解說】漢文の隨筆で、上卷に龍稱駟虎豹稱駒以下五十四則、下卷に飛龍志以下五十五則を收めてあつて、和漢の故事及び見聞の逸話等を集めたもの。嘉永五年古賀增(著者の男)、同年齋藤謙(拙堂)の兩序、同年櫛田駿の跋がある。

【著者小傳】古賀煜、字は季曄、通稱小太郎、精里の季子で、その後を承け、幕府の儒員であり、昌平黌の敎授であつた。弘化四年(二五〇七)歿、享年六十。〔和田〕

宕陰(たういん)　儒者　【姓名】鹽谷世弘、字は毅侯、甲藏と稱した。【別號】九里香園【生歿】文化六年四月十七日、江戶愛宕山下に生れ、慶應三年八月二十八日歿した。享年五十九。

【閱歷】幼き時父桃蹊より句讀を受け、十六の時昌平黌に入つて松崎慊堂に師事し、二十一歲の時關西に遊び、當時の碩學と交遊し、歸つて濱松侯水野越前守に仕へて顧問に備はり、後幕府の儒官となつた。大正四年十一月正五位を贈られた。【著書】丙丁烱戒錄二卷○籌海私議一卷○隔鞾論一卷○大統歌一卷○鞭駘錄二卷○昭代記十卷○宕陰存稿六卷(別項)。

【批評】宕陰は少年のころ、賴山陽の門にゐたことがあるので、その感化に由るのであらうか、史學と文章とに長じてゐた。當時我が國の歐陽修なりとの評があつたくらゐで、安井息軒(別項)と相並んで、山陽・一齋以後の名家である。〔佐久〕

唐音(たういん)「漢字」を見よ。

唐韻(たうゐん)「韻」「韻學」を見よ。

道因(だういん)　歌人　【姓名】藤原敦頼。出家して道因と稱す、同因とも書く。【閱歷・人物】閱歷は明かでないが官位は右馬助、從五位上まで上つた。「長明無名抄」によると、道に志が深く、七八十に及ぶまで、秀歌をよませ給へ

高藤―定方―朝頼―爲輔―惟孝―惟憲―宣長―大貳三位
―憲房―敦輔―清孝―敦頼

と徒步にて住吉神社に月詣でをした。又或る歌合に清輔が判者で道因の歌を負としたが、わざと判者の方に向ひ、涙を流して歎いたので、人々はかほどの熱心家は見たことがない

とて驚いた。九十ばかりになつて耳も遠くなつたので、歌合の座では特に講師の傍近く座を占めて耳を傾けて聞いた。「千載集」が撰せられた時は歿後であつたが、志にめでて俊成は十八首まで加へたので、俊成の夢に現はれ、涙を流して喜びをいつたので、更に二首を加へて二十首としたといふ。嘗て俊頼の歌が流行歌となつたので、永緣(別項)は琵琶法師に賂して我が歌を歌はせた。道因はこれを聞いて羨しく思ひ、盲人を集め、何物をも與へないで歌へ〳〵と責めたが、時の人はこれを聞いて笑つたなどとある。その歌は主觀が強く詠歎的な所がある。【作品】勅撰集に入る歌は千載二十首、新古今四、新勅撰三、以下凡そ十四首、合計凡そ四十一首。月詣集二首がある。永曆元年(一八二〇)の清輔朝臣家歌合より、治承三年(一八三九)の右大臣家歌合に至るまで數度の歌合の作者で、「顯昭陳狀」によれば「萬葉集」の訓釋を試みたこと、顯昭の「萬葉集時代難事」によれば、勝命と共に「萬葉集」成立年代に就いて、顯昭の所說に反對したことがわかる。

【參考】長明無名抄○百人一首一夕話○尊卑分脈 〔西下〕

宕陰存稿 たういんそんかう 漢文集 十三卷 【著者】鹽谷宕陰【刊行】明治三年、禮樂射御書數の六册として版行した。【解說】收むる所凡て百二十一篇。諸體の文を列擧し、更に補遺數篇を添へてある。宕陰の文章は直ちに胸臆を寫して虛構華飾に陷らず、叙事議論並び長じ、文辭暢達で、拮屈聱牙の弊がない。昭和六年、內田周平氏が存稿に載せてない所の文章八十八篇、詩賦七十四首を輯錄し、「宕陰賸稿」と名づけ、三卷として刊行した。 〔佐久〕

棠陰比事物語 たういんひじものがたり 假名草子 五卷 【作者】未詳【名稱】「棠陰比事物語」、又「棠陰比事」。棠陰は、周の大保召公が、文王の政を布くために、鄕邑を巡行した時、棠樹の下で公事訴訟を裁判したが、極めて公平無私であるといふので、人民が歡んでその德を頌し、甘棠の詩を作つて謳つたといふ故事に因んだ語である。比事とは原著者四明桂がこれを著はすに當り、和氏の「疑獄集」、鄭氏の「折獄龜鑑」等を參照した意味で、公平な裁判錄といふ義。【諸本】本書の假名文は、慶安二年安田十兵衞板の「棠陰比事物語」の外、寛文初年頃の繪入本、元祿五年刊の挿繪のない「たういんひし」及び延寶頃の江戶版に「異國公事物語」と改題した繪入本がある。

【解說】本書は、宋の四明桂の「棠陰比事」の飜譯である。周末より唐宋時代に於ける公事訴訟の明斷錄で、卷之一から四まで每卷三十題、卷之五に二十四題、通計百四十四題を集錄されてをる。大體事實に準據したものであることは言ふまでもないが、古代の事例には小說的のものも少くない。例へば、黃覇叱ㇾ姒(卷之一)は、前漢潁川の大守黃覇が、福人兄弟の女房が一人の孩兒を互に我が子であると爭奪する公事を裁決する事件で、ソロモンの話と同じであり、佐史誣ㇾ裴(卷之二)は、唐の則天武后の時、江琛といふ者が、裴光を陷れんとしてそのかいた書物の文字を切り拔いて謀叛の回文を僞造したのを、張楚金といふ人が、一鉢の水にこれを浮べて、僞書たることを看破する話は、草子洗の傳說に似てゐる。なほ單なる殺人・橫領・盜賊・杜騙等の談のうちにも、假作物語のあること勿論で、その中にも、無名破ㇾ冢は、これも則天武后が、大平公主に與へた細器金寶を、何者か窃んだのを怒つて犯人捕縛の嚴命が下り、吏卒共はこれを捕へかね、官命の急を逭れんとして蘇武名といふ者を捕へ、盜人の名を負はせたが、この武名は、別駕といふ國守の下に勤務する官人であつたから、無實を辯じ、剩へ則天武后より盜賊逮捕の命を請ひ、吏卒を率ゐて東北門を伺察するうちに、喪服を着た一群の故人が、北邙の一の新冢に行つて、祭典を行ふを認め、その擧動を窺ふに、憂愁の狀毫もなく、何やらん冢に藏めて顏見合せ、いづれも喜色あるを疑ひ、彼等を捕へ、且つ冢を發掘して見ると、金銀財寶贓物の隱匿所であつたことを知る話。又崇龜認ㇾ刀は、唐の劉崇龜が南海の鎭たりし時、富家の息子で美男子の某、或る日舟遊びをして岸邊に漕ぎ行くと、對岸の家に美しい娘がゐて、偶然談話を交へるうちに、その夜密會を約し、娘は戶を細目に開けて置いたところ、某が未だ來ないうちに、一人の賊が來て、天の與へと戶口から忍び入る。娘は待人と思つて抱き付くと、賊は喫驚りして、捕へられたと思つて携へた刀で斬殺し、その場を遁れ出た後へ、某が忍んで戶口から入るや、血糊に滑つて轉倒し、剩へ娘が殺されてゐるのに仰天し、これ又舟を飛ばして逃げ去つた。夜明けて家人が知つて大騷ぎとなり、官府に訴へ出で、血の足跡から、息子は忽ち捕へられ、法廷に引き出されて嚴しい取調べを受ける。因つて前日來の事情を審かに陳述し、決して娘を殺した覺えはないと强く否認した。そこで劉崇龜は犯人の別にあることを悟り、且つ現場に遺失してあつた刀を見るに、牛斬庖丁であるから、先づ屠者を召集し、銘々の庖丁を吟味し、その日は庖丁を留め置いて悉く歸らしめ、翌日屠者を呼び出し、彼の兇器に用ひた庖丁をその中に入れて、各自所有の庖丁を持ち去らしたが、終りに一人の屠者が殘り、自分の庖丁は何人かが持ち去り、こゝに殘つてゐるのは、自分のでないと云ふ。而もそれが兇器に用ひた庖丁であるから、漸く端緒が開け、段々搜索を進めて、眞犯人を逮捕するに至る話の如き、簡單ながら探偵小說としても取扱へる題材である。この書は、元來爲政家の參考に書いたものかも知れぬが、著作の性質、探偵的興味の豐富な點から、一般には寧ろ一種の小說として歡迎され、數版を重ねて廣く世に行はれた。【影響】個々の話題が、部分的に改作もしくは潤色されて、假名草子殊に浮世草子の儻偶(てれん)小說中に、新話題の如く織り込まれたものも少くない。又直接の影響としては西鶴作「本朝櫻陰比事」(元祿二年)(別項)あり、作者未詳「日本桃陰比事」(寶永六年)及びこれを多少訂正改題した「本朝藤陰比事」(別項)があり、又月尋堂作「鎌倉比事」(別項)等がある。 〔水谷〕

江戶版「棠陰比事」(挿畫)

【參考】新撰列傳體小說史 水谷不倒○綠蔭比事 城戶甚次郎(國語と國文學昭和七ノ八綠蔭號)

藤永 とうえい 「最明寺物(さいみやうじもの)の謠曲」を見よ。

東瀛詩選 とうえいしせん 漢詩集 四十卷 補遺 四卷十六册 【編著者】兪樾。字は蔭甫、曲園と號し、淸末の大儒である。【解說】元和・寶永より明治に至るまでの著名な漢詩人の集に就き、四千餘首を選んで四十卷となし、又諸家の選集の中から五百餘首を選んで補遺四卷となし、各人につきその小傳と批評とを添へてある。我が國の漢詩の沿革を研究するには缺くべからざる參考書である。 〔佐久〕

桃緣齋貞佐 たうえんさいていさ 狂歌師 【本名】芥河久五兵衞【別名】又生庵【生歿】元祿十二年備中に生れ、安永八年(二四三九)正月二十一日歿す。享年八十一。〔辭世〕死んで行くめ久右衞門と名乘り、後に久五兵衞と改めた。晩年實家の甥某を養子として家督を讓り、明和の初め剃髮していよ〳〵狂歌の道に遊んでゐたが、これより先、師の貞柳より贈られた長柄橋板の文臺、勝負の拂子を大阪の門人玉雲齋貞右(別項)に讓り渡して判者とし、八十一歲を以て同地に歿した。【著書】狂歌千代の棧三册(寶曆十年刊) 〔野崎〕

陶淵明集 たうゑんめいしふ 詩文別集 【著者】陶潛【諸本】北齊の陽休之の序錄に據れば、本書は古來三本あり。一本は八卷で序がなく、一本は六卷で序はあるが、編次が錯亂して居り、共に撰者は明かでない。一本は梁の蕭統(昭明太子)の撰した八卷本である。休之はこの三本を校合して十卷とし、五孝傳四八目を增入した。四八目は卽ち「聖賢群輔錄」である。この

を載せ、次に蕭統の撰した序傳を揭げ、次に總論がある。蓋し四庫著錄本を承けたものである。【傳來】我が國には、平安朝の頃既に渡來して「現在書目」には十卷本を載せてゐる。恐らく休之本であらう。降つて江戶時代、寛文年中に菊池東勻の校點本が刻せられたが、これ亦同本である。又天保年中に松崎明復の刊行した本も、毛晉本によつて「聖賢群輔錄」を削つたのみで、他は休之本と同じである。

【解說】彼の詩は、ともすれば質に乏しく華に流れんとする六朝の詩壇に在つて、儒家の思想を本として、深く物情を陶冶し、當時の通弊を脫して淵深樸實の趣を具へ、質にして能く華を離れず、屹然として詩品・人品共に一代に高かつたと稱せられる。後世蘇東坡が、「吾れ詩人に於て好む所無し、獨り淵明が詩を好む、羣せず、任眞自得す」とある。壯年の頃官に就いて、彭澤の令となつたが、偶々郡から督郵を遣して縣に到らしめた時、吏が淵明に「束帶してこれに見ゆべし」と云つたのに、淵明は、「我豈能く五斗米のために腰を折りて鄕里の小兒に向はんや」と云つて、卽日綬を解いて職を去り、在職僅かに八十五日であつた。かの「歸去來辭」はこの時に賦したものだと云ふ。その性は恬澹無欲、貧困の中に一張の無絃の琴を携へ、唯々酒を友として、從適の生活を送り、俗塵を離れた田園に處し、貧賤に煩はされず、富貴を求めず、菊の隱逸なるを愛して風月と俱に世を去つた。世に周續之と劉遺民とを合せて、潯陽の三隱と云ふ。 〔宇野・木多〕

東音譜 とうおんぶ 語學書 一卷一册 【著者】新井白石【成立・刊行】享保四年十二月の自

かる。

【參考】長明無名抄 ○百人一首一夕話 ○尊卑分脈 【西下】

宕陰存稿 たういんそんかう 漢文集 十三卷 【著者】鹽谷宕陰 【刊行】明治三年、禮樂射御書數の六册として版行した。【解說】收むる所凡て百二十一篇。諸體の文を列擧し、更に補遺數篇を添へてある。宕陰の文章は直ちに胸臆を寫して虛構華飾に陷らず、叙事議論並び長じ、文辭暢達で、拮屈聱牙の弊がない。昭和六年、內田周平氏が存稿に載せてない所の文章八十八篇、詩賦七十四首を輯錄し、「宕陰賸稿」と名づけ、三卷として刊行した。 【佐久】

【參考】新撰列傳體小說史 水谷不倒 ○綠陰比事 城戸甚次郎(國語と國文學昭和七ノ八綠蔭號)

藤永 とうえい 「最明寺物の謠曲」を見よ。

東瀛詩選 とうえいしせん 漢詩集 四十卷 補遺四卷十六册 【編著者】兪樾。字は蔭甫、曲園と號し、淸末の大儒である。【解說】元和・寶永より明治に至るまでの著名な漢詩人の集に就き、四千餘首を選んで四十卷となし、又諸家の選集の中から五百餘首を選んで補遺四卷となし、各人につきその小傳と批評とを添へてある。我が國の漢詩の沿革を研究するには缺くべからざる參考書である。 【佐久】

桃緣齋貞佐 たうえんさいていさ 狂歌師 【本名】芥河久五兵衞 【別名】又生庵 【生歿】元祿十二年備中に生れ、安永八年(一四三九)正月二十一日歿す。享年八十一。〔辭世〕死んで行く處はをかし佛護寺の犬の小便する垣のもと。 【墓所】藝州廣島龍源山佛護寺 【閱歷】備中笠岡の商丸山久右衞門の長子で、幼名を河吉と云つた。弱冠にして漢籍を京師の伊藤東涯に學び、又蹴鞠・茶道・香道・亂舞・三絃・尺八等の諸藝に通じ、狂歌は油煙齋貞柳(別項)の門に入つて出藍の譽を得た。性磊落、遊藝にのみ身を入れて家事を顧みなかつたので、父は貳百兩の金を與へて勘當した。貞佐は家を出て播磨より京攝の間を、或は別莊番となり、或は飯焚き男となつて漂泊し、二年の後許されて家に歸つた時、曩に受けた貳百兩は一錢も手を附けず封の儘父に返したと云ふ。それより貞佐のために別に家を建てて酒造業を營ませたが、利慾の念なき故損失のみ打續き、終に廢業して本家へ歸つた。折柄廣島塚本町の町役を勤める芥河孫右衞門から養子の相談があつたので、直に同家の婿養子となり、初

め久右衞門と名乘り、後に久五兵衞と改めた。晩年實家の甥某を養子として家督を讓り、明和の初め剃髮していよ〳〵狂歌の道に遊んでゐたが、これより先、師の貞柳より贈られた長柄橋板の文臺、勝負の拂子を大阪の門人玉雲齋貞右(別項)に讓り渡して判者とし、八十一歲を以て同地に歿した。【著書】狂歌千代の棧三册(寶曆十年刊) 【野崎】

陶淵明集 たうえんめいしふ 詩文別集 【著者】陶潛【諸本】北齊の陽休之の序錄に據れば、本書は古來三本あり。一本は八卷で序がなく、一本は六卷で序はあるが、編次が錯亂して居り、共に撰者は明かでない。一本は梁の蕭統(昭明太子)の撰した八卷本である。休之はこの三本を校合して十卷とし、五孝傳四八目を增入した。四八目は卽ち「聖賢群輔錄」である。この二篇は蕭統本にはない。八卷本、六卷本の二本は今傳はつてゐないので、その面目を知る由もないが、後に行はれてゐるのは、統・休之の二本のみである。「隋書」經籍志には九卷、「新唐書」藝文志には五卷を著錄してゐるが、その何れであるかは詳かでない。「崇文總目」「宋史」藝文志等には十卷とある。恐らくは休之本であらう。宋の宋庠が諸々の異本中の善本を擇んで校定するに當り、江左に得た所謂江左本を取り、ただその「聖賢群輔錄」中の八儒・三墨の二條を後人の附益として除いたが、實は休之本に過ぎない。宋代以後は殆ど休之本のみが行はれ、後、李公煥・何孟春・焦竑・毛晉・張溥の諸家の校訂本が出て、互に出入はあるが、概ね休之本に據り、淸朝に至つて乾隆帝が四庫の館員に命じて、蕭統本に據つて八卷とし、二卷を削らしめた。これが卽ち四庫本である。今の通行本八卷は、首に四庫提要の文を載せ、次に蕭統の撰した序傳を掲げ、次に總論がある。蓋し四庫著錄本を承けたものである。【傳來】我が國には、平安朝の頃既に渡來して「現在書目」には十卷本を載せてゐる。恐らく休之本であらう。降つて江戸時代、寬文年中に菊池東勻の校點本が刻せられたが、これ亦同本である。又天保年中に松崎明復の刊行した本も、毛晉本によつて「聖賢群輔錄」を削つたのみで、他は休之本と同じである。 【解說】彼の詩は、ともすれば質に乏しく華に流れんとする六朝の詩壇に在つて、儒家の思想を本として、深く物情を陶冶し、當時の通弊を脫して淵深樸實の趣を具へ、質にして能く華を離れず、屹然として詩品・人品共に一代に高かつたと稱せられる。後世蘇東坡が、「吾れ詩人に於て好む所無し、獨り淵明が詩を好む、淵明詩を作ること多からず、然れども質にして實は綺に、癯せて實は肥えたり、曹植・劉楨・鮑昭・謝靈運・李白・杜甫の諸人より、皆及ぶ莫し」と評してゐるのを見ても、その地位は推測される。唐代に於ける王維・孟浩然・韓愈・柳宗元等の一派は、淵明に負ふ所が尠くない。 【註釋書】箋注淵明集十卷明李公煥 ○靖節先生集十卷・卷首一卷・卷末二卷淸陶澍集注。 【著者小傳】陶潛、字は淵明(宋書隱逸傳)、或は名は潛、字は元亮(蕭統陶淵明傳)とも云ひ、定かでなく、その生涯も前記の諸書及び「南史隱逸傳」「蓮社高賢傳」「顏延之」「徵士誄」「五柳生傳」(自敍傳の如きもの)、陶澍(淵明の後)の「靖節先生年譜考異」等に徵しても、詳しいことは分らない。晉の哀帝の興寧三年、潯陽の柴桑に生れ、宋の文帝の元嘉四年(皇紀一〇八七)六十三歲を以て歿した。蕭統の傳に據れば、「穎脫にして

陶淵明集 たうえんめいしふ 詩文別集 【著者】陶潛【諸本】北齊の陽休之の序錄に據れば、本書は古來三本あり。一本は八卷で序がなく、一本は六卷で序はあるが、編次が錯亂して居り、共に撰者は明かでない。一本は梁の蕭統(昭明太子)の撰した八卷本である。休之はこの三本を校合して十卷とし、五孝傳四八目を增入した。四八目は卽ち「聖賢群輔錄」である。この二篇は蕭統本にはない。八卷本、六卷本の二本は今傳はつてゐないので、その面目を知る由もないが、後に行はれてゐるのは、統・休之の二本のみである。「隋書」經籍志には九卷、「新唐書」藝文志には五卷を著錄してゐるが、その何れであるかは詳かでない。「崇文總目」「宋史」藝文志等には十卷とある。恐らくは休之本であらう。宋の宋庠が諸々の異本中の善本を擇んで校定するに當り、江左に得た所謂江左本を取り、ただその「聖賢群輔錄」中の八儒・三墨の二條を後人の附益として除いたが、實は休之本に過ぎない。宋代以後は殆ど休之本のみが行はれ、後、李公煥・何孟春・焦竑・毛晉・張溥の諸家の校訂本が出て、互に出入はあるが、概ね休之本に據り、淸朝に至つて乾隆帝が四庫の館員に命じて、蕭統本に據つて八卷とし、二卷を削らしめた。これが卽ち四庫本である。今の通行本八卷は、首に四庫提要の文を載せ、次に蕭統の撰した序傳を掲げ、次に總論がある。蓋し四庫著錄本を承けたものである。【傳來】我が國には、平安朝の頃既に渡來して「現在書目」には十卷本を載せてゐる。恐らく休之本であらう。降つて江戸時代、寬文年中に菊池東勻の校點本が刻せられたが、これ亦同本である。又天保年中に松崎明復の刊行した本も、毛晉本によつて「聖賢群輔錄」を削つたのみで、他は休之本と同じである。 【解說】彼の詩は、ともすれば質に乏しく華に流れんとする六朝の詩壇に在つて、儒家の思想を本として、深く物情を陶冶し、當時の通弊を脫して淵深樸實の趣を具へ、質にして能く華を離れず、屹然として詩品・人品共に一代に高かつたと稱せられる。後世蘇東坡が、「吾れ詩人に於て好む所無し、獨り淵明が詩を好む、淵明詩を作ること多からず、然れども質にして實は綺に、癯せて實は肥えたり、曹植・劉楨・鮑昭・謝靈運・李白・杜甫の諸人より、皆及ぶ莫し」と評してゐるのを見ても、その地位は推測される。唐代に於ける王維・孟浩然・韓愈・柳宗元等の一派は、淵明に負ふ所が尠くない。 【註釋書】箋注淵明集十卷明李公煥 ○靖節先生集十卷・卷首一卷・卷末二卷淸陶澍集注。 【著者小傳】陶潛、字は淵明(宋書隱逸傳)、或は名は潛、字は元亮(蕭統陶淵明傳)とも云ひ、定かでなく、その生涯も前記の諸書及び「南史隱逸傳」「蓮社高賢傳」「顏延之」「徵士誄」「五柳生傳」(自敍傳の如きもの)、陶澍(淵明の後)の「靖節先生年譜考異」等に徵しても、詳しいことは分らない。晉の哀帝の興寧三年、潯陽の柴桑に生れ、宋の文帝の元嘉四年(皇紀一〇八七)六十三歲を以て歿した。蕭統の傳に據れば、「穎脫にして

東音譜 とうおんぷ 語學書 一卷一册 【著者】新井白石 【成立・刊行】享保四年十二月の自序あり、新井白石全集卷一所收。 【內容】片假名を用ひて、外國語を示す方法を立案したものである。先づ五十音の各々の音を支那の杭州・泉州・漳州・福州等の字音と比較對照し、次に五十音には無い外國の音の寫し方を立案してゐる。卽ち二合音(ワキ等イイ等二字で一音を表はす)、發聲(子音)、送聲(アイ等とす。今のアー、イーに當る)。餘聲(カア、キイ、クウ等)。收聲(これに五種あり。(1)唇收之開—アン、カン、イン等。(2)唇收之合—アム、カム、ワム等。(3)舌收之合—アヌ、カヌ、ワヌ等。(4)喉收之開—アイ、カイ、ワイ等。(5)喉收之合—アウ、カウ、ワウ等)。入聲(四種あり。(1)唇收之合—アフ、カ、ワフ等。(2)舌收之合—アツ、カツ、ワツ等。(3)牙收之開—アキ、カキ、ワキ等。(4)牙收之合—アク、カク、ワク等)。淸濁(淸音と濁音)、輕重(半濁音を重聲、その以外のものを輕聲と

的のものも少くない。例へば、黃覇「叱」如(巻之二)は、前漢潁川の大守黃覇が、福人兄弟の女房が一人の孩兒を互に我が子であると爭奪する公事を裁決する事件で、ソロモンの話と同じであり、佐史誣(はし)裴(巻之二)は、唐の則天武后の時、江琛といふ者が、裴光を陷れんとしてそのかいた書物の文字を切り拔いて謀叛の囘文を僞造したのを、張楚金といふ人が、一鉢の水にこれを浮べて、僞書たることを看破する話は、草子洗の傳說に似てゐる。なほ單なる殺人・橫領・盜賊・杜騙等の談のうちにも、假作物語のあること勿論で、その中にも、無名破(つかやぶる)家は、これも則天武后が、大平公主に與へ人の賊が來て、天の與へと戶口から忍び入る。娘は待人と思つて抱き付くと、賊は喫驚りして、捕へられたと思つて携へた刀で斬殺し、その場を遁れ出た後へ、某が忍んで戶口から入るや、血糊に滑つて轉倒し、剩へ娘が殺されてゐるのに仰天し、これ又舟を飛ばして逃げ去つた。夜明けて家人が知つて大騷ぎとなり、官府に訴へ出で、血の足跡から、息子は忽ち捕へられ、法廷に引き出されて嚴しい取調べを受ける。因つて前日來の事情を審かに陳述し、決して娘を殺した覺えはないと強く否認した。そこで劉崇龜は犯人の別にあることを悟り、且つ現場に遺失して

材である。この書は、元來爲政家の參考に書いたものかも知れぬが、著作の性質、探偵的興味の豐富な點から、一般には寧ろ一種の小說として歡迎され、數版を重ねて廣く世に行はれた。【影響】個々の話題が、部分的に改作もしくは潤色されて、假名草子殊に浮世草子の儻偶(てん)小說中に、新話題の如く織り込まれたものも少くない。又直接の影響としては西鶴作「本朝櫻陰比事」(元祿二年)(別項)あり、作者未詳「日本桃陰比事」(寶永六年)及びこれを多少訂正改題した「本朝藤陰比事」(別項)があり、又月尋堂作「鎌倉(かまくら)比事」(別項)等がある。 【水谷】

稱す)。【價値】本書の序に、西洋語の發音をうつすに、支那人が漢字で寫したのを採用してゐたが、これでは曖昧であるとし、日本の假名を用ひたのは卓見であるとしなければならない。日本に普通無い音は新しい方法によらなければならないが、白石は琴譜に倣つて考へ出したと記してゐるけれども、羅馬字の綴り方からも暗示を得た事と思はれる。但し白石の考案は、基礎に於て大なる二つの缺點がある。一つは五十音圖のアヤワの三行を、アイウエヲ・ヤ・イユエヨ・ワ・イウエオと誤つてゐる事。一つは杭・泉・漳・福各州の音に十分通じてゐない事である。故に東音譜を立案した識見は頗る尊敬すべきものであるが、その結果は遺憾ながら信頼し得ざるものである。【備考】江戸時代に片假名に依つて一種の綴字法を考案した者は、白石の外に僧文雄がある。(和字大觀抄參照)

【參考】新井白石全集(第一卷例言)　【龜田】

踏歌　歌舞　【名稱】足で地を踏んで拍子を取りながら歌ふ意で、支那には唐初よりこの歌舞があり、それを我が國に取り入れたもの。男子のみの行ふ踏歌を男踏歌と云ひ、女子のみの行ふ踏歌を女踏歌と云ふ。「日本書紀」では踏歌を阿良禮走と訓じ、平安時代でもかく稱した。「釋日本紀」所引の「日本紀私記」宣命譜に、阿良禮末之利とあるのもアラレバシリと訓ずべきで、「公事根源」にアラレマジリと訓じたのは誤りであらう。【沿革】踏歌の輸入せられたのは、何時頃か明かでない。天武天皇三年正月朔日に、闇夜に男女の別なく踏歌を行つたのが最初であると云ふ(伊呂波字類抄所引日本事始)。「日本書紀」によれば、持統天皇七年正月十六日に漢人が踏歌を奏し、翌八年正月十七日にも漢人が踏歌を奏し、十九日には唐人が踏歌を奏した。これ等が古き所見である。而して我が國に古くよりあつた歌舞歌垣(別項)は、踏歌と並び行はれてゐたが、元來踏歌と性質の同じものゆゑ、兩者は混和して、平安朝以後には、踏歌のみひとり宮廷貴紳の間に行はれて、歌垣は已んでしまつた。併し踏歌の技は、歌垣のそれを襲うた所があると思はれる。

【男踏歌】男踏歌の初めは、聖武天皇の天平二年正月十六日に宮中で百官の行つた踏歌である(續日本紀)。その後、純然たる男踏歌の所見は國史上にはないが、女踏歌と並び行はれた事と思はれる。平安時代となつては、正月十六日を踏歌の節會として女踏歌が行はれ、その前二日、十四日を男踏歌として殆ど毎年行はれた(源氏物語の註釋書「細流抄」に、男踏歌と女踏歌が隔年に行はれたと記してゐるのは疑はしい)。一説に、宇多天皇の寛平元年正月十四日に男踏歌は創始せられたと云ふ。然るに圓融天皇天元六年正月十四日の男踏歌を最後とし、翌永觀二年に廢止せられて、以後永く絶えた。醍醐天皇の后藤原穩子の忌日に當る故である(今昔物語)。男踏歌に奉仕する官人は、高巾子の冠を授けられ、これを着するのが儀式となつてゐた(「西宮記」「源氏物語」初音の卷にも見ゆ)。

【女踏歌】天武天皇天平十四年正月十六日に、少年童女の踏歌の行はれたのがその最初である(續日本紀)。爾後國史上に見ゆるもの多く、内教坊の妓女に踏歌を奏せしめ、且つ屢々蕃客の觀覽に供した。平安時代では、正月十六日を踏歌の節會として女踏歌が毎年行はれ、内教坊の舞妓の外、中宮・春宮の女官や女藏人がこれに奉仕した。爾後、數度の改廢はあつたけれども、女踏歌は室町時代まで行はれ、江戸時代にもその面影だけは存してゐた。平安時代では、踏歌後、二月三月の間に、賭弓のまけわざが行はれた。これを踏歌の後宴と云ふ。

【雜踏歌】奈良時代には、宮廷のみならず畿内諸村にも踏歌が行はれて、猥りがはしきものがあつたので、天平神護二年正月十四日の太政官符で、これを禁止した(類聚三代格)。「延喜式」の彈正式にも、京都で一切の踏歌を行ふことを禁斷した。これ等は特に歌垣(別項)に近いものであつたと思はれる。また諸神社でもこれがあつた。「司中公文抄」(伊勢太神宮司の記錄。長祿・永享・嘉吉頃の年號見ゆ)には、氏神離宮院で正月十五日に行はれた踏歌神事の歌詞を載せ、近世では、尾張の熱田神宮でも正月十一日に宮人が卯杖舞を奏して、尾張氏が踏歌の頌を唱へ、高巾子の神人が袘を振つたと云ふ(鹽尻)。鹿島神宮でも正月十四日に踏歌祭があり、梅花の枝を持ち、太鼓を打ち、笛を吹き、笏拍子を打つて、御假殿を三度廻り、神拜する式があつた(鹿島志)。これ等は、何れも古昔の踏歌の名殘であらう。

【歌詞】最も古き歌詞は、「類聚國史」に出てゐる延曆十四年正月十六日の踏歌の歌である。

山城顯樂薹來傳　帝宅新成最可憐
郊野道平千里望　山河擅美四週連

新京樂、平安樂土、萬年春

の如き、新京讃美の漢詩に祝詞を附したもの都合四章を載せてゐる。これは當時新作の踏歌の歌詞であらう。「釋日本紀」に引ける「日本紀私記」には、この各段の終りの祝詞を「萬年阿良禮」と歌つたが故に、踏歌の事を阿良禮走と稱するのだと云つてゐる。阿良禮走とは、初め春雪を踏んで舞ふ樣が霰の降つて飛ぶが如くであるから名づけたと云ふ説があるが、「倭訓栞」に、あられは可レ有と云ふ意味であらうと説いた。更に「日本紀私記」には、萬年阿良禮を、當時では改めて萬歲樂と云つたとある。これ等が平安朝初めの踏歌の歌である。平安朝後期に普通行はれた歌詞は「朝野群載」に載せてゐる。踏歌章曲として男踏歌の歌詞を出した。

萬春樂萬春樂萬春樂　我皇延祚億千齡(萬春樂)
元正慶序年光麗(萬春樂)　延曆休期帝化昌(萬春樂)
百辟陪筵華幄內(天人感呼)千般作樂繁宸場(萬春樂)

の如く、一章五句づつより成るもの二章十句を載せてゐる。次に女踏歌章曲七首として、

明々聖主億千齡(千春樂)　無事無爲唯賞豫(千春樂)
凝旒端拱任群賢(千春樂)　綱疎刑措還千古(天人感呼)
治定功成太平年(千春樂)

の如く一章五句づつのもの、序四章、破三章、急一章、計七章を載せた。但し急の歌は、

早年愛光華(千春樂)　春遊不知厭　暮景落朱顏
猶恨韶光短　徘徊不欲還(聖主億千齡)

とある。「源氏物語」(初音)に、男踏歌の事を述べて、「萬春樂御口ずさびに宣ひ」と見え、且つ「壽詞のみだりがはしき」とあるのも、踏歌の各句の終りに附する祝詞の事であり、「河海抄」や「花鳥餘情」等に記せる如く、踏歌はすべて漢音で棒讀に歌つたものである。「西宮記」にも、男踏歌の儀式を記して萬春樂を奏する由を述べてゐるが、この句は萬歲樂の變化したものであらう。「樂道類集」に「西宮記」の文を載せて説明して曰く、「今案、萬春樂ハスベテ八句ノ詩ナリ、ソレヲ漢音ニウタヒテ、句ゴトノアヒニ萬春樂ト唱フル也、踏歌ノ舞人ノ立サマニ云事ナリ」とある如くである。

踏歌の曲調は、雙調を以て歌つた。「李部王記」によれば、男踏歌には、「一十百千萬億」等と云ふ詞もあつたらしい。「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌は、「萬春樂千秋樂、平安ニ少シヅツ富ヲシテ、小夜ヲ經ルマデ」と三度申す詞に始り、「一ツ二ツ三ツ七ツ十ヲ百千萬阿僧祇御寶物數へ奉ル」と云ふ語で終つてゐるのは、古昔の歌詞を傳へたものであらう。且つ男踏歌の際には、此殿・竹河・我家のやうな催馬樂の曲をも用ひた。故に「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌詞は、終りに竹河の歌詞の訛つたものを載せ、「鹽尻」所載の尾張國熱田神宮踏歌祭の歌詞では、萬しやう樂(萬春樂の訛)〳〵〳〵で始り、竹河・此殿・淺綠等の催馬樂の歌詞の變形せるものを連ね用ひたのである。催馬樂の一寫本には、呂歌の終りに、踏歌詠とべて漢詩より成るのは、平安朝初めの漢詩文全盛時代の遺風と思はれる。而して千秋萬歲(別項)は踏歌より出たものであらう。なほ正月十六日の踏歌節會の際には大歌立歌が奏せられたが、この大歌には、「琴歌譜」所載の酒坐歌の如き大歌が歌はれたと思はれる(酒樂歌參照)。

【參考】古事類苑(樂舞部・歲時部)○岷江入楚○萬葉緯○國史大辭典○日本歌謠史○中古雜唱集　○比古婆衣　○踏歌考　○あらればしり　【藤田】

伴信友

東雅　語學書　二十卷　【著者】新井白石　【成立】享保二年に成る。同四年の室直清の序、同十年の安積覺の序がある。【諸本】白石の自筆本が內閣文庫に在る。最初の刊本は明治三十六年、大槻如電が諸寫本を校合し困難な事であるが、幸に「舊事紀」「古事記」「日本紀」「姓氏錄」「古語拾遺」「風土記」の如きに古語を釋いて居り、又「萬葉集」を初め代々の歌集の註釋は頗る參考になる。が、これ等の古書にも見えない語は、類例に依つて語義を求むべきである。併し解釋し難いものは强ひて說くべきではない。次に古今の語に通ずるには、先づそれ〴〵の時代を知らねばならぬ。朝鮮が我が國に服屬して後は、朝鮮・支那の語が入つて來、我が古語は或は廢れ、或は意義が變化して國語に大變動があつた。次いで佛教が渡來して梵語が輸入せられ、それから禪宗が渡來して宋・元の語が入つて來、近世に西洋と交際するに及んで蕃語が入つて來てゐる。かくして我が國語は屢々變遷してゐるから、それぞれの時代を知らねばならぬ。後世の語義中略・下略と云ふことを說いてゐるが、上古の言は、或る語の音を省略して出來たのではなく、本來簡單だつたのである。又轉語・反語等の說も首肯し難いものがあると記してゐる。

【價値】本書は、著者が不遇の地位にある時代に、參考の書にも不便を感じつつ著はしたもので、誤謬や不備は必ずしも少くない。又假名遣等も一定してゐない。が、その語源研究に對する意見は、大體から觀て甚だ卓拔で、國語研究史上の名著として推賞すべきものである。卽ち著者は「和句解」「日本釋名」(各別項)等に於ける常識的判斷を廢して、歷史考察が大切なる事を說き、又國語を解くのに飽くまで國語を主とし、本來の國語と外來語を區別してゐる。これを要するに語源研究の方法は益軒が初めて組織したが(勿論、それは白石の

踏歌の曲調は、雙調を以て歌つた。「李部王記」によれば、男踏歌には、「一十百千萬億」等と云ふ詞もあつたらしい。「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌は、「萬春樂千秋樂、平安ニ少シヅツ富ヲシテ、小夜ヲ經ルマデ」と三度申す詞に始り、「一ツ二ツ三ツ七ツ十ヲ百千萬阿僧祇御寶物數ヘ奉ル」と云ふ語で終つてゐるのは、古昔の歌詞を傳へたものであらう。且つ男踏歌の際には、此殿・竹河・我家のやうな催馬樂の曲をも用ひた。故に「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌詞は、終りに竹河の歌詞の訛つたものを載せ、「鹽尻」所載の尾張國熱田神宮踏歌祭の歌詞では、萬しやう樂(萬春樂の訛)〳〵〳〵で始り、竹河・此殿・淺緑等の催馬樂の歌詞の變形せるものを連ね用ひたのである。催馬樂の一寫本には、呂歌の終りに、踏歌詠として「朝野群載」所載の男踏歌の歌詞を掲げ、次に「なにそもそ、なにそもそ、絹かも、綿かも、せにかも、布かも、何そもそ」と云ふ歌詞を載せて、「右詠以二雙調一爲レ音、故加二呂歌末一、參入音聲及在レ座之間唱二竹河曲一、罷出音聲唱二我家曲一、何曾毛曾一、次唱二此殿三曲一こと註せるによれば、男踏歌の際に、これ等の曲の行はれた事は明かであり、また踏歌曲をも、催馬樂曲の一として取扱つてゐた事が分る。かく踏歌と催馬樂とは密接な關係があつた。また平安朝の踏歌節會の際には、外國樂をも管絃で奏するのが例であつた。蕃客を招いたのもその故であつて、踏歌が常に時世遲れと思はれる固苦しい漢詩を音で歌ふのも、外交上の理由があつたのである。「江談抄」によれば、朗詠として最も名高き「佳辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央」の歌詞は、もと踏歌に歌はれたものであると云ふ。かくて踏歌の歌詞がすべて漢詩より成るのは、平安朝初めの漢詩文全盛時代の遺風と思はれる。而して千秋萬歲(別項)は踏歌より出たものであらう。なほ正月十六日の踏歌節會の際には大歌立歌が奏せられたが、この大歌には、「琴歌譜」所載の酒坐歌の如き大歌が歌はれたと思はれる(酒樂歌參照)。

【參考】古事類苑(樂舞部・歲時部)○岷江入楚○萬葉緯○國史大辭典○日本歌謠史○中古雜唱集○比古婆衣○踏歌考○あらればしり　伴信友　〔藤田〕

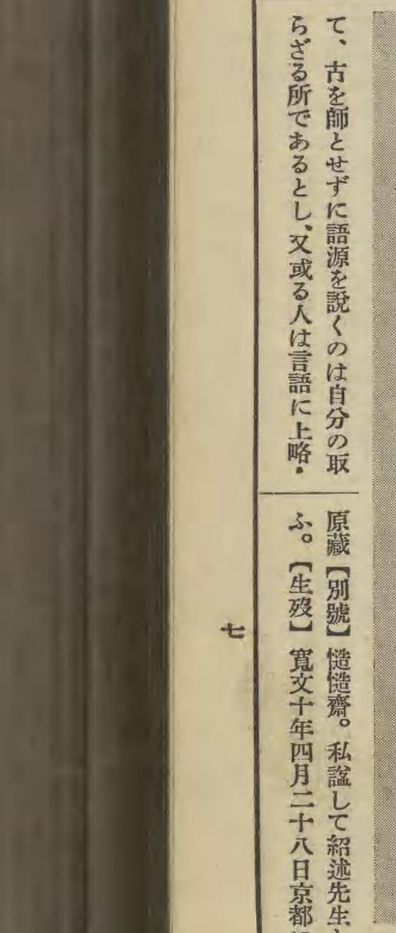
東雅　とうが　語學書　二十卷　【著者】新井白石　【成立】享保二年に成る。同四年の室直清の序、同十年の安積覺の序がある。【諸本】白石の自筆本が内閣文庫に在る。最初の刊本は明治三十六年、大槻如電が諸寫本を校合したもの(目次一册、本文四册)。新井白石全集卷四に收む。全集本は自筆本を以て校訂した。

【内容】本書は「爾雅」に倣つて、特に國語の名詞に就いて語源的研究をなしたもので、東雅は日東爾雅の意である。第一卷は總論。第二卷以下は次の如く部門を分つてゐる。(一)天文 附歲時、(二)地輿 附方位、(三)神祇 祭祀具、(四)人倫、(五)宮室、(六)器用、(七)飲食、(八)穀蔬、(九)果蓏、(十)草卉、(十一)樹竹、(十二)禽鳥、(十三)畜獸、(十四)鱗介、(十五)蟲豸。以上十五種に分ち、類に從つて單語を漢字で標出し、これに片假名で訓を附し、次に多くの古書を引用して語源を考證してゐる。總論の中に語源研究について次の如き意見を述べてゐる。曰く言語は時間的には昔と今との相違があり、空間的には地方に依つて同じくない。故に千載の下に生れて千載の上に通じ、一方の内にあつて四方の外に達する事は困難な事であるが、幸に「舊事紀」「古事記」「日本紀」「姓氏錄」「古語拾遺」「風土記」の如きに古語を釋いて居り、又「萬葉集」を初め代々の歌集の註釋は頗る參考になる。が、これ等の古書にも見えない語は、類例に依つて語義を求むべきである。併し解釋し難いものは强ひて說くべきではない。次に古今の語に通ずるには、先づそれ〴〵の時代を知らねばならぬ。朝鮮が我が國に服屬して後は、朝鮮・支那の語が入つて來、我が古語は或は廢れ、或は意義が變化して國語に大變動があつた。次いで佛教が渡來して梵語が輸入せられ、それから禪宗が渡來して宋・元の語が入つて來、近世に西洋と交際するに及んで蕃語が入つて來てゐる。かくして我が國語は屢々變遷してゐるから、それぞれの時代を知らねばならぬ。後世の語義を以て古を推す事は危險である。次に日本・支那・印度の聲音の事、言と詞の區別(言は語根の類を推し、その上中下に加はる接辭の類を詞と云つてゐる)、國語と漢字の關係等について記してゐる。又「和語を解くには謎語を解くが如し」と云ふ說(貝原益軒の「日本釋名」)を評して中略・下略と云ふことを說いてゐるが、上古の言は、或る語の音を省略して出來たのではなく、本來簡單だつたのである。又轉語・反語等の說も首肯し難いものがあると記してゐる。

【價値】本書は、著者が不遇の地位にある時代に、參考の書にも不便を感じつつ著はしたもので、誤謬や不備は必ずしも少くない。又假名遣等も一定してゐない。が、その語源研究に對する意見は、大體から觀て甚だ卓拔で、國語研究史上の名著として推賞すべきものである。卽ち著者は「和句解」「日本釋名」(各別項)等に於ける常識的判斷を廢して、歷史考察が大切なる事を說き、又國語を解くのに飽くまで國語を主とし、本來の國語と外來語を區別してゐる。これを要するに語源研究の方法は益軒が初めて組織したが(勿論、それは白石の方法とは異る點が多いが)、白石は言語の本質に基づく一層高い學問的見地からこれを批評し修正したものである。

【參考】言語學者としての新井白石　上田萬年(國語のため)　〔龜田〕

東涯　とうがい　儒者　【姓名】伊藤長胤。通稱


伊藤東涯遺筆蹟（先儒遺墨帖）

とある。「源氏物語」(初音)に、男踏歌の事を述べて、「萬春樂御口ずさびに宣ひ」と見え、且つ「壽詞のみだりがはしき」とあるのも、踏歌の各句の終りに附する祝詞の事であり、「河海抄」や「花鳥餘情」等に記せる如く、踏歌の歌はすべて漢音で棒讀に歌つたものである。「西宮記」にも、男踏歌の儀式を記して萬春樂を奏する由を述べてゐるが、この句は萬歲樂の變化したものであらう。「樂道類集」に「西宮記」の文を載せて說明して曰く、「今案、萬春樂ハスベテ八句ノ詩ナリ、ソレヲ漢音ニウタヒテ、句ゴトノアヒニ萬春樂ト唱フル也、踏歌ノ舞人ノ立サマニ云事ナリ」とある如くである。

原藏【別號】憶憶齋。私諡して紹述先生といふ。【生歿】寬文十年四月二十八日京都に生

れ、元文元年(一三九六)七月十七日歿す。享年六十七【閲歴】仁齋(別項)の長子である。經術に深く家學を繼承し、荻生徂徠と東西に相對峙して門戸を張つてゐた。但しその本領は經學に在つて詩文はその緒餘であるから、詩文の點から觀れば、堀河派(漢學參照)は到底護園派の敵ではなかつた。【著書】用字格四卷○操觚字訣十卷○紹述先生文集十二卷○紹述先生詩集十卷。

【批評】その文章は、仁齋に比すれば疵は少いけれど氣焰が乏しい。「拙堂文話」にその文を評して、「仁齋の文多くは語を成さず。然れども氣魄光燄あり。讀者をして倦まざらしむ。東涯の文は疵少し。然れども氣燄及ばず。これを讀めば臥せんことを思ふ。」とある。詩も誦するに足るものは少い。【佐久】

東海一漚集(とうかいいちおうしふ) 詩文集 五卷

【著者】中巖圓月【名義】著者自ら命名したもので、一代の作業は、畢竟東海の一浮漚であるといふ意であらう。【成立・刊行】本書は著者の寂後、三百餘年の間、京都金地院・妙喜庵及び嵯峨の直指庵等に散在してゐたのである。著者の法孫播磨明石大藏院主大解宗脫はその散佚を恐れ、約三十年を費してこの集を編成した。著者一代製作の全部ではないが、詩文集として殆ど完備したものである。こゝに初めてその版行を企て、廣く世に流布せんとしたが、そのこと未だ全く成らずして、宗脫は俄かに寂した。遺言に依つて臨川寺住持桂洲道倫が、この集の校訂に任じたもので、卷末に明和元年道倫の跋がある。【解說】第一卷は古詩・五言律詩・七言律詩・五言絕句・六言絕句・七言絕句・賛等を收め、第二卷は疏・說・上梁文・銘等。第三卷は表・書・記・論・雜文・祭文等を收め、第四卷は中正子十篇、自跋を收め、僊笠仙偈一篇を附收し、第五卷は自歷譜を收め、輝東陽偈・宗鏡偈・玄理偈等を附收してある。中正子十篇は、自歷譜によれば、建武元年の作で、自跋はそれより十年の後、曆應三年春、著者これを再讀して附したものである。「予生二亂世一、無レ有二所以一、偏以二翰墨一遊戲、餘波及二二三子講明一」と云つてゐる。即ち亂世にあつて、文筆を弄する者が弟子のためにその所懷を披瀝したものだと云ふのである。先づ外篇と內篇とに分れ、外篇は、叙篇・仁義篇・方圓篇・經權篇・革解篇・治歷篇に分れ、內篇は、性情篇・死生篇・戒定慧篇・問禪篇に分れてゐる。自跋には、「此書之作、以出二乎一時之感激一爾」と云つてゐるが、實は著者の識見を發表してゐるものである。中正子とは、自ら中正叟と號したのに依つたのであらう。竺仙梵僊の「讀中正子」にも、その思想の廣大なるを讃嘆してゐる。次に自歷譜は、圓月自ら經歷を記述したものであるが、貞治六年二月に至つて筆を擱いてゐる。それより以後、示寂に至るまでの歷譜は弟子建幢の筆に成る。なほこの集の末に、「東海一漚別集」一卷、「東海一漚餘滴」一卷を附收してゐる。蒼溟元方は、その序に於て本集を評して「其體製氣象、高古源遠」と云つてゐる。【鷲尾】

東海瑤華集(とうかいやうくわしふ) 詩文集 七冊

【著者】惟肖得巖【名義】日本の瓊華の義である。元の月江印の「月江錄」に、明極楚俊を悼む詩句に、耕開東海種瑤華とある。【解說】一二等の順次の標目なく、法語二冊、拈香・小佛事一冊、賛及び表一冊、序一冊、記及び道號頌一冊、說及び銘一冊である。法語は栖賢寺・眞如寺・萬壽寺・天龍寺・南禪寺の住山法語及び年忌の垂語等三十餘篇。拈香は、年忌・逆修・入牌等の語六十餘篇。小佛事は、掩土・奠湯・奠茶・鎖龕・起骨・擧火等の語十餘篇。賛は佛祖・道賢・三教合一面圖及び自賛等百餘篇。祭文は四篇。表は奉大明皇帝表一篇。序は詩序等五十餘篇。記は片岡達磨寺記等十餘篇。道號頌は六十餘首。說は字說三十餘篇。銘は鐘銘等十餘篇である。【鷲尾】

東海散士(とうかいさんし) 小說家・政治家【本名】柴四朗【生歿】嘉永五年、金澤に生れ、大正十一年九月二十五日歿す。享年七十一。

【閲歴】初め上京して大學南校に入り、英語を修めた後、アメリカに留學、費府商業學校で經濟學を專攻した。歸朝するに及び、明治十八年十月、「佳人之奇遇」(別項)を公にし、一代に喧傳された。翌年、時の農商務大臣谷干城に從つて歐洲に遊んだ。

東海散士

同二十年歸朝、次いで條約改正問題沸騰の際に日本倶樂部と稱する非政社團體を組織し、條約改正中止運動に從事した。後、衆議院議員となり、大隈內閣の時には、參政官の一椅子を占めた。

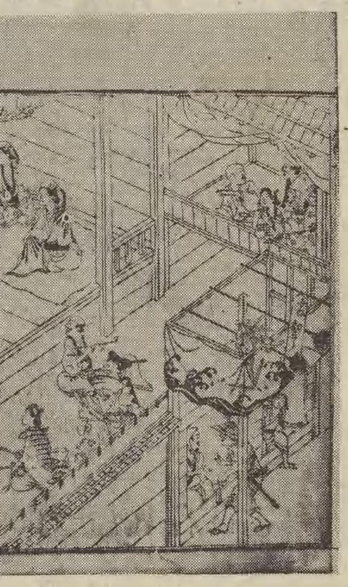
【著書】有名な「佳人之奇遇」の外に、「東洋之佳人」「埃及史」などがある。【高須】

東海談(とうかいだん) 隨筆 二卷【著者】篠崎維章【刊行】寛政元年【解說】博覽多讀を以て聞えた著者の隨筆で、字義・訓法・古語・古史・制度等に關する考說が多い。上編に北條時宗の書翰、紀有常の在世、としだま、蘇武屋敷、神祇官の所在地、玄關、肴、金史別本、な…その用法、及第の禮、かなぎ、吉野、水星、一筆致啓上候、好の字、あか(水)、なれ(川)、文穆公の詩等。下編に二位尼、朱舜水、云々の字の用法、日本心、善人、かたをなみの歌、赤石、たふさき、なよし、法皇號、論語の註本、稱唯、大扶桑、源氏物語の辨、昔の千菓子、上下賀茂社、なるべしと云ふ書、納采に書く文字、かずのこの正字、本田善光、足利學校、角田川等、各數十項を收む。「南畝叢書」に入れて上木されてゐる。本書に大田覃の序がある。

【著者小傳】篠崎維章は平氏。字は子文、號は東海、通稱金吾と云ひ、江戸の人で、儒學を林祭酒・伊藤東涯等に學んだ。初め上野國小幡侯に師となり、後退いて府下に帷を垂れて教授した。漢學の外に國學にも通じた。元文五年(一七四〇)七月一日歿。享年五十四。「和學辨」「滄溟尺牘」等の著がある。【和田】

東海道名所記(とうかいだうめいしよき) 名所記 六卷六冊【作者】淺井了意【成立】卷五、坂の下より土山までの條に、「九年以前庚寅のとし」と云ふ詞がある。庚寅は慶安三年の干支であるから、萬治元年に成つたものと推定される。【諸本】流布本は一版だけで、初版の刊年は不明であるが、恐らく著作と同時、萬治初年の刊行と思はれる。同版で貞享五年堺町通服部九兵衞梓行の奥附あるものは、二版或は三版であらう。溫知叢書第一・日本古典全集・滑稽全集第一所收。

【內容】樂阿彌といふ道心者が、四國遍路から伊勢熊野を巡覽して、熊野より海路を經て江戸に來り、鐵炮洲に上陸し、それより大略江戸の名所を見物して京に上り、黒谷に住まんと志して芝口まで來た時に、一人の青年に出會した。これを伴侶として、二人が東海道の道々狂歌俳句を口吟みつつ、詼諧に打興じて上京する紀行に趣向を借りた名所記である。卷一は江戸より大磯まで、卷二は小田原より江尻まで、卷三は府中より吉田まで、卷四は御油より庄野まで、卷五は龜山より山科まで、卷六は山科より京を廻り、宇治に到つて止む。この間五十三驛の一驛ごとに、次の驛間の里數を擧げ、橋あればその長短を記し、また神社・佛閣・名所・舊蹟・驛路の狀況、風俗・人情・産物に至るまで洩すところなく記載してある。【批評】構想は烏丸光廣の「竹齋」(別項)に出たものと思はれる。文章は流暢であつて輕快、社寺の緣起、故事由來



東海道

まれり、湯本の地藏は海道の右にあり、繼恩寺といふ寺有、すぐ澁澤茶屋あり、大澤畑、樂阿彌申すやう、畑村ははこねたうげの坂口なり、峠までは一里なれども、難所なれば草臥る也、茶やに立より、ゆるりとくつろぎて、上るべしといふて家につれて立よる、茶屋に女あり、茶をうしろむきてたて侍り、おすがたをみれば、如意輪觀は明曆四年で、この書の成つた萬治元年と同年であるから、兩者の間に直接の影響はない筈である。本書及び「江戸名所記」等の名著が出たのは、自らかゝる名所記の出づべき機運があつたのであらう。更に一九の「道中膝栗毛」(別項)は、構想を本書に得て、滑稽化したものである。(名所記參照)

【參考】古版地誌解題 和田萬吉 【水谷】

東海道四谷怪談(とうかいだうよつやくわいだん) 脚本 五幕十一場 世話物【作者】四代鶴屋南北【名稱】四谷のお岩稻荷に搦む怪談といふ意味の名題だが、一番目が忠臣藏である所から、東海道の四ツ谷宿に託した。「いろは假名四谷怪談」は、書卸名題でない。【通稱】「お岩稻荷」「四谷怪談」【別名題】「於岩稻荷驗玉櫛」「形見草四谷怪談」「當三升四谷聞書」。三娘お岩が、嫉妬のために身を果し、その怨靈が夫に仇をしたといふ巷說が、當時喧傳されたのを脚色したもの。その時の一番目に因んで世界を忠臣藏に借り、その緣から直助權兵衞を繼ぎ合せ、小幡小平次の筋を取込んで、結構は大體を自作の「謎帶一寸德兵衞」(別項)に據つた。その他、「法懸松成田利劍」「艷紅葉汗顏見勢」等、自作の怪談劇の一部も應用してある。

【梗概】「序幕」(淺草觀音額堂)高の家臣伊東喜兵衞は孫娘お梅、乳母お槇を連れて參詣。お梅は民谷伊右衞門へ戀慕。非人となつて樣子を窺ふ義士の奥田庄三郎が、廻文狀を喜兵衞に見出されるのを同志の佐藤與茂七が取返す。伊右衞門は舅四谷左門に女房お岩を返すやう賴むが左門は諾かぬ。藥賣り直助は楊枝

庵及び嵯峨の直指庵等に散在してゐたのである。著者の法孫播磨明石大藏院主大解宗脱はその散佚を恐れ、約三十年を費してこの集を編成した。著者一代製作の全部ではないが、詩文集として殆ど完備したものである。こゝに初めてその版行を企て、廣く世に流布せんとしたが、そのこと未だ全く成らずして、宗脱は俄かに寂した。遺言に依つて臨川寺住持桂洲道倫が、この集の校訂に任じたもので、卷末に明和元年道倫の跋がある。【解説】第一卷は古詩・五言律詩・七言律詩・五言絶句・六言絶句・七言絶句・賛等を收め、第二卷は疏・説・上梁文・銘等。第三卷は表・書・記・論・雜文・

後、示寂に至るまでの歴譜は弟子建幢の筆に成る。なほこの集の末に、「東海一漚別集」一卷、「東海一漚餘滴」一卷を附收してゐる。蒼溟元方は、その序に於て本集を評して「其體製氣象、高古源遠」と云つてゐる。〔鷲尾〕

東海璚華集 とうかいけいくわしふ 詩文集 七冊

寫【著者】惟肖得巖【名義】日本の瓊華の義である。元の月江印の「月江錄」に、明極楚俊を悼む詩句に、耕開東海種璚華とある。【解説】一二等の順次の標目なく、法語二冊、拈香・小佛事一冊、賛及び表一冊、序一冊、記及び道號頌一冊、説及び銘一冊である。法語は栖賢寺・眞如寺・萬壽寺・天龍寺・南禪寺の住山法

同二十年歸

朝、次いで條約改正問題沸騰の際に日本倶樂部と稱する非政社團體を組織し、條約改正中止運動に從事した。後、衆議院議員となり、大隈内閣の時には、參政官の一椅子を占めた。【著書】有名な「佳人之奇遇」の外に、「東洋之佳人」「埃及史」などがある。〔高須〕

東海談 とうかいだん 隨筆 二卷【著者】篠崎維章【刊行】寛政元年【解説】博覽多讀を以て聞えた著者の隨筆で、字義・訓法・古語・古史・制度等に關する考説が多い。上編に北條時宗の書翰、紀有常の在世、としだま、蘇武屋敷、神祇官の所在地、玄關、肴、金史別本、

の「より土山までの條に「九年以前庚寅のとし」と云ふ詞がある。庚寅は慶安三年の干支であるから、萬治元年に成つたものと推定される。【諸本】流布本は一版だけで、初版の刊年は不明であるが、恐らく著作と同時、萬治初年の刊行と思はれる。同版で貞享五年堺町通服部九兵衛梓行の奥附あるものは、二版或は三版であらう。溫知叢書第一・日本古典全集・滑稽全集第一所收。

【内容】樂阿彌といふ道心者が、四國遍路から伊勢熊野を巡覽して、熊野より海路を經て江戸に來り、鐵炮洲に上陸し、それより大略江戸の名所を見物して京に上り、黑谷に住まんと志して芝口まで來た時に、一人の青年に出

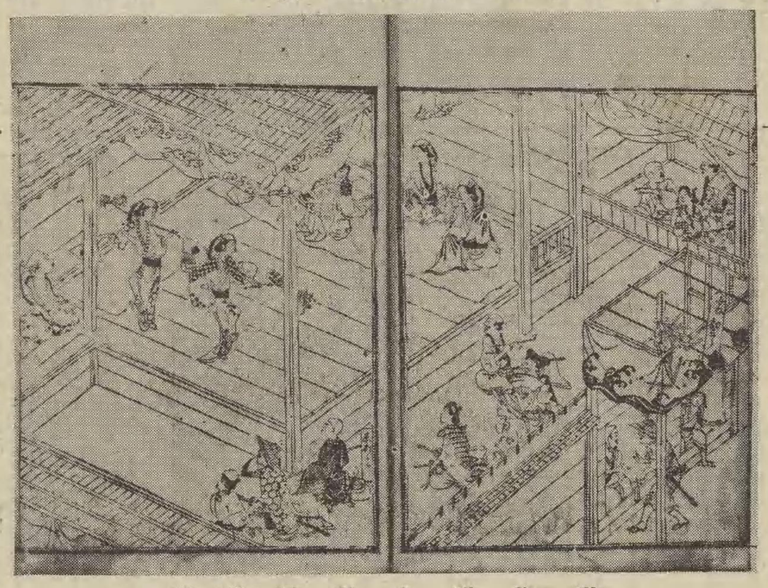
會した。これを伴侶として、二人が東海道の道々狂歌俳句を口吟(くちすさ)みつつ、詼諧に打興じて上京する紀行に趣向を借りた名所記である。卷一は江戸より大磯まで、卷二は小田原より江尻まで、卷三は府中より吉田まで、卷四は御油より庄野まで、卷五は龜山より山科まで、卷六は山科より京を廻り、宇治に到つて止む。この間五十三驛の一驛ごとに、次の驛間の里數を擧げ、橋あればその長短を記し、また神社・佛閣・名所・舊蹟・驛路の狀況、風俗・人情・産物に至るまで洩すところなく記載してある。【批評】構想は烏丸光廣の「竹齋」(別項)に出たものと思はれる。文章は流暢であつて輕快、社寺の緣起、故事由來を説くに博引旁證して作者の學識を示し、芝居・遊女町等盛り場の狀景を寫す筆致に生氣の潑剌を見せてゐる。而も滑稽の間に淡い教訓の意を寓するなど、用意の周到、非凡な才の現はれがある。

小田原より箱根へ四里

右の方宿の入口に、小田原陣の時の戰場あり、町の内に筋違橋あり、町はづれに地藏堂あり。

かさまつり、左に松山ありその上に杉山あり、石垣山といふ、氏直をせむる時、太閤秀吉むかひぢんをとり給ひし所なり、名物には、小田原石、水道のために江戸に出しあきなふ、小田原足駄、けやきのまる木履(ぼくり)なり、夢窓枕、又宿の右の方に外郎(うぬぐう)あり、東國海道第一の名物也。

湯本の橋より右の方川邊をゆけば、半里あまりに、湯の澤といふ在所あり、溫泉あり、人おほくあつまれり、湯本の地藏は海道の右にあり、總恩寺といふ寺有、すぐ藁澤茶屋あり、大澤畑、樂阿彌申すやう、畑村ははこねたうげの坂口なり、峠までは一里なれども、難所なれば草臥る也、茶やに立より、ゆるりとくつろぎて、上るべしといふて家につれて立よる、茶屋に女あり、茶をうしろむきてたて侍り、おすがたをみれば、如意輪觀音ほどうつくしうおはしますが、うしろむき給ふこそ心得ねといへば、樂阿彌がいふやう、これもいはれあり、三十三身の外に、むかしより尻くらひ觀音とて、これ有といふ。



東海道名所記(挿畫)

概ねこの類で、趣味の紀行文として、また風俗史料として重んぜられてゐる。【影響】「京童」(別項)と類した所もあるが、「京童」の刊行は明暦四年で、この書の成つた萬治元年と同年であるから、兩者の間に直接の影響はない筈である。本書及び「江戸名所記」等の名著が出たのは、自らかゝる名所記の出づべき機運があつたのであらう。更に一九の「道中膝栗毛」(別項)は、構想を本書に得て、滑稽化したものである。(名所記參照)

【參考】古版地誌解題 和田萬吉 〔水谷〕

東海道四谷怪談 とうかいだうよつやくわいだん 脚本 五幕十一場 世話物【作者】四代鶴屋南北【名稱】四谷のお岩稻荷に搦む怪談といふ意味の名題だが、一番目が忠臣藏である所から、東海道の四ツ谷宿に託した。「いろは假名四谷怪談」は、書卸名題でない。【通稱】「お岩稻荷」「四谷怪談」【別名題】「於岩稻荷驗玉櫛(おいはいなりしやうのたまぐし)」「形見草四谷怪談」「當三升四谷聞書(まねてみますよつやのきゝがき)」。三代菊五郎が大阪へ行つて上演した時には、全篇京阪向きに改竄された。これが「いろは假名四谷怪談」である。【興行】文政八年七月二十七日初日、江戸中村座、初日・後日の二日に分けて上演。

【役割】民谷伊右衛門(七代市川團十郎)、小汐田又之丞(三枡源之助)、伊東喜兵衛・伊右衛門母お熊(市川宗三郎)、按摩宅悦・近藤源四郎(大谷門藏)、奥田庄三郎(尾上松助)、お弓娘お梅(岩井春次)、佛孫兵衛(澤村しやぼく)、小平女房お花(尾上菊次郎)、喜兵衛娘お弓(吾妻藤藏)、乳母お槇(市川おの江)、直助權兵衛(五代松本幸四郎)、與茂七女房お袖(岩井粂三郎)、伊右衛門女房お岩・中間小佛小平・佐藤與茂七(三代尾上菊五郎)。

【諸本】書卸臺本は所在未詳。大南北全集第十二卷・歌舞伎脚本集(日本名著全集)・日本戲曲全集第十一卷等所收。【題材】寛文の頃、四谷左門町のお先手組下同心田宮又左衛門の娘お岩が、嫉妬のために身を果し、その怨靈が夫に仇をしたといふ巷説が、當時喧傳されたのを脚色したもの。その時の一番目に因んで世界を忠臣藏に借り、その緣から直助權兵衛を繼ぎ合せ、小幡小平次の筋を取込んで、結構は大體を自作の「誅帶一寸德兵衛」(別項)に據つた。その他、「法懸松成田利劍(けさかけまつなりたのりけん)」「慙紅葉汗顏見勢(あぜのかほみせ)」等、自作の怪談劇の一部も應用してある。

【梗概】〔序幕〕(淺草觀音額堂)高の家臣伊東喜兵衛は孫娘お梅、乳母お槇を連れて參詣。お梅は民谷伊右衛門へ戀慕。非人となつて樣子を窺ふ義士の奥田庄三郎が、廻文狀を喜兵衛に見出されるのを同志の佐藤與茂七が取返す。伊右衛門は舅四谷左門に女房お岩を返すやう賴むが左門は諾かぬ。藥賣り直助は楊枝店のお袖を口説く。(奥山按摩宿)按摩宅悦は灸點と見せて地獄宿をして居り、お袖は爰に賤しい勤めをしてゐる。與茂七は遊びに來て女房お袖に奇遇、反對に直助は戀も叶はず突き出され、與茂七に恨みを含む。(淺草田圃)庄三郎・與茂七は衣類を着替へて別れる。伊右衛門は左門が我が惡事を覺つたので斬りつける。(裏手)直助は庄三郎を與茂七と誤つて殺し、伊右衛門は左門を殺す。お岩・お袖の姉妹が來かゝつて嘆く。二人の惡漢は仇討を餌にお岩を伊右衛門の許へ歸らせ、お袖を直助と表ばかりの夫婦にする。〔二幕〕(雜司ケ谷四谷町)お岩は子を産んだが、伊右衛門は冷酷。小者小平は舊主小汐田へ貢がうと民谷の奇藥ソウキセイを盜んだが、秋山長兵衛・關口官藏に捕へられ、散々苛(さい)なまれて戸棚へ打込まれる。お槇は産婦の見舞に、伊右衛門は朋友兩人と伊東へ禮に行く。お岩は伊東から貰つた

藥を服むと急に發熱、手傳ひの宅悅が狼狽。(伊東屋敷)喜兵衞と娘お弓は、お梅の戀を語つて伊右衞門に賴む。伊右衞門は高家へ有りつく條件で承諾。(伊右衞門浪宅)お岩は毒藥のために相好變る。伊右衞門は歸つて驚いたが、わざと虐待して出る。宅悅にお岩を連れ出させんとした事から、お岩は伊東の惡事、夫の不實を聞いて憤死する。伊右衞門は小平を斬つて二人を不義の體になし、戸板へ括りつけて川へ流す。お梅が嫁入つて來たがお岩・小平の怨靈のため、伊右衞門はお梅・喜兵衞を殺す。〔三幕〕(砂村隱亡堀)伊右衞門は非人と零落したお弓を川へ突き落す。鰻搔き權兵衞となつた直助と伊右衞門の再會。母お熊は伊右衞門に高の墨附を渡したが秋山長兵衞に取られる。お岩小平を打ちつけた戸板が流れ寄つて伊右衞門への恨み。與茂七・權兵衞と三人のだんまり。〔四幕〕(深川三角屋敷)お袖は假の女房であつたが、宅悅からお岩の死んだ事を聞き、どうでも助太刀してもらひたさから權兵衞に肌をゆるす。跡へ與茂七が來て權兵衞との達引。お袖は身の因果を諦らめて双方へ相手を討たす事を約す。(寺町孫兵衞內)小汐田又之丞は、躄の病に惱み、小平の靈がいろいろと貢ぐ。繼母お熊が小平女房お花と一子次郎吉を苛なむ。又之丞が盜人の汚名に朋友赤坂傳藏の怒り。小平の靈が獻じたソウキセイで、又之丞の痼疾は癒る。(三角屋敷)與茂七・權兵衞は互に相手を斬らうとしてお袖を斬る。お袖が遺言に權兵衞は實兄と判り、改悟して切腹。與茂七は廻文狀を取戻す。〔大詰〕(夢)美しい賤女姿のお岩と殿樣風の伊右衞門が濡事。犬を曳いて供する長兵衞。お岩は亡靈となり伊右衞門を惱ます。(蛇山庵室)伊右衞門は夢覺めて狂ふ。お岩の亡靈流れ、灌頂より出て伊右衞門に仇する。實父近藤源四郎も母お熊も亡靈のために最期。小林平內を通じて高家に有りつかんとし、長兵衞から取戻した墨附も亡靈のために破られ、長兵衞も縊り殺される。與茂七來つて伊右衞門を討つ。

東海道四谷怪談(錦繪)

【解說】筋は「謎帶一寸德兵衞」から借りたのであるが、戸板返しや蛇山の亡靈の趣向に技巧を盡してゐる。直助・お袖の因果譚は怪談を離れて南北の長所が見られる。世人に歡迎されたのは亡靈の怪奇とその徑路の慘酷さであるが、戲曲としては直助・お袖・與茂七の三角關係、三角屋敷の筋は優れた幕である。怪談劇として最高位に置かれてゐるのは、決して亡靈の技巧からばかりではあるまい。【附記】伊右衞門夢の場は、最初は長唄の獨吟であつたが、後には淸元節「菊嬉閨睦言」、富本節「二世の緣願色糸」、常磐津節「萌思螢兼言」等を使つて準舞踊劇を見せるやうになつた。蛇山庵室の場は、初演は義士討入へ連絡のため雪降りの場面であつたが、三度目から夏の世界にして、幽靈は盆提灯から出す事にした。【參考】大南北全集第十二卷解說 渥美淸太郎 ○歌舞伎脚本集解說 守隨憲治 ○尾上菊五郎自傳 五代尾上菊五郎 〔渥美〕

東涯漫筆 とうがい まんぴつ　隨筆　二卷　【著者】伊藤長胤【解說】伊藤東涯の漢文の隨筆で、四書・六經・子史・雜錄中の語句について私見を註し、主として宋儒の所說を辨ずるところが多い。上卷には八十餘項、下卷には六十餘項を收む。著者の儒學史上の位地を見るに足る。寬政十二年男善韶(東所)の序がある。板倉勝明(安中侯)は、これを「甘雨亭叢書」の中に收めて上梓した。〔和田〕

東海遊子吟 とうかい いうしぎん　詩集　【著者】土井晩翠【刊行】明治三十九年六月、大日本圖書會社【解說】第三詩集で二十九篇、外に附錄「日本海々戰歌」の一節「光榮の追想」を收む。この集に於て晩翠は、第一集に仄めき第二集に表はれた缺陷全部を詩篇の全容に漲らせて詩的自裁を遂げてゐる。その用語は表面壯大と豪快を裝つてゐるが、內部は何等の感激を伴はぬ。少くとも實感に卽した必然性を失し去つてゐる。(土井晩翠參照)〔日夏〕

唐樂 たうがく　音樂　【解說】雅樂の一部門。元來唐から傳へられた樂の意であるが、これに二樣の意義がある。一は唐から傳へられた樂を指すもの、二は平安朝初めの樂制改革後、右方の樂に相對して、別種の樂舞を作り、これを總稱して唐樂といつたもので、一にこれを左方の樂ともいふ。その中には支那から傳來した曲、印度から傳來した曲、西域から傳はつた曲、及び我が國で新作した曲を含んでゐる。(雅樂參照)〔田邊〕

東華集 とうくわしふ　俳諧集　三册　【編者】各務支考【名義】支考が京より東に在る時は號を東華坊と云つたのに因んでの名稱(西華集參照)。【刊行】元祿十三年九月【諸本】支考全集(俳諧文庫)所收【內容】上卷には表合の式六ケ條、山城・近江・西美濃・尾張・東美濃・伊勢の諸俳人と附けた表合(八句)四十二、發句百句を揭げ、それ〴〵發句・脇・第三の意味附方を說き、中卷には洛陽・膳所・彥根・大垣・竹が鼻・高須・神海・黑野・山縣・洲原・上有知・關・加治田・伊源・深田各地の發句四百九十二を揭げ、下卷には名古屋・鳴海・犬山・雲津・山田各地の發句二百七十五を收め、なほ餘興として發句十三を註してゐる。【價値】東國に於ける美濃派(別項)の勢力を見るに便利である。又表合の式・實例を知るにも調法である。〔萩原〕

東花集 とうくわしふ　河東節詞曲集　袖珍本五册【名稱】千種庵諸持の序に、「東花集と名づけられしは、この道のすき人何がしぬしの思ひはかりなりけり、蒲田葛飾の梅にもおくれず、上野隅田川の櫻にもおとらで、大江戸の花とめではやさんもの、げに此一ふしをおきてまた何かあらん」とある。【刊行】天保四年【解說】河東節百種を祝詞・飾聲・思懷・追福・記行・物語の六部に分類して集成した携帶用に便利な小本で、時代が新しいだけに曲數も多い。全部細字七行に新刻したものである。〔一之卷目錄〕(祝詞之部)三番叟・京わらべ・四季の蓬萊・ほうらい・貝づくし・鑓おどり・小唄鞨鼓・しかた松・源氏十二段・松の內・松の後・禿萬歲・酒中花・千とせの枝・竹馬の鞭・いの字扇・あら世帶・雛の出遣ひ・四季の屛風・御田・ひなの磯・花のしおり・七くさ・汐くみ・住吉踊・四季の探題・傀儡師・神樂獅子・神樂獅子下の卷〔二之卷目錄〕(飾聲之部)元服五郎・傾城請狀・天皇忍び・おせん物狂ひ・とらが文・灸すえ・里神樂・水上蝶・帶引・駕ぶとん・かし小袖・扇八景・ぬれゆかた・相の山・夜のあみ笠・家ざくら・廓の花道・江戸ざくら・戀櫻反魂香・花ある里・常陸帶・まがきの錦・橋辨慶・公家踊り〔三之卷目錄〕(思懷之部)きぬた・かな輪・口舌の雞・黑かみ・常盤の聲・唐團鬪・粟のだん・禪師坊說法・三輪の山・同下の卷・日蓮山入(追福之部)花がたみ・ひとせ川・水調子・夜のにしき・ぬれあふぎ・廿日の月・うかむ瀨・ますみ櫻・露の二葉・秋のぬるで〔四之卷目錄〕(記行之部)淸貫道行・放下僧道行序・放下僧道行・わにの段・しのだ妻・釣狐の段・江口の道行・伊達姬道行・はしら曆・草まくら・角田川・黑小袖・大和介・虎少將・鳴神・景淸〔五之卷目錄〕(物語之部)祐成相撲・名劒揃・淸見八景・小袖模樣・溫泉揃・江のしま・幕紋盡・道成寺・金山物語・傳に本朝本書事と題し、國史・律令等の書名を揭げ、可ニ覺悟一條々と題し、諸種の故實を記し、又讀樣の事と題し、讀み難き文字を抽出し假名を附けてある。〔石村〕

盜火說話 たうくわ せつわ　「人文神話」を見よ。

東金茂右衞門 たうがね もゑもん　「全盛虎女石」を見よ。

桃花流水 たうくわ りうすゐ　讀本　五卷　【作者】山東京山【畫工】歌川豐廣【角書】鷲談傳奇【刊行】文化六年【諸本】京山全集(續帝國文庫)所收。

【梗概】松江の國主藤原秋年の賀筵に、星合梶之助の祝の歌の不祥なるを難じた山中左衞門は寶刀鳩丸を賜はり、梶之助は不興を蒙つたが、その刀を帶びた伜三之助を鷲に攫はれ、計らずも鳩丸を得た梶之助の奸策によつて、左衞門は寃罪に切腹し、妻柏木、娘小君は追放のてゐるやうに、伜三之助が鷲に攫はれて本題に入る。卽ち三之助は嘗て左衞門が助命した朶六に救はれ、娘小君は朶六の妻尾峯に救はれ、而も朶六夫婦が山中家の忠臣春瀨由良之進の一族であるといふ不思議な因緣、敵梶之助の舊惡が露顯し、三之助主從の相會した地に來て討たれるといふ因果の道を取る。勸善懲惡の作意に外ならない。〔笹野〕

道灌 だうくわん　歌人　【姓名】源姓。太田持資。幼名資長(資永とも)、字は源六郎、小字を鶴千代。剃髮後道灌(道觀とも)、備中入道とも號す。【生歿】永享四年に生れ、文明十八年(二一四六)歿す。享年五十五。【法名】靜勝院春苑香月、別に洞昌院香月道恩【墓所】相模國糟屋洞昌院にあると傳へらる。【閱歷】道灌の傳へられる。當時、父子は持朝の子顯房に仕へてゐたが、足利成氏の嬖臣が橫暴を極め、その形勢甚だよからざるものがあつた。持資享德二年從五位上に敍せらる。同三年成氏が上杉憲忠を殺すに及び、上杉持朝の軍勢と協力して成氏の軍を破つた。併し主顯房が翌年戰死するに及び、資淸も剃髮して道眞(道信とも)と號し、持朝の命を奉じて河越に移り、岩槻城を築く。こゝに持資は、二十四歲で父の家督を繼ぎ得た譯で、正五位下備中守となり、左衞門大夫を號したと云ふ。時に主家たる扇谷家は、持朝四子定正(定政とも)が立つてゐたのであるが、上杉四老臣のうち、殊に道眞・持資の執政宜しきを得、衆望を一家に蒐め、山內家を壓迫するかの觀すらあつた。例へば康正二年、持資が千代田の地を卜して江戸城

源頼政—仲綱—廣綱—隆綱—國綱—

み。與茂七・權兵衞と三人のだんまり。〔四幕〕〔深川三角屋敷〕お袖は假の女房であつたが、宅悅からお岩の死んだ事を聞き、どうでも助太刀してもらひたさから權兵衞に肌をゆるす。跡へ與茂七が來て權兵衞との達引。お袖は身の因果を諦らめて双方へ相手を討たす事を約す。〔寺町孫兵衞內〕小汐田又之丞は、躄の病に惱み、小平の靈がいろいろと貢ぐ。繼母お熊が小平女房お花と一子次郎吉を苛なむ。又之丞が盜人の汚名に朋友赤坂傳藏の怒り。小平の靈が獻じたソウキセイで、又之丞の痼疾は癒る。〔三角屋敷〕與茂七・權兵衞は互に相手を斬らうとしてお袖を斬る。お袖が遺言に權兵

【解說】筋は「謎帶一寸德兵衞」から借りたのであるが、戸板返しや蛇山の亡靈の趣向に技巧を盡してゐる。直助・お袖の因果譚は怪談を離れて南北の長所が見られる。世人に歡迎されたのは亡靈の怪奇とその徑路の慘酷さであるが、戲曲としては直助・お袖・與茂七の三角關係、三角屋敷の筋は優れた幕である。怪談劇として最高位に置かれてゐるのは、決して亡靈の技巧からばかりではあるまい。【附記】伊右衞門夢の場は、最初は長唄の獨吟であつたが、後には淸元節「菊嬉閨睦言」、富本節「二世の緣願色糸」、常磐津節「萌思螢兼言」

む。この集に於て晩翠は、第一集に仄めき第二集に表はれた缺陷全部を詩篇の全容に漲らせて詩的自裁を遂げてゐる。その用語は表面壯大と豪快を裝つてゐるが、內部は何等の感激を伴はぬ。少くとも實感に卽した必然性を失し去つてゐる。（土井晩翠參照）〔日夏〕

唐樂（たうがく）音樂【解說】雅樂の一部門。元來唐から傳へられた樂の意であるが、これに二樣の意義がある。一は唐から傳へられた樂を指すもの、二は平安朝初めの樂制改革後、右方の樂に相對して、別種の樂舞を作り、これを總稱して唐樂といつたもので、一にこれを左方の樂ともいふ。その中には支那から傳來した曲、印度から傳來した曲、西域から傳

けられしは、この道のすき人何がしぬしの思ひはかりなりけり、蒲田葛飾の梅にもおくれず、上野隅田川の櫻にもおとらで、大江戸の花とめではやさんもの、げに此一ふしをおきてまた何かあらん」とある。【刊行】天保四年【解說】河東節百種を祝詞・飾聲・思懷・追福・記行・物語の六部に分類して集成した携帶用に便利な小本で、時代が新しいだけに曲數も多い。全部細字七行に新刻したものである。

〔一之卷目錄〕（祝詞之部）三番叟・京わらべ・四季の蓬萊・ほうらい・貝づくし・鑓おどり・小唄鞨鼓・しかた松・源氏十二段・松の內・松の後・禿萬歲・酒中花・千とせの枝・竹馬の鞭・いの字扇・あら世帶・雛の出遣ひ・四季の屛風・御田・ひなの磯・花のしお

り・七くさ・汐くみ・住吉踊・四季の探題・傀儡師・神樂獅子・神樂獅子下の卷〔二之卷目錄〕（飾聲之部）元服五郎・傾城請狀・天皇忍び・おせん物狂ひ・とらが文・灸すえ・里神樂・水上蝶・帶引・駕ぶとん・かし小袖・扇八景・ぬれゆかた・相の山・夜のあみ笠・家ざくら・廓の花道・江戸ざくら・戀櫻反魂香・花ある里・常陸帶・まがきの錦・橋辨慶・公家踊り〔三之卷目錄〕（思懷之部）きぬた・かな輪・口舌の雞・黑かみ・常盤の聲・唐團扇・粟のだん・禪師坊說法・三輪の山・同下の卷・日蓮山入（追福之部）花がたみ・ひとせ川・水調子・夜のにしき・ぬれあふぎ・廿日の月・うかむ瀨・ますみ櫻・露の二葉・秋のぬるで〔四之卷目錄〕（記行之部）淸貫道行・放下僧道行序・放下僧道行・わにの段・しのだ妻・釣狐の段・江口の道行・伊達姬道行・はしら曆・草まくら・角田川・黑小袖・大和介・虎少將・鳴神・景淸〔五之卷目錄〕（物語之部）祐成相撲・名劍揃・淸見八景・小袖模樣・溫泉揃・江のしま・幕紋盡・道成寺・金山物語・傳敎祈。〔藤井〕

桃華蕋葉（たうくわずゐえふ）有職　一卷【著者】一條兼良【成立・由來】奧書に、「文明十二年卯月上旬、爲左大將（冬良）覺悟、任筆所注置也、不可出閫外、深可藏櫃底、莫言之、後成恩寺殿沙彌御判（七十九歲）」とある。【諸本】群書類從卷四百七十一雜部二十六に收めてある。又一本この抄の後に「胡曹抄」（別項）を附け加へたものがある。【解說】一條家の故實・作法・領地等のことを主として書いたもので、當家着用裝束以下事と題し、束帶色目、直衣之事、布袴之事、狩衣直衣事、狩衣事、水干事、衞府具足事、鞍具足事、狩襖事、魚袋・劍色々事、平緒色々事、玉帶色々事、車事、隨身人數事、同裝束事、衞府長事、小隨身事、小雜色事、進禁裏仙洞書狀幷請文事（當家口傳）、私書札禮節事、當家相傳十二合文書事、家門管領寺院事、家領幷敷地等之事等を記し、別に本朝本書事と題し、國史・律令等の書名を揭げ、可覺悟條々と題し、諸種の故實を記し、又讀樣の事と題し、讀み難き文字を抽出し假名を附けてある。〔石村〕

盜火說話（たうくわせつわ）「人文神話」を見よ。

東金茂右衞門（たうがねもゑもん）「全盛虎女石」を見よ。

桃花流水（たうくわりうすゐ）讀本　五卷【作者】山東京山【畫工】歌川豐廣【角書】鷲談傳奇【刊行】文化六年【諸本】京山全集（續帝國文庫）所收。

【梗概】松江の國主藤原秋年の賀筵に、星合梶之助の祝の歌の不祥なるを難じた山中左衞門は寶刀鳩丸を賜はり、梶之助は不興を蒙つたが、その刀を帶びた伜三之助を鷲に攫はれ、計らずも鳩丸を得た梶之助の奸策によつて、左衞門は寃罪に切腹し、妻柏木、娘小君は追放の憂目を見、屢々危難に遭ふが、摩利支天の冥助によつて救はれる。一方三之助は、伊吹山で忠臣春瀨由良之進の義兄柴朶六に助けられ、梶之助に知られて遂に朶六はその毒矢に斃れる。三之助は朶六の血を飮んで剛力無双の精を受け、朶六の妻尾峯と共に三河の宮路山に移り、熱田に出でて、こゝに柏木と小君の行方を尋ねてゐた由良之進に會し、偶々尾峯は小君を救ひ、なほ柏木の漁師に救はれてその家に來り、主從相會するを得たのであつた。かくて主家に對する謀叛が露はれて逐電し、當國岩卷山の盜賊に投じてゐた梶之助を討つて仇を報い、三之助は目出たく歸參し、忠臣として恩賞された。

【解說】三好松洛と竹田小出雲との合作の「花衣いろは緣起」を飜案したもので、題名に桃花流水とあるやうに、文武兼備の山中左衞門の風流が後の禍となるに始まり、角書に示されてゐるやうに、伜三之助が鷲に攫はれて本題に入る。卽ち三之助は嘗て左衞門が助命した朶六に救はれ、娘小君は朶六の妻尾峯に救はれ、而も朶六夫婦が山中家の忠臣春瀨由良之進の一族であるといふ不思議な因緣、敵梶之助の舊惡が露顯し、三之助主從の相會した地に來て討たれるといふ因果の道を取る。勸善懲惡の作意に外ならない。〔笹野〕

道灌（だうくわん）歌人【姓名】源姓。太田持資。幼名資長（資永とも）、字は源六郎、小字を鶴千代。剃髮後道灌（道觀とも）、備中入道とも號す。【生歿】永享四年に生れ、文明十八年（二一四六）歿す。享年五十五。【法名】靜勝院春苑香月、別に洞昌院香月道恩【墓所】相模國糟屋洞昌院にあると傳へらる。【閱歷】道灌の傳

源頼政―仲綱―廣綱―隆綱―國綱―
―資國―資治―資兼―資房―資淸―
―持資（道灌）―資康
―資常（イ資忠）―資家

記は諸書に記載のもの比較的多い方であらうが、確實の資料は乏しい。武人で韻事に優れてゐたと云ふ史實が後世憧憬の的となり、口碑を生む理由となつた所も多いやうである。しかも後世傳記者の多く賴りとする「慕景集」「平安紀行」「わが宿草」等の盡くが假託らしいので、所傳中、確實のものとして信を置き得る點が甚だ尠い。父道眞（資淸）は和歌連歌の才を有してゐた。「新撰菟玖波集」にも二首選入されてゐる。長子持資九歲の年、これを學校に送り十一歲まで歸家せしめなかつたと云ふ（永享記）。持資は關東に於て上杉の一執事程度の武臣の家に生れながら、早く文事的敎養を受け、歌は飛鳥井雅世の添削をうけたといふ。而も天性豪放、屢々父の敎誡を被つたとも傳へられる。當時、父子は持朝の子顯房に仕へてゐたが、足利成氏の嬖臣が橫暴を極め、その形勢甚だよからざるものがあつた。持資享德二年從五位上に敍せらる。同三年成氏が上杉憲忠を殺すに及び、上杉持朝の軍勢と協力して成氏の軍を破つた。併し主顯房が翌年戰死するに及び、資淸も剃髮して道眞（道信とも）と號し、持朝の命を奉じて河越に移り、岩槻城を築く。こゝに持資は、二十四歲で父の家督を繼ぎ得た譯で、正五位下備中守となり、左衞門大夫を號したと云ふ。時に主家たる扇谷家は、持朝四子定正（定政とも）が立つてゐたのであるが、上杉四老臣のうち、殊に道眞・持資の執政宜しきを得、衆望を一家に蒐め、山內家を壓迫するかの觀すらあつた。例へば康正二年、持資が千代田の地を卜して江戸城を築くにあたり、河越岩槻の土民、工を援けて翌四月早くも竣工を見たと云ふ。また城中の館を靜勝軒と稱し、緇衣の徒を招いて詩宴を催したと云ふ（禿尾長柄帚）。なほ城中に文庫を設け、菅公廟を建立したとも云ふ。持資は長祿二年剃髮して道灌と號した。その後文明時代に亙り十數年間は、關東の地、比較的靜穩なる事を得た。道灌上洛して後土御門帝に謁し、將軍義政に見え、種々逸話を遺したのも、その間、卽ち寬正五年（一說同六年）春のことであつた（三十三歲）。叡慮に御答へ申した歌と傳へられるものに、次の如き詠吟がある。「露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原」「わが庵は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」。又宗祇の關東下向も應仁の初頭であつた。應仁三年正月、父道眞の館自得軒で催された所謂「河越千句」には、宗祇のみならず心敬も同座してゐる。文明六年江戸

城に歌合會の催された際には、心敬は招かれてその判者となつてゐる。「靜勝軒記」及び「江亭記」の成つたのは、文明八年道灌四十五歳の年である。而も同五年、駿河出征の後、再び武事多端に向つた。かくて同十八年七月、道灌は定正の糟屋第に招かれ、入浴中をその臣の手により刺殺されたといふ。これは定正が山内顯定の術策に陷り、かく陰謀を廻らしたものだといひ、また道灌の勢力に對する主としての嫉みに依るものだともいふ。父道眞は當時、越生の會下寺に隱栖してゐたのであるが、明應二年(一說元年)、八十三歳で世を終へた。道灌の木像と稱するもの武藏稻付の靜勝寺に傳はつてゐるが、壯年の姿である。その他、芝の青松寺、小日向金剛寺にも傳へられてゐるが、これ等は老年の像であるといふ。

【著書】道灌の著と稱されてゐる諸作の多くが假託であることに渡邊世祐博士の考證がある(史學雜誌、昭和六年一月)。○平安紀行一卷(類從本にある。「太田道灌紀行」と外題されたもの神宮文庫藏、假託)○太田道灌隨筆一卷(別名太田道灌自記)○わが宿草(別項)○つれ〴〵草(靜嘉堂文庫、內閣文庫に寫本存する外、「一家說林」に收載。兼好の「徒然草」に擬して隨筆を試めたと云ふ序文があるけれど、後人の假託らしい)○慕景集二種(別項)○太田道灌詠草一卷(南葵文庫本。「慕景集」に「花月百首」「太田道灌集」の兩部を加へ集成を計つたもの。「道灌集」の奥書には松井幸隆が道灌自筆本を轉寫した旨を述べてゐる)○花月百首一卷(續類從第三九四題名の下に、蓮乘院入道道灌號太田持資との加註があり、更に卷頭に權大納言雅親點とあつて、掛點及び評語が入つてゐる。僻墨四十五點とその計數が最後に出てゐる。奥書は天正十二年日附の藤雅春のものの外、寛政二年のものと享和三年のものの二種が添へてある。この一書が、まづ道灌の歌集中信じ得べき唯一のものであらうか)○軍歌百首一卷(義經百首・衣川百首とも)(戰闘を主題に詠んだ百首歌。神宮文庫本には、元祿癸未の序があつて、並河勘介の軍略上よりの解註がある。僞書か)。

【人物・歌風】諸書齊しく道灌を容貌魁偉、頴悟膽大と評してゐる。木像の相姿はさほどにも見えないが、武人らしい風采を有して居り、膽大であつたことは臆測出來る。而も執事として公平、博愛を以て下民に臨んだことは彼をしてかく有名ならしめ、かゝる情操が韻事と通ひ、或は諸葛孔明の再生と仰がしめ、金澤山に狩して急雨にあひ、笠を借らんとして村女から山吹の花を差出された逸話の如きも、これに因る揑造であらう。歌風は一般時流に添ひ、特に秀逸佳作と見るべきものがない。題材の着眼の妙なるものよりは調子の高い作に、却つてその個性の表出を求め得る。

見るまゝに夕ゐる雲も色々の花にぞ匂ふかつらぎの山

もみぢ葉にいま一入をさしそへて時雨にはるゝ山の端の月

【參考】太田家譜○梅花無盡藏○禿尾長柄帚○村雨稿○大草紙○永享記○野史○續本朝通鑑○太田道灌 櫻井一義 ○太田道灌の紀行文歌集隨筆等に就て 渡邊世祐(史學雜誌四二ノ一) 【齋藤(清)】

東關紀行 とうくわんきかう

紀行文 【作者】未詳。古來作者について諸說がある。岡西惟中は「消閑雜記」に、「賀茂の長明が海道の記、世擧りて長明が作なりとおもふは、いぶかしき事なり。夫木抄のうち、不二の白雲の詠、かれは是數首皆源光行が東行の詠とす。後の歌人考へ見るべし」と言つてゐる(その不二の詠といふのは、「東關紀行」中の歌である)。「扶桑拾葉集」に至つて、「東關紀行」に源光行の子親行の作と明記し、群書類從は大體それに從つて、「海道記」の作者に光行を、「東關紀行」の作者に親行を擬した。併しこの推定も信憑すべきものではない。先づ兩者ともに鴨長明の著にあらざる理由は、長明東下りの年代が「海道記」に見えた貞應二年より十二年前、「東關紀行」に見えた仁治三年より三十一年前で、兩者の一致せざる上に、文章の風格が彼の作と思はれないからである。次に「海道記」を光行の作となす說も同樣に、東國下向の年代の矛盾から肯定することが出來ない(光行・親行の項參照)。それで「海道記」は、無名の佗士の筆のすさびであつて、書中、承久の事變に非業の死を遂げた揩紳に對する同情の筆意の存するところから推すと、作者はかゝる緣邊の人であらうと考へ及ぼされる。次に「東關紀行」についても、「夫木抄」を見ると、紀行中の和歌數首が、何れも「路次記」の文句を左註として出してある。それが悉く光行作となつてゐる。「夫木抄」を信ずれば、これを親行の作とは定め難い。その上親行は承久三年の頃既に關東に在つたから、仁治の初旅といふ記事と一致しない。又光行の作とすると、仁治三年の東下を初旅と云へる記事に合はない。かくて遂に作者は誰だか分らないといふことになる。强ひて言へば、光行の「路次記」は確かに存したが、現存の「東關紀行」は後人の潤色したものではなからうか。一體現存の「東關紀行」は古色のまゝでない。「夫木抄」に抽出してゐるもので、類從本と對比すれば相違あるによつても想像される。【名稱】東關は關東の意に用ひられてゐる。例へば、守覺法親王の「左記」に、東關之雲外と西海之波上とが對句としてあり、又後伏見院御製石清水御願書に、「すでにつかひをとうくわんにつかはして、おもふところ

長明道之記 (初頁・插畫)

をのべんとす」とあり、なほ又延慶三年の國牛十圖に、「馬は東關をもちてさきとし、牛は西國を以てもとゝす」とあるが如きである。

【諸本】「扶桑拾葉集」卷十一及び群書類從紀行部に收められてゐる。而して國文大觀・有朋堂文庫以下の後の叢書にも採られてゐる。古刊本には、正保五年版や寬政元年版(繪入小本)があつて、「長明道之記」と題せられてゐる。これ等の諸本の間にはただ少々語句の相違があるに過ぎない。【內容】冒頭述懷の言をなして、齡は百とせの半に近づき、なす事もなくあかしくらし、いづこに住み果てようとも思ひ定めず、身は朝市にあつて、心は隱遁にある。かくて仁治三年の秋八月中旬、初めて鎌倉に下つたといふ意を表して一篇の序段となす。それから紀行に入り、鎌倉に下着するまでのことを詳細に記し、鎌倉逗留中、和賀江島の繁昌、由比ヶ濱の風景、鶴岡八幡宮の參詣、大慈寺の談義、名越の山の月、極樂寺の風景、稻村ヶ崎の古戰場、七里ヶ濱の風景、腰越の浦の風景、龍口の刑場、江島の社參、鎌倉の名所舊蹟、鎌倉の人物等を記し、鎌倉を出發して歸洛するまでの旅程を記してゐる。

【業績】彼の藝風は、洒脫とユーモアをもつて聞え、新劇界の一指導者として立つてゐた時より雅樂並びに西洋音樂を學んだ。坪內逍遙に師事して演劇の實際的研究に志し、明治三十九年、第一次の文藝協會創立に參與して、逍遙作「桐一葉」の片桐且元、「ヴェニスの商人」のシャイロック等に扮した。續いて、逍遙作「常闇」を樂劇に作曲上演した。第二次の文藝協會には、研究所講師となり、第一回公演「ハムレット」のポローニヤス及び墓掘男甲に扮して好評を收め、同協會の公演、試演毎に主役に扮した。大正二年協會解散の後は、土肥春曙・池田大伍等と計つて「演劇無名會」を創設したが、土肥春曙の死に遭ひ、やがて同劇團は解散した。以來新派劇に加入して、逍遙作「靈驗」の盲男に扮して好評があつた外、幾多の脚本の主要人物に扮した。

罪の條に、太政大臣師長の尾張井戸田へ流罪の事がある。その道行の文は、「東關紀行」に據つたものであることは、殆ど疑ふことは出來ぬ。長門本「平家物語」も、根來本「平家物語」も、右の所はほぼ同樣である。「東關紀行」の作者は、前述の如く未詳ではあるが、紀行そのものは夙に存して、「平家物語」一類の書に攝取せられるに至つたものと思はれる。

【註釋書】東關紀行詳解 島野幸次○新譯東關紀行精解 吉川秀雄 ○東關紀行註釋 畠中・辻橋 ○標註東關紀行 大町桂月

【參考】鎌倉時代の日記文學 佐佐木信綱(日本文學講座) ○東關紀行の作者に就いて 鳥野幸次(國學院雜誌七ノ一〇) ○東關紀行私見 後藤丹治(藝文一六ノ二以下) 【野村】

東岸居士 とうがんこじ

「喝食物の謠曲」を見よ。

東歸集 とうきしふ

詩偈 一卷 【著者】天岸慧広(?―一四一四) 五山文學僧。字は天岸、慧広は名、東歸は其の號。京都の人。相國寺の瑞溪周鳳に師事し、後、建仁寺の第二十一世となつた。詩偈に長じ、その詩は「東歸集」に收められてゐる。

【內容】「東歸集」は、應永二十年、師周鳳の序を得て成つたもので、その內容は、五言絕句百首、七言絕句百首、五言律詩百首、七言律詩百首、五言古詩十首、七言古詩十首、合計四百二十首を收めてゐる。

【參考】五山文學新集 上村觀光 ○五山文學 上村觀光 ○五山詩僧傳 上村觀光

東遊記 とうゆうき

紀行文 一卷 【著者】成島道筑(?―一七八九) 江戸後期の國學者。名は良弼、通稱は柳北、道筑は其の號。江戸の人。幕府の儒官成島司直の子。

【內容】「東遊記」は、寬政元年、道筑が、幕府の命を受けて、日光山の修復を檢分した際の紀行で、その內容は、江戸を出發して日光山に至るまでの道中記と、日光山の修復の檢分記とから成つてゐる。

【參考】國書解題 上卷 岩橋遵成

東遊雜記 とうゆうざつき

紀行文 一卷 【著者】大田南畝(一七四九―一八二三) 江戸後期の狂歌師・戲作者・考證家。通稱は直次郎、後に七左衛門と改む。南畝・蜀山人・四方赤良・寸南菴・杏花園・玉川漁翁・山手馬鹿人・山手白人・浪花のあし・春滿亭・春滿亭主人・春滿亭叟・春滿亭春滿・春滿亭春滿主人・春滿亭春滿叟・春滿亭春滿翁・春滿亭春滿老人・春滿亭春滿老叟・春滿亭春滿老翁・春滿亭春滿老仙・春滿亭春滿老仙翁・春滿亭春滿老仙叟・春滿亭春滿老仙主人・春滿亭春滿老仙老人・春滿亭春滿老仙老叟・春滿亭春滿老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙翁・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙主人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老人・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老叟・春滿亭春滿老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老仙老翁・春滿亭春滿老仙・春滿亭春滿老仙翁・春滿亭春滿老仙叟・春滿亭春滿老仙主人・春滿亭春滿老仙老人・春滿亭春滿老仙老叟・春滿亭春滿老仙老翁・春滿亭春滿老仙・春滿亭春滿老仙翁・春滿亭春滿老仙叟・春滿亭春滿老仙主人・春滿亭春滿老仙老人・春滿亭春滿老仙老叟・春滿亭春滿老仙老翁・春滿亭春滿老仙・春滿亭春滿老仙翁・春滿亭春滿老仙叟・春滿亭春滿老仙主人・春滿亭春滿老仙老人・春滿亭春滿老仙老叟・春滿亭春滿老仙老翁・春滿亭春滿老仙・春滿亭春滿老仙

灌自記)○わが宿草(別項)○つれ〴〵草(譚嘉堂文庫、内閣文庫に寫本存する外、「[illegible]家說林」に收載。兼好の「徒然草」に擬して隨筆を輯めたと云ふ序文があるけれど、後人の假託らしい)○慕景集二種(別項)○太田道灌詠草一卷(南葵文庫本。「慕景集」に「花月百首」「太田道灌集」の兩部を加へ集成を計つたもの。「道灌集」の奥書には松井幸隆が道灌自筆本を轉寫した旨を述べてゐる)○花月百首一卷(續類從第三九四題名の下に、蓮乘院入道道灌號太田持資との加註があり、更に卷頭に權大納言雅親點とあつて、掛點及び評語が入つてゐる。僻墨四十五點とその計數が最後に出てゐる。奥書は天正十二年日附の藤雅春のものの外、寛政二年のものと享和三年のものの端の月

【參考】太田家譜○梅花無盡藏○禿尾長柄帚○村雨稿○大草紙○永享記○野史○續本朝通鑑○太田道灌　櫻井一義　○太田道灌の紀行文歌集隨筆等に就て　渡邊世祐(史學雜誌四二ノ一)　(齋藤(清))

東關紀行　とうくわんきかう　紀行文　【作者】未詳。古來作者について諸說がある。岡西惟中は「消閑雜記」に、「賀茂の長明が海道の記、世擧りて長明が作なりとおもふは、いぶかしき事なり。夫木抄のうち、不二の白雲の詠、かれは數首皆源光行が東行の詠とす。後の歌人考へ見るべし」と言つてゐる(その不二の詠さいと見ると、紀行中の和歌數首が、何れも「路次記」の文句を左註として出してある。それが悉く光行作となつてゐる。「夫木抄」を信ずれば、これを親行の作とは定め難い。その上親行は承久三年の頃既に關東に在つたから、仁治の初旅といふ記事と一致しない。又光行の作とすると、仁治三年の東下を初旅と云へる記事に合はない。かくて遂に作者は誰だか分らないといふことになる。強ひて言へば、光行の「路次記」は確かに存したが、現存の「東關紀行」は後人の潤色したものではなからうか。一體現存の「東關紀行」は古色の

(挿畫)

てゐる。例へば、守覺法親王の「左記」に、東關之雲外と西海之波上とが對句としてあり、又後伏見院御製石清水御願書に、「すでにつかひをとうくわんにつかはして、おもふところをのべんとす」とあり、なほ又延慶三年の國牛十圖に、「馬は東關をもちてさきとし、牛は西國を以てもとゝす」とあるが如きである。【諸本】「扶桑拾葉集」卷十一及び群書類從紀行部に收められてゐる。而して國文大觀・有朋堂文庫以下の後の叢書にも採られてゐる。古刊本には、正保五年版や寛政元年版(繪入小本)があつて、「長明道之記」と題せられてゐる。これ等の諸本の間にはただ少々語句の相違があるに過ぎない。【內容】冒頭述懷の言をなして、齡は百とせの半に近づき、なす事もなくあかしくらし、いづこに住み果てようとも思ひ定めず、身は朝市にあつて、心は隱遁にある。かくて仁治三年の秋八月中旬、初めて鎌倉に下つたといふ意を表して一篇の序段となす。それから紀行に入り、鎌倉に下着するまでのことを詳細に記し、鎌倉逗留中、和賀江の築島、三浦岬などを遊覽し、柳營の地の繁昌を謳歌し、鶴岡の若宮を讚嘆し、二階堂の莊嚴に隨喜し、大佛の造營、その功三が二に及んだ由を記し、末段十月二十三日鎌倉出立で筆を擱いてゐる。【批評】この紀行の文體は、「海道記」(別項)と同樣で、對句が文飾上の唯一の生命となつてゐるが、これには漢土の事に對比する場合が多い。文中和歌も所々に引用してあるが、「千載集」中の東三條院の歌や、西行・後京極攝政良經の歌の如き、比較的時代の新しいものもある。なほ注意すべきは、本書にのせた故事の中に、往々事實を誤つたもののあることである。また記事が枝葉に亙り、文辭の整はない點もあつて、その文は必ずしも暢達を以て許し難い。文品は「海道記」に一籌を輸してゐる。【影響】「源平盛衰記」卷十二、大臣以下流罪の條に、太政大臣師長の尾張井戸田へ流罪の事がある。その道行の文は、「東關紀行」に據つたものであることは、殆ど疑ふことは出來ぬ。長門本「平家物語」も、根來本「平家物語」も、右の所はほぼ同樣である。「東關紀行」の作者は、前述の如く未詳ではあるが、紀行そのものは夙に存して、「平家物語」一類の書に攝取せられるに至つたものと思はれる。【註釋書】東關紀行詳解　鳥野幸次○新譯東關紀行精解　吉川秀雄　○東關紀行註釋　畠中・辻橋○標註東關紀行　大町桂月　【參考】鎌倉時代の日記文學　佐佐木信綱(日本文學講座)○東關紀行の作者に就いて　鳥野幸次(國學院雜誌七ノ一〇)○東關紀行私見　後藤丹治(藝文一六ノ二[以下])　(野村)

東岸居士　とうがんこじ　「喝食物の謠曲」を見よ。

東歸集　とうきしふ　詩偈　一卷　【著者】天岸慧廣　【解說】この書は、佛乘禪師天岸慧廣の詩偈を輯錄したものである。元應元年遙に元の天目山中峯明本禪師の禪風を慕ひて西航の途に上り、海上禪師の遷化を知りて痛悼し、一詩偈を賦したもので、道友の唱和あり、編して「亘海一滴」と云ふ。元の諸禪僧を歷訪して、正中元年に東歸す。この書は、元に歷遊中の諸作及び東歸後の諸作を收め、末に拈香法語及び序引を載す。夙に上版したれども傳はらず。元祿十四年、鎌倉報國寺主嵯峨直指菴道澄、紫野大德寺宗章の序跋を求めて再び開版した。この本亦極めて稀である。今は五山文學全集に收むるものに依る。　(鷲尾)

東儀鐵笛　とうぎてつてき　音樂家・俳優　【本名】季治　【生歿】明治二年七月に生れ、大正十四年二月四日歿す。享年五十七。【閱歷】家は代々雅樂を以て宮廷に仕へてゐた。年少の時より雅樂並びに西洋音樂を學んだ。坪內逍遙に師事して演劇の實際的研究に志し、明治三十九年、第一次の文藝協會創立に參與して、逍遙作「桐一葉」の片桐且元、「ヴェニスの商人」のシャイロック等に扮した。續いて、逍遙作「常闇」を樂劇に作曲上演した。第二次の文藝協會には、研究所講師となり、第一回公演「ハムレット」のポローニヤス及び墓掘男甲に扮して好評を收め、同協會の公演、試演毎に主役に扮した。大正二年協會解散の後は、土肥春曙・池田大伍等と計つて「演劇無名會」を創設したが、土肥春曙の死に遭ひ、やがて同劇團は解散した。以來新派劇に加入して、逍遙作「靈驗」の盲男に扮して好評があつた外、幾多の脚本の主要人物に扮した。【業績】彼の藝風は、洒脫とユーモアをもつて聞え、新劇界の一指導者として立つてゐた時代もあつた。なほ大正六七年の交より、畢生の研究として日本音樂史の大成を志したが、未完成に終つた。晚年は多く振はず、志を得ずに病歿した。　(武藤)

東京新誌　とうきやうしんし　雜誌　【角書】昇樂餘聞　【刊行】明治九年三月創刊。同十六年一月、三百三十四號を以て禁止された。東京京橋九春社發行。【解說】撫松服部誠一主宰。編輯者中有名な人々には初めに松村春輔、後に桑野銳がある。寄稿者として最も有力なのは、石井南橋・桑野銳・三木愛花等。桑野は寄稿が緣で後に編輯長となつた。角書の示す如く、當時の泰平社會で見聞した珍事異聞を新奇な文章で書いて公にしたものであつた。論說・諷刺・風俗・雜記・情話・小說・詩歌・傳記等を收め、文體は漢文及び漢文直譯體、その大半は誇張の多い戲文調を用ひた。小說も漢文と和文とあるが、和文は人情本の體を眞似てゐる。特色として每卷の大半は、低級猥雜な諷刺戲文と情話をもつて埋められ、その對象の大半は、華族・官人・富豪の花柳情事である。筆端偶々政治に及び、新文化生活の批評に及んでも、多くは正面から論ぜず、男女の交情に假りて說くのを常とする。この諷刺文學も初めは風敎を正すといふ微意がこもつてゐたものらしいが、後にはただ露骨な猥褻に失し、遂に禁止された。これ等戲文の代表的なものは「內幕寫眞競虛戲說」「華街塵話」「長春國繁昌記」(紳士春遊棚卸)「東京寫眞鏡」「東京寫眞一夕話」「第二世夢想兵衛蝴蝶物語」「人海奇談浮世之釣」等である。本誌は明治初期の諸雜誌中「花月新誌」と並んで、最も讀書人間に人氣と勢力のある雜誌であつた。而して「花月新誌」に於ける柳北の場合と同じく、これは主宰者の文壇的盛名による所もあつたが、一面この雜誌の思ひ切つて戲謔的な調子が時人の心を廣く捉へた點もあらう。ともあれ、かゝる漢文式戲文なるものは幕末から明治初期へかけての特殊な變態的文學形式で、當時敎養ある風流人士は必ずこれを弄するものとなつてゐたが、全く文學史的に特異な存在と見なしてよい。本誌は「花月新誌」と共に、かゝる漢文式戲文を代表するもので、殊にこの雜誌は、いはば集大成したかの觀があり、時代を知る好材料であると共に雜誌に小說的讀物を揭げた嚆矢であること(明治十年四月第四四號以下「八重山吹讀」)、民權運動乃至國會に關する戲作が政治小說の先驅となること、一般に當時の青年の創作欲を刺戟した點など特筆すべきであらう。　(柳田(泉))

藤渠漫筆　とうきよまんぴつ　隨筆　三卷　寫【著者】江馬春齡　【解說】著者は美濃國大垣の醫

師、醫方の名家である所から、治療・藥餌・本草等に關する談が多いが、又居住地大垣の藩風、市中の人情・習俗等を述べ、更に科學者の見地から僧尼の妄說、無智者の迷信などを排擊し、その他日常衆人の心得となるべき事項を多方面について論じてゐる。所說新奇で聽くべきことが少くない。卷末に大垣藩老小原忠寬（鐵心）の跋があつて、中に「迂儒輩の論高遠空理に走り、可言不可爲之事多く、此漫筆に至而は眼前之常事を述て、其論却而人之意表に出づ。語淺而意深く事實而論切也。當藩弊政之事に至而は、我輩頭上之一針益を得る事多し。實に國手之卓見に感伏す」と言つてゐる。

【著者小傳】江馬春齡。名は椿、號は藤窠、美濃國大垣の蘭方名醫元恭（蘭齋）の孫で、その通稱春齡を襲いでまた令聲があつた。〔和田〕

頭句（とうく）「短歌」を見よ。

春宮左近（とうぐうのさこん）「小大君」を見よ。

東宮女藏人左近（とうぐうのにょくらうどさこん）「小大君」を見よ。

道具淨瑠璃（だうぐじやうるり）　淨瑠璃【解說】素語の一形式。人形淨瑠璃座の組織は太夫の內から「檀下」或は「紋下」といつて一座の責任者を出し、三味線は女房役、人形遣は雇人といつた關係を保つて來たのが、その業者の慣例であつた。併し三味線彈が獨立の位置を占めんとし、且つ豐澤團平（別項）によつて明治十六年四月三味線紋下が創設されて、三味線彈の位置が確保された。この機運の未だ達せられざる醱酵期、卽ち文化・文政度以降、明治初年にかけて三味線彈の擡頭は著しく、三味線の冴えたる撥音、一挺の三味線を中心にしての興行が試みられ、且つこの計畫がまた世人の嗜好にも投じた。この企てに選ばるゝ曲目は「河古屋琴責」「堀川猿廻し」「千兩幟」などで、三味線の音色に聽衆を集めようといふ企てである。この興行が漸次地方に流行するに至つたが、この場合、常に一座の責任者、卽ち座頭は、大阪における本格興行と異り、三味線彈がこれに當り、この下に美音・美聲の若い太夫が常に選ばれて旅へ廻つた。卽ち「太夫」は「道具」に使はるゝといふ意味で、この三味線彈を座頭とする素語（すがた）り一座の淨瑠璃を「道具淨瑠璃」と呼び、美音の若い太夫は、又道具に使はれながら咽喉の琢磨、淨瑠璃の工夫に修業を積むことが出來た。また「なぐさみ」淨瑠璃といはるゝは本職の太夫でなく、素人がなぐさみに淨瑠璃を語り或は稽古するをいふ。卽ち今日いふ「素人淨瑠璃」の意であるが、素人淨瑠璃とは嘉永以降の言葉で、昔はなぐさみ淨瑠璃と稱した事、筑後段物集の「竹本祕傳丸」に、なぐさみ淨瑠璃の連名の所載を證とすべきである。また「さかな淨瑠璃」といふは、宴席などにて語る一くさり淨瑠璃をいふ。語り手は、玄人・素人たるを問はない。併し卽興風の淨瑠璃・文句を替へて、或る本曲らしく擬して語るは、別に略淨瑠璃と云ふ。〔石割〕

道具屋節（だうぐやぶし）「井上播磨掾」を見よ。

東見記（とうけんき）　隨筆　二卷【編者】人見壹【刊行】貞享三年【解說】著者が林道春に師事した時、その談話を仔細に記し留めたもので、片々數百則、前後の聯絡もない。羅山の號の說明から始まつて、その經史・詩文についての所見、本朝の和歌・古典にかゝる所感、漢語の字義、和漢事物の稱謂、和漢の史談、雜書の解題、禪僧の逸話、その他甚だ雜駁であつて取纏まつた事はなく、ただ羅山の博洽を窺ふに足るまでである。貞享三年編者の甥鶴山野節の序の外に、無年紀著者の自序、貞享三年齋野傳の跋がある。

【著者小傳】人見壹。字は道生、卜幽軒・白賁園等の號があつた。丹波から京都に出て菅得庵に學び、後更に江戶に來て林羅山に從ひ、業成つて水戶侯德川賴房の侍講となつた。寬文十年（一三三〇）七月八日歿。享年七十二。著述に「五經章子問」「莊子口義棧航」「林塘集」等がある。〔和田〕

陶犬新書（たうけんしんしよ）　隨筆　三卷【著者】おほ家かね延（中洲漁叟）。傳未詳。【名稱】自序中に「陶ものの犬夜を守る贅しめなく、瓦の鷄晨をつかさとる益無しといふ古ことに違はす」と謙抑の意を以て題したもの。【刊行】天保三年【解說】通俗百般の事について自家の所感を述べてゐる。卷一に酒を人にすゝむる詞以下二十四則、卷二に水の價以下四十六則、卷三に刀禰以下五十一則を收めてゐる。天保二年の自序がある。〔和田〕

桃源瑞仙（たうげんずゐせん）「瑞仙」を見よ。

刀劍物の謠曲（たうけんもののえうきよく）【曲目】武士にとつて最も大切な刀劍の奇瑞靈異を描いたものに「草薙」と「小鍛冶」がある。【諸本】五流新古諸本。謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本古曲全集）等所收。【草薙】四番目〔作者〕未詳〔內容〕慧心僧都（ワキ）が熱田宮に參籠してゐると、花賣の男女（前ジテ、前ヅレ）が來て、自分達は草薙の神劍を守る夫婦である。七日結願の夜眞の姿を見せようといつて消え失せる。やがて御殿が鳴動して、日本武尊（後ジテ）と橘姬（後ヅレ）が現はれ、草薙の神劍を以て東夷を平らげ給うたことを語られる。神事物（別項）の「源太夫」と近似した曲である。大體正史に基づいてゐるが、「平家物語」劍卷を參照したらしい。複式夢幻能。寶生現行。

【小鍛冶】五番目〔作者〕未詳〔內容〕橘道成（ワキ・ヅレ）が一條帝の勅使として三條小鍛冶宗近（ワキ）の私宅に行き、御靈夢により御劍を打たせ給ふ旨の勅諚を傳へる。宗近は謹み畏んで、氏神稻荷明神へ祈願に參らうとすると、その途に童子（前ジテ）が出て、劍の威德を語り、御劍を打つべき壇を飾つて、われを待ち給へといつて、稻荷山の方に消え去つた。宗近は宅に歸り、潔齋して壇に上り、祝詞をあげた。すると稻荷明神（後ジテ）が小狐となつて現はれ、宗近の相槌を打ち、寶刀を鍛へあげてこれを勅使に捧げ、叢雲に乘つて稻荷山に歸つたといふ曲。小鍛冶の事は「尺素往來」に、小狐丸の事は「保元物語」卷一に出てゐるが、大體謠曲作者の構想したものらしい。二段劇能。五流現行。

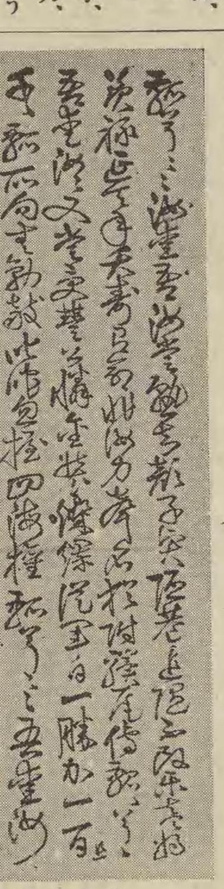
【參考】謠曲評釋六輯　大和田建樹〇謠曲大觀　佐成謙太郎

刀劍問答（たうけんもんだふ）　故實　一卷【著者】伊勢貞丈【刊行】天保十四年十二月【成立】卷尾に、「この一帖或人の問によりて曩悟のほど書記しておくる者也。寶曆十二年壬午八月四日」とある。刊本には貞丈玄孫の貞友、門人千賀春城・岡田光大の三人の名を連ねて、下に「同校」としてある。【諸本】寫本の中には刀劍圖の添うてゐるものがある。その刀劍圖は、初めに「前に刀劍問答を著す。されどもいまだ詳ならざる所あり。これによりて今更その荒ましを繪圖にあらはすものなり。前の問答とひきあはせ見るべし」とあつて、蒔繪螺鈿野太刀、糸卷太刀、鞘袋かけたる糸卷太刀、白太刀、黑太刀、兵庫鎚太刀、怒物作太刀、打刀・鞘卷・諸種脇差、太刀の名所等の圖を記し、各圖とも彩色を施してある。卷尾に「寶曆癸未年十月十八日平貞丈記」とあつて、本書の成つた翌年に更にこの圖を作製し、本書の後に附錄して參照の便に供したものであることが分る。【解說】刀劍の故實に就いて問答體に記してあるもので、御劍、鞘卷の太刀、糸卷の太刀、黑太刀、白太刀、銀劍、平鞘の太刀、衞府の太刀、陽の太刀、陰の太刀、つかひ太刀、はき太刀、さけ太刀、野太刀、兵庫鎚の太刀、いか物作の太刀、脇差の太刀、小太刀、中半太刀、御はかし、太刀の鞘袋、かんたうの帶取、雪の下の帶取、布の帶取、たくほくの帶取、尻鞘、太刀に弦袋かける事、太刀佩き樣、太刀に帶取結付る事、鞘卷の刀、白鞘卷、ゑぼしかたの鞘卷、ゑひ鞘卷、さう字は斌卿。通稱虎之介、後誠之進と改む。【生歿】文化三年三月水戶に生れ、安政二年（二五一五）十月二日大震災に遭ひ江戶に歿す。享年五十。【墓所】水戶市外常磐原に葬る。【閱歷】その先は參議小野篁より出づ。父幽谷は水戶藩に仕へて彰考館總裁であつた。文政二年父に從つて江戶に往き、龜田鵬齋・太田錦城の門に入つて學び、又岡田十松に就いて擊劍を學ぶ。九年幽谷の歿するに及んで家を襲ぎ、彰考館編修となり、總裁の事を攝した。天保元年選ばれて郡奉行となり、十年側用人に轉じ、書するところ多かつたが、その主唱するところは攘夷に在つたので、議論やゝもすれば閣老と合はなかつた。併し諸藩の俊才の來つて國事を論じ數を請ふ者が、常にその門に滿つるといふ有樣であつた。明治二十三年正三位を贈らる。

【著書】回天詩史二卷〇常陸帶二卷〇弘道館記述義二卷〇東湖遺稿二卷〇藤田東湖全集一册〇東湖隨筆二卷（別項）

東湖隨筆（とうこずゐひつ）　隨筆　五卷【著者】稻垣龍軒（傳不詳。延寶・貞享間の儒者と思はる）。【刊行】貞享元年【解說】「史記」「漢藤田彪【刊行】明治三年【解說】東湖門人等所輯。著者が天保十年頃から同十二年迄に記したもので、主として幕末の循吏諸藩の名士等と交際した時の感想や談論の大要を述べ、また尾藩・柳川藩・宇和島藩・佐賀藩等の治務上の噂などもしてゐる。名士には川路三左衞門聖謨・新見伊賀守正路・矢部駿河守・杉浦出雲守・岡本花亭・林鶴梁・渡邊崋山等が評されて居り、就中矢部駿河守との談論の樣が奕々としてゐる。序跋はない。〔和田〕

濤骨（たうこつ）　俳人【姓名】西村彌須美【閱歷】明治十八年五月十三日鳥取縣日野郡八鄕村丸山に生る。曹洞宗大學林を半途退學、宇野玄機に三年間參禪した。島根縣女子師範その他の職を經て、現に東京府立第六高等女學校に奉職してゐる。俳句は初め坂本四方太に教を乞うたことがある。「石楠」創刊當時から



素語の一形式。人形淨瑠璃座の組織は太夫の内から「檜下」或は「紋下」といつて一座の責任者を出し、三味線は女房役、人形遣は雇人といつた關係を保つて來たのが、その業者の慣例であつた。併し三味線彈が獨立の位置を占めんとし、且つ豐澤團平(別項)によつて明治十六年四月三味線紋下が創設されて、三味線彈の位置が確保された。この機運の未だ達せられざる醱酵期、即ち文化・文政度以降、明治初年にかけて三味線彈の擡頭は著しく、三味線の冴えたる撥音、一挺の三味線を中心にしての興行が試みられ、且つこの計畫がまた世人の

風の淨瑠璃・文句を替へて、或る本曲らしく擬して語るは、別に略淨瑠璃(やつし)と云ふ。〔石割〕

道具屋節(だうぐやぶし)「井上播磨掾」を見よ。

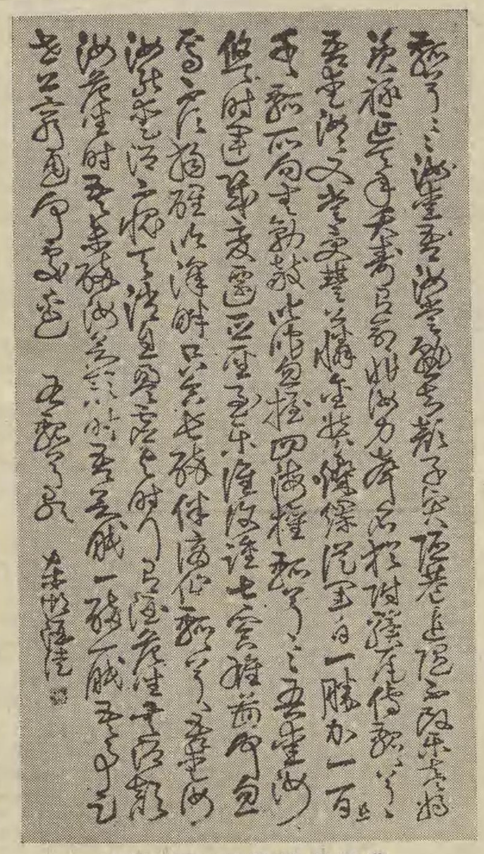
東見記(とうけんき) 隨筆 二卷 【編者】人見壹【刊行】貞享三年【解說】著者が林道春に師事した時、その談話を仔細に記し留めたもので、片々數百則、前後の聯絡もない。羅山の號の說明から始まつて、その經史・詩文についての所見、本朝の和歌・古典にかゝる所感、漢語の字義、和漢事物の稱謂、和漢の史談、雜書の解題、禪僧の逸話、その他甚だ雜駁であつて取纏まつた事はなく、ただ羅山の博洽

刀劍物の謠曲(のえうきよく)【曲目】武士にとつて最も大切な刀劍の奇瑞靈異を描いたものに「草薙(くさなぎ)」と「小鍛冶(こかぢ)」がある。【諸本】五流新古謠本。謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集(日本古曲全集)等所收。【草薙】四番目〔作者〕未詳〔內容〕慧心僧都(ワキ)が熱田宮に參籠してゐると、花賣の男女(前ジテ、前ヅレ)が來て、自分達は草薙の神劍を守る夫婦である。七日結願の夜眞の姿を見せようといつて消え失せる。やがて御殿が鳴動して、日本武尊(後ジテ)と橘姫(後ヅレ)が現はれ、草薙の神劍を以て東夷を平らげ給うたことを語られる。神事物(別項)の「源太夫」と

刀劍問答(もんだふ) 故實 一卷 【著者】伊勢貞丈【刊行】天保十四年十二月【成立】卷尾に、「この一帖或人の問によりて覺悟のほど書記しておくる者也。寶曆十二年壬午八月四日」とある。刊本には貞丈玄孫の貞友、門人千賀春城・岡田光大(みつひろ)の三人の名を連ねて、下に「同校」としてある。【諸本】寫本の中には刀劍圖の添うてゐるものがある。その刀劍圖は、初めに「前に刀劍問答を著す。されどもいまだ詳ならざる所あり。これによりて今更その荒ましを繪圖にあらはすものなり。前の問答とひきあはせ見るべし」とあつて、蒔繪螺鈿野太刀、糸卷太刀、鞘袋かけたる糸卷太

刀、白太刀、黑太刀、兵庫鏁太刀、怒物作太刀、打刀・鞘卷・諸種脇差、太刀の名所等の圖を記し、各圖とも彩色を施してある。卷尾に「寶曆癸未年十月十八日平貞丈記」とあつて、本書の成つた翌年に更にこの圖を作製し、本書の後に附錄して參照の便に供したものであることが分る。【解說】刀劍の故實に就いて問答體に記してあるもので、御劍、鞘卷の太刀、糸卷の太刀、黑太刀、白太刀、銀劍、平鞘の太刀、衞府の太刀、陽の太刀、陰の太刀、つかひ太刀、はき太刀、さけ太刀、野太刀、兵庫鏁の太刀、いか物作の太刀、脇差の太刀、小太刀、中半太刀、御はかし、太刀の鞘袋、かんたうの帶取、雪の下の帶取、布の帶取、たくほくの帶取、尻鞘、太刀に弦袋かける事、太刀佩き樣、太刀に帶取結付る事、鞘卷の刀、白鞘卷、ゑほしかたの鞘卷、ゑひ鞘卷、さうまき、腰刀、腰の物、刀、ちいさ刀、鞘卷拵樣、鞘卷柄卷くこと、鞘卷軍陣にても柄卷かぬこと、小刀、かうかい、下緒結ひ樣、ひきめ下緒、下緒の圖、刀に火打袋下る、打刀、鍔刀、上總忠光が太刀、小打刀、脇差、脇差の小尻丸くすること、脇差下緒結樣、脇差の刀、大小の名目、守刀、守脇差といはぬこと、刀脇差飾の名、刄引、鎌倉下緒(牛緒)下、葵鍔、粢鍔(しとぎ)、煉鍔等の六十四條。追加として、かんたうの帶取、繻子純子の帶取、帶取寸法、下緒の寸法、刀さすこと、太刀の柄に卷く糸の色、まち鞘卷、太刀に弦袋付る事、聖柄の刀、革包の太刀、長伏輪の太刀、丸鞘の太刀、錦包の太刀、下鞘、見せ鞘、下緒神に不納事、葬送ノ供腰刀柄鞘絹袋に入る事、二重下緒等十八條。都合八十二條が記されてゐる。〔石村〕

東湖(とうこ) 勤王家・儒者【姓名】藤田彪。字は斌卿。通稱虎之介、後誠之進と改む。【生歿】文化三年三月水戸に生れ、安政二年(一二五一五)十月二日大震災に遭ひ江戸に歿す。享年五十。【墓所】水戸市外常磐原に葬る。【閱歷】その先は參議小野篁より出づ。父幽谷は水戸藩に仕へて彰考館總裁であつた。文政二年父に從つて江戸に往き、龜田鵬齋・太田錦城の門に入つて學び、又岡田十松に就いて擊劍を學ぶ。九年幽谷の歿するに及んで家を襲ぎ、彰考館編修となり、總裁の事を攝した。天保元年選ばれて郡奉行となり、十年側用人に轉じ、藩主德川齊昭(烈公)の眷遇を蒙り機密に參した。齊昭が改革の政を布き、弘道館を建て、兵器・軍艦を造り、文教・武備を盛んにしたのは、皆東湖獻替の功に由る。齊昭が幕府の忌諱に觸れ、致仕謹愼を命ぜらるゝに及び、東湖もこれに坐して蟄居を命ぜられたが、嘉永六年再び側用人となり、學校奉行を兼ねた。この時米艦が浦賀に來て通商を請ひ、天下騷然たるものがあつた。幕府は齊昭を起して海防の議に與らしめたので、東湖も齊昭を輔けて計畫するところ多かつたが、その主唱するところは攘夷に在つたので、議論やゝもすれば閣老と合はなかつた。併し諸藩の俊才の來つて國事を論じ敎を請ふ者が、常にその門に滿つるといふ有樣であつた。明治二十三年正三位を贈らる。



藤田東湖筆蹟(書畫大觀)

【著書】回天詩史二卷○常陸帶二卷○弘道館記述義二卷○東湖遺稿二卷○藤田東湖全集一冊○東湖隨筆二卷(別項)〔佐久〕

東湖隨筆(とうこずゐひつ) 隨筆 五卷 【著者】稻垣龍軒(傳不詳。延寶・貞享間の儒者と思はる)。【刊行】貞享元年【解說】「史記」「漢書」、その他、種々の漢籍から支那歷代の人の嘉言善行を集錄した假名交りの書で、隨筆と云ふ名は少々當らぬ。自序中に兒童の話柄を供給しようとしたものとの意がある。卷一に沈約觀學以下六十則、卷二に漢人簀竹ヲ煮ルニ熟セズ以下四十七則、卷三に宿瘤閔王皇后ニ入ル以下三十五則、卷四に法善道術以下三十七則、卷五に牛雲傳以下二十七則を收め、各條標目の下に所據書名が出してある。天和三年著者東湖隱甫稻垣龍軒の序がある。〔和田〕

東湖隨筆(とうこずゐひつ) 隨筆 二卷 【著者】藤田彪【刊行】明治三年【解說】東湖門人等所輯。著者が天保十年頃から同十二年迄に記したもので、主として幕末の循吏諸藩の名士等と交際した時の感想や談論の大要を述べ、また尾藩・柳川藩・宇和島藩・佐賀藩等の治務上の噂などもしてゐる。名士には川路三左衞門聖謨・新見伊賀守正路・矢部駿河守・杉浦出雲守・岡本花亭・林鶴梁・渡邊崋山等が評されて居り、就中矢部駿河守との談論の樣が奕々としてゐる。序跋はない。〔和田〕

濤骨(たうこつ) 俳人【姓名】西村彌須美【閱歷】明治十八年五月十三日鳥取縣日野郡八鄕村丸山に生る。曹洞宗大學林を半途退學、宇野玄機に三年間參禪した。島根縣女子師範その他の職を經て、現に東京府立第六高等女學校に奉職してゐる。俳句は初め坂本四方太に敎を乞うたことがある。「石楠」創刊當時から亞浪に參じて名を成すに至つたが、大正十三年、去つて雜誌「伯勞」を創刊し、半歲にして「短唱」と改題し、形式・內容共に俳句の規制を排して自由表現に倣ひ、「宏大な構ではや松などを立て金利で食つてるとは」「門燈消しに出ては樂む一本のたばこ日車の花の金」の如き作をなして今日に及んでゐる。【著書】第一日本短唱集。〔臼田〕

東西庵南北(とうざいあんなんぼく) 草雙紙作者・狂歌師【本名】朝倉力藏、又藤八【別號】葛飾偶人・六極園・梅山人南北・阡陌園【生歿】生年未詳。文政十年(二四八七)七月歿す。享年六十餘。【閱歷】本所竹町に住み、後、芝金杉町に轉住、板木彫刻師で狂歌を好み、五側の判者となつた。「復讐源五郎鮒魚」(文化五年)を處女作とし、文化七年以後、每年四五部づつの草雙紙を發表し、それが文化十四年まで續き、文

政年度に至り、やゝ發表數を減じ、同五年の五部が多く、歿年まで一二部づつ發表してゐる。その作は、敵討物と戯曲中の人物を點綴せる實錄物とが多く、要するに草雙紙の類型から一歩も出てゐない。【著作】復讐角兵衛獅子（文化六年）○鏡山後日俤（同七年）○於千代半兵衛初夢噺（同八年）○三度笠江島遊（同年）○花曇笠屋連彈（同九年）○丁子車引手妻（同年）○女合法戀修行（同年）○鶯娘梅合宿（同十年）○梅若丸花一ツ家（同十年）等。

【附記】東西庵南北と鶴屋南北（別項）とを混同し、兩者の草雙紙を併せ論じた書もあるが、後者は文政五年初めて作を發表し、遙かに特色ある作品を成してゐる。【山崎】

東齋隨筆（とうさいずいひつ）隨筆　二卷一册【著者】一條兼良【諸本】元祿六年刊本の外二三の刊本があるが、群書類從雜部に收められてゐるものが最も佳いやうである。【解説】主として本朝中古の雜事を抄錄したもので、一種の說話文學たる形を成してゐる。隨つて主觀的な漫筆ではない。日本に於ける隨筆と冠したものの最初とされてゐる。音樂類・草木類・鳥獸類・人事類・詩歌類・政道類・佛法類・神道類・禮儀類・好色類・興遊類の部を立てて種々な說話を列載してゐるが、多くは諸書の提要である。卽ち例へば、この書の草木類の所に、南殿の櫻の事が記してあるが、これは殆ど全く「古事談」第六に出てゐるのを採つたのであり、又人事類の鴨長明の事は、「十訓抄」第九に出てゐる文を節略して、聊か追補した位のものと認められ、かつ詩歌類の都良香の竹生島に於ける詩作の逸話の如きも、大體「古今著聞集」卷四から得て來たものと想はれる。全體を通觀して、條數もさほど多くなく、編制の上に別に新味があるでもなく、至つて平凡な撰述であつて、兼良の名を重からしめる程のものではない。【和田・野村】

道齋隨筆（だうさいずいひつ）隨筆　三卷【著者】金田宏（通稱文平、號道齋。元文・寶曆間の京都の儒者。詳傳未詳）。【刊行】寶曆七年【解説】尋常の隨筆と異なり、漢學を修める者のために讀書・作文上の用意を述べたもの。上卷に讀法正誤、句讀點法、書法鈎法、四聲點發、直音如字、反切正訛、二合字。中卷に助字本義廣說。下卷に古今字通、同訓字、省文、偏旁通用、重語、五正字、五俗字、倒句例、反語例、誤字、唐詩選序跋故事を載せてゐる。讀法正誤、古今字通の諸條の如きは操觚者の必ず參見すべきものである。寶曆五年釋義龍、同年海西宮奇、同年中和の三序、同年桃尙德の跋がある。卷末に「中文平著」とある。【和田】

陶齋先生隨筆（たうさいせんせいずいひつ）隨筆　一卷【著者】趙養【刊行】文化九年【解説】書家として聞えた趙陶齋が古稀の年に書いた隨筆で、自序の次に「息心古稀寓意」と題し、次に相撲・將相無種・學問・茶道・茶會・烏絲欄・蘭亭帖・科擧・雪舟の諸目について感想を錄し、その文は俳文的の滑稽味を帶びてゐて、著者の贖達磊落の胸中を窺ひ知られる。本書は門人村上默齋が、その師の遺稿數卷中から摘抄し、陶齋の手筆通り摸刻したものである。文化七年村上恒菴（卽ち默齋）の跋を添へてゐる。【著者小傳】趙養。字は仲頤、號は陶齋、又息心居・枸杞園・淸暉閣などとも號した。淸人の後で、長崎に生れ、後、上國に出て書を以て鳴つた。天明六年（一七八六）四月歿す。享年七十餘。【和田】

東西南北（とうざいなんぼく）詩歌集【作者】與謝野寬【刊行】明治二十九年七月、明治書院【解説】作者の第一集であると同時に、その短歌は、新派和歌の第一集であり、明治以降の詩歌運動に記念さるべき著である。またその詩は、序に於て井上哲次郎氏が「假令ひ其成功の如何は未だ豫知すべからざるも」と述べてゐるやうに、極めて初期の摸索時代にあつて、勇敢に踏み出した第一歩である。更に落合直文は、同じく序に於て、「その歌に、一種の特色を備へ、雄々しき調を以てまさるものか」といつてゐる。直文は始唱者ではあつたが、その實行は鐵幹にはじまつてゐる。直文は寧ろその實行を怖れてゐたかも知れない。更に自序では、「小生の詩、幼年より、聊かの草稿をも、とどめ來らず候」といひ、「世の專門詩人の諸君とは、大に反對の意見を抱き居る者に御座候」といつてゐる。これに對して當時謙遜か傲慢かとの批評を蒙つた。實は明治以降の新體の詩歌の創造者は、始唱者の外に作者自身があるといふくらゐの自負があつたものに違ひない。詩歌何れに於ても、磨かれたものは稀れである。併し露骨といひ、生硬蕪雜といひ、また「新體詩の新體詩らしきもの、我れ初めて、鐵幹に於て之を認む」といつた當時の詩評には、ひそかに砂金のやうに光るものの幾つかを見落されたのも事實である。これは、その運動が主になつて眺められたからであらう。【北原・內藤】

東西夜話（とうざいやわ）俳話　三册【著者】各務支考【成立】元祿十四年【刊行】元祿十五年【由來】上中二册は元祿十四年十月十二日に近江彥根の五老井に於て松井汶村の毫、森川許六の校を經たもので、中册末にその旨を斷つた汶村・許六の識語がある。序跋はない。【解説】元祿十四年夏四月初めに著者が京都を立つて越中に遊び、十月初め越前敦賀に歸着するまでの旅中の紀行文・發句、各所の俳席で遺した夜話、各地の俳士の發句等を輯錄し、これに許六・浪化の發句をそれ〴〵立句とする百韻二篇を併せたものである。著者が旅中經過した地は、大津・彥根・敦賀・山中・大聖寺・金澤・石動（いするぎ）・安居（やすゐ）・井波・城ヶ端・魚津・富山・高岡・有磯・放生津・三國（みくに）・福居・府中等で、紀行の文章・發句・夜話・諸家の發句等は、これ等の各地で遺され、又輯められたものであるが、夜話はこれ等の中の十六箇所で遺され、これが本書の內容上の中心をなすものである。而してこの夜話は、或は發句・附句の批評があり、風雅の本質論があり、附方論があり、種々樣々であるが、要するに俳諧上の諸問題を後學に敎示しようとしたものである。なほ百韻二卷は、兩者共に旅中の各所で、その地の連中によつて次第に卷かれて行き、前者は彥根に始まつて城ヶ端で滿尾し、後者は井波に始まつて彥根で滿尾してゐる。【各務】

東西遊記（とうざいいうき）「東遊記」「西遊記」を見よ。

動作態（どうさたい）文法【獨】die Aktionsart, die Aspekt【英】aspect【佛】l'aspect【解説】インドヨーロッパ語族（別項）比較文法中、動詞の變化に關する事項の一。この語族中の一派なるバルトスラブ派諸國語には、今日動詞の諸變化のうち、「態」（英 aspect 露 Видъ）と稱するものがある。卽ち（一）不完成態（英 imperfective aspect 露 Несовершенный видъ）、（二）完成態（英 perfective aspect 露 Совершённый видъ）、（三）頻回態（英 iterative aspect 露 Многократный видъ）（四）一回態（英 semelfactive aspect 露 Однократный видъ）と名づけらる。インドヨーロッパ語族の古代にあつては、動詞の變化に於て、今日のバルトスラブ派に於ける區別と同種の區別をなすのが主であつて、所謂「時」（tense, tempus）（別項）の區別はこれより派生したものと考へられる。隨つてこの語族古代のこの變化にも、「態」（Aspekt）なる名稱を推し及ぼして與へ、或は Aktionsart（直譯的には「動作の種類」）といふ別名を與へる。ブルークマンの分類に從へば（一）Punktuelle（momentane, perfektive, aoristische）Aktion 一回動作。例、「發見する」。（二）Kursive（durative, imperfektive）Aktion 繼續動作。例、「昇る」。（三）Perfektivische Aktion 完成動作。例、「氣が附いてゐる」。（四）Iterative Aktion 繰返動作。「彼はよくかう言ひ〳〵した」の如き。（五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（四十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（四十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（四十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（四十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（四十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（四十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（四十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（四十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（四十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（四十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（五十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（五十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（五十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（五十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（五十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（五十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（五十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（五十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（五十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（五十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（六十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（六十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（六十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（六十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（六十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（六十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（六十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（六十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（六十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（六十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（七十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（七十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（七十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（七十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（七十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（七十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（七十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（七十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（七十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（七十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（八十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（八十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（八十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（八十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（八十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（八十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（八十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（八十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（八十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（八十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（九十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（九十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（九十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（九十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（九十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（九十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（九十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（九十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（九十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（九十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百二十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百二十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百二十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百二十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百二十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百二十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百二十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百二十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百二十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百二十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百三十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百三十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百三十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百三十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百三十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百三十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百三十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百三十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百三十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百三十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百四十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百四十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百四十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百四十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百四十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百四十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百四十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百四十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百四十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百四十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百五十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百五十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百五十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百五十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百五十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百五十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百五十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百五十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百五十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百五十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百六十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百六十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百六十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百六十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百六十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百六十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百六十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百六十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百六十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百六十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百七十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百七十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百七十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百七十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百七十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百七十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百七十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百七十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百七十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百七十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百八十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百八十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百八十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百八十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百八十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百八十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百八十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百八十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百八十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百八十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（百九十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（百九十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（百九十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（百九十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（百九十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（百九十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（百九十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（百九十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（百九十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（百九十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百二十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百二十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百二十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百二十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百二十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百二十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百二十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百二十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百二十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百二十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百三十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百三十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百三十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百三十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百三十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百三十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百三十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百三十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百三十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百三十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百四十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百四十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百四十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百四十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百四十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百四十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百四十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百四十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百四十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百四十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百五十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百五十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百五十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百五十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百五十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百五十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百五十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百五十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百五十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百五十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百六十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百六十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百六十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百六十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百六十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百六十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百六十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百六十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百六十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百六十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百七十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百七十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百七十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百七十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百七十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百七十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百七十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百七十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百七十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百七十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百八十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百八十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百八十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百八十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百八十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百八十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百八十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百八十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百八十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百八十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（二百九十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（二百九十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（二百九十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（二百九十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（二百九十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（二百九十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（二百九十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（二百九十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（二百九十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（二百九十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百二十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百二十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百二十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百二十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百二十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百二十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百二十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百二十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百二十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百二十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百三十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百三十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百三十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百三十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百三十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百三十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百三十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百三十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百三十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百三十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百四十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百四十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百四十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百四十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百四十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百四十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百四十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百四十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百四十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百四十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百五十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百五十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百五十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百五十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百五十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百五十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百五十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百五十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百五十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百五十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百六十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百六十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百六十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百六十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百六十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百六十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの。例、「日が暮れる」。（三百六十六）Inchoative（ingressive）Aktion 動作の始發を示すもの。例、「日が出る」。（三百六十七）Resultative Aktion 動作の結果を示すもの。例、「書き上げる」。（三百六十八）Distributive Aktion 動作の分配を示すもの。例、「一人一人」。（三百六十九）Reflexive Aktion 再歸動作。例、「洗ふ」。（三百七十）Reziproke Aktion 相互動作。例、「喧嘩する」。（三百七十一）Kausative Aktion 使役動作。例、「聞かす」。（三百七十二）Modale Aktion 樣態動作。例、「走る」。（三百七十三）Distributive Aktion 分配動作。例、「一人一人」。（三百七十四）Iterative Aktion 繰返動作。例、「書き直す」。（三百七十五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion 動作の終局を示すもの

今著聞集巻四から得て来たものと想はれる。編全體を通観して、條數もさほど多くなく、編位のものと認められ、かつ詩歌類の都良香の竹生島に於ける詩作の逸話の如きも、大體「古今著聞集」巻四から得て来たものと想はれる。編全體を通観して、條數もさほど多くなく、編

東西南北（とうざいなんぼく）　詩歌集　【作者】與謝野寛・與謝野晶子・與謝野鉄幹・平野萬里・石川啄木・北原白秋・吉井勇・木下杢太郎・高村光太郎・新詩社同人　【成立】明治四十四年【刊行】明治四十四年　【由来】明治四十四年一月に東京の新詩社から出版された。

東遊記（とうゆうき）　紀行　【著者】寺内大吉　【成立】明治四十年【刊行】明治四十年　【由来】著者が明治三十九年の夏、東京を出発して、東海道・中山道・北陸道を経て、東北地方を遊歴した紀行。

動作態（どうさたい）　文法　【独】die Aktionsart, die Aspekt　【英】aspect　【仏】l'aspect　【解説】インドヨーロッパ語族（別項）比較文法中、動詞の變化に關する事項の一。この語族中の一派なるバルトスラブ派諸國語には、今日動詞の諸變化のうち、「態」（英 aspect 露 Видъ）と稱するものがある。即ち（一）不完態（英 imperfective aspect 露 Несоверше́нный видъ）、（二）完成態（英 perfective aspect 露 Соверше́нный видъ）、（三）頻回態（英 iterative aspect 露 Многокра́тный видъ）、（四）一回態（英 semelfactive aspect 露 Однокра́тный видъ）と名づけらる。インドヨーロッパ語族の古代にあつては、動詞の變化に於て、今日のバルトスラブ派に於ける區別と同種の區別をなすのが主であつて、所謂「時」（tense, tempus）（別項）の區別はこれよりも派生したものと考へられる。隨つてこの語族古代のこの變化にも、「態」（Aspekt）なる名稱を推し及ぼして與へ、或は Aktionsart（直譯的には「動作の種類」）といふ別名を與へる。ブルークマンの分類に從へば、（一）Punktuelle（momentane, perfektive, aoristische）Aktion 一回動作。例、「發見する」。（二）Kursive（durative, imperfektive）Aktion 繼續動作。例、「昇る」。（三）Perfektivische Aktion 完成動作。例、「氣が附いてゐる」。（四）Iterative Aktion 繰返動作。「彼はよくかう言ひ〳〵した」の如き。（五）Terminative（durativ-perfektive）Aktion（繼續後）終結動作。例、「今成し上げた」等。すべて「動詞に含まれる動作が如何に行はれるかの種類・有樣を表はす」（ブルークマン）ものであつて、「法」（mood）（別項）が主觀的態度を含むに對し、「態」は客觀的事實の種類を示すといはれる。

【參考】Brugmann : *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen.* 1922. S. 493 f. = Noreen-Pollak : *Wissenschaftliche Betrachtung der Sprache.* 1923. S. 415 f. = Jespersen : *Philosophy of Grammar.* 1924. p. 286 f.　〔神保〕

陶山（すやま）　「鬼貫」を見よ。

動詞（どうし）　文法　【名稱】舊時代には多く作用言・作用の詞等の字面を用ひたが、明治になつて中金正衡の「大倭語學手引草」に創めた動詞といふ名が、田中義廉の「小學日本文典」、中根淑の「日本文典」等に採用され、大槻博士また「語法指南」や「廣日本文典」にこの稱呼を用ひてから、今日一般に廣く行はれることになつた。但し中根淑の動詞は普通の所謂形容詞をも含む。今日もこの用法をなす人に、松下大三郎・高橋龍雄氏等がある。【解説】用言（別項）の一種で、動作・作用若しくは狀態を現はす品詞。論理的に云へば、狀態概念を現はす語。例へば「讀む」「立つ」「降る」「見ゆ」「あり」など。或は動作を現はす品詞といひ、作用を現はす品詞と定義する人もあるが、動作若しくは作用を現はすものの外に、「見ゆ」の如き狀態を現はす語もあり、「あり」の如き存在を現はす語もある。「あり」の如きもののために、存在・有・存在詞といふ特別の名目を設けた人もある。併し存在も一の狀態であり、動作・作用は狀態の推移である。これを論理的範疇から云へば、動作・作用・狀態・存在、皆或る對象につきての狀態概念である。

【特徴】（性）動詞は意義より分けて自動詞と他動詞とすることがある。普通の說明によれば、自動は動詞の動作の獨り自らするもの、他動は他の事物を處分する性質のものと云ふ。動詞の自他と云ふことは、既に本居春庭が「詞の通路」にこれを論じ、黒川春村の「活語四等辨」などの說もあるが、その說くところは、おのづから然るみづから然する等の自と、他に然せらるゝ等の他との自他である。つて、今日說かれる自他は Intransitive なを自動詞、Transitive verb を他動詞と云ふ自他の區別である。即ち專ら西洋文典から學んだもので、もし西洋の國語に於ける如く、それが文法的範疇として存するものならば、自動・他動の區別も明瞭であるが、わが國語に於ては單に論理的範疇の外に出ない。他動詞には目的の語を要すると云はれる。しかしこれと所謂、自動の標準との區別が困難である。「本を讀む」の「本」は目的、「空を飛ぶ」の「空」は標準と云ふ。西洋の文法に於ける自動と他動との區別は、又その動詞が受身の形を取り得るものと、取り得ざるものとの區別と一致してゐる。わが國語に於ては、自動詞でも「親に死なれる」「子に泣かれる」など云ふことができる。それ故に、わが動詞の自他は單に意義上の論にとどまり、從つてその區別も曖昧であると云ふことは、諸家の說の一致してゐる所である。【形】動詞は叙述をなすに當つて、語形の變化を成す。例へば、「鳴く」「起きる」と云ふ動詞は、「鳥が鳴かない」「鳥が鳴きました」「鳥が鳴く」「早く鳴け」、「まだ起きない」「私も起きました」「早く起きれば」など、「なか・なき・なく・なけ」「おき・おきる・おきれ」と變る。この語形變化を活用（別項）と云ひ、變らぬ部分を語幹（別項）、變る部分を語尾といふ。四段活用・一段活用などと云ふのは、この語形變化の種類である。又未然形・連用形・終止形等、いはゆる活用形（別項）は、その變化する語形を、用法より類別したものである。（法・相・時・態）いづれの國語に於ても、動詞の形態上に現はれる變化は複雜である。それは動詞の現はす概念に結びつく論理的範疇が多樣であるからである。これが文法的形式として現はれるものに、人稱あり、數あり、法あり、相あり、時あり、態あり、或は動詞そのものの上に現はれ、動詞を助くる助動詞の上に現はれる。印歐語に於ては古代語は前者に富み、近代語は後者に富む。人稱や數は、我が國語には問題でない。次の法、即ち叙述の樣式、言ひ換へれば事實を事實として述べるか、假定とか推量とか願望とかの形で述べるかの區別、相、言ひ換へれば動作を自分がするか、人からされるか、人にさせるかと云ふ主語と動作との關係、時、言ひ換へれば動作が何時行はれるかの時間的差別、態、即ち繼續とか完了とか云ふ動作の態樣、これ等のものは何れも我が國語では主として助動詞で現はされる。受動の「取らる」「敎へらる」に對する時、初めて「取る」「敎ふ」が能動となり、「取りき」「取らむ」の過去・未來に對する時、「取る」は即ち現在となるもので、「取る」「敎ふ」そのものは、一の動詞が、一の狀態概念を現はしてゐると言ひ得るのみである。「取るべし」が推量、「行きたし」が願望を現はすに相違ないが、これ等のものは動詞の法を現はすと云ふよりは、むしろ動詞の意義の論である。もし我が國で動詞に於て法を論ずるならば、活用形に現はるゝ叙述の形式でなければならぬ。この意味で大槻博士は、（一）第一終止法・第二終止法・第三終止法（二）連體法（三）不定法（四）中止法（五）連用法（六）名詞法（七）命令法を立て、三矢博士は直說法・命令法・前提法、それに直說法を細別した終止法・連用法・連體法を立てられた。但し法の立て方には、なほ議論の餘地がある。　〔小林〕

唐詩解頤（とうしかい）　七卷　【著者】釋大典　【解說】「唐詩選」を漢文で解釋したもの。自序に「さきに余唐詩集註を著す。既にして又その英を纂りその腴を味ひ、その要領を取り、まゝ或は一二前註の缺漏を補ひ、因つて解頤七卷となし、以て學者に便す」とある。解頤とは「漢書匡衡傳に「衡說詩、解人頤」とあ

る故事に基づく。「唐詩選」の註釋書中の錚々たるものである。【佐久】

藤氏家傳（とうしかでん）「家傳」を見よ。

童子教（どうじきょう）「實語教」を見よ。

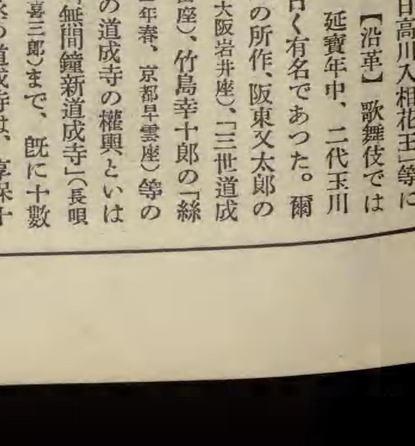
唐詩集註（たうしふちゆう）七卷【著者】釋大典【刊行】安永三年【解說】明の蔣一葵（字は仲舒）の「箋釋唐詩選」に基き、清の唐汝詢（字は仲言）の「唐詩解」その他、博く諸家の說を採り、更に宇野明霞兄弟の說と、自己の說とを加へたものである。【佐久】

唐詩選（たうせん）詩總集　七卷【編者】不明。通常これを李攀龍（于鱗）の編纂と稱してゐるが疑はしい。【成立】明代末期【由來】初め李攀龍が「古今詩刪」を選しようとして、「唐詩刪」が先づ成り、自ら選唐詩序（滄溟集中に收む）を作つたが、漢魏及び明代は選序共に未完成のまゝ殘したので、王世貞がこれを遺憾とし、續輯して刊行した。卽ち今の「古今詩刪」三十四卷である。而してその體例を一にするために、故らに唐詩の序を省いて載せなかつた。然るに「古今詩刪」は卷帙が尨大で、初學に不便であるため、狡猾なる商賈が攀龍の盛名を奇貨とし、主として「詩刪」中の選唐詩を抄錄し、且つ「唐詩品彙」「同拾遺」等の選本を以て補ひ、又「滄溟集」中の選唐詩序を取つて卷首に冠し、撰者を攀龍に託して世人の耳目を僞瞞したものである。その新に補入したものの中には、攀龍の平生の持論と齟齬するものが多く、自然にその破綻を暴露し、又次序を顚倒し、文字の異同の考訂が不十分である等、選者の眼識の闕如せることは、一見瞭然たるものがある。この書が坊賈若しくは村學究の手に成つた僞書であるにも拘らず、頗る世人に歡迎せられたのは、その編者の名を聲譽ある文人に託したのと、これを利用する書估の商略とにも依るであらうが、又一には入手に便であつた爲めである。支那の文學史上、漢文・唐詩・宋詞・元曲と稱する中にも、唐詩は支那文學の精華と云はれ、作者が蔚然として輩出し、清朝の康熙四十二年、彭定求等が聖祖の敕を奉じて編纂した「御定全唐詩」九百卷目錄十二卷には、二千二百有餘人の作者の詩四萬八千九百餘首の多きを收める程の盛觀を呈し、苟も詩學に志す者は、先づ唐詩から入るのを至當とするが、「全唐詩」の如き浩瀚な書は、購入繙讀共に至難であるために選集本を必要とするに至り、この要求によつて作られたものも少くないが、古來著名なものに、「三體詩」「唐詩鼓吹」「聯珠詩格」「唐詩品彙」「唐詩正聲」「唐詩鏡」「唐詩選」「唐詩紀」「唐詩所」「唐詩解」「全唐詩錄」「唐賢三昧集」「唐詩別裁集」「唐詩三百首」等があり、各々長短がある中に、「唐詩選」は、大體に於て各時代の代表的作家の各種の體制の詩を、比較的廣汎な範圍に亙つて網羅し、唐代詩壇を一瞥するに、簡にして要を盡した縮圖と云ひ得るものであつたことが、その流行を來す有力な所因であつた。故にこの書が一度世に出ると、先を爭つて刊行せられ、或は二三首の增減をして分別し、從つて異本が少くない。而してその多くは當時の名家の評註と稱し、中には袁宏道・鍾惺・譚元春・錢謙益等、攀龍と反對の意見を有する者の名を署するものすら現はれるに至つた。「四庫全書總目提要」には、「(唐)汝詢も亦唐詩あり、これは乃ちその註を割取す。皆坊賈の爲す所、蔣一葵の直解亦名を託せしならむ」と云つてゐる。【傳來】明・清の間、「唐詩選」の註解の作られたものは頗る多く、乾隆頃迄は盛んに行はれたが、近世に至つては支那に於て行はれず、却つて我が國に傳來したのは、恐らく德川初期、慶長・元和の頃であらう。次いで正德・享保の頃、荻生徂徠が李攀龍・王世貞を祖述して、古文辭の學を提唱して以來、藐園門下の諸生は皆これを奉じ、就中服部南郭が家塾の教科書とし、これを校刊して公にし、又「國字解」を作る等、頗るこれを尊重したので、弘く上下に流布せられ、中に山本北山・釋六如・大窪詩佛・菊池五山・賴山陽等これを排擊する者もあつたが、近く明治に至るまで長く士人の愛誦する所となつた。

【內容】全七卷に收錄してゐるところは、作家百二十八人の詩四百六十五首である（南郭校定本に據る）。これを詩體に據つて分類すれば、〔卷一〕五言古詩十四首。〔卷二〕七言古詩三十二首（以上古體四十六首）。〔卷三〕五言律詩六十七首。〔卷四〕五言排律四十首。〔卷五〕七言律詩七十三首。〔卷六〕五言絕句七十四首。〔卷七〕七言絕句百六十五首（以上近體四百十九首）。卽ち主として近體の詩を採り、就中絕句が全數の半以上を占めてゐる。これを時代別に觀れば、初唐二十九人八十五首。盛唐四十二人二百七十四首。中唐三十六人八十一首。晚唐十七人十九首。逸名氏四人六首。計百二十八人四百六十五首。卽ち盛唐の詩が最も多く、その數に於て全體の約五分の三を占め、個人としても岑參は二十五首、王維は三十四首、李白は三十三首、杜甫に至つては五十一首を數へてゐる。【價值】本書は前述の如く攀龍の名に託した僞撰の書ではあるが、何等の基づく所なく妄に選んで名を冠した僞書贋作とは類を異にし、本書の詩四百六十餘首の中、「詩刪」中に見えないのは僅に二三十首に過ぎず、餘は皆同一であるから、これを攀龍の選と看做すことも必ずしも不可ではなく、加之假令選擇の失當があるとしても、その所載の詩はまた唐詩であり、選者の如何は唐詩そのものの眞價値と相關するものではなく、且つその書は初學に取つて、唐一代の詩壇を瞥見して、その一般的知識と趣味とを得るに、最も簡便にして要を盡した所謂手頃の書である。その書が坊賈村學究の手に成つた故を以て、一概に唾棄すべきものではない。

【註釋書・參考書】箋釋唐詩選七卷 明 唐汝詢注・蔣一葵直解 ○唐詩選彙解七卷 明 徐慶 ○吳注唐詩選七卷 明 吳山 ○唐詩狐白七卷 明 李攀龍注・陳繼儒增評 ○評註增補唐詩選七卷 清 錢謙益 ○唐詩選國字解七卷 服部元喬 ○唐詩選附言 服部元喬 ○唐詩選掌故七卷 千葉玄之 ○唐詩選講釋七卷（漢文叢書本）千葉玄之 ○唐詩選箋注八卷・餘言二卷 戶崎允明 ○唐詩解頤七卷 釋顯常 ○談唐詩選 市川世寧 ○唐詩選評釋 森泰次郎 ○唐詩選新釋 佐久節 ○唐詩選評說 簡野道明 〔宇野・本多〕

藤樹（とうじゆ）儒者【姓名】中江原。字は惟命。通稱與右衞門【別號】西江・默軒・頤軒・天君等。世に近江聖人と稱す。【生歿】慶長十三年三月七日、近江國高島郡小川村に生れ、慶安元年（一三〇八）八月二十五日歿す。享年四十一。【墓所】小川村玉林寺に葬る。鄉人祠廟を作りてこれを祭り、今に至るまで衰へないといふ。【學派】初め程朱學を修めたが、後、王陽明の說を信奉し、存養本心を以て務めとなし、「孝經」を以て標旨となし、愛敬の二字を揭出して人に誨へた。我が國の學者の陽明學を唱へるのは實に藤樹に始まる。【閱歷】幼より祖父吉長に養はれた。吉長は伯耆國米子藩主加藤貞泰に仕へたが、元和三年貞泰が封を伊豫國大洲に移さるゝに及び、吉長に從つて大洲に往つた。年十一の時、「大學」を讀み「自二天子一以至二於庶人一、一是皆以レ修レ身爲レ本」といふに至り、深く感ずる所があり、初めて聖賢の學に志した。年十五にして祖父を喪ひ、その家を嗣ぎ、十七の時、禪僧の京都より來たのに就いて「論語」を學んだ。後、「四書大全」を得て能くその義に通じた。寬永二年、父吉次が歿したので近江に歸り、母北川氏を伴ひ來らうとしたが、母は海を踰えて他鄉に往くことを好まず、乃ち致仕して近江に歸り、



中江藤樹（藤樹書院藏）

滯漫錄」に、裏孔へは竹紙を張るやうに記してあるのは誤りである。又近世朝鮮李王家の雅樂隊に於て用ひるところの洞簫に、表孔五、裏孔一の外に、別に上部に清孔と稱する一孔を作り、其處に葦內の薄精を以て作つた膜孝と稱する薄紙を張るやうにしてあるが、これは朝鮮に於ける洞簫に限り、支那の古來の洞簫にはかゝる孔は存しない。

【沿革】西亞細亞又は古代埃及にて用ひられた葦簫、卽ち葦製の縱笛が西域を通して支那に入り、西域に於て旣に竹管と變じてゐた。その支那に入つた時代は大體に於て漢の武帝の頃か。漢に於てその指孔の數も增し、支那趣味に合ふやうに改造されて、唐代には殊に盛んに行はれ、玄宗皇帝亦これを善くされたといふ。支那では現在もなほ行はれてゐる。我が國では旣に古く推古天皇の頃に行はれた手綱一（第五道成寺の段）、「日高川入相花王」等によつたものも尠くない。【沿革】歌舞伎では寬文頃から旣に現はれ、延寶年中、二代玉川千之丞が演じたものは古く有名であつた。爾來、水木辰之助等の鐘入の所作、阪東又太郎の「御能道成寺」（元祿八年、大阪岩井座）、「三世道成寺」（元祿十四年、江戶森田座）、竹島幸十郎の「絲鬢頭の男道成寺」（寶永三年春、京都早雲座）等の種々の型が現はれ、後の道成寺の權輿といはれる瀨川菊之丞所演の「無間鐘新道成寺」（長唄坂田兵四郎、作曲七代杵屋喜三郎）まで、旣に十數種に達する。この菊之丞の道成寺は、享保十六年三月、江戶中村座「傾情福引名護屋」第三番目に演ぜられ、小夜の中山の無間鐘を撞いた傾城葛城が、死んで地獄の呵責に苦しむのを道成寺の鐘供養に持込んだ作である。俗に「傾城道成寺」とか「中山道成寺」とか稱した。

子藩主加藤貞泰に仕へたが、元和三年貞泰が封を伊豫國大洲に移さるゝに及び、吉長に從つて大洲に往つた。年十一の時、「大學」を讀み「自二天子一以至二於庶人一一是皆以レ修レ身爲レ本」といふに至り、深く感ずる所があり、初めて聖賢の學に志した。年十五にして祖父を喪ひ、その家を嗣ぎ、十七の時、禪僧の京都より來たのに就いて「論語」を學んだ。後、「四書大全」を得て能くその義に通じた。寛永二年、父吉次が歿したので近江に歸り、母北川氏を伴ひ來らうとしたが、母は海を踰えて他鄕に往くことを好まず、乃ち致仕して近江に歸り、孝養を怠らなかつた。又藤樹書院を興し、徒を聚めて書を講じた。明治四十年十月二十三日正四位を贈られた。【人物】人と爲り溫厚

中江藤樹筆蹟（井上通泰氏藏）

中江藤樹（藤樹書院藏）

で疾言遽色する事がなかつた。每に里民を引いて訓へ諭した。故に人は賢愚となく皆その德に化し、惡を去り善に就く者が多かつた。【著作】大學解一卷○中庸解一卷○論語解一卷○翁問答八卷○藤樹規一卷○心學文集一卷○江西文集二卷○詠草一卷○藤樹先生遺稿四卷。（漢學參照）

洞簫（どうせう）　樂器【異稱】通簫・筒簫【名義】管樂器の一。支那では今なほ盛んに行はれ、我が國では中世初期に行はれた。簫管に似た竹管であるが、簫管は下底が蠟で塞いであるのに反して、この名がある。【性質】長さ二尺內外の長い竹管の前面に五指孔を穿ち、背面に一指孔を穿ち、上端の切口の前方にU字形の凹所（歌口又は吹口）を作つたもので、これを尺八の如く縱に持ち、上端の歌口を脣に當て、左手の拇指で裏孔を、食指で表の最上孔を、無名指でその下の孔を按じ、右手の食指・中指・無名指で下方の三孔を按じて吹奏する。その調律は、近世のものは筒音より順に下方の孔から上方の孔を開く時は、支那近世音階なる上・尺（チエー）・工（コン）・凡（ホワン）・合（六）（リー）・四（五）（スイ）・乙（イー）となる。「雅

抄錄し、且つ「唐詩品彙」「同拾遺」等の選本を以て補ひ、又「滄溟集」中の選唐詩序を取つて卷首に冠し、撰者を蘂龍に託して世人の耳目を僞瞞したものである。その新に補入したものの中には、蘂龍の平生の持論と齟齬するものが多く、自然にその破綻を暴露し、又次序を顚倒し、文字の異同の考訂が不十分である等、選者の眼識の闕如せることは、一見瞭然たるものがある。この書が坊賈若しくは村學究の手に成つた僞書であるにも拘らず、頗る世人に歡迎せられたのは、その編者の名を聲譽あ

れば、初唐二十九人八十五首。盛唐四十二人二百七十四首。中唐三十六人八十一首。晚唐十七人十九首。逸名氏四人六首。計百二十八人四百六十五首。卽ち盛唐の詩が最も多く、その數に於て全體の約五分の三を占め、個人としても岑參は二十五首、王維は三十四首、李白は三十三首、杜甫に至つては五十一首を數へてゐる。【價値】本書は前述の如く蘂龍の名に託した僞撰の書ではあるが、何等の基づく所なく妄に選んで名を冠した僞書贋作とは類を異にし、本書の詩四百六十餘首の中、「詩

の書が一度世に出ると、先を爭つて刊行せられ、或は二三首の增減をして分別し、從つて異本が少くない。而してその多くは當時の名家の評註と稱し、中には袁宏道・鍾惺・譚元春・錢謙益等、蘂龍と反對の意見を有する者の名を署するものすら現はれるに至つた。「四庫全書總目提要」には、「（唐）汝詢も亦唐詩あり、これは乃ちその註を割取す。皆坊賈の爲す所、蔣一葵の直解亦名を託せしならむ」と云つてゐる。【傳來】明・淸の間、「唐詩選」の註解の作られたものは頗る多く、乾隆頃迄は盛んに

游漫錄」に、裏孔へは竹紙を張るやうに記してあるのは誤りである。又近世朝鮮李王家の雅樂隊に於て用ひるところの洞簫に、表孔五、裏孔一の外に、別に上部に淸孔と稱する一孔を作り、其處に葦內の薄膜を以て作つた覆孝と稱する薄紙を張るやうにしてあるが、これは朝鮮に於ける洞簫に限り、支那の古來の洞簫にはかゝる孔は存しない。【沿革】西亞細亞又は古代埃及にて用ひられた葦簫、卽ち葦製の縱笛が西域を通して支那に入り、西域に於て旣に竹管と變じてゐた。その支那に入つた時代は大體に於て漢の武帝の頃か。漢に於てその指孔の數も增し、支那趣味に合ふやうに改造されて、唐代には殊に盛んに行はれ、玄宗皇帝亦これを善くされたといふ。支那では現在もなほ行はれてゐる。我が國では旣に古く推古天皇の頃に行はれたので、その頃に支那から輸入されたものらしい。俗に聖德太子が尺八を吹き給うたと傳へられるが、これは所謂尺八でなくて、この洞簫であり、今も法隆寺の寶物として傳はつてゐる。奈良朝頃には我が國でも屢々行はれたが、平安朝に入つて衰へ、仁明天皇の時の樂制改革には、この樂器を雅樂器の中に入れなかつたので、遂に亡びてしまつたものらしい。朝鮮へは李朝の第四代世宗の時に、明から輸入されたといふ。今も李王家雅樂に於て用ひられてゐる。【田邊】

道成寺（だうじやうじ）　「鬼女物の謠曲」を見よ。

道成寺（だうじやうじ）　所作事【解說】能の「道成寺」から出てゐるが、また能の「三井寺」「櫻川」「望月」「石橋」等を取入れたものもあり、操淨瑠璃の「定家」（一名新道成寺）、「用明天皇職人鑑」（鐘入の段）、「道成寺現在蛇鱗」「戀女房染分手綱」（第五道成寺の段）、「日高川入相花王」等によつたものも尠くない。【沿革】歌舞伎では寬文頃から旣に現はれ、延寶年中、二代玉川千之丞が演じたものは古く有名であつた。爾來、水木辰之助等の鐘入の所作、阪東又太郎の「御能道成寺」（元祿八年、大阪岩井座）、「三世道成寺」（元祿十四年、江戸森田座）、竹島幸十郎の「絲鬢頭の男道成寺」（寶永三年春、京都早雲座）等の種々の型が現はれ、後の道成寺の權輿といはれる瀨川菊之丞所演の「無間鐘新道成寺」（長唄坂田兵四郎、作曲七代杵屋喜三郎）まで、旣に十數種に達する。この菊之丞の道成寺は、享保十六年三月、江戸中村座「傾情福引名護屋」第三番目に演ぜられ、小夜の中山の無間鐘を撞いた傾城葛城が、死んで地獄の呵責に苦しむのを道成寺の鐘供養に持込んだ作である。俗に「傾城道成寺」とか「中山道成寺」とか稱した。道行・舞・鐘入・祈り・口說・セメの六段から成る。こゝに舞踊としての形式が生れ、その後に作られた道成寺の殆ど總てが、この形式を手本とした。これを菊之丞が改訂して寬保元年正月、大阪大西芝居「傾城今樣道成寺」（道行小夜のあかつき）となり、更に修補して延享元年三月、江戸中村座「百千鳥娘道成寺」（長唄吉住小三郎、作曲七代杵屋喜三郎）一名「さなきだ道成寺」、「石橋」と「道成寺」とを結びつけたもので傾城を娘に改めた。前奏的道行所作として、宮古路節「駒鳥戀の關札」が附き、內容は道行・舞・羯鼓・手踊・石橋・鐘入・鐘のカタリ・祈り・蛇體等から成る。娘道成寺の初めで、後に幾派となく分れた。かくて寶曆三年三月、中村座中村富十郎所演の「京鹿子娘道成寺」に至つて集大成され、曲・振とも優れて道成寺物の代表作となつた。なほ多種多樣の道成寺物が生

天君等。世に近江聖人と稱す。【生歿】慶長十三年三月七日、近江國高島郡小川村に生れ、慶安元年（一三〇八）八月二十五日歿す。享年四十一。【墓所】小川村玉林寺に葬る。鄕人祠廟を作りてこれを祭り、今に至るまで衰へないといふ。【學派】初め程朱學を修めたが、後、王陽明の說を信奉し、存養本心を以て務めとなし、「孝經」を以て標旨となし、愛敬の二字を揭出して人に誨へた。我が國の學者の陽明學を唱へるのは實に藤樹に始まる。【閱歷】幼より祖父吉長に養はれた。吉長は伯耆國米

れたが、その曲節の大部分は長唄が占め、我が所作事中の最大系統をなすに至つた。

【種目】〔外記節〕家橘道成寺（寛保元年正月市村座。八代市村宇左衛門。曾我十郎役で能式道成寺）〔一中節〕壯盛花鐘入（明和五年三月中村座。太夫、二代都和中事富士田園江）。〔常磐津節〕鐘入妹背佛（寶曆三年三月市村座。舞所作の段は「花笠娘雛形」）○鳴髪鐘入櫻（寶曆九年三月市村座。鳴神參照）○初花雪入相（安永六年三月森田座。中村仲藏の清玄亡魂の道成寺。富士岡・豐名賀の兩立）○尾上の鐘忍夜話（文化七年六月市村座。双面を加味した水中鐘入の道成寺）。〔富本節〕花外太夫位（明和三年十一月森田座。鐘入、後に辨財天）○甲斐渚七面身延（天保元年六月中村座。日蓮記の道成寺。長唄との出し物）等。〔清元節〕花浪現在道成寺（明治二年正月守田座。竹本との掛合。入相花王の清姫の所作）。〔長唄〕あやめ道成寺（寶曆四年五月中村座。二代芳澤あやめの染分手綱の傳授の鐘入）○百千鳥娘道成寺（通稱、今樣道成寺。寶曆六年十一月市村座。前出「さなきだ道成寺」の增補。花道の鐘見はこの時から）○花鳳風流道成寺（寶曆八年五月中村座。嵐和歌野の輕業の道成寺）○山櫻姿鐘入（明和七年二月中村座。四代市川團十郎の男道成寺）○花勝風折烏帽子（安永三年三月市村座。今樣道成寺の修補。鐘入の型が後世の基準）○鐘掛花振袖（安永六年二月中村座。「京鹿子」の修補。亂拍子は後世に傳はる）○東鹿子娘道成寺（天明三年八月市村座。通稱、えど鹿子。道行は常磐津「娼千種錦繪」）○花街道成寺（文化七年七月中村座。道成寺の歌詞を廓咄に振つたもの）○垂帽子不器用娘（文化十二年七月河原崎座。通稱、かさね道成寺。清元との掛合）○紀州道成寺（明治三十二年三月新富座。文久元年三月、五代杵屋三郎助が作曲したものを上場。謠曲の道成寺を添劃。現流行曲）等。（双面參照）

京鹿子娘道成寺（別番附）

【京鹿子娘道成寺】長唄〔角書〕「娼から鼈頭へ乙メ掛け山櫻」〔通稱〕「京鹿子」、又は「娘道成寺」。〔別名題〕「曳各鐘最眞道成寺」「江戸櫻娘道成寺」「江戸紫娘道成寺」「結做鹿子道成寺」「花筐鹿子道成寺」「澤紫鹿子道成寺」「容顯花娘道成寺」「櫻三升娘道成寺」「亂拍子醜娘振袖」等。〔初演〕寶曆三年三月二十六日初日、江戸中村座「男伊達初買曾我」第三番目〔作詞〕藤本斗文〔立唄〕吉住小三郎〔作曲〕杵屋彌三郎〔振附〕中村富十郎・市川團五郎〔傳來〕富本——「娘道成寺」。〔別名題〕「江戸鹿子兩人道成寺」「色競二人道成寺」「京鹿子一對振袖」等。道行——「道狹夜千鳥鬢眞袖」（常磐津）「道行梅花笠」（富本）等。〔初演〕天保十一年十一月十一日初日、江戸市村座「鎭西八郎降魔鏡」第二番目大切〔作詞〕三代櫻田治助〔立唄〕二代富士田新藏〔作曲〕二代杵屋勝五郎〔振附〕四代西川扇藏・二代藤間勘十郎〔道行〕「道行兩花道振袖」（四代常磐津文字太夫。作曲、五代岸澤式佐）〔傳來〕曲・振とも傳存。但し修正されたもの。〔內容〕白拍子連理實は主馬の小金吾と同佛御前實は鎭西八郎とが、尼湖月尼實は眞鶴の精靈と同松月尼實は武藏左衞門鶴國とを同宿替りにして「京鹿子」を二人で分けて踊る。今日では三人・四人・五人道成寺等さへ行はれる。

【諸本】各流正本。江戸長唄（俗曲評釋）・日本歌謠集成（卷九・十）・歌謠音曲集（日本名著全集）・日本音曲全集（第一・第十五卷）・名曲選（名著文庫）・舞踊劇集（日本戲曲全集）・大南北全集第十五卷・默阿彌全集第二十卷等所收。

【參考】道成寺物の典據 高野辰之（日本演劇の研究第二）○道成寺考 屋代弘賢編（燕石十種三）○歌舞伎道成寺考 關根只誠（演劇叢話）○古今役者大全卷之五故實卷（寶延三年刊）○役者一口商（娘道成寺所作事傳系・演劇文庫第六）○役者全書道成寺（歌舞伎叢書）○芝居と史實 三田村鳶魚○歌舞伎圖說守隨憲治・秋葉芳美共撰○江戸時代音樂通解 町田博三○江戸近世舞踊史 九重左近 ○日本近世舞踊史 小寺融吉（東洋藝術史講座第十二）○所作事類纂道成寺物（歌舞伎研究一二）○道成寺物の系統 秋葉芳美（人間と舞臺三ノ四）○道成寺の研究佐々・楠山・鈴木等（演藝書報合同三ノ四）○京鹿子娘道成寺の型 眞如女史（歌舞伎叢八一一九六）

【秋葉】

道成寺緣起

繪卷 【解說】この緣起はまた「日高川草紙」「賢學草紙」とも呼ばれ、異本別本の類も尠くないが、就中この緣起の當の舞臺たる紀伊國道成寺所藏の二卷本が一般に世に知られてゐる。道成寺本によれば、話は醍醐天皇の延長六年の事で、熊野詣での若侍は奥州の人、女は室の部賣砂の寡婦

道成寺緣起

い。近頃この緣起に於ける大蛇化成の直接な手本に就いて、これが「華嚴緣起」（別項）、殊に義湘とその後を追うて龍女となる善妙の說話であらうといふ說が出てをり、話の筋のみならず、龍蛇の形も高山寺の「華嚴緣起」に比較すれば彼此相近似してゐる。〔田中（一）〕

堂上派

和歌 【解說】近世宮廷歌人の間に傳承された歌道の流派であつて、地下派（別項）に對立する名稱である。中世後期東常緣によつて始められた所謂古今傳授は、二條家（別項）の歌學を祖述するものであるが、宗祇の後、二條家當流・堺傳授・奈良傳授の三流に分れた。この中、二條家當流と云ふのは宗祇より三條西實隆に傳へ、公條・實枝と相承けて實枝より細川幽齋に傳へた系統で、古今傳授の主流をなすものであるが、幽齋の後宮廷と民間と二方面に分れて傳承された。前者門に山名義豐がある。後西院は皇弟靈元院に、靈元院は武者小路實陰・中院通躬・烏丸光榮及び皇子有栖川宮職仁親王等に授けた。職仁親王より典仁親王に、典仁親王より正親町公明に傳ふ。谷川士清は職仁親王に學んだ人である。（三）烏丸光廣の系統。光廣、慶長八年幽齋より傳授。その系統には光廣の孫資慶、その子光雄、光雄の孫光榮、光榮の子に光胤及び日野家を嗣いだ資枝がある。資慶の門に岡西惟中、光雄の門に松井政豐・鈴木重矩等が出た。（四）三條西實條の系統。實條は幽齋に傳授した實枝の孫であるが、夙く父を失ひ幽齋について歌學を受けた。その子に公勝及び公種（武者小路家祖）がある。公勝の子實教、公種の子實陰（別項）、實陰の子にして高松家を嗣ぎたる重季等名がある。實陰の門に、似雲・柘植知清が出た。實陰の孫實岳の門に澄月、澄月

江戸鹿兒男道成寺（正本）

口商（娘道成寺所作事傳系・演劇文庫第六）○役者全書道成寺（歌舞伎叢書）○芝居と史實（三田村鳶魚）○歌舞伎圖說（守隨憲治・秋葉芳美共撰）○江戸時代音樂通解（町田博三）○江戸近世舞踊史（九重左近）○日本近世舞踊史（小寺融吉）（東洋藝術史講座第十一）○所作事類纂道成寺物（歌舞伎研究一二）○道成寺物の系統（秋葉芳美）（人間と舞臺三ノ四）○道成寺の研究（佐々・楠山・鈴木等）（演藝畫報合同三ノ四）○京鹿子娘道成寺の型（眞如女史）（歌舞伎舊八一―九六）〔秋葉〕

道成寺緣起（だうじやうじえんぎ）　繪卷　【解說】

この緣起はまた「日高川草紙」「賢學草紙」とも呼ばれ、異本別本の類も尠くないが、就中この緣起の當の舞臺たる紀伊國道成寺所藏の二卷本が一般に世に知られてゐる。道成寺本によれば、話は醍醐天皇の延長六年の事で、熊野詣での若僧は奧州の人、女は室の郡眞砂の寡婦である。この繪卷は應永年間の作で詞は後小松院宸筆、繪は土佐光重の筆と傳へてゐるが、詞にも時に誤字や無理な當て字があり、繪としても土佐派の筆致が殆ど見られない。奧書に足利義昭の花押があつて天正以前の製作たることは明かながら、これを應永まで上せ得るか否かは疑はしい。話としては情緒纏綿、活動的であるべきに繪が存外のんきで卑俗の趣の多いのは蓋し御伽草子になり行くこの種繪卷の特色である。道成寺本以外には土佐廣周筆と傳ふる酒井忠正伯所藏の一卷本の如きも比較的世に知られてゐる。酒井家本に於ては若僧は清水寺の賢學、女は二八の姫君となり、肝心の道成寺といふ寺名さへ逸せられてゐる。物語としては道成寺よりも更に轉化したものであらうが、畫致から見れば、道成寺本とあまり製作の年代的懸隔があるほどでもない。近頃この緣起に於ける大蛇化成の直接な手本に就いて、これが「華嚴緣起」（別項）、殊に義湘とその後を追うて龍女となる善妙の說話であらうといふ說が出てをり、話の筋のみならず、龍蛇の形も高山寺の「華嚴緣起」に比較すれば彼此相近似してゐる。〔田中（一）〕

道成寺緣起（紀伊國道成寺藏）

堂上派（だうじやうは）　和歌　【解說】

近世宮廷歌人の間に傳承された歌道の流派であつて、地下派（別項）に對立する名稱である。中世後期東常緣によつて始められた所謂古今傳授は、二條家（別項）の歌學を祖述するものであるが、宗祇の後、二條家當流・堺傳授・奈良傳授の三流に分れた。この中、二條家當流と云ふのは宗祇より三條西實隆に傳へ、公條・實枝と相承けて實枝より細川幽齋に傳へた系統で、古今傳授の主流をなすものであるが、幽齋の後宮廷と民間と二方面に分れて傳承された。前者が堂上派で後者が卽ち地下派である。かくて堂上派と云ひ、地下派と云ひ、その奉ずる歌學說の根本に於ては差異なく、ただ社會的位置の相異より來た差別に過ぎないのであつて、自由研究、傳統打壞を基調として元祿頃より擡頭して來た歌壇の新機運に對しては、共に舊派の系統に屬するのである。今堂上派の系統と主なる歌人を擧ぐれば次の如くである。（一）中院通勝の系統。通勝は天正十六年、幽齋より古今傳授を受けた。通勝の子通村、孫通純、曾孫通茂、その子通躬、相ついで和歌の家となる。通茂の門に、松井幸隆・相馬昌胤等が出た。（二）八條宮智仁親王の系統。智仁親王は後陽成帝の皇弟。慶長五年幽齋より傳授、寬永二年後水尾院に授けた。後水尾院より中院通茂・飛鳥井雅章・日野弘資及び皇子後西院等に傳ふ。雅章の門に本多重世、重世の門に山名義豐がある。後西院は皇弟靈元院に、靈元院は武者小路實陰・中院通躬・烏丸光榮及び皇子有栖川宮職仁親王等に授けた。職仁親王より典仁親王に、典仁親王より正親町公明に傳ふ。谷川士清は職仁親王に學んだ人である。（三）烏丸光廣の系統。光廣、慶長八年幽齋より傳授。その系統には光廣の孫資慶、その子光雄、光雄の孫光榮、光榮の子に光胤及び日野家を嗣いだ資枝がある。資慶の門に岡西惟中、光雄の門に松井政豐・鈴木重矩等が出た。（四）三條西實條の系統。實條は幽齋に傳授した實枝の孫であるが、夙く父を失ひ幽齋について歌學を受けた。その子に公勝及び公種（武者小路家祖）がある。公勝の子實敎、公種の子實陰（別項）、實陰の子にして高松家を嗣ぎたる重季等名がある。實陰の門に、似雲・柘植知淸が出た。實陰の孫實岳の門に澄月、澄月の門に、桃澤夢宅・木下幸文等がある。夢宅の門に宮下正岑が出た。以上は幽齋の系統を引き二條派の歌學を傳へた人々であるが、その他に（五）準二條派と目すべきものがあり、姉小路家・淸水谷家・芝山家等がこれに屬す。姉小路家では實紀、淸水谷家では實業、芝山家では重豐・持豐父子等が、名ある歌人である。實業に學んだ香川宣阿は景樹の養父たりし景柄の曾祖父に當る。重豐の門よりは多田義俊、持豐の門よりは深田正韶等が出た。次に（六）冷泉家（別項）の系統がある。中世後期、上冷泉・下冷泉の二家に分れて父祖の學を傳へ、本來二條家と系統を異にするのであるが、近世に入りては上冷泉家の爲綱は、幼にして父を失つた爲め、中院通茂の敎を乞ひ、また冷泉家中興の祖と云はれる爲綱、孫爲村も靈元院より古今の傳授を受け、烏丸光榮に和歌の添削

を受けなどして、格式上多少の差異を見るのみで、歌風に於ては、二條家と殆ど隔りなきものとなつた。要するに如上の堂上派歌人達は、その據つて立つところは舊來の傳統的歌學説であり、その歌風に於て何等特筆すべきものもないのであるが、併し近世の新派に屬する人達のうち、直接間接にその教へを受けざる者は殆どなく、その點で近世新派歌壇の母胎として無視すべからざる存在である。（歌道傳授參照）

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱　○近世和歌史　同上　○大日本歌學史　福井久藏　【中島】

同人（どうじん）　俳誌　【主幹】青木月斗　【創刊】大正九年四月、大阪で發行。【解説】日本派系統の地方俳誌で、主なる同人は、岡本圭岳・湯村月村・花木伏兎等である。　【水原】

唐人殺し（たうじんごろし）　「漢人漢文手管始」を見よ。

同人社文學雜誌（どうじんしやぶんがくざつし）　雜誌　【刊行】明治九年七月創刊（初め月刊、後半月刊）。同十六年五月、第九十二號にて廢刊。東京小石川同人社。【解説】社長中村敬宇主宰。同人社には文學會社（後に文學會）といふものがあり、社長の司會の下に毎月一二回會合して、「社友ヲシテ學問文藝ヲ上進セシメ言語文章ヲ修メ善ク セシメ」る目的で、朗讀及び演説を試みた。その筆記の中、會の目的に最も叶ふものを集め、これに社長及び社長の交友の文章・詩歌を交へて出來たのが、この雜誌である。内容は歷史・傳記・學術・政治・宗教・哲理等、「凡ソ學問文藝ニ關スル古今中外一切ノ談論ヲ集錄シタル」ものの觀があるが、文藝的方面に限つて見れば、若干の譯詩・漢詩・和歌等がそれに屬するのみである。從つて主宰者中村敬宇の詩文が時の文壇の一方に影響してゐる外、雜誌全體としては何等交渉がないといつてよい。ただかゝる内容の雜誌に文學の二字を關したところに、當時の文學觀の片鱗が見える。併し純文學的見地から離れると、後年發展した思想の萌芽めくものが聊か窺知される。例へば、書口一致論（即ち言文一致論）、無主權論、教法論（基督教辯護論）の如きものである。　【柳田（泉）】

東征繪傳（とうせいえでん）　繪卷　【解説】大和唐招提寺所藏五卷。この寺の開祖鑑眞和尚が唐朝より日本に渡來して、戒律宗を弘める次第を畫いたものである。奥書によれば、永仁六年その末寺たる鎌倉極樂寺の忍性菩薩が、本寺に施入したものであつて、繪は六郎兵衞入道運行筆、詞書は美作前司宣方を初め四人の手に成つたことが知られる。繪は描寫の達者なもので、人物の目つきの鋭い點も特色であるが、殊に衣裳に好んで隈取りを施し、描線の當りの強い點の如きは宋畫の影響として注目される。作者運行に就いては本卷の奥書以外に、その經歷を明かにしないが、この繪を以てみれば、蓋し永仁當時の作家として相當に腕前の優れた人であつたことが窺はれる。當時は各宗とも祖師の繪傳が多く行はれた時代で遺品も少くないが、この繪卷の如きは、その製作の年代や由來や作家まで確かな點に、併せて逸傳の畫家蓮行の存在と作風をも知り得ることは、殊に興味ある點である。（唐大和上東征傳參照）　【田中（一）】

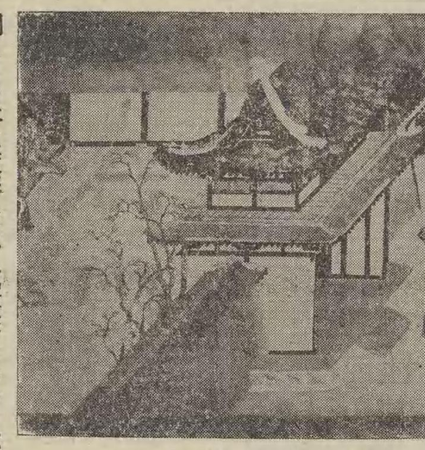
東征繪傳（唐招提寺藏）

當世阿多福假面（たうせいおたふくめん）　滑稽本一册　【作者】粥腹得心（貝原篤信に擬した平秩東作の戲名）。【名稱】主人公阿多福の名をそのまゝ題名としてある。【成立】安永九年　【諸本】滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集所收　【解説】鹽吹の多壽兵衞の店先へ醜婦のお福が來、自分の身の上を話し、生國上總から出て江戸で女中奉公をしたが、そこの主婦が亡くなり、番頭の惡計から店も衰へ、やがて裏長屋に主從四人の生活をなすやうになつたが、もとの下男の久介に藁人形を賣らせたりして、主婦の十三回忌には主家を再興させたと語る。それにつけても今時の女は我がまゝで、亭主には働かせて自分は遊んでゐる。女たるものは矢張り節約をなし、夫・姑の機嫌をとり、誠の道を行かねばならぬと說く。貝原篤信の「大和俗訓」を下世話に碎いて滑稽化したものである。　【小柴】

當世乙女織（たうせいをとめおり）　浮世草子　七册　【作者】錦文流　【名義】序に「當世乙女織とは何を以て名とす。……情の言の葉を糸で綯（つな）ぎて下心、繻と云ふ字を縦にして、萬の色を緯の糸、白紙の梭にかぞへ入れ、管城の管にまき、駑（こし）にまかせて織り顯はせば、全七の卷となりぬ。よつて當世乙女織と名付く」とある。　【刊行】寶永三年正月、大阪萬屋彦太郎板。但し序には、「寶永第二の秋」とあるから、成立は同年か。　【諸本】近世文藝叢書第四所收。　【解説】（卷一）大阪下の關之俤、（卷二）諸國並大阪之俤、（卷三）津國難波之俤、（卷四）京伏見江戸之俤、（卷五）武藏山城之部、（卷六）武州攝州之部、（卷七）難波名代法師之部と分つて、卷一・二・四・六は各四章、卷三・五・七は各三章より成る。説話の筋をいへば、（卷一）大阪の富者德藏の律義な一子德次郎、偶々惡友に誘はれて扇屋若紫に馴染んで遊蕩に耽る。父は彼を下の關の出店に追ふ。德次郎は又呼子屋みさ山に親しみて持て囃され、程なく破産する。父母はこれを愛ひ、病を得て死んだ。德次郎は大阪に歸つたが、家財等悉くなくなつてゐたので、又下の關に引返す。みさ山は長崎の客に身請けさるゝ記念とて、或る隱居より貰つた定家の色紙等貴重な品々をくれた。德次郎はこれを携へて大阪に歸り、大名に賣つて千兩を得た上、その藏元を命ぜられ、又濡荷を買つて大利を得たので、再び遊蕩癖が出た。こゝに又富士屋伊左衞門は夕霧に馴染み、破産しかゝつた頃夕霧は死んだ。或る夜の夢に杉原の精の殘した緒環を頼り、新町口の茶屋について主人の市と昔を語つた。（卷二）伊左衞門は、家業を手代に任せて諸國色修行に出で、江戸より北國・中國・長崎を經て大阪に歸る。かくて伊左衞門は剃髪して是迄堂といふ隱宅に住む。德次郎がこゝに訪ね來たので、親類より頻りに妻帶を勸むるが、およそ妻とするには地女と遊女と何れが勝るかと問ふ。伊左衞門は遊女を妻とするの非を説いて誡める。德次郎は地女の不貞の例、遊女の意氣の尊ぶべき例を引いて數十條の話をなす。これが本書の中心を成すものである。その例話は手代に通じて不貞なりし相模屋津右衞門の妻の話、夫死して四人の子を殘されながら、重手代と通じて同棲した鎌田屋喜三右衞門の妻の話。（卷三）傳五郎といふ貧しい男と契つた妓よし川、小八といふ富有な客の誘惑を斷つて一筋に傳五郎に馴染み、年季明けて世帶持茶屋大文字屋に身を賣つた。ところが玉川は病を得て腰が拔けた。親方は困じて欺いて彼女を棄てた。或る武士これを見て、大文字屋の不都合を責め、八百兩を出させた上、その家財を沒收せしめた。玉川は病癒えて家を持ち浪をその家に迎へた話。嘉吉といふ男、牙婆（きりょう）に欺かれて、百兩の手形を取られた話。（卷六）奥州二本松の僧雪堂、十二年の學寮生活の後上京して綸旨を受けたが、吉原の遊女菊川に迷うた。菊川或る怨みから妓千代崎と間違へて禿を殺したことより僉議となり、同時に雪堂の破戒並に綸旨を粗末にしたことが露はれ、死刑に處せられた話。新町の妓大磯が參宮するので、客某下男に身を窶して同伴した。工藤といふ客大磯を奪はうと二人の友と途に要して下人を買收した。客某三人に買收

當世銀持氣質（たうせいかねもちかたぎ）　浮世草子　五册　【作者】永井堂龜友　【角書】禍福廻持　【刊行】明和七年　【諸本】氣質全集（帝國文庫）所收。　【梗概】（卷一）唐物商福長屋德介といふ銀持、吳服屋遊介に誘はれて祇園に遊んだ。遊介は香取といふ妓に含めて、德介に對して愛想づかしをさせる。それより德介はこの妓を喜三郎・常次郎といふ二人と張合ふ。ために二人は大金を失ひ、家屋敷まで德介に買取られてしまふ。遊介は巧みに德介に取入り、毎日德介と島原通ひしてよい目を見る。（卷二）大阪の湧屋金右衞門といふ銀持、非常に犬好きであつた。一人娘に二度聟を迎へたが、犬の事から不緣となつた。これを知つた盜賊どもが謀つて、若い仲間を犬好きにして、まんまとその聟となり、娘も懷姙したが、一日犬が乞食を噛こに居合せた若狹人で、彼の素性をよく知る八兵衞といふ者に罵られて格鬪に及んだ末、怒つてその家を駈け出す拍子に、自分が先刻路地に置いた鍋に躓いて倒れ大怪我をした。翌くれば元日、その妻は夫を看護する間に偸んで食べた雜煮の餅を咽に詰らせて死に、與九郎兵衞も二日に死んだ。八兵衞は與九郎兵衞と格鬪の際、我が懷に落ち込んでゐた八兩入りの財布を得て、それを資本に繁昌した。（卷五）玉屋有右衞門といふ銀持、生來負け嫌ひであつた。天王寺の浮瀨（うかせ）や、道頓堀の川作にて、無理の飲食をして浮腫の病に罹り、重態であつた。が、幸に德安といふ凡醫の藥の效見えて全快し、同時に負け嫌ひの癖も癒つた。その祝に、德安は玉屋から家作まで買ひ與へられ、一生安樂の身となつた。　【溝想】角書にある通り、禍福は人生に於て、

あり、社長の司會の下に毎月一二回會合して、「社友ヲシテ學問文藝ヲ上進セシメ言語文章ヲ修メ善ク セシメ」る目的で、朗讀及び演說を試みた。その筆記の中、會の目的に最も叶ふものを集め、これに社長及び社長の交友の文章・詩歌を交へて出來たのが、この雜誌である。內容は歷史・傳記・學術・政治・宗教・哲理等、「凡ソ學問文藝ニ關スル古今中外一切ノ談論ヲ集錄シタル」ものの觀があるが、文藝的方面に限つて見れば、若干の譯詩・漢詩・和歌等がそれに屬するのみである。從つて主宰者中村敬宇の詩文が時の文壇の一方に影響してゐ



（唐招提寺藏）

朝より日本に渡來して、戒律宗を弘める次第

本】滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集所收【解說】鹽吹の多壽兵衞の店先へ醜婦のお福が來、自分の身の上を話し、生國上總から出て江戶で女中奉公をしたが、そこの主婦が亡くなり、番頭の惡計から店も衰へ、やがて裏長屋に主從四人の生活をなすやうになつたが、もとの下男の久介に藁人形を賣らせたりして、主婦の十三回忌には主家を再興させたと語る。それにつけても今時の女は我がまゝで、亭主には働かせて自分は遊んでゐる。女たるものは矢張り節約をなし、夫・姑の機嫌をとり、誠の道を行かねばならぬと說く。貝原

とうせい

衞門は、家業を手代に任せて諸國色修行に出で、江戶より北國・中國・長崎を經て大阪に歸る。かくて伊左衞門は剃髮して是迄堂といふ隱宅に住む。德次郎がこゝに訪ね來たので、親類より頻りに妻帶を勸むるが、およそ妻とするには地女と遊女と何れが勝るかと問ふ。伊左衞門は遊女を妻とするの非を說いて誡める。德次郎は地女の不貞の例、遊女の意氣の尊ぶべき例を引いて數十條の話をなす。これが本書の中心を成すものである。その例話は手代に通じて不貞なりし相模屋津右衞門の妻の話、夫死して四人の子を殘されながら、重手代と通じて同棲した鎌田屋喜三右衞門の妻の話。（卷三）傳五郎といふ貧しい男と契つた妓よし川、小八といふ富有な客の誘惑を斷つて一筋に傳五郎に馴染み、年季明けて世帶持ちとなつて後、小八に金を惠まれても受けなかつたが、家主の好意で饗應した話。飯炊女玉白人となつて名高くなつたのを、舊主それと知らずして呼んだ話。（卷四）岩戶といふ美少年、伏見の妓常磐に馴染み、勘當されて常磐と淀川に入水したのを、所の百姓等に救はれた。百姓等遊女屋にかへさず、岩戶の父に二人を與へたので、父は百兩を百姓等に贈り、百姓は五十兩を遊女屋に與へ、二人を夫婦にさせた話。京屋の妓式部、客の奈良九に馴染む。加州の客が彼女を身請けしようとするので、式部は奈良九に內通し、手附けを打たせて加州客の身請けを防いだ。奈良九は身請金に窮して江戶に走り、車善七に匿まはれ、後父の許に歸つたが、式部は彼を死んだものと思つて尼となつた。（卷五）江戶巴屋の妓玉川、浪と馴染んだ。浪はために家を追はれた。親方が二人を隔てるので、玉川は怒つて音羽の茶屋大文字屋に身を賣つた。ところが玉川は病を得て腰が拔けた。親方は困じて欺いて彼女を棄てた。或る武士これを見て、大文字屋の不都合を責め、八百兩を出させた上、その家財を沒收せしめた。玉川は病癒えて家を持ち浪をその家に迎へた話。嘉吉といふ男、牙婆に欺かれて、百兩の手形を取られた話。（卷六）奧州二本松の僧雪堂、十二年の學寮生活の後上京して綸旨を受けたが、吉原の遊女菊川に迷うた。菊川或る怨みから妓千代崎と間違へて禿を殺したことより會議となり、同時に雪堂の破戒並に綸旨を粗末にしたことが露はれ、死刑に處せられた話。新町の妓大磯が參宮するので、客某下男に身を窶して同伴した。工藤といふ客大磯を奪はうと二人の友と途に要して下人を買收した。客某三人に買收さるゝと見せて、三人を五條で會ふ約束して先に歸し、大磯と悠々參宮する話。（卷七）以上德次郎の談話に對して、伊左衞門は次の談話をなした。木屋の出羽といふ妓、紙喜といふ客の同情に依つて身請けされたが、身の振り方について、紙喜を欺いて他に嫁し、尼となるといつて二百兩を詐取せんとした。又その不實より夫に追ひ出され、權兵衞といふ者と同棲したが、又心を他に移したので、權兵衞は彼女の顏に疵をつけて自殺した話をした。こゝに素仙老法師が來て、二人の論を仲裁した上、喩へ話をなす。或る日素仙が愛染明王に淫慾の束縛を脫せんことを祈つてゐるところに、四人の女來りて、祈れどもその男子に緣の無きを怨んで、堂を壞さうとすると、明王が現はれて人間の願望の得手勝手なことを告げて諭した。〔藤村〕

當世女容氣（たうせいにんなかたぎ）「好色五人女」を見よ。

當世銀持氣質（たうせいかねもちかたぎ）

浮世草子　五冊【作者】永井堂龜友【角書】禍福廻持【刊行】明和七年【諸本】氣質全集（帝國文庫）所收。【梗概】〔卷一〕唐物商福長屋德介といふ銀持、呉服屋遊介に誘はれて祇園に遊んだ。遊介は香取といふ妓に含めて、德介に對して愛想づかしをさせる。それより德介はこの妓を喜三郎・常次郎といふ二人と張合ふ。ために二人は大金を失ひ、家屋敷まで德介に買取られてしまふ。遊介は巧みに德介に取入り、每日德介と島原通ひしてよい目を見る。〔卷二〕大阪の湧屋金右衞門といふ銀持、非常に犬好きであつた。一人娘に二度聟を迎へたが、犬の事から不緣となつた。これを知つた盜賊どもが謀つて、若い仲間を犬好きにして、まんまとその聟となり、娘も懷姙したが、一日犬が乞食を噛み、その乞食がこの盜賊聟を見知つてゐた事から惡計露見して聟は逃亡した。〔卷三〕江戶の銀持永樂屋定次郎、吉原の高雄を身請けして妾とした爲めに妻は病となつて死んだ。これに感じて定次郎は隱居し、妾を妻として京岡崎に引込んだ。所が又下女ゆきに手を附けて密に妾としたのを妻が知り、一夜妾宅に踏み込んだ。定次郎は漸く妻を宥めて家に歸れば、折しも丁度盜賊が家財を盜んで出ようとする所であつた。然るに豈計らんやこの盜賊は妻の父で、主人の浪人を救はんための盜みであり、又妾ゆきは意外にもその主人の娘であることが知れた。〔卷四〕若州小濱の者慾心深く惡事を働いて追放され、京に出て米商人俵左衞門に巧みに取入り、一廉の米屋となり、與九郎兵衞と稱したが、慾心より因業な事をして多くの人を苦しめた。或る年の大晦日に無慾な醫者の許で無理に催促をすると、そこに居合せた若狹人で、彼の素性をよく知る八兵衞といふ者に罵られて格鬪に及んだ末、怒つてその家を駈け出す拍子に、自分が先刻路地に置いた鍋に躓いて倒れ大怪我をした。翌くれば元日、その妻は夫を看護する間に偸んで食べた雜煮の餅を咽に詰らせて死に、與九郎兵衞も二日に死んだ。八兵衞は與九郎兵衞と格鬪の際、我が懷に落ち込んでゐた八兩入りの財布を得て、それを資本に繁昌した。〔卷五〕玉屋有右衞門といふ銀持、生來負け嫌ひであつた。天王寺の浮瀨や、道頓堀の川作にて、無理の飮食をして浮腫の病に罹り、重態であつた。が、幸に德安といふ凡醫の藥の效見えて全快し、同時に負け嫌ひの癖も癒つた。その祝に、德安は玉屋から家作まで買ひ與へられ、一生安樂の身となつた。

【構想】角書にある通り、禍福は人生に於て、糾へる繩のやうなものであるといふことを表はすところに目標を置いて作られたやうであるが、判然とは見えてゐない。恐らく事件の興味本位に書かれたものであらう。每卷讀切り、都合五種の銀持氣質に關する說話を綴つたものである。銀持氣質の名必ずしもよく當つてゐるとはいひ難い。〔小泉〕

當世五人男（たうせいにんをとこ）

小說　二編【作者】村上浪六【發表】前編明治二十九年八月二日より九月三十日迄、後編同年十一月一日より十二月二十七日迄、東京朝日新聞に連載。【刊行】明治二十九年十二月前編、同三十年四月後編、嵩山堂。

【梗概】川上三吉・倉橋幸三・黑田健次・上田力・吉田雄藏といふ各々一癖ある五人の書生が、隅田川の岸、橋場と千住の間の汐入村で共同苦學生活をする。その苦學生活中の悲喜

様々の挿話を浪六流の人生哲學で捏ね並べたもの、後に續出する五人各自の列傳の發端と見てよい。何れが主人公といふでもなく、別に一貫した筋の發展もない。いはば挿話の連續である。十年都門の苦學を見切つて熊野の山奥の故郷に歸る川上三吉と、これも豐後の山奥生れの少年吉田雄藏が、函根山の道中で志を語り合ふ。川上は十年の經驗から苦學の無效を說いて思ひ止まらせようとするが、吉田は我が志は我のみ知るといふので聞き入れない。川上は吉田の前途に同情し、汐入村に殘つてゐる四人の仲間に紹介してやる。こゝから四人の共同苦學生活と、四人それ〴〵の性格の描寫に入る。無禮講の月見の宴に度を外して泥棒に入られ、貧書生の生活が一層の窮を極めるが、倉橋の一策で、上田力を恩人として敬愛してゐる紳士富田正次を說いて吉田を書生にして貰ひ、且つ夜具その他の援助を得て一息つく。兄貴株の倉橋は、更に三人の衣食の道を工夫せんとし、菩薩心夜叉手の名で「居家處世」といふ論文を草して新聞に投じたが、文名俄に揚り、その新聞社の客員となる。最初の月給を得た日、黒田・上田の二人に五圓づつやつて、使ひ道を見る倉橋の腹の中も面白いが、見られる二人の性格の對照はなほ一層面白い。黒田はその全部を投じて松源樓上に一酔を買ひ、上田は東海道を半ば汽車半ば鐵脚に蹈み鳴らして、熊野の奥に川上を訪ひ、涙と共に川上の鐵石心を動かして再び都門の人とする。川上と殆ど入違ひに、黒田健次は川上の土産の獸皮幾枚を無斷我が有として浮世の紅塵萬丈に飛び出す。一方富田正次は川上の人物に惚れ込み、一女芳子の婿に欲しい樣子、芳子も窃に心あるらしく見える。芳子の名物女中お清と上田力、これも無縁の衆生ではないらしい。

【批評】「五人男」は、浪六が現代物への轉機を劃する産物であり、且つその現代物の典型を示した點で重視すべきものであり、興味の上でも一二を下らない。だがその興味には、挿話的出來事に伴ふ道化的戯謔分子が多く、文藝作品として見れば、やゝ不純なものあるを免れない。結構から云つても挿話の連續めくものであり、川上が出ないうちは中心人物が缺けてゐる氣味で、筋の運びがやゝ緊密を失してゐる。五人男の性格は何れもモデルがあるためか、個性特徴が多少描き分けられてゐるが、浪六式人生哲學の傀儡となり犧牲となつてゐるのは、歷史物と同じことである。ただそれが現代だけに、歷史物程の不自然な誇張がない。だが續編を合していへば、浪六の代表的作品の一として、今なほ一讀に値すべきものたるは勿論であらう。

【附記】この五人男には、それぞれモデルがあり、場所は大阪の高津附近源光寺裏で、時は明治二十年、作者浪六を中心にその友三人がこゝに「五人男」そつくりの苦學生活をしたものであるといふ。「當世五人男」は、前に述べたやうに、いはば五人男物の發端で、以下五人の生涯の浮沈を描いた列傳的物語と連絡して完結する。「黒田健次」三册（明治三十年）、「上田力」三册（明治三十二年）、「倉橋幸三」三册（明治三十五年）、「川上三吉」三册（明治三十六年）、「吉田雄藏」二册（明治三十八年）がそれである。【柳田（泉）】

當世芝居氣質（たうせいしばゐかたぎ）　浮世草子四卷【作者】半井金陵【刊行】安永六年板。【諸本】氣質全集（帝國文庫）所收。

【梗概】八說話より成り、凡て芝居・操・淨瑠璃等に關するもの。（卷一）（一）二條堀川邊の織屋の二男文五郎は義太夫の三味線を稽古し、師匠の弟子中の立三味線となつたが、そのために勘當されて師匠の家の厄介になり、勸められて一座に加はり、旅興行に出で、下關で女郎を連れて駈落し、京に立ち歸り、四條の義太夫座に絃澤運藏と名乘つて今では全くの玄人となつた。（二）大阪北濱に江戸積の酒屋藤右衞門の倅藤次郎は淨瑠璃に凝り固まり、晝夜稽古屋に入り浸り、留太夫の弟子となる。それより床に上つて語りたい心が募り、一座の芝居師に舁ぎあげられ、酒本砂太夫と名乘り、愈々有頂天となる。間もなく家を勘當されて芝居に雇はれたが、座中よりは邪魔物扱ひされた。（卷二）（一）芳田軍三郎といふ人形遣ひの上手が、料亭の仲居と二人の間に儲けた嬰兒を互に押しつけあふいきさつ。（二）三芳正樂といふ淨瑠璃作者の許に突然現はれた一人の幼子、この頃の作者の無氣力無努力を責め、作の心得を說く。そのいふ事が一々理にあたるも道理、この小兒こそ當時浪花にただ一人、近松の姓を名乘る近松勘次であつた。（卷三）（一）坂東國右衞門といふ敵役、容貌は敵役風に憎らしく恐ろしけれど、根は正直者であつた。或る芝居に謀叛人の役を振られ、絶句して見物人相手に問答し、却つて人氣を得たが、そのために病氣になつた。すると醫者を相手に舞臺の敵役ばりの無理をいつて困らせた。幸に典醫の治療で恢復したが、その祝ひに、仲間を呼んで河豚料理をたらふく食はせた。又節季の勘定に困つて勘定取りに下劑を振舞うて追ひ拂つた喜劇役者の滑稽味を帶びた敵役役者の話。（二）長村甚藏といふ役者の話。或る年江戸に下つたが、不評なのを胸に据ゑかね、芝居の手代を呼びつけて、江戸役者のこきおろしをした事、この役者年老いて頭禿してゐたが、或る時家に歸れば、女房は女中との間に關係ありと察して大嫉妬をなし、遂に兩人の喧嘩となつたのを甚藏は禿隱しの臺を取つて茅萱葺門を引いて說き、二人が引留むるも聽かず、行きたい所へ出て行つた事。（卷四）（一）瀧田治藏といふ者、狂言作者にならうと志し、波木宗左に從つた。或る時新狂言工夫のため、宗左は道頓堀の空家を借り、治藏等の弟子達と共に籠つた。一夜宗左・治藏二人のみ寢てゐると四つの人魂が現はれた。そして治藏に對して、これは並木宗輔等故名人の魂なりと名のり、作の祕卷を落して消えた。この卷物には、「第一氣轉、第二大膽、第三上根、第四記憶、第五堪忍」とあつた。これを授かつて治藏は一廉の作者となつた。この卷物の事は、實は治藏に教へる宗左の狂言であつた。（二）奥村彌左衞門といふ武士、芝居好きで、屋敷も芝居がかりにし、子供にも總て芝居の一藝を習はせた。ために一時は遊藝好きの殿の氣に入つたが、或る年殿の江戸上りの道中に、子供等を率ゐて、ちんち、つんつと奴の道中を囃し立てて先に立つたので、大に叱られ、追放された。それより浪人して子供等を芝居に出してゐた。或る夜、盗賊の入らうとするのを知つて、芝居がかりの名乘りを揚げて追拂つたのはよいが、狼狽して越中褌を鉢卷にし、盗賊を追うて街上に出でたので、人々の物笑ひとなつた。【小泉】

當世書生氣質（たうせいしよせいかたぎ）　小說　十七卷【作者】春の屋おぼろ（坪内逍遙）【刊行】明治十八年四月起稿、六月パンフレットの形で第一册出版、七月第二册といふ風に毎月一册宛刊行、十九年一月完成、後二册に合本した。逍遙選集第一卷・明治文學名著全集（東京堂）・明治大正文學全集所收。

【梗概】維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が養女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乘る賣れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、

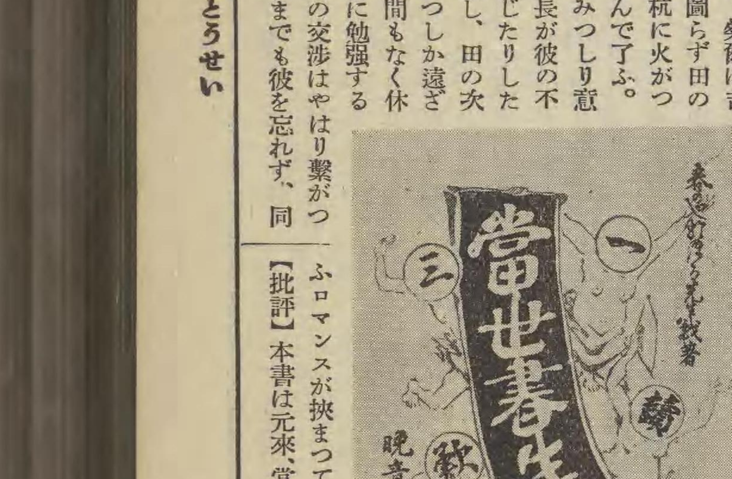
當世書生氣質（插畫）

棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顔鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふのが主眼なので、書生と關係の深い下宿生活や、牛肉屋に於ける酒間の氣焰や、温泉宿に於ける若い男女の密會や、遊廓に於ける遊びやうや、楊弓店に於ける矢取女との關係なども描き出されてゐる。官私學校が漸く旺んになるにつれて書生の數が加はり、それが東京名物の一つとなつて新時代の生活を反映するに當り、作者はこの好題目を捉へて寫實主義の新手法を以て、學生生活の雰圍氣を如實に現はし、モデルにされた高田早苗や天野爲之の倆が、見るやうに書かれてある。元來「小說神髓」（別項）の趣旨を具體化しようとしたもので、舊來の手法がまだ〳〵殘影を留めて居り、趣向に物語り風な古さが、時にないではないが、「全篇の趣向は、專ら傍觀の心得にて寫實を旨としてものした」と序文に書いてあるやうに、寫實主義の小說として第一聲をあげた月を見んといつた顯基中納言を床しがり、友人安方を誘ひ、賢者官庵を同伴し、流人舟にて須磨に着き、名主の座敷を借りて風雅の骨髓を得たと喜んだ。然るに住みついて見ると、聞きしには相違して、汐汲むものは男ばかりで、一向面白くないのに失望し、成益・安方は京に歸り、官庵のみは風邪が流行したので金儲けのために殘る。（卷二）（一）或る僧が大阪で乘合船に乘合せた田舍侍から、自作の歌二首を自慢に披露され、その拙さに、挨拶のしやうなく當惑する落語式の話。（二）金春流の能に凝つた此太郎といふ男、火災のため零落して謠の師匠となり、多くの弟子が附いたが、觀世流の流行に、友達は流儀替へを勸めたが聽かず、ために弟子を失つた話。（卷三）（一）京の宗綿といふ茶の宗匠、仲間の宗清から嫉峨に斯道の達人ありと教へられて訪ねて見る

で第一册出版、七月第二册といふ風に毎月一册宛刊行、十九年一月完成、後二册に合本した。逍遙選集第一卷・明治文學名著全集(東京堂)・明治大正文學全集所收。

【梗概】維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が愛女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乘る賣れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、忠告に從つて身を愼むやうになつた。ところが粲爾・守山の兩人と親しくする任那といふ學生の洋行送別會を、守山の父の發起で向島水神の八百松で開いた時、粲爾は吉原へ案内され、茶屋で圖らず田の次に逢つてから、燒木杭に火がついて、また學業がすさんで了ふ。粲爾の父が心配して、みつしり意見を加へる。學校の校長が彼の不身持を聞いて休學を命じたりしたので、彼も始めて恐縮し、田の次を忘れるともなく、いつしか遠ざかつて行つた。それで間もなく休學が許されて、眞面目に勉強する學生に復つたが、二人の交渉はやはり繋がつてゐて、田の次はいつまでも彼を忘れず、同棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顏鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふロマンスが挾まつてゐる。

當世書生氣質（插畫）



同上表紙（初版）

【批評】本書は元來、當時の書生氣質を寫し出すのが主眼なので、書生と關係の深い下宿生活や、牛肉屋に於ける酒間の氣焰や、溫泉宿に於ける若い男女の密會や、遊廓に於ける遊びやうや、楊弓店に於ける矢取女との關係なども描き出されてゐる。官私學校が漸く旺んになるにつれて書生の數が加はり、それが東京名物の一つとなつて新時代の生活を反映するに當り、作者はこの好題目を捉へて寫實主義の新手法を以て、學生生活の雰圍氣を如實に現はし、モデルにされた高田早苗や天野爲之の倆が、見るやうに書かれてある。元來「小說神髓」(別項)の趣旨を具體化しようとしたもので、舊來の手法がまだ〳〵殘影を留めて居り、趣向に物語り風な古さが、時にないではないが、「全篇の趣向は、專ら傍觀の心得にて寫實を旨としてものした」と序文に書いてあるやうに、寫實主義の小說として第一聲をあげたところに深い意義がある。卽ち從來の小說の主眼とした勸善懲惡の型から全く離れて、人情・風俗をあるがまゝに描寫すればよいといふ作者の主張に從ひ、そのまゝ嚴正な客觀的態度をとり、心理描寫も見るべきものがあつた。それに平易で、清新な用語や文章も、全く今までにない世界を見せた。この作品が、作者がやつと二十七歲、明治文壇がまだ黎明期にあつた際の發表であり、その頃社會に重んぜられてゐた文學士が、小說を書いたといふことが、當時の人々を驚かしたといふ插話を殘してゐる。

【參考】東京堂版當世書生氣質解題　〔高須〕

當世宗匠氣質（たうせいそうしやうかたぎ）

五册　【作者】其鳳　【刊行】天明元年　【諸本】氣質全集(帝國文庫)所收。

【梗概】〔卷一〕少將成益は、罪なくて配所の月を見んといつた顯基中納言を床しがり、友人安方を誘ひ、醫者官庵を同伴し、流人舟にて須磨に着き、名主の座敷を借りて風雅の骨髓を得たと喜んだ。然るに住みついて見ると、聞きしには相違して、汐汲むものは男ばかりで、一向面白くないのに失望し、成益・安方は京に歸り、官庵のみは風邪が流行したので金儲けのために殘る。〔卷二〕(一)或る僧が大阪で乘合船に乘合せた田舍侍から、自作の歌二首を自慢に披露され、その拙さに、挨拶のしやうなく當惑する落語式の話。(二)金春流の能に凝つた此太郎といふ男、火災のため零落して諸の師匠となり、多くの弟子が附いたが、觀世流の流行に、友達は流儀替へを勸めたが聽かず、ために弟子を失つた話。〔卷三〕(一)京の宗綿といふ茶の宗匠、仲間の宗清から嵯峨に斯道の達人ありと敎へられて訪ねて見ると、乞食小屋樣の處に汚なき老人がゐた。話をすれば甚だ尊大である。宗綿歸りて宗清を訪ね、この事を語れば、あれで若し下から出たら乞食でないかといつた。(二)大阪に田舍から出た下女、年季を勤めて、米ふみの久三と夫婦となり、夫は水汲み糠を買つて暮してゐた。この夫婦虛言のほらを吹くので、人々は陰では名をいはずに、空財先生といひ、當人の前ではそれを略して先生々々といつたので、當人は「時分々々の流行で、この頃は妙な俳名がはやる」といつた。〔卷四〕うどん屋二八郎相當の身代となり、遊蕩しようと思へど、女房の嫉妬深きに弱り、永井津女といふ色道指南に相談し、癪の療治にかこつけ、永井の家に毎日通はせ、諸遊藝等に親しませて粋としたので、二八郎は思ひのまゝに遊蕩して家をつぶした。〔卷五〕(一)夢中といふ無學の俳諧宗匠が、駕に五圓づつやつて、使ひ道を見る倉橋の腹の中も面白いが、見られる二人の性格の對照はなほ一層面白い。黑田はその全部を投じて松源樓上に一醉を買ひ、上田は東海道を半ば汽車半ば鐵脚に蹈み鳴らして、熊野の奥に川上を訪ひ、淚と共に川上の鐵石心を動かして再び都門の人とする。川上と殆ど入違ひに、黑田健次は川上の土産の獸皮幾枚を無斷我が有として浮世の紅塵萬丈に飛び出す。一方富田正次は川上の人物に惚れ込み、一女芳子の婿に欲しい樣子、芳子も窃に心あるらしく見えて第一册出版、七月第二册といふ風に毎月一册宛刊行、十九年一月完成、後二册に合本した。逍遙選集第一卷・明治文學名著全集(東京堂)・明治大正文學全集所收。

【梗概】維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が愛女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乘る賣れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、忠告に從つて身を愼むやうになつた。ところが粲爾・守山の兩人と親しくする任那といふ學生の洋行送別會を、守山の父の發起で向島水神の八百松で開いた時、粲爾は吉原へ案内され、茶屋で圖らず田の次に逢つてから、燒木杭に火がついて、また學業がすさんで了ふ。粲爾の父が心配して、みつしり意見を加へる。學校の校長が彼の不身持を聞いて休學を命じたりしたので、彼も始めて恐縮し、田の次を忘れるともなく、いつしか遠ざかつて行つた。それで間もなく休學が許されて、眞面目に勉強する學生に復つたが、二人の交渉はやはり繋がつてゐて、田の次はいつまでも彼を忘れず、同棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顏鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふロマンスが挾まつてゐる。

【批評】本書は元來、當時の書生氣質を寫し出すのが主眼なので、書生と關係の深い下宿生活や、牛肉屋に於ける酒間の氣焰や、溫泉宿に於ける若い男女の密會や、遊廓に於ける遊びやうや、楊弓店に於ける矢取女との關係なども描き出されてゐる。官私學校が漸く旺んになるにつれて書生の數が加はり、それが東京名物の一つとなつて新時代の生活を反映するに當り、作者はこの好題目を捉へて寫實主義の新手法を以て、學生生活の雰圍氣を如實に現はし、モデルにされた高田早苗や天野爲之の倆が、見るやうに書かれてある。元來「小說神髓」(別項)の趣旨を具體化しようとしたもので、舊來の手法がまだ〳〵殘影を留めて居り、趣向に物語り風な古さが、時にないではないが、「全篇の趣向は、專ら傍觀の心得にて寫實を旨としてものした」と序文に書いてあるやうに、寫實主義の小說として第一聲をあげたところに深い意義がある。卽ち從來の小說の主眼とした勸善懲惡の型から全く離れて、人情・風俗をあるがまゝに描寫すればよいといふ作者の主張に從ひ、そのまゝ嚴正な客觀的態度をとり、心理描寫も見るべきものがあつた。それに平易で、清新な用語や文章も、全く今までにない世界を見せた。この作品が、作者がやつと二十七歲、明治文壇がまだ黎明期にあつた際の發表であり、その頃社會に重んぜられてゐた文學士が、小說を書いたといふことが、當時の人々を驚かしたといふ插話を殘してゐる。

【參考】東京堂版當世書生氣質解題　〔高須〕

當世宗匠氣質（たうせいそうしやうかたぎ）

五册　【作者】其鳳　【刊行】天明元年　【諸本】氣質全集(帝國文庫)所收。

【梗概】〔卷一〕少將成益は、罪なくて配所の月を見んといつた顯基中納言を床しがり、友人安方を誘ひ、醫者官庵を同伴し、流人舟にて須磨に着き、名主の座敷を借りて風雅の骨髓を得たと喜んだ。然るに住みついて見ると、聞きしには相違して、汐汲むものは男ばかりで、一向面白くないのに失望し、成益・安方は京に歸り、官庵のみは風邪が流行したので金儲けのために殘る。〔卷二〕(一)或る僧が大阪で乘合船に乘合せた田舍侍から、自作の歌二首を自慢に披露され、その拙さに、挨拶のしやうなく當惑する落語式の話。(二)金春流の能に凝つた此太郎といふ男、火災のため零落して諸の師匠となり、多くの弟子が附いたが、觀世流の流行に、友達は流儀替へを勸めたが聽かず、ために弟子を失つた話。〔卷三〕(一)京の宗綿といふ茶の宗匠、仲間の宗清から嵯峨に斯道の達人ありと敎へられて訪ねて見ると、乞食小屋樣の處に汚なき老人がゐた。話をすれば甚だ尊大である。宗綿歸りて宗清を訪ね、この事を語れば、あれで若し下から出たら乞食でないかといつた。(二)大阪に田舍から出た下女、年季を勤めて、米ふみの久三と夫婦となり、夫は水汲み糠を買つて暮してゐた。この夫婦虛言のほらを吹くので、人々は陰では名をいはずに、空財先生といひ、當人の前ではそれを略して先生々々といつたので、當人は「時分々々の流行で、この頃は妙な俳名がはやる」といつた。〔卷四〕うどん屋二八郎相當の身代となり、遊蕩しようと思へど、女房の嫉妬深きに弱り、永井津女といふ色道指南に相談し、癪の療治にかこつけ、永井の家に毎日通はせ、諸遊藝等に親しませて粋としたので、二八郎は思ひのまゝに遊蕩して家をつぶした。〔卷五〕(一)夢中といふ無學の俳諧宗匠が、駕

に五圓づつやつて、使ひ道を見る倉橋の腹の中も面白いが、見られる二人の性格の對照はなほ一層面白い。黑田はその全部を投じて松源樓上に一醉を買ひ、上田は東海道を半ば汽車半ば鐵脚に蹈み鳴らして、熊野の奥に川上を訪ひ、淚と共に川上の鐵石心を動かして再び都門の人とする。川上と殆ど入違ひに、黑田健次は川上の土産の獸皮幾枚を無斷我が有として浮世の紅塵萬丈に飛び出す。一方富田正次は川上の人物に惚れ込み、一女芳子の婿に欲しい樣子、芳子も窃に心あるらしく見えて第一册出版、七月第二册といふ風に毎月一册宛刊行、十九年一月完成、後二册に合本した。逍遙選集第一卷・明治文學名著全集(東京堂)・明治大正文學全集所收。

【梗概】維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が愛女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乘る賣れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、忠告に從つて身を愼むやうになつた。ところが粲爾・守山の兩人と親しくする任那といふ學生の洋行送別會を、守山の父の發起で向島水神の八百松で開いた時、粲爾は吉原へ案内され、茶屋で圖らず田の次に逢つてから、燒木杭に火がついて、また學業がすさんで了ふ。粲爾の父が心配して、みつしり意見を加へる。學校の校長が彼の不身持を聞いて休學を命じたりしたので、彼も始めて恐縮し、田の次を忘れるともなく、いつしか遠ざかつて行つた。それで間もなく休學が許されて、眞面目に勉強する學生に復つたが、二人の交渉はやはり繋がつてゐて、田の次はいつまでも彼を忘れず、同棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顏鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふロマンスが挾まつてゐる。

當世書生氣質（插畫）

同上表紙（初版）

籠に乘り、芭蕉の句を我が句とし、貫之の歌を我が歌として駕籠舁きに誇り、その追從を喜び酒を振舞うたが、向うから來る駕籠舁きがこちらの駕籠舁きへ「顏の色がよい」と挨拶したのに對して、こちらのが「オヽテヤ、芭蕉の貫之樣の御振舞」といつたので、供した弟子達はこの一言に恥ぢて逃げ去つた。(二)歌さへ詠まなければ、良い人だと蔭口言はるゝ人が、短册の兼題を讀みかねて困じてゐるのを、その息子が側から助けてやつた話。

【解說】和歌・俳諧・茶道などの風雅に關する說話を集めたもので、卷一・四は各々一話、卷二・三・五は各々二話から成つてゐる。宗匠氣質の名に相應しくない話もあり、落語式の滑稽話もあり、興味本位の話を集めたものと見える。〔小泉〕

當世導通記 たうせいだうつうき

滑稽本　橫綴　中本一册【作者】天竺老人(萬象亭)【名稱】道中記の字音に擬して導通記とし、それに當世を冠したのである。【刊行】天明二年【題材】息子が通人になるまでの人生の過程を道中記に擬して記したものである。

【梗概】道中記風に、山川或は街道を描いてある。例へば最初に、「むすこ」と記し、こゝは息子郡部屋住村である。ふじゆうの山が聳え、いき杉の並木の向ふに半可村があり、一里塚のつうの木の傍に似た山がある。山越えするが上滑りする痴漢(こけ)の道である。これより「きん〳〵」村、「髮の上びんさき」村などがあり、喜世留・洒落・常神・辰巳・魂膽・南國・靑樓・やりくり・借金・なぐさみ・ばくなん・かぶり・勘當などいふ順序の宿場を經て、やがて息子が放蕩の結果、勘當されるまでの道中記である。各々の地名・舊蹟などを巧みにもぢつてゐる。

【構想】人生の過程を繪圖や道中記に託する考案は、相當古くから行はれてゐて珍らしい趣向ではない。寶曆六年刊の「人間一生善惡道中獨案內」は、既に先鞭をつけてゐる。併し寓意的であるため自然教訓の色彩を持つてゐる。天竺老人はこれを教訓的に見ようとはしてゐないで、これを滑稽化さうとしてゐる。その點は、確かに成功してゐる。洒落本・黃表紙の影響も可なりに見られる。【影響】教訓的にも非教訓的にも、本書の構想は後に影響してゐる所が多い。天明六年の滑稽本「無彈砂子」(別項)は、この趣向を襲ひ、文政十二年の「浮世名所圖會」(別項)なども明かに本書の影響を受けたものである。〔小柴〕

當世虎の卷 たうせいとらのまき

「契情買虎之卷(けいせいかひ)」を見よ

當世七癖上戶 たうせいななくせじやうご

滑稽本　二卷三册【作者】式亭三馬【名稱】劉伯倫に酒德頌あり。無くて七癖、酒客には樣々の酒癖がある。それを書いた意で、七癖上戶といふ。なほ別名「新水鳥記」は、地黃坊の「水鳥記」(別項)に倣つて新に作る意。【刊行】文化七年【諸本】三馬傑作集(帝國文庫)・滑稽文學全集所收。【解說】書名に七癖とあるが、實は腹立上戶・笑上戶・泣上戶・利屈上戶・けちけち上戶・ぐび〳〵上戶・愚癡上戶・默止上戶、通計八種を書いてある。彼は既に「酩酊氣質(なまゑひかたぎ)」(別項)を文化三年に出して、醉客の性癖の樣々を寫してゐる。本書はそれが好評に刺戟されて筆を執つたもので、一讀高座の落語を思ひ出させるものがある。作者も執筆の際、落語を考へてゐたに相違あるまい。〔小柴〕

當世下手談義 たうせいへただんぎ

教訓本・滑稽本　五册【作者】靜觀坊好阿【名稱】正しくは、「いまやうへただんぎ」と訓む。【刊行】寶曆二年【題材】江戶文化の爛熟期たる當時の墮落の風潮を捉へ、これを批判して教訓的の筆誅を加へんとしたものである。故に演劇や豐後節や、當時の開帳などの流行物を俎上に上げてゐる。

【梗概】一卷には、工藤祐經が靈芝居へ言傳せし事。二卷には、八王子の臍翁座敷談義の事。惣七安賣の引札せし事。三卷には、娛足齋園茗小栗の亡魂に出逢ふ事。足屋乃道千賣卜に妙を得し事。四卷には、鵜殿退卜徒然草講談之事。五卷には、都路無字大夫江の島參詣の事の話で通計七話。一二の例をあげると、京都北野の地獄辻子に前句冠句の點者をしてゐた竹生堂馬牛も近年世間に上手が數多あり、生計も困難となり、以前芝居に勤めた關係上、緣故を賴つて江戶へ下る。途中富士の裾野で異樣の武士に呼び留められ、一通の書狀を託される。その武士は工藤祐經の亡靈で、近年の正月芝居は曾我狂言が人氣を博し、就中祐成・時致等に聲援があり、自分は敵役として一向顧みられない。これは作者の手落ちであるばかりでなく、この頃の作者は心中物などを好んで書く傾向がある。これは社會の婦女子や子弟を毒する事が甚だしい。又俠客物を見ても武士に對して不遜の極みである。芝居が社會を墮落せしむるものであると滔々と論じ、遂に煙草の煙と共に消えてしまつた(卷一)。近年豐後節が流行し、武士も町人も口吟してゐる。誠に嘆かはしいことで、好色本に節附けした淫聲とも言ふべきである。こゝに都路無字大夫が、豐後節の上達を祈願するために江の島辨財天に參籠する。そこに一人の僧があり、大に豐後節を難じ、一般の墮落も豐後節に基因するものである。この際最も勇壯なる土佐節を勵めといふ。無字大夫もその言に從ひ、終に江戶に於て土佐節の名手として名をあげるに至つた(卷五)。

【構想】世道人心の頽廢を嘆いての教訓書であるが、俗耳に入り易いやうに滑稽味を持たせて書いたもので、本書の序文を見てもその抱負の一端が知られる。即ち、「貝原先生の大和俗訓・家道訓は、むく〳〵和々(やはく)として極上々の能化談義、自笑其磧が娘形氣、息子形氣は表に風流の花をかざり、裏に異見の實を含、見るに倦まず、聞に飽かず、是を當世上手の所化談義に比すべし」として、自らを新米所化の稽古談義としてゐる。從つて好阿が、一方心學(別項)の影響と、「大和俗訓」などの教訓本を一層通俗化するために執筆したといふことが肯定される。そしてそれがためには、特に談義風に書くのが適當であつた。從つて一人の教化者が諄々として說くといふ態度であり、現世の事物を批判的に觀察し、勸善懲惡に結びつけてゐる。卷三に見える娛足齋園茗小栗の亡魂に出逢ふの事を見ても、小栗判官の亡靈が、嘗て回向院で小栗判官兼氏の像並に一刀三禮の照天姬の像の開帳のあつた如きは僞物で、當今の開帳は何れも山師的で信ずるに足らずとしてゐる。そして兎も角町人たるものは、町人の本分を守つて町人道に勵むべきが第一である。「商人の學問には史記も左傳も入り申さぬ。求林齋の町袋、關氏の冥加訓、藤井蘭齋の和漢爲善錄、商人夜話草、家內用心記抔を晝夜家業のひまに讀むがよし」(八王子の臍翁座敷談義の事)といふのが根本思想であつた。そして著者が自ら洛陽の沙彌といひ、且つ談義といふ點に佛教的思想の多分に存してゐることも十分察し得られる。【影響】作者自身が本書を寶曆二年の正月に開板して、續刊として「教訓續下手談義」を同年の秋に刊行してゐる。この事實は、既に「當世下手談義」に豫告もしてゐて、豫定の事實でもあつたらうが、また「當世下手談義」の世評が、さまで惡くなかつたといふことも考へられる。寧ろ好評であつたればこそ、別な作者によつて寶曆三年には「評判當風辻談義(いをやう)」、同四年には「下手談義聽聞集」が出板せられたのであらう。この二書は反駁であり抗辯であつた。かくして教訓書の俗化を中心にして正統を行くものと、反抗的氣持を加味した談義風で行かうとするものとに分れた。前者に屬するものとしては、伊藤單朴の「教訓雜長持」(別項)などである。後者に屬するものは、風來山人の「風流志道軒傳」(別項)などである。兎も角、この「當世

十三年增して三十二卷とし、乾隆四年更にこれを現今の三十卷に改めた。これが即ち「唐宋八大家文讀本」である。德潛、字は確士、號を歸愚と云ひ、乾隆四年の進士で、同三十四年九十七歲を以て歿した。その選する所に、「古詩源」十四卷、「唐詩別裁集」二十卷、「明詩別裁集」十二卷、「國朝詩別裁集」三十二卷、「補遺」四卷等がある。また詩を善くし、全集がある。

【傳來】乾隆四年本書が完成するや、顧祿百といふ者が陸闇亭と計り、資を投じてこれを刊行した。その我が國に將來せられたのは、江戶期中葉以後で、文化十一年、官に於てこれを刊行して以來、忽ちにして學者の景仰する所となり、都鄙到る處に流行し、藩學・私塾共に必ずこれを教科書とし、村瀨誨輔は「續編」を作り、賴山陽は「增評」を著はし、川西潛は「文格」を撰し、野本耕は「考異」を作る等、その他長を陶鎔す。六朝の後にして、もと文字の中興なり。この時、雄深雅健にして、力之と角するものは、柳州(柳)なり。廬陵(歐)は、力を昌黎に得て、上孟子を窺ふ。老泉(老蘇)の才は、橫矯たること龍蛇の如く、東坡(大蘇)の才は、大にして一瀉千里、純ら(もつぱ)氣を以て勝る。潁濱(小蘇)は、渟蓄淵涵、南豐(曾)は、經術に深湛し、又一變す。要するに皆正人君子の文運を維持するもの。半山(王)の文は、純粹狼戾、互に見ゆ。芟りて之を存す、人を以て言を廢することなくんば可なり云云」と、蓋し評し得て能くその要を得たものである。

【史的地位】春秋戰國の頃は、單に東洋の文學史上に於けるのみならず、世界の人文史上に就いても、實に儔罕(たぐひま)れな燦爛たる時代で、九流百家の徒が相繼いで輩出して互にその精を競ひ、英華は一時に煥發し、曠世の鉅觀を呈し古代に溯り、それ自身に於ては整雅秀美な形式であつて、必ずしもこれを一概に排斥すべきものでないことは云ふまでもないが、これが一步濫用過巧に近づく時には、淫柔輭弱の弊に流れて文氣を萎微せしめ、思索的能力を失つた形式的律語化に墮する事を免れない。この弊の極まる所は、終に先秦諸子の如き旺盛な氣力と骨格とを缺く四六の濁流が、數百年の長きに亙つて南北に漲溢したのである。而も勢の窮まるところ氣風を一變して唐代の文運復興となり、古文復興の大事業の上に、更に一步を進めて、支那文學史上空前絕後の盛觀を呈するに至つたのであるが、その機運を鼓吹した先驅者は、殆ど同時に偶(なら)び出た韓・柳の二大家であつて、歐陽脩・三蘇以下の諸子に至つて、鬱然繁盛を極めたのである。本書は、唐・宋二代に於ける代表的文人八家の文を

る。例へば最初に、「むすこ」と記し、こゝは息子郡部屋住村である。ふじゆうの山が聳え、いき杉の並木の向ふに半可村があり、一里塚のつうの木の傍に似た山がある。山越えするが上滑りする痴漢の道である。これより「きん〳〵」村、「髪の上びんさき」村などがあり、喜世留・洒落・常神・辰巳・魂膽・南國・青樓・やりくり・借金・なぐさみ・ばくなん・かぶり・勘當などいふ順序の宿場を經て、やがて息子が放蕩の結果、勘當されるまでの道中記である。各々の地名・舊蹟などを巧みにもぢつてゐる。

實は腹立上戸・笑上戸・泣上戸・利屈上戸・けちけち上戸・ぐび〳〵上戸・愚癡上戸・默止上戸、遊計八種を書いてある。彼は既に「酩酊氣質」（別項）を文化三年に出して、醉客の性癖の様々を寫してゐる。本書はそれが好評に刺戟されて筆を執つたもので、一讀高座の落語を思ひ出させるものがある。作者も執筆の際、落語を考へてゐたに相違あるまい。【小柴】

當世下手談義　教訓本・滑稽本　五册　【作者】靜觀坊好阿【名稱】正しくは、「いまやうへただんぎ」と訓む。【刊行】寶

者自身が本書を寶暦二年の正月に開板して、續刊として「教訓續下手談義」を同年の秋に刊行してゐる。この事實は、既に「當世下手談義」に豫告もしてゐて、豫定の事實でもあつたらうが、また「當世下手談義」の世評が、さまで惡くなかつたといふことも考へられる。寧ろ好評であつたればこそ、別な作者によつて寶暦三年には「評當風辻談義」、同四年には「下手談義聽聞集」が出板せられたのであらう。この二書は反駁であり抗辯であつた。かくして教訓書の俗化を中心にして正統を行くものと、反抗的氣持を加味した談義風で行かうとするものとに分れた。前者に屬するものとしては、伊藤單朴の「教訓雜長持」（別項）などである。後者に屬するものは、風來山人の「風流志道軒傳」（別項）などである。兎も角、この「當世下手談義」は、滑稽本を生む母胎ともいふべき點で重要視される。【小柴】

唐船　「唐事物の諷曲」を見よ。

唐宋八家文　文總集　三十卷　【編者】沈德潛【本名】「唐宋八大家文讀本」【成立】乾隆四年（皇紀二三六九）【由來】唐宋二代を通じて文人作家の數は決して尠くないが、その間に於て八大家を選定することは、明初の朱右の「八先生文集」（今傳はらず）に始まり、唐荊川（順之）の「八大家文格」、茅坤（鹿門）の「八大家文鈔」、儲同人の「八大家類選」等が相繼いで現はれた。鹿門の「文鈔」は、韓文十六卷、柳文十二卷、歐文三十二卷、附五代史鈔二十卷、王文十六卷、曾文十卷、蘇洵文十卷、蘇軾文二十八卷、蘇轍文二十卷、都合一百六十四卷あり、儲同人の「類選」はこれに增補を加へ、沈德潛はこの書に基づいて、更に八家の全集に據り、拔萃して二十四卷とし、後、雍正十三年增して三十二卷とし、乾隆四年更にこれを現今の三十卷に改めた。これが卽ち「唐宋八大家文讀本」である。德潛、字は確士、號を歸愚と云ひ、乾隆四年の進士で、同三十四年九十七歲を以て歿した。その選する所に、「古詩源」十四卷、「唐詩別裁集」二十卷、「明詩別裁集」十二卷、「國朝詩別裁集」三十二卷、「補遺」四卷等がある。また詩を善くし、全集がある。【傳來】乾隆四年本書が完成するや、顧祿百といふ者が陸閶亭と計り、資を投じてこれを刊行した。その我が國に將來せられたのは、江戸期中葉以後で、文化十一年、官に於てこれを刊行して以來、忽ちにして學者の景仰する所となり、都鄙到る處に流行し、藩學・私塾共に必ずこれを教科書とし、村瀨誨軸は「續編」を作り、賴山陽は「增評」を著はし、川西潛は「文格」を撰し、野本耕は「考異」を作る等、その他學者の評釋するものは、擧げて數ふべからざるものがあり、爾來口に文を言ふ者は、必ず範をこれに取るに至つた。

【內容】韓愈文六卷、柳宗元文三卷、歐陽脩文五卷、蘇洵文三卷、蘇軾文七卷、蘇轍文二卷、曾鞏文二卷、王安石文二卷、都合三十卷。本書はもと初學の讀本たることを目的としたものであるから、每篇に段落・評點を附し、總評を加へ、前人の批評は、その議論の精當なものを擇んでこれを採錄し、また文中の記事の他に關係のあるものは、或はこれを史傳雜志に考證し、或は錄して總評とし、讀者をして兩々相證引するに便ならしめた。編纂の態度が懇切周到を極めたものであつた上に、その選擇も亦概して當を得たものであつたので、頗る世に行はれた。彼は凡例の中に八家を評して云ふ、「（韓）昌黎は孟子に出入し、司馬子長を陶鎔す。六朝の後にして、もと文字の中興なり。この時、雄深雅健にして、力之と角するものは、柳州（柳）なり。廬陵（歐）は、力を昌黎に得て、上孟子を窺ふ。老泉（老蘇）の才は、橫矯たること龍蛇の如く、東坡（大蘇）の才は、大にして一瀉千里、純ら氣を以て勝る。穎濱（小蘇）は、淳蓄淵涵、南豐（曾）は、經術に深湛し、又一變す。要するに皆正人君子の文運を維持するもの。半山（王）の文は、純粹狼戾、互に見ゆ。芟りて之を存す、人を以て言を廢することなくんば可なり云云」と、蓋し評し得て能くその要を得たものである。

【史的地位】春秋戰國の頃は、單に東洋の文學史上に於けるのみならず、世界の人文史上に就いても、實に儻罕れな燦爛たる時代で、九流百家の徒が相繼いで輩出して互にその精を競ひ、英華は一時に煥發し、贇世の鉅觀を呈したが、その後、幾ばくもなくして所謂八代の衰を招來した。その間は、唯々社會維持の觀念に於て活潑を缺いてゐたばかりでなく、文學も亦浮華纖弱に流れて、內容外形、兩つながら腐敗を極めたのであるが、爾後殆ど千年の歲月を經て、唐代の韓・柳二家に至り、復古の機運が漸く熟して、唐・宋二代の文運の盛榮を大成する基礎を造つた。所謂八代の文章の衰微は、全く四六文の盛行に在るとも云ひ得る。換言すれば奔放自在であるべき散文が、至大の拘束を受けて律語化しなければならなかつたことに存する。四六文とは、その語を四六にし、その辭を偶儷にし、その聲を諧協せしめようとするもので、或はこれを駢體、又は駢儷體とも謂ふ。四六はもと支那に於ける言語の發聲上、人性の自然に發して文章の粧飾に供せられたもので、その起原は遙かに古代に溯り、それ自身に於ては整雅秀美な形式であつて、必ずしもこれを一概に排斥すべきものでないことは云ふまでもないが、これが一步濫用過巧に近づく時には、淫柔輭弱の弊に流れて文氣を萎微せしめ、思索的能力を失つた形式的律語化に墮する事を免れない。この弊の極まる所は、終に先秦諸子の如き旺盛な氣力と骨格とを缺く四六の濁流が、數百年の長きに亙つて南北に漲溢したのである。而も勢の窮まるところ氣風を一變して唐代の文運復興となり、古文復興の大事業の上に、更に一步を進めて、支那文學史上空前絕後の盛觀を呈するに至つたのであるが、その機運を鼓吹した先驅者は、殆ど同時に偶び出た韓・柳の二大家であつて、歐陽脩・三蘇以下の諸子に至つて、鬱然繁盛を極めたのである。本書は、唐・宋二代に於ける代表的文人八家の文を選錄したもので、中世に於ける復古文學の大觀と謂ひ得るであらう。【價値】八家の選定に就いては、古來學者の間に異論が無いではない。宋の呂東萊の「古文關鍵」二卷に、唐宋の作家八人の文を載せてゐるが、彼の八家は韓・柳・歐・曾及び三蘇の外に、張耒を取つて王安石を取らなかつた。我が賴山陽の如きは曾鞏を八家の中に入るべからずとして、「余曾の文を喜ばず、況んや三蘇を讀んで此に至れば、快友と談じ龍めて、更に紗帽惡に逢ふが如く、安んぞ悶々たらざるを得んや」と云つてゐる。惟ふに、王安石を排するのは、安石の性行に慊焉たらざるものがあるからであつて、文章家としての王は、優に八家に比肩するに足るもので、決してその人を以てその言を廢すべきものではない。曾鞏に至つては、その文はもとより三蘇等の文と趣を異にして

ゐるけれども、而も彼には又彼獨自の、三蘇以外の特色があり、彼を採るのは必ずしも不當ではない。要するに、八家の選定は大體に於て穩當であり、且つその文の選擇も亦大過ないものと云ひ得るであらう。

【註釋書】增評唐宋八家文讀本三十卷 顧錫疇 ○唐宋八家文讀本考異二册 野本耕 ○點注唐宋八家文讀本三十卷 川上慶樹 ○唐宋八家文讀本摘注二卷 栗山還成等 ○唐宋八家文讀本摘解八卷附錄一卷 服部富三郎 ○唐宋八家文讀本（漢文大系本）三島毅評

【參考】支那文學史 古城貞吉 【宇野・本多】

道中龜山噺 どうちゅうかめやまばなし

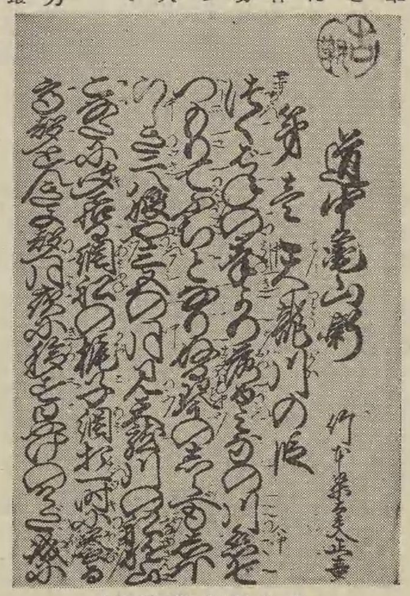
【作者】近松半二 【初演】安永七年七月十七日初日、大阪北新地芝居、竹田萬治郎座 【諸本】近松半二淨瑠璃集（續帝國文庫）所收 【題材】石井兄弟の龜山の仇討を扱つてゐる。話の略筋は、

信州小諸の城主青山因幡守の家臣石井宇右衞門は主君に從つて大阪に在るうち、大津に住む緣類の浪人赤堀遊閑の類みで、その一子源五右衞門を引取つて武藝等を仕込んでゐたが、源五右衞門は多少槍術の心得があるのを誇り、弟子を取つたりなどしたので、宇右衞門はその生兵法を戒めた。源五右衞門は却つてこれを怒り、仕合を申込んだが宇右衞門に打負かされた上、再び異見を加へられたのを深く恨み、一夜その外出先から歸宅の所を槍で突き殺して逐電した。宇右衞門の長男兵右衞門は泊り番で居合せず、次男源藏、三男半藏は五歳と二歳に過ぎなかつた。兵右衞門は暇を乞うて仇を狙つたが中々知れず、止むなく仇を誘き寄せるため大津なるその父遊閑を討ち捨て、互に相狙ひとなつたが、美濃で仇のために騙し討にされた。源藏・半藏は成長の後さま〴〵辛苦を重ね、元祿十四年五月九日、伊勢龜山の城内三の丸の石垣御門の下で、城主板倉侯の家中となり、赤堀水之助と稱してゐる仇を討ち取つた。

この一件は、父が討たれてから二十九年目、兄が殺されてから二十一年目といふ長年月を要したものであり、又相狙ひといふ點もあり、當時評判の高かつたもので、翌十五年には浮世草子「元祿曾我物語」（別項）が刊行され、同年九月九日からの竹本座の「新一心五戒魂（一心五戒魂の再演）」の切淨瑠璃として「道中評判敵討」が上場された。その略筋は、

赤松源次左衞門に討たれた石田宇左衞門の倅傳之丞・半之助は身をやつし、半之助は草履取森助となつて、佐々木波之丞と變名仕官する赤松方に奉公してゐたが、その娘と戀仲となる。赤松が倅に身の上を述懷するのを聞いた森助が駈け出すのを娘が留めて爭ふうち赤松に發見されたが、赤松は奉公人請狀を森助に返し與へる。傳之丞・半之助はめでたく仇討を遂げる。

といふので、その全文は藤井乙男氏によつて紹介された（江戸文學叢說・淨瑠璃稀本集所收）。なほ同氏の言の如く「聲曲類纂」に、「百日曾我」を龜山仇討の作としてゐるのが誤りなる事は、饗庭篁村が指摘したが、篁村がこの「道中評判敵討」を近松の作としてゐるのは採り難い。詞章・趣向ともに、さしたる事なく、ただ際物として喜ばれたかと思はれる。「道中龜山噺」は淨瑠璃としてはこれに次ぐものであらう。



道中龜山噺（正本）

【梗概】〔第一〕（天龍川の段）石井兵衞の妻お來は娘お時を伴ひ、天龍川に船遊山し、香川左市に逢ふ。赤堀水右衞門外二人が醉つて騷ぐので、お來は香箱を投げてその場を逃れる。翌日見附の陣屋で水右衞門は、「昨日天龍川で主ある女と契つた」と言ひふらしたが、これを聞いた石井兵衞は、その殘した香箱を見て妻の所持品なるに驚く。〔第二〕（日待の段）兵衞は日待の催しに水右衞門その他若侍達を招く。お來の配慮でお時と香川左市の忍び逢つたのを知つた水右衞門は、お來に不義を迫るのでお來はこれに應じた態に見せる。兵衞はお來の首を討つて水右衞門に迫り、更に公金を盜んだ科を責めるので、水右衞門はこれを斬つて逃げ去る。〔第三〕（龜山屋舖の段）龜山の家臣石井源藏は兵衞の長女岡野の聟で、苗字を讓り受け劍術の師匠であるが、水右衞門を探るためわざと御前での立合に負けて暇を乞ふ。源藏の無氣力を怒つた母妙因、妻岡野、妹お時と左市、若黨中野藤兵衞等はその本心を知つて喜ぶ。〔第四〕（刀屋の段）兵衞の倅兵助は、吉兵衞と稱して大阪の刀屋宇右衞門に奉公し、娘おみのに惚れられてゐる一方、傾城江川とも戀中である。おみのに惚れた番頭嘉七が吉兵衞に盜人の汚名を着せ、迎ひに來た姉お島（岡野）の顏に燒鐵を當てる。宇右衞門は姉弟の素性を聞き、金を與へて出立さす。〔第五〕（大井川の段）水右衞門を追ふ藤兵衞が川越共を相手に立ち廻り、やうやく向岸に着いたが、水右衞門等に嬲り殺される。水右衞門はその所持の狀を見て、石井兵助を殺したのだと思ふ。〔第六〕（在所の段）百姓又四郎は、娘おくらと石井源藏とが契つて生んだ力松と共に住んでゐる。源藏が尋ねて來て、又四郎が故主として逗留させてゐる浪人を水右衞門と知り、又四郎は自害する。源藏は又四郎に義理を立て、水右衞門の面體を見屆けたのみで止まる。〔第七〕（追善の段）龜山の石井の宅で、母妙因が水右衞門を釣り寄せようと計つたが、その父濱田祐軒が代つて來る。兵助は仲間に扮して祐軒の歸宅を送る途上、これに斬りかゝり、斬り倒された風をして下から刺し殺す。〔第八〕（敵討の段）遠州からの使者で水右衞門の惡事分明し、兵助・岡野・お時・左市・力松等は源藏の檢使の下に水右衞門等と立ち合ひ、めでたく仇を討ち果す。

【構想・影響】「道中評判敵討」の簡單なのを多くの人物・趣向によつて複雜化したが、全體の筋はかなり徹つてゐる。「天龍川の段」から「日待の段」へかけての香箱の間違ひの趣向は、講釋の「加賀騷動」の中にも採られてゐる形式の說話で、後に尾崎紅葉も「東西短慮の双」の中に用ひてゐる。「龜山屋舖の段」の源藏の一件は別に珍しい趣向ではないが、半二の後作「伊賀越道中雙六」（別項）に複雜化して用ひられてゐる。「刀屋の段」は歌舞伎色の匂ひが濃い。「在所の段」は、今も素淨瑠璃として殘つてゐる。全曲として本作の影響を受けたものに「敵討優曇華龜山」（別項）があり、本作と綯ひ交ぜにされて「靈驗曾我雛」その他の歌舞伎脚本が生れた。本作を「敵討御未刻太鼓」（別項）の改作といふ說もあるが、「道中評判敵討」の改作とすべきであらう。 【增田】

道中千貫樋 どうちゅうせんがんどひ

【作者】並木正三 【名稱】道中は東海道中、千貫樋は伊豆三島の西に在つたもの。 【興行】寶曆四年十二月十二日初日、翌年二月まで續く。二の替り。大阪中の芝居、座本嵐三右衞門。

【役割】駿河國守今川駿河之助・文平弟沼六（市の川彦四郎）、傾城喜瀨川・彈正女房松の江（吉田萬四郎）、伊豆守娘富士姫・文平妹お松（嵐三右衞門）、今川家お抱力士大井川文平（三桝大五郎）、桃井左衞門女房初音（三條浪江）、前將軍弟仁木彈正（嵐藤十郎）、吉岡憲法（藤川平九郎）。

【題材】從來の脚色にかゝる吉岡染の憲法は、憲法流の元祖といふ所に別な立場の或る凄味を持つてゐた。そこに寶劍に就いての宗教的すまで駿河之助と姫とを追放にする。寶劍雌龍丸が奪はれたとの注進。（返し、城下葭原）彈正の駕籠を取り圍み近侍を斬り伏せてゐる一味。憲法の徒黨である。〔三幕〕（文平住居）松の江が女房の格で扶持されてゐる。夫婦は計らず辿りついた姫と匿まつてある殿をこの機に契らせようと二階にあげる。お松は括られながら嫉妬に悶える。沼六とお松は、せめてお二人に代らうと言ひ出す。支度の中に親の訴人で捕手が寄せた。文平が裏をかいたと知らず、親は殿と姫とを我が子の積りで落して了ふ。（返し、松原）手下が憲法を呼び留めて、彈正はどう責めても城の要害を明かさぬと告げる。傍で聞いた松の江は始めて分つた敵憲法に斬り掛けるが、忽ち返り討に逢ふ。文平も來たが短炮でやられた。左衞門がそれと知つて憲法の後を追ふ。〔四幕〕（桃井左衞方の主要人物は幕毎に攫はれてゆく。殿を殺す所まで詰める。かくて憲法は惡以外の無氣味さを漂はせて、當代の惡敵平九郎を十分使ひこなした作といひ得る。但し憲法以外の人物の配置には、全く「けいせい天羽衣」（別項）を追つた型が見える。改作の跡が多い。

【批評】千貫樋の名題は傳奇的興味を覗つたので、駿豆二國に關係させお家騷動の型をとる豫定とすれば、それに終始すべきであつた。然るに中途憲法の色彩が強くなり過ぎたやうに見え、或は全く反對の態度のやうにも見える。そこに破綻がある。更に改作の筆が餘り直接的であつた。この作者として珍らしく凄慘な作であるに拘らず、一時の好評に終つたのもそれ等に因るかと思はれる。 【守隨】

道中膝栗毛 だうちゅうひざくりげ

滑稽本 正續四十三册 【作者】十返舍一九。但し初編一册編二册は翌文化元年、四編二册は同二年、五編二册、追加一册は文化三年、六編二册は同四年、七編二册は同五年、八編三册は同六年、發端一册は文化十一年である。「續膝栗毛初編」二册は文化七年、二編二册は同八年、三編二册は同九年、四編二册は同十年、五編二册は同十一年、六編二册は同十二年、七編二册、八編二册は共に同十三年、九編二册は文政二年、十編二册は同三年、十一編二册は同四年、十二編三册は文政五年で、初編より實に二十一年の長年月に亙つた。【素材】一九が本作を綴るに際して東海道等を旅行したのは事實であるから、本作中に彼の直接經驗を材としたもののある事は勿論である。その他彼の旅中の見聞により、又友人・知人等に依つて集めたものも少くないであらう。これ等の外には能狂言に得たものが多數ある。卽ち「どぶかちり」「狐

作といふ説もあるが、「道中評判敵討」の改作とすべきであらう。〔増田〕

道中千貫樋（だうちゆうせんぐわんどひ）

脚本　五幕八場　お家物　【作者】並木正三　【名稱】道中は東海道中、千貫樋は伊豆三島の西に在つたもの。【興行】寶暦四年十二月十二日初日、翌年二月まで續く。二の替り。大阪中の芝居、座本嵐三右衛門。

〔役割〕駿河國守今川駿河之助・文平弟沼六（市の川彦四郎）、傾城喜瀬川・彈正女房松の江（吉田萬四郎）、伊豆守娘富士姫・文平妹お松（嵐三右衛門）、今川家お抱力士大井川文平（三桝大五郎）、桃井左衛門女房初音（三條浪江）、前將軍弟仁木彈正（嵐藤十郎）、吉岡憲法（藤川平九郎）。

【題材】從來の脚色にかゝる吉岡染の憲法は、憲法流の元祖といふ所に別な立場の或る凄味を持つてゐた。そこに寶劍に就いての宗教的な解釋への接近も頷かれ、同時に千貫樋の説話との間に好箇の連絡が發見されたので、お家騷動物としては甚だ好都合な題材である。

【梗概】〔序幕〕（伏見稻荷社前）駿河之助は喜瀬川を連れての花見。殿は來合せた初音の娘お松に見惚れる。この女が今まで自分が緣談を嫌つてゐた富士姫だと聞かされて、急に話が纏らうとする。喜瀬川は怒る。併しこれは初音が文平の妹を贋玉に使つたのであつた。が、お松も本氣になる。折よく文平が來合せ、妹を騙して連れ去る。後へ浪人憲法が來て惡家老將監と馴合ひで喜瀬川の身請を言ひ立てたが、身請金を捲き上げると將監を斬り倒し、背に駿河之助が下手人だと記して姿を消す。〔二幕〕（室町御所）新將軍宣下の席へ、將監の死骸が運ばれ、駿河之助に疑ひはかゝつたが、彈正は下手人は兇賊だと見拔き、賊を探し出すまで駿河之助と姫とを追放にする。寶劍雌龍丸が奪はれたとの注進。（返し、城下葭原）彈正の駕籠を取り圍み近侍を斬り伏せてゐる一味。憲法の徒黨である。〔三幕〕（文平住居）松の江が女房の格で扶持されてゐる。夫婦は計らず辿りついた姫と匿まつてある殿をこの機に契らせようと二階にあげる。お松は括られながら嫉妬に悶える。沼六とお松は、せめてお二人に代らうと言ひ出す。支度の中に親の訴人で捕手が寄せた。文平が裏をかいたと知らず、親は殿と姫とを我が子の積りで落して了ふ。（返し、松原）手下が憲法を呼び留めて、彈正はどう責めても城の要害を明かさぬと告げる。傍で聞いた松の江は始めて分つた敵憲法に斬り掛けるが、忽ち返り討に逢ふ。文平も來たが短炮でやられた。左衛門がそれと知つて憲法の後を追ふ。〔四幕〕（桃井左衛門屋敷）殿と姫との首受取の上使が來る。彈正の家來が實檢役の憲法を狙つた。玉は外れ二階から殿と姫が轉げ落ちる。左衛門の討つた首を上使は持ち歸る。憲法が書いた實證の左文字で兇賊と見露はれる。首は沼六お松のだつた。劍と彈正の出る迄の命を預け憲法を歸らす。〔五幕〕（三島出來島屋）入聟万八は喜瀬川を現責（うつゝ）にし、更に殿を嬲り殺しにしたので、憲法は許して駿豆兩國横領の連判に万八を入れた。殺したのは禪定に入つた万八の假の姿だつたと知れて、憲法等は万八を圍む。と遠責の太鼓。（返し）谷底、山吹、瀧の音。左衛門等は底に辿り着くと、白髮の彈正が岩に坐してゐた。攻太鼓。憲法は捕まつた。雌龍丸が取出されると水は噴出した。勝鬨。

【脚色】三幕目迄の憲法は、稀にしか現はれないが、現はれると必ず動搖を殘してゆく。相手方の主要人物は幕毎に攫はれてゆく。殿を殺す所まで詰める。かくて憲法は惡以外の無氣味さを漂はせて、當代の惡敵平九郎を十分使ひこなした作といひ得る。但し憲法以外の人物の配置には、全く「けいせい天羽衣」（別項）を追つた型が見える。改作の跡が多い。

【批評】千貫樋の名題は傳奇的興味を覘つたので、駿豆二國に關係させお家騷動の型をとる豫定とすれば、それに終始すべきであつた。然るに中途憲法の色彩が強くなり過ぎたやうに見え、或は全く反對の態度のやうにも見える。そこに破綻がある。更に改作の筆が餘り直接的であつた。この作者として珍らしく凄慘な作であるに拘らず、一時の好評に終つたのもそれ等に因るかと思はれる。〔守隨〕

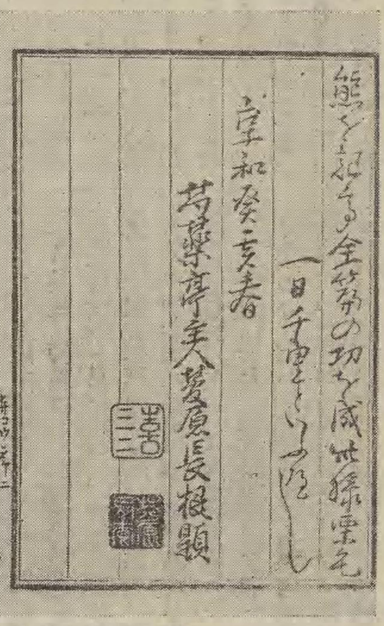
道中膝栗毛（だうちゆうひざくりげ）

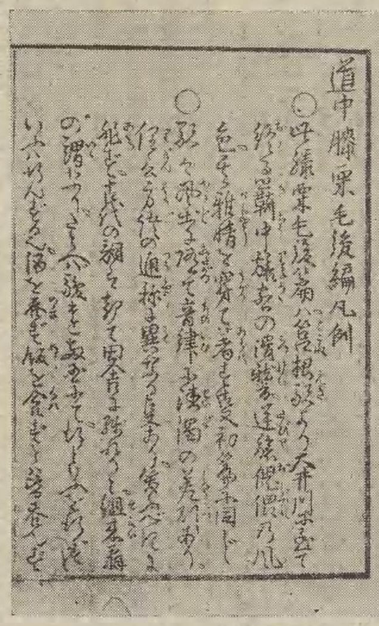
滑稽本　正續四十三冊　【作者】十返舍一九。但し初編一冊は、京傳が草稿を一九に與へたものであるといふ説が「西澤文庫傳奇作書」にある。又「膝栗毛」は上野の人酒井仲卽ち俳歌堂卍葉の作で、一九に望まれて與へたものであるといふ説が「上毛偉人傳」にある。この説は正續全部に就いていへるか、又その一部に就いていへるか、不明である。【名稱】初編及び後編の第一冊までは「浮世道中膝栗毛」と外題をつけ、同第二冊には「道中膝栗毛」とし、第三編から「東海道中」を角書にし、以下これに從つてゐる。「續道中膝栗毛」は、初編は「金毘羅參詣」と角書にし、二編は「宮島參詣」、三編以下七編までは「木曾街道」、或は「岐曾街道」と宛て、八編は「從木曾路善光寺道」、九編は「善光寺道中」、十編は「上州草津溫泉」と角書し、十一・十二編は、單に「續膝栗毛」の外題となつてゐる。【刊行】初編は享和二年、後編二冊は同三年、三編二冊は翌文化元年、四編二冊は同二年、五編二冊、追加一冊は文化三年、六編二冊は同四年、七編二冊は同五年、八編三冊は同六年、發端一冊は文化十一年である。「續膝栗毛初編」二冊は文化七年、二編二冊は同八年、三編二冊は同九年、四編二冊は同十年、五編二冊は同十一年、六編二冊は同十二年、七編二冊、八編二冊は共に同十三年、九編二冊は文政二年、十編二冊は同三年、十一編二冊は同四年、十二編三冊は文政五年で、初編より實に二十一年の長年月に亙つた。【素材】一九が本作を綴るに際して東海道等を旅行したのは事實であるから、本作中に彼の直接經驗を材としたもののある事は勿論である。その他彼の旅中の見聞により、又友人・知人等に依つて集めたものも少くないであらう。これ等の外には能狂言に得たものが多數ある。卽ち「どぶかちり」「狐塚」「鱸庖丁」「附子」「つんぼ座頭」「筍爭ひ」「三人片輪」「墨塗」「暇の袋」、その他を或はそつくり取り、或は多少變化して用ひてゐる。流布の笑話や噺本より得てゐるものもある。犬に吠えつかれて掌上に虎の字を書く話、ゐざりの川渡りを見て、深い川であると早合點して、裸で渡りかけて淺きに驚く話などの如き、出所の指摘し得べきものがある。【諸本】道中膝栗毛（帝國文庫）・滑稽文學全集第一・膝栗毛（日本名著全集）・東海道中膝栗毛（有朋堂文庫）・道中膝栗毛全集（文藝叢書）・東海道中膝栗毛（中央出版社）所收。

【梗概】江戸神田八丁堀に栃面屋彌次郎兵衛といふ者がゐる。駿河府中の相應な商家に生れたが、放蕩して家產を失ひ、豫て贔屓にした旅役者鼻之介（後、喜多八）を伴うて江戸に出で、喜多八を奉公に出して家を構へたが、貧

乏で思はしいこともないので、家財を賣つて旅費をつくり、喜多八を同伴して、順路東海道を上つて伊勢參宮をなし、京を見物して大阪に行くまでが發端と東海道中である。それから續編に入り、兩人は先づ四國に渡つて讃岐の金毘羅神社に參詣し、中國に渡つて宮島を見物しそれより引返して、順次木曾街道を東に下り、善光寺に參詣し、上州草津温泉に行き、それより江戸に歸着する。この長途の旅に於て兩人のなした尋常の行動から、奇行・汚行・愚行のさまざまを寫すを主とし、併せて兩人の見聞に入つた種々の事件をも取扱つて滑稽を表はしてある。

【構想】 明和頃から流行した洒落本は、遊里の纖細な寫實となつたが、「道中膝栗毛」は、この洒落本に構想上の影響を受けてゐる。洒落本は、初め都市一流の遊里の寫實に起つて、次第にその世界を宿場の遊里、岡場所等の二流三流に移し、間には「變通輕井茶話」(別項)の如き、地方遊所の描寫に及んだものがある。「道中膝栗毛」の中には、これ等と同樣な地方遊所の描寫をなした部分がある。こゝに洒落本の影響を見ることが出來る。のみならず、洒落本には、野暮・半可通の滑稽を寫したところが多いが、「道中膝栗毛」は又同樣に、この種の滑稽を取扱ふを旨としたものである。この點にも洒落本の影響を見る。殊にその文體の如きは明かに洒落本より出たものであつて、殆どそのまゝであるといふべきである。それから構想上の一大特徴である彌次郎兵衞・喜多八なる二人の旅人を設けて、そ

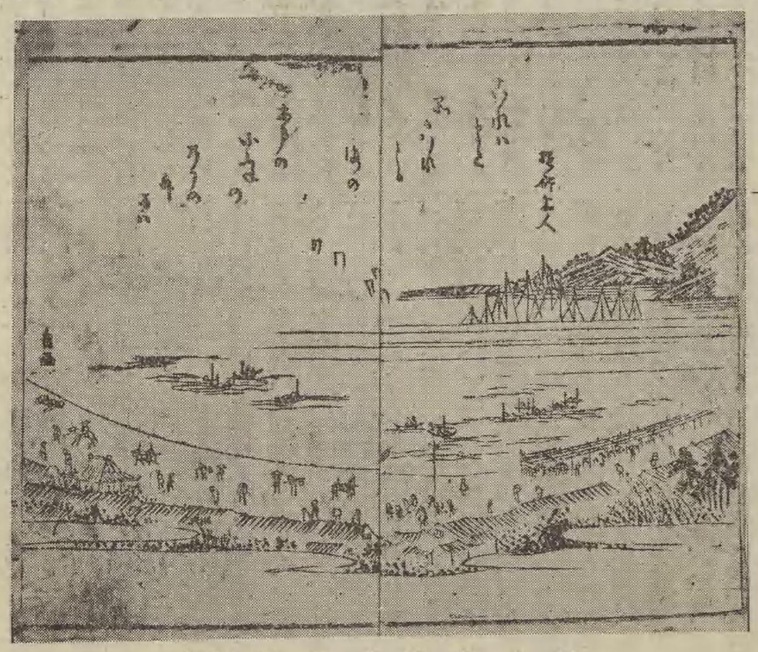




道中膝栗毛後編 (序文・凡例)

の言行に滑稽を表はすのは、假名草子「竹齋」(別項)の竹齋と若い同伴者、「東海道名所記」(別項)の樂阿彌と一青年、「紫の一本」の陶々齋遺俠と同一であるから、全く一九の創意に出たものではあるまい。併しこれ等の人物は單に機械的に用ひられてゐるが、「道中膝栗毛」はこれを活かして用ひてゐる所に大なる相違がある。彌次郎兵衞・喜多八は、共に江戸人の代表的人物である。知情意何れの方面から見ても多血質なる江戸氣質の好代表である。感情的で、激し易く、さめ易く、又感情や情慾を自制する力が乏しい、智も才もよく磨かれてゐないから、廣く事理に通じ、人生を解しない淺薄な人物である。故に二人を江戸人の代表としても、所謂通なる高級江戸人を代表するものではなくして、未通なる下級江戸人を代表するものである。「道中膝栗毛」は、かかる下級江戸人を人物として、その性情の各方面を斷片的なる小說話に依つて繰返し繰返し寫實し、輕妙にこの種の人間を描出してゐる。さうして同時にその寫實の中に、江戸通の眼を標準として未通なる江戸人を揶揄し、愚弄してこれを滑稽化してゐる。その滑稽は辛辣な諷刺を伴はないもので、如何なる人をも破顏せしめずには措かない朗かさを持つものである。

【史的地位】 材を旅行に取つた文學は、早く紀行があつて續いて行はれた。「土佐日記」「十六夜日記」の如き、日記の名を持つてゐるけれども、紀行文學である。「海道記」「東關紀行」(各別項)の如きものより近世の紀行に至る迄その數少しとせぬ。これ等は自然の景を寫し、感懷を抒べることが少くなく、多くは感傷的であり、且つ歌を重んじたものである。然るに江戸時代に至つて、人事を主として滑稽の情緒を表はし、和歌も狂歌體に變る傾向を一部に生じた。これ前に擧げた「竹齋」の類である。かくて紀行文學は民衆化の傾向を示したが、「道中膝栗毛」に至つては、この傾向を推し進めて、全く民衆化させたものである。本書出でて空前の歡迎を社會に受けたのはこのためである。「江戸作者部類」には、「看客は只笑を催すをめでたしとして飽く事なかりしかば、板元は更なり貸本屋も利あるもの是にまされるはなしといひにき」とあり、また「げに二十餘年相似たる趣向の册子の斯くまでに流行せしは前代未聞のことなりともある。以てその盛況を察することが出來る。本作は實に紀行文學(別項)の展開史中に



道中膝栗毛挿畫 (初編)

於て劃期的なる作である。轉じて洒落本との關係を見るに、本作は洒落本の轉向したものといふことが出來るが、既に行詰つた洒落本は、その狹い世界から何れかの方向に廣い世界を見出さうとしてゐた。而してその見出した轉向の一方面が、實に本作の開いた作風の滑稽本であつた。この點でも亦本作は近世小說史に重要な地位を占むるものといへる。而して本作以後、この作風に擬した滑稽本の續出した事實は、又本作の滑稽本史上の地位の最も重要なることを示してゐる。今その主なるものを擧ぐれば、文化四年に、嬉丸作「夷國滑稽羽栗毛」、彦玉作「旅枕裏青海」が出で、六年には「身延道中滑稽華鹿毛」、九年には「成田道中黃金駒」、或は「王子土産」「樂屋道中記」「芝翫栗毛」、鯉丈の「大山道中栗毛後駿馬」(別項)等があり、一九自身も、「江之島土産」「六

說】麻布學究として知られた儒家大鄕信齋が文化八年より同十三年(改元天保)に至る六年間、見聞した江戸の雜事を年別に錄したもので、漢學者の著作としては、極めて卑俗である。市井の瑣聞の外に、幕府武家の出來事をも含んでゐる。江戸期末造の世相を窺ふに便がないではない。著者はこれを越前鯖江に在國の藩主(間部侯)に獻覽したといふ。本書中に別紙別封を添呈と註してあるのは、その際のもので、傳寫にはない。

【著者小傳】大鄕良則。字は伯儀、通稱金藏、號を信齋と云つた。林衡(述齋)に學び、家塾を麻布古川端に開いて教授した。間部侯の士でその藩の儒員であつた。曲亭馬琴の友人の一人で蒐閲會に入會してゐた。馬琴の博覽を多として時々古事等の質疑をするのを恥としなかつた。その麻布の塾を城南讀書樓と號し

葛孔明等の評傳を交へ、最後に劍・玉・鏡・音樂の記事に及び、又詞分の目下に和語・佛語を別ち、事物の同名・異名の談で終つてゐる。卷四より卷八までは相論及び論宗の二大項で、著者の最も力を入れた部分らしく、その佛教に造詣の深いことが窺はれる。序文に年號も署名もない。卷數も區々一定せぬ。 【和田】

登天樂 とうてんらく 【異稱】 雅樂舞曲 【性質】 右方樂。新樂、小曲。高麗双調曲に屬する。舞があり、六人で舞ふ。舞者は特殊の袍(襲

登天樂

繪模樣)を着、細纓冠をかぶり、片肩及んでゐる。

道得問答 だうとくもんだふ 心學書 四卷 【著者】 慈音尼 【刊行】 安永三年 【解說】 慈音尼の江戸へ下つた後の述作である。自序に、その師石田梅巖の教訓を憶記したもの、自分が人に答へたことの覺え書などを輯めて、この書を編んだことを述べてゐる。最初に己の經歷を叙して、その心學に入つた徑路を明かにしてゐる。全卷を通じて梅巖の言をそのまゝ出してゐる條が多い。 【白石・森】

東都劇場沿革誌 とうとげきぢやうえんかくし 演劇書 六卷 【編者】 關根只誠 【成立】 明治十七年か。 【刊行】 伊原青々園編「芝居双紙」中に、編者手稿本をそのまゝ收め、大正六年刊行。 【解說】 江戸の劇場の櫓を上げてより、明治に至る各座の座元の代々を記し、各々その項に、當時の劇場史料を集大成しようとい

於て劃期的なる作である。轉じて洒落本との關係を見るに、本作は洒落本の轉向したものといふことが出來るが、既に行詰つた洒落本は、その狹い世界から何れかの方向に廣い世界を見出さうとしてゐた。而してその見出した轉向の一方面が、實に本作の開いた作風の滑稽本であつた。この點でも亦本作は近世小說史に重要な地位を占むるものといへる。而して本作以後、この作風に擬した滑稽本の續出した事實は、又本作の滑稽本史上の地位の最も重要なることを示してゐる。今その主なるものを擧ぐれば、文化四年に、嬉丸作「夷國滑稽羽栗毛」、彦玉作「旅枕裏青海」が出で、六年には「身延道中滑稽華鹿毛」、九年には「成田道中黃金駒」、或は「王子土產」「樂屋道中記芝翫栗毛」、鯉丈の「大山道中栗毛後駿馬」（別項）等があり、一九自身も、「江之島土產」「六阿彌陀詣」「大師めぐり」「金草鞋」「俳語堀の內詣」「雜司ケ谷記行」（各別項）等を出した。一九の死後も「續々膝栗毛」を初めとし、明治に入りては魯文の「西洋道中膝栗毛」（別項）がある。

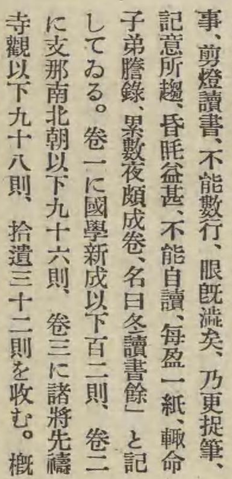
【參考】東海道中膝栗毛輪講　三田村鳶魚編　○評註東海道中膝栗毛　出口米吉○鳶魚隨筆　三田村鳶魚（彌次喜多の大阪見物、東海道膝栗毛の趣向）○膝栗毛其他の解說　山口剛（日本名著全集）○江戶軟文學考異　尾崎久彌（膝栗毛物の研究）○十返舍の膝栗毛　飯島花月（書物往來五）○東海道中滑稽譚について　石田元季（紙魚一七）○一九研究　藤村作（日本文學講座）　【藤村・小柴】

道中評判敵討（だうちゆうひやうはんかたきうち）　隨筆　正編二十五編・續編十編　【著者】大鄕良則　【諸本】國書刊行會の「鼠璞十種」に編入されてゐる。【解說】麻布學究として知られた儒家大鄕信齋が文化八年より同十三年（改元天保）に至る六年間、見聞した江戶の雜事を年別に錄したもので、漢學者の著作としては、極めて卑俗である。市井の瑣聞の外に、幕府武家の出來事をも含んでゐる。江戶期末造の世相を窺ふに便がないではない。著者はこれを越前鯖江に在國の藩主（間部侯）に獻覽したといふ。本書中に別紙別封を添呈と註してあるのは、その際のもので、傳寫にはない。

【著者小傳】大鄕良則。字は伯儀、通稱金藏、號を信齋と云つた。林衡（述齋）に學び、家塾を麻布古川端に開いて敎授した。間部侯の士でその藩の儒員であつた。曲亭馬琴の友人の一人で菟園會に入會してゐた。馬琴の博覽を多として時々古事等の質疑をするのを恥としなかつた。その麻布の塾を城南讀書樓と號して一時高名であつた。弘化元年（一二五〇四）十月十四日歿。享年七十一。著述には通俗的のものが多い。　【和田】

榻鴨曉筆（たふてんげうひつ）　隨筆　二十卷　寫　【著者】不詳。恐らくは室町時代の末頃の遁世者であらう。【解說】自序に據ると、六十餘年を何となく過したことを歎じて、「むかし今思ひつゝくる宵のまにはや明はてゝ秋の夜もなし、かばかりの事は誰か思ひはからざらん。よしや何事もさもあらばあれ、筆にまかせて思ひをのべん。かゝるつたなき事のしわざを誰かめたつべき、かいやりすつべき物ぞかしとおもふ心しかなり」と言つてゐる。その編述の樣は統一を缺き雜駁に流れてゐるが、約言すれば、佛敎が天竺・震旦・日域と傳來した事蹟や敎義の發展を縷述する間に、詩歌の起原、本朝諸歌仙等、又孔子・顏回・莊子・孫武・諸葛孔明等の評傳を交へ、最後に劍・玉・鏡・音樂の記事に及び、又詞分の目下に和語・佛語を別ち、事物の同名・異名の談で終つてゐる。卷四より卷八までは相論及び論宗の二大項で、著者の最も力を入れた部分らしく、その佛敎に造詣の深いことが窺はれる。序文に年號も署名もない。卷數も區々一定せぬ。　【和田】

登天樂（とうてんらく）　雅樂舞曲　【異稱】登殿樂　【性質】右方樂。新樂。小曲。高麗双調曲に屬する。舞があり、六人で舞ふ。舞者は特殊の袍（繪模樣）を着、細纓冠をかぶり、片肩を袒ぐ。童舞とすることもある。番舞は五常樂。起原未詳。併し我が國で作られたものであることは明かである。　【田邊】


登天樂

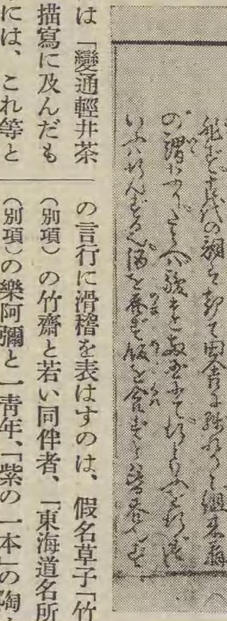
冬讀書餘（とうどくしよよ）　隨筆　二卷一册　【著者】尾藤孝肇　【刊行】天保頃「拙修齋叢書」中に編入、木活字版を以て刊行された。【成立】寬政十二年　【解說】尾藤二洲の漢文の隨筆で、著者卷頭の小引に、「冬夜無事、剪燈讀書、不能數行、眼既澁矣、乃更提筆、記意所趨、昏眊益甚、不能自讀、每盈一紙、輒命子弟謄錄、累數夜頗成卷、名曰冬讀書餘」と記してゐる。卷一に國學新成以下百二則、卷二に支那南北朝以下九十六則、卷三に諸將先禱寺觀以下九十八則、拾遺三十二則を收む。概ね經史老莊に就いての感想を述べ、和漢政治の興廢、帝王・英雄・詩文家・儒家等の評にも及んでゐる。　【和田】

道得問答（だうとくもんだふ）　心學書　四卷　【著者】慈音尼　【刊行】安永三年　【解說】慈音尼の江戶へ下つた後の述作である。自序に、その師石田梅巖の敎訓を憶記したもの、自分が人に答へたことの覺え書などを輯めて、この書を編んだことを述べてゐる。最初に己の經歷を叙して、その心學に入つた徑路を明かにしてゐる。全卷を通じて梅巖の言をそのまゝ出してゐる條が多い。　【白石・森】

東都劇場沿革誌（とうとげきぢやうえんかくし）　演劇書　六卷　【編者】關根只誠　【成立】明治十七年か。【刊行】伊原青々園編「芝居双紙」中に、編者手稿本をそのまゝ收め、大正六年刊行。【解說】江戶の劇場の櫓を上げてより、明治に至る各座の座元の代々を記し、各々その項に、當時の劇場史料を集大成しようといふ企圖のものであつたと思はれ、中村座の分は三卷半に及び極めて詳細であるが、市村座の分は約一卷、森田座の分は僅かに附錄として「森田座志料」として半卷を占むるに過ぎない。本書が全部完成したならば、劇場建築、劇場に關する法令、劇場經濟、その他比較的知らるゝこと尠き諸項の資料は大成したであらう。併し現存のもののみでも、涉獵の豐富な點より後人を益すること少からず、もとより未定稿の事とて整理のやゝ完からぬ憾みはあるが、歌舞伎研究上の貴重資料といはなくてはならぬ。　【鳥田】

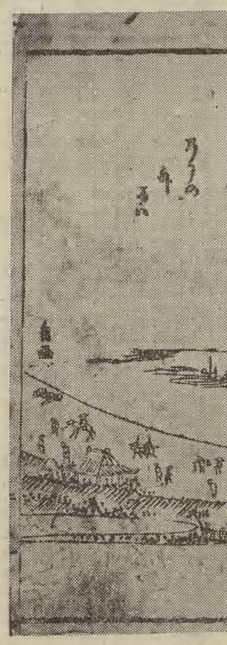
道二（だうに）　心學者　【姓名】中澤義道（なかざはよしみち）。通稱、龜屋久兵衞　【生歿】享保十年八月十五日、京都上京新町一條に生れ、享和三年（一四六三）六月十一日、江戶下谷の參前舍に歿した。享年七十九。【法名】貞德院法玄道二居士　【墓

本は、初め都市一流の遊里の寫實に起つて、次第にその世界を宿場の遊里、岡場所等の二流三流に移し、間には「變通輕井茶話」（別項）の如き、地方遊所の描寫に及んだものがある。「道中膝栗毛」の中には、これ等と同樣な地方遊所の描寫をなした部分がある。こゝに洒落本の影響を見ることが出來る。のみならず、洒落本には、野暮・半可通の滑稽を寫したところが多いが、「道中膝栗毛」は又同樣に、この種の滑稽を取扱ふを旨としたもの



の言行に滑稽を表はすのは、假名草子「竹齋」（別項）の竹齋と若い同伴者、「東海道名所記」（別項）の樂阿彌と一青年、「紫の一本」の陶々齋遺俠と同一であるから、全く一九の創意に出たものではあるまい。併しこれ等の人物は單に機械的に用ひられてゐるが、「道中膝栗毛」はこれを活かして用ひてゐる所に大なる相違がある。彌次郎兵衞・喜多八は、共に江戶人の

【史的地位】材を旅行に取つた文學は、早く紀行があつて續いて行はれた。「土佐日記」「十六夜日記」の如き、日記の名を持つてゐるけれども、紀行文學である。「海道記」「東關紀行」（各別項）の如きものより近世の紀行に至る迄その數少しとせぬ。これ等は自然の景を寫し、感懷を抒べることが少くなく、多くは感傷的であり、且つ歌を重んじたものである。然るに江戶時代に至つて、人事を



るもの是にまされるはなしといひにき」とあり、また「げに二十餘年相似たる趣向の册子の斯くまでに流行せしは前代未聞のことなり」ともある。以てその盛況を察することが出來る。本作は實に紀行文學（別項）の展開史中に

（編初

所】東京市深川區猿江町妙壽寺で【學統】手島堵庵門。門弟に大島有隣（うりん）・植松自謙（各別項）等がある。【閲歴】家は織職を業としたが、日蓮宗の信徒であつたところから、道二も幼少の頃からその影響を受くるところが多かつた。二十五歳の時、中筋千本に移居した。家甚だ貧しく、常に書を讀むの餘裕がなかつたが、深く儒佛の教を信じ、暇を得ては所々の講釋法談の席に列し、又は宿儒高僧の許に至つて道を問ひ、長じて妙法の二字に疑念を抱き、その義を得ざるに苦しんだが、明和五年、四十歳にして東嶺禪師に師事するに及び、始めて疑問は氷解して悟道を得た。その後更に靈元禪師にも就いたが、天明三年（五十五歳）、手島堵庵の門に入り、剃髮して名も道二（だうに）に改め、遂に心學者として立つに至つた。かくて道二は江戸に下り、所々に講話を試みて多くの門弟を得、寛政三年には、神田相生町に心學教育所參前舍を建て、ます〳〵心學教の普及に盡瘁した。參前舍はその後も相續して現在に至つてゐる。（心學參照）

中澤道二

【參考】名家略傳山崎美成○嬉遊笑覽卷九喜多村信節○石門心學の研究白石正邦〔白石・森〕

道二翁道話（だうにをうだうわ）心學書　六編十五卷【著者】中澤道二【編者】八宮齋【刊行】初編に寛政六年甲寅冬の序があり、第六編に文政七年甲申春の序がある。【解説】初編見返しには、中澤道二翁著「心學道話（みちのはなし）」としてゐる。内容は道二の道話を大阪の八宮齋が筆記して輯錄したるもの。但しその最終の六編は編者歿後の刊行に係る。初編より第四編まで各編毎に上河正揚の序があり、第五編には道二の講釋の圖、正揚の「中澤道二翁像賛」、京都入江致身の序がある。第六編には、正揚の孫上河精が序してゐる。道二の道話は神儒佛の三道より、五倫五常の旨趣を懇切平明に説示して餘すところがない。當時の民衆に悦ばれたのも故あることと思はれる。〔白石・森〕

道念節（だうねんぶし）歌謠【名義】道念山三郎又は道念仁兵衛の始めた曲節なるが故、かく稱する。【沿革】「本朝世事談綺」に「京に道念山三郎といふ輿樗（キヤリ）の音頭あり。貞享の頃盆の躍口説といふを歌ひ出したり。この節躍の拍子によく合たる間なれば今以てこれをよしとす」と見えるので、これを始祖として初代の道念となし、道念仁兵衛はその二代目であると云はれてゐるが、既に「好色五人女」にも「京の音頭道念仁兵衛」と見え、「落葉集」にも、「道念咄」と題する道念仁兵衛作の滑稽な歌を掲げてゐて、山三郎と仁兵衛は同じ頃の人である。その關係については、未だ明かにし難いが、山三郎の明瞭な語り物として傳へられる歌は一つもない。これが盛んになつたのは寶永頃からで、もとは京の祇園の邊りで盆踊として行はれてゐた都音頭、また祇園町踊と云ふものの一種であつたのが、他の人々の歌を壓して道念仁兵衛の歌だけが盛んとなり、遂には道念節とも云はれるやうになつたのである。寶永以後には、今道念と稱する輩も出たらしい。【歌詞】多く七五調で、「伊勢の松坂越えたえい」の如く、「え止め」となつてゐるところが特徴である。この特色は京音頭に共通のもので、大阪音頭が七七調であり、「さ止（ど）め」であるのと對立する。歌詞の古きものは、「好色五人女」に見える「山くどき」「松づくし」で、歌詞は何れも殘つてゐる。一枚刷として讀賣せられた外、寄本も出で、「今道念都踊くどき」「都新音頭」等の題名が記されてゐるが、内容は種々雜多で、可なり後のものまでも加へると、總計七十篇ぐらゐの歌詞が殘存してゐる。〔鐵仙流〕道念節は明和頃に至つて、鐵仙節と變化した。この頃の歌本を見ると、道念流・道念末流・鐵念流・鐵仙流と云ふやうに記され、鐵仙流に至つて固定した。これについて「眞々の川」（睟川子作、天明五年刊）には、「近頃はやる鐵仙流京音頭は、六藝の内にも見えず、商賣往來の藝づくしにも洩れたれども、門あれば好きあり、好きあれば上手ありて、上京の片邊りに名に負ふ音頭の名人、搓物屋の何某となん云へるあり。ふと愛護若の道行に物を付け初めてより、高名四方に響き、音頭は此歌句ならではと、門人も多く入り集ひて、先生と仰ぐ事ななめならず」と見える。その歌詞は、明和より文政頃まで、繪表紙附の稽古本として刊行せられ、四十篇ぐらゐ殘存してゐる。「鐵仙梅九曜直正本」と記した本もあつて、かう云ふ語り手があつた。現在ではこれを鐵扇節と記し、同じく道念節から分れたと思はれる紅葉節（紅葉音頭）と云ふものがあつて、これと一對をなし、鐵扇節は男性的で勇ましく、紅葉節は女性的で軟いものとして京都府下の松ケ崎、修學院等の盆踊に行はれてゐる。紅葉節の歌本は、「夜音」（一名音頭集、京都府立圖書館所藏）を初め、寫本として數本殘存し、四十篇以上の歌詞が殘つてゐる。なほ京音頭の系統を記すと次の如くなる。

友甫流―喜内甚五兵衛―道念節―紅葉節（現存）
　　―今道念―道念流―
―道念末流―鐵念流―鐵仙流―鐵扇節（現存）

【參考】日本歌謠史高野辰之○日本歌謠集成同上○近代歌謠集藤田徳太郎○紅葉節踊音頭（龍谷大學國文學會未刊稀覯本出版叢書第八編）○踊口説道念節の新資料山村太郎（上方二〇）○鐵仙流踊口説雜考同上（槻の木七ノ一）〔藤田〕

唐大和上東征傳（たうのだいわじやうとうせいでん）傳記【作者】眞人元開撰と記してある。即ち淡海三船（三船參照）。【名稱】略して「とうだいわじやうとうせいでん」とも讀む。又は「鑑眞大和尚傳」とも、「鑑眞東征傳」とも、「過海大師東征傳」とも稱す。或は「法務贈大僧正唐鑑眞過海大師東征傳」と題するもの、又は單に「鑑眞和尚傳」とするのもある。【成立】光仁帝の寶龜十年二月八日。卷末の詩もその頃附載したものであらう。【諸本】（一）群書類從本（六九）。（二）大日本佛教全書本（一一三）。諸本を校合して善本である。（三）唐招提寺版本。「過海大師東征傳」と題して肖像を掲げ、内題は「法務贈大僧正唐鑑眞過海大師東征傳」とある。又末に附錄として鑑眞關係の事項が抄出せられてゐる。（四）觀智院本、一軸。元永頃即ち院政時代の古寫である。類從本と對校すれば文字の異同もあり、誤を正すことも出來る。加ふるに訓讀の點に古語及び當時の讀法の參考となるものも少くない（古典保存會で複製）。なほ參考すべきものに、「唐鑑眞大和上傳」二卷（和文の傳記。大日本佛教全書一一三に收む）。「鑑眞和上東征傳」三卷或は六卷。鑑眞の高足たる思託の著なることは、「宋高僧傳」第十四に見えてゐるが今傳はらない。外に「東征繪傳」（別項）がある。

【内容】唐の鑑眞和上の日本へ渡つたことを主として、その傳記を書いたものである。鑑眞はカンシン又はカンジン或はガンジンと讀まれてゐる。和上は通例和尚の字を用ひ、上の字を用ひるのは律宗に限つてゐる（鑑眞の開いた唐招提寺は律宗）。本書の内容は初めに鑑眞和上の出自を記し、後六度の大難船を冒して渡來し、唐招提寺を創建することを述べてゐる。鑑眞の俗姓は淳于氏、唐の揚州江縣の人で十四歳の時、寺に入つて佛を見て感動し、出家して知滿禪師に就く。後、諸寺に配住し、東都・西京に遊學して三藏を極め、殊に戒律に詳しかつた。我が天平五年、榮叡・普照等が遣唐大使丹墀眞人廣成に從つて入唐し、十年の後、唐の天寶元年冬十月、即ち我が天平十四年歸朝の時、揚州の大明寺に到つて鑑眞に請ふところがあつた。請に從つて天寶二年十二月出帆したが、中途難船した。かくて五回の失敗に屈せず、第六回目の天寶十二年十月、藤原清河や吉備眞備等の歸朝と共に出帆した。

る。【價値】當時の日支交通と航海の狀況を知り得るのみならず、難航中に觀音や阿彌陀を念ずる點を見れば、信仰の方面の狀を見るにも參考となる點が少くない。又紀行の漢文として見るべき外、卷末附載の詩は「懷風藻」（別項）と等しく、漢文學史方面からも重要である。（東征繪傳參照）

【參考】本朝高僧傳卷二〇宋高僧傳卷十四〇水鏡下〔山岸〕

多武峯少將物語（たふのみねせうしやうものがたり）物語一卷【著者】未詳。その當時にあつて高光に親しく仕へた人の書き集めたものとも言はれる。【名稱】古寫本の題簽には、「多武峯少將」とのみあれば、單に「多武峯少將」と呼んだのかも知れない。又別に「高光日記」（仁和寺書目錄）ともいふ。【成立】未詳。著者を高光に近侍した者とする説に從へば、村上天皇のしない別れを告げて出家した。比叡山に登つた高光は弟の尋禪のゐる室に入り、自ら剃刀でもとどりを切つてしまつた。ぜんじの君から、少將の出家の由を聞かされた京の兄弟達は、あさましがりてのゝしり騷いだ。妹君や女房達は、「いさゝかなる物もまいらで泣き給ふ」ほどであつた。帝もこれを聞し召して、いみじく哀れがらせ給ひ、また宰相中將謙德公を初め多くの人々は、大に驚き夜中をも厭はず山へ訪ねて行つたが、高光の變り果てた有樣に、ただ哀れを催すのみであつた。少將遁世後の女君は、幼い姫君を抱いて淋しい生活を送りつつ、時々横河の高光又は姉君などとの悲しい歌の贈答に、僅かな慰めを求めてゐた。が、あまりに心許ない悲しさに、遂には「世の中うし、尼になりなん」と願ふほどであつた。愛宮も亦佛道修業の兄高光を思つて、を四つほど作り、季節の花を挿して山に贈つた。この話を聞いた君達は、みな山に登つてこれを見たりする。念佛堂では高光が、この瓶に花を立てて念佛修業に專念してゐるのであつた。中宮や、大納言の北の方や、きさいの宮からも贈り物があつた。愛宮も、きぬの御かたびら一重を仕立てて、「君が爲泣く〳〵ぬへば世の中になみだもかゝる衣たちけり」と歌を添へて山へ贈つた。少將は何人のよりもこの愛宮の文をば悲しく哀れがつて、いみじく泣かれた。その愛宮への返しには、「袂よりぬれ劔袖（ふん）もまだひぬにみにもしみぬるから衣哉」とあつた。そして女君には、愛宮の歌に答へると共に、「あふことのかたみにとこそみたてまつれ」と聞えた。それもこれも、すべて言ひ盡すべくもない、まことにいみじう憐れなることどもであつた。

まれてゐる。和上は通例和尚の字を用ひ、上の字を用ひるのは律宗に限つてゐる（鑑眞の開いた唐招提寺は律宗）。本書の內容は初めに鑑眞和上の出自を記し、後六度の大難船を冒して渡來し、唐招提寺を創建することを述べてゐる。鑑眞の俗姓は淳于氏、唐の揚州江縣の人で十四歲の時、寺に入つて佛を見て感動し、出家して知滿禪師に就く。後、諸寺に配住し、東都・西京に遊學して三藏を極め、殊に戒律に詳しかつた。我が天平五年、榮叡・普照等が遣唐大使丹墀眞人廣成に從つて入唐し、十年の後、唐の天寶元年冬十月、卽ち我が天平十四年歸朝の時、揚州の大明寺に到つて鑑眞に請ふところがあつた。請に從つて天寶二年十二月出帆したが、中途難船した。かくて五回の失敗に屈せず、第六回目の天寶十二年十月、藤原淸河や吉備眞備等の歸朝と共に出帆した。越えて十二月、卽ち我が天平勝寶五年十二月二十日頃に、四隻の船全部が薩摩に到着し、十二月二十六日に、僧延慶が鑑眞を太宰府に伴つて來た。翌年正月十一日、遣唐副使大伴胡麿が奏上したので、乃ち勅して東大寺に居らしめ、授戒と傳律の任務を委して傳燈大法師位を授けられた。四月に至つて戒壇を大佛殿の前に設けて、聖武上皇・孝謙帝以下四百餘人に戒を授けた。後、その戒壇は大佛殿の西に移して戒壇院と稱せられてゐる。また一品新田部親王の舊宅を賜はつて唐招提寺を創建し、天平寶字七年（一四二三）五月六日遷化した。享年七十七（類從本に七十六とある。今觀智院本による）。鑑眞は渡海の際、兩眼の明を失つたが、經文などはよく諳誦してゐたと云ふ。なほ稱德帝の天平神護元年過海大師と諡せられた。これは本朝に於ける大師號の權輿である。【價値】當時の日支交通と航海の狀況を知り得るのみならず、難航中に觀音や阿彌陀を念ずる點を見れば、信仰の方面の狀を見るにも參考となる點が少くない。又紀行の漢文として見るべき外、卷末附載の詩は「懷風藻」（別項）と等しく、漢文學史方面からも重要である。（東征繪傳參照）

【參考】本朝高僧傳卷二〇宋高僧傳卷十四〇

水鏡下

多武峯少將物語（たふのみねせうしやうものがたり）

〔山岸〕

物語 一卷 【著者】未詳。その當時にあつて高光に親しく仕へた人の書き集めたものとも言はれる。【名稱】古寫本の題簽には、「多武峯少將」とのみあれば、單に「多武峯少將」と呼んだのかも知れない。又別に「高光日記」（仁和寺書目錄）ともいふ。【成立】未詳。著者を高光に近侍した者とする說に從へば、村上天皇の應和から康保年間へかけて書かれたものか。【諸本】傳本は極めて稀で、丸林孝之の「多武峯少將物語考證」によれば、二種の異本の本文を知ることが出來る。明治以前の刊本としては、群書類從本及び文政七年霜月二日の自序を附せる丸林孝之の「多武峯少將物語考證」があるのみである。また明治以後の刊本としては、群書類從・日本文學全書・國文大觀等の所收本及び國文註釋全書所收の前記丸林孝之の「多武峯少將物語考證」がある。【梗概】高光の少將は、初めから出家したいといふ望を抱いてゐたが、父おとど師輔の生前はどうしてもその本意を許されなかつた。おとどの死後は妹君愛宮のことが特に心には懸りながらも、出家本願に心がせかれて女君に「我いらむ山のはになをかゝりなん思ひないれそ露も忘れじ」と歌を返し、又愛宮にはせはしない別れを告げて出家した。比叡山に登つた高光は弟の尋禪のゐる室に入り、自ら剃刀でもとどりを切つてしまつた。ぜんじの君から、少將の出家の由を聞かされた京の兄弟達は、あさましがりてのゝしり騷いだ。妹君や女房達は、「いさゝかなる物もまいらで泣き給ふ」ほどであつた。帝もこれを聞し召して、いみじく哀れがらせ給ひ、また宰相中將謙德公を初め多くの人々は、大に驚き夜中をも厭はず山へ訪ねて行つたが、高光の變り果てた有樣に、ただ哀れを催すのみであつた。少將遁世後の女君は、幼い姬君を抱いて淋しい生活を送りつつ、時々橫河の高光又は姉君などとの悲しい歌の贈答に、僅かな慰めを求めてゐた。が、あまりに心許ない悲しさに、遂には「世の中うし、尼になりなん」と願ふほどであつた。愛宮も亦佛道修業の兄高光を思つて、精進の日を送つてゐた。この間に中納言師氏の北の方は、裝束・袈裟より始めてひとくだりを調製して山の少將に贈つたりした。その後女君と山の少將との間には、綿々として盡きざる哀れな長歌の贈答があつた。或る夜高光の夢枕に父君が出家した姿で現はれて、「なにをうしとてかくはなり給しにか。たふとさはいとたふとけれども、いと悲しくなむあはれに」と言はれ「君がすむ橫河の水し濁らずば我なき魂は常にみせてん」と歌をよまれる。「いとどしく袖ぞひぢぬる橫河に君が影みば水も濁らじ」の返歌で目がさめる。さて入道高光の例の幼い姬君は、淋しさの餘り、出入する人を見て父君かと尋ね、母君を悲しさに泣かせてゐた。その中に、高光の弟、兵衞のすけ爲光が少將にのぼつたが、しほたれてゐた。その後、桃園の中納言師氏が、しろがねの花瓶を四つほど作り、季節の花を挿して山に贈つた。この話を聞いた君達は、みな山に登つてこれを見たりする。念佛堂では高光が、この瓶に花を立てて念佛修業に專念してゐるのであつた。中宮や、大納言の北の方や、きさいの宮からも贈り物があつた。愛宮も、きぬの御かたびら一重を仕立てて、「君が爲泣く〳〵ぬへば世の中になみだもかゝる衣たちけり」と歌を添へて山へ贈つた。少將は何人のよりもこの愛宮の文をば悲しく哀れがつて、いみじく泣かれた。その愛宮への返しには、「袂よりぬれ劔袖もまだひぬにみにもしみぬるから衣哉」とあつた。そして女君には、愛宮の歌に答へると共に、「あふことのかたみにとこそみたてまつれ」と聞えた。それもこれも、すべて言ひ盡すべくもない、まことにいみじう憐れなることどもであつた。

【解說】この物語は、藤原高光が應和元年の暮に出家して比叡山に登り、翌二年八月多武峯に移つて草庵を營んだまでの事實を記したものである。藤原高光は幼名を「まちをさ君」と言つた。九條右大臣藤原師輔の八男で、母は醍醐天皇の皇女雅子內親王であつた。天德四年正月七日右近衞少將、應和元年從五位上に叙せられ、備後權介を兼ねるに至つた。然るに應和元年十二月五日遽にその妻と妹並に幼き女とを殘して比叡山に登り、橫川の增賀上人について薙髮し、法名を如覺と稱して佛道に入つた。同二年八月には多武峯に移り草庵を結んで極樂房といつた。よつて世の人は高光を目して多武峯少將とも呼んだのである。かくて三十有餘年、如覺は正曆五年三月十日入寂した。「榮華物語」月宴卷に、高光の入道した事を記して、「これは物語に作りて世にあ

るやうにぞきこゆめる、哀なることにこの事をぞ世にはいふ」とあるも、この物語のことであるから、かなり古い物語の一つである。高光とその妻・妹、又はその妻・妹と大納言高明の北の方、中納言師氏の北の方等との和歌の贈答を記して、歌主文從を旨としたもので、物語の中の人物は皆三人稱で書かれて居り、高光には敬稱が用ひてある。これを物語的形態として見る時は、「大和物語」（別項）などと共に「伊勢物語」（別項）から「源氏物語」（別項）に移る過渡期を繫ぐ作品として、又日記的形態のものとして見る時は、「土佐日記」（別項）などと共に、後の宮廷女流日記文學への先蹤として、文學史上看過することが出來ない。

【參考】多武峯少將物語考證　丸林孝之　〔池田〕

東坡全集（とうばぜんしふ）　詩文別集　百十五卷

【著者】蘇軾　【諸本】傳本は頗る多いけれども、その體例は大要二つある。その一は分集編訂をなすもの、即ち軾の原本原目に因つて後人がやゝこれを增益したもので、軾が在世時の杭本、明の江西刻本の如きはこれに屬する。その二は分類合編せるもので、居世英本に始まるらしく、宋朝の所謂大全集なるものは、概ねこの例を用ひてゐる。明代に入つては傳刻最も多く、「東坡先生全集」と稱する七十五卷本があり、文を載せて詩を載せず、漏略最も甚だしいものである。又「蘇文忠全集」と稱せらるゝ百十四卷本があり、版はやゝ工であるが、編輯は法度がない。清の蔡士英の刊行した百十五卷本は、舊刻に據つて重訂を加へ、多く世に行はれてゐる（四庫全書總目提要卷一百五十四、集部別集類七に詳しい）。【傳來】仁平元年（皇紀一八一一）宋商劉文沖が「東坡先生指掌圖」等を上つたこと（宇槐記抄）を傳へて居るので、當時或は既に舶載されてゐたかも知れぬ。足利の初世から漸く行はれ、中葉以後には最も行はれ、抄釋を施す者も多く、江戸時代に入つても、なほ盛んに行はれた。

【內容】軾は嘗て自らその文を評して云つた「吾が文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばず皆出づ可し、平地に在りては滔々汩々、一日に千里すと雖も難きこと無し。其の山石と曲折するに及んでは、物に隨つて形を賦して知るべからず。知る可き所のものは、常に當に行くべき所に行き、常に止らざる可からざるに止まる、是くの如きのみ。其の他工と雖も、吾亦知ること能はざるなり」と。泉源とは彼の學識才能であり、行止曲折とはその法度變化である。この學才を以て法度を變化の中に行るので、その文藻の圓轉自在に神妙を極めたのは亦當然である。その自ら評する事既にかくの如くであるから、彼の辭藻を評する者は、宋元以來數十家の多きに及び、何れも彼の才華の豐富雄麗、氣識の高深俊邁なることに眩惑しないものは少く、而もその評する所は遂に數語の自評に及ばない。誠に詩に於ては李杜以後、文に於ては韓愈以後の一大宗と云ふべきである。

【著者小傳】蘇軾、字は子瞻、東坡居士と號す。蜀の眉山の人。洵の長子、轍の兄、世稱して大蘇と云ふ。幼にして穎悟、博く經史に通じ、好んで莊子・賈誼等の書を讀んだ。嘉祐二年（皇紀一七一七）軾時に二十二歲、弟轍と同じく禮部に試みられ、主司歐陽脩が軾の刑賞忠孝論を得て、且つ驚き且つ喜び、これを第一に置かんとしたが、その客曾鞏の爲めなるかを疑つて第二席に置いた。弟轍も亦選に入り、仁宗は二人の對策を得たと云つたといふ。大理評事僉書等に歷任したが、神宗の朝に王安石と合はず、請うて地方官となつたが、彼の才名を忌む徒輩のために讒に遭ひ、遂に獄に投ぜられ、弟轍も亦軾を救ふに坐して貶せられた。やがて赦されて黃州に赴き、室を東坡に築いて自ら東坡居士と號した。黃州時代の彼は目に困厄に苦しんだが、この時代こそ彼の窮迫時代であつた。哲宗立つに及んで、起居舍人に擢でられて中央に還り、爾後地方との間を往返すること數度、徽宗の建中靖國元年（皇紀一七六一）常州に於てその波瀾多き生涯を畢つた。享年六十六。高宗の時資政殿學士を贈り、又太師を贈り、文忠と諡した。

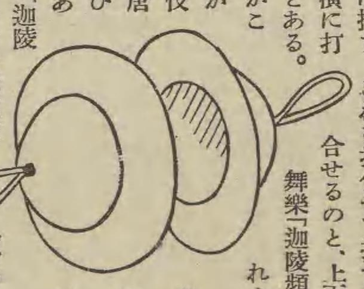
【註釋書】增刊校正王狀元集百家註分類東坡先生詩二十卷 宋 王十朋注・劉辰翁評　〇施註蘇詩四十二卷〇東坡年譜一卷〇王註正譌一卷〇蘇詩續補遺二卷（以上宋施元之注）〇補註東坡編年詩五十卷 清 查慎行　〇蘇文忠公詩合注五十卷首一卷 清 馮應榴

銅鈸（どうはつ）　「銅拍子」を見よ。

童馬漫語（どうばまんご）　歌論集　【著者】齋藤茂吉　【刊行】大正八年八月、春陽堂。【解說】第一歌論集で、短き歌論百四十一項と、數項の論爭文を載せてゐる。本書は多く歌壇の環境に對つて論じた傾向がある。例へば現代語・口語の歌が流行せんとしたとき、和歌はやはり、「けるかも」調であつてかまはぬと論じた。また破調の歌が興り、三十一音律を打破して內在律を强調しようといふ論があつた時も、三十一音の「形式」の特有な點を解明した。また萬葉調の有力な點、短歌の抒情詩なるべき點、寫生は實相觀入によつて成るの說、寫生即象徵の說等、茂吉の短歌に對する考の根本基調をなす幾つかの問題を本書で取扱つてゐるため、「アララギ」の歌風の盛んになると共に、本書も相當に讀まれて歌壇に影響するところがあつた。

【久松】

銅拍子（どうびやうし）　樂器　【名稱】銅製で、これを打合せて拍子を取るから名づけたもの。銅鈸・銅鈸子・銅鉢子・銅鉢・鈸・土拍子の異稱がある。【性質】打樂器の一。圓形の銅板を椀の蓋の如き形となしたもの二個から成り、その中央に柄（ハンドル）手又は柄紐を附けたものであつて大小種々あり、大なるものは徑一尺餘、小なるものは僅かに兩三寸に過ぎない。この柄手又は柄紐を兩手に持ち、これを打合せて拍子をとる。これを橫に打合せるのと、上下に打合せるのとある。


銅拍子

舞樂「迦陵頻」に於て、舞者がこれを持つて打ちながら舞ひ、また伎樂・高麗樂・唐樂に於ても用ひられたやうである。但し今は「迦陵頻」の外には用ひない。「迦陵頻」の舞具として用ひるものは小形のものである。【沿革】古代アッシリア、バビロン、ユダヤ、埃及に於て最も古く用ひられ、後に波斯から印度に入り、佛樂器として用ひられた。支那には西域を通じて南北朝の頃に入つて來たものらしい。「通典」には西戎及び南蠻より出づとあり、「文獻通考」には、戎・南蠻・扶南・高昌・疎勒の國に出づとあり、何れも西南方から支那に傳へられた事を示してゐる。なほ「文獻通考」に、南齊穆士素の造る所であると記してゐるのは、これが西域から傳はつて始めて

南齊で用ひられた事を示すものである。唐の「六典」には、大燕會に十部の伎樂を設けた中に、燕樂・西涼・天竺・龜玆・安國・康國等の伎の中にこの樂器を用ひてゐる事を記してある所から見れば、唐代に於ても主として散樂伎の中に用ひたものらしい。我が國へは奈良朝の頃傳へられたらしく、「西大寺資財帳」の中にはこの名目がある。即ち唐樂器及び高麗樂器としてこれを用ひてゐたやうである。又奈良の東大寺大佛殿前の八角燈籠の扉には、この樂器を奏してゐる彫刻がある。これ等は主として佛家の所用であつたらしい。又雅樂及び散樂の中にも用ひられ、雅樂では平安朝に至つて單に「迦陵頻」の舞童のみがこれを持つに過ぎなくなつたが、散樂に於ては平安朝の末及び鎌倉時代の初めにも行はれてゐたと見えて、文治二年四月に、鎌倉鶴ケ岡八幡宮に於

肥人書・薩人書・眞字・漢音吳音・篆書・八分・飛白・行書・草書・新字（以上第二卷）。片假名　以呂波・梵字・符字・押字・點圖・片假名釋文・以呂波釋文・音類假字釋文（以上第三卷）。國字・國訓・借用・誤用・訛字・省字（以上第四卷）の二十五項に就いて先人の說を擧げ、自說を記してゐる。【價值・影響】文字の研究として、漢字・國字の全般に亙つて考究したのは、實に本書が最初である。その研究の結果は今日から見れば不十分な點もあるが、その態度は飽くまでも學究的で、後世の國學者の如く、或る目的のために說を立てる如き事はない。本書の所說中、後世の國語學界に大きな影響を與へたのは、神代文字・片假名・以呂波に就いての說である。神代文字に就いては、忌部廣成の「古語拾遺」には上古に文字は無いと記してゐる。然るに卜部兼方の「釋日本紀」には神代から龜

關しては先人の說を集めたに過ぎないが、字體に就いての說は、注意すべきものがある。この方面の事は、後、伴信友が「假字本末」（別項）に於て研究を大成してゐる。これを要するに、本書は我が國に於て用ひられた文字及び用ひられたと傳へられる文字の全般に亙つて考察した最初のものであり、爾後この種の研究の母胎になつたものである。

【龜田】

洞房語園（どうばうごゑん）　隨筆　二卷　【著者】庄司勝富　【名稱】山東京傳の補修本は「增補洞房語園」となつてゐる。【諸本】異本が數部あつて、內容に多少の出入がある。その最佳と思はれる本に、山東京傳が補修を加へたものが、隨筆文學選集第五卷中に收められてある。【解說】江戸吉原遊廓の創立以來の沿革・名妓談、名物談等を錄したもの。著者は同所の創立者庄司甚右衞門から六代目に當る人だと云

經・史・子・集・雜・續の六類に分つて、凡そ一千部を集めてゐるが、單に書名・著者名を記してゐるに過ぎない。卷頭に松崎祐の序及び自序がある。著者は松山侯に仕へた儒者で、字は子績、菊叢と號し、通稱雲溪、後に姓を前田と改めた。享保十年、年七十で歿してゐる。【備考】本書の脫漏を補ひ、誤りを訂したものに、浪華醉墨子編の「續二酉洞」（寫本）、京都の書肆山田三郎兵衞の「唐本類書考」三册（寬延四年刊）がある。又「增訂唐本類書考」六册と云ふのが、前川文榮堂藏版略目に見えてゐる。

【參考】江戸時代之書目　杉浦丘園（雲泉莊山誌卷之二）　【植松・岩淵】

銅脈先生（どうみやくせんせい）　狂詩作者　【姓名】畠中正盈、また騏。字は子允、通稱賴母、また政五郎　【號】觀齋。狂詩に銅脈先生、また太平館主人　【生歿】享和二年（二四六二）六月

南齊で用ひられた事を示すものである。唐の「六典」には、大燕會に十部の伎樂を設けた中に、燕樂・西涼・天竺・龜玆・安國・康國等の伎の中にこの樂器を用ひてゐる事を記してある所から見れば、唐代に於ても主として散樂伎の中に用ひたものらしい。我が國へは奈良朝の頃傳へられたらしく、「西大寺資財帳」の中にはこの名目がある。卽ち唐樂器及び高麗樂器としてこれを用ひてゐたやうである。又奈良の東大寺大佛殿前の八角燈籠の扉には、この樂器を奏してゐる彫刻がある。これ等は主として佛家の所用であつたらしい。又雅樂及び散樂の中にも用ひられ、雅樂では平安朝に至つて單に「迦陵頻」の舞童のみがこれを持つに過ぎなくなつたが、散樂に於ては平安朝の末及び鎌倉時代の初めにも行はれてゐたと見えて、文治二年四月に、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮に於て靜が舞うた際に、畠山重忠はこれを打つたと傳へられてゐる。　〔田邊〕

唐琵琶　「琵琶」を見よ。

同文通考　語學書　【著者】新井白石【成立】正德年中將軍家宣の命に依つて作つた。【諸本】寫本で傳はつてゐるものには、三卷本・二卷本などあつて、「文字考」(三卷又一卷)、「毫品記」(二卷)、「書契文談」(二卷)と題したものもある。刊本は新井白蛾が增補して四卷四册とし、寶曆十年九月刊行。新井白石全集(國書刊行會)第四所收。【內容】支那及び日本の文字に就いて記したものである。第一卷は、漢字に就いて、始製文字・六書・古文・大篆・奇字・小篆・隸書・八分・飛白・章草・行書・草書・百體書・俗字(訛字・創字)・押字の十五項に分つて說いてゐる。第二卷以下は日本に行はれた文字に就いて記したもので、神代文字・肥人書・薩人書・眞字・漢音吳音・篆書・八分・飛白・行書・草書・新字、(以上第二卷)。片假名　以呂波・梵字・符字・押字・點圖・片假名釋文・以呂波釋文・音類假字釋文(以上第三卷)。國字・國訓・借用・誤用・訛字・省字(以上第四卷)の二十五項に就いて先人の說を擧げ、自說を記してゐる。【價値・影響】文字の研究として、漢字・國字の全般に亙つて考究したのは、實に本書が最初である。その研究の結果は今日から見れば不十分な點もあるが、その態度は飽くまでも學究的で、後世の國學者の如く、或る目的のために說を立てる如き事はない。本書の所說中、後世の國語學界に大きな影響を與へたのは、神代文字・片假名・以呂波に就いての說である。神代文字に就いては、忌部廣成の「古語拾遺」には上古に文字は無いと記してゐる。然るに卜部兼方の「釋日本紀」には神代から龜トの事がある。龜の甲を火で灼くとその拆ける形に依つて一萬餘の文字が出來る。これが神代文字で、その數凡そ一萬五千三百六十字あると記してゐる。併し龜甲を灼いて出來る形は、所謂龜兆であつて文字ではない。龜兆が文字の起原であるとは云ひ得るが、龜兆を直に文字とは云ひ得ない。而して廣成は文字が無いと云つてゐるのであるから、兼方の說のみに依つて神代に文字が在つたとは斷定し難い。又出雲大社と熱田神宮に神代から傳はると云ふ書簡があるが、それが若し實際神代から傳はるものならば、神代から文字があつたと云へるであらうが、未だその眞僞を知らぬから斷定は出來ないと云つてゐる。この點は、後、平田篤胤の「古史本辭經」「神字日文傳」(各別項)等に大きな影響を與へてゐるものである。片假名及び以呂波に就いては、作者に關しては先人の說を集めたに過ぎないが、字體に就いての說は、注意すべきものがある。この方面の事は、後、伴信友が「假字本末」(別項)に於て研究を大成してゐる。これを要するに、本書は我が國に於て用ひられた文字及び用ひられたと傳へられる文字の全般に亙つて考察した最初のものであり、爾後この種の研究の母胎になつたものである。　〔龜田〕

洞房語園　隨筆　二卷　【著者】庄司勝富【名稱】山東京傳の補修本は「增補洞房語園」となつてゐる。【諸本】異本が數部あつて、內容に多少の出入がある。その最佳と思はれる本に、山東京傳が補修を加へたものが、隨筆文學選集第五卷中に收められてある。【解說】江戶吉原遊廓の創立以來の沿革、名妓談、名物談等を錄したもの。著者は同所の創立者庄司甚右衞門から六代目に當る人だと云ふ。吉原の歷史を語る書籍は大抵この書を本據とする。【著者小傳】庄司勝富。通稱西田屋又右衞門、號を道恕齋といつた。開祖以來の吉原町の里正で、文筆があり、俳句を好んだ。享保年間の人である。　〔和田〕

東方朔　「仙人物の諸曲」を見よ。

東北　「藝能物の諸曲」を見よ。

東北院職人盡歌合繪卷　「職人盡繪」を見よ。

唐本類書目錄　書目　二册【著者】一色時棟【別名】內題及び見返しに「二酉洞」とある。【成立・刊行】元祿十二年成、同年刊。【諸本】近藤正齋が校訂した「校正二酉洞」二册と云ふのが、大阪の前川文榮堂藏版略目「正齋書籍考」附載)に見えてゐる。【解說】支那に於ける古今の類書の目錄である。經・史・子・集・雜・續の六類に分つて、凡そ一千部を集めてゐるが、單に書名・著者名を記してゐるに過ぎない。卷頭に松崎祐の序及び自序がある。著者は松山侯に仕へた儒者で、字は子績、菊叢と號し、通稱雲溪、後に姓を前田と改めた。享保十年、年七十で歿してゐる。【備考】本書の脫漏を補ひ、誤りを訂したものに、浪華醉墨子編の「續二酉洞」(寫本)、京都の書肆山田三郎兵衞の「唐本類書考」三册(寬延四年刊)がある。又「增訂唐本類書考」六册と云ふのが、前川文榮堂藏版略目に見えてゐる。【參考】江戶時代之書目　杉浦丘園(雲泉莊山誌卷之二)　〔植松・岩淵〕

銅脈先生　狂詩作者　【姓名】畠中正盈、また騏。字は子允、通稱賴母、また政五郎【號】觀齋。狂詩に銅脈先生、また太平館主人【生歿】享和二年(一四六二)六月二日京都に歿す。享年不明。但し六十は越してゐたらうと思はれる。【法名】淸炎觀齋正春居士【墓所】京都市外黑谷【閱歷】南北朝時代の京都粟田宮の神官畠中重連の子孫である。聖護院宮の諸大夫を勤め、聖護院の森に住した。一生を酒と狂詩とに隱れて、一般にはただ狂詩の作家としてのみ知られてゐるが、學殖深く、人物もまた立派であつたらしい。その交友には、蒲生君平・柴野栗山・藤貞幹などの人々があり、殊に君平は銅脈を目するに、山陵調査の同志を以てしてゐる。狂詩に於ては、東の寢惚先生大田南畝と並稱されるが、南畝は常に銅脈を重んじ、銅脈はまた南畝の才に服してゐた。その狂詩は、俗語を自在に驅使しながら、而も卑俗に陷らず、滑稽味の橫溢せるものがあり、その手腕には他の追隨し難きものがあつた。晩年風痺の症に罹つて

物言ふ事も出來なかつたが、なほ見舞に來る人に對して卽座に筆を執つて狂詩を作り、その挨拶に代へてゐたと云ふ。妙法院宮の法主より旣に死んだものと思ひ誤まられ、追悼のこゝろで、「傳聞先生銅脈揚、定是閻魔成敗場、縱衝二赤幟一欺二靑鬼一、魂魄猶迷二極樂傍一」といふ狂詩を贈られたが、この時銅脈なほ存生中で、直ちにこれに和し、「墨蹟手麻商賣揚、死生素是任相場、生兮死兮斯面倒、學仙長欲盡阿傍」と答へたが、それより幾ほどもなく病歿した。

【著書】太平遺響一册（明和六年序）（狂詩集）○勢多唐巴詩一册（明和八年序）○太平遺響一册（安永七年序）○狂詩書譜一册（天明六年）○二大家風雅一册（寛政二年序）（大田南畝との贈答の狂詩その他を輯む）○太平遺響一册（享和二年頃か）（狂詩集小說その他）○太平樂婢女行國字解一册（安永元年）○片假名世醉記一册（同年序）（酒を讃美した戲文）○吹寄蒙求一册（安永二年）（蒙求を擬した戲文）○針の供養五册（安永三年）（滑稽本）○當世心筋立一册（寛政二年）○唐土奇譚三册（同年）（支那戲曲の邦譯）○風俗三石士二册（弘化元年）○杜詩國字解三十册（未刊）。

【參考】京都を中心として見たる狂詩（銅脈先生と其の時代）青木正兒（藝文九ノ一一）○銅脈先生 森銑三（上方第四）　【野崎・森】

道命阿闍梨集 だうみやうあじやりしふ　私家集　一卷

【作者】道命阿闍梨　【傳本】圖書寮所藏。奥に建仁二年の奥書と永仁五年承空が書寫した旨の奥書とがある。　【內容】部類がなく短歌・連歌三百二十五首を收めてゐるが、重複した歌が凡そ二十一首もある。終りの五首は本云として揭げながら抹殺し、「以他本書加畢能々校合了、建仁二年四月十六日」とあるが、五首の內には「古今集」の歌、中務の歌等があるから妥當でない。題材の上では、「身なげむとて高き岸に有りて女のながめたる」繪、長恨歌の繪等をよんだものが注意される。又法輪に籠つてゐた時の歌、熊野に詣でた時の歌、花山院の歌合の歌、花山院御葬送（寛弘五年二月八日崩御）の又の日の歌、御國忌の日の歌等がある。　【批評】道命の詠み口は無雜作で調子が低く、字餘りや句割れが多いが、特に俗調が目につく。例へば「世中のしらく〳〵しくもなりまさるかな」「紅葉ばのはしたなきまでちりしきて」「はる〳〵と目のゆくばかりながむれど」「花薄まねくはさがとしりぬれど」「むしりかけたる綿かとぞみる」「妹が頭をそれるなるらん」「音にきく高麗もろこしはひろくとも」の如きものがある。歌に物語の用語と思はれるものを用ひて散文化してゐる傾向は、當時の一般に認められるが、道命に於てはそれが著しい。

【作者小傳】道命は道綱の子、比叡山に登つて慈惠の弟子となり、特に法華經を受持した。讀誦の聲が微妙にして聞く人は皆讚歎し、諸神・亡魂までもその聲を賞でたといふ（今昔物語等）。「宇治拾遺物語」には色好みの僧にて和泉式部のもとに通ひ、經をめでたく讀誦したとあるが、「古今著聞集」には和泉式部と同車したが、後ろ向きに坐して「よしやよし昔や昔いがぐりの笑みもあひなばおもこそすれ」と詠んだとある。和泉式部との關係は恐らく後世の附會にて、式部と性空上人との間に有名な贈答歌のある事、道命が性空を書寫山に訪ずれたといふ事（今昔物語）、道命と赤染衞門と贈答歌のある事（後拾遺集・赤染衞門集）などから誤つて聯想されたものであらう。　【西下】

道明寺 だうみやうじ　「唐事物の諸曲」を見よ。

道命法師集 だうみやうほふしふ　「道命阿闍梨集」を見よ

答問遺章 たふもんゐしやう　隨筆　一卷

【著者】賀茂眞淵【刊行】文久三年【解說】賀茂縣居の翁が、その門人等の國學上の質問に答へた二十條を、後年山田常典が淸書し、江澤述明が上梓した小册である。中臣祓についての應答を初めとし、餘は歌學に關する考說のみである。文久三年橫山由淸の序、安政四年山田常典、文久三年江澤述明の跋がある。　【和田】

答問錄 たふもんろく　隨筆　一卷

【著者】本居宣長【刊行】天保六年【解說】鈴屋翁が門人等の質問三十一條に應答した考說を集めたもので、古言・古史・神道に係ることが多い。中に神道に就いての意見を問はれたのに對して平生の主張を述べてゐる一段と、最後の「直毘靈」（別項）に係る疑ひを辨說した一段とは、頗る有力なものである。稿本には問者の名があつたのを校者が省いた趣が斷つてある。無年紀本居大平の序、同鈴木朖の跋が添つてゐる。千村仲雄の校訂に係る。　【和田】

東野 とうや　儒者　【姓名】安藤煥圖。字は東壁、通稱仁右衞門　【歿年】享保四年（一三七九）四月。享年三十七。【閱歷】下野の人、父は羽黑侯の醫官。幼にして父を喪ふ。江戶に出で太宰春臺と共に中野撝謙の門に入る。寶永中、甲斐侯柳澤吉保に仕へ、二十九歲にして致仕し駒込白山に隱居す。荻生徂徠に從つて學ぶ。詩文に長じ兼ねて音律に通じてゐた。徂徠の古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞に慣れて信ずる者なかつたが、獨り東野、山縣周南と率先してこれに歸した。徂徠の勢力が一世を風靡するに至つたのも東野の力に由つたのである。釋大典は、「護園の徒中文章を善くする者は獨り東壁のみ」と稱してゐる。晩年本多忠統の賓師となつたが、勉勵度に過ぎ、血を吐いて歿した。【著書】東野遺稿三卷　【佐久】

東野州聞書 とうやしうきがき　歌論書　一卷

【著者】東常緣　【成立】未詳。但し書中に見える年月では康正二年が最も新しいからこの頃成るか。【諸本】寫本の外、群書類從卷二九八所收本がある。【解說】東常緣が招月庵正徹や飛鳥井雅孝から聞いたものを記し、併せて自見をも加へたもの。組織的ではないが、斷片的の中に、歌論史上もしくは和歌史上注意すべき記載がある。たとへば正徹の所を尋ねて、「おもひかねいもがり行けば冬のよの河風寒み千鳥鳴く也」「ゆふされば鹽風こして陸奥の野田の玉川千鳥なく也」「濱千鳥つまとふ月のかげ寒し蘆の枯葉の雪の下かぜ」の三首の中で、何れをとるかと尋ねたところ、正徹の返事に「我は定家宗にてはつべきうへは、いづれも同體の事にては侍ども、濱千鳥つまとふに附侍べし」とある如きは、正徹の立場を見る重要な資料である。同じく正徹の言として、「源氏物語」の中で、浮舟の方へ匂兵部卿が通つていつて曉歸る時のさまは、餘情が殊にすぐれてゐるとした如きも、正徹の源氏物語論として注意せられる。また「源氏物語」の諸本を擧げ、「水原抄」「源中祕抄」等の註釋を擧げた條の如きも注目せられる。定家の書と言はれる「三五記」を「非定家卿作」と言つたのは卓見であり、俊成の「長秋詠草」や定家の「拾遺愚草」を擧げてゐるのも注意せられる。【價値】要するに、東常緣は「古今傳授」を宗祇に傳へたと言はれるだけあつて、最も傳統的であり、從つて自說の見るべき點は尠いが、忠實に聞書を記してゐる點に歌學資料として注意せられる。

れる。　【久松】

藤彌太物語 とうやたものがたり　「御所櫻堀河夜討」を見よ。

遠山櫻天保日記 とほやまざくらてんぱうにつき

四幕　世話物　【作者】竹柴其水　【初演】明治二十六年十一月、東京明治座。

【役割】遠山金四郎・按摩電庵實は下總無宿生田角太夫（先代市川左團次）、成田山不動明王（九代市川團十郎）、藤村浦太實は佐島天學（市川權十郎）、圓通寮の祐天・祐天小僧小吉（市川小團次）、須之崎政五郎（先代市川猿之助）等。

【諸本】日本戲曲全集第三十四卷所收。

【梗概】【序幕】淺草花川戶で淸元の師匠をしてゐた延若と、尾花屋の小三郎とは戀仲になつたが、延若の親の須之崎政五郎や兩親の頼みによつて、一旦別れる事にしたが、二人は諜し合せてその夜隅田川へ身を投げた。そこを見る。【二幕】花川戶の稽古所を出張り場所にした須之崎政五郎の處へ、小三郎實は祐天小僧小吉が來て、護摩木山で拾つた煙草入を種に金を貰ひに來るので、二十五兩包を與へる。その後へ按摩の風をして來た電庵事生田角太夫に揉ませてゐる所へ、尾花屋の丁稚が使に來たのから思ひつき、その夜角太夫が盜みに入らうと計畫中、女房おもとに見咎められるので締め殺す。角太夫は遂に目明かしに捕へられる。牛込の自身番へ引かれて取調べ中、加役同心の藤村浦太といふは佐島天學であつたので、角太夫の告發によりこれも捕縛されて了ふ。【四幕】北町奉行の白洲に於て、佐島天學・小吉等の一件が遠山左衞門尉によつて調べられ、小三郎事小吉は結局罪狀を認められず、佐島天學も單に女犯の罪に問はれる事となり、小三郎と入水した延若も命助かり、併せて「東西遊記」ともいふ。共に紀行にして隨筆を兼ねた書である。　【和田】

北陸二道旅行中、見聞の奇事・珍物・勝景・畸人等を錄したもので、地理・歷史・本草・土俗、その他の事にも及んでゐる。文章は平明の裡に達意で、なか〳〵興味に富む。前編卷一に鎌倉以下九項、卷二に松前津波以下七項、卷三に文武之餘風以下六項、卷四に親不知以下五項、卷五に秋田蕗以下十項を收め、後編卷一に壺の石ふみ以下四項、卷二に龍燈以下十項、卷三に四五六谷以下九項、卷四に熊野御前以下八項、卷五に手取川風雪以下十項を收む。吉村蘭洲・長澤蘆雪・松村吳春・圓山應受・吉村孝敬・村上東洲等諸名家の插圖がある。卷一に、寛政七年松本愚山の序及び著者の凡例・總目次があり、每卷首に、その所收目次がある。別に姉妹卷として「西遊記」（別項）十册があり、併せて「東西遊記」ともいふ。共に紀行にして隨筆を兼ねた書である。　【和田】

道命阿闍梨集 だうみやうあじやりしふ　私家集　一卷

【作者】道命阿闍梨　【傳本】圖書寮所藏。奥に建仁二年の奥書と永仁五年承空が書寫した旨の奥書とがある。　【內容】部類がなく短歌・連歌三百二十五首を收めてゐるが、重複した歌が凡そ二十一首もある。終りの五首は本云として揭げながら抹殺し、「以他本書加畢能々校合了、建仁二年四月十六日」とある

道明寺 だうみやうじ　「唐事物の諸曲」を見よ。

道命法師集 だうみやうほふしふ　「道命阿闍梨集」を見よ

答問遺章 たふもんゐしやう　隨筆　一卷

【著者】賀茂眞淵【刊行】文久三年【解說】賀茂縣居の翁が、その門人等の國學上の質問に答へた二十條を、後年山田常典が淸書し、江澤述明が上梓した小册である。中臣祓についての應答を初めとし、餘は歌學に關する考說のみである。文久三年橫山由淸の序、安政四年山田常典、文久三年江澤述明の跋がある。　【和田】

答問錄 たふもんろく　隨筆　一卷

【著者】本居宣長【刊行】天保六年【解說】鈴屋翁が門人等の質問三十一條に應答した考說を集めたもので、古言・古史・神道に係ることが多い。中に神道に就いての意見を問はれたのに對して平生の主張を述べてゐる一段と、最後の「直毘靈」（別項）に係る疑ひを辨說した一段とは、頗る有力なものである。稿本には問者の名があつたのを校者が省いた趣が斷つてある。無年紀本居大平の序、同鈴木朖の跋が添つてゐる。千村仲雄の校訂に係る。　【和田】

東野 とうや　儒者　【姓名】安藤煥圖。字は東壁、通稱仁右衞門　【歿年】享保四年（一三七九）四月。享年三十七。【閱歷】下野の人、父は羽黑侯の醫官。幼にして父を喪ふ。江戶に出で太宰春臺と共に中野撝謙の門に入る。寶永中、甲斐侯柳澤吉保に仕へ、二十九歲にして致仕し駒込白山に隱居す。荻生徂徠に從つて學ぶ。詩文に長じ兼ねて音律に通じてゐた。徂徠の古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞に慣れて信ずる者なかつたが、獨り東野、山縣周南と率先してこれに歸した。徂徠の勢力が一世を風靡するに至つたのも東野の力に由つたのである。釋大典は、「護園の徒中文章を善くする者は獨り東壁のみ」と稱してゐる。晩年本多忠統の賓師となつたが、勉勵度に過ぎ、血を吐いて歿した。【著書】東野遺稿三卷　【佐久】

東野州聞書 とうやしうきがき　歌論書　一卷

【著者】東常緣　【成立】未詳。但し書中に見える年月では康正二年が最も新しいからこの頃成るか。【諸本】寫本の外、群書類從卷二九八所收本がある。【解說】東常緣が招月庵正徹や飛鳥井雅孝から聞いたものを記し、併せて自見をも加へたもの。組織的ではないが、斷片的の中に、歌論史上もしくは和歌史上注意すべき記載がある。たとへば正徹の所を尋ねて、「おもひかねいもがり行けば冬のよの河風寒み千鳥鳴く也」「ゆふされば鹽風こして陸奥の野田の玉川千鳥なく也」「濱千鳥つまとふ月のかげ寒し蘆の枯葉の雪の下かぜ」の三首の中で、何れをとるかと尋ねたところ、正徹の返事に「我は定家宗にてはつべきうへは、いづれも同體の事にては侍ども、濱千鳥つまとふに附侍べし」とある如きは、正徹の立場を見る重要な資料である。同じく正徹の言として、「源氏物語」の中で、浮舟の方へ匂兵部卿が通つていつて曉歸る時のさまは、餘情が殊にすぐれてゐるとした如きも、正徹の源氏物語論として注意せられる。また「源氏物語」の諸本を擧げ、「水原抄」「源中祕抄」等の註釋を擧げた條の如きも注目せられる。定家の書と言はれる「三五記」を「非定家卿作」と言つたのは卓見であり、俊成の「長秋詠草」や定家の「拾遺愚草」を擧げてゐるのも注意せられる。【價値】要するに、東常緣は「古今傳授」を宗祇に傳へたと言はれるだけあつて、最も傳統的であり、從つて自說の見るべき點は尠いが、忠實に聞書を記してゐる點に歌學資料として注意せら

君裕　【歿年】文政八年（一八二五）八月二十三日。享年七十。【閱歷】伊勢の津の人、初め醫を學び、後、經學に志し、京都に出て獨學研磨すること十餘年、古學を以て一家を成し、諸公卿と交遊し、賓師として待遇された。天明八年、鄕に歸り、儒官に擧げられ、伊賀上野に敎授し、尋いで直學士に補せられ、また侍讀學士となり、文政二年、學館を創建し、督學兼侍讀に任じ、執政大夫の次に列せられた。大正十四年、正五位を贈られた。【著書】夜航詩話○同餘話○聿修錄○古詩大觀○杜律詳解○絕句類選○葛原詩話糾謬。　【佐久】

童謠 どうえう　少年文學　【解說】童謠は童心童語の歌謠である。この本義に據る大正期に於ける藝術童謠の提供は、初めて日本の諸詩人たちによつて自覺され、協力された一つの大なる新運動であつた。この新運動の精神と

【參考】京都を中心として見たる狂詩（鋼脈先生と其の時代）青木正兒（藝文九ノ一一）〇銅脈先生 森銑三（上方第四）【野崎・森】

道命阿闍梨集 どうみやうあじやりしふ 私家集 一卷 【作者】道命阿闍梨 【傳本】圖書寮所藏。奥に建仁二年の奥書と永仁五年承空が書寫した旨の奥書とがある。【内容】部類がなく短歌・連歌三百二十五首を收めてゐるが、重複した歌が凡そ二十一首もある。終りの五首は本云として掲げながら抹殺し、「以他本書加畢能々校合了、建仁二年四月十六日」とある。【久松】

藤彌太物語 とうやたものがたり 「御所櫻堀河夜討」を見よ。

遠山櫻天保日記 とほやまざくらてんぱうにつき 脚本 四幕 世話物 【作者】竹柴其水 【初演】明治二十六年十一月、東京明治座。

【役割】遠山金四郎・按摩電庵實は下總無宿生田角太夫（先代市川左團次）、成田山不動明王（九代市川團十郎）、藤村浦太實は佐島天學（市川權十郎）、圓通寮の祐天・祐天小僧小吉（市川小團次）、須之崎政五郎（先代市川猿之助）等。

【諸本】日本戲曲全集第三十四卷所收。

【梗概】〔序幕〕淺草花川戸で清元の師匠をしてゐた延若と、尾花屋の小三郎とは戀仲になつたが、延若の親の須之崎政五郎や兩親の頼みによつて、一旦別れる事にしたが、二人は諜し合せてその夜隅田川へ身を投げた。そこへ通り合せた淨雲寺の僧天學は、盜賊生田角太夫のために金を奪はれんとしたが、立ち現はれた捕手を見て角太夫は短筒を擊つて身を匿し、却つて天學が捕縛される。〔返し〕遠山金四郎が河原崎座の囃子部屋へ出てゐて、仲間内で口論したのを取鎭める。〔二幕〕芝愛宕下の遠山邸では亡父三回忌の逮夜。そこへやうやく捜しあてた醉つ拂ひの金四郎が連れ込まれる。母・女房・弟等が諫めるので、金四郎は下民の情に通じる目的で腕に刺青まで施し、芝居の樂屋に入り込んだのであるが、最早今日限りと言明したところへ、明日お召出しの御奉書が到來する。一方捕はれて佐倉の牢へはひつてゐた角太夫と天學とは、牢破りをして成田山の護摩木山へ駈け入り、これも盜人の祐天小僧小吉と會ひ、三人は兄弟の盟約をする。祐天小僧は、夢に祐天上人の荒行を見る。〔三幕〕花川戸の稽古所を出張り場所にした須之崎政五郎の處へ、小三郎實は祐天小僧小吉が來て、護摩木山で拾つた煙草入を種に金を貰ひに來るので、二十五兩包を與へる。その後へ按摩の風をして來た電庵事生田角太夫に揉ませてゐる所へ、尾花屋の丁稚が使に來たのから思ひつき、その夜角太夫が盜みに入らうと計畫中、女房おもとに見咎められるので締め殺す。角太夫は遂に目明かしに捕へられる。牛込の自身番へ引かれて取調べ中、加役同心の藤村浦太といふは佐島天學であつたので、角太夫の告發によりこれも捕縛されて了ふ。〔四幕〕北町奉行の白洲に於て、佐島天學・小吉等の一件が遠山左衞門尉によつて調べられ、小三郎事小吉は結局罪狀を認められず、佐島天學も單に女犯の罪に問はれる事となり、小三郎と入水した延若も命助かつて吉原に若紫となつてゐる事が判明し、また角太夫の女房おもとも蘇生した事が判明するに終る。角太夫は牛込から繩拔けをして新潟へ行つた所を捕はれる。

【解說】下情に通じた遠山左衞門を經として、當時社會を騒がしたピストル强盜清水定吉を暗に諷刺した生田角太夫、卽ち按摩電庵を緯とし、短銃を屢々舞臺上にも現はした點などからも、相當世評を博した。師默阿彌の「霜夜の鐘」を連想せしむるものもあるが、其水作中の人情劇としては見るに足るものである。

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義〇河竹默阿彌 河竹繁俊 【河竹】

東遊記 とういき 紀行・隨筆 前編・後編各五册 【著者】橘春暉（南谿）【角書】諸國奇談【刊行】寛政七年より九年に至る。【解說】京都の醫者南谿が醫學修行のため、關東及び東山・北陸二道旅行中、見聞の奇事・珍物・勝景・畸人等を錄したもので、地理・歷史・本草・土俗、その他の事にも及んでゐる。文章は平明の裡に達意で、なか〳〵興味に富む。前編卷一に鎌倉以下九項、卷二に松前津波以下七項、卷三に文武之餘風以下六項、卷四に親不知以下五項、卷五に秋田蕗以下十項を收め、後編卷一に壺の石ふみ以下四項、卷二に龍燈以下十項、卷三に四五六谷以下九項、卷四に熊野御前以下八項、卷五に手取川風雪以下十項を收む。吉村蘭洲・長澤蘆雪・松村吳春・圓山應受・吉村孝敬・村上東洲等諸名家の插圖がある。卷一に、寛政七年松本愚山の序及び著者の凡例・總目次があり、每卷首に、その所收目次がある。別に姉妹卷として「西遊記」（別項）十册があり、併せて「東西遊記」ともいふ。共に紀行にして隨筆を兼ねた書である。【和田】

東牖子 とういうし 隨筆 五卷 【著者】田宮仲宣【刊行】享和三年【解說】京阪その他諸方の風俗傳說、陰陽五行の論、訓誨の言、文學談、博物談等何くれとなく書き集めたもので、眞箇の漫錄である。卷一に地天泰以下、卷二に日本國風以下、卷三に日本人の潔白以下、卷四に厄年の事以下、卷五に螢の解以下、各數十則を收む。但し標目はない。本書の特色は挿圖の佳且つ豐かなるに在つて、丹羽桃溪・森周峯等名家の筆もある。享和二年無名氏、同元年田中桐江、同年著者の三序及び享和元年木村孔恭（蓼莪堂）の跋で飾られてある。

【著者小傳】田宮仲宣は、大阪の儒家。通稱悠藏、東牖子、又橘菴はその號である。寛政・文化年間の人で歿年は不詳。「橘菴漫筆」「嗚呼矣草」「愚雜俎」等の隨筆を著はしてゐる。【和田】

東陽 とうやう 儒者 【姓名】津阪孝綽。字は君裕 【歿年】文政八年（一八二五）八月二十三日。享年七十。【閲歷】伊勢の津の人、初め醫を學び、後、經學に志し、京都に出て獨學研磨すること十餘年、古學を以て一家を成し、諸公卿と交遊し、賓師として待遇された。天明八年、鄉に歸り、儒官に擧げられ、伊賀上野に教授し、尋いで直學士に補せられ、また侍讀學士となり、文政二年、學館を創建し、督學兼侍讀に任じ、執政大夫の次に列せられた。大正十四年、正五位を贈られた。【著書】夜航詩話〇同餘話〇聿修錄〇古詩大觀〇杜律詳解〇絕句類選〇葛原詩話糾謬。 【佐久】

童謠 どうえう 少年文學 【解說】童謠は童心童語の歌謠である。この本義に據る大正期に於ける藝術童謠の提供は、初めて日本の諸詩人たちによつて自覺され、協力された一つの大なる新運動であつた。この新運動の精神としたところは何か、祖國愛である。我が國童謠の傳統の開展である。而して非藝術的であり功利的である小學唱歌の排擊である。卽ち我が國兒童への童謠生活時代の復興であり、更に純粹なる藝術歌謠としての創作童謠の提供である。更に又童心を通じ、睿智を通じ、感覺を通じての、この日本の新時代の童謠體を開拓し、一には成人たる詩人自身の內なる思無邪境を開顯し、二にはその自らの愛と香氣と滋味とを以て、幼き兒童の世界と交感し、結果に於て、彼等兒童の世界をいよ〳〵豐滿ならしむるに至ることを歡びとするにある。無論その本義とするところは、純粹なる藝術の感興を感興とし、その價値を價値とするにある。寧ろ詩は先づ童謠に還れといふことであつた。なほ在來の童謠（小供歌）に就いては「歌謠」を見よ。（童謠詩人會參照） 【北原】

東洋學藝雜誌（とうやうがくげいざつし）　雜誌【刊行】明治十四年十月創刊（大正に入つて「學藝」と改題）、東洋學藝社。【沿革】文學士千頭淸臣が友人理學士杉浦重剛と圖り、英國の通俗科學雜誌 Nature を手本にして發行したもの。最初の同人は、上記兩人の外、文學士福富孝季・文學士井上哲次郎・理學士磯野德三郎等であつた。後、次第に東京大學の教授達が聲援し、加藤弘之・外山正一・菊池大麓・矢田部良吉などが寄稿した。この頃は科學知識の普及の外に、文藝上の文章や作品も掲げ、無味乾燥に失するを避けた。だが、十七・八年以後、帝國大學の機關雜誌的性質を帶びてからは、文藝的趣味は殆ど失はれ、綜合學術雜誌としてのみ存在するに至つた。【文壇的影響】本誌は上述の如き性質なるに拘はらず、初期の雜錄に、外山・矢田部等の新體詩の試譯乃至試作が掲げられてゐて、明治新體詩の勃興を辿る際の好資料である。その有名なものに、第六號「ハムレット」（矢田部尙今譯）、第七號「キングスレー作悲歌」（外山正一譯）、第八號「拔刀隊の詩」（外山正一作）、第九號「鎌倉の大佛に詣でて感あり」（矢田部尙今作）、第十號「カムプベル氏英國海軍の詩」（矢田部尙今譯）等があるが、これ等は何れも、明治十五年七月刊「新體詩抄」（別項）中に收載されてゐる。なほこの集に收載されない作物で注目すべきものに、第九號「西詩和譯」（坪井正五郎）、第十四號「思ひやつれし君」（勝海舟の新體詩）等がある。因にいふ、落合直文の「孝女白菊」の長詩は、往々本誌に掲載されたかに記してゐる文學史もあるが、これは東洋學會雜誌の間違ひであつて本誌ではない。なほ二十四・五年頃から日淸役前後にかけて、外山正一・中村秋香等が、度々新體詩を本誌に發表してゐる。即ち外山は「迷へる母」（一一七號）、「忘れがたみ」（一一九號）等、中村は「桶峽」（一一八號）、「福島中佐」（一三九號）等で、これ等は何れも明治二十八年九月刊の「新體詩歌集」（別項）中に收めてある。なほその後の方の事實は注意する人が少いが、新體詩史の研究に於ては重視すべきものであらう。〔柳田（泉）〕

童謠劇（どうえうげき）「童話劇」を見よ。

童謠詩人會（どうえうしじんくわい）【解說】大正十四年六月「日本童謠集」（一九二五年版）の出版を以て、この會が初めて世に認められた。會員組織であるが、會費を徵收せず同會編纂の出版物の印稅を以て事業費及び會員扶助の資となし、審査編纂委員は、川路柳虹・北原白秋・西條八十・白鳥省吾・竹久夢二・野口雨情・三木露風の七名であつた。童謠の普及を計るため主要會員の自選作品及び新人の作品を審査選拔し、併せて每年一回年鑑「日本童謠集」に收錄して刊行する事を主要目的としたが、同集は一九二五年版及び一九二六年版を刊行した後、自然消滅の形にある。〔北原・內藤〕

東洋文庫（とうやうぶんこ）　文庫【解說】元中華民國總統府顧問アーネスト・モリソン（Dr. George Earnest Morrison）が、明治三十年ロンドン・タイムス通信員として北京に着任以來、約二十年の間に苦心して蒐集した圖書約二萬四千册、地圖・版畫等約一千枚を、大正六年、井上準之助・小田切萬壽之助・上田萬年三氏の盡力によつて岩崎男爵に購はれ、同年九月舶載、その後一二保管場所を變へたが、丸の內仲通の三菱第二十六號館內にモリソン文庫假事務所を開き、こゝに圖書を移して整理した。岩崎男爵はモ氏の意圖を繼承して新刊の圖書を購入すると共に、モ氏の未だ蒐集に及ばざりし方面の圖書をも備へ、モリソン文庫を核心として一種の亞細亞圖書館の設立を企圖し、これを東洋文庫と名付けた。大正十二年十二月、東京市本鄕區駒込上富士前町に新築移轉、翌十三年十一月、岩崎男爵は一切の設備を擧げてこれを寄附し、こゝに財團法人東洋文庫の設立を見た。

【藏書】モリソン文庫本は、現在では、Dr. G. Morrison Library として保管されてゐるが、支那を中心とせる極東諸邦に關する歐文文獻で、その內容もあらゆる部門に亙つてゐる。これ等の中には稀覯に屬するものもあるが、その特質は、普通の圖書と雖も、苟も事極東に關するものは、新古を通じ組織的にこれを蒐集したと云ふ點にある。藏書中注意すべきは、一四八五年アントワープ刊本を最古とするマルコ・ポーロの東方紀行四十餘種、明末淸初に於ける耶蘇宣敎師の手に成れる支那文物の研究及び時事の報告、歐米に於ける支那學の源流をなす古書、殊に典禮問題に關する記錄、支那語辭書約五百册、日露戰爭に關する圖書約五百册、動植物特に支那の鳥類に關する書、近代地理學上並に考古學上の探檢報告類等である。その他百十餘種の定期刊行物及び約六千册の小册子も得難い文獻である。モリソン文庫の外、新に加へられたるものは、日本に關するものその大半を占め、滿蒙・中亞・印度・南洋等に關するもの約二萬五千册、漢籍約二萬册、その他英のスタイン、佛のペリオが西域で發見した古文書、古書籍類及び歐洲各地圖書館に存する日本耶蘇會刊行の稀書のロートグラフ等は注意に値する。

【備考】附帶事業として東洋學講座を開設し、大正十五年より每年三・四回、專門家を聘して東洋學に關する講演を行ひ、また「東洋文庫論叢」「歐文東洋文庫論叢」「東洋文庫叢刊」等を刊行し、貴重な研究を世に紹介してゐる。

【參考】財團法人東洋文庫沿革略＝*Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison.*〔植松・岩淵〕

藤葉和歌集（とうえふわかしふ）　私撰歌集　六卷（二卷闕く）【編者】藤原實敎と傳へるが確實でない。慈俊の「慕歸繪詞」に、「ちかころ藤葉とて小倉入道前亞相實敎卿撰する云々」とある。實敎は、藤原公雄の子で歌道の家柄、「新後撰」以下の勅撰集の作者であり、權大納言まで昇り、後出家して空覺といひ、貞和五年薨じた。

【成立】詞書のみによれば、集中、永仁元年（一五九三）より古い歌として指示されたものはない。「慕歸繪詞」は、觀應二年（二〇一一）の作とされてゐるから、それ以前の撰述であらう。【諸本】群書類從卷一五七所收。異本は別に見當らぬ。圖書寮や內閣文庫にも寫本が一本づつあるが、類從本と同一。【內容】「群書一覽」には、「よのつねの撰集のさまに歌をあつめて四季の部のみ傳はれり。已下は闕卷か卒業ならざるものか覺束なし」とあるが、類從本には、四季四卷の外に、既に戀部上下二卷が添つてゐる。原本に雜部のあつた事は、「慕歸繪詞」や、前田家藏「兼好法師家集」の書入によつて證することが出來る（後藤丹治氏の考證による）。類從本の全歌數六百三十三首。なほ歌を南北の別なくひろく纂輯してゐるところ、「新葉集」「風葉集」（各別項）「藤葉集」の三集を、南朝三葉集と限定する藤葉集一本の奧書は勿論不當である。但し南北何れとも歸屬の鮮明しない公家もあつたので、かく編された集が、北朝に行はれると共に南朝にも弄ばれたのを否定することは出來ない。詞書によれば、文保百首（文保三年）から拔かれたもの最も多く、嘉元百首（嘉元元年）、龜山殿七百首（元亨三年）、建武二年內裏千首歌などより採られたものも目立つてゐる。【批評】南北兩朝分立に際して、兩朝中心に歌會の屢々行はれてゐることは奇特のことであるが、而も依然として二條派の歌調の優勢である點も、不可解と言へば言へるであらう。この「藤葉集」も二條派隆盛の一產物と言つてよい。爲兼死して程なくこの新集の編まれたことも一種の皮肉である。永福門院も御他界の後に屬するかと思ふ。別に特色のある撰集と言ふべきほどのものでなく、格調總じて低く、「時しもあれ峯の霞はたなびけど猶山寒し雪の村消」（永福門院）と云ふ類のものは、寧ろ例外である。〔齋藤（淸）〕

唐來參和（たうらいさんな）　狂歌師・洒落本黃表り、本所松井町の娼家和泉屋に入婿となつて和泉屋源藏と云つた。松下井三和の號がこの時用ひられたものである。「狂歌人物誌」に、後その養家をも出で落魄の中に世を終つたとあるが、文化五六年の合卷本に松下井三和の號があるから、晩年は養家で平和に暮したと見てよからう。狂歌は四方赤良の門、彼の狂歌は「故混馬鹿集」「後萬載集」等の狂歌集に見えてゐる。創作の處女作は、洒落本「三敎色」（天明三年）である。特に洒落本「和唐珍解（ほうとんちんけい）」（天明五年）（別項）は唐音をそのまゝ入れ、長崎丸山を背景とした異色あるものと見られる。洒落本は僅かに上述のもののみであるが、若し「通言東至船」（文化三年刊）の署名東來山人を彼の別號であるとすれば、更に一部を加へる。黃表紙は洒落本よりは多く、「大千世界牆乃外」（重政畫風、天明四年刊）が處女作らしく、翌年にを附ける方法は屢々繰返され、「物草太郎月」（重政畫風、寬政四年刊）の如き、また忠臣藏物の如きはそれであり、特に忠臣藏物は、「心學早染草」（別項）の影響によつて、後には敎訓味を濃厚にし、屢々類似の作品を出してゐる。漢學の素養が文中に現はれ、支那小說や「雨月物語」（別項）などに據るところも見える。場當りの作は別として、作者としての力量は中位で、趣向が單調で働きがない割に世間からは認められてゐ、「天下一面鏡梅鉢」（別項）などは、諷刺の辛辣さが特に人氣を呼んだ。なほ外に、「賴光邪魔入」（政美畫、天明五年刊）、「摸文畫今怪談（ぐわこんくわいだん）」（榮之畫、天明八年刊）、「冠言葉七目十二支記（あとき）」（歌麿畫、寬政元年刊）、「人唯一心命」（根津優婆塞畫、寬政五年刊）、「家內手本用心藏」（子興畫、寬政十年刊）（以上黃表紙）、「敵討報蛇柳」（北齋畫、文化五年刊）、「敵討裏見瀧」（豐廣畫、文ヲランダ刀ノ事、ガランテウノ事、ウミタケ（海茸）ノ事、ギヤマンノ事、タケブンガニノ事の諸條がある。寶曆十一年木村貞貫（蓬萊）の序に、著者の學問の深博なことを宣揚してゐる。その中に、「近世護園以二命世一稱レ之、談者猶言、博物頗讓二堀川一、以レ余觀レ之、先生之業、幾過二於堀川一、不二亦偉一乎」とある。

【著者小傳】中根若思。字は敬夫、通稱貞右衞門、東里と號した。伊豆の人で、江戶に出て徂徠及び鳩巢に學び、後に陽明學に入つた。明和二年二月七日歿。享年七十二。〔和田〕

東籬亭（とうりてい）　讀本作者【姓名】池田政韶。字は鳳卿。【別號】東籬亭菊人・尙古館・尙古老人【生歿】安政四年（二五一七）歿す。享年七十。【閱歷】京都の人で、文政の末年から凡そ十篇ばかりの讀本を作つてゐるが、その傳記は詳しく知られてゐない。「通俗三國志」

否定することは出來ない。詞書によれば、文保百首(文保三年)から拔かれたもの最も多く、嘉元百首(嘉元元年)、龜山殿七百首(元亨三年)、建武二年內裏千首歌などより採られたものも目立つてゐる。【批評】南北兩朝分立に際して、兩朝中心に歌會の屢々行はれてゐることは奇特のことであるが、而も依然として二條派の歌調の優勢である點も、不可解と言へば言へるであらう。この「藤葉集」も二條派隆盛の一產物と言つてよい。爲兼死して程なくこの新集の編まれたことも一種の皮肉である。永福門院も御他界の後に屬するかと思ふ。別に特色のある撰集と言ふべきほどのものでなく、格調總じて低く、「時しもあれ峯の霞はたなびけど猶山寒し雪の村消」(永福門院)と云ふ類のものは、寧ろ例外である。【齋藤(清)】

唐來參和(たうらいさんな)　狂歌師・洒落本黃表紙作者【姓名】加藤氏。通稱和泉屋源藏【別號】伊豆亭・三和・唐來山人・唐來參人・松下井三和・爐間恒齋、狂號は質草少々。【生歿】寬延二年に生れ、文化七年(一八一〇)正月二十五日歿す。享年六十七。【法名】春好院要秀居士【辭世】「かりの世の地水火風をもどすなり是で五輪もさし引はなし【墓所】深川淨心寺【閱歷】もと武家出身、唐音に達者な點から見て、長崎奉行の配下として彼地にゐたことがあつたらうと推測される。性放逸で家を捨て流浪した。通油町書肆蔦屋重三郎の義弟となり、本所松井町の娼家和泉屋に入婿となつて和泉屋源藏と云つた。松下井三和の號がこの時用ひられたものである。「狂歌人物誌」に、後その養家をも出で落魄の中に世を終つたとあるが、文化五六年の合卷本に松下井三和の號があるから、晩年は養家で平和に暮したと見てよからう。狂歌は四方赤良の門、彼の狂歌は「故混馬鹿集」「後萬載集」等の狂歌集に見えてゐる。創作の處女作は、洒落本「三教色」(天明三年)である。特に洒落本「和唐珍解」(天明五年)(別項)は唐音をそのまゝ入れ、長崎丸山を背景とした異色あるものと見られる。洒落本は僅かに上述のもののみであるが、若し「通言東至船」(文化三年刊)の署名東來山人を彼の別號であるとすれば、更に一部を加へる。黃表紙は洒落本よりは多く、「大千世界牆乃外」(重政畫風、天明四年刊)が處女作らしく、翌年には「莫切自根金生木」(別項)を出した。しかし早くも作を發表した割に寡作であり、後が振はず、「去程拔其後」(政美畫、天明六年刊)の如きは、「氣散次夢物語」(行麿畫、天明五年刊)を眞似て、その後篇に擬してゐる。山東京傳の

唐來參和之肖像(高野辰之氏藏)

を附ける方法は屢々繰返され、「物草太郎月」(重政畫風、寬政四年刊)の如き、また忠臣藏物の如きはそれであり、特に忠臣藏物は、「心學早染草」(別項)の影響によつて、後には敎訓味を濃厚にし、屢々類似の作品を出してゐる。漢學の素養が文中に現はれ、支那小說や「雨月物語」(別項)などに據るところも見える。場當りの作は別として、作者としての力量は中位で、趣向が單調で働きがない割に世間からは認められてゐ、「天下一面鏡梅鉢」(別項)などは、諷刺の辛辣さが特に人氣を呼んだ。なほ外に、「賴光邪魔入」(政美畫、天明五年刊)、「摸文書今怪談」(榮之畫、天明八年刊)、「冠言葉七目十二支記」(歌麿畫、寬政元年刊)、「人唯一心命」(根津優婆塞畫、寬政五年刊)、「家內手本用心藏」(子興畫、寬政十年刊)(以上黃表紙)、「敵討報蛇柳」(北齋畫、文化五年刊)、「敵討裏見瀧」(豐廣畫、文化六年刊)(以上合卷本)等がある。【山崎・小池】

【參考】江戶作者部類(赤本作者部・洒落本作者部)○戲作者小傳(燕石十種第一)○江戶時代戲作小說通志(鼇木園主人)○狂歌人名辭書(狩野快庵)

東里山人(とうりさんじん)「鼻山人」を見よ。

東里新談(とうりしんだん)【著者】隨筆　二卷【著者】中根若思【刊行】寶曆十一年【解說】著者博覽の資を以て、本朝の古俗行事の起原、事物の稱謂、內外國の珍奇な物產等を解說したものである。漢籍を引いて和漢の類似を逃べてある所が多いが、往々彼に拘泥して妥當を失つたやうな點もある。蓋し當時の漢學者の通弊であらう。卷一に、行合ノ餘ノ事、競馬ノヲコリノ事、ムコウチノ事、トチメンボウヲフルト云事等三十四項を收め、卷二に、英華誤字多キ事、月番ノ事、ナゲシノ事等三十二項を收めてゐる。物產については、インデンノ事、ヲランダ刀ノ事、ガランテウノ事、ウミタケ(海茸)ノ事、ギヤマンノ事、タケブンガニノ事の諸條がある。寶曆十一年木村貞貫(蓬萊)の序に、著者の學問の深博なことを宣揚してゐる。その中に、「近世讒圍以二命世一稱レ之、談者猶言、博物頗讒二堀川一、以レ余觀レ之、先生之業、幾過二於堀川一、不二亦偉一乎」とある。【著者小傳】中根若思。字は敬夫、通稱貞右衞門、東里と號した。伊豆の人で、江戶に出て徂徠及び鳩巢に學び、後に陽明學に入つた。明和二年二月七日歿。享年七十二。【和田】

東籬亭(とうりてい)　讀本作者【姓名】池田政韶。字は鳳卿。【別號】東籬亭菊人・尙古館・尙古老人【生歿】安政四年(一八五七)歿す。享年七十。【閱歷】京都の人で、文政の末年から凡そ十篇ばかりの讀本を作つてゐるが、その傳記は詳しく知られてゐない。「通俗三國志」「通俗吳越軍談」(各別項)等を繪入としたものや鎌倉時代の史實に據つた「北條時賴記圖會」(別項)等を作つてゐるが、多く言ふに足るほどのものではない。【著作】靈狐奇談　繪本双忠錄十卷(柳川重信畫、文政八年刊)○繪本忠孝善美錄十卷(春曉齋畫、同十一年刊)○三所靈驗檀風物語五卷(森川保之畫、同十二年刊)等。【笹野】

道立(だうりふ)　俳人・儒者【姓名】樋口彥倫。別名敬義、字は道卿、通稱源左衞門。阮道立ともいつたが、阮は源を支那風に書いたものである。【別號】柴庵・自在庵・芥亭【生歿】元文三年十月十八日生れ、文化九年(一八一二)十二月七日歿。享年七十五(文化七年刊「霜月十三日」に自ら七十九翁と署してゐるのに從へば八十一歲になる。姑く疑を存しておく)。【墓所】京都岡崎極樂寺【閱歷】京都の漢學者伊藤坦庵の孫江村北海の第二子で、後、出でて樋口氏を嗣いだ。

國海軍の詩」(矢田部尙今譯)等があるが、これ等は何れも、明治十五年七月刊「新體詩抄」(別項)中に收載されてゐる。なほこの集に收載されない作物で注目すべきものに、第九號「西詩和譯」(坪井正五郎)、第十四號「思ひやつれし君」(勝海舟の新體詩)等がある。因にいふ、落合直文の「孝女白菊」の長詩は、往々本誌に揭載されたかに記してゐる文學史もあるが、これは東洋學會雜誌の間違ひであつて本誌ではない。なほ二十四・五年頃から日淸役前後にかけて、外山正一・中村秋香等が、度々新體詩を本誌に

George Earnest Morrison)が、明治三十年ロンドン・タイムス通信員として北京に着任以來、約二十年の間に苦心して蒐集した圖書約二萬四千册、地圖・版畫等約一千枚を、大正六年、井上準之助・小田切萬壽之助・上田萬年三氏の盡力によつて岩崎男爵に購はれ、同年九月船載、その後一二保管場所を變へたが、丸の內仲通の三菱第二十六號館內にモリソン文庫假事務所を開き、こゝに圖書を移して整理した。岩崎男爵はモ氏の意圖を繼承して新刊の圖書を購入すると共に、モ氏の未だ蒐集に

等である。その他百十餘種の定期刊行物及び約六千册の小册子も得難い文獻である。モリソン文庫の外、新に加へられたるものは、日本に關するものその大半を占め、滿蒙・中亞・印度・南洋等に關するもの約二萬五千册、漢籍約二萬册、その他英のスタイン、佛のペリオが西域で發見した古文書、古書籍類及び歐洲各地圖書館に存する日本邦蘇會刊行の稀書のロートグラフ等は注意に値する。

【備考】附帶事業として東洋學講座を開設し、大正十五年より毎年三・四回、專門家を聘して

本には四季四卷の外に、即に總部上下二卷が添つてゐる。原本に雜部のあつた事は、「慕歸繪詞」や、前田家藏「兼好法師家集」の書入によつて證することが出來る(後藤丹治氏の考證による)。類從本の全歌數六百三十三首。なほ歌を南北の別なくひろく纂輯してゐるところ、「新葉集」「風葉集」(各別項)「藤葉集」の三集を、南朝三葉集と限定する藤葉集一本の奧書は勿論不當である。但し南北何れとも歸屬の鮮明しない公家もあつたので、かく編された集が、北朝に行はれると共に南朝にも弄ばれたのを

彼も亦儒學を修め、明和五年の「平安人物志」には、既に學者の部にその名を列せられてゐる。養父清太夫は、川越侯松平大和守の留守居役を勤めてゐたので、道立も亦その職を繼いだ。彼はその叔父清絢清田儋叟が「慧而不ㇾ苛ㇾ人而能圓ニ諸技藝一、其於ニ諸歌一蓋亦有ㇾ師受ニ淵源一云」と言つてゐる通り、儒學のみならず又俳諧を善くし、特に蕪村が洛に居を定めるやうになつてからは、その一派の人々と風交を重ね、蕪村とは二十餘年交りを續けた。その蕪村と相識るに至つた因緣は詳かでないが、恐らく蕪村は漢學に就いてその教へを乞ひ、道立は又蕪村に依つて俳諧を學んだものであらう。だから蕪村や几董の社中に在つても常に客分の待遇を受けてゐた。彼は勿論餘技として俳諧に遊んだので、その作品の傳はるものも餘り多くなく、又技倆に於ても固より几董・召波・大魯等と同日に論ずる事は出來ない。のみならず、百池・春坡等の徒にもなほ及ばないであらう。併し彼の漢學的素養は、夙く麥水の新虛栗調に和して、「蓼の穗の色つくもあるを紫蘇の秋」の如き清新な格調を見せ、「蜀魂骨にて人をつくる夜に」「佛燻てさらに葱を煮る夜哉」「梅散て誰そや祇園の畑を打つ」等の如き、蕪村の風骨を奪ふものもある。「夕立の露の間またで照る日かな」の含蓄深い句によつて、几董・大魯を感嘆せしめて止まなかつた事は「新雜談集」に見えて居り、又寫經社の管事として金福寺句會の斡旋をやつた事もあるから、とにかく彼が蕪村等の間に重視されてゐた事は明かである。且つ實際その作品は、必ずしも構想の奇、格調の新を以て勝つてはゐないかも知れぬが、流石に自ら句品の高い事は爭はれぬ所で、蕪村一派の人々に與へた影響も決して少くはなかつたらう。ただ餘技であつたが故に、蕪村や几董の歿後、自ら先に立つて人々を導き、斯道に精進するといふ風がなかつたのは遺憾と言はねばならぬ。【著書】「道立句集」一册が稿本の儘京都寺村家に傳へられてゐる。

【參考】自在庵道立（續原退藏（書書珍本雜誌大正一三ノ一）【續原】

當流小栗判官（たうりうをぐりはんぐわん）「小栗判官」を見よ

當流雲のかけはし（たうりうくものかけはし）浮世草子　五卷【作者】不詳【刊行】刊年未詳【諸本】江戸時代文藝資料第四所收。【解說】さる藏人頭があつた。五節の舞の日に沓を失うて困惑してゐる某の三位の姬君に履物を貸したのが緣となつて、文の贈答から契りかはす。姬君は交情未だ盡きざるに煩惱卽菩提と觀じて尼となる。藏人頭は、「呆れはて胸つぶれ、月夜に釜をぬかれ、雷に臍を摑まれた」る心地となり、我も道に入るべしとて髻を切つたと思うて、眼覺めてみれば、五節の舞は今しがた過ぎたとおぼえ、禁中の南殿に宿直しながら、眠りしうちの夢であつた（卷一）。卷二以下卷五までは瀧川〻右衞門及びその子八之丞（後に八左衞門）の親子二代の好色生活を描いてゐる。八右衞門は實直の性質で、家業第一と勤めてゐたが、同業の仲間なにはやの娘おそなを見染める。妙貞といふ尼に仲介を賴んで文を贈り、遂にわりなき契をかはし、夫婦となつて年月ふる程に、男女二人の子供を設ける（卷二）。上の子は、八之丞とて早くも十三歲、瀧川の家の世嗣としてこの春より八右衞門の父常伯の手に養はれる。十五歲の時、おさがといふ三十四歲の物縫ひの女と馴染む。乳姉弟の腰元も八之丞に思ひをかけて歌の贈答をする。二人はやがて契をこめる。この事兩親に知れたので見張の役として妙貞をつかはす。妙貞はふと腰元の歌を見つけてあはれに思ひ、二人を元の如く逢はせる。八之丞はこの年、元服して八左衞門と改めた（卷三）。八左衞門は店の手代定右衞門といふ四十男と衆道の交りを結び、遊びの金を定右衞門から引出す。それを知らぬ祖父の常伯は、死料二千兩の內、千兩を八左衞門に慰み金として與へる。八左衞門はその內百兩をつかひ、あとの九百兩を殘して遊びをやめる（卷四）。八之丞の學問の師匠に兒島丹下といふ人があつた。なにはやの內儀おそなに思ひをかけて文を遣はす。折しも西國の大名に三百石にて召抱へられることになり、そのまゝに西國へ下つたが、戀文を殿の女中に拾はれてお暇となる。ぜひなく再び都に戻つてみると、八右衞門は四十六歲を一期としてこの世を去つてゐたので、一周忌の過ぎた頃を見計らつてまたおそなに文を遣はす。そこへ西國より使が來て、いつぞやの艷書の罪は無實であつたことが判明して歸參が許された。一方八之丞の八左衞門も誰諫むるともなく改心して家榮え、四代の長者となつた（卷五）。本書は所謂書簡文學の一つには相違ないが、篇中贈答の消息文及び歌と地の文とを比較すると、地の文の方がやゝ多い。それだけ艷書手引草といふよりも、小說としての構成要素が多い。「好色文傳授」（別項）などと同系統に立つ作といへる。なほ本書中引用の歌には、それぞれ出典を載せてある。【小泉】

天野桃隣（芭蕉堂歌仙圖）

桃隣（たうりん）俳人【姓】天野氏【通稱】藤太夫【別號】太白堂・吳竹軒・桃池堂・五無庵。後に桃翁といふ。【生歿】寬永十六年に生れ、享保四年（一三七九）十二月九日歿す。享年八十一。【墓所】東京淺草新寺町光明寺【俳系】芭蕉門【閱歷】伊賀上野の人。後、江戸に出で淺草に住んだやうである。芭蕉の從弟であると云ふ（本朝文鑑）。芭蕉の最後の行脚の際には、深川の芭蕉庵の留守の面倒を見、芭蕉の歿した時は、嵐雪と共に義仲寺に赴いて墓を展し、江戸へ歸つても追善に懇ろであつた。かくて元祿九年三月には、師の足跡を慕つて奥羽行脚をし、「陸奥衞」（別項）を著はした。許六の「同門評判」に、「この人常に貧賤にして勞せらるゝ」とあるが、そんな生活であつたのであらう。【俳風】優れた作家でもないが、元祿七年頃には、その技倆の上達を同門から認められたやうである（芭蕉書簡）。許六は「同門評判」に、「花實いまだしかとせず」と云ひ、併し「白桃や雫もおちず水の色と言へる句侍れば、强ひて修行の功を積まばあらはるべし」と云つてゐる。【著作】陸奥衞五册（別項）（元祿十年刊）○栗津が原一册（芭蕉十七回忌追善集）（寶永七年刊）○古太白堂句選一册（四世桃隣・舞石共編）（文化元年刊）。

【業績・人物】東都俳壇に太白堂といふ一派を開いた。卽ち太白堂二世切部桃隣、その門下に石河積翠・村田桃隣（三世）を出し、積翠は「野ざらし紀行翠園抄」や「芭蕉句選年考」の著によつて殊に名高く、加藤桃隣が三世の門から出でて太白堂四世を繼ぎ、その門の山口桃隣が五世となり、江口孤月（六世）、高橋四夕（七世）を經て、松平吳仙（八世）・日比野桃年（九世）と承け、日比野桃月（十世）に至るまで連綿として今日に及んでゐる。一日芭蕉と共に江の島に遊び、藤澤の驛に泊つたところ、旅店の妻となつてゐたが、敎育家・學者等の間には總括的に「童話」の名稱を使用する者多く、大正年代に至り、所謂新興童話の勃興を見、一般文藝家が盛んに創作を試みた頃から、古典・傳說・創作の如何を問はず、「童話」といふ總稱を一般に用ひるやうになつた。英語の Fairy Tale 獨逸語の Märchen は、共に日本語の童話に相當するものに用ひられてゐるが、語源から云ふと、前者は小神仙（侏儒）の物語といふ意であり、後者は傳說・小話、又は不思議な物語といふ意味をもつもので、いづれもその國の童話の起原を現はしてゐるに對し、日本語の「童話」は兒童にきかせる話といふ文字通りの意味を適切に現はしてゐる。【性質】名義の變遷が示す如く、その性質もかなり複雜してゐる。先づその成立ちによつて大別すると、（一）古典童話。古典の中に散見するものをいふ。

【生歿】永德三年遠江に生れ、文明三年（一二三一）正月七日、伊勢金剛寶寺に於て寂す。享年八十九【閱歷】幼時出家して大岳周崇に就いて學び、天龍寺・萬壽寺に歷住し、永享七年八月、相國寺に入り住持となつた。寶德三年、南禪寺の住持となり、後、嵯峨の妙智院に引退した。等連は周崇より「漢書」を受けて通達し、漢書連と呼ばれた。又易學に精しく、詩も巧みであつた。【著作】「擊雲集」「瓶梅」の二部あつたが、今は世に傳はつてゐない。前後漢書七十册に訓點を施した。

【參考】妙智院過去帳○翰林葫蘆集○日本名僧傳○鷲峰林學文集○右文故事○幻雲文集○蔭涼軒日錄○綿谷慰禪師行狀○碧山日錄【鷲尾】

童話（どうわ）【名義】童心を基調とする一種の文藝形式で、通俗には兒童に聞かせる說話物や植物等に假託して一種の敎訓を傳へ或は眞理を暗示するもので、イソップ物語の如き好適例である。以上の三つは類別の項目であると同時に、又童話構成の要素でもあつて、一篇の童話の中にこの三要素が含まれてゐる場合が甚だ多い。文藝作品としての童話は、童心を基調として眞理を暗示し、人生を象徵する藝術である。「一切の詩的なるものはお伽噺的でなくてはならぬ」と云つたケーベル博士の一語は、極めて簡潔に童話の本質を語つてゐる。敍述の形態よりいへば、神話傳說の形式を傳承した表現樣式によるものであるが、その文體は童話（兒童に理解し得る言葉の意）によつて綴られる事を必要とする。

【沿革】神話や傳說が、何れの國に於ても童話の重要な一部門をなしてゐる點に於て、勢ひ神話學や傳說研究にまで立ち入らねばならぬ

に葱を煮る夜哉」「梅散て誰そや祇園の畑を打つ」等の如き、燕村の風骨を奪ふものもある。「夕立の露の間またで照る日かな」の含蓄深い句によつて、几董・大魯を感嘆せしめて止まなかつた事は「新雑談集」に見えて居り、又寫經社の管事として金福寺句會の斡旋をやつた事もあるから、とにかく彼が燕村等の間に重視されてゐた事は明かである。且つ實際その作品は、必ずしも構想の奇、格調の新を以て勝つてはゐないかも知れぬが、流石に自ら句品の高い事は爭はれぬ所で、燕村一派の人々に

「白桃や雫もおちず水の色と言へる句侍れば、強ひて修行の功を積まばあらはるべし」と云つてゐる。【著作】陸奥衞五册（別項）（元祿十年刊）○栗津が原一册（芭蕉十七回忌追善集）（寶永七年刊）○古太白堂句選一册（四世桃隣・舞石共編）（文化元年刊）。

【業績・人物】東都俳壇に太白堂といふ一派を開いた。卽ち太白堂二世切部桃隣、その門下に石河積翠・村田桃隣（三世）を出し、積翠は「野ざらし紀行翠園抄」や「芭蕉句選年考」の著によつて殊に名高く、加藤桃隣が三世の門から出でて太白堂四世を繼ぎ、その門の山口桃隣が五世となり、江口孤月（六世）、高橋四夕（七世）を經て、松平吳仙（八世）・日比野桃年（九世）と承け、日比野桃月（十世）に至るまで連綿として今日に及んでゐる。一日芭蕉と共に江の島に遊び、藤澤の驛に泊つたところ、旅店の妻の出產に會ひ、盃に「とく出てまた乙みせよ花の兒」といふ符の一句を書いて與へた處、安產の悦びがあつたといふ逸話もある（續俳家奇人談）。許六は「この人には色々おかしき話多し」（同門評判）と云つて、其角の「饅頭で人を尋ねよ山櫻」といふ句を餞別吟と勘違ひして、奥羽行脚に赴いたのはをかしいと云つてゐるが、果してどうか。併し逸話に富む洒脫飄逸な人であつたのであらう。

【參考】俳諧問答 森川許六 ○桃三代 切部桃隣 ○蕉門諸生全傳 還藤日人 ○續俳家奇人談 竹内玄々一 ○俳林小傳 中村光久 ○俳人百家撰 水谷綠亭 ○俳諧人物便覽 三浦若海 〔萩原〕

遠輪廻（とほりんね） 連歌「輪廻」を見よ。

融（とほる） 「古傳說物の諸曲」を見よ。

等連（とうれん） 禪僧 【俗姓】井伊氏。等連は諱、字は竺雲。【號】自强又は小桑子といふ。

【生歿】永德三年遠江に生れ、文明三年（一二三一）正月七日、伊勢金剛寶寺に於て寂す。享年八十九 【閱歷】幼時出家して大岳周崇に就いて學び、天龍寺・萬壽寺に歷住し、永享七年八月、相國寺に入り住持となつた。寶德三年、南禪寺の住持となり、後、嵯峨の妙智院に引退した。等連は周崇より「漢書」を受けて通達し、漢書連と呼ばれた。又易學に精しく、詩も巧みであつた。【著作】「擊雲集」「瓶梅」の二部あつたが、今は世に傳はつてゐない。前後漢書七十册に訓點を施した。

【參考】妙智院過去帳 ○翰林葫蘆集 ○日本名僧傳 ○鷲峰林學文集 ○右文故事 ○幻雲文集 ○蔭涼軒日錄 ○綿谷慰禪師行狀 ○碧山日錄 〔鷲尾〕

童話（どうわ） 【名義】童心を基調とする一種の文藝形式で、通俗には兒童に聞かせる說話の意味である。童話といふ文字の成語は、曲亭馬琴の「燕石襍誌」の中に用ひられたのが古く、馬琴はこれに、「わらべのものがたり」と振假名してゐる。同時代に山東京傳もその著「骨董集」の中に童話の文字を用ひ、「どうわ」といふ音讀みも用ひたが、又「むかしばなし」といふ振假名を施した。一面に於ては、つれづれを慰むることを意味する「お伽」といふ言葉に則り、江戸時代に版本となつたお伽草子などから、「お伽ばなし」といふ名稱も用ひられた。明治に至り巖谷小波は、古典及び口碑傳說等によるものを「昔噺」と呼ぶに對し、主として創作及び再話として新に編述するものを「お伽噺」と稱した。その意は第一に兒童に親しみ易き語であり、且つ童話といふ廣汎なる範圍から、文藝作品としてのそれを區別するにあつて、「お伽文學」などの如く、長く通稱となつてゐたが、敎育家・學者等の間には總括的に「童話」の名稱を使用する者多く、大正年代に至り、所謂新興童話の勃興を見、一般文藝家が盛んに創作を試みた頃から、古典・傳說・創作の如何を問はず、「童話」といふ總稱を一般に用ひるやうになつた。英語の Fairy Tale 獨逸語の Märchen は、共に日本語の童話に相當するものに用ひられてゐるが、語源から云ふと、前者は小神仙（侏儒）の物語といふ意であり、後者は傳說・小話、又は不思議な物語といふ意味をもつもので、いづれもその國の童話の起原を現はしてゐるに對し、日本語の「童話」は兒童にきかせる話といふ文字通りの意味を適切に現はしてゐる。【性質】名義の變遷が示す如く、その性質もかなり複雜してゐる。先づその成立ちによつて大別すると、(一)古典童話。古典の中に散見するものをいふので、例へば「古事記」「日本書紀」「風土記」その他古代に創作された物語類等、外國ではギリシャ神話、印度の佛典、アラビヤンナイトの如き、(二)口碑童話。口傳へによつて民間に傳承されたもので、例へば、桃太郎・猿蟹合戰等をはじめ各地の鄕土傳說等極めて多い。西洋では北歐の民話などが好適例で、獨逸語で Märe といふ。グリムの童話の如きは、このザーゲの集大成である。(三)文藝童話。文藝家の創作した作品をいふので、西洋の例でいへば、アンデルゼンの童話の如き。以上の三つに大別することができる。又その內容に就いては、(イ)神仙譚。前記のフエアリーテール、メールヘンがこれで、我が國では浦島太郎・羽衣など、昔噺の類は多くこれである。(ロ)英雄譚・奇人傳。牛若丸・一寸法師などの如き。(ハ)寓話。英語で Fable といふ。動物や植物等に假託して一種の敎訓を傳へ或は眞理を暗示するもので、イソップ物語の如き好適例である。以上の三つは類別の項目であると同時に、又童話構成の要素でもあつて、一篇の童話の中にこの三要素が含まれてゐる場合が甚だ多い。文藝作品としての童話は、童心を基調として眞理を暗示し、人生を象徵する藝術である。「一切の詩的なるものはお伽噺的でなくてはならぬ」と云つたケーベル博士の一語は、極めて簡潔に童話の本質を語つてゐる。叙述の形態よりいへば、神話傳說の形式を傳承した表現樣式によるものであるが、その文體は童話（兒童に理解し得る言葉の意）によつて綴られる事を必要とする。

【沿革】神話や傳說が、何れの國に於ても童話の重要な一部門をなしてゐる點に於て、勢ひ神話學や傳說研究にまで立ち入らねばならぬわけで、日本の童話も、平安朝以前の神話期、平安朝から室町時代の初期にかけての印度及び支那童話移入期、室町時代から江戸時代にかけての普及發達期、明治時代の歐洲童話輸入期、大正時代の創作期といふやうに分けられてゐる。併し童話が兒童文學として認識され、その組織が統制されたのは、近く明治時代に屬する事であるから、本書ではその時代を基點として記述する。勿論それとて偶然の發生ではなく、前述の如く江戸時代に於て既に「童話」といふ成語が出來あがり、馬琴・京傳等によつて先づ編著の筆が執られ、その他草雙紙・繪本類等の版行によつて、一般に流布された情勢が、明治時代に及んでは更に兒童雜誌（別項）の出現を見、出版物の刊行旺盛を加へた必然の勢ひとして、近世文學の黎明期たる明治中葉の文運興隆時代に至り、ここに

愈々兒童文學として存在が確立したわけである。創作童話として第一に出現したものは、明治二十四年に出版された巖谷小波の「黃金丸」(別項)だと云はれてゐる。これは「少年文學」(別項)と稱する叢書の第一編として發行されたもので、小波はその後、「少年世界」(二十八年)を主宰するに及び、毎號卷頭に創作お伽噺を發表すると共に、「日本昔噺」「日本お伽噺」(各別項)を著はし、更に「世界お伽噺」(別項)を編述して、大規模に外國童話の移入を企て、兒童文學の領野を開拓した。また川上音二郎一派によつて、日本に於ける最初の童話劇(別項)が上演された事及び、小波の門より出た久留島武彥がお伽倶樂部を創立して童話口演の口火を切つた事等は、何れも明治三十六年の出來事で、共に小波の後援によるものであつた。これ等各方面に亙る小波の著作は「小波お伽全集」(別項)全十二卷に集成されてゐる。かくて兒童文學の領域が擴まるにつれ、著作刊行年を逐うて夥しき中にも、明治三十五年以降富山房出版の叢書「少年世界文學」、同四十年以降春陽堂出版の「家庭お伽話」(全五十册)等は出色のものであつた。前者は稻門出身の少壯文藝家たる正宗白鳥・中島孤島・西村醉夢・高須梅溪・佐野天聲等の執筆に係り、後者は高野斑山・吉岡向陽等の編んだもので、共に材料を日本及び外國に求め、淸新な讀物として兒童達の歡迎を受けた。かくの如く兒童文學の地步が確立さるゝに及び、次いで來るものは內容の充實、價値の向上でなければならない。玆に新興童話の懸聲が擧げらるゝに至つたが、小川未明の處女作童話集「赤い船」(明治四十三年版)は、その先登を切つたものだと云はれてゐる。越えて大正二年「愛子叢書」として島崎藤村の「眼鏡」、德田秋聲の「めぐりあひ」、田山花袋の「小さき鳩」、與謝野晶子の「八つの夜」、野上彌生の「人形の望」等が實業之日本社から發刊された。この頃より一般文藝家にして童話の創作を試みる者いよ〳〵多く、「世界童話集」によつて童話革新の第一聲を擧げた鈴木三重吉が、大正七年、純粹の童話雜誌「赤い鳥」(別項)を發刊して文壇知名の士の作を紹介するに及び、類似の雜誌も多く出で、殊に婦人雜誌・日刊新聞等に至るまで競つて童話を掲ぐる風潮を呈し、遂に童話は單に兒童のものであるのみならず、大人のための文藝であるとまで昂揚さるゝに至つた。なほ大正時代に於て特記すべきは、傳說研究から出發した鄕土童話の蒐集及び童話學の成立である。明治四十五年、東京朝日新聞社は鄕土傳說を募集したが、その整理の任に當つたのは高木敏雄で、これを材料として「日本傳說集」を編んだのを切ッ掛けとして、「日本傳說童話集」その他數種の書を著はして童話界に步を進めた。續いて日本傳說學會の創立者藤澤衞彥、神話學の方面から來た松村武雄博士、童話協會の創立者蘆谷蘆村等が出で、學術的立場から童話の研究に努め、その發達を促進した。創作の昂揚、外國童話の移入、傳說の研究——かゝる雰圍氣の中から、松村武雄・小山內薰監修の「世界童話大系」(別項)、楠山正雄の「日本童話寶玉集」(別項)、小川未明の「未明童話集」等が生れた。その他創作に、飜譯に、童話時代を現出し、前記の人々の外、有島武郎・芥川龍之介・菊池寬・久米正雄など、當時の文壇の中堅がこれに參加した。中にも秋田雨雀・沖野岩三郎・宇野浩二・豐島與志雄・久保田万太郎・濱田廣介・宮原晃一郎・吉田絃二郎などは、作品の多い方で、顯著な足跡を印した。こゝに於て自ら童話作家といふ識別が生じ、大正十五年に、童話作家協會が創立され、會員の作品を集めた「日本童話選集」なるものが、同年から毎年一册づつ年刊されることとなつた。要するに明治は創造期であり、大正は興隆期である。創造期はそれ自身としての完成も見られるが、また發芽時代でもあつて、大正に至つてそれが結實したわけである。從つて大正時代は、興隆期自體としての新生面が展開されたと同時に、明治以來の大整理時代、精算期であつたと云へる。(少年文學・童話劇參照)

【參考】日本童話史 藤澤衞彥(日本童話選集第一輯附錄)○明治大正の童話界 山內秋生(同書第二輯附錄)○大正昭和の童話界 濱田廣介(同書第三輯附錄)○童話及び兒童研究 松村武雄○兒童教育と兒童文藝 同上○童話學講話 蘆谷蘆村○世界童話研究 同上○童話十講 同上○日本童話の新研究 中田千畝○日本童話集(日本兒童文庫十五・六・七編)○日本文藝童話集(小學生全集十四・五・六編)○少年文學集(現代日本文學全集三十三編)〔巖谷・山內〕

道話 だうわ 心學 【名義】心學の社會教化運動の主要な一部分として用ひらるゝ教訓談・寓話の類をいふ。【性質】その說く所極めて日常卑近な倫理であつたが、その目指す所は、知心・見性の修行へまでの機緣を結ぶにある。若し本心發明の便りなく、知心・見性の渡りがつかないやうな話であるならば、假令勸善懲惡の意を寓したものであつても、また三教の經典に語を藉りた講釋であつても、雜話と稱してこれを斥けた(手島堵庵の社中順講心得書)。【心學に於ける道話の地位】心學の事功事業としては、國民健康增進のための無料巡回醫療・調藥施行があり、生產增進のための農作改良指導あり、社會風俗改善としては「間引」矯正に努力せるが如き、又救濟事業として天保・嘉永の大飢饉に於ける活動は顯著なものであるが、これ等諸運動の外に、心學運動の應用的事業的方面の中樞をなし、大規模で且つ繼續的であつたものは教化運動であり、その常用手段として用ひられたものが、即ち道話であつた。【規模】橘南谿の「北窓瑣談」(第四卷)にも、その規模の大掛りであつたことを說いてゐるが、寬政三年十月、江戶參前舍の新築舍開きの道話の時などには、千人からの聽衆があつたもののやうである(中澤道二が時習舍の都講吉田甚兵衞への書狀)。關西に於ても同樣、寬政十二年の冬に、泉州堺に於て道話があつた際には、聽衆實に二三千人に達したと記されてゐる(上河淇水の書狀)。寬政六年正月から二月へかけて、中澤道二が丹波地方へ出掛けた時の狀況も、主催者から時習舍都講へ報告した書狀によると、聽講延人員六千六百七十二人に達し、毎席平均五百十三人の出席者があつた。そしてこの聽講者の中から五十四人の心學初入者を見出すことが出來た。續いて篠山城下の開講も、延人員五千百七十六人、毎席平均八百六十二人の聽講者があつた。大島有隣・柴田鳩翁・中村德水・奧田賴杖などの道話席が、これに劣らぬ聽衆を持つたことは、記錄の徵すべきものが存してゐる。【沿革】梅巖は、道話といふ言葉を用ひてゐない。堵庵は既にこの言葉を用ひてゐるが、なほより多く講釋並に座談といふ言葉で呼んだのである。中澤道二以後になると、道話なる稱呼が一般に普及して、心學者自身も、世間も、盛んに道話々々と呼ぶやうになつた。寬政六年に八宮齋の手によつて輯められた中澤道二の「道話聞書」が、道話なる語を書名の中に編み込んだ最初の心學書類であつた。翌七年六月には、同じ人の編輯にかゝる「道二翁道話」初篇が出板され、續いて同八年に第二篇、十二年に第三篇が出板されて、書名としての道話の文字が愈々ポピユラーなものとなつた。梅巖の講釋は、經典の語句を題材にとつたものであつたが、併し語句の考證穿鑿などに囚はれずに、一意本心の提撕に役立てようと努めたものであつた。即ち初めから文字にたよる學究を重んじないで、知性の體驗にまで進む一つの補助手段として講釋を用ひたに過ぎない。殊に寬保元年、武藏國府中領に於て孝子薪木賣長五郎が褒賞せられ、その言行が板行に附して宣傳せられるに及んで、梅巖に過ぎない。併し彼の時代には道話に關する著書が澤山に表はれた。

五體和合 臍隱居岡田驚光(明和二年晩秋)○西岡孝子行狀聞書 布施松翁(明和七年五月)○我津衞手島堵庵(安永四年五月)○町人身體なをし手島堵庵(安永六年六月)○見通卜筮賣卜先生糠俵 虛白齋(安永六年六月)○賣卜先生糠俵後篇 虛白齋(安永七年正月)○鬼は外齊之(安永十年春)○本心早合點是道子(天明元年五月)○心學一助波奈志之種恒亭主人守株子(天明二年春)○畫入教訓春日和(天明二年三月)○孝子留松傳 鎌田一窓(天明四年春)○やしなひ草脇坂義堂(天明四年三月)○我が守高田重充(天明四年)○勸孝見勢ばや自餘居士善應(天明五年正月)○雨のはれ間虛白齋(天明六年春)○父子問答小柴長雄(天明六年)。

など、何れも堵庵在世の時代に出版された道「案山子草」があつて、何れも心學策問の一つ一つを具案的な事例の袖に包んで提供した姿勢をとつてゐる。從つて嚙めば味ひがあり、就いて考へれば考へる程深味があつて、心學修行への好箇の手引草である。併し一場の道話として聞くには、あまりに深遠であり斷片的であつて、解し難く倦み易きものであつた。道話の雄と見るべき天明・寬政期の心學者に、中澤道二・脇坂義堂があつた。義堂の道話に關する著述は頗る多いが、その編纂體裁の上から見て、これを二つの類型に別けることが出來る。その一は虛白齋や松翁のものと同じく策問的・斷片的のものであつて、「御代の恩澤」「民の繁榮」などはこれに屬する。他の一つは日常卑近の道德を旨として、必ずしも心學の眞諦に觸れることを努めるのでない。從つて一篇が一つの物語になつてゐる教育講談風のであつたことなどの點で、全く義堂と趣を同じうしてゐた。この方面から言へば、道二・義堂の時代に至つて、後年に亙る道話の形式が確立したと言ふべきであらう。「道二翁道話」(別項)には、少くとも二つの重要な特徵があつた。その一は最初に經典の一齣を掲げて論旨の大要を明かにして、それに因んで諄々と說き去り說き來つたことである。道話のこの形式は、その後奧田賴杖・柴田鳩翁・平野橘翁などに襲用せられて、今日に至るまで變らぬ鑄型となつた。その二は道話の目指すところが本心修行への手引草たるにあつたことは、心學者の誰もに共通したところであるが、道二の道話に於ては、その譬喩・引例の一つ一つが、直ちに本心體認への極めて大切な手繫りたるやうに仕組まれてゐたことである。言はば道話の心學的本領が如何にも判然とあらは

も、盛んに道話々々と呼ぶやうになつた。寛政六年に八宮齋の手によつて輯められた中澤道二の「道話聞書」が、道話なる語を書名の中に編み込んだ最初の心學書類であつた。翌七年六月には、同じ人の編輯にかゝる「道二翁道話」初篇が出板され、續いて同八年に第二篇、十二年に第三篇が出板されて、書名としての道話の文字が愈々ポピュラーなものとなつた。梅巖の講釋は、經典の語句を題材にとつたものであつたが、併し語句の考證穿鑿などに囚はれずに、一意本心の提撕に役立てようと努めたものであつた。卽ち初めから文字にたよる學究を重んじないで、知性の體驗にまで進む一つの補助手段として講釋を用ひたに過ぎない。殊に寛保元年、武藏國府中領に於て孝子薪木賣長五郎が褒賞せられ、その言行が板行に附して宣傳せられるに及んで、梅巖の運動に甚深の衝動を與へた。「齊家論」によれば、「門弟中にも是までは、文字なくては學問の甲斐なきなどゝおもひし者も、長五郎が事を聞き、いよ〳〵吾言ふところに同心するこそ有がたき」と記されてゐる。實際この長五郎の事蹟は、文字によらざる修養の可能を主張した梅巖の旨を、沁々とその門弟に感得せしめた。かくてこの年から經書の講釋の外に、孝子傳を讀み聞かすといふことが始まつた。これ道話へ第一步を踏み出したものである。堵庵の代になつて道話が非常に盛んになつた。堵庵自身が四方に周遊して道話をしたことは言ふまでもない。堵庵の心學に關する著書は甚だ多かつたが、心學運動の組織に關するものが主で、道話に關するものは少かつた。僅かに「あるべがゝり」「我津齋」(別項)外一二の道話と稱すれば稱し得るものがあつたに過ぎない。併し彼の時代には道話に關する著書が澤山に表はれた。

五體和合 臍隱居(岡田鷲光(明和二年晩秋)○西岡孝子行狀聞書(布施松翁(明和七年五月)○我津齋手島堵庵(安永四年五月)○町人身體なをし手島堵庵(安永六年六月)○見通賣卜先生糠俵後篇(虛白齋(安永六年六月)○賣卜先生糠俵後篇(虛白齋(安永七年正月)○鬼は外齊之(安永十年春)○本心早合點是道子(天明元年五月)○心學一助波奈志之種(恒亭主人守株子(天明二年春)○入德教訓春日和(天明二年三月)○孝子留松傳(鎌田一窓(天明四年卷)○やしなひ草(脇坂義堂(天明四年三月)○我が守(高田重充(天明四年)○勸孝見勢ばや(自餘居士善應(天明五年正月)○雨のはれ間(虛白齋(天明六年春)○父子問答(小柴長雄(天明六年)。

など、何れも堵庵在世の時代に出版された道話の例である。このうち道話の面目を最もよく備へたものの最も早い著者は虛白齋であつた。虛白齋の傳記は全く分つてゐないが、その著書で最も世に知られてゐるものは、「賣卜先生糠俵」(別項)「同後篇」「雨やどり」「目のあたり」等である。この著者は輕妙な筆を驅つて、心學の本旨を卑近な倫理の間に寓して說くのが得意であつた。「金持の金が金持の金にあらざることは、鑓持の鑓が鑓持の鑓にあらざるにて知りぬ」と說いて、私案なしの本意を說けるが如きはその一例である。併しその道話の體裁は、「賣卜先生糠俵」に代表せられてゐるやうに、斷片的なものの集まりといつた形式を成してゐる。道二以後のもののやうに一篇一つの物語りで一貫してゐる講談風のものではなかつた。丁度これと同じ類型に屬するものに布施矩道の「松翁道話」(別項)、寺井方信の「案山子草」があつて、何れも心學策問の一つ一つを具案的な事例の袖に包んで提供した姿勢をとつてゐる。從つて嚙めば味ひがあり、就いて考へれば考へる程深味があつて、心學修行への好箇の手引草である。併し一場の道話として聞くには、あまりに深遠であり斷片的であつて、解し難く倦み易きものであつた。道話の雄と見るべき天明・寛政期の心學者に、中澤道二・脇坂義堂があつた。義堂の道話に關する著述は頗る多いが、その編纂體裁の上から見て、これを二つの類型に別けることが出來る。その一は虛白齋や松翁のものと同じく策問的・斷片的のものであつて、「御代の恩澤」「民の繁榮」などはこれに屬する。他の一つは日常卑近の道德を旨として、必ずしも心學の眞諦に觸れることを努めるのでない。從つて一篇が一つの物語になつてゐる教育講談風のもので、「孝行になるの傳授」「銀のなる木の傳授」「開運出世傳授」「福相になるの傳授」「和合長久の傳授」「長命になる傳授」などの類である。第一類に屬するものは寛政初期頃までの著作に屬し、その第二類に配すべきものは、寛政後期から、文化年代へかけての著述が多い。彼が人足寄場で說いた稿本「心學教諭錄」の如きは、その代表的なものである。義堂に於けるこの變遷は、やがて道話史上に於ける變遷でもあつた。義堂を機軸として教育講談風の道話形式が展開し來つて、民衆通俗向のものとして、一層洗練せられたと見るべきであらう。大衆の興味を呼び掛けるのに、從つて又心學を普及させるのに、極めて有力な展開であつたと見ることが出來る。中澤道二も亦一席讀み切りの講席向きの道話をしたこと、その引喩が輕妙で、卑近で、興味深きものであつたことなどの點で、全く義堂と趣を同じうしてゐた。この方面から言へば、道二・義堂の時代に至つて、後年に亙る道話の形式が確立したと言ふべきであらう。「道二翁道話」(別項)には、少くとも二つの重要な特徵があつた。その一は最初に經典の一節を揭げて論旨の大要を明かにして、それに因んで諄々と說き去り說き來つたことである。道話のこの形式は、その後奥田頼杖・柴田鳩翁・平野橋翁などに襲用せられて、今日に至るまで變らぬ鑄型となつた。その二は道話の目指すところが本心修行への手引草たるにあつたことは、心學者の誰もに共通したところであるが、道二の道話に於ては、その譬喩・引例の一つ一つが、直ちに本心體認への極めて大切な手繫りたるやうに仕組まれてゐたことである。言はば道話の心學的本領が如何にも判然とあらはれてゐた點である。義堂が福相だとか和合長久だとか出世開運だとか、世俗的幸福を題名にかゝげて、これに因んで心學的心境を說いたのに反して、道二は飽くまで正面から驀地に本心に觸れて行つたのである。こゝに「道二道話」の面目が躍如としてゐる。奥田頼杖の「心學道の話」(別項)、柴田鳩翁の「鳩翁道話」(別項)は、道話の典型として古來人口に膾炙されてゐるが、その形式は既に早く道二・義堂の手によつて作られたと見るべきであつた。

【影響】寛政元年の頃と思はれる中澤道二の書狀の一節に、

當地も段々繁昌仕候て、月次定日抔にも人數七百四五十人づゝも御座候。心學修行日百人斗も修行人御座候。其外御屋敷方町方共御信心之御方多く御座候。晝は御屋敷方、夜は町方にて相勤申候。最早九月三十日迄一日も明き日なく御約束仕置き

【心學】【名義】心學の社會教化運動の主要な一部分として用ひらるゝ教訓談・寓話の類をいふ。【性質】その說く所極めて日常卑近な倫理であつたが、その目指す所は、知心・見性の修行への機緣を結ぶにある。若し本心發明の便りなく、知心・見性の渡りがつかないやうな話であるならば、假令勸善懲惡の意を寓したものであつても、また三教の經典に語を藉りた講釋であつても、雜話と稱してこれを斥けた(手島堵庵の社中順講心得書)。

【心學に於ける道話の地位】心學の事功事業は、盛んに道話々々と呼ぶやうになつた。寛政六年に八宮齋の手によつて輯められた中澤道二の「道話聞書」が、道話なる語を書名の中に編み込んだ最初の心學書類であつた。翌七年六月には、同じ人の編輯にかゝる「道二翁道話」初篇が出板され、續いて同八年に第二篇、十二年に第三篇が出板されて、書名としての道話の文字が愈々ポピュラーなものとなつた。梅巖の講釋は、經典の語句を題材にとつたものであつたが、併し語句の考證穿鑿などに囚はれずに、一意本心の提撕に役立てようと努めたものであつた。卽ち初めから文字にたよる學究を重んじないで、知性の體驗にまで進む一つの補助手段として講釋を用ひたに過ぎない。殊に寛保元年、武藏國府中領に於て孝子薪木賣長五郎が褒賞せられ、その言行が板行に附して宣傳せられるに及んで、梅巖の運動に甚深の衝動を與へた。「齊家論」によれば、「門弟中にも是までは、文字なくては學問の甲斐なきなどゝおもひし者も、長五郎が事を聞き、いよ〳〵吾言ふところに同心するこそ有がたき」と記されてゐる。實際この長五郎の事蹟は、文字によらざる修養の可能を主張した梅巖の旨を、沁々とその門弟に感得せしめた。かくてこの年から經書の講釋の外に、孝子傳を讀み聞かすといふことが始まつた。これ道話へ第一步を踏み出したものである。堵庵の代になつて道話が非常に盛んになつた。堵庵自身が四方に周遊して道話をしたことは言ふまでもない。堵庵の心學に關する著書は甚だ多かつたが、心學運動の組織に關するものが主で、道話に關するものは少かつた。僅かに「あるべがゝり」「我津齋」(別項)外一二の道話と稱すれば稱し得るものがあつたに過ぎない。併し彼の時代には道話に關する著書が澤山に表はれた。

五體和合 臍隱居(岡田鷲光(明和二年晩秋)○西岡孝子行狀聞書(布施松翁(明和七年五月)○我津齋手島堵庵(安永四年五月)○町人身體なをし手島堵庵(安永六年六月)○見通賣卜先生糠俵後篇(虛白齋(安永六年六月)○賣卜先生糠俵後篇(虛白齋(安永七年正月)○鬼は外齊之(安永十年春)○本心早合點是道子(天明元年五月)○心學一助波奈志之種(恒亭主人守株子(天明二年春)○入德教訓春日和(天明二年三月)○孝子留松傳(鎌田一窓(天明四年卷)○やしなひ草(脇坂義堂(天明四年三月)○我が守(高田重充(天明四年)○勸孝見勢ばや(自餘居士善應(天明五年正月)○雨のはれ間(虛白齋(天明六年春)○父子問答(小柴長雄(天明六年)。

など、何れも堵庵在世の時代に出版された道話の例である。このうち道話の面目を最もよく備へたものの最も早い著者は虛白齋であつた。虛白齋の傳記は全く分つてゐないが、その著書で最も世に知られてゐるものは、「賣卜先生糠俵」(別項)「同後篇」「雨やどり」「目のあたり」等である。この著者は輕妙な筆を驅つて、心學の本旨を卑近な倫理の間に寓して說くのが得意であつた。「金持の金が金持の金にあらざることは、鑓持の鑓が鑓持の鑓にあらざるにて知りぬ」と說いて、私案なしの本意を說けるが如きはその一例である。併しその道話の體裁は、「賣卜先生糠俵」に代表せられてゐるやうに、斷片的なものの集まりといつた形式を成してゐる。道二以後のもののやうに一篇一つの物語りで一貫してゐる講談風のものではなかつた。丁度これと同じ類型に屬するものに布施矩道の「松翁道話」(別項)、寺井方信の「案山子草」があつて、何れも心學策問の一つ一つを具案的な事例の袖に包んで提供した姿勢をとつてゐる。從つて嚙めば味ひがあり、就いて考へれば考へる程深味があつて、心學修行への好箇の手引草である。併し一場の道話として聞くには、あまりに深遠であり斷片的であつて、解し難く倦み易きものであつた。道話の雄と見るべき天明・寛政期の心學者に、中澤道二・脇坂義堂があつた。義堂の道話に關する著述は頗る多いが、その編纂體裁の上から見て、これを二つの類型に別けることが出來る。その一は虛白齋や松翁のものと同じく策問的・斷片的のものであつて、「御代の恩澤」「民の繁榮」などはこれに屬する。他の一つは日常卑近の道德を旨として、必ずしも心學の眞諦に觸れることを努めるのでない。從つて一篇が一つの物語になつてゐる教育講談風のもので、「孝行になるの傳授」「銀のなる木の傳授」「開運出世傳授」「福相になるの傳授」「和合長久の傳授」「長命になる傳授」などの類である。第一類に屬するものは寛政初期頃までの著作に屬し、その第二類に配すべきものは、寛政後期から、文化年代へかけての著述が多い。彼が人足寄場で說いた稿本「心學教諭錄」の如きは、その代表的なものである。義堂に於けるこの變遷は、やがて道話史上に於ける變遷でもあつた。義堂を機軸として教育講談風の道話形式が展開し來つて、民衆通俗向のものとして、一層洗練せられたと見るべきであらう。大衆の興味を呼び掛けるのに、從つて又心學を普及させるのに、極めて有力な展開であつたと見ることが出來る。中澤道二も亦一席讀み切りの講席向きの道話をしたこと、その引喩が輕妙で、卑近で、興味深きものであつたことなどの點で、全く義堂と趣を同じうしてゐた。この方面から言へば、道二・義堂の時代に至つて、後年に亙る道話の形式が確立したと言ふべきであらう。「道二翁道話」(別項)には、少くとも二つの重要な特徵があつた。その一は最初に經典の一節を揭げて論旨の大要を明かにして、それに因んで諄々と說き去り說き來つたことである。道話のこの形式は、その後奥田頼杖・柴田鳩翁・平野橋翁などに襲用せられて、今日に至るまで變らぬ鑄型となつた。その二は道話の目指すところが本心修行への手引草たるにあつたことは、心學者の誰もに共通したところであるが、道二の道話に於ては、その譬喩・引例の一つ一つが、直ちに本心體認への極めて大切な手繫りたるやうに仕組まれてゐたことである。言はば道話の心學的本領が如何にも判然とあらはれてゐた點である。義堂が福相だとか和合長久だとか出世開運だとか、世俗的幸福を題名にかゝげて、これに因んで心學的心境を說いたのに反して、道二は飽くまで正面から驀地に本心に觸れて行つたのである。こゝに「道二道話」の面目が躍如としてゐる。奥田頼杖の「心學道の話」(別項)、柴田鳩翁の「鳩翁道話」(別項)は、道話の典型として古來人口に膾炙されてゐるが、その形式は既に早く道二・義堂の手によつて作られたと見るべきであつた。

【影響】寛政元年の頃と思はれる中澤道二の書狀の一節に、

當地も段々繁昌仕候て、月次定日抔にも人數七百四五十人づゝも御座候。心學修行日百人斗も修行人御座候。其外御屋敷方町方共御信心之御方多く御座候。晝は御屋敷方、夜は町方にて相勤申候。最早九月三十日迄一日も明き日なく御約束仕置き

立場から童話の研究に努めました。その發達を促進した。創作の昂揚、外國童話の移入、傳說の研究——かゝる雰圍氣の中から、松村武雄・小山內薰監修の「世界童話大系」(別項)、楠山正雄の「日本童話寶玉集」(別項)、小川未明の「未明童話集」等が生れた。その他創作に、飜譯に、童話時代を現出し、前記の人々の外、有島武郎・芥川龍之介・菊池寬・久米正雄など、當時の文壇の中堅がこれに參加した。中にも秋田雨雀・沖野岩三郎・宇野浩二・豐島與志雄・久保田万太郎・濱田廣介・宮原晃一郎・吉田絃

醉夢・高須梅溪・佐野天聲等の執筆に係り、後者は高野斑山・吉岡向陽等の編んだもので、共に材料を日本及び外國に求め、清新な讀物として兒童達の歡迎を受けた。かくの如く兒童文學の地步が確立さるゝに及び、次いで來るものは內容の充實、價値の向上でなければならない。玆に新興童話の懸聲が擧げらるゝに至つたが、小川未明の處女作童話集「赤い船」(明治四十三年版)は、その先聲を切つたものだと云はれてゐる。越えて大正二年「愛子叢書」

候。今下拙壹人や貳人五人七人御座候ても行屆不申候。誠に先生の道も時節到來仕、難有奉存候。只今にては心學者と申、道の咄少々にても仕候へは、一統に聖人か佛のやうに思ひ調け宜敷御座候。此間より當地兩國と申所に、錢とりの軍書講釋師御座候處、軍書之切に都鄙問答講釋仕候とかんはん出し申候由、いかやうに講釋可仕哉と尊仕候。かうした偉大な社會的勢力は、その教旨と相俟つて、心學道話の感化力をいよ〳〵大ならしめた。『道二翁道話』『關口家文書』『心學初入手引草』『心學道の話』『鳩翁道話』などに散見してゐる心學感化の實例は、その感化力の偉大さを物語るものである。横井小楠も曾て心學の感化力に言及して、「京師にて豪家抔此社中に入申候へば、直様人物も宜敷相成候位にて、第一に被尊信候事に御座候」と叙した程であつた。

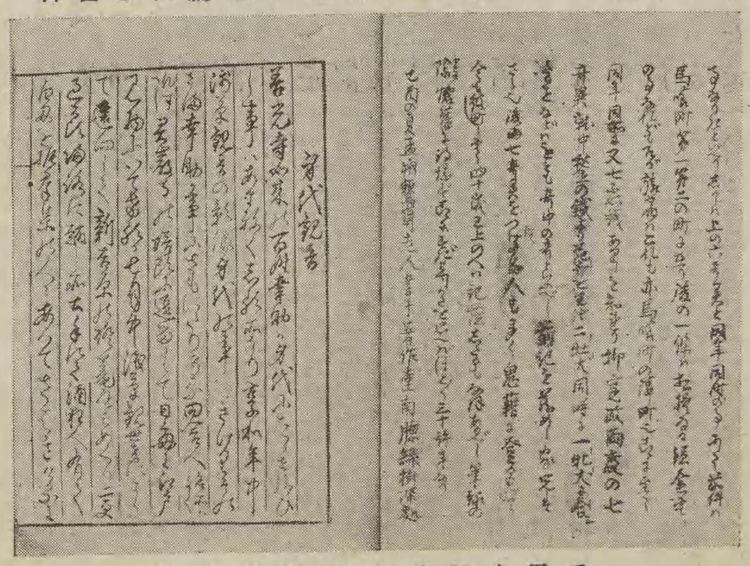
【參考】日本道話全集 加藤咄堂監修 ○心學叢書 赤堀又次郎編 ○鳩翁遺稿 柴田謙堂編 ○石門心學の研究 白石正邦 ○日本近世教育史 横山健堂 ○日本教育史 高橋俊乘 【石川(謙)】

童話劇（どうわげき）【名義・性質】童話(別項)の性質・内容を、劇の形式によつて表現したものである。童話をお伽噺と稱したと同様に、當初は「お伽芝居」と云つた。又兒童自らに演ぜしむる事を目的とする兒童劇、學校に於て課外教化用として生徒に演ぜしむるための學校劇、歌劇の形式を童謡で現はす童謡劇(當初は「お伽歌劇」と云つた)など、その名稱の異なる如く内容に多少の相異はあるが、何れも童話劇の分派と見ることができる。【沿革】明治三十六年、雜誌「少年世界」の春季增刊として發表された巖谷小波作の「春若丸」と題するお伽芝居の脚本が、恐らく童話劇として日本に於ける最初の洋式演藝場有樂座が竣成さるゝに及び、日曜の晝を子供日と稱してお伽芝居を公演する事とした。俳優には前記お伽劇協會が解散して、天野・石川等も加入し、栗島狹衣一派と共演した。後年映畫女優となつた栗島澄子・梅村蓉子・夏川靜江等は當時子役として活躍した。上演脚本は、巖谷小波のお伽芝居・お伽歌劇・對話などを主とし、生田葵・井田絃聲・伊藤松雄・額田六福・長尾豐等の作品も多く上演された。子供日は、爾來大正五・六年頃まで繼續し、時々規模を大にして「家庭劇」なる名稱の下に特別興行を行つたが、この間に特記すべきは明治四十二年の「小公子」の上演である。脚本は巖谷小波が米國漫遊中、彼地の俳優學校で用ひたのを持ち歸つたもので、小公子に扮したのは坂東かつみ(後の坂東勝太郎)であつた。「小公子」は、その後大正三年頃、東儀鐵笛一派によつて帝劇に上演された事がある。大正時代は、お伽芝居運動の當初の如く、專門の劇團等には目ぼしいものがなかつたが、一般文藝家にして童話劇の制作をなす者多く、同時に泰西の名作も續々飜譯移植された。その代表的作者としては、小山内薫・久保田万太郎・長田秀雄・秋田雨雀・楠山正雄の諸氏を擧げる事ができる。上演の主なるものは、小山内薫の「人形」が有樂座の家庭劇に、秋田雨雀の諸作が澤田正二郎一派に、楠山正雄譯「青い鳥」が水谷八重子・夏川靜江の主演で水谷竹紫の藝術座に、久保田・長田の諸作は、歌舞伎の年少俳優より成る芽生座等によつて上演又はラヂオ放送等が屢々行はれた。坪内逍遙博士の「家庭用兒童劇」は、大正十一年の出版に係り、同年十一月、帝劇技藝學校生徒によつて有樂座で公演したのを手初めに、各方面で演出されたが、その主旨は題名の示す如く、必ずしも劇場及び職業俳優によらず、家庭又は學校に於て兒童自らが演ずるといふ所に新生面があつた。(兒童劇參照) 【巖谷・山内】

【參考】小波お伽全集 第四卷芝居篇(千里閣版) ○少年文學集(現代日本文學全集) ○兒童劇集(小波生全集) ○兒童劇集(兒童文庫) ○童話劇集(世界童話大系) ○明治大正の童話界 山内秋生記(日本童話選集第二輯附錄)

兎園會（とえんくわい）「兎園小説」を見よ。

兎園小説（とえんせうせつ）隨筆 十二卷 【編者】瀧澤解等 【成立】文政八年の初め、瀧澤解・山崎美成等の發起で、屋代弘賢(輪池)・關思亮(海棠庵)・西原好和(松鶴館)・大郷良則(信齋)・桑山修理(龍珠軒)・荻生維則(錢園)・清水赤城・中井豐民(乾齋)・瀧澤興繼(琴嶺)・龜屋文寶堂と合せて十二人、外に客員二人の好事家を以て組織した兎園會に、毎月一回集合して各員持寄りの異聞奇事の文稿を披露し合つた事がある。その毎會の文篇を纂輯して十二卷一部としたのがこの兎園小説である。第一集は文政八年正月關海棠庵での發會、第十二集は同年十二月瀧澤著作堂での終會である。【諸本】



兎園小説稿本（笹野堅氏藏）

二十卷の全本は瀧澤氏に在つたのを、天保十四年伊勢松坂の友人小津氏に讓つたと云ふことである。今、世間稀見の本は本編だけである。而も略本が多くて詳本は殆どない。明治二十四年、百家説林出版に當つて、大槻如電翁が所藏の全本を提供して、爰に本書の全豹を該叢書に於て見ることが出來た。翁の藏本は著作堂の友人石川雅望の藏印あるもの。察するに馬琴の持本を借りて謄寫した本であらうとのことである。この顚末は、百家説林正編「兎園小説」の部分に如電翁の前書に出てゐる。【解説】一集一卷の割であるが、それは本編であつてその上に外集・別集・餘録を併せてもと二十卷存したと云ふ。通計十二集百四十九篇。まゝ書圖を加へてある。必ずしも異常の談ばかりではなく、忠臣・孝子・烈女・節婦の記事もあり、殊に第十二集の掉尾の一篇「蒲の花かゝみの上」(著作堂)の如きは、志士蒲生君平の詳傳で、藤田幽谷撰文の墓表まで引き出しての大作であるが、概しては興味本位の珍話が多い。馬琴の寄稿したものには、後に明治二十一年以來漸美正幹氏編の「曲亭雜記」に收載されたものもある。總じて馬琴には記事詳細を極めずんば已まざる癖があるが、本

餘録巻一に佐渡の州民孝行 幷 奇特御褒美録以下十一條、巻二に小泉兄弟四人 幷 一娘褒賞略記以下二十一條を收め、拾遺巻一に平井兄弟が復讐の爲體をいひおこせし讃岐の高松人の消息の寫し以下八條、追加三條、巻二にイギリス船圖説以下十六條、追録一條を收めてあり、所々に小圖を挿んである。 【和田】

都會の憂鬱（とくわいのいうつ）「田園の憂鬱」を見よ。

富樫（とがし）幸若舞曲 (三十六番の一) 二巻 【作者】不詳 【別名】安宅 【成立】室町期 【諸本】古板本は寛永十二年板(十行本)、明暦四年板(山田市郎兵衛開板)。上田萬年博士校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」(富山房)、新群書類從第八舞曲部所收。【解説】判官物(義經傳説)。安宅傳説。諸曲「安宅」と同材。山伏姿の義經主從加賀國安宅の松の邊で兒童に道を問ふ事、辨慶一人羽黒山伏と號して富

伊國和歌山に生れ、明治六年八月二十四日伊勢の桑名で病歿。享年八十一 【閲歴】廣蔭は本姓井手氏で、家は和歌山の木綿問屋であつたが、學問に志し、文政三年の秋(二十八歳)、和歌山にゐた本居大平の門に入つた。文政五年春(三十歳)、大平の嗣子となり、名を本居彰友と改めた。同年夏更に深く研學しようとして伊勢國松坂の本居春庭の門に入りて刻苦勉勵し、學業大に進んだ。文政六年夏(三十一歳)、故あつて本居彰友の姓名を返し、こゝに富樫廣蔭と改め、なほ春庭の下にあつて研究してゐた。文政十・十一年頃は、春庭の「詞通路」の校正に從事した。この頃には廣蔭を師と仰ぐ人も相當の數に上つてゐた。早く文政七年(三十二歳)夏は廣蔭の學を繼いで造詣頗る深かつたと云ふが、明治六年四月、四十八歳を以て歿した。而して廣蔭もその後間もなく歿した。

【著書】〔一〕國語・文法に關するもの〕詞玉緒 解縄三册(別項「詞の玉緒」の條參照) ○詞玉橋二册(別項)明治二十四年刊 ○詞玉襍一鋪(文政十二年刊。刊行年次の記されてゐないのもある。別項「詞の玉橋」の條參照) ○五十連音韻圖・詞辭結俗譯辭・活用解略標圖(この三圖、文政十二年刊の「詞玉襷」の裏面に印刷した簡單な圖表である) ○詞八衢

富樫廣蔭自贊（七）

は著作堂の友人石川夢梨の藏印あるもの。察するに馬琴の持本を借りて謄寫した本であらうとのことである。この顚末は、百家說林正編「兎園小說」の部分に如電翁の前書に出てゐる。【解說】一集一卷の割であるが、それは本編であつてその上に外集・別集・餘錄を併せてもと二十卷存したと云ふ。通計十二集百四十九篇。まゝ書圖を加へてある。必ずしも異常の談ばかりではなく、忠臣・孝子・烈女・節婦の記事もあり、殊に第十二集の掉尾の一篇「蒲の花かゝみの上」(著作堂)の如きは、志士蒲生君平の詳傳で、藤田幽谷撰文の墓表まで引き出しての大作であるが、概しては興味本位の珍話が多い。馬琴の寄稿したものには、後に明治二十一年以來渥美正幹氏編の「曲亭雜記」に收載されたものもある。總じて馬琴には記事詳細を極めずんば已まざる癖があるが、本書中にも同じ傾向が窺はれる。〔和田〕

兎園小說（とゑんせうせつ）　隨筆　外集・別集・餘錄・拾遺　九卷　【著者】瀧澤解【諸本】帝國圖書館所藏大槻如電翁校訂本を以て大正二年國書刊行會が印行した「新燕石十種」第四册に編入のものが本書に印本ある初めである。但し別集中卷のみは同本に省いてある。同卷中の「けんどう考」及び「元吉原記」は、「新燕石十種」第一册に出てゐるからである。【解說】兎園小說本編の後を承け、兎園會廢絶の後、瀧澤解(馬琴)が獨力で編輯したもので、外集二卷を除いた以下七卷は門外不出の姿であつた。外集二卷はなほ會友との共同編纂で、その卷一に年の和名幷に月の異名考餘以下十條、卷二に唐船漂着の記以下十八條を收め、別集上卷にひやうし考以下十一條、中卷にけんどん考以下二條、下卷に帶掛考以下十二條を收め、餘錄卷一に佐渡の州民孝行幷奇特御褒美錄以下十一條、卷二に小泉兄弟四人幷一娘褒賞略記以下二十一條を收め、拾遺卷一に平井兄弟が復讐の爲體をいひおこせし讃岐の高松人の消息の寫し以下八條、追加三條、卷二にイギリス船圖說以下十六條、追錄一條を收めてあり、所々に小圖を挿んである。〔和田〕

都會の憂鬱（とくわいのいうつ）　「田園の憂鬱」を見よ。

富樫（とがし）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷　【作者】不詳　【別名】安宅　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十二年板(十行本)、明曆四年板(山田市郎兵衛開板)。上田萬年博士校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」(富山房)、新群書類從第八舞曲部所收。【解說】判官物(義經傳說)。安宅傳說。謠曲「安宅」と同材。山伏姿の義經主從加賀國安宅の松の邊で兒童に道を問ふ事、辨慶一人羽黑山伏と號して富樫介の館に到り、見破られて捕へられんとし、陳辯の末望まれて勸進帳を讀み上げる事を作る。卽ち「笈さがし」(別項)の前段をなす曲。勸進帳は謠曲のそれより詳しく、辨慶が單身乘り込むのは「義經記」(卷七)と一致する。打擲はこれにはない。【影響】近世戲曲演劇には能の「安宅」の流を引く一類とこの舞曲の系統を承ける一類とがあり、兩者の混合もある。特に近松の「嫁靜胎內捲」(別項)の四段目、それから出た模本虎彥脚色の「安宅關」はこの曲の後身。又、長唄の「隈取安宅松」(別項)はこの曲の前段から出てゐる。

【參考】羅生門の鬼(安宅の辨慶)　島津久基　〇近古小說選解說　同上　〔島津〕

富樫廣蔭（とがしひろかげ）　國語學者　【姓】井手・本居・富樫・鬼島　【名】廣蔭・彰友・操・倭　【號】言幸舍、晚年には塊老翁。【生歿】寬政五年紀伊國和歌山に生れ、明治六年八月二十四日伊勢の桑名で病歿。享年八十一　【閱歷】廣蔭は本姓井手氏で、家は和歌山の木綿問屋であつたが、學問に志し、文政三年の秋(二十八歲)、和歌山にゐた本居大平の門に入つた。文政五年春(三十歲)、大平の嗣子となり、名を本居彰友と改めた。同年夏更に深く研學しようとして伊勢國松坂の本居春庭の門に入りて刻苦勉勵し、學業大に進んだ。文政六年夏(三十一歲)、故あつて本居彰友の姓名を返し、こゝに富樫廣蔭と改め、なほ春庭の下にあつて研究してゐた。文政十・十一年頃は、春庭の「詞通路」の校正に從事した。この頃には廣蔭を師と仰ぐ人も相當の數に上つてゐた。早く文政七年(三十二歲)夏には美濃で文法の講義をしてゐた。文政十一年の冬、春庭が歿した。春庭の嫡子有鄕はまだ幼かつたので、その後見人となつて、本居家の學を繼ぐやうに一時本居家から希望せられてゐたが、故あつて辭し、翌年春桑名へ移つて妻帶し、爾後この地に在つて益々研究を積み、又後進を導いた。十數年の後、この地の三崎春日社の神官鬼島氏を繼ぐ事になり、鬼島倭と改め、別に長女に婿を取つて富樫氏を繼がしめた。安政二年夏(六十二歲)、從五位下土佐守に叙任せられた。同五年(六十五歲)、神職を子廣睦に讓り、自分は富樫の家に歸り、女婿廣厚と共に住んだ。この頃駿河國庵原郡柏尾の和田宣和の家及び伊豆の熱海に遊んで約一年を送つた。女婿廣厚は廣蔭の學を繼いで造詣頗る深かつたと云ふが、明治六年四月、四十八歲を以て歿した。而して廣蔭もその後間もなく歿した。

【著書】〔一、國語・文法に關するもの〕詞玉緒解繼三册(別項「詞の玉緒」の條參照)　〇詞玉橋二册(別項)明治二十四年刊　〇詞玉襷一鋪(文政十二年刊。刊行年次の記されてゐないのもある。別項「詞の玉橋」の條參照)　〇五十連音韻圖・詞辭結俗譯辭・活用解略標圖(この三圖、文政十二年刊の「詞玉襷」の裏面に印刷した簡單な圖表である)　〇詞八衢踏分一卷　〇詞通路奧栞三卷　〇玉霰さめてのすさび二卷　〇字音假字用格追考一卷　〇五十音分生順次圖一鋪(刊本)　〇五十音義二卷　〇言靈幽顯論五卷　〇神國音韻考二卷　〇韻鏡皇國用法五卷　〇韻鏡捷見一卷　〇韻鏡索字要訣一卷　〇三帖和讃活用解二卷　〇百人一首活用解二卷。〔二、古典の註釋〕　〇古事記正傳五卷　〇古事記音義二十卷　〇日本書紀私考五卷　〇記紀歌類辭解二卷　〇古語拾遺往存鈔二卷　〇祝詞式撮要解三卷　〇大祓詞音義解二卷　〇萬葉集譯解二十卷　〇萬葉集類辭解十卷　〇職原鈔

富樫廣蔭自贊（上田萬年氏藏）

のである。童話をお伽噺と稱したと同樣に、當初は「お伽芝居」と云つた。又兒童自らに演ぜしむる事を目的とする兒童劇、學校に於て課外敎化用として生徒に演ぜしむるための學校劇、歌劇の形式を童謠で現はす童謠劇(當初は「お伽歌劇」と云つた)など、その名稱の異なる如く內容に多少の相異はあるが、何れも童話劇の分派と見ることができる。【沿革】明治三十六年、雜誌「少年世界」の春季增刊として發表された巖谷小波作の「春若丸」と題するお伽芝居の脚本が、恐らく童話劇として日本に

く上演された。子供日は、爾來大正五・六年頃まで繼續し、時々規模を大にして「家庭劇」なる名稱の下に特別興行を行つたが、この間に特記すべきは明治四十二年の「小公子」の上演である。脚本は巖谷小波が米國漫遊中、彼地の俳優學校で用ひたのを持ち歸つたもので、小公子に扮したのは坂東かつみ(後の坂東勝太郎)であつた。「小公子」は、その後大正三年頃、東儀鐵笛一派によつて帝劇に上演された事がある。大正時代は、お伽芝居運動の當初の如く、專門の劇團等には目ぼしいものがな

學全集)　〇兒童劇集(小學生全集)　〇兒童劇集(兒童文庫)　〇童話劇集(世界童話大系)　〇明治大正の童話界山內秋生記(日本童話選集第二輯附錄)

兎園會（とゑんくわい）　「兎園小說」を見よ。

兎園小說（とゑんせうせつ）　隨筆　十二卷　【編者】瀧澤解等　【成立】文政八年の初め、瀧澤解・山崎美成等の發起で、屋代弘賢(輪池)・關思亮(海棠庵)・西原好和(松鶴館)・大鄕良則(信齋)・桑山修理(龍珠齋)・荻生維則(談園)・淸水赤城・中井豐民(乾齋)・瀧澤興繼(琴嶺)・龜屋文寶堂

二十卷の全本は瀧澤氏に在つたのを、天保十四年伊勢松坂の友人小津氏に讓つたと云ふことである。今、世間稀見の本は本編だけである。而も略本が多くて詳本は殆どない。明治二十四年、百家說林出版に當つて、大槪如電翁が所藏の全本を提供して、爰に本書の全豹を該叢書に於て見ることが出來た。翁の藏本

鄙語要解五卷○類言詳解三卷○類詞詳解五卷○古今集遠鏡露拂三卷○古今集正々義二卷○古今集紀氏直傳解三十卷○八代集類辭解五卷○土佐日記譯解二卷○源氏物語大意鈔五卷○源氏物語類語詳解十卷○伊勢物語譯註三卷。〔三、歌集及び雜〕言幸舍歌集初編三卷○樫若葉初編二卷・二編三卷○塊老翁隨筆初編三卷○唐朝百官職掌圖解一卷○神家至要祝詞案二卷○民家祭神要略一卷○詞解衣五卷等。

【業績】廣蔭は本居父子の學を繼承して頗る精勵した人で、著述も多いが、流布する事極めて少く、學界に直接大きな影響を與へるに至らなかつたのは遺憾である。但し國語學の方面では「詞玉襷」「詞の玉橋」等は比較的流布してゐる。これ等の書に於て注意すべき事は品詞の分類である。即ち廣蔭は品詞を言(名詞)・詞(動詞・形容詞)・辭(助動詞・手爾乎波)の三種に大別し、これを更に數個に分類してゐる。この分類法は部分的には不備誤謬必ずしも少くないが、大綱に於ては卓見と稱すべきものであつて、殊に辭を動辭(助動詞)と靜辭(手爾波)とし、助動詞を動詞形容詞から分離した事は偉とすべきである。明治・大正の時代に、品詞を體言・用言・助辭の三に大別してゐる學者が多いが、それは直接或は間接に廣蔭の影響を受けたものである。

【參考】詞玉襷(吉田某奥書)○鬼島廣蔭三浦雙鯉(國學院雜誌六・七・八)○富樫廣蔭の傳赤堀又次郎(帝國文學三)　〔龜田〕

戸川殘花(とがはざんくわ)　詩人　【本名】安宅　【生歿】安政三年江戸牛込に生れ、大正十三年七月病歿した。享年六十九。【閲歷】幕臣で、彰義隊に加はつた事もある。大學南校・慶應義塾・築地學校等に學び、「文學界」客員となつて明治二十年代の詩壇に在り、「弔歌桂川」「朝の歌」その他の佳篇を公にした。美妙は「端麗の殘花子云々」と短評を加へてゐる。「朝の歌」は明治二十五年の「日本評論」誌上に掲げられ、「弔歌」は「文學界」を飾り、透谷はこれを評して「巣林子以後、圖らずも情死は友人を法界の人に得たりけり」と言つた。蓋し殘花は基督教徒となつて傳道生活を送つてゐたからである。教養ある江戸士人の博大趣味と、拘泥せざる拓落の放膽性とを備へた洒脫にして風雅を崇ぶ特色ある性格で、二十年代の詩界に於ける殘花の地位は、嶄然群小を拔いてゐる。「舊幕府」を主宰して攻學を事としたのも同じ時代である。著しき性格者の割に詩風が大成しなかつたのは時勢にもよるのである。毎日新聞客員・南葵文庫主任等の職に在つた。【著作】月かげ(文學界二八ノ八)○たのむ木蔭(文藝倶樂部二八ノ九)○新田勢(毎日新聞二八ノ一〇)○劍影鬼(文藝倶樂部二九ノ九)等。詩作は明治大正詩選(新潮社)・詩人全集(初期詩人集)・現代日本文學全集等に收められてゐる。　〔日夏〕

戸川秋骨(とがはしうこつ)　飜譯家・隨筆家　【本名】明三　【閲歷】明治三年十二月熊本縣玉名郡岩崎村に生る。上京して明治學院に入學、同校にて島崎藤村・馬場孤蝶等と交り、明治二十四年三月卒業。同二十六年「文學界」(別項)の發刊に際し、同人となつた。一方、東京帝國大學英文學科に學び、ラフカディオ・ヘルン及びラファエル・ケーベル等の薫陶を受けた。同校卒業後、久しく地方の高等學校に教鞭を取り、一時歐米に遊んだ。後、轉じて慶應義塾大學教授として今日に及ぶ。早くから英文學の飜譯によつて世に現はれ、就中、「エマーソン論文集」、ヴィクトル・ユーゴー原著「哀史」(レ・ミゼラブル)及び「十日物語」(デカメロン)等の飜譯は廣く讀まれた。專門とする英文學に於て一方の權威である外、隨筆に於ては異色あるユーモアと諷刺をもつて聞えてゐる。隨筆集「文鳥」及びその大部分を改編したところの「樂天地獄」(昭和四年四月)は、その代表作を集めてゐる。　〔武藤〕

時(とき)　文法　【名稱】〔英〕tense〔獨・ラテン〕Tempus(複 tempora)〔佛〕le temps【解說】文法範疇の一つ。概念範疇としての「時間」は、哲學的・論理學的・心理學的に精細な研究を行ふべき興味ある問題であるが、その精しい議論は文法に關係が薄い。文法範疇としては、時間に關する概念の或るものが、一定の語形に結びついて表はされる慣習を問題とするに止まる。かゝる慣習は、各國語毎に異なることがあるから、一般的の記述をすることが困難である。のみならず、多くは單純に時間の概念だけが表はされることは少く、所謂「法」(mood)(別項)に屬する概念が混入してゐる上に、或る一種の語形が種々の時間概念・「法」概念を表はすことがあり、一つの時間概念が、多樣の語形によつて表はされることがあるから、事實は甚だ複雜である。文法上の「時」の區別は、多く動詞と名づけられる種類の語に於て、その語形變化により示される(或は逆に時間概念・「法」概念を表はす一定の語形變化を有する語に、動詞といふ名稱を附けると言つた方が適切であらう)。「時」の研究及び記述は二樣の方面に分れる。(一)語形を中心とすること、一つの語形が如何なる時間概念(及びその他の意義)を表はすかを見る。例へば日本語の「行つた」に於ける「た」の如き、語形としては一種であるが、その表はす意義は「昨日行つた」(過去)、「行つた方がよい」(未來假定)、「早く行つた」(命令)など種々ある。(二)意義を中心とすること。即ち時間に關する概念は、如何なる語又は語形によつて表はされるかを見ること。これは所謂動詞のみならず副詞・名詞・助詞等にも亙つて考へるべきである。我が日本語文法の從來の研究に於ては、この二樣の見方の區別が明かでなかつた爲め、なほ十分の研究結果を得てゐない。又インドヨーロッパ語族の「時」の範疇を、その儘日本語に當てて、日本語の言語現象を律することは、比較研究の目的以外には無意味である。

【參考】〔「時」の一般論について〕Jespersen: *Philosophy of Grammar.* 1924. Chaps. XIX, XX. ‖ Noreen-Pollak: *Wissenschaftliche Betrachtung der Sprache.* 1923. S. 425f. ‖ Wundt: *Völkerpsychologie—Sprache.* 4II. 1922. S. 189f.〔インドヨーロッパ語族の「時」について〕Brugmann: *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen.* 1922. S. 559f. ‖ Delbrück: *Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen.* 1919. S. 229f.　〔神保〕

時秋物語(ときあきものがたり)　物語　一卷　【作者】未詳　【成立】「古今著聞集」卷六に所載のものと同じく、且つ文章も殆ど同じであるから、これを拔いて一卷にしたものと見える。故にその成立は、鎌倉初期と見るべきであらう。【諸本】群書類從卷四八三所收。【解說】新羅三郎義光が、後三年の役に出羽へ赴かうとした時、豐原時秋がこれを追つて行き、足柄山で大食調入調の祕曲を受けて都に還つたことを記す。この內容につき、時秋はこの時未だ生れない時であるから、この人物はその父時元であると云ふ說、伯父時忠であると云ふ說等がある。

【參考】考古畫譜○足柄山笙曲傳授の話に就きて松本愛重(國史論纂)　〔小木〕

辰方(ときかた)　有職家　【姓名】松岡氏。字は子辨、通稱平治郎・淸助　【號】雙松軒・梅軒　【生歿】明和四年に生れ、天保十四年(二五〇三)五月一日歿。享年七十七　【墓所】東京府下目黑祐天寺　【閲歷】筑前久留米藩士、江戸に於て塙保己一の門に學び、その子行義(別項)、孫明義に至るまで、父子相承けて有職故實に精通するを以て世に知られた。【著書】裝束織文圖會一卷(別項)(享和元年刊)○裝束織文圖會附錄一卷(別項)○文官裝束織文圖會一卷(別項)(享

時太郎可侯

治四十三年四月に出版。後、石川啄木と交遊深く、いはゆる「三行歌」の創始者でもある。大正二年九月、雜誌「生活と藝術」(別項)を創刊主宰した。早稻田大學を卒業後、直に讀賣新聞記者となつたが、大正七年東京朝日新聞社に入つて、社會部長・學藝部長・調査部長等に歷任。大正三年、朝鮮・滿洲を視察して歌集「佇みて」を公にし、昭和二年歐米に特派されてエッセイ集「外遊心境」を著はした。作者別の「萬葉全集」及び「萬葉以後」を編纂し、また多年ローマ字日本語の宣傳普及運動につとめ、その方面の著述も多い。【著作】〔歌集〕黃昏に○不平なく○街上不平○雜音の中○土岐哀果集○綠の地平○綠の斜面○空を仰ぐ○初夏作品○鶯の卵(漢詩ローマ字譯)。〔エッセイ集〕朝の散步○春歸る○柚子の種等。　〔金子〕

上に多大の裨益を與へた。間もなく勝川春章の門に入り春朗と名のつた。併し一流派のみに滿足せず、狩野融川の門に入り北畫をも研究した。これが問題となつて春章から破門され、後又師の畫を批評し、寬政年間狩野家からも破門された(一說、狩野家への弟子入りが先であるとの說もある)。安永九年、春朗の號で初めて「驪山比翼塚(めぐろのひよくづか)」の挿繪を描き、爾來黃表紙にその挿繪を描いた。天明五年、春朗を改めて群馬亭と號し、「親讓鼻高名」の挿繪を描いた。天明七年、俵屋宗理の畫風を慕ひて宗理と改名、貧窮その極に達し、七色蕃椒、或は柱曆を作者の指定に從はず、一時兩人不和になり、又「繪本水滸傳」で再度衝突したと云ふ。彼の名聲は、長崎の外人に聞え、その繪を求むる者多かつたが後官禁せられた。妻をことと云ふ。文政十一年六月五日歿。一男三女あり。一男は幕士加瀨氏の養子となり喜十郎と云ふ。長女は柳川重信に嫁し、後離緣して早世。次女は夭死。三女榮は南澤等明に嫁したが、離緣後、父北齋の老後を看た閨秀畫家である。【人物】彼は名人肌で同時に奇人であつた。平生は素朴謙遜であつたが、一度不滿な事があれば傲然意を枉げない。馬琴との衝突もこのためであるし、三代尾上菊五郎が彼を訪問し、家內の不潔さに氈を敷いたのに憤り、一語も交へなかつたのもその表はれである。彼の奇癖は轉宅であつて、生涯八十七度に及んだと云ふ。又室內の歸

詞を體言・用言・助辭の三に大別してゐる學者が多いが、それは直接或は間接に廣陰の影響を受けたものである。

【參考】詞玉襷(吉田某與書) ○鬼島廣陰三浦雙鯉(國學院雜誌六・七・八)○富樫廣蔭の傳(赤堀又次郎(帝國文學三)) (龍田)

戸川殘花 とがはざんくわ 詩人 【本名】安宅 【生歿】安政三年江戸牛込に生れ、大正十三年七月病歿した。享年六十九。【閲歴】幕臣で、彰義隊に加はつた事もある。大學南校・慶應義塾・築地學校等に學び、「文學界」に客員となつて

郡岩崎村に生る。上京して明治學院に入學、同校にて島崎藤村・馬場孤蝶等と交り、明治二十四年三月卒業。同二十六年「文學界」(別項)の發刊に際し、同人となつた。一方、東京帝國大學英文學科に學び、ラフカディオ・ヘルン及びラファエル・ケーベル等の薫陶を受けた。同校卒業後、久しく地方の高等學校に教鞭を取り、一時歐米に遊んだ。後、轉じて慶應義塾大學教授として今日に及ぶ。早くから英文學の飜譯によつて世に現はれ、就中、「エマーソン論文集」、ヴィクトル・ユーゴー原著「哀史」

あるから、事實は甚だ複雑である。文法上の「時」の區別は、多く動詞と名づけられる種類の語に於て、その語形變化により示される(或は逆に時間概念・「法」概念を表はす一定の語形變化を有する語に、動詞といふ名稱を附けると言つた方が適切であらう)。「時」の研究及び記述は二樣の方面に分れる。(一)語形を中心とすること、一つの語形が如何なる時間概念(及びその他の意義)を表はすかを見る。例へば日本語の「行つた」に於ける「た」の如き、語形としては一種であるが、その表はす意義

Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen. 1919. S. 229f. 〔神保〕

時秋物語 ときあきものがたり 物語 一卷 【作者】未詳 【成立】「古今著聞集」卷六に所載のものと同じく、且つ文章も殆ど同じであるから、これを抜いて一卷にしたものと見える。故にその成立は、鎌倉初期と見るべきであらう。【諸本】群書類從卷四八三所收。【解説】新羅三郎義光が、後三年の役に出羽へ赴かうとした時、豐原時秋がこれを追つて行き、足

柄山で大食調入調の祕曲を受けて都に還つたことを記す。この内容につき、時秋はこの時未だ生れない時であるから、この人物はその父時元であると云ふ説、伯父時忠であると云ふ説等がある。

【參考】考古畫譜○足柄山笙曲傳授の話に就きて(松本愛重(國史論纂)) (小木)

辰方 ときかた 有職家 【姓名】松岡氏。字は子辨、通稱平治郎・清助 【號】雙松軒・梅軒 【生歿】明和四年に生れ、天保十四年(一二五〇三)五月一日歿。享年七十七 【墓所】東京府下目黒祐天寺 【閲歴】筑前久留米藩士、江戸に於て塙保己一の門に學び、その子行義(別項)、孫明義に至るまで、父子相承けて有職故實に精通するを以て世に知られた。【著書】裝束織文圖會一卷(別項)(享和元年刊)○裝束織文圖會附錄一卷(別項)○女官裝束織文圖會一卷(別項)(享和元年刊)○冠帽圖會一帖(別項)(文化三年成、天保十一年刊)○武家當時裝束抄一卷(別項)(文化九年成)○裝束着用圖一卷(別項)○屨斗目考一卷(寛政六年十二月五日成)○服忌便覽○松竹問答等。 【石村】

土岐善麿 ときぜんまろ 歌人・新聞記者 【別號】初め湖友、後、哀果と改めたが、大正八年以來號を使用しない。【閲歴】明治十八年六月八日、東京市淺草區松清町に生れた。父善靜は眞宗の學僧、柳營連歌師の最後の宗匠であり、國典にも通じ、俳號も寂羅坊湖月と稱して麥林の風を慕ひ、風流の諸藝にも長じてゐた。善麿は東京府立第一中學校に在つた頃から父に就いて連歌を學び、後、金子薫園の白菊會に加はつたが、自然主義運動の起るに及んで、短歌の生活化を提唱し、第一歌集「A-KIWARAI」(全部ローマ字で誌してある)を明

治四十三年四月に出版。後、石川啄木と交遊深く、いはゆる「三行歌」の創始者でもある。大正二年九月、雜誌「生活と藝術」(別項)を創刊主宰した。早稲田大學を卒業後、直に讀賣新聞記者となつたが、大正七年東京朝日新聞社に入つて、社會部長・學藝部長・調査部長等に歴任。大正三年、朝鮮・滿洲を視察して歌集「佇みて」を公にし、昭和二年歐米に特派されてエッセイ集「外遊心境」を著はした。作者別の「萬葉全集」及び「萬葉以後」を編纂し、また多年ローマ字日本語の宣傳普及運動につとめ、その方面の著述も多い。【著作】【歌集】黄昏に○不平なく○街上不平○雜音の中○土岐哀果集○綠の地平○綠の斜面○空を仰ぐ○初夏作品○鷲の卵(漢詩ローマ字譯)。【エッセイ集】朝の散歩○春歸る○柚子の種等。 【金子】

時太郎可候 ときたらうかこう 浮世繪師・草雙紙作者 【姓名】中島爲一。又葛飾・川村氏。葛飾氏と稱したのは葛飾在本所に生れた故と云ふ。幼名鐵藏、時太郎・八右衞門・仁三郎とも云つた。【別號】勝川春朗・勝春朗・叢春朗・菱川宗理・群馬亭魚佛・辰齋・辰政・雪斗・雷震・雷信・戴斗・錦袋舍・畫狂老人・卍翁・卍老人・不染居・九々・蟄白山人・北齋・前北齋爲一等の畫號。白山人可候・是和齋の戯作號がある。【生歿】寶曆十年九月本所割下水に生れ、嘉永二年(一二五〇九)四月十八日本郷丸山にて歿す。享年九十。【法名】南總院奇譽北齋信士【墓所】淺草榮久町(舊名八軒寺町)誓教寺 【閲歴】父は中島伊勢と云ひ幕府用達鏡師、母は赤穗浪士義擧の際吉良家附人たりし小林平八郎の孫女であると云ふ(浮世畫人傳・いろは文庫)。幼時より畫を好み、安永三年(十五歳)木版師某に弟子入りして彫刻を學んだ。これが後版畫を描く

時太郎可候(英泉畫)

上に多大の裨益を與へた。間もなく勝川春章の門に入り春朗と名のつた。併し一流派のみに滿足せず、狩野融川の門に入り北畫をも研究した。これが問題となつて春章から破門され、後又師の畫を批評し、寛政年間狩野家からも破門された(一説、狩野家への弟子入りが先であるとの説もある)。安永九年、春朗の號で初めて「鸞山比翼塚」の挿繪を描き、爾來黄表紙にその挿繪を描いた。天明五年、春朗を改めて群馬亭と號し、「親讓鼻高名」の挿繪を描いた。天明七年、俵屋宗理の畫風を慕ひて宗理と改名、貧窮その極に達し、七色煙草、或は柱暦を賣り歩き、淺草藏前で先師春章夫婦に逢ひ、面目を失つたといふ話はこの頃である。寛政八年の頃、住吉廣行に就き土佐派を學び、司馬江漢に洋畫を學んだ。寛政以後、狂歌繪本が流行して歌麿・重政等も執筆し、彼も亦十數種を描いたが、その中で「東都勝景一覽」「繪本東都遊」「繪本隅田川兩岸一覽」などはその代表作であつた。爾來文化時代まで多くの讀本に挿繪を畫き、文政・天保時代には、一枚刷錦繪に最も力を盡した。繪畫に關しては一家の識見を持して人に下らず、種々の奇行逸話がある。曲亭馬琴作「三七全傳南柯夢」の挿繪に就いて作者の指定に從はず、一時兩人不和になり、又「繪本水滸傳」で再度衝突したと云ふ。彼の名聲は、長崎の外人に聞え、その繪を求むる者多かつたが後宮禁せられた。妻をことと云ふ。文政十一年六月五日歿。一男三女あり。一男は幕士加瀨氏の養子となり喜十郎と云ふ。長女は柳川重信に嫁し、後離緣して早世。次女は夭死。三女榮は南澤等明に嫁したが、離緣後、父北齋の老後を看た閨秀畫家である。【人物】彼は名人肌で同時に奇人であつた。平生は素朴謙遜であつたが、一度不滿な事があれば傲然意を枉げない。馬琴との衝突もこのためであるし、三代尾上菊五郎が彼を訪問し、家内の不潔さに氣を敷いたのに憤り、一語も交へなかつたのもその表はれである。彼の奇癖は轉宅であつて、生涯八十七度に及んだと云ふ。又室内の掃除を忌み、不潔裡に平然としてゐたといふ。一面に於ては江戸ッ子らしき任俠と、強きに對する意地張りとを有してゐた。名聲が高くなつても清貧であつたのは、やはりこの氣風のためと、理財に無頓着であつた故であらう。要するにあらゆる精力がただ繪畫の方面にのみ向けられた名人氣質を示してゐるのである。

【著作】【黄表紙】有難通一字(天明元年)○四天王大通仕達(同二年)○我家樂之鎌倉山(同六年)○大佛左捻(同年)○竈將軍勘略卷(寛政十二年)○兒童文珠稚教訓(享和元年)○新板塵劫記(享和二年)○不廻庖卽席料理(同三年)○胸中算用嘘店卸(同年)等。【繪畫に關するもの】畫本彩色通○北齋漫畫○略畫早指南○傳心畫鏡○秀畫一覽○繪本淨瑠璃絶句○三體畫譜○北齋畫筆○北齋畫譜○北齋麤畫○北齋畫式○戴斗畫

譜等。

【作風】專門が浮世畫家だけ、黃表紙は單に流行に追隨し得ると云ふ程度で、彼の特徴を有しない。「有難通一字」「四天王大通仕達」共に當時の通人流行に取材し、いきちよんの如き通語を振り廻して喜ぶやうな態度である（當時二十二三歲）。「竈將軍勘略卷」は、異類の軍記物に擬した作品で、構想も別に新しくない。「兒童文珠稚教訓」に、當時の手習師匠の拙い事を諷した點などに、やゝ個性が現はれてゐると言へば言へぬ事もない。要するに文筆は畫家としての道樂と見るべきで、この點は彼の畫風と共に雅號を襲用した一筆庵可候（別項）即ち溪齋英泉の方が遙かにすぐれてゐる。ただその挿繪は、狂歌本と共に靑年時代の畫風を見る資料として尊ばれてゐる。

【參考】燕石十種○浮世畫類考○扶桑畫人傳○浮世畫人傳○葛飾北齋傳 飯島半十郎 ○江戸藝術論 永井荷風○北齋 織田一磨（アルス美術叢書）〔山崎〕

言繼卿記 ときつぐきやうき 日記 四卷 【著者】大納言山科言繼【諸本】著者自筆本は、もと山科家にあつたが、後、東京帝國大學の所藏に歸した。國書刊行會本はその書を底本としたもの。但し卷三十五の別記だけは、京都市渡邊孫右衞門氏の所藏で、親王御方御元服御裝束目錄・若宮御方御元服御服目錄・諒闇幷御錫紵御服之事等を記したもので、日記中にいふ別記とは違つたものである。【解說】大永七年正月から天正四年十二月に至る日記で、三十五卷を四卷に合せたもの。この日記に依つて、戰國時代に於ける皇室式微の御模樣、言繼卿等の公卿が東奔西走して諸國豪族に倚賴し、皇室費維持に盡した苦衷、窮迫した公卿の地方豪族の許に走つた形勢、諸國豪族の皇室の供御以下獻納の次第等を詳かにするを得る有力な資料である。〔石村〕

時繩 ときつな 神道學者【姓】藤波、又は眞野【生歿】元祿十六年（一六四五）歿す。享年未詳【閱歷】伊勢の人で、尾張津島の神官である。初め菅原直勝に就いて學び、次いで卜部兼魚に就き、最後に度會延佳の門に入つた。造詣極めて深い。【著書】古今神學類聚鈔一百卷（題名の如く、國史家牒、諸社の傳說などに就き、神國・神道・神階等に就き研究せるもの）○神家常談○中臣祓或問○異域同日談等。〔田中（義）〕

時文 ときぶみ 歌人【姓】紀氏【閱歷】貫之の子。梨壺五人の一人。紀氏系圖に內藏介從五位上、作者部類に大膳大夫とある。「後撰集」は天曆五年詔を奉じ、昭陽舍（梨壺）に設けられた撰和歌所の寄人として、他の撰者順・能宣・望城・元輔と共に、「萬葉集」を訓釋する傍ら撰したのである。曾て兼盛の歌を非難して却つて反駁されたことが傳へられてゐる。「八雲御抄」に「ただ父が子といふばかり」と仰せられてゐる。【作品】勅撰集に入る歌は「後拾遺集」その他凡そ五首。

【參考】大日本史二一九（貫之の條）〔西下〕

伽婢子 とぎほふこ 「御伽婢子」を見よ。

時桔梗出世請狀 ときもききやうしゆつせのうけじやう 脚本 五幕十二場 時代物【作者】四代鶴屋南北【通稱】「馬盥の光秀」【名稱】秋狂言を光秀の紋に利かせて時桔梗とし、久吉が嘉平次に奉公した請狀の意を添へた。【別名題】「時今攝握虎」「連歌月光秀」「遲櫻愛宕韻」「時桔梗小田豐作」「小田雪貢賜」「時皐月桔梗旗揚」「連歌花二見文臺」。【興行】文化五年七月二十五日初日、江戸市村座。

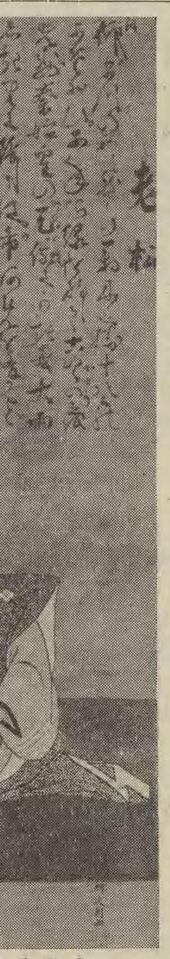
【役割】松下嘉平次行綱（澤村四郎五郎）、小田上總之助春永（澤村源之助）、遊女高松後に園生の局（山下萬作）、武智十次郎光義（助高屋金五郎）、光秀妹桔梗・松下下女小藤（中山岩次郎）、波多野但馬之助後に中尾彌太郎俊國（花井才三郎）、光秀妻皐月・嘉平次娘千里（市川團之助）、加藤虎之助正淸・安田作兵衞知綱（七代市川團十郎）、森蘭丸・下男助作實は小西彌十郎行長（尾上榮三郎）、髮結ひお八重後に久吉妻八重機（五代岩井半四郎）、眞柴大領久吉（三代坂東三津五郎）、武智十兵衞光秀・判人源五郎實は水尾正兵衞茂朝（五代松本幸四郎）。

【諸本】大南北全集第四卷所收。【題材】光秀を描いた院本「本朝三國志」「祇園祭禮信仰記」「三日太平記」「三國無双奴請狀」「繪本大功記」等を取捨按排して、歌舞伎式に組み立てたものである。

【梗概】〔序幕〕（祇園社拜殿）大澤九郎次郎、桔梗に戀慕。春永に降參せし波多野但馬之助の參着。（裏手樋の口）福島平馬、赤旗を奪つて出るのを皐月支へる。（社前）宅間信盛、赤旗紛失につき桔梗を詰問。皐月の言ひ開き。（假家木戸）光秀、蜘蛛の振舞を見て怪しむ。但馬之助、降參の儀を光秀へ依賴。（假御殿）世尊寺中納言來着につき饗應係は光秀。小田春永は狩獵より歸り、光秀が專橫の行ひを責め、森蘭丸に鐵扇にて打擲せしめる。〔二幕〕（山崎陣中）久吉、因幡責めの滯陣中、陣中へ切見世長屋を拵へた趣向。曾呂利は落語をやり、加藤虎之助は蛇の目鮨を賣る。波多野の妹高松は切見世女郎の姿。判人源五郎實は水尾正兵衞は光秀の幕下に附いて間者に入り込む。髮結ひお八重は、刺身を作つてゐる夫久吉に對面。高松は久吉に斬りつけたが、諭誡を聞いて春永に宮仕へする。久吉は正兵衞を怪しむ。〔三幕〕（本能寺）春永は、側室園生の前となつた高松、但馬之助改め中尾彌太郎初め、諸侍を連れて入り來る。蘭丸の推擧で謹愼中の光秀が召出される。春永は馬盥で光秀に酒を與へ、光秀の領地を蘭丸に讓らせ、光秀が望む日吉丸の名劔は彌太郎に遣はし、光秀には流浪中、皐月が切つた黑髮を與へて散々に侮辱する。光秀、叛逆の企て。（愛宕山旅館）皐月、一子十次郎・簑浦・作兵衞等連歌の催し。光秀歸つて黑髮を見せ、皐月と昔語り。紹巴頻りに謀叛を勸むるを斬る。彌太郎多三、春永の上使に來る。光秀は切腹の用意して迎へ、「時は今天が下知る皐月かな」を詠ず。貝鐘の音。光秀、上使を斬つて謀叛の門出。安兵衞は二條城の落ちしを注進。（本能寺塀外）園生・條助、防ぎ戰ふ。（奧殿）光秀の軍勢押寄せ、春永・蘭丸の奮鬪、蘭丸・作兵衞の立廻り。光秀詰め寄せ、春永の切腹。〔四幕〕（小栗栖村）嘉平次娘千里に腰元小藤が附いて來るのを、百姓たぬ藏戲れかゝる。下男助作助ける。光秀の一子十次郎圍まるゝ所を作兵衞救ふ。正兵衞出づるをお八重の八重機、竹槍にて突く。〔大詰〕（松下嘉平次住家）嘉平次、光秀を匿まふ。正兵衞、十次郎を連れて一宿を賴む。八重機は嘉平次の娘、虎之助を伴ひ落人の詮議に來る。久吉は昔の奴姿にて嘉平次へ草履を直す。嘉平次、久吉を面罵する。正兵衞、光秀と名乘つて死す。十次郎、父に代つて切腹。十次郎實は久吉・八重機の實子なのを光秀が養つたのである。助作實は久吉の臣小西彌十郎、光秀を見出す。實の光秀[illegible]久吉へ日月の旗を渡し、戰場に再會を約[illegible]れる。

【解說】[illegible]北の最も不得意な時代物なので、構想は大[illegible]院本に仰いだが、山崎陣中の如きは、流石南北式の奇拔な趣向である。饗應・馬盥・愛宕・本能寺の四幕は、今日まで舞臺に上演を絕たぬだけ、單純な太い線で押して行く形式が面白い。春永を絕對的の暴君に描いたのも一見識である。〔渥美〕

常磐會 ときはくわい 和歌【解說】山縣有朋の意を受け、森林太郎・賀古鶴所の二人が肝煎となつて起した和歌の團體である。はじめ小出粲・大口鯛二・井上通泰・佐佐木信綱の四人を選者とし、これを日本橋區濱町常磐に招待して相談をしたので、常磐會の名が生れた。明治三十九年六月の創立で、毎月山縣公の古稀庵・新々亭・椿山莊・新椿山莊等にて歌會を開き、各選者並にその門人の歌を選評した。その詠草は常磐會詠草として、明治四十二年に第一編、四十三年に第二編、大正三年に第三編、大正六年に第四・五の兩編を發行し、大正狂言作者壕越菜陽・金井三笑等が、好んでこれを連續的に用ひたので、自然と江戸歌舞伎に融合し、遂に所作事の地、殊に狂言淨瑠璃として缺くべからざる位置を占めるに至つた。次いで二代文字太夫によつて大成され、三代兼太夫によつて在來の曲節附に改訂がなされて今日に及んだ。この間、四代文字太夫は、三絃方の名手四代岸澤古式部との勢力爭ひから、常磐津派と岸澤派とに分裂するに至つたが、明治年代の名人常磐津林中（別項）によつて一時和解が成り、後、その歿するや、再び家元派（舊派）と岸澤派（新派）との對立となり、



初代常磐

た結果、風俗を紊す恐れありとして同四年九月の禁令にあひ、一時一中節の千中社中に加はつて、常太夫豐中と改めて隱れた。寬保二年に至つて許可せられ、次いで延享四年十月宮古路を關東に改めたが、官の忌む所となり、更に十一月中村座で常磐津と改姓した。かくて三絃佐々木幸八（後の市藏）と協力して斯流の發展に努めた。晩年は兼太夫を後繼者となし、小松川村に隱退して松壽齋文中と號した。門下から別派を立てた豐名賀志妻太夫・同造酒太夫・富士岡若太夫等の名手を出した。

〔二代〕通稱、藤兵衞。法名、常照院釋文中德日歿。享[illegible]二十八。墓所、淺草新堀正念寺地中願心寺[illegible]二代の實子。寬政十二年六月、小文字[illegible]なり、文政二年七月三代を襲名し、中村[illegible]大和文字戀の歌（ことのは）（薄雪）を語つた。

〔四代〕幼名、市川男熊。家號、瀧野屋。法名、興德院禎巖良祥。文化元年に生れ、文久三年閏八月八日に歿す。享年五十九。墓所、麻布廣尾松雲寺。初代市川男女藏二男。常磐津家元（祖母の實家）の養子となり、小文字太夫と改め、文政三年十一月河原崎座で「老松」を語つたのが初舞臺。天保八年正月中村座で四代を襲ぎ、嘉永三年十二月受領して常磐津豐後大掾藤原昶光と名乘る。中興の名人で、「釣狐」「宗淸」「お三輪」「將門」「靱猿」「乘合船」「甚五郎」「三人生醉」「新山姥」「勢獅子」等の名曲がある。萬延元年三絃方の四代岸澤古式部が分離して岸澤派を興した。

歸した。國書刊行會本はその書を底本としたもの。但し卷三十五の別記だけは、京都市渡邊孫右衞門氏の所藏で、親王御方御元服御裝束目錄・若宮御方御元服御服目錄・諒闇幷御錫紵御服之事等を記したもので、日記中にいふ別記とは違つたものである。【解說】大永七年正月から天正四年十二月に至る日記で、三十五卷を四卷に合せたもの。この日記に依つて、戰國時代に於ける皇室式微の御模樣、言繼卿等の公卿が東奔西走して諸國豪族に倚賴し、皇室費維持に盡した苦衷、窮迫した公卿

【參考】大日本史二一九貫之の條　〔西下〕

伽婢子（とぎほふこ）「御伽婢子」を見よ。

時桔梗出世請狀（ときもききやうしゆつせのうけじやう）　脚本　五幕十二場　時代物　【作者】四代鶴屋南北【通稱】「馬盥の光秀」【名稱】秋狂言を光秀の紋に利かせて時桔梗とし、久吉が嘉平次に奉公した請狀の意を添へた。【別名題】「時今攝握虎」「連歌月光秀」「遲櫻愛宕韻」「時桔梗小田豐作」「小田雪貢賜」「時皐月桔梗旗揚」「連歌花二見文臺」。【興行】文化五年七月二十五日初日、江戸市村座。

春永は狩獵より歸り、光秀が專橫の行ひを責め、森蘭丸に鐵扇にて打擲せしめる。〔二幕〕（山崎陣中）久吉、因幡責めの滯陣中、陣中へ切見世長屋を拵へた趣向。曾呂利は落語をやり、加藤虎之助は蛇の目鮨を賣る。波多野の妹高松は切見世女郎の姿。判人源五郎實は水尾正兵衞は光秀の幕下に附いて間者に入り込む。髮結ひお八重は、刺身を作つてゐる夫久吉に對面。高松は久吉に斬りつけたが、諭誡を聞いて春永に宮仕へする。久吉は正兵衞を怪しむ。〔三幕〕（本能寺）春永は、側室園生

れて一宿を賴む。八重機は嘉平次の娘、虎之助を伴ひ落人の詮議に來る。久吉は昔の奴姿にて嘉平次へ草履を直す。嘉平次、久吉を面罵する。正兵衞、光秀と名乘つて死す。十次郎、父に代つて切腹。十次郎實は久吉・八重機の實子なのを光秀が養つたのである。助作實は久吉の臣小西彌十郎、光秀を見出す。實の光秀[illegible]久吉へ日月の旗を渡し、戰場に再會を約[illegible]刎れる。

【解說】[illegible]北の最も不得意な時代物なので、構想は大[illegible]院本に仰いだが、山崎陣中の如き

は、流石南北式の奇拔な趣向である。饗應・馬盥・愛宕・本能寺の四幕は、今日まで舞臺に上演を絶たぬだけ、單純な太い線で押して行く形式が面白い。春永を絶對的の暴君に描いたのも一見識である。〔渥美〕

常磐會（ときはくわい）　和歌　【解說】山縣有朋の意を受け、森林太郎・賀古鶴所の二人が肝煎となつて起した和歌の團體である。はじめ小出粲・大口鯛二・井上通泰・佐佐木信綱の四人を選者とし、これを日本橋區濱町常磐に招待して相談をしたので、常磐會の名が生れた。明治三十九年六月の創立で、毎月山縣公の古稀庵・新々亭・椿山莊・新椿山莊等にて歌會を開き、各選者並にその門人の歌を選評した。その詠草は常磐會詠草として、明治四十二年に第一編、四十三年に第二編、大正三年に第三編、大正六年に第四・五の兩編を發行し、大正六年七月第百三十一回以後は未刊である。選者は、その後物故した人の補缺として鎌田正夫・須川信行・池邊義象・金子元臣が相次いで加はつたが、多き時も五人を超えなかつた。大正十一年二月、その主唱者たる山縣公の薨去後、百八十五回を以て終に解散した。その歌風は、當時の御歌所風よりもやゝ自由で、且つ多少淸新な所があつたが、その期する所は、明治歌調を創めんとするにあつたらしい。併しその歌は、御歌所の風調を多く出ないものであつた。〔尾上〕

常磐津節（ときはづぶし）　淨瑠璃　【名稱】流祖常磐津文字太夫の稱に據る。【沿革】劇場では、初め主に義太夫節風の世話物（道行物）を語る時に用ひられたが、元來劇場音樂として頗る適した素地を有つてゐた上に、漸次江戸節（別項）に於ける短所、弱點をも補正し、且つ狂言作者壕越菜陽・金井三笑等が、好んでこれを連續的に用ひたので、自然と江戸歌舞伎に融合し、遂に所作事の地、殊に狂言淨瑠璃として缺くべからざる位置を占めるに至つた。次いで二代文字太夫によつて大成され、三代兼太夫によつて在來の曲節附に改訂がなされて今日に及んだ。この間、四代文字太夫は、三絃方の名手四代岸澤古式部との勢力爭ひから、常磐津派と岸澤派とに分裂するに至つたが、明治年代の名人常磐津林中（別項）によつて一時和解が成り、後、その歿するや、再び家元派（舊派）と岸澤派（新派）との對立となり、

初代常磐津文字太夫

昭和二年春、常磐津協會の成立と同時に和合するに至つた。

【傳系】〔初代〕通稱、駿河屋文右衞門。俳名、尹翅。法名、常光院通寂了玄居士。寶永五年京都寺町（一說に近江）に生れ、安永十年二月一日江戸に歿す。享年七十三（一說に六十七）。墓所、麻布廣尾祥雲寺。初め位牌商を業としたが、初代豐後掾に入門して宮古路文字太夫といひ、師と共に享保十九年江戸に下つた。タテを語つた最初は、元文元年二月市村座の「傾城小夜の中山」である。然るに急激な流行を見た結果、風俗を紊す恐れありとして同四年九月の禁令にあひ、一時一中節の千中社中に加はつて、常太夫豐中と改めて隱れた。寬保二年に至つて許可せられ、次いで延享四年十月宮古路を關東に改めたが、官の忌む所となり、更に十一月中村座で常磐津と改姓した。かくて三絃佐々木幸八（後の市藏）と協力して斯流の發展に努めた。晩年は兼太夫を後繼者となし、小松川村に隱退して松壽齋文中と號した。門下から別派を立てた豐名賀志妻太夫・同造酒太夫・富士岡若太夫等の名手を出した。

〔二代〕通稱、藤兵衞。法名、常照院釋文中德翁。寶曆六年に生れ、寬政十一年七月八日に歿す。享年四十四。墓所、淺草稱念寺。初代の門下、後に養子。初名は鐘太夫。後、兼太夫と改め、天明七年二月一日二代を襲名した。斯流を大成すると共に、基礎を固めた。「葱賣」「古忠信」「善知鳥」「關の扉」「古山姥」「戾駕」「葛の葉」「古お半」「高尾」等は彼によつて語られた。二代兼太夫は實弟大和太夫が繼いだが兄と不和を生じて、後、吾妻國太夫と稱した。

〔三代〕通稱、林之助。法名、常樂院釋文僊光德信士。寬政四年に生れ、文政二年十一月一日歿。享[illegible]二十八。墓所、淺草新堀正念寺地中願心[illegible]二代の實子。寬政十二年六月、小文字[illegible]なり、文政二年七月三代を襲名し、中村[illegible]大和文字戀の歌（ことのは）」（薄雪）を語つた。

〔四代〕幼名、市川男熊。家號、瀧野屋。法名、興德院禎巖良祥。文化元年に生れ、文久三年閏八月八日に歿す。享年五十九。墓所、麻布廣尾松雲寺。初代市川男女藏二男。常磐津家元（祖母の實家）の養子となり、小文字太夫と改め、文政三年十一月河原崎座で「老松」を語つたのが初舞臺。天保八年正月中村座で四代を襲ぎ、嘉永三年十二月受領して常磐津豐後大掾藤原昶光と名乘る。中興の名人で、「釣狐」「宗淸」「お三輪」「將門」「靱猿」「乘合船」「甚五郎」「三人生醉」「新山姥」「勢獅子」等の名曲がある。萬延元年三絃方の四代岸澤古式部が分離して岸澤派を興した。

〔五代〕常磐津林中を見よ。

〔六代〕本名、常岡丑五郎。嘉永五年に生れ、昭和五年三月十五日に歿す。享年八十。初め三絃方であつたが、明治二十一年宗家に入り、七代小文字太夫と改め、同三十五年六代を襲名。大正十五年文字太夫をその養子に讓り、二代豐後大掾を襲名した。彼の藝は枯淡ともいふべく、その巧味に至つては林中と雖も一歩を讓つたと評判された。現宗家は十五代と稱してゐるが、これは「常磐津淨瑠璃系圖」により初代伊藤出羽掾・二代岡本文彌・三代都萬太夫事都越後掾・四代須賀千卜事都太夫一中・五代都半中事宮古路豐後掾の五代を加へ、これに小文字太夫に終つた三人を數へての代數である。

【詞章】大部分が所作事地として用ひられた爲めに、道行物・狂言淨瑠璃物、又は踊物が多

く、祝言物や段物は極めて少い。道行物は「お夏清十郎」「お房徳兵衛」「お花半七」「お千代半兵衛」「お染久松」「梅川忠兵衛」「お半長右衛門」等の世話物が多く、「忠信」「薄雪」「お三輪」「忠臣蔵」等の時代物は比較的少い。これ等は概ね義太夫物の改作である。狂言浄瑠璃は常磐津の本領ともいふべく、「關の扉」「戻駕」「双面」（慈童）「山姥」「宗清」「將門」（各別項）等の名曲を初め頗る多く、これには寧ろ時代物が多い。「ちよぼくれ」「大工」「田舎ごせ」「船頭」「冷水賣」「大和團子」「太神樂」「角兵衛」「乘合船」「どんつく」「とてつる拳」等の浮世風俗物の踊物があり、歌舞伎に上演された段物としては、唯一の「三世相」（お國六三）がある。又座敷浄瑠璃としては「老松」「子寶三番」「式三番」「高砂」「鶴龜」（これは歌舞伎にも上演）、「三人生酔」「甲子松」「常磐重」「常磐の若緑」「巖の壽」「松島」「三保の松」「七福神」等の祝儀物や歳且物があり、段物には「忠臣蔵」「廿四孝」「千兩幟」「伊賀越」（各別項）等の義太夫物の轉用したものが主である。詞作者は義太夫から轉用したものは別として、それ以外の大部分は、狂言作者の手になつたもので、その主な作者は壕越葉陽・金井三笑・櫻田治助（初代・二代・三代）・劇神仙・奈河本助・寶田壽助等である。

【曲風】豐後節（別項）の最も正系と見るべきであるが、所作事の伴奏音樂として缺くべからざる樞要な地位を占むるに至つて、自然に豐後節よりも多少その内容を上品に改めると共に、所作事に融合するやう洗練彫琢を經た爲めに、音樂的形式を一層江戸化せしめて、常磐津節としての特色を備へるやうになつた。同じ流れでも、富本や清元（各別項）の如く、派手でも意氣でもなく、野暮なものであるが、それだけにいづれにも向くといふ長所がある。從つて聲調も徒らに技巧にも走らぬ。ただ拍子が明快なために、所作事には最も適する妙所があるのである。同じ常磐津節でも、文字太夫の系統は、一般民衆に最も勢力を有し、今なほ江戸の代表的音樂として勢力を保持してゐる。

常磐津節正本　（芥川紅葉柵）

【參考】聲曲類纂卷三（齋藤月岑）○近世邦樂年表（豐後節之部）○江戸時代音樂通解（町田博三）○常磐津節の歷史（中内蝶二・田村西男）（日本音曲全集第八卷）○歌舞伎圖說解說篇○日本歌謠史（高野辰之）○日本歌謠集成卷十

常磐津文字太夫（ときはづもじたいふ・ときはづもじだいふ）「常磐津節」を見よ。

常磐津林中（ときはづりんちゅう）常磐津節の太夫【本名】山蔭忠助【生歿】天保十三年十二月二十八日生れ、明治三十九年五月六日胃癌にて歿す。享年六十五【墓所】東京四谷町妙行寺【閲歷】實父は南部盛岡藩士石川清藏。生後舊三浦藩士當時髪結職の山蔭定次郎の養子となる。幼にして常磐津和登太夫の門に入り、十三歳の時小和登太夫の名を得、次いで豐後大掾の門に轉じて技を研き、嘉永六年十一月中村座の「關の扉」に出勤したのが初舞臺である。更に初代松尾太夫の門に移り、二十一歳の時二代松尾太夫を襲ぎ、次第に非凡の技倆を認められ、十二代守田勘彌の親許、河竹新七（默阿彌）の媒妁で、明治十二年二月家元の養子となり、六代小文字太夫と改名し、その七月猿若座で「此改名に色かへぬ額いかやどりとめのにもとづく雪の常磐妹舍（せきやどり）關守」を語つた。同十九年隱居して林中と改め、同二十三年家元文中（佐六文中の未亡人常子）と絶ち、宮古路國太夫半中と名乘り、京阪に赴き、更に翌春故郷盛岡に歸つた。留まること六年、同三十年二月に至り、九代市川團十郎より呼び戻され、歌舞伎座で團十郎と五代菊五郎所演の「關の扉」を語つて大喝采を博し、名聲いよ〳〵高まつた。爾來斯流近代の名人と持て囃されて世を終つた。【藝風】彼は天性美音で巧味に富み、時代・世話、ゆく所として可ならざるはなく、中にも狂言浄瑠璃に妙を得、團・菊は彼の地にて演ずるを好み、殊に團十郎は稱揚して已まなかつた。彼の前半生は數奇を極め、その落魄沈淪に際しても斯道の修養を怠らなかつたといふ。彼が得意の語物は「關の扉」をはじめ、「双面」「山姥」「宗清」「乘合船」「靱猿」「釣女」等であつた。（常磐津節參照）

【參考】藝人出世譚（文藝倶樂部一二ノ二）（秋葉）

常磐日記（ときはにっき）隨筆　一卷【著者】土師熊文（寶曆・安永頃の國學者。傳未詳）【成立】庚子の年（安永九年か）【解說】著者常陸國茨城郡に旅行の折、見聞の事を書いたもので、有職故實に係る考說が多い。植田正淳が「封戸考」の評、九月十三夜月の宴の始、風の名稱、乎已等點、古今傳授の道統、內臣に上れる人々、尿筒、さやの中山、布の幅額、大伴氏の祖、敗醬に女郎花の字を用ひる事、阿波安房等の諸項を收む。本書は大田南畝所輯の「續三十輻」に編入されてゐる。奥に、「右常磐日記一卷借抄大久保酉山翁忠寄家　寬政四年壬子はつきいざよひ　杏花園」とある。【和田】

常磐嫗物語（ときはのうばものがたり）御伽草子　一卷【別名】「常盤の嫗」。又「書圖品類」及び「本朝書圖品目」に「常盤物語」とあるも、本書の事かと黒川眞頼は言つてゐるが、確證はない（訂正增補考古畫譜卷八）。【成立】室町初世か。「近古小說解題」には、「猿樂・田樂が物ぐるひのやうにと云ひて」の詞句があるに因つて、「福富草子」（別項）と同じ頃の作かと推測してある。【諸本】群書類從卷五〇四・新編御伽草子上卷所收【題材】短篇の滑稽諷刺物。長谷川福平氏は「堤中納言物語」の「よしなしごと」から脫化したものとの意見である（古代小說叢）。【內容】大和國に常盤の嫗と云ふ人があつた。富貴を樂しんで暮したが、夫に後れた後九十餘まで生きたけれど、數多の子供達からは、だんだん疎まれて笑はれるし、凡ての事心に任せず、老の末になりゆくを歎き、ただ西方彌陀如來を賴んで念佛の外はない中に、老人の癖として山海の珍味のないものねだりをしたり、子供等の不孝を罵り喚いたりする事があり、終に臨終正念して來迎を受ける物語で、滑稽な筆致で老女の性癖を生き〳〵と寫してあるのが面白い。【島津】

常盤友（ときはのとも）歌謠書【編者】不詳。【名義】江戸長唄を集めた書で、序文に「此卷を開て清冷たる聲を發する時は颯々たる松風こゝにあり、因て常盤の友と題するものならし」と見える。【諸本・內容】「唱歌新夢常盤友」は、明和三年五月の松島庄五郎の序文があり、奥に明和三年五月十五日の刊記がある。書寫竹醉堂鼎我、彫工小川氏勘助と記す。江戸の書肆吉文字屋治郎兵衛、和泉屋庄次郎の刊行。八十七番を收めてゐる。寬四年刊行のものには、「新版唱歌常盤友補二十九番を附け加へた。「新版唱歌常盤友補」は、明和三年五月の松島庄五郎の序文がなく、奥に「明和三年五月十五日の刊記がある。書寫竹醉堂鼎我、彫工小川氏勘助と記す。江戸の書肆吉文字屋治郎兵衛、和泉屋庄次郎の刊行。八十七番を收めてゐる。寬四年刊行のものには、「新版唱歌常盤友補二十九番を附け加へた。「新版唱歌常盤友補」は、「唱歌新夢常盤友」と同樣の書が幕末には上方でも多く出た。【附記】松島庄五郎の序文には、「書林東郭堂のぬし」とあるのに、發行所が東郭堂でないのは不審である。なほ「常盤友」と同じ枕本、無節附本の體裁で刊行せられた江戸長唄集には次の如き書がある。享和三年の序文を持つ「唄のしらべ」二册。この「唄のしらべ」は改刷埋木本であつて、それ以前の原刷本が存するが刊年未詳。內容は互に出入がある。次に文化年中に刊行された「三つの友」二册がある。文化三年の式亭三馬の序文を持つ「東風流」初編、また文化五年の同じ三馬の序文がある「東風流」二編、「東風流」初編の改題再刷本である文化十三年版の「東すがた」等は、横本ではなく、縦開きであるが、本の型や無節附である點等、全く「常盤友」と同種類の書で、その系統を引くものである。以上は江戸版であるが、これと同樣の書が幕末には上方でも多く出た。

常盤屋之句合（ときはやのくあはせ）俳諧集　一册【編者】杉山杉風【名義】青物を題にした句合であるから、須田町邊の青物問屋と洒落れて、かく題したものであらう。跋に「これに名けて常盤屋といふは、時を祝し世をほめての名なるべし」とある。天下が泰平で、諸國の物產が集まつて來る江戸の繁昌をたゝへる意味も含まれてゐると見える。【刊行】延寶八年【諸本】「江戸俳諧合」といふ古版本も物。「伏見常磐」（別項）に引續く曲。捕へられて遂に清盛に見えた常磐は、三子をそれぞれ寺に上せる事とし、末子牛若も七歳になつた後、人の勸めに從ひ鞍馬に預ける事に定めようと、先づ自ら寺に詣で內陣で念誦してゐると、女人なるの故に別當東光房の怒りを買ひ、逐はれようとするのを肯かずして、東光房と互に問答論辯する事を作る。【島津】

常盤嫗物語（ときはのうばものがたり）御伽草子　一卷【別名】「常盤の嫗」。又「書圖品類」及び「本朝書圖品目」に「常盤物語」とあるも、本書の事かと黒川眞頼は言つてゐるが、確證はない（訂正增補考古畫譜卷八）。【成立】室町初世か。「近古小說解題」には、「猿樂・田樂が物ぐるひのやうにと云ひて」の詞句があるに因つて、「福富草子」（別項）と同じ頃の作かと推測してある。【諸本】群書類從卷五〇四・新編御伽草子上卷所收【題材】短篇の滑稽諷刺物。長谷川福平氏は「堤中納言物語」の「よしなしごと」から脫化したものとの意見である（古代小說叢）。【內容】大和國に常盤の嫗と云ふ人があつた。富貴を樂しんで暮したが、夫に後れた後九十餘まで生きたけれど、數多の子供達からは、だんだん疎まれて笑はれるし、凡ての事心に任せず、老の末になりゆくを歎き、ただ西方彌陀如來を賴んで念佛の外はない中に、老人の癖として山海の珍味のないものねだりをしたり、子供等の不孝を罵り喚いたりする事があり、終に臨終正念して來迎を受ける物語で、滑稽な筆致で老女の性癖を生き〳〵と寫してあるのが面白い。【島津】

常盤友（ときはのとも）歌謠書【編者】不詳。【名義】江戸長唄を集めた書で、序文に「此卷を開て清冷たる聲を發する時は颯々たる松風こゝにあり、因て常盤の友と題するものならし」と見える。【諸本・內容】「唱歌新夢常盤友」は、

得庵（とくあん）儒者【姓名】菅原玄同。自ら修して菅ともいふ。字は子德。【生歿】播磨國姬路に生れ、寬永五年（一六二八）六月十四日歿す。享年四十八【閲歷】醫術に長じ、儒を藤原惺窩に受け、林羅山・那波活所・堀杏庵と併せて四天王と稱せられ、京都に住し、家塾を開いて生徒に敎授し、京都所司代板倉氏の顧問に應じた。【佐久】

獨學綱（どくがくかう）歌論書　殘一卷【著者】黒澤翁滿【成立】年代不明【諸本】歌學篇數卷あつたうち風體の卷一卷のみが寫本として帝國圖書館に殘つてゐる。【內容】中世・近世の歌學書に、歌體について論じてあることは何れも根據のない事とし、「新撰髓腦」以下近世の歌學書の所說を引いて、その說の互に齟

陀如來を賴んで念佛の外はない中に、老人の癖として山海の珍味のないものねだりをしたり、子供等の不孝を罵り喚いたりする事があり、終に臨終正念して來迎を受ける物語で、滑稽な筆致で老女の性癖を生き〳〵と寫してあるのが面白い。　〔島津〕

常盤友（ときはのとも）　歌謠書　【編者】不詳。【名義】江戸長唄を集めた書で、序文に「此卷を開て清冷たる聲を發する時は颯々たる松風こゝにあり、因て常盤の友と題するものならし」と見える。【諸本・内容】「唱歌新夢常盤友」は、明和三年五月の松島庄五郎の序文があり、奥に明和三年五月十五日の刊記がある。書寫竹醉堂鼎我、彫工小川氏勘助と記す。江戸の書肆吉文字屋治郎兵衛、和泉屋庄次郎の刊行。八十七番を收めてゐる。翌四年刊行のものには、新舊增補二十九番を附け加へた。「新版增補常盤友」には、明和七年六月吉日の刊記があり、新に新歌七十三番を舊版に附け加へた。この書も亦明和八年以後の、新歌五十六番を增補して別册となし、安永三年正月に刊行せられた。以上の四版が存する。これ等の書は、何れも目錄に、長唄の題の上に冒頭の歌詞を一句づつ冠らせてゐるのが特色である。例へば「ちはや呼出し三番叟」「君が代はさらし三番叟」の如き例である。以上を通じて全部が、德川文藝類聚第十卷に「常盤友前集」と題して收められてゐる。又同書には、この前集に洩れた歌及び前集以後の歌二百三十五番を集め、「常盤友後集」と題して收めてある。【價値】江戸長唄の書では、代表的の書として知られ、年代的に、可及的に歌詞を網羅蒐集してゐるのは、價値大なる所以であるが、節附を全然除いてゐるのは、その大なる短所である。

【附記】松島庄五郎の序文には、「書林東郭堂のぬし」とあるのに、發行所が東郭堂でないのは不審である。なほ「常盤友」と同じ枕本、無節附本の體裁で刊行せられた江戸長唄集には次の如き書がある。享和三年の序文を持つ「唄のしらべ」二册。この「唄のしらべ」は改刷埋木本であつて、それ以前の原刷本が存するが刊年未詳。内容は互に出入がある。次に文化年中に刊行された「三つの友」二册がある。文化三年の式亭三馬の序文を持つ「東風流（あづまふり）」初編、また文化五年の同じ三馬の序文がある「東風流」二編、「東風流」初編の改題再刷本である文化十三年版の「東すがた」等は、横本ではなく、縱開きであるが、本の型や無節附である點等、全く「常盤友」と同種類の書で、その系統を引くものである。以上は江戸版であるが、これと同樣の書が幕末には上方でも多く出た。「江戸歌大寄大全東の一節」（文政二年刊、三册）、「長歌寄本をさなぐさ」「同四季のさくら」「同おしゑ雛がた」「同京の若くさ」（以上、天保十四年刊）、「江戸歌大會東一調」（弘化四年刊、七册）、「江戸歌大會吾妻調」（嘉永四年刊、七册）、「新增吾妻の調」（文久元年刊、一荷堂半水編）、「長歌寄本吾妻の花」（刊年不詳、五册）、「東都糸のしらべ」（同、五册）等がそれである。

【參考】德川文藝類聚第十卷　○日本歌謠集成　巻九　〔藤田〕

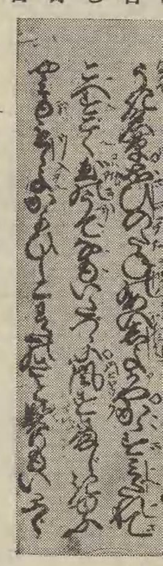
常盤問答（ときはもんだふ）　幸若舞曲（三十六番の一）一卷【作者】不詳【別名】鞍馬常磐【成立】室町期【諸本】古板本は寛永木活字本、寛永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【解說】判官物（義經傳說）。法談物。「伏見常磐」（別項）に引續く曲。捕へられて遂に清盛に見えた常磐は、三子をそれぞれ寺に上せる事とし、末子牛若も七歳になつた後、人の勸めに從ひ鞍馬に預ける事に定めようと、先づ自ら寺に詣で內陣で念誦してゐると、女人なるの故に別當東光房の怒りを買ひ、逐はれようとするのを肯かずして、東光房と互に問答論辯する事を作る。　〔島津〕

常盤屋之句合（ときはやのくあはせ）　俳諧集　一册【編者】杉山杉風【名義】青物を題にした句合であるから、須田町邊の青物問屋と洒落れて、かく題したものであらう。跋に「これに名けて常盤屋といふは、時を祝し世をほめての名なるべし」とある。天下が泰平で、諸國の物產が集まつて來る江戸の繁昌をたゝへる意味も含まれてゐると見える。【刊行】延寶八年【諸本】「江戸俳諧合」といふ古版本もあるけれど、現存は稀である。芭蕉翁七部餘錄・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔・芭蕉全集（俳諧文庫）・芭蕉全集（沼波瓊音編）・芭蕉全集（日本名著全集）等所收。【解說】青物を題材にした二十五番の句合で、判は芭蕉である。勝句十八、持七である。杉風子序、延寶八年季秋華桃園跋。芭蕉の跋によれば、「句々たをやかに、作新しく、見るに幽なり、思ふに玄也、是を今の風體といはんか」とあつて、芭蕉は當時これを自派の新調としたやうに思はれるけれど、大體が緣語と比喩の駄洒落である。例へば箒木の破れをほろ〳〵あへに掛けたり、薯が山を奪つたから金輪際に自然生だと云つたり、僧の袈を梅干の影に喩へたり、橙と蜜柑・金柑の論に莊子の寓言を眞似たりして、所謂幽玄の感は少しもない。要するに蕉風過渡の調を示すに過ぎぬもので、當時の芭蕉及び蕉門がまだこれ程の所にゐたことを知り得るものである。　〔萩原〕

得庵（とくあん）　儒者　【姓名】菅原玄同。自ら修して菅ともいふ。字は子德。【生歿】播磨國姬路に生れ、寬永五年（一六二八）六月十四日歿す。享年四十八【閱歷】醫術に長じ、儒を藤原惺窩に受け、林羅山・那波活所・堀杏庵と併せて四天王と稱せられ、京都に住し、家塾を開いて生徒に教授し、京都所司代板倉氏の顧問に應じた。　〔佐久〕

獨學綱（どくがくかう）　歌論書　殘一卷　【著者】黑澤翁滿【成立】年代不明【諸本】歌學篇數卷あつたうち風體の卷一卷のみが寫本として帝國圖書館に殘つてゐる。【內容】中世・近世の歌學書に、歌體について論じてあることは何れも根據のない事とし、「新撰髓腦」以下近世の歌學書の所說を引いて、その說の互に齟齬のあることを示し、自說として、長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・連歌・片歌・俳諧歌・物の名・折句・廻文の十種を擧げ、別に修辭上からは、直言歌・譬へ歌の二種に分類してゐる。次に古來、萬葉風・古今風・新古今風等諸歌風の別を立てる者のあることを非難し、歌の道には古來一貫の大綱があつて、優れた歌は悉くこの大綱の中にありと主張し、又歌は活氣があつて初めて面白いので、活氣を離れては感通なく、感通なければ死物に等しいとし、「源氏物語」玉かづらの卷なる源氏の詞を引いて論じてゐる。而して「二十一代集」から、彼の所謂活氣ある歌數百首を拔いて小註を加へてゐる。【價値】本書の所說には、所々首肯し難い點もあるが、それだけに獨創の見解も見られ、又本書によつて著者の造詣の淺からざるを知り得るなど、歌學史上亦逸することの出來ぬも

の轉用したものが主である。詞作者は義太夫から轉用したものは別として、それ以外の大部分は、狂言作者の手になつたもので、その主な作者は壕越桑陽・金井三笑・櫻田治助（初代・二代・三代）・劇神仙・奈河本助・寶田壽助等である。【曲風】豐後節（別項）の最も正系と見るべきであるが、所作事の伴奏音樂として缺くべからざる樞要な地位を占むるに至つて、自然に豐後節よりも多少その內容を上品に改めると共に、所作事に融合するやう洗練彫琢を經た爲



所があるのである。而して江戸時代から一般民衆に最も勢力を有し、今なほ江戸の代表的音樂として勢力を保持してゐる。

【參考】歌曲類纂卷三（齋藤月岑）○近世邦樂年表（豐後節之部）○江戸時代音樂通解（町田博三）○常磐津節の歷史（中內蝶二・田村西男）（日本音曲全集第八卷）○歌舞伎圖說解說篇　○日本歌謠史

と六年、同三十年二月に至り、九代市川團十郎より呼び戻され、歌舞伎座で團十郎と五代菊五郎所演の「關の扉」を語つて大喝采を博し、名聲いよ〳〵高まつた。爾來斯流近代の名人と持て囃されて世を終つた。【藝風】彼は天性美音で巧味に富み、時代・世話、ゆく所として可ならざるはなく、中にも狂言淨瑠璃に妙を得、團・菊は彼の地にて演ずるを好み、殊に團十郎は稱揚して已まなかつた。彼の前半生は數奇を極め、その落魄沈淪に際しても斯道の修養を怠らなかつたといふ。彼が得意の語

うにと云ひて」の詞句があるに因つて、「福富草子」（別項）と同じ頃の作かと推測してある。【諸本】群書類從卷五〇四・新編御伽草子上卷所收【題材】短篇の滑稽諷刺物。長谷川福平氏は「堤中納言物語」の「よしなしごと」から脫化したものとの意見である（古代小說叢）。【內容】大和國に常盤の嫗と云ふ人があつた。富貴を樂しんで暮したが、夫に後れた後九十餘まで生きたけれど、數多の子供達からは、だんだん疎まれて笑はれるし、凡ての事心に任せず、老の末になりゆくを歎き、ただ西方彌

のである。【相原】

徳川文學　とくがはぶんがく　「江戸時代文學」を見よ。

徳川文藝類聚　とくがはぶんげいるゐじゅ　叢書　十二册　【刊行】大正三・四年、國書刊行會第四期【解説】第一卷「事實小説」は、浮世草子の中、當時の腕利き作者が波瀾曲折あり、興味ある市井の出來事を潤飾したる類を云ひ、「福齋物語」以下十二篇を含む。第二卷「教訓小説」は、小説にあらず寧ろ小話とも云ふべきで、教誨を主とした俗文學を指し、「可笑記」以下五篇を收む。第三卷「遍歷小説」は、又浮世草子の中、遍歷體の形式を借りて一種の寓意又は諷刺を含ませた類で、「西鶴冥途物語」以下十二篇あり、第四卷「怪談小説」は、江戸式怪談の傑作集で「百物語評判」以下十篇を含む。第五卷「洒落本」は、四十篇の代表的作品で、以て洒落本の大觀を得る事が出來る。第六・七卷「脚本」は、十九篇の原本を、第八卷「淨瑠璃」は、古淨瑠璃中最も珍とすべきものを集め、第九・十卷は「俗曲」でこれ亦本書の特色をなすもの、第十一卷「雜俳」は「俳諧武玉川」以下十三篇の雜俳集、第十二卷「評判記」は稗史・小説・狂歌の評判より淨瑠璃・能樂・藝娼妓、さては諸國の名物、魚蟲の評判に至るまでの二十五篇を收め、最も特色をなすもの、江戸時代風俗資料としての重要性を認めざるを得ないものである。本書は結局、曩に刊行された「近世文藝叢書」（別項）の補遺であり、本刊行會が近世文藝研究に多大なる寄與をなしてゐる一叢書である事は疑ひない。第一卷卷頭に坪内逍遙の序あり、各卷に簡略ながら專門家の解説を附してゐる。本書は初版發賣以後、再刊を重ね、刊行會本の中、最も流布されてゐるものである。【土井】

得巖　とくがん　禪僧　【諱】得巖。【字】惟肖。【閲歷】得巖は永享頃の人で、備前に生れ、十六歳の時京都に上りて得度した。後、將軍足利義持の請を受けて相國寺西堂となつた。攝津の棲賢寺、京都の眞如寺・萬壽寺・天龍寺等を歷住し、南禪寺に昇住す。尋いで南禪寺に雙桂院を構へて退休した。【著作】莊子虞齋口義鈔〇東海璚華集（別項）。【鷲尾】【參考】本朝高僧傳〇延寶傳燈錄〇漢學起源

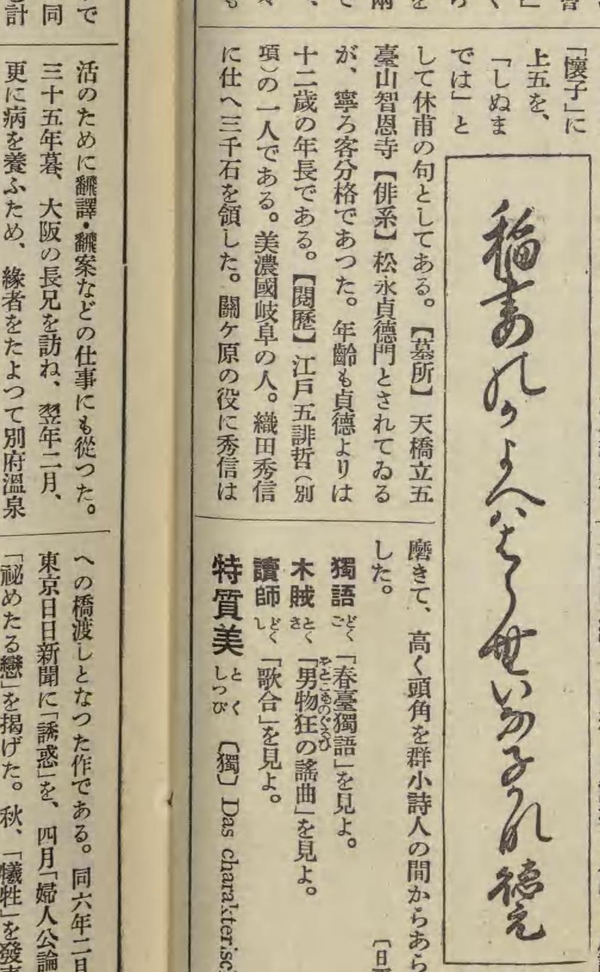
得閑齋繁雅　とくかんさいはんが　狂歌師　【本名】山田太右衞門【生歿】寛延元年に生れ、文化十年（二四七三）七月二十九日歿。享年六十六。【墓所】京都下寺町淨德寺【閲歷】京都堺町四條上ル處の商賈で、家號を鐙屋と云ふ。九如館鈍永（別項）の高弟で一家をなし、天明・寛政頃は大阪の玉雲齋貞右（別項）と共に、關西の二明星と呼ばれてゐた。歿後得閑齋の號は、門人文廼屋茂喬が二世を繼ぎ、茂喬の門人爲山軒砂長が三世を繼いだ。【著書】狂歌野中の水一册（寛政四年刊）〇狂歌かひこの鳥一册（享和元年刊）〇狂歌蘆の若葉一册（文化四年刊）〇狂歌みちづれ集一册（文化六年刊）〇狂歌紅葉集二册（文化八年刊）〇六々狂歌撰一册（文化十年刊）。【野崎】

獨吟　どくぎん　連歌・俳諧　【解説】連歌の會衆は幾人と限定されてはないが、「筑波問答」に、「人數少ければ句つまりて惡く、又人多くなりぬれば物急になりて一座の思ふやうならざるなり」とあつて、早くから人數の程合ひを算んだ。併し實際には單獨で賦するもの、兩人で賦するもの等さまざまであつた。單獨で賦するものを獨吟、兩人で賦するものを兩吟、三人で賦するものを三吟、以下四吟・五吟等々と稱する。現存する連歌のうち、獨吟の最も古いものは、後小松天皇の應永十二年の「御獨吟和漢聯句」、二條良基の「鷹翔百韻」などであらうが、併し定家の法名と同じい明靜の「獨吟百韻」が若し定家であるならば、これが最も古いものになる。高山宗砌の「何船百韻」等があり、飯尾宗祇の七十九歳の時の「獨吟百韻」などは有名なものである。俳諧の獨吟では、荒木田守武の享祿三年の「獨吟百韻」が現存する中の最も古いもので、なほ守武は天文九年に「獨吟千句」を賦した。兩吟の連歌では、文明六年正月五日に、宗祇と元盛とで賦した「何木百韻」が最も古かるべく、三吟の連歌では、宗祇・宗元・元用の文明五年八月十九日に賦した「何路百韻」が最も古かるべく、宗祇・肖柏・宗長の水無瀨三吟及び湯山三吟等は有名なものである。【福井】

獨吟千句　どくぎんせんく　「守武千句」を見よ。

特磬　とくけい　「磬」を見よ。

德元　とくげん　俳人　【姓名】齋藤利起。通稱齋宮【號】帆亭、薙髮後德元と云ふ。【生歿】永祿二年に生れ、正保四年（二三〇七）八月二十八日丹後に歿す。享年八十九【法名】清岩院殿前端尹隣山德元大居士〔辭世〕今まではいきたはことを月夜かな。但し「犬子集」及び「懷子」に上五を、「しぬまでは」として休甫の句としてある。【墓所】天橋立五臺山智恩寺【俳系】松永貞德門とされてゐるが、寧ろ客分格であつた。年齡も貞德よりは十二歳の年長である。【閲歷】江戸五俳哲（別項）の一人である。美濃國岐阜の人。織田秀信に仕へ三千石を領した。關ケ原の役に秀信は石田三成に屬して岐阜を守つたが、德元は主君の前途を見屆けずして、長良川を越えて脫走したので、臆病者の名を流したと傳へられる。寛永五年江戸に下り、馬喰町二丁目に住したとも、又江戸町に住したとも云ふが、重賴の「懷子」の序には、「淺草の入道」とある。歌學を業としたと云ふ。重賴が「犬子集」を編んだ時、德元の「春立つやにほんめでたき門の松」といふ句を卷頭に置いたので、一代の作者と稱せられた。寛永十八年、或る君より需められて「俳諧初學抄」（別項）を著はした。これが江戸に於ける俳書出版の嚆矢である。【著作】獨吟千句（寛永五年）〇俳諧初學抄（別項）。【參考】貞德永代記 中島隨流 〇滑稽太平記 北藤浮生 〇俳諧家譜拾遺集 青木十口 〇俳家奇人談 竹内玄々一 〇俳家大系圖 生川春明 【萩原】



獨弦哀歌　どくげんあいか　詩集　【著者】蒲原有明【刊行】明治三十六年五月、白鳩社。【解説】著者の第二集である。全二十七篇、外に譯詩ロゼッティ、ブレエク、キイツ、ランダア等の四篇がある。「あだならまし」「聖菜園」等、獨絃哀歌の章十五篇と「さいかし」「佐太大神」等をその代表詩とする。この集に於て有明は、漸くその獨自の詩境を見出し、用語を磨きて、高く頭角を群小詩人の間からあらはした。【日夏】

獨語　どくご　「春臺獨語」を見よ。

木賊　とくさ　「男物狂の謠曲」を見よ。

讀師　どくし　「歌合」を見よ。

特質美　とくしつび　【獨】Das charakterische schöne【解説】この語の意味は一定してゐない。シャスレル(Schasler)は、崇高美と優美（各別項）との統一したものであるとし、また理想美とも云ふ。フォルケルトは狹義の美と對立せしめてゐる。（美的樣態參照）【村田】

特鐘　とくしょう　「鐘」を見よ。

讀書餘適　とくしょよてき　紀行　二卷　【著者】安井息軒【解説】天保十三年、著者四十四歳の時、江戸から陸前の松島に遊んだ漢文の紀行である。【佐久】

獨創性　どくそうせい　【英】Originality【解説】藝術家の制作が個性的であるといふこと、即ち藝術の表現過程及びその結果に於て、獨自な新しさが見出される場合に獨創的といふ。天才に要求される條件であり、藝術樣式發展の重要な一つの契機として考へられるものである。多少個性的と、ふつと同意義に用ひら

德田

た。翌二十五年再び學業を繼續するつもりで歸鄉したが、間もなく越後長岡に去つた。同地で新に發刊された新聞社に入つて再起を計る考であつたといふ。翌年一月、再び上京、長岡で知つた小金井代議士の紹介で博文館に入つた。博文館入社前、某學校で英語を敎へたこともあつた。二十七八年頃、尾崎紅葉の門に入ると共に專ら創作に志し、二十九年八月、はじめて「文藝倶樂部」に「藪柑子」（別項）を發表した。同年冬、博文館を退き、神田の下宿に籠り、地方新聞の小説を書く傍ら、芳賀博士の仕事を手傳ひなどした。翌三十年十二月、文壇的に擡頭して來た小栗風葉が、紅葉の玄關を出て塾を創めるに當り、柳川春葉

活のために飜譯・飜案などの仕事にも從つた。翌三十五年暮、大阪の長兄を訪ね、翌年二月、更に病を養ふため、緣者をたよつて別府溫泉に遊び、翌三十六年歸京、四月、下宿を引拂つて、はじめて小石川表町に一戸を構へた。その夏、小澤濱子と結婚した。冬、紅葉山人逝く（この間の消息は、小説「戀」の中に詳しく書かれてゐる）。三十七年秋、長男が生れた。時恰も日露戰爭に際し、彼も亦戰爭小説を書かなければならなかつた。同年十二月、讀賣新聞に「少華族」を發表した。翌年冬本鄉森川町に移る。十二月、短篇集「花束」を春陽堂より刊行。三十九年十月、萬朝報に「おのが縛」を揭げた。この作は、翌年五月春陽堂から刊行された。四十年四月、長篇「焰」を國民新聞に、十月「凋落」を讀賣新聞に揭げた。四十一年八月「中央公論」に、短篇「出產」（別項）を發表。九月「湯風

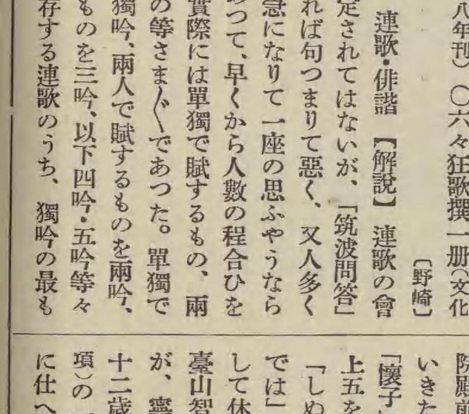
への橋渡しとなつた作である。同六年二月、東京日日新聞に「誘惑」を、四月「婦人公論」に「祕めたる戀」を揭げた。秋、「犧牲」を發表。同九年、「蒼白き月」などの好短篇あり、又中外商業新報に「灰燼」を執筆。この年田山花袋と共に誕生五十年祝賀會が全文壇によつて催された。同十年、時事新報に「何處まで」（一月）、大阪朝日に「斷崖」を執筆。「婦人公論」に「呪咀」、「婦人之友」に「闇の花」を揭げたのもこの年である。同十一年、東京日日に「二つの道」、外に「或喜笑婦の話」以下の短篇を多く發表した。同十二年六月、自傳的中篇「無駄道」を報知新聞に揭げた。十三年「中央公論」に「不安のなかに」（一月）、「車掌夫婦の死」（四月）、「改造」に「花が咲く」（四・五月）、「風呂桶」（八月）等の短篇を發表、好評であつた。一月以來「婦人之友」に「

の評判より浄瑠璃・能樂・藝娼妓、さては諸國の名物、魚蟲の評判に至るまでの二十五篇を收め、最も特色をなすもの、江戸時代風俗資料としての重要性を認めざるを得ないものである。本書は結局、曩に刊行された「近世文藝叢書」(別項)の補遺であり、本刊行會が近世文藝研究に多大なる寄與をなしてゐる一叢書である事は疑ひない。第一卷卷頭に坪内逍遙の序あり、各卷に簡略ながら專門家の解說を附してゐる。本書は初版發賣以後、再刊を重ね、刊行會本の中、最も流布されてゐるものである。【土井】

葉集二册(文化八年刊)○六々狂歌撰一册(文化十年刊)。【野崎】

獨吟 どくぎん 連歌・俳諧 【解說】連歌の會衆は幾人と限定されてはないが、「筑波問答」に、「人數少ければ句つまりて惡く、又人多くなりぬれば物急になりて一座の思ふやうならざるなり」とあつて、早くから人數の程合ひを尊んだ。併し實際には單獨で賦するもの、兩人で賦するもの等さまざまであつた。單獨で賦するものを獨吟、兩人で賦するものを兩吟、三人で賦するものを三吟、以下四吟・五吟等々と稱する。現存する連歌のうち、獨吟の最も

院殿前端尹隣山德元大居士【辭世】今までは いきたはことを月夜かな。但し「犬子集」及び「塵子」に上五を、「しぬまでは」として休甫の句としてある。【墓所】天橋立五臺山智恩寺【俳系】松永貞德門とされてゐるが、寧ろ客分格であつた。年齡も貞德よりは十二歲の年長である。【閱歷】江戸五誹哲(別項)の一人である。美濃國岐阜の人。織田秀信に仕へ三千石を領した。關ケ原の役に秀信は



大神」等をその代表詩とする。この集に於て有明は、漸くその獨自の詩境を見出し、用語を磨きて、高く頭角を群小詩人の間からあらはした。【日夏】

獨語 どくご 「春臺獨語」を見よ。

木賊 もくさく 「男物狂の謠曲」を見よ。

讀師 どくし 「歌合」を見よ。

特質美 とくしつび 【獨】Das charakteristische Schöne 【解說】この語の意味は一定してゐない。シャスレル(Schasler)は、崇高美と優美(各別項)との統一したものであるとし、また理想美とも云ふ。フォルケルトは狹義の美と對立せしめてゐる。(美的樣態參照) 【村田】

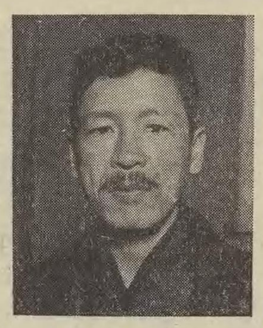
特鐘 とくしょう 「鐘」を見よ。

讀書餘適 とくしょよてき 紀行 二卷 【著者】安井息軒 【解說】天保十三年、著者四十四歲の時、江戸から陸前の松島に遊んだ漢文の紀行である。 【佐久】

獨創性 どくそうせい 【英】Originality 【解說】藝術家の制作が個性的であるといふこと、即ち藝術の表現過程及びその結果に於て、獨自な新しさが見出される場合に獨創的といふ。天才に要求される條件であり、藝術樣式發展の重要な一つの契機として考へられるものである。多く個性的といふのと同意義に用ひられ、類型的といふのと對立する。 【村田】

德田秋江 とくだしゅうこう 「近松秋江」を見よ。

德田秋聲 とくだしゅうせい 小說家 【本名】末雄 【閱歷】明治四年十二月二十三日金澤市横山町に生る。同十二年春、養成小學校に入り、十六年卒業、更に金澤中學校に入學した。生來體質虛弱で醫藥に親しむことが多く、憂鬱な少年時代を送つたが、この頃からやゝ健康に向つた。同十九年石川縣專門學校に入學、後幾許もなく學令改まり、第四高等學校となるに及び、同校豫科に入學した。又別に漢學塾へも通つた。この頃より歷史や人物評に興味を持つやうになつた。同二十二年十月、父を喪ふや、それを機會に、家庭の都合もあつて學校を退き、文學に志すに至つた。同二十四年四月、一たび上京したが、間もなく輕微の天然痘にかゝり、大阪の長兄の許に身を寄せた。翌二十五年再び學業を繼續するつもりで歸鄉したが、間もなく越後長岡に去つた。同地で新に發刊された新聞社に入つて再起を計る考であつたといふ。翌年一月、再び上京、長岡で知つた小金井代議士の紹介で博文館に入つた。博文館入社前、某學校で英語を敎へたこともあつた。二十七八年頃、尾崎紅葉の門に入ると共に專ら創作に志し、二十九年八月、はじめて「文藝俱樂部」に「藪柑子」(別項)を發表した。同年冬、博文館を退き、神田の下宿に籠り、地方新聞の小說を書く傍ら、芳賀博士の仕事を手傳ひなどした。翌三十年十二月、文境的に擡頭して來た小栗風葉が、紅葉の玄關を出て塾を創めるに當り、柳川春葉等と共にこれに加はつた。


德田秋聲

中山白峰・田中涼葉・泉斜汀・藤井紫明なども當時の同輩である。三十三年二月、塾を解散、再び筑土前の下宿に移り、三月美文雜報記者として讀賣新聞に入社、神田錦町に移つた。その夏、胃擴張に罹り苦しんだが、醫療の傍ら發奮して長篇「雲のゆくへ」(別項)を讀賣新聞に揭げた。好評を得て文名漸く擧る。かくて彼は鏡花・風葉・春葉と共に、所謂紅葉門下の四天王として、次第に認められるやうになつた。翌三十四年讀賣新聞を退いた。なほ當時「怠けもの」「柽梧」「前夫人」などの個人主義的な傾向を持つ作品を「新小說」に發表した。すでに彼は、これ等の作品の中に、後年の人生派的自然派的傾向を示した。なほ當時、生活のために飜譯・飜案などの仕事にも從つた。三十五年暮、大阪の長兄を訪ね、翌年二月、更に病を養ふため、緣者をたよつて別府溫泉に遊び、翌三十六年歸京、四月、下宿を引拂つて、はじめて小石川表町に一戶を構へた。その夏、小澤濱子と結婚した。冬、紅葉山人逝く(この間の消息は、小說「黴」の中に詳しく書かれてゐる)。三十七年秋、長男が生れた。時恰も日露戰爭に際し、彼も亦戰爭小說を書かなければならなかつた。同年十二月、讀賣新聞に「少華族」を發表した。翌年冬本鄉森川町に移る。十二月、短篇集「花束」を春陽堂より刊行。三十九年十月、萬朝報に「おのが縛」を揭げた。この作は、翌年五月春陽堂から刊行された。四十年四月、長篇「焰」を國民新聞に、十月「凋落」を讀賣新聞に揭げた。四十一年八月「中央公論」に、短篇「出產」(別項)を發表。九月易風社より「秋聲集」を刊行。續いて十月、當時國民新聞の文藝擔當者であつた高濱虛子の慫慂によつて、新しき中篇小說の試みとして「新世帶」(別項)を同紙上に發表した。翌年九月新潮社より刊行。その自然主義的人生派的傾向によつて注目され、世評甚だ高かつた。なほこの年、短篇集「出產」を左久良書房から刊行(四月)。四十三年八月讀賣新聞に「足迹」(別項)を發表。翌年八月、夏目漱石の推薦によつて朝日新聞に「黴」(別項)を揭げ、甚だ好評であつた。「黴」が四十五年一月新潮社より刊行せらるゝや、世評益々高く、傑作を以て推奬された。同四年「足迹」を刊行。大正二年三月、國民新聞に「爛れ」(別項)を發表。愛慾描寫の技巧の極致を示すものとして好評であつた。同四年二月讀賣新聞に「あらくれ」(別項)を、十月東京朝日に「奔流」を發表。後者は後の通俗小說への橋渡しとなつた作である。同六年二月、東京日日新聞に「誘惑」を、四月「婦人公論」に「祕めたる戀」を揭げた。秋、「犧牲」を發表。同九年、「蒼白き月」などの好短篇あり、又中外商業新報に「灰燼」を執筆。この年田山花袋と共に誕生五十年祝賀會が全文壇によつて催された。同十年、時事新報に「何處まで」(一月)、大阪朝日に「斷崖」を執筆。「婦人公論」に「呪咀」、「婦人之友」に「闇の花」を揭げたのもこの年である。同十一年、東京日日に「二つの道」、外に「或貴婦の話」以下の短篇を多く發表した。同十二年六月、自傳的中篇「無駄道」を報知新聞に揭げた。十三年「中央公論」に「不安のなかに」(一月)、「車掌夫婦の死」(四月)、「改造」に「花が咲く」(四・五月)、「風呂桶」(八月)等の短篇を發表、好評であつた。一月以來「婦人之友」に「草は蔓る」を執筆。十四年、「挿話」「未解決のまゝに」「籠の小鳥」などの短篇多く、東京日日に「蘇生」を揭ぐ。十五年一月夫人を喪ふ。「折鞄」(改造四月)、「過ぎゆく日」(中央公論四月)「逃げた小鳥」(同七月)、「元の枝へ」(改造九月)、「暑さに喘ぐ」(中央公論九月)等の作がある。山田順子との戀愛事件を傳へられたのはこの頃である。昭和期に入つてからも短篇多く、心境の深さと技巧の圓熟を示すものがある。「齒痛」(昭和三年一月、中央公論)、「芭蕉と羊齒」(昭和三年十月、中央公論)、「和解」(昭和八年八月、新潮)は特に注目すべき作である。

【著作】【選集】秋聲叢書(博文館)○現代小說全集(德田秋聲集)○現代日本文學全集(德田秋聲集)○明治大正文學全集(德田秋聲篇)○新撰德田秋聲集(改造社)。【短篇集】花束 明治三十二・三年頃より七・八年までの作を集めたもの)○秋聲集(四十年前後の作を集めたもの)○出產(秋

聲集以後、卽ち四十一・二年の作を集めてある)○嬉曳(大正二年一月、春陽堂)○絶緣(同年、春陽堂)○過ぎゆく日(大正十四・五年の作を集めてある)等。【代表作】雲のゆくへ○出產(短篇)○新世帶○足迹○黴○爛○あらくれ(以上各別項)○未解決のまゝに等。

【作風】紅葉門下として硯友社の流れを汲んでゐるに拘らず、その作風には最初から硯友社のそれとは自ら相異るものがあつた。處女作「藪柏子」などに於てすら、すでにそれが多少ほの見えてゐる。それは彼の作家としての個性の成長と共に益々明瞭となつて行つた。彼の出世作となつた「雲のゆくへ」などに於ては、なほロマンチックな要素が多分に含まれてゐたが、作者自身すでにこの作に不滿であつたことを告白してゐる(單行本「雲のゆくへ」序文)。早くから比較的多く外國文學に接してゐた彼には、期せずして自然派が目指してゐたと同樣な人生探究的な欲求が萌えてゐた。その當然の結果として一步一步とその硯友社的俗流的傾向から脫却していつた。明治三十八年刊の短篇集「花束」の序文や、長篇「少華族」の序文中に、彼が人生派的意向を漏らしてゐることは、すでに彼の研究家によつて指摘されてゐる。「少華族」の序文中に於て、作者はすでに「眞摯なる人生の描寫」を云々してゐるのであるが、これこそかの自然派たち、藤村や花袋の熱心に追ひ求めてゐた同じ目標に外ならなかつた。而してそれは必ずしも彼が花袋等のそれに迎合したとのみは考へられない。その素質的なものと、その素養とが、自らこの展開へと導いたと考へ得る理由がある。この間の消息を最も雄辯に語るものは、短篇集「秋聲集」中に收められた諸作である。かくて彼の一作一作と築き上げて來た精進は、遂に四十一年の「新世帶」となつて現はれた。この作を一たび發表した後の彼は、もはや押しも押されもしない自然派作家の一人であつた。而も「新世帶」の一篇は、彼の自然派作家としての登場であつたばかりでなく、作者自身の一つの完成でもあつた。謂はばこれ以前の諸作はすべて習作であつたと言つても必ずしも過言ではない。このことは單に作の傾向內容に就いてのみならず、その技巧に就いても言ひ得る。その作風の最も特徵的なものは冷徹峻嚴なその客觀的態度と、所謂無技巧の技巧と稱せられた質實なうまみとであるが、その二つながら、この作に於て完成されたかの感がある。硯友社的な派手な、そして作意的な手法を見事に克服した後の、所謂艷消しにされた簡潔ではあるが銳い技巧が、隨所に閃いてゐる。そしてこの作に於ける人生派的な傾向は「足迹」「黴」に於て一層深められ、その技巧は「爛」に於て一段と洗練され、又「あらくれ」に於て、この作全體がその極限にまで高められ、彫琢鏤刻を經た完成味を示した。「新世帶」と「あらくれ」とは所詮は同系統の作であるが、後者は一層完成された姿を示してゐる。これには「足迹」や「黴」に見られるやうな人生派的否定的な暗さもなく、瑣末的な煩雜さも拭ひ去られて、一脈の明るさと精力的なものが感ぜられ、その後の作風の一つの傾向を示してゐる。一方彼は「新世帶」と殆ど同時に「出產」の如き傑れた短篇を書いてゐる。これは「秋聲集」中の諸作の完成した一つの姿である。又「出產」は「黴」と共に最も完成した私小說としても記憶さるべき作である。大正期に入つてからは、自然主義そのものが行きづまり、彼も亦「爛」「あらくれ」を書いて後、一時沈滯に陷つたが、すでに「あらくれ」の中に示された肯定的な傾向の上に、益々圓熟した技巧を併せて作者自身の道を開拓して行つた。而して「奔流」以後の彼の傾向は、凡そ三つに分けて見ることが出來る。(一)婦人雜誌・新聞向の通俗小說、例へば「祕めたる戀」「誘惑」「二つの道」など、(二)身邊雜事を淡々と描いた心境小說、(三)作者の社會的苦惱を盛つた、例へば「元の枝へ」「逃げた小鳥」「未解決のまゝに」「犠牲」などの諸作の如きがそれである。その心境小說の中にも「蒼白い月」「籠の小鳥」などの老熟した心境の澄徹を示した作もあるが、やはり社會苦惱を盛つた作に、より傑れた作がある。「未解決のまゝに」「元の枝へ」などが卽ちそれである。極く最近の作風は心境の深まると共に、現實を在るがまゝに諦視するといつたやうな、より肯定的な方向へ進んで來てゐる。【史的地位】日本の自然主義文學運動は田山花袋(別項)によつて指導されたが、實際に自然主義文學を確立完成した者は、花袋でも藤村でもなく、無論白鳥でもなく、實に秋聲であつた。「新世帶」「黴」「爛」「あらくれ」の諸作は、ただに秋聲の傑作であつたばかりでなく、自然主義的作品の最高水準を示したものである。自然主義文學の完成者が、紅葉門下として發足したこの作家であつたといふことは、甚だ興味ある事實であるが、その最も大きな理由は、飽くまで冷徹な客觀的作風に由來するものであらう。どこまでも突放し切るその態度は、明治・大正の文壇を通じても全く比類のない特異的な存在であつて、この素質こそ彼をして自然主義文學を完成せしめたのである。併し彼は必ずしも眞底からの自然派作家ではなかつた。「爛」「あらくれ」などにも、すでにその片鱗を示してゐるやうに、次第に餘裕ある態度を見せ、文學の技術家としての技巧を示すやうになつて行つた。舟橋聖一氏は早くこの點を指摘して、「日本の生んだ最も偉大なる職業的小說家」だといつてゐる。そのいつまでたつても渦潤しない藝術眼の閃めきにも、その天成的な作家としての秋聲の風格が窺はれる。

【參考】最近の小說家 生田長江○人及び藝術家としての秋聲 近松秋江(人間大正九ノ一)○現代文學諸相の概觀 片岡良一(國語と國文學昭和四ノ四)○德田秋聲と正宗白鳥 舟橋聖一(國語と國文學昭和七ノ四)○現代日本文學大年表(現代日本文學全集別卷)

【加藤】

とく〳〵の句合 とく〳〵のくあはせ

俳諧集 一冊 【著者】山口素堂 【名義】卷頭の素堂の句、「とく〳〵の水まねかば來ませ初茶の湯」から附けたのであらう。「とく〳〵」と落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住ひかな」といふ和歌の言葉を取つたのである。【刊行】正德元年 【諸本】享保十二丁未春霄堂百里の跋のあるものがある。素堂鬼貫全集(俳諧文庫)所收。【內容】本書は素堂七十に近き秋、瘧を煩ひ、漸くにして癒えた病間に、昔言ひ捨てた發句を左右に分ち、西行の「御裳濯川歌合」に倣つて三十六番の句合とし、今の世に俊成卿と頼む人もないからと云ふので自分が判者となり、優劣を定めたものである。句は多くは三十歲前後の時の作である。有名な「目には青葉山時鳥初鰹」の句も、その中に入つてゐる。又「御裳濯川歌合」には「宮川歌合」が附いてゐるといふ所から、狂漢十番の句合を添へてゐる。素堂の序・跋がある。【價値】素堂の時流に超然たる態度や、彼が晚年の句作上に於ける意見風尙なども窺はれて參考になる。併しそれだけ又彼が俳壇の進步に追隨し得ない傾きを見せるものでもある。

【萩原】

德富蘇峰 とくとみそほう

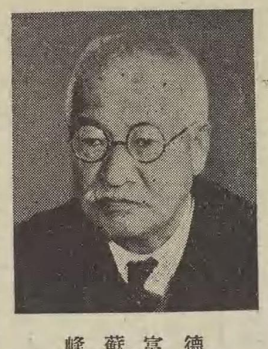
新聞記者・評論家 【本名】猪一郎 【家系】肥後の豪士であり大庄屋であつた。父一敬は橫井小楠の門人で且つ義兄に當る。一敬に常子・光子・晉羽・初子。猪一郎・友喜・健次郎(蘆花)の四女三男があつた。母久子は教育家竹崎順子の妹、橫井小楠の妻つせ子、東京女子學院長たりし矢島楫子等の姉。【閱歷】文久三年正月二十五日、熊本縣上益城郡津守村字杉堂の矢島家(母の里方)で生れた。幼年時代を水俣に送つたが、明治三年、父が一家を擧げて熊本に移るに及び、校も遂に閉鎖された。依つて直ちに上京して英語學校(一高の前身)に入學。その冬、獨斷で新島襄の主宰する京都の同志社に奔つた。そこで英語その他を學び、傍ら東京日日新聞その他當時の新聞を讀み、論說を筆記したりして研究することを樂しみとした。以上、幼少年時代に受けた教育について、自ら「同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を體得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所あり、他は新島先生に負ふ所がある」と述べてゐる。かくして彼は普通科を卒業したが、「クリスト教辯說論」を讀んで同教に對する疑ひを抱き、同志社を去つて上京した。時に明治十三年五月。東京では諸名士を訪問して半年を送つた末、鄕里大江村に歸り、明治十四年の半ば頃、東肥新報の編輯を助け、マコオレエのエッセ

年六月、「第十九世紀日本の青年及其教育」と題する單行本を書いたが、それは後に「新日本の青年」(別項)と改題して、彼の出世作の一つともなつた雄篇である。時に彼は、右の論文を三百部印刷して先輩知己に頒つたが、田口卯吉の認むる所となり、當時有力だつた「東京經濟雜誌」に轉載された。のみならず、同鄕の先輩、井上毅もその價値を認め、これを推奬した。蘇峰はこれより著述を以て世に起たうと決意し、「將來の日本」(別項)と題する長論文を纏めて、田口卯吉に示し、その推奬を得て經濟雜誌社から出版した。これが非常の好評で、蘇峰の文名は忽ち天下に知られた。明治十九年の暮、一家を擧げて上京したが、爾來湯淺次郎等と計つて、雜誌「國民之友」(別項)を發行するに決し、同二十年二月十五日、第一

の讀者を得てこれ又成功した。爾來、蘇峰は平民主義を標榜して、所謂藩閥政府と戰ひ、且つ常に新思想・新文藝の味方として頗る盡すところがあつた。明治二十七年、日淸戰爭起るや、彼は率先して從軍記者を諸方に派した。當時、國木田獨步が千代田艦に搭乘して、弟收二に寄せた「愛弟通信」と、久保田米僊の繪畫通信とは、國民新聞を飾つた。後、彼も亦大本營が廣島に移つた際、同地に赴き、異色ある通信を以て紙上を賑はした。次いで、旅順・營口・海城・蓋平等を視察した。歸京後、戰後經營のことに意を注ぎ、親しく歐洲視察の途に上つた。歸來、父一敬と親善の間柄であつた松方正義に獻策するところがあり、その關係から明治二十九年九月、松隈內閣成るや、內務省參事官となつた。ところが、世上これを以て、彼が在來攻擊を續け來つた藩閥

てゐる。素堂の序・跋がある。【價値】素堂の時流に超然たる態度や、彼が晩年の句作上に於ける意見風尚なども窺はれて參考になる。併しそれだけ又彼が俳壇の進歩に追隨し得ない傾きを見せるものでもある。〔萩原〕

徳富蘇峰（とくとみそほう）【本名】猪一郎【家系】肥後の豪士であり大庄屋であつた。父一敬は横井小楠の門人で且つ義兄に當る。一敬に當子・光子・晉羽・初子・猪一郎・友喜・健次郎（蘆花）の四女三男があつた。母久子は教育家竹崎順子の妹、横井小楠の妻つせ子、東京女子學院長たりし矢島楫子等の姉。【閲歴】文久三年正月二十五日、熊本縣上益城郡津守村字杉堂の矢島家（母の里方）で生れた。幼年時代を水俣に送つたが、明治三年、父が一家を擧げて熊本に移るに及び、



徳富蘇峰

爾來熊本の東郊大江村に居住した。その世に知られる前に、大江逸又は大江逸郎と稱したのは、そのためである。當時彼は元田塾に入り、次いで竹崎茶堂の塾に移り、更に兼坂止水の塾に轉じ、主として漢學を修めた。同六年（十一歳）父母の命によつて、熊本洋學校に入り、アメリカ風の教育を受け、英語を學んだ。同窓には浮田和民・小崎弘道等があつた。教師中、異彩を放つたのは、クリスト教の篤信者ゼンスで、彼から宗教上の感化を相應に受けた。當時熊本には、熱烈極端なる保守黨（神風連）があつて、クリスト教に反對したので、同九年八月洋學校も遂に閉鎖された。依つて直ちに上京して英語學校（一高の前身）に入學。その冬、獨斷で新島襄の主宰する京都の同志社に奔つた。そこで英語その他を學び、傍ら東京日日新聞その他當時の新聞を讀み、論説を筆記したりして研究することを樂しみとした。以上、幼少年時代に受けた教育について、自ら「同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を體得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所あり、他は新島先生に負ふ所がある」と述べてゐる。かくして彼は普通科を卒業したが、「クリスト教辯説論」を讀んで同教に對する疑ひを抱き、同志社を去つて上京した。時に明治十三年五月。東京では諸名士を訪問して半年を送つた末、鄉里大江村に歸り、明治十四年の半ば頃、東肥新報の編輯を助け、マコオレエのエッセイを譯し、或はクロンウエルの傳記を書いて同紙上に載せた。當時彼は教育に興味を持つたので、明治十五年三月、大江義塾を創立し、現代に必要な學問・知識を塾生に授けた。蘇峰の學力は、主としてこの間にその根柢を築いたのである。且つ彼は別に文章を研修し、共立學舍の行德文卿といふ詩文に長じた人に斧正を請ひ、得るところが少くなかつた。彼は大江義塾時代に一度上京して、田口卯吉・中江篤介等と交りを結び、或は土佐に赴いて板垣退助の教を請うた。その他、種々讀書に力め、同志社教授ラアネッドが勸めた雜誌「ネエション」「ライブラリイ・マガジン」などを米國から取り寄せて繙き、識見を養つた。「明治二十三年後の政治家の資格を論ず」及び「自由・道德及び儒教主義」などを草したのはこの頃で、何れも明治十七年中に成つた。この年倉園又三の女つる子と結婚した。次いで同十八年六月、「第十九世紀日本の青年及其教育」と題する單行本を書いたが、それは後に「新日本の青年」（別項）と改題して、彼の出世作の一つともなつた雄篇である。時に彼は、右の論文を三百部印刷して先輩知己に頒つたが、田口卯吉の認むる所となり、當時有力だつた「東京經濟雜誌」に轉載された。のみならず、同鄉の先輩、井上毅もその價値を認め、これを推奨した。蘇峰はこれより著述を以て世に起たうと決意し、「將來の日本」（別項）と題する長論文を纏めて、田口卯吉に示し、その推奨を得て經濟雜誌社から出版した。これが非常の好評で、蘇峰の文名は忽ち天下に知られた。明治十九年の暮、一家を擧げて上京したが、爾來湯淺次郎等と計つて、雜誌「國民之友」（別項）を發行するに決し、同二十年二月十五日、第一號を創刊した。當時、雜誌の發行部數は、大抵千部内外であつたが、同誌は一萬部以上の賣行を見た。次いで曩に刊行した「十九世紀日本の青年及其教育」を「新日本の青年」と改題して、神田集成社から出版。これ又非常の賣行を見た。彼は平民的急進主義の立場にをり、清新な文體を以て、天下の青年に呼びかけ、豫期以上に時代の風潮に投じたのであつた。かくして彼の第二計畫——國民新聞創刊のことも、左程の困難もなく、實現することが出來た。その呱々の聲を揚げたのは、明治二十三年二月一日である。當時記者として名を列ねた者には、竹越三叉・矢崎嵯峨の舍・宮崎湖處子・高橋五郎・人見一太郎・上野岩太郎・福田和五郎・内田不知庵・德富蘆花等があり、客員として森田思軒・元良勇次郎が加はつた。繪畫主任は久保田米僊だつた。國民新聞は「國民之友」ほどの勢はなかつたが、なほ七千以上の購讀者を得てこれ又成功した。爾來、蘇峰は平民主義を標榜して、所謂藩閥政府と戰ひ、且つ常に新思想・新文藝の味方として頗る盡すところがあつた。明治二十七年、日清戰爭起るや、彼は率先して從軍記者を諸方に派した。當時、國木田獨歩が千代田艦に搭乘して、弟收二に寄せた「愛弟通信」と、久保田米僊の繪畫通信とは、國民新聞を飾つた。後、彼も亦大本營が廣島に移つた際、同地に赴き、異色ある通信を以て紙上を賑はした。次いで、旅順・營口・海城・蓋平等を視察した。歸京後、戰後經營のことに意を注ぎ、親しく歐洲視察の途に上つた。歸來、父一敬と親善の間柄であつた松方正義に獻策するところがあり、その關係から明治二十九年九月、松隈内閣成るや、内務省參事官となつた。ところが、世上これを以て、彼が在來攻擊を續け來つた藩閥に降伏したものと思惟し、頻りに非難の聲を浴びせた。それは彼に取つて少からぬ打擊であり、一時失意の境地に陷つた。彼の第一の牙城とも云ふべき「國民之友」は次第に讀者を減じ、明治三十一年八月、廢刊するの餘儀なきに至つた。爾後、彼は主力を國民新聞に注ぎ、國家主義の思想に立脚して、世論の指導に當つた。次いで彼は時の有力なる政治家桂太郎と接近し、實際上の經綸について、考慮し研究した所を紙上に披瀝し、次第に頽勢を盛り返した。殊に日露戰爭前後、新人材を網羅して著しい發展を爲し、彼の「東京だより」は山路愛山の「書齋獨語」と相俟つて、紙上の重要な讀物となつた。かうして國民新聞は、彼が昭和四年、その社を退くに至るまで、彼の統轄の下に持續し來つたのである。この間彼は明治三十九年八月、支那に遊んで「七十八

の序文中に、彼が人生派的意向を漏らしてゐることは、すでに彼の研究家によつて指摘されてゐる。「少華族」の序文中に於て、作者はすでに「眞摯なる人生の描寫」を云々してゐるのであるが、これこそかの自然派たち、藤村や花袋の熱心に追ひ求めてゐた同じ目標に外ならなかつた。而してそれは必ずしも彼が花袋等のそれに迎合したとのみは考へられない。その素質的なものと、その素養とが、自らこの展開へと導いたと考へ得る理由がある。この間の消息を最も雄辯に語るものは、短篇集「秋聲集」中に收められた諸作である。かくて彼の秋聲であつた。「新世帶」「黴」「爛」「あらくれ」の諸作は、ただに秋聲の傑作であつたばかりでなく、自然主義的作品の最高水準を示したものである。自然主義文學の完成者が、紅葉門下として發足したこの作家であつたといふことは、甚だ興味ある事實であるが、その最も大きな理由は、飽くまで冷徹な客觀的作風に由來するものであらう。どこまでも突放し切るその態度は、明治・大正の文壇を通じても全く比類のない特異的な存在であつて、この素質こそ彼をして自然主義文學を完成せしめたのである。併し彼は必ずしも眞底からの自然

「あらくれ」とは所詮は同系統の作であるが、後者は一層完成された姿を示してゐる。これには「足迹」や「黴」に見られるやうな人生派的否定的な暗さもなく、瑣末的な煩雜さも拭ひ去られて、一脈の明るさと精力的なものが感ぜられ、その後の作風の一つの傾向を示してゐる。一方彼は「新世帶」と殆ど同時に「出産」の如き傑れた短篇を書いてゐる。これは「秋聲集」中の諸作の完成した一つの姿である。又「出産」は「黴」と共に最も完成した私小説としても記憶さるべき作である。大正期に入つてからは、自然主義そのものが行きづまり、彼

徳元年【諸本】享保十二丁未春雷堂百里の跋のあるものがある。素堂鬼貫全集（俳諧文庫）所收。【内容】本書は素堂七十に近き秋、瘧を煩ひ、漸くにして癒えた病間に、昔言ひ捨てた發句を左右に分ち、西行の「御裳濯川歌合」に倣つて三十六番の句合とし、今の世に俊成卿と頼む人もないからと云ふので自分が判者となり、優劣を定めたものである。句は多くは三十歳前後の時の作である。有名な「目には青葉山時鳥初鰹」の句も、その中に入つてゐる。又「御裳濯川歌合」には「宮川歌合」が附いてゐるといふ所から、狂漢十番の句合を添へ

日遊記」を草し、次いで大正六年秋には、支那滿洲に再遊して「支那漫遊記」を公刊し、また明治四十三・四年及び大正二年より四年に亙つて、數回朝鮮を訪ひ、その見聞するところを錄して「兩京去留誌」を書いた。昭和四年一月國民新聞を去り、翌月臺灣全土を巡遊したが、これには「臺灣遊記」の著がある。同年三月、大阪毎日新聞・東京日日新聞の社賓となり、「日々だより」を草し、「近世日本國民史」の續篇を連載しつつ今日に至つた。【著書】彼の著書は、量に於ても頗る多く、正に等身に近い。その代表的著作「近世日本國民史」(別項)の外、「靜思餘錄」「吉田松陰」「將來の日本」「新日本之青年」(以上各別項)「天然と人」「文學斷片」「人物管見」「近時政局史論」「時務一家言」「日本帝國の一轉機」「支那漫遊記」等は、その代表作と云ふべきである。殊に國民叢書三十餘册中には見るべきものが多く、蘇峰の文學的生涯の一半以上は、それ等の文篇に結晶せられてゐる。

【批評】蘇峰は見やうによつては、學者でもあり、教育家・政治家でもあるが、その本領はジャーナリストたる所と、その文章家たる所にある。彼は天成の新聞雜誌記者である。殊に人物批評家として最もすぐれた天分を有する。勿論彼が今日の大成を見たのは、その健康と勤勉と精力とに負ふ點が最も多い。彼は能く書き、能く旅行すると共に又能く讀む。その讀書は頗る多方面に亙り、今日と雖も、史書のみに限られてゐない。博く讀んで、その得た所を現代に活用するところに彼の長技がある。彼は廣い趣味を持ち、政治のみならず、文學・美術・教育・宗教等その何れにも相當の見解を有する。彼が比較的に疎遠なのは經濟の方面だけだと云つてよい。彼は最初、思想上に於て、平民的急進主義に立ち、多分の歐化趣味を帶びたが、決して日本の立場を忘れなかつた。否、初めから彼は國家主義的な傾向を多く持つた。日清戰後に及び、彼は國家主義を唱へたが、それは必ずしも思想的豹變ではない。矢張り國家主義の立場から世界の形勢を見て、國家主義鼓吹の必要を切實に感じたるによる。今日の彼は皇室中心主義者で、日本主義的傾向を多分に帶びてゐるが、これ又彼の立場からすると當然の歸結である。彼が「近世日本國民史」を草した意も、一つは彼の愛國的至情に基づくことで、必ずしも彼が學者たるためではない。それ故に彼はジャーナリストの立場から國史を書き、そこに彼の個性を示さうとしてゐる。彼の思想は必ずしも深遠でなく、常識的範圍を出でない。晩年には、やゝ保守的になり、思想の柔靱性を失つた形がある。彼の文章は、暢達自在にして千言たちどころに成るの概があり、殊に前半期の文章は、當時としては頗る清新なものであつた。而して彼が日本の文章道に與へた革命は、何人も及び得ないほど偉大な足跡を止めてゐる。

【參考】德富蘇峰集(年譜)田中幸二郎 〔高須〕

德富蘆花 とくとみろくわ

小說家 【本名】健次郎 【別號】白水生・寒香生・秋山生・驚倒生・秋水生・敬亭生・楓葉・AB子 【生歿】明治元年十月二十五日、熊本縣葦北郡水俣に生れ、昭和二年九月十八日、群馬縣伊香保町千明仁泉亭に歿す。享年六十 【閱歷】十一歳の時兄猪一郎(蘇峰)に伴はれて京都同志社に入學したが十三歳で半途退學し、十八歳熊本にて受洗、熱心なるクリスト教徒となり、横井時雄氏に隨つて、愛媛縣今治に於て傳道に努めた。明治十九年同志社に再入學、翌二十年失戀の結果熊本に歸り、熊本英學校に教鞭を執つたが、二十二年春上京して兄蘇峰の經營せる民友社に入り、國民新聞の飜譯係として外國電報の飜譯、海外事情の紹介等の傍ら、飜案小說、短篇小說の筆を執り、頗る世の好評を博し、蘆花生の名漸く世に知らるゝに至つた。その處女出版は英國の政治家を評傳せる「如溫武雷土(ジョン・ブライト)」(二十二年)「理査土格武電(リチャード・コブデン)」(二十三年)の二篇である。二十七年五月、原田あい子と結婚、その頃まだ月給十一圓の貧書生に過ぎなかつた。三十三年から四年にかけて、出世作たる「不如歸」「自然と人生」「思出の記」が出版され、一躍讀書界の寵兒となり、いはゆる洛陽の紙價を高からしめた。民友社在籍十三年、「自然と人生」の姉妹篇ともいふべき「青山白雲」「青蘆集」、その他多くの著述があつたが、寡言にして而も不羈、裡に火山の熱を藏し、編輯局内に跼蹐して家兄の庇護に重壓を感じつつあつた彼は、三十五年十二月、斷然民友社を退き、翌三十六年二月、小說「黑潮」を自費出版した。かくて生活の一轉機が劃され、三十九年四月には單身エルサレムに赴き、更にヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねた。同年十二月に出版された「順禮紀行」はその旅行記である。越えて四十年二月、東京の郊外千歳村粕谷に隱棲し、專ら土に親しみ、晴耕雨讀、ひたすら思索に耽つた。この生活と思想の轉機から、蘆花のペンネームを棄て、爾來專らその實名を署するに至つた。大正二年に出版された「みみずのたはこと」はこの土の生活の記錄で、第二の「自然と人生」ともいふべきものである。大正二年、憲政擁護運動のために兄蘇峰の經營せる國民新聞社が燒打の厄に遭ふや、義憤禁ぜず、自ら交を絕ちし兄を訪ひ、社運の更生を助くべく、小說「十年」を國民新聞に掲載し始めたが、自己の創作態度意に滿たずとして、僅か十一回にして稿を絕つた。大正三年五月二十六日、父一敬の死に會つたが、彼はその死床にも葬儀にも參せず、その隱棲の門を閉ぢて三年間父の喪に服した。大正八年一月、夫妻相携へて世界周遊の途に上り、翌九年三月歸朝、その紀行が大正十年出版の「日本から日本へ」である。粕谷の村莊に隱棲後、その深き思索の結果、或は憂愁禁ぜずして、夫妻手を携へて、死處を尋ねて西日本を旅し(紀行「死の蔭に」)、或は全篇、生の歡喜を謳へる「新春」の著述となり、思索に思索を重ねて、最後に到達したのは夫婦愛の僞らざる記錄、丸裸にて銀座街頭を行くの覺悟を以て、赤裸々に半生を懺悔すべく、アダムとイブの地上の復活を信じて、妻愛子との共著の下に、長篇「富士」の筆を起したのであつたが、大正十五年十二月千葉縣勝浦の轉地先に於て腎臟を患ひ、越えて昭和二年一月粕谷の自宅に歸り、病勢一進一退のうちに、思出多き伊香保の地を戀ひ、同年七月重態の身を自動車で運んだが、九月十八日「富士」三卷を世に殘して永眠した。遺骸は二十三日粕谷邸前の雜木林に葬られた。遺稿「富士」第四卷は後に夫人の手によつて完成された。その將に死せんとするや、

德富蘆花

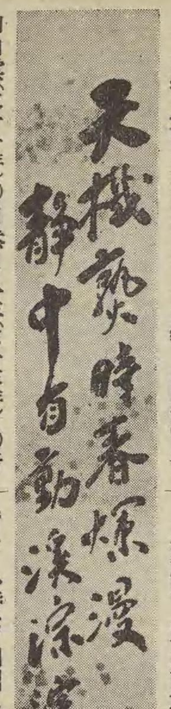
頻りに家兄を戀ひ、骨肉固く手を握つて逝つたのは、劇的至情の場面として當時世に喧傳された。

【著作】蘆花全集二十卷(新潮社版)がある。彼の著作は史傳・前期小說・隨筆・紀行・後期小說の五に分類される。またその執筆の時期によりて、蘆花時代(前期)、健次郎時代(後期)に大別し得る。〔史傳〕如溫武雷土(明治二十二年)○理査土格武電(二十三年)○グラッドストン傳(二十五年)○トルストイ(三十年)○世界古今名婦鑑(三十一年)○外交奇譚(三十一年)○探偵異聞(三十三年)○ゴルドン將軍傳(三十四年)○竹崎順子(別項)(大正十二年)等。〔前期小說〕不如歸(三十三年)○思出の記(三十四年)○黑潮(三十六年)○寄生木(各別項)(四十二年)等。〔隨筆〕青くないが、併し思想の傾向は、寧ろ互に背馳する所が多い。小說家としては一言にして自傳作家といふことが出來る。「不如歸」「黑潮」「寄生木」の三篇を除けば、彼の創作は悉く皆自己のヒューマン・ドキューメントである。ただ初期の「思出の記」は自傳としては多くの作意を加へ、後年頗る己れの意に滿たなかつたが、而も他の初期作品を悉く抹殺することを希つたに拘はらず、「思出の記」のみには多分の愛惜を感じ、後年の赤裸々の告白に至る道程として、その存在を肯定した。「黑い眼と茶色の目」は、同志社時代の初戀の蔽ふ所なき記錄であり、「富士」に至つては悉く變名を用ひたけれども、純乎たる自傳である。その赤裸々なる暴露は、單に蘆花夫妻の生活そのもののみでなければいけぬ」といへるも、這間の消息を窺ふに足る。彼が傳記作家として多くの業績を殘したのも、この眞と愛の追求の一側面と見ることが出來る。彼は中ごろ自ら社會主義者と稱した。併しそれはクリスト教的人道主義の立場からであつた。彼は虛飾衒耀を極端に忌み嫌つたことは勿論であるが、平生沈默そのものの如き彼が、一たび演壇に立つや、雄辯人を驚かすものがあつた。而もそれは一生を通じて數回の記錄に過ぎなかつたが、要するに全幅の眞我の發露が人を捉ふるのであつた。彼が漸く名を成したのは、恰も硯友社派の爛熟期であり、その一家を成せるは自然主義の全盛期であつたが、彼は飽くまで文壇のすべての潮流に超然としてその孤壘を守つた。彼が他の同時代の作家と歸趨を異にした時用の文に依れば、九淵龍睬・南叟龍朔が、寶德三年に明に入るに際し、正宗の詩文を携へて、質菴等に示し、激賞を得たものである。二人東歸の後、正宗の詩文が、五山叢林の間に喧傳せられたので、この書が推重されたのである。【解說】首(はじめ)に明の質菴の文がある。九淵龍睬・南叟龍朔が正宗の詩文を示して、一文を求めたることを記し、後に七言絕句一首を書し、末に「大明景泰五年歲次甲戌仲春既望日大興隆前堂金臺質菴寄奉」とあり、大興隆は大興隆寺である。次に衞時用の文がある。九淵龍睬が、茶話の次に、正宗の詩文を示したことを記し、後に七言律詩一首を書し、末に「四明西山小隱衞時用謹奉」とある。衞時用は金陵の人で、學問文章を以て聞えたと云ふ。次に九淵龍睬の文があり、國信使に從つて明

頻りに家兄を戀ひ、骨肉固く手を握つて逝つたのは、劇的至情の場面として當時世に喧傳された。

【著作】蘆花全集二十卷（新潮社版）がある。彼の著作は史傳・前期小說・隨筆・紀行・後期小說の五に分類される。またその執筆の時期により、蘆花時代（前期）、健次郎時代（後期）に大別し得る。【史傳】如溫武雷士（明治二十二年）○理査士格武電（二十三年）○グラッドストン傳（二十五年）○トルストイ（三十年）○世界古今名婦鑑（三十一年）○外交奇譚（三十一年）○探偵異聞（三十三年）○ゴルドン將軍傳（三十四年）○竹崎順子（別項）（大正十二年）等。【前期小說】不如歸（三十三年）○思出の記（三十四年）○黑潮（三十六年）○寄生木（各別項）（四十二年）等。【隨筆】青山白雲（三十一年）○自然と人生（三十三年）○青蘆集（三十五年）○みみずのたはこと（大正二年）○新春（各別項）（同七年）等。【紀行】順禮紀行（三十九年）○死の蔭に（別項）（大正六年）○日本から日本へ（別項）（同十年）等。【後期小說】黑い眼と茶色の目（別項）（大正三年）○富士（別項）。その外、歿後全集を編むに方りて輯錄せられたものに「偶感偶想」があり、「書翰集」がある。【業績・人物】明治大正の文壇における德富蘆花の地位は全くユニークのものである。彼には師もなく弟子もなく、系統もなければ集團もない。ただ獨自の力で築かれた孤立せる一つの高峰である。その文章も、その思想も、前行もしくは同時代の小說家の何人とも型を同じくしない。環境としての兄蘇峰の影響は少くないが、併し思想の傾向は、寧ろ互に背馳する所が多い。小說家としては一言にして自傳作家といふことが出來る。「不如歸」「黑潮」「寄生木」の三篇を除けば、彼の創作は悉く皆自己のヒューマン・ドキュメントである。ただ初期の「思出の記」は自傳としては多くの作意を加へ、後年頗る己れの意に滿たなかつたが、而も他の初期作品を悉く抹殺することを希つたに拘はらず、「思出の記」のみには多分の愛惜を感じ、後年の赤裸々の告白に至る道程として、その存在を肯定した。「黑い眼と茶色の目」は、同志社時代の初戀の蔽ふ所なき記錄であり、「富士」に至つては悉く變名を用ひたけれども、純乎たる自傳である。その赤裸々なる暴露は、單に蘆花夫妻の生活そのもののみでなく、時代・周圍・親類緣者、悉く有るがまゝにその筆端に踊ることを免れない。多情多感、愛憎の最も烈しい性格の持主であつた彼の一生を通じての努力は、大なる眞と大なる愛の追求であつた。自然詩人としての彼、田園詩人としての彼、トルストイに最も深く傾倒した彼、教會を離れてクリストに熱信を捧げた彼、早く客觀小說の筆を拋つて、自己内省、自己告白に光明を見出したのもそれがためである。大正二年小說「十年」を中止するにあたつて、「實は最初着筆の際は、外から内へと卽かず離れず書いてのけようと思つたのでした。愕然吾に復つて己が態度の不眞面目に氣がつくと、最早いやになつた。此れではいけぬ。全然態度を一變し、改めて内から外へ書くのでなければいけぬ」といへるも、這間の消息を窺ふに足る。彼が傳記作家として多くの業績を殘したのも、この眞と愛の追求の一側面と見ることが出來る。彼は中ごろ自ら社會主義者と稱した。併しそれはクリスト教的人道主義の立場からであつた。彼は虛飾衒耀を極端に忌み嫌つたことは勿論であるが、平生沈默そのものの如き彼が、一たび演壇に立つや、雄辯人を驚かすものがあつた。而もそれは一生を通じて數回の記錄に過ぎなかつたが、要するに全幅の眞我の發露が人を捉ふるのであつた。彼が漸く名を成したのは、恰も硯友社派の爛熟期であり、その一家を成せるは自然主義の全盛期であつたが、彼は飽くまで文壇のすべての潮流に超然としてその孤壘を守つた。彼が他の同時代の作家と歸趨を異にした現はれの一つは、常に時代の流れに着眼し、社會的の觀察を怠らなかつたことである。彼の長篇には、例外なしに時代の動きが描かれ、一篇の人間史が同時に社會史でもあつた。彼が博愛平等のクリスト教徒であると共に、醇乎たる皇室中心の日本主義者であつたことも看過されてはならぬ。絶筆「富士」四卷は彼の最も心血を注いだ作品であり、人間蘆花の生命をそのまゝ傳へたものであると共に、古くはマーカス・オーレリウスの「瞑想錄」、近くはルーソー、トルストイの「懺悔錄」と共に、告白文學の最高峰に立つものとして、後世に仰がるゝであらう。

〔石川（六）〕



蹟筆花蘆富德

禿尾長柄帚（とくびちやうへいさう）　詩文集　一卷

【著者】正宗龍統　【由來】龍統の著書三部ありと云ふ。「禿尾長柄帚」「禿尾鐵苕帚」及び「蒲牙」である。今、「禿尾長柄帚」一卷のみが寫傳されてゐる。この書の首に揭ぐる明の質菴・衞時用の文に依れば、九淵龍墀・南叟龍朔が、寶德三年に明に入るに際し、正宗の詩文を携へて、質菴等に示し、激賞を得たものである。二人東歸の後、正宗の詩文が、五山叢林の間に喧傳せられたので、この書が推重されたのである。【解說】首（はじめ）に明の質菴の文がある。九淵龍墀・南叟龍朔が正宗の詩文を示して、一文を求めたることを記し、後に七言絕句一首を書し、末に「大明景泰五年歲次甲戌仲春既望日大興隆前堂金臺質菴寄奉」とあり、大興隆は大興隆寺である。次に衞時用の文がある。九淵龍墀が、茶話の次に、正宗の詩文を示したことを記し、後に七言律詩一首を書し、末に「四明西山小隱衞時用謹奉」とある。衞時用は金陵の人で、學問文章を以て聞えたと云ふ。次に九淵龍墀の文があり、國信使に從つて明に入るに方り、正宗の詩文を携へ、南叟龍朔と共に質菴等を訪問して、一閲を求めたことを記してゐる。この一文は長祿三年七月、建仁寺知足院に於て記したものである。次に總目次があり、次に文を收めてある。文は、記・序・跋・說・贊・銘・祭文があるが、編次の體はない。百二十篇ありて、前南禪瑞巖龍惺行道記、慧鑑明照禪希世靈彥道行記、一菴天祥一麟行狀、故金吾兼野州太守平公墳記、寄題江戶城靜勝軒詩序等は最も長文である。次に古詩十五篇、聯句二篇を收めてゐる。

【鷲尾】

禿筆餘興（とくひつよきやう）　隨筆　三卷　【著者】松平定信　【諸本】隨筆文學選集第二卷所收。

【解說】四時の變移につけ、花晨月夕にふれて、著者の心に浮んだことを雅文體で述べたもので、章段の終りに自詠の和歌を置いてある。最末に「夢道の記」一篇がある。同じ著者の「花月草紙」（別項）に似た書で、それよりは

ジャーナリストたる所と、その文章家たる所にある。彼は天成の新聞雜誌記者である。殊に人物批評家として最もすぐれた天分を有する。勿論彼が今日の大成を見たのは、その健康と勤勉と精力とに負ふ點が最も多い。彼は能く書き、能く旅行すると共に又能く讀む。その讀書は頗る多方面に亙り、今日と雖も、史書のみに限られてゐない。博く讀んで、その得た所を現代に活用するところに彼の長技がある。彼は廣い趣味を持ち、政治のみならず、文學・美術・教育・宗教等その何れにも相當の見解を有する。彼が比較的に疎遠なのは經

革命は、何人も及び得ないほど偉大な足跡を止めてゐる。

【參考】德富蘇峰集（年譜）田中幸二郎　【高須】

德富蘆花（とくとみろくわ）　小說家　【本名】健次郎　【別號】白水生・寒香生・秋山生・驚倒生・秋水生・敬亭生・楓葉・AB子　【生歿】明治元年十月二十五日、熊本縣葦北郡水俣に生れ、昭和二年九月十八日、群馬縣伊香保町千明仁泉亭に歿す。享年六十　【閱歷】十一歲の時兄猪一郎（蘇峰）に伴はれて京都同志社に入學したが十三歲で半途退學し、十八歲熊本にて受洗、熱心なるクリスト教徒となり、橫井時雄氏に

妹篇ともいふべき「青山白雲」「青蘆集」、その他多くの著述があつたが、寡言にして而も不羈、裡に火山の熱を藏し、編輯局内に跼蹐して家兄の庇護に重壓を感じつつあつた彼は、三十五年十二月、斷然民友社を退き、翌三十六年二月、小說「黑潮」を自費出版した。かくて生活の一轉機が劃され、三十九年四月には單身エルサレムに赴き、更にヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねた。同年十二月に出版された「順禮紀行」はその旅行記である。越えて四十年二月、東京の郊外千歲村粕谷に隱棲し、專ら土に親しみ、晴耕雨讀、ひたすら思

聊か不熟である。卷一の尾に、安永四年七月中旬とあるのは記述の年代であらう。序跋はない。〔和田〕

毒饅頭（どくまんぢゆう）「清正誠忠錄」を見よ。

毒藥を飲む女（どくやくをのむをんな）「放浪」を見よ。

獨樂新話（どくらくしんわ）　噺本　一册　【作者】虎溪山人　【刊行】天明八年　【諸本】落語全集（續帝國文庫）所收　【解說】二十八話より成り、挿繪はない。落語本としては小さなものである。殊に多くは前代のものを入れて、獨創的な色彩は極めて少い。「豆畠」「木刀賣」「井戸掘」「まじなひ」「十種香」の如きは、既に先人の發表したものである。併し古いものでも見違へる位形が整ひ、表現にも技巧の洗練が加はつてゐる。「豆畠」の如きも、「醒睡笑」（別項）に於ては、素樸な百姓の話であつたが、本書に於ては大名の話となり、用人を態々舟で誘ひ出すといふ複雜な趣向となつてゐる。それだけ小噺を滑稽化して效果を擧げてゐる。落語本としては、先行の書に比して體裁が具備してゐる。作者の趣味からか駄洒落を得意としてゐるのが聊か不快を抱かせる。〔小柴〕

讀老庵日札（どくらうあんにつさつ）　隨筆　一卷　寫　【著者】岡田老樗軒　【解說】書肆の好事家で聞えた老樗軒の漫筆で、江戸時代の和漢學者・俳人・狂歌師・戲作者・書畫家等、凡て文藝に名ある人々の小傳・墓所を擧げ、まゝ書畫等の見聞談を記してある。三十六歌仙以下八十二則を收めてゐる。案ずるに同じ人の名著「墓所一覽」と關係の深い著作と言ふべきか。文政七年大草公明の識語がある。

【著者小傳】老樗軒。名は平次、通稱伊勢屋三右衞門、讀老庵と號し、書肆を業とした。文政七年（二四八四）歿。享年四十六。「江戸名家墓所一覽」「藝苑遺香集」「掃墓餘筆」の著作がある。〔和田〕

德和歌後萬載集（とくわかごまんざいしふ）　狂歌集　二册　【編者】四方赤良　【刊行】天明五年　【解說】天明三年刊の「萬載狂歌集」（別項）の姉妹篇で、山手白人の序、朱樂菅江の跋がある。歌數凡そ七百首、その分類また「萬載集」に同じい。菅江の跋文に、「赤良が選びを閲するに後の選びは殆どさきの選びよりもくはし」と記してゐる如く、この篇には天明以前の古狂歌を載する事少く、當時現在せる人々の作歌を網羅したもので、「萬載集」よりは天明振歌調のやゝ整うた秀吟が滿載されてゐる。〔野崎〕

兎月（とげつ）　讀本作者　【姓】手塚氏　【別號】橘生堂・北溟・北溟合浦　【閲歷】京都の人で、文化頃に多くの讀本を作つてゐるといふ以外には、傳記が知られてゐない。その讀本には馬琴の序などを附したものもあるが、平凡な構想であり、平板な筆致であつて、取り立てて言ふに足るほどのものはない。【著作】敵討朝妻舟六卷（文化三・四年刊）○奇談古志路の章十二卷（同三・五年刊）○三鼎復讐眞檀の嬾六卷（同五年刊）○小說奇談夢裡往事四卷（同五年刊）○繪本長曾我部物語六卷（同七年刊）○非緣情史夕霧傳記五卷（同八年刊）○敵討孝列傳（以下別項）○繪本胡蝶夢○甲賀三郎巖窟話○繪本鎌倉新話。〔笹野〕

杜工部集（とこうぶしふ）　詩文別集　二十卷　【著者】唐の杜甫　【傳來】彼の歿後、涯州の刺史樊晃が、その遺篇を蒐めて六十卷及び小集六卷とした（唐書藝文志）。宋に至つて王洙が中外の書九十九卷を裒め、重複を除いて、古詩三百九十九、近體一千有六を定取して十八卷、また別錄雜著二卷を合せて都合二十卷とし、嘉祐中王琪が姑蘇に刻し、元稹作の墓銘を附刻した。又別に遺文九篇を、治平中、太守裴集が集外に刊附した。又黃伯思の編輯せるものは、一千四百十七首を收めて二十卷とし、別に雜著二十九首を二卷として都合二十二卷、李伯紀の序がある。以上二本は、共に詩文合集であるが（直齋書錄解題）、詩のみの集に宋の郭知達編の「九家集註杜詩」三十六卷があり、王洙・宋祁・王安石・黃庭堅・薛夢符・杜田・鮑彪・師尹・趙彥材の九家の註を集め、最も簡要と稱せられた。その他、黃希の「黃氏補註杜詩」三十六卷、「分門集註杜工部詩」二十五卷・首一卷、「集千家註分類杜工部詩」（宋徐居仁編）、「集千家註杜工部詩集」（元高楚芳編）等がある。我が國に渡來した時代は詳かではないが、南北朝の頃既に傳はつてゐたことは、當時の緇流の記錄等に據つて知ることが出來る。足利時代に入つて漸く行はれ、釋心華はこれを抄錄した。江戸時代には、釋顯常・津坂東陽等が律詩を拔いてこれに註し、刻本も亦少くない。

【解說】各本卷數體例を異にし、一々列擧し難いが、清刻の五家評本によれば古詩―八卷、近體詩―十卷、表・賦・記・說・讃・述共一卷、策問・文・狀・表・碑誌共一卷となつてゐる。上下四千載の詩壇、幾萬の詩人の中に於て、巍然として最高峰的地位を占める者は彼杜甫である。貞觀の美政に基礎を固めた唐朝文化の極盛に達した玄宗の時代、詩運の天下と稱せられる唐代三百年間の頂點は、玄宗の開元・天寶の際から代宗の大曆の初めに至る凡そ五十餘年間に在る。而してこの所謂盛唐五十餘年の間に、詩壇に最も聲名を馳せた者は、李白と共に杜甫であつて、古來詩は杜甫に至つて集大成せられたと云はれる。元稹は云ふ、「上は風雅に薄り、下は沈宋に該り、言は蘇李を奪ひ、氣は曹劉を呑み、顏謝の孤高を掩ひ、徐庾の流麗を雜へ、盡く古今の體勢を得て、人々の獨專する所を兼ねたり」と。彼の詩は、全く經營慘澹を經て成つたもので、句法・辭法に於て、變化を極め、姿趣を盡し、抑揚縱橫、施して可ならざるものなく、平淡簡易なるものあり、綿麗精確なるものあり、奮迅馳驟するものあり、而も能く前人を掩ひ、後人をして繼ぐことなからしめた。故に元稹は、「詩人以來第一人」と云ひ、宋の楊萬里は「詩中の聖」と云ひ、羅大經は「詩中の經」となし、明の王世貞は「詩中の神」と贊したが、これ等の評は決して溢美の言ではない。彼はその一生を窮厄不遇の逆境の裡に送つたが、實はこれが彼の詩を珠玉たらしめた所以であつた。而してその出處勞佚、喜怒悲憤は、一にこれを詩に現はしたが、それを一線貫通するものは熱烈な儒教的の忠君愛國の至誠であつた。彼の詩的生涯は凡そ三期に大分することが出來る。第一は少年時代、第二は赴難時代、第三は晩年時代である。その少年時代は太平の恩光に浴して、燃えさかる青春の客氣を裹んで吳越の地に過した時代で、當時の詩には豪爽なるものが多い。安史の亂後玄宗は身を以て蜀に遁れ、長安昔日の榮華は忽ちにして壞散した。時に彼は長安の賊中に陷つて、亂離の感に堪へざるものがあり、君國の憂情を微言の間に洩した。人口に膾炙する「春望」「月夜」「哀江頭」「哀王孫」の諸作は、この時に成つたものである。肅宗の至德二年（杜甫四十六歲）國難は漸く定まり、彼は鳳翔の行在に天子に謁した。麻鞋見天子、衣袖露兩肘とは當時の光景である。喜びの極「喜達行在所三首」を賦した。同年八月、鳳翔から鄜州の妻子を省した。「徒步歸行」「行次昭陵」「彭衙行」等の諸吟と共に、彼の心血の文字「北征」の雄篇も亦實にこの時に成つたもの。彼の晩年はその周圍に多くの親友を失ひ、孤獨寂寥の境遇に在つて悲涼の生活を續け、その詩は往年の氣魄を失つたとは云へ、漸く圓熟精緻の風格を具へるに至つた。「白帝城最高樓」「秋興八首」「岳麓山道林二寺行」の如きは、その代表作である。彼は一生を通じて窮乏困頓の行程を辿つたが、彼の多感性は、終に彼をして世間との連鎖を斷たしめなかつた。故に彼の詩は自らその時勢を反映し、杜集は一に「詩史」の稱がある。杜甫と李白、全く相異つた性格と生活とを有つたこの二大詩人が、殆ど時を同じうして互に芳蘭の交を結び、千紫萬紅の盛唐詩壇に輝く雙星として錦上に花を添へたのは、寔に千古の偉觀那に於ける二大思潮を、この二人が著明に代表したものと云ひ得る。然らば二家の優劣如何。元稹か杜甫の墓誌銘を作つて、「是の時山東の人李白、亦奇文を以て稱を取る。時人之を李杜と謂ふ。余其の壯浪縱恣、拘束を擺去し、物象を摸寫す、其の樂府歌詩を觀るに、誠に亦肩を子美に差す、終始を鋪陳し、聲韻を排比し、大は或は千言、次は猶數百、辭氣豪邁にして、風調清深、屬對律切にして、凡近を脫棄する若きに至つては、則ち李なほ其の藩翰を歷ること能はず、況んや堂奧をや」と評して以來、杜、李に優るの說が多い。要するに李白は天才を縱橫に馳せて、奇想天馬空を行くの概があり、杜甫は終に地上のものであるが、その格體は變に通じてゐる。白の詩は一氣呵成に成り、甫の詩は苦心經營を經る。

卷・附一卷（清楊倫）○杜詩偶評四卷（官版）（清沈德潛）○杜詩論文五十六卷・目一卷（清吳見思）○杜律發揮三卷（釋大典）○杜律詳解三卷（津坂孝綽）。

【著者小傳】杜甫字は子美、少陵と號した。睿宗の太極元年（皇紀一三七二）襄陽に生れ、後、河南の鞏縣に遷つた。開元二十三年（二十四歲）進士の試に應じたが、及第しなかつた。安祿山の亂後累官して廣德二年（五十三歲）節度參謀・尙書工部員外郎と爲り、緋魚袋を賜はつた。代宗の大曆五年（皇紀一四三〇）荊楚の一旅寓に歿した（唐書文藝傳）。彼は博く群籍を究め、最も詩に秀で、詩聖の稱がある。元稹は、「詩人ありて以來未だ子美の如き者あらざるなり」と讃へてゐる。又殆ど時を同じうせる李白と竝稱して李杜と云ひ、或は杜牧を少杜と云ふに對して老杜とも云ふ。〔宇野・本多〕

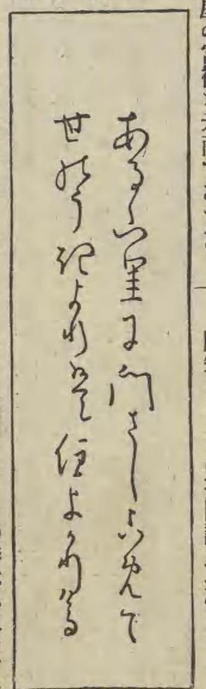
つて保美に杜國を尋ね、その不幸を慰めて吉野行脚を約し、翌元祿元年春、杜國の來り會したのを伴ひ、檜笠の裏に、共に「乾坤無住同行二人」と書し、杜國は戲れに萬菊丸（岩菊丸とも傳ふ）と稱し、吉野・高野の花に遊び、須磨・明石までへも供をした。この行脚中、芭蕉が「萬菊殿鼾の圖」を畫いて戲れたりした。かくて杜國は保美へ歸り、元祿三年に歿したが、芭蕉はその翌年の「嵯峨日記」（別項）に、「夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺む」と云ひ、「覺めて又袂をしぼる」と云つてゐるほど、杜國の死を惜しんでゐる。支考は「葛の松原」に、「杜國は心ざしのおのこなるよし、阿叟も忌日おぼえ申されし」と云つてゐる。杜國の世話になつた越人は、「鵲尾冠」に「其角・杜國は一双の作者」と云つてゐるが、蕉風の圓熟期に入ら

歸行」「行次昭陵」「彭衙行」等の諸吟と共に、彼の心血の文字「北征」の雄篇も亦實にこの時に成つたもの。彼の晩年はその周圍に多くの親友を失ひ、孤獨寂寥の境遇に在つて悲涼の生活を續け、その詩は往年の氣魄を失つたとは云へ、漸く圓熟精緻の風格を具へるに至つた。「白帝城最高樓」「秋興八首」「岳麓山道林二寺行」の如きは、その代表作である。彼は一生を通じて窮乏困頓の行程を辿つたが、彼の多感性は、終に彼をして世間との連鎖を斷たしめなかつた。故に彼の詩は自らその時勢を反映し、杜集は一に「詩史」の稱がある。杜甫と李白、全く相異つた性格と生活とを有つたこの二大詩人が、殆ど時を同じうして互に芳蘭の交を結び、千紫萬紅の盛唐詩壇に輝く雙星として錦上に花を添へたのは、寔に千古の偉觀であつた。李白は生歿、共にやゝ杜甫に先んじ、兩者が交を結んだのは、天寶三年（李白四十四歳、杜甫三十三歳）、李白が翰林院を放たれた後のことで、後年杜甫は追憶の情に禁へず、「昔遊」「遣懷」の二詩を賦した。その他杜集を繙けば、二人の濃かであつた交情を想はせるものが少くない。又李白の集を見るに、杜甫に關したものが二首ある。「沙邱城下寄杜甫」及び「魯郡東石門送杜二甫」がこれである。李白の思想は出世間的、理想的、超俗的であり、杜甫に至つては世間的、實際的である。彼は道骨の人であり、これには儒風がある。彼は隱逸放浪を喜び、これは悲憤慷慨する。彼は氣の人であり、これは情の人である。彼は仙であり、これは人である。同じく開元・天寶の際に生を享けて、同じくその變に遭ひながら、一は風月烟霞を詠じたものが多く、一は人事を詠じたものが多い。而もこれは、やがて支那に於ける二大思潮を、この二人が著明に代表したものと云ひ得る。然らば二家の優劣如何。元稹が杜甫の墓誌銘を作つて、「是の時山東の人李白、亦奇文を以て稱を取る。時人之を李杜と謂ふ。余其の壯浪縱恣、拘束を擺去し、物象を摸寫す、其の樂府歌詩を觀るに、誠に亦肩を子美に差す、終始を鋪陳し、聲韻を排比し、大は或は千言、次は猶數百、辭氣豪邁にして、風調清深、屬對律切にして、凡近を脱棄する若きに至つては、則ち李なほ其の藩翰を歷ること能はず、況んや堂奥をや」と評して以來、杜、李に優るの說が多い。要するに李白は天才を縱横に馳せて、奇想天馬空を行くの概があり、杜甫は終に地上のものであるが、その格體は變に通じてゐる。白の詩は一氣呵成に成り、甫の詩は苦心經營を經る。彼は縹渺空靈の趣を恣にし、これは沈鬱頓挫の致を極め、李は仙の如く、杜は聖に似、相竝んで支那詩界の偉觀たるもので、その間遽かに優劣を附することは不可能である。

【註釋書】九家集注杜詩三十六卷宋郭知達編○集千家注分類杜工部詩二十五卷・首二卷宋徐居仁編・黃鶴補注○杜工部草堂詩箋四十卷・詩話二卷・年譜一卷・補遺十卷・外集一卷宋魯訔・蔡夢弼編○集千家注杜工部詩集二十卷元高楚芳編・明許自昌校（又明黃陞校）○集千家注批點杜工部集二十卷元劉會孟評○刻杜少陵先生杜詩分類集註二十三卷明邵寶○杜工部詩通十六卷明張綖○杜律選注六卷明范濂○杜律集解六卷明邵傳○杜工部集箋注二十卷清錢謙益○杜工部集輯註二十卷・文一卷・末一卷清朱鶴齡○杜詩詳註二十五卷・附二卷・首一卷清仇兆鰲○杜詩闡三十二卷清盧元昌○讀杜心解六卷・首二卷清浦起龍○杜詩鏡詮二十卷・首一卷・附杜工部文集註解二卷・附一卷清楊倫○杜詩偶評四卷（官版）清沈德潛○杜詩論文五十六卷・目一卷清吳見思○杜律發揮三卷釋大典○杜律詳解三卷津坂孝綽。

【著者小傳】杜甫字は子美、少陵と號した。睿宗の太極元年（皇紀一三七二）襄陽に生れ、後、河南の鞏縣に遷つた。開元二十三年（二十四歳）進士の試に應じたが、及第しなかつた。安祿山の亂後累官して廣德二年（五十三歳）節度參謀・尚書工部員外郎と爲り、緋魚袋を賜はつた。代宗の大曆五年（皇紀一四三〇）荊楚の一旅寓に歿した（唐書文藝傳）。彼は博く群籍を究め、最も詩に秀で、詩聖の稱がある。元稹は、「詩人ありて以來未だ子美の如き者あらざるなり」と讃へてゐる。又殆ど時を同じうせる李白と竝稱して李杜と云ひ、或は杜牧を少杜と云ふに對して老杜とも云ふ。〔宇野・本多〕

杜國（とこく）　俳人【姓】坪井氏【通稱】平兵衞【生歿】生年未詳。元祿三年（一三五〇）二月二十一日歿（潮音寺墓碑に據る）。【法名】釋寂退【墓所】三河國福江町潮音寺（但しもと潮音寺よりやゝ南方にあつたのを移したもの）【俳系】芭蕉門【閱歷】名古屋の富裕な米商であつた。芭蕉の愛弟子で、貞享元年の「冬の日」（別項）の五歌仙にも加はつて居り、尾張蕉風の開拓者の一人であつた。貞享二年頃、事に坐して三河伊良古崎（いらご）の保美（ほび）に屏居した（空米相場のためとも、密貿易のためとも、姦通のためとも云はれる）。初め畠村に來り、後に保美に移つたのであると云ふ（墓碑の記文に據る）。かくて姓名を變じて南彥左衞門と云ひ、野仁（野人とも、の人とも）と號した。芭蕉は貞享四年冬、越人を伴つて保美に杜國を尋ね、その不幸を慰めて吉野行脚を約し、翌元祿元年春、杜國の來り會したのを伴ひ、檜笠の裏に、共に「乾坤無住同行二人」と書し、杜國は戯れに萬菊丸（岩菊丸とも傳ふ）と稱し、吉野・高野の花に遊び、須磨・明石までへも供をした。この行脚中、芭蕉が「萬菊殿鼾の圖」を畫いて戯れたりした。かくて杜國は保美へ歸り、元祿三年に歿したが、芭蕉はその翌年の「嵯峨日記」（別項）に、「夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺む」と云ひ、「覺めて又袂をしぼる」と云つてゐるほど、杜國の死を惜しんでゐる。支考は「葛の松原」に、「杜國は心ざしのおのこなるよし、阿叟も忌日おぼえ申されし」と云つてゐる。杜國の世話になつた越人は、「鵲尾冠」に「其角・杜國は一双の作者」と云つてゐるが、蕉風の圓熟期に入らずに歿したのであるから、輕率に評價は下し難い。



杜國筆蹟（芭蕉門古人眞蹟）

【參考】笈之小文松尾芭蕉○嵯峨日記松尾芭蕉○葛の松原各務支考○鵲尾冠越智越人○冬扇一路白井鳥醉○芭蕉翁全傳川口竹人○枇杷園隨筆井上士朗○蕉門諸生全傳遠藤曰人○續俳家奇人談竹内玄々一○俳林小傳中村光久○芭蕉庵春秋中島素蓮○俳諧人物便覽三浦若海○杜國を中心として滕峰晋風（ホトトギス大正一一ノ九）○流人杜國のこと河本正義（ひむろ昭和三ノ五）〔志田〕

常夏草紙（とこなつさうし）　讀本　五卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】勝川春亭【名稱】篇中人物

の名に因み、古歌より思ひついて人の一期盛衰の物語を作り、「常夏草紙」と名付けたとある。【刊行】文化七年【諸本】この版、文化の火に焼けて烏有となつた。明治九年獨逸人ピツツマイエルにより獨譯(Der Nebel der Kluge)されてゐる。【題材】お夏清十郎の情話を種にして綴つたものであるが、初めの三巻は「萬葉集」「古今集」「夫木和歌集」等の古歌に見える石竹の由來談を材とし、後の二巻は有名なお夏清十郎の情話に材を取り、因果關係を以て全體を結びつけてゐる。

【梗概】享祿の頃、武州多摩川の里に調布の長者と呼ばれる島田時主は、嘗て荻窪の野に横死してゐた稻城治部平の懐から三百兩を盗んだ報いで、妻瓦井、娘撫子が非業な死を遂げるので冥空と名を改めて出家する。然るに治部平を殺した藤坂春澄は親の仇を報いたのであるが、後誤まつて治部平の子補二郎を殺した。その後春澄は、主家再興のため亡命中の若君興稚丸を尋ねてゐる中、浪花にて偶然父治部平、兄補二郎の敵を尋ぬる修行者丹島清十郎實は稻城瀬二郎と師弟の約をなし、娘お夏がその妻となつてゐることを知る。又冥空は瀬二郎を尋ねて旅に出で、計らずも天滿社頭で瀬二郎殺害の悪計を聞き、瀬二郎の双に斃れて急を告げ、その難を救ふ。お夏は父春澄のために救はれ、瀬二郎は扇谷家の舊臣で義理の伯父戸鎌丹下に救はれて主君の身代りになり、興稚丸は本領安堵の教書を賜はり、扇谷の管領職を相續する。

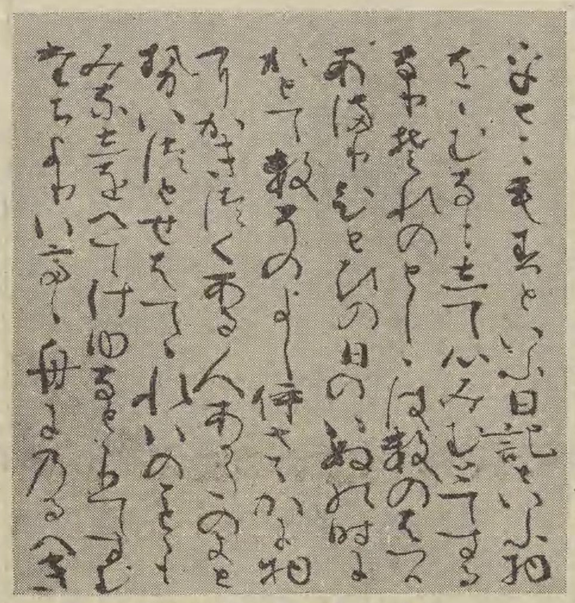
【解説】島田時主・藤坂春澄親子二代に亙つての因緣を語り、それを作者の文學上の要件である勸善懲悪に導き、或は悪婦悪漢を配して非儒教的精神を表はし、武士道的精神を代表する春澄・丹下によつて、大團圓を遂げしめてゐる。もと淨瑠璃・歌舞伎で人口に膾炙してゐるお夏清十郎を主題にしたが、その情話が輕く取扱はれて、餘りに運命小説に偏した缺陷が見られる。併し事件が稻城治部平の横死に端を發してゐる筆法は、從來の敵討小説の型を破つてゐる。これは注目すべきもので、作者も本書中の自評に力説してゐる。〔笹野〕

常世國（とこよのくに）　神話【名義】本居宣長は、常世に三義がある。常夜の義、恒久不變の義、常世國の義がこれである。常世國は底依國の意で、ただ絶遠き國を指すと解した（古事記傳）。飯田武郷は底依説を否定して、常世は底世を意味し、而して底世は即ち放世の義で、放き隔りたる國土を指すとなしたが、共に首肯し難い。「とこ」が常恒・不變等の意であることは動かし難い。ただ「よ」の意味が時代の推移、文化の進展につれて幾變遷をした爲めに、常世國によつて含意せらるゝ表象が、甚だ複雜多様になつたのである。かくて古代日本民族の心に潜む常世國の觀念は、(一)常闇の國、(二)死の島、(三)異鄉意識に滿ちた漠然たる遠國、(四)富と長壽との靈の國などに分化し展開してゐる。

【神話梗概】少彦名神が大國主命を輔けて國土の經營をなした後、熊野之御碕から、若しくは淡島に到つて粟の莖に彈かれて、常世鄉に渡つた物語（日本書紀・伯耆國風土記）、御毛沼命が波の穗を踏んで、常世國に渡つた物語（古事記）、雄略天皇の二十二年春正月、丹波國餘社郡管川の人水江浦島子が舟に乘つて釣し、大龜の女に化したのに導かれて蓬萊山に行つた物語（日本書紀・萬葉集）、垂仁天皇の九十年春二月、田道間守が天皇の命を受けて常世國に非時香菓を採りに赴いた物語（古事記・日本書紀）などがある。

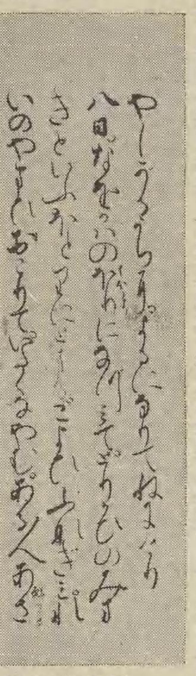
【參考】妣が國へ、常世へ　折口信夫（古代研究第一部）○古代生活の研究（常世の國）同上（「民俗學篇」の中）　〔松村〕

土佐日記（とさにっき）　一卷【作者】紀貫之。天曆五年撰の「後撰和歌集」には、明かに貫之の名をあげ、歌と共に詞書さへこの日記から取つたかの如くに見える。又前田家藏「惠慶集」中には、「つらゆきがとさの日記をゑにかけるを、いつとせすぐしける家のあれたる心を」とある。貫之が女性に假託して作つたものと見て差支ないであらう。【名稱】古くは「とさのにき」と「の」の字を附してよんだものであらう。「土佐」の字は、「土左」ともあてられる（定家自筆本）。蓮華王院舊藏の紀氏の自筆本は、巻子本で、外題に「土左日記」とあつたらしい。土佐の國より、京に歸りのぼり來るまでの路次の記といふ意味であらう。



定家本土佐日記（前田家藏）

【成立】「紀貫之家集」に「延長八年土佐の國に下りて、承平五年京にのぼりて、左のおとどのしら川におはします御ともに云々」とある。承平五年とは着京の年である。定家自筆本の奥に、「紀氏、延長八年任土左守、在國載五年六年之由、承平四甲午五乙未年事歟云々」とある。「袋草紙」にも「延喜八年正月任土佐守、即赴任、承平五年上洛之時云々」とある。但し延喜となすは誤りである。これ等によつて考ふれば、承平四年十二月二十一日土佐を舟出し、翌五年二月十六日、京に至るまでの間の事を書いたのが「土佐日記」である。日記中に、「五とせ六とせのうちに千とせやすぎにけん」といふのは、赴任より歸京まで前後六年であるからである。この日記は、旅のつれづれに筆を執つた草稿を歸京後更に修正し、淸書したものであらう。【諸本】前田侯爵家藏の定家自筆本の奥書によると、貫之自筆本はもと蓮華王院にをさめられてゐたらしい。併し今は傳はらない。前田家の定家自筆本は、六半本胡蝶裝の古雅な料紙に、一面九行或は十行に書かれてゐて、奥に、「文曆二年乙未五月十三日乙巳 老病中雖限如盲不打堺高一尺一寸三分許廣一尺七寸二分許紙也、無端聊折返不、有竹、無紐外題、土左日記貫之筆、其書樣和歌非別行定行に書之、聊有闕字哥下無闕字而書後詞、不堪感興自書寫之昨今二ケ日終功、桑門明靜」とあり、かつ貫之の眞蹟を人に知らしめんがために、末尾數行を臨摹して「爲令知其手跡之體如形寫留之謀詐之輩以他手蹟多稱其筆可謂奇怪」と云ひ、紀氏の略譜をかゝげ、「今年乙未歷三百一年紙不朽損其字又鮮明也、不讀得所々多只任本書也」とある。北村季吟の「土左日記抄」の本文は、この本によつたのである。定家自筆本を最も忠實に摸した本は德川中世以後多く傳へられ、由豆流の「考證」、御杖の「燈」にも參考せられてゐる。現存せる本では、天龍寺所藏本・彰考館藏本・高野辰之氏所藏本、その他數種あつて、いづれも德川中葉の書寫にかゝるものである。次に定家自筆本に對して、最も主なる異本の地位に立つものに群書類從所收本がある。この本は奥書が「妙壽院眞名をくはへ給ひし本侍云々」と云つたものである。現存せる妙壽院本中主なるものは狩谷圖書館所藏本・淺野圖書館所藏本・池田龜鑑藏本、その他二三存する。妙壽院本は前記亞槐本の系統であるが、亞槐本と定家本とは等しく貫之自筆本を書寫したと云はれるに拘はらず、內容に相違する所が少くない。何故にかゝる相違が生じたかにつき、橋純一氏は、定家が貫之の筆蹟を臨摹した部分の草假名百十五字を五十音圖に配當分類して、蓮華王院本の書風の特質を究め、そこから定家本と亞槐本の系統の相違を說明してゐる。

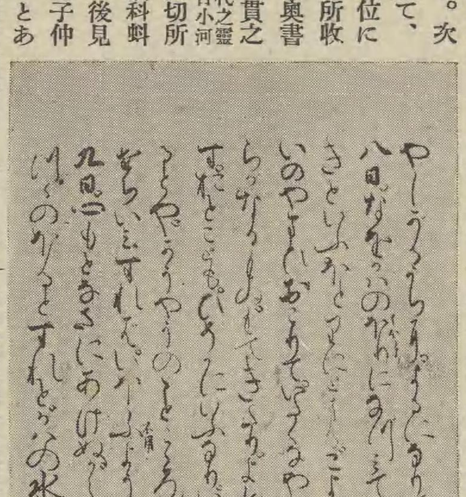


佐土本家爲

書の凡例に「其間傳寫者惟多、故諸本字異矣、余適々見藤爲相卿手筆之本、以此爲據」とあつて、爲相筆本によつたのである。この爲相本と爲家本とは、ほぼ同樣のものと見てよからう。この二本は、共に定家自筆本とは少々本文を異にする。御杖は、爲相卿手書本の條に、「その御するゑにして此本またそれと異る所あるは異本をえたまひて寫し給へりしにや」と云つてゐる。「燈」には、その外に中院也足軒手書本とて、慶長十二年の奥書ある本、長谷川菅麿所藏本とて、本居宣長所藏の古本その他の諸本によつて校合した本を用ひ、「考證」には、烏丸資慶卿自筆本、古寫本三本を用ひて校合してある。

【內容】「土佐日記」は、承平四年十二月二十一日土佐國を舟出し、海路の辛苦をなめ、翌五年「家々の記錄といへるものは、みな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば、女のわざならず。されば男もすなる日記といふものを、女もして見んとて、とはことわれるなり。そをいま假名もてしるせるは、めゝしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそ」と云つてゐる。要するに、この日記著述の動機は、旅の苦しみと珍らしさ、亡兒を思ふ悲しみ、京にかへるうれしさといふやうな情趣が主になり、その情趣を包む輕いユーモアが從となつてゐるやうに思はれる。一說に唐の李翺の「來南錄」などを見て書いたものではないかとも云はれるが、必ずしもさうではあるまい。

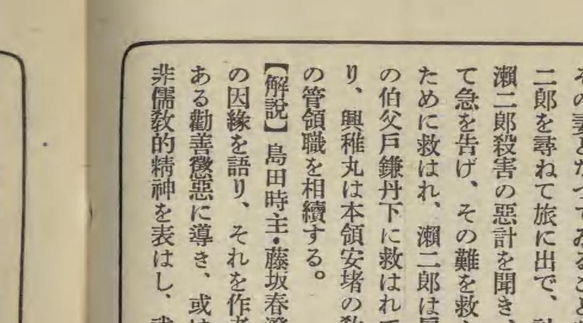
【史的地位】「土佐日記」は、假名文をもつて書かれた日記の最初のものである。新國字たる



めに、末尾數行を臨摹して「爲令知其手跡之體如形寫留之謀詐之輩以他手蹟多稱其筆可謂奇怪」と云ひ、紀氏の略譜をかゝげ、「今年乙未歷三百一年紙不朽損其字又鮮明也、不讀得所々多只任本書也」とある。北村季吟の「土左日記抄」の本文は、この本によつたのである。定家自筆本を最も忠實に摸した本は德川中世以後多く傳へられ、由豆流の「考證」、御杖の「燈」にも參考せられてゐる。現存せる本では、天龍寺所藏本・彰考館藏本・高野辰之氏所藏本、その他數種あつて、いづれも德川中葉の書寫にかゝるものである。次に定家自筆本に對して、最も主なる異本の地位に立つものに群書類從所收本がある。この本は奥書に「本云、土佐日記以貫之自筆本（故將軍御物希代之靈寶也今度密々自小河御所申出云々）依或人數寄深切所望書之、古代假名猶科蚪末愚臨字有魯魚哉、後見輩察之而已、明應壬子仲秋候、亞槐藤原判」とある。亞槐藤原とは三條西實隆のことで、この本は奥書にも記せし如く、貫之自筆本によつたのである。この系統の本には寛永二十年刊本、萬治三年刊本の外に數種の寫本が存在し、就中天文年間の書寫本は、原本の面影を最も忠實に傳へるものらしい。次に妙壽院本は傳本きはめて稀れであるが、御杖が片假名書古寫本といふものをあげ、「この本季吟翁が注本に妙壽院本とあるにその奥書同じければ同本なるべし。（中略）寛永五己辰神無月十五日武藏國江戸田安において書之とあり」と云ひ、季吟が「妙壽院眞名をくはへ給ひし本侍云々」と云つたものである。現存せる妙壽院本中主なるものは狩谷圖書館所藏本・淺野圖書館所藏本・池田龜鑑藏本、その他二三存する。妙壽院本は前記亞槐本の系統であるが、亞槐本と定家本とは等しく貫之自筆本を書寫したと云はれるに拘はらず、內容に相違する所が少くない。何故にかゝる相違が生じたかにつき、橘純一氏は、定家が貫之の筆蹟を臨摹した部分の草假名百十五字を五十音圖に配當分類して、蓮華王院本の書風の特質を究め、そこから定家本及び亞槐本の誤差を、書寫の際の誤りに基づくのであると推定されたが、これは最近發見された天文本・宗綱自筆本等の異本研究の結論からも正しいことと思はれる。次に以上の三種の傳本の外に、爲家本がある。これは「考證」に引かれてゐるが、由豆流が「爲家卿の本は、おほかたは附注に同じ。されどいささかたがへる所見ゆるをば、みなもらさずかたへにあげつ」と云つてゐるやうに、人見卜幽の「土佐日記附注」の本文と大同小異のものであつたらしい。然るに「附注」の本文は、同書の凡例に「其間傳寫者惟多、故諸本字異矣、余適々見藤爲相卿手筆之本、以此爲據」とあつて、爲相筆本によつたのである。この爲相本と爲家本とは、ほぼ同樣のものと見てよからう。この二本は、共に定家自筆本とは少々本文を異にする。御杖は、爲相卿手書本の條に、「その御するゑにして此本またそれと異る所あるは異本をえたまひて寫し給へりしにや」と云つてゐる。「燈」には、その外に中院也足軒手書本とて、慶長十二年の奥書ある本、長谷川菅麿所藏本とて、本居宣長所藏の古本その他の諸本によつて校合した本を用ひ、「考證」には、烏丸資慶卿自筆本、古寫本三本を用ひて校合してある。

爲家本土佐日記（池田龜鑑氏藏）

【內容】「土佐日記」は、承平四年十二月二十一日土佐國を舟出し、海路の辛苦をなめ、翌五年二月十六日京にかへり着くまでの事を書いてある。由豆流は、「この日記のはじめに、をとこもすなる日記といふものを、女もして見んとてするなりとあるよりして、ことをうらうへにいひて、ことばのあやをなせるをもて、もはら興としてはかゝれぬ」とて、作者の藝術的技巧をいたくほめてゐる。御杖は、貫之が女性に假託したる理由を、土佐守に任ぜられたるを深く恥ぢたるがためであるとなし、秋成は、「このぬしか此日記かける起本は京師より携へゆきし嬰兒の任國にて死去せしをこたひふり捨かへるをいたくかなしむより也」とて、妻子を悲しむが如きは丈夫たるもののあるまじき行爲と思ふから、特に女子に假託したのであると云つてゐる。御杖は秋成の說を難じて種々辨じてゐるが、要するに女性への假託といふことは、さして深い理由はなく、戯れて書いたものと見てよからう。由豆流は、「家々の記錄といへるものは、みな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば、女のわざならず。されば男もすなる日記といふものを、女もして見んとて、とはことわれるなり。そをいま假名もてしるせるは、めゝしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそ」と云つてゐる。要するに、この日記著述の動機は、旅の苦しみと珍らしさ、亡兒を思ふ悲しみ、京にかへるうれしさといふやうな情趣が主になり、その情趣を包む輕いユーモアが從となつてゐるやうに思はれる。一說に唐の李翺の「來南錄」などを見て書いたものではないかとも云はれるが、必ずしもさうではあるまい。



【史的地位】「土佐日記」は、假名文をもつて書かれた日記の最初のものである。新國字たる假名をもつて表現された文章が、如何に自由便利であるかが、この日記によつて證據だてられた。その意味に於て、この日記は、平安時代の假名文による文學作品のさきがけをなしたものである。「土佐日記」の文學としての特質は、第一に漢文學の影響の非常に多いといふことである。これは惡い方には、觀照の態度を曇らせ、表現の上に類型的な濁りを著しくさせたが、良い方には、文章を簡潔ならしめ、含蓄を多からしめた。「土佐日記」の文章は、他の女流日記に比して記事の深刻味には劣る所があるが、修辭上の洗練には群を拔いてゐる。そこに作者貫之の文章家としての人格が反映してゐる。「土佐日記」は文學上の作品として重要なるのみならず、當時の交通・海賊・海神・民間土俗・民謠等、風俗史に關する資料でもあり、又文法・語法等にも、他に類書がないだけに、國語學上の參考ともなる。

【研究史】この日記の研究は、元和・寛永の頃から盛んになつたやうである。由豆流が諸抄論に於てあげた「土佐日記聞書」は、その最初のものである。小野山隱士槃柴と云へる人の「土佐日記見聞抄」は、年月がないから成立の時は不明である。人見卜幽の「土佐日記附注」は萬治四年の跋があるから、北村季吟の「土左日記抄」と同年に成つたものであるらしい。そして「抄」は、「附注」の影響をいくらか受けてゐるやうに本居宣長は云つてゐるが、由豆流は、兩書に引用された和漢の古書の相通ぜざる點を指摘して、その然らざる由を辨じてゐる。寛永四年五月に刊行された「土佐日記首書」は、殆ど「抄」のまゝのものである。加藤宇萬伎は、契沖と眞淵との説をあはせ記した「土佐日記註」を書いた。又別に眞淵の説をしるした本に、上田秋成が序文を加へ、自らの説をあはせたのもある。又眞淵の説は、楫取魚彦によつて、別に書きしるされ、「土佐日記打聞」又は「聞書」となつた。「註」と「打聞」とに説の相違あるについて、由豆流は、「魚彦がしるせるは縣居翁のはやくの説、宇萬伎がしるせるは、後の説なるべし」と云つてゐる。次に岸本由豆流は「土左日記考證」(別項)をあらはして、諸抄を取捨選擇し、綿密な考證を試み、富士谷御杖は「土佐日記燈」(別項)を著はして、詳細な大研究を完成した。又香川景樹は、「土左日記創見」(別項)を著はして、綿密なる考説を試みた。「考證」「燈」「創見」は、「土佐日記」研究としては、後世に類のない大研究である。次に橘守部は「舟の直路」をものし、佐佐木弘綱は「土佐日記俚言解」を著はした。

【參考】土佐日記附註 人見卜幽○土左日記抄 北村季吟○土佐日記首書○土佐日記燈 富士谷御杖○土佐日記註 加藤宇萬伎○土左日記考證 岸本由豆流○土佐日記打聞 楫取魚彦○土佐日記舟の直路 橘守部○土左日記創見 香川景樹○土佐日記俚言解 佐佐木弘綱○土佐日記註釋 富田銀二郎○(參考)標註 土佐日記讀本 鈴木弘恭○(標註校訂)土佐日記 增田于信○土佐日記講義 三木五百枝○纂註 土佐日記 齋藤普春○定本 土佐日記 林甕臣○土佐日記講義 石田道三郎○(考異冠註)土佐日記讀本 井上喜文○土佐日記讀本 落合直文○土佐日記地理考 福島成行

土左日記考證 とさにっきこうしょう

【著者】岸本由豆流【成立】著者の生前に校合したものを、その子が遺言により文化六年葉月より更に別本等を參照して校合したもの(卷首提要)。提要最後の日附は、文化十二年十一月七日となつてゐる。卷首に文政二年春二月、林鵞の序と、同年四月、山本明清の序とをそへて版になつた。【内容】上卷の初めに「提要」と題して、この日記に關する總説並びに、著述上の注意などを説明してゐる。即ち「土佐日記」は、貫之が土佐國の任はてて京に歸り上りし時の旅日記なること、日記は家々の記錄にて、男子が漢文をもつて記するものなれば、わざと女子に假託して假名をもつて記したりと云ひ、貫之が唐の李翺の「來南錄」の影響を受けしやも知れずと疑ひ、次いで諸本のことに及び、定家自筆本、季吟の「抄」「附註」等の本文は、寛永二十年風月宗智の刊行せし本の本文に劣ると思はるゝが故に、寛永刊本を底本とし、みだりに古寫本によつて本文を改むることをつゝしみ、「附註」「抄」「扶桑拾葉集」「群書類從」等の印本を先きにして校合せし由を述べ、眞名をば本文の左に附し、註は右に附して區別せしことを記し、次にこの日記を推稱して、文かゝん本にすべきはこの日記にしくはあらじと云ひ、同じ作者の「古今集」の序、大井河行幸和歌の序等に比して、日記は「伊勢物語」等と共に優秀なる作品なることを説き、女性に假託されたることを「もはら興として書かれぬ」といつてゐる。次に校合に用ひたる諸本、當時世に行はれたる諸抄について、「土佐日記聞書」「土佐日記見聞抄」「土佐日記附註」「土左日記抄」「土佐日記首書」「土佐日記註」「土佐日記打聞」等について、一々詳細に解説を加へた。そして本傳の條下に、貫之の傳記・系圖を示してゐる。さて本文は、先づ日記の文章を小節に切り、これを前にかゝげ、眞名を左に、註を右に記し、諸本をもつて詳細に校合し、註釋はその後に附してある。註は巧みに先人の説を集成折衷し、自らの新考を加へ、頭には標註を施し、出典故事について、和漢の書に亙つてすこぶる博引旁證を試みてゐる。標註には、宣長・眞淵・季吟・春海・秋成・土清・魚彦・契沖・昌熹等の説をあげてあるが、就中眞淵の説が最も多い。【價値】異本研究に於ても、本文批評に於ても、從來の研究に一歩を進めたものである。「土佐日記」註釋書中、最も注目すべき研究の一つである。併しながら故事出典の考證に急で、やゝ附會の説もない事はない。なほ「訂正增補土佐日記考證」(鈴木弘恭編、明治三十一年刊)は、「土左日記考證」の本文を、異本によつて訂正增補したものである。從つて日記の本文は「考證」所載の本文と著しく異るが、註釋は原本のまゝをあげ、所々增補してある。【池田】

土左日記抄 とさにっきしょう

【著者】北村季吟【成立】下巻の巻末に「萬治四年二月十六日、拾穗軒季吟」とあり。寛文元年八月刊。出雲寺和泉掾藏版。この書と人見卜幽の「土佐日記附註」は同年に成立したるため、いづれか一方の影響を受けたであらうといふ推定につき、本居宣長は「附註」を先とし、岸本由豆流は、季吟が「附註」によらなかつたことを辨じてゐる。然るに新玉津島神社藏季吟自筆の日記に曰く、「寛文元年九月十一日、夜由敬、慈仙來て閑話、夜更けぬ。由敬いふ云々」の書出しで、由敬が季吟の子湖春の師なるによりて、「海松」「源語祕訣」等を見せたるに、卜幽は由敬の師であつたので、季吟の説を由敬より聞き知ることを得、已に板行後、誤りを正すこと七八十目を經て、改版後世に出でたのが「附註」なる由を詳細に記述してゐる。【解説】上巻の初めに、作者紀貫之の傳をのべ、「土佐日記」が貫之土佐國より歸り上りし旅日記であることを考證し、任國の事につきて説明し、題號のことに及び、最後に、底本としたのは定家自筆本を寫せる本であつて、これに妙壽院の眞名を加へ給ひし本を以て校合したことを附言してゐる。次に京極黄門奥書と題して、定家自筆本にあつた奥書と、妙壽院本奥書と題して妙壽院の本の奥書とをならべて記し、その次に、紀氏の系圖をかゝげ、紀氏に關する傳説をも附記してゐる。本文は、先づ日記の文章を小節にきり、これを最初に示し、二字下げて註を記してゐる。本文には妙壽院本を以て、可なり嚴密な校合が加へてある。考證の不備な點もあるが大體は穩健な説であつて、「土佐日記」研究者の必ず一見すべき書である。因みに本書は、令首座南可和尚の盡力により、永谷三位を經て、後水尾院の叡覽に供した。寛文元年九月八日の日記に、「此本自筆にて上下巻あさぎの表紙、外題土左日記之抄上下と友閑筆にて定家様にかけり。砂子の外題紙なり。桐の箱に入る」とある。【池田】

土左日記創見 とさにっきそうけん

【著者】香川景樹【成立】下之末の巻の終りに、「文政六年二月十六日住吉の浦勝間の里なる光福寺にありてしるし畢ぬ。景樹」とあり。一本の奥に「東塢藏藏」とあり、「天保三年壬辰春發行」とある。又明治二十四年九月、大阪東區の圖書出版會社にて、「中空日記」とあはせ、活字本一冊として刊行された。【内容】この書は、上(本末)・下(本末)の四冊と、別に附錄一冊とから成る。上之本の巻首に、漢文の序と、平正澄の假名の序があり、次いで「小引」と題して、この日記の要領を概説してゐる。即ち「土佐日記は紀氏彼國の任解て、承平四年なけん」と云つてゐる。次に、紀氏の年紀を考へ、彼の亡兒は六十八九歳の時の子なりとの奇説を出し、次に、諸本の事に及び、「此日記妙壽院本、附注本の類ひ世に數本あるが中に、季吟法印の抄本を本文注解ともに優れたりとす。譬へば諸本の訛謬五分ならんには、抄本は二分なるべし。此本故に是を本書とす」とて、季吟の「抄」を推稱し、「抄」が貫之自筆本の系統のものであると稱せらるゝも、古體の假名でなく、衍字脫文もあれば、原本紀氏自筆なりと云ふも、また疑ひを殘すべきであると云つてゐる。次に本文は、他の諸註の如く、日記本文を小節に分けて示し、次に校勘を試み、註釋を加へてゐる。校勘は、諸本の本文を比校し、文意・語調等によりて、主觀的に斷案を下す場合が多い。註釋は、語句・文法

【參考】國文學研究史 野村八良

土佐日記燈 とさにっきとう

【著者】富士谷御杖【成立】首巻の初め、大旨の條に、「文化十三年丙子三月廿一日、御杖識」とあり、巻尾に、「文化十四年丁丑五月二十日」とある。前者は起稿の年月であり、後者は脫稿の年月であらう。【諸本】自筆本所在不明。帝國圖書館に寫本を藏す。東京國光社出版の印本の奥に、御杖の男富士谷元廣の跋がある。それによれば、御杖の自筆本は、粟田の宮に奉り、弘化年間、宮の御本を拜借して書寫したれど、安政年間に失ひ、再び宮に乞ひ奉りしに、原本なし。やうやく城南の離宮に、日記のともしびを寫し持てる鳥羽なにがしと云へる人より借り受けて白川勝文の寫せる本を借りて書寫し、これを活字に印し時はおほやけに憚あれば、たゞ心にこめてやみなんとおもはれつらめど、しのびがたさに此日記はなりぬるにこそ」と云つたのであるとなし、秋成が、著作の動機を、亡兒に對する愛惜の情にありとなし、女々しき外聞を恥ぢて女子に假託せりと云ふ説を駁し、内憤激の情の燃ゆるあれども、外に憚りて女性に假託せりと斷じ、季吟が謙遜して女に託したりと云へる説をも極力反對した。そして例の直言・倒言の持論を引用し來り、この日記が倒言即ち比喩的暗示的表現によれることを稱揚し、かくてこそ公の御とがめもなかりしなりと云ひ、同じ作者の大井川行幸の時の序も「古今集」中の歌も、この日記に比しては雲泥死活の違ひありと云ひ、上代の祝詞宣命は文章の模範とすべきものなるに、この日記はこれ等に

表紙、外題土左日記之抄上下と友閑筆にて定家様にかけり。砂子の外題紙なり。桐の箱に入る」とある。　〔池田〕

土左日記創見　とさにつきさうけん　註釋書　五巻

【著者】香川景樹【成立】下之末の巻の終りに、「文政六年二月十六日住吉の浦勝間の里なる光福寺にありてしるし畢ぬ。景樹」とあり。一本の奥に「東塢塾藏」とあり、「天保三年壬辰春發行」とある。又明治二十四年九月、大阪東區の圖書出版會社にて、「中空日記」とあはせ、活字本一冊として刊行された。【内容】この書は、上(本末)・下(本末)の四冊と、別に附錄一冊とから成る。上之本の巻首に、漢文の序と、平正澄の假名の序があり、次いで「小引」と題して、この日記の要領を概説してゐる。即ち「土佐日記は紀氏彼國の任解て、承平四年の冬歸洛の時に臨みて、鍾愛の女子を失れたる其歎きに堪かねて、ひそかに思ひをやり給へる書也」と、單なる旅日記にあらず、愛兒を思ふ憂愁のあまりて、この日記となれる事情をのべ、「よに奇しきまで、戯れ給へる更に外の故ならず、只これが爲にふんでを立かへて悲哀の情を盡されし物也」とて、貫之が諧謔を交へたる故は、ことさらに胸中の悲痛を慰めんためなりとなし、かくては女々しく、稚き所業と見ゆれば、女の書きたるやうに假託したのであると云つてゐる。次に、この日記が、文章簡雅、意味の玄微、はるかに古今序の上に出づる傑作であること、及びこの日記に、三つの要點のあることを説き、「此書の大むね、亡兒の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに全文俳諧をもてす。此三つの大事を遺して、古來此日記を説來れるは、足を攘ひて鼎を置也。竟に其説たつ事なけん」と云つてゐる。次に、紀氏の年紀を考へ、彼の亡兒は六十八九歳の時の子なりとの奇説を出し、次に、諸本の事に及び、「此日記妙壽院本、附注本の類ひ世に數本あるが中に、季吟法印の抄本を本文注解ともに優れたりとす。譬へば諸本の訛謬五分ならんには、抄本は二分なるべし。此本故に是を本書とす」とて、季吟の「抄」を推稱し、「抄」が貫之自筆本の系統のものであると稱せらるゝも、古體の假名でなく、衍字脫文もあれば、原本紀氏自筆なりと云ふも、また疑ひを殘すべきであると云つてゐる。次に本文は、他の諸註の如く、日記本文を小節に分けて示し、次に校勘を試み、註釋を加へてゐる。校勘は、諸本の本文を比校し、文意・語調等によりて、主觀的に斷案を下す場合が多い。註釋は、語句・文法等に亙りて、他の諸説の及ばない新説が多く、創見の名にそむかないものである。附錄一巻は、諸家の説を批判し、自家の説をのべたもので、由豆流・純貞・季吟・宣長・眞淵・秋成等の説を檢討批判してゐる。【價値】近世の「土佐日記」研究として最後に出でたものである。諸註を集成批判し、新説を加へてゐるが、他の諸註が、語句の註解、故事の考證には詳細なれど、文意の批評・鑑賞といふ方面を等閑に附する傾向があつた。然るに景樹は、日記成立の内面的動機、日記を貫流する内面的精神に思ひを潜め、この見地に立つて、校勘、語句解釋、語法・文法に資する考説を試みた。從つてこの書は、客觀的なる考證學的研究に於ては、他の諸註に及ばない點が多いが、主觀的なる批判的研究に於ては、古今獨歩のものである。これは作家としての彼の個性の然らしめた所であらう。

【參考】國文學研究史　野村八良

土佐日記燈　とさにつきとう　註釋書　八巻

【著者】富士谷御杖【成立】首巻の初め、大旨の條に、「文化十三年丙子三月廿一日、御杖識」とあり、巻尾に、「文化十四年丁丑五月二十日」とある。前者は起稿の年月であり、後者は脫稿の年月であらう。【諸本】自筆本所在不明。帝國圖書館に寫本を藏す。東京國光社出版の印本の奥に、御杖の男富士谷元寮の跋がある。それによれば、御杖の自筆本は、栗田の宮に奉り、弘化年間、宮の御本を拜借して書寫したれど、安政年間に失ひ、再び宮に乞ひ奉りしに、原本なし。やうやく城南の離宮に、日記のともしびを寫し持てる鳥羽なにがしと云へる人より借り受けて白川勝文の寫せる本を借りて書寫し、これを活字に印して發行したる由來を明かにしてある。【内容】巻頭に大旨を載せて「紀貫之家集」及び「袋草紙」の記事を引き、貫之が延長八年土佐國に下り、承平五年歸京せしことを論じ、日記制作の動機を、謙遜にあらずして憤りに在りとなし、「まことにはづとならば、かかざらむにます事あらじかし。かれ思ふにこれ必ずふかきいきどほりありて、かゝれたる物なりとは明かなるなり」と云ひ、「續日本紀」「三代實錄」「日本後紀」等を引いて、土佐國が配流の地なること、「續日本紀」を引いて、土佐が伊豫國守管内の國なること、「拾芥抄」を引いて土佐が中遠の地なることを考證し、貫之ともあらん者が、かかる下級の國に任ぜられたることを深く恥ぢ、よりて、「この記女の所爲とし、年紀も記せられず、土佐といふことをもあらはにいはず、すべて女のしどけなきに書まぎらはし(中略)しかれどもいさゝかもあらはなる時はおほやけに憚あれば、たゞ心にこめてやみなんとおもはれつらめど、しのびがたさに此日記はなりぬるにこそ」と云つたのであるとなし、秋成が、著作の動機を、亡兒に對する愛惜の情にありとなし、女々しき外聞を恥ぢて女子に假託せりと云ふ説を駁し、内憤激の情の燃ゆるあれども、外に憚りて女性に假託せりと斷じ、季吟が謙遜して女に託したりと云へる説をも極力反對した。そして例の直言・倒言の持論を引用し來り、この日記が倒言即ち比喩的暗示的表現によれることを稱揚し、かくてこそ公の御とがめもなかりしなりと云ひ、同じ作者の大井川行幸の時の序も「古今集」中の歌も、この日記に比しては雲泥死活の違ひありと云ひ、上代の祝詞宣命は文章の模範とすべきものなるに、この日記はこれ等に比して劣らずとて「おほかた言すくなにて、いさゝかかざりたるけなく、すくよかにて、句々語々つふつふとはなれたらむやうにて、一言一句も詞を直につけられざりける」と云つて、倒語の妙にかなへることを稱讃してゐる。次に校合せし諸本(定家卿手書傳寫本・片假名古寫本・中院也足軒手書本・古寫本・爲相卿手書本・長谷川菅麿所藏本)の解説を附してゐる。そしてこれ等の諸本の校合にあたりては、然るべきを取り、私に然るべしと定むることをせず、諸本の異同を註記した。而して日記を釋するにあたつては、表と裏とを區別し、「裏とは、詞となりてのうへのくさぐさの理をとき、表とは、その詞のなりいでたる所以の義を説けるなり。おほかた歌も文もかく表裏をわきて釋せざれば、其義をつくすことあたはざるものなればなり」と云つた。これは彼が後年に著はした「萬葉集燈」に「言」と「靈」との二

次に岸本由豆流は「土左日記考證」(別項)をあらはして、諸抄を取捨選擇し、綿密な考證を試み、富士谷御杖は「土佐日記燈」(別項)を著はして、詳細な大研究を完成した。又香川景樹は、「土左日記創見」(別項)を著はして、綿密なる考説を試みた。「考證」「燈」「創見」は、「土佐日記」研究としては、後世に類のない大研究である。次に橘守部は「舟の直路」をものし、佐佐木弘綱は「土佐日記俚言解」を著はした。

【參考】土佐日記附註　人見卜幽○土左日記抄　北村季吟○土佐日記首書○土佐日記燈　富士谷御

なるは、従來の研究に一歩を進めたものである。「土佐日記」註釋書中、最も注目すべき研究の一つである。併しながら故事出典の考證に急で、やゝ附會の説もない事はない。なほ「訂正增補土佐日記考證」(鈴木弘恭編、明治三十一年刊)は、「土左日記考證」の本文を、異本によつて訂正增補したものである。從つて日記の本文は「考證」所載の本文と著しく異るが、註釋は原本のまゝをあげ、所々增補してある。　〔池田〕

土左日記抄　とさにつきせう　註釋書　二巻

【著者】北村季吟【成立】下巻の巻末に「萬治四年二月十六日、拾穗軒季吟」とあり。寛文

の註錄にて、男子が漢文をもつて記するものなれば、わざと女子に假託して假名をもつて記したりと云ひ、貫之が唐の李翺の「來南錄」の影響を受けしやも知れずと疑ひ、次いで諸本のことに及び、定家自筆本、季吟の「抄」「附註」等の本文は、寛永二十年風月宗智の刊行せし本の本文に劣ると思はるゝが故に、寛永刊本を底本とし、みだりに古寫本によつて本文を改むることをつゝしみ、「附註」「抄」「扶桑拾葉集」「群書類從」等の印本を先きにして校合せし由を述べ、眞名をば本文の左に附し、註は右に附して區別せしことを記し、次に

奥書と、妙壽院本奥書と題して妙壽院の本の奥書とをならべて記し、その次に、紀氏の系圖をかゝげ、紀氏に關する傳説をも附記してゐる。本文は、先づ日記の文章を小節にきり、これを最初に示し、二字下げて註を記してゐる。本文には妙壽院本を以て、可なり嚴密な校合が加へてある。考證の不備な點もあるが大體は穩健な説であつて、「土佐日記」研究者の必ず一見すべき書である。因みに本書は、令首座南可和尚の盡力により、永谷三位を經て、後水尾院の叡覽に供した。寛文元年九月八日の日記に、「此本自筆にて上下巻あさぎの

部の註を立てたのと同じ見解に基く。本文は先づ日記の小節を前に示し、次に表裏に分ちて、詳密なる解釋を加へてゐる。併し時に表裏の觀念の混同から、牽强附會の見方をした所も少くない。廣く諸家の說を集成批判し、よきをとり、惡しきを捨て、別に一家言を加へるなど、用意周到である。諸家の說とは、季吟・眞淵・宣長・秋成・宇萬伎・菅緒・伴蒿蹊・橘洲等の說で、父成章の志をついで、「挿頭抄」「脚結抄」等を引いて家學を紹述した。【價値】この書は、「土佐日記」研究書中最も大部のもので、詳密を極め、諸說をあまねく涉獵し、批判し、表面上の語義、裏面の含蓄を釋し、言外の意義、餘韻又は語感を直視せんと努めたるが如き、最近の文學研究法に近似したものがある。併し餘りに詮索にすぎ、獨斷に陷り、附會の見解多く、奇說も亦少くない。〔池田〕

土佐少掾正勝（とさのせうじよりまさかつ）「土佐節」を見よ。

土佐派（とさは）畫派【解說】平安朝以來の大和繪の傳統を繼承する一家系を中心とするもので、平安朝後期に在世した藤原基光に始まると傳へられ、以後その家系は連綿と江戸時代まで續いてゐるが、實は足利時代土佐派中興の祖と仰がるゝ光信より前は、甚だ漠然としてその家系を正確に溯ることが困難である。その土佐と稱するは、鎌倉初頭の經隆が土佐權守となつた爲めと云はれてゐるが、抑も經隆が土佐家の人であるか否かも實は明かでない。かくこの派の名稱や家系の由來は、足利以前は詳かでないが、この派の名によつて呼ばるゝ描寫樣式に至つては、要するに平安朝以來の大和繪樣式に外ならない。平安朝の大和繪は、元來唐畫に則つたもので、更にこれを日本風俗の描寫に適用し、從つて描法も著しく倭化せらるゝに至つて、その名に適はしき一樣式を渾成した。而してこれが平安朝末から鎌倉時代に亙つて流行した繪卷物の中に最も榮え、佛寺の間に流行した佛畫專門の繪佛師と相對して、宮廷貴族の間に勢力を得、宮廷の繪所預の職を世襲するに至つた。かくして家系の上にも樣式の上にもこの一派が確立されたのであつて、この機運は鎌倉末期以來のことと思はれる。光信の出現以後、一時繪所預は光信の婿狩野元信に移つて土佐派は衰頽に傾いたが、德川の初葉土佐光起出でてこれを再興して以來、江戸時代を通じてこの家系が存續したのである。〔田中(一)〕

土佐節（とさぶし）淨瑠璃【名稱】流祖土佐少掾橘正勝の受領號による。【沿革】江戸の淨瑠璃として、最も有名な流派の一たるに拘らず、傳系に關しては、殆ど正確な所傳がない。土佐掾の本姓は「江戸節根元記」によると、片岡氏と傳へるが、內匠を稱し、虎之助をも稱した。演出から見ると、寬永年中禰宜町に於て能を催した土佐とも交涉がないでもなからうが、寧ろ同時の「さつまたくみ」と直接關係があるかと想像される。普通、二代薩摩次郎右衞門の門人といはれるが、杉山丹後掾門說、薩摩外記系說その他もある。土佐節の盛時は寬文延寶の交であるが、元祿から享保度まで相當に歡迎された。葺屋町堺町に櫓を上げてゐたが、貞享年中は薩摩三郎兵衞座に現はれてゐる。貞享・元祿年代は、ワキ太夫として小太夫・庄太夫等が有名であつた。男を虎之助といひ、二代土佐掾を繼いだ。三代まで續いたが、寶曆頃には乞食の業となつたといふ。【曲節】傳系の不明なため、史的の解說は不可能であるが、現存する正本によると、謠曲や幸若や（各別項）放下僧節等を容れた外、薩摩節を本流としたらしい上に、當時の江戸に流行した諸淨瑠璃をも參酌した集成的の新淨瑠璃である。而も「俗を離れ風をたて聲は梁の塵をたゝしめ節は利休の茶杓よりもしをらしく」と謂はれて、薩摩流から出たとしても、かなり杉山流に接してゐたかと察せられる。風雅の士がよくこの流を愛したと傳へるのも、この故であらう。それ等の人のために、道行・景事等が稽古本として幾多版行されたが、又これを集めたものも出た。「色竹蘭曲集」などもある。なほ人形は一人遣で足はなく、遣ひ手は手摺の下から人形ばかりを見せた。淨瑠璃の間々には間の狂言を見せてゐた。【詞章】すべて六段續の形式に組まれて、文章は婉曲であるが、而も脆弱ならず、近松に見るやうな美文ではないが、當代の江戸の淨瑠璃中、最も異色のものである。正本には、寬文・延寶年代の刊本は、繪入細字本で幼童の讀み物であつたが、寶永年代に入つて節章を附けた稽古本が盛んに行はれた。享保度には又繪入細字の小本が現はれた。寶永年度の刊本に載せられた目錄によると、次の五十四曲が見られる。

酒顚童子・風流和田酒盛・名護屋山三・鹽屋文正・現在松風・大職冠二代玉取・新撰紅葉狩・楠湊川・艷色櫻小町・光源氏袖鏡・難波物語・源氏十二段・當世薄雪・融大臣・賴朝遊覽揃・定家・土佐日記・一の谷八島・和國女眉間尺・中將姬・三世二河白道・大塔宮熊野落・小野道風記・遊女源平全盛競・蟬麻呂・周防內侍美人揃・源氏花鳥大全・京四條お國歌舞妓・殿飾難波鏡・艷色萬歲賴政・博多露左衞門色傳授・寬洞洛陽壽・蓬萊源氏・源氏六條通・續源氏・柏木右衞門・泰平篁・芳野內裡・皐月十二段・相生源氏・對面源氏・牧狩曾我・東海道兵揃・養老・通俗傾城三國志・續三國志・平假名大全・鈴鹿山大嶽丸・今川かづら・花月十二段・末廣榮源氏・櫻小町・一心二河白道・世繼曾我。

土佐節正本「高尾さんげ」

但し以上の組合せには多少の出入がある。これ等は江戸小傳馬町の木下甚右衞門が斯流を好む所から祕曲をも傳へ、版行させたものと見える。當時の流行曲であるが、この他にも「をぐりの判官」や「善光寺」等、現存する數曲がある。各曲の初演年代は更に知る由もないが、「源氏十二段」の如き古曲や「鹽屋文正」や「和田酒盛」の如き、お伽草子・舞の本から題材を仰ぎ、幼稚な飜案によつて脚色したと見られる類は、初期の興行に屬するであらうが、それ等の中にも、「中將姬」や「大職冠」に至つては多少なりとも戲曲的自覺を發見する事ができる。「八幡太郎」はこれ等の方面での名作に屬する。抒情的要素を以て成功した作に、「現在松風」があり、失敗の作に「土佐日記」がある。別に斯流として特殊な展開の認められるのは、時勢相を取材した點にある。「名護屋山三」や「京四條お國歌舞妓」の類がこれである。その極端な題材としては、「通俗傾城三國志」と「博多露左衞門色傳授」が見られるが、これ等は戲曲的構想によらずして、寧ろ遊里の實相を記したもので、讀物として浮世草子に接近してゐる。併しかくの如く、時代に世話に、廣く大膽に脚色の範圍を活用した態度は、

教示が、相當にあると思はれる。

【參考】聲曲類纂齋藤月岑○繪入淨瑠璃史水谷不倒○あづま物がたり○色音論○牟藝古雅志瀨川如皐○野郎三座詫○江戸鹿子○江戸圖鑑〔守隨〕

戸澤姑射（とざはこや）飜譯家【本名】正保【閱歷】明治六年六月六日、水戸市上市長町に生る。父は菊池庸、母は筆子、兄は菊池幽芳、姑射は二男であるが、十四歲で親戚戸澤正之の養子となつた。水戸中學・第一高等學校を經、明治三十二年、東京帝大文科（英文科）卒業。同窓には彼の仕事の協力者たる淺野馮虛（別項）がゐた。卒業後、更に大學院に入つて英文學を專攻したが、三十四年、舊山口高等學校教授に任命、教職にあること五年。三十八年、辭して東京に歸つた。この間、馮虛と協

熟を祈る祭儀である。「令義解」に、「祈と謂ふは猶禱の如し。歲災作（おこ）らず、時令順度ならしめんと欲す。卽ち神祇官に於て之れを祭る。故に祈年と曰ふ」とある。蓋し農業立國の我が國に於ては、神嘗・新嘗などと共に重要なる祭祀の一である。【起原】祈年祭の起原は、いづれの頃なるかは明確でない。或は天武天皇四年二月に起つたと云ふも明かでない。或は支那の文物と共に傳來したのだと云ふも、事實とは云へない。勿論祭の儀式などには、學んだ所があるのは認められる。【儀式】この祭には、祭日より前に、所要の調度を備へ、祭日には早朝神祇官の齋院に、これ等のものを案上案下に置き、關係の諸員定めの位置に就いた時に、中臣は祈年祭の祝詞を宣り、忌部は神祇伯の命によつて幣帛を頒ち、以てそ

を整理し、これを西行の菩提寺和泉の弘川寺に奉納した。その原本は、元文四年似雲の在世中、火災のため一部燒けたから、更に補寫して再納したとある。なほ別の一本を、その歿後、同國蹲尾（つくのを）の北村家に遺した。その行方は不詳。今、北村家本の轉寫（文政五年）が、內閣文庫に傳はつてゐる。刊本は未見。【內容】全二十卷ほぼ年序に依つてゐるが、卷十より卷十四までの五卷、及び卷十七・二十の二卷、併せて七卷だけ別輯されてゐる。〔卷十・十一〕十百首集で、作者が享保十五年石山寺に奉納したもの。武者小路實積の「和歌の浦のなみにもあらぬかず〳〵に磨ける玉の光をぞ見る」と云ふ讃がついてゐる。〔卷十二・十三〕特に「窓の曙」と題簽がついて、今獨立した傳本も別に存してゐる。享保十五年十月そ

戸時代まで續いてゐるが、實は足利時代土佐派中興の祖と仰がるゝ光信より前は、甚だ漠然としてその家系を正確に溯ることが困難である。その土佐と稱するは、鎌倉初頭の經隆が土佐權守となつた爲めと云はれてゐるが、抑も經隆が土佐家の人であるか否かも實は明かでない。かくこの派の名稱や家系の由來は、足利以前は詳かでないが、この派の名によつて呼ばるゝ描寫樣式に至つては、要するに平安朝以來の大和繪樣式に外ならない。平安朝の大和繪は、元來唐畫に則つたもので、更にこれを日本風俗の描寫に適用し、從つて描法を仰ぎ、幼稚な醜案によつて脚色したと見られる類は、初期の興行に屬するであらうが、それ等の中にも、「中將姫」や「大職冠」に至つては多少なりとも戯曲的自覺を發見する事ができる。「八幡太郎」はこれ等の方面での名作に屬する。抒情的要素を以て成功した作に、「現在松風」があり、失敗の作に「土佐日記」がある。別に斯流として特殊な展開の認められるのは、時勢相を取材した點にある。「名護屋山三」や「京四條お國歌舞妓」の類がこれである。その極端な題材としては、「通俗傾城三國志」と「博多露左衞門色傳授」が見られるが、これ等は戯曲的構想によらずして、寧ろ遊里の實相を記したもので、讀物として浮世草子に接近してゐる。併しかくの如く、時代に世話に、廣く大膽に脚色の範圍を活用した態度は、淨瑠璃界に嘗て發見されなかつた所である。而して「花鳥大全」の如きは時代世話の脚色に成功した傑作と思はれる。詞章作者については全く所傳がない。【價値】江戸時代に入つてからは、淨瑠璃は先づ江戸に興隆したが、始祖的地位を占めた薩摩淨雲（別項）の名聲に次いでは、金平淨瑠璃（別項）の櫻井丹波掾が剛勇の曲節を以て一時期を劃した外、幾多の流派が並び行はれたが、消長絶えぬ中に、最後的奮鬪を試みて江戸淨瑠璃のために有終の美を濟したのが、土佐節であつた。當時から以後に亙つては、淨瑠璃は上方に於て流行したので、事實上、江戸の最後の淨瑠璃であつた。このためには、曲節に詞章に大成者としての功も多く、新淨瑠璃としての意義も深い。それ等の價値は、直ちに當代の江戸歌舞伎へ多くの脚色を指示し、又上方淨瑠璃へ題材の提供も尠くないのである。近松の作にも本流からの教示が、相當にあると思はれる。

【參考】聲曲類纂（齋藤月岑）○繪入淨瑠璃史（水谷不倒）○あづま物がたり○色音論○牟藝古雅志（瀨川如皐）○野郎三座詫○江戸鹿子○江戸圖鑑（守隨）

戸澤姑射（とざわはこや）　醵譯家　【本名】正保【閲歷】明治六年六月六日、水戸市上市長町に生る。父は菊池庸、母は筆子、兄は菊池幽芳、姑射は二男であるが、十四歳で親戚戸澤正之の養子となつた。水戸中學・第一高等學校を經、明治三十二年、東京帝大文科（英文科）卒業。同窓には彼の仕事の協力者たる淺野馮虚（別項）がゐた。卒業後、更に大學院に入つて英文學を專攻したが、三十四年、舊山口高等學校教授に任命、敎職にあること五年。三十八年、辭して東京に歸つた。この間、馮虚と協力して「沙翁全集」の醵譯を企て、沙翁の名篇十卷まで譯刊した。その譯出の苦心、語學的忠實、譯文の暢達の點で、今日なほ推賞に値するものがあらう。四十年再び敎壇の人となり、第五高等學校敎授に任ぜられてからは、專ら敎育界の人となり、後、再び山口高等學校敎授に轉じ、昭和四年弘前高等學校長となり、現在は東京外國語學校長である。【譯著】「愛と心」。沙翁全集中の「ハムレット」「オセロ」「リヤ王」「ロメオ」「シーザア」「から騒ぎ」「行違ひ物語」。小泉八雲全集中の「東の國から」「心」などがある。彼は又美文をよくし、大學在學中から帝國文學その他に寄稿家として有名であつた。その尤なるもの數篇は、「白露集」（馮虚・天隨との合著、新聲社刊）に收められてゐる。（柳田（泉））

祈年祭（としごひのまつり）　神道　【名義】「きねんさい」とも讀む。毎年二月に於て、年穀の豐熟を祈る祭儀である。「令義解」に、「祈と謂ふは猶禱の如し。歳災作らず、時令順度ならしめんと欲す。卽ち神祇官に於て之れを祭る。故に祈年と曰ふ」とある。蓋し農業立國の我が國に於ては、神嘗・新嘗などと共に重要なる祭祀の一である。【起原】祈年祭の起原は、いづれの頃なるかは明確でない。或は天武天皇四年二月に起つたと云ふも明かでない。或は支那の文物と共に傳來したのだと云ふも、事實とは云へない。勿論祭の儀式などには、學んだ所があるのは認められる。【儀式】この祭には、祭日より前に、所要の調度を備へ、祭日には早朝神祇官の齋院に、これ等のものを案上案下に置き、關係の諸員定めの位置に就いた時に、中臣は祈年祭の祝詞を宣り、忌部は神祇伯の命によつて幣帛を頒ち、以てその儀を終るのである。【奉幣】この頒ちたる幣帛は、伊勢神宮へは勅使をして奉らしめられるのであるが、その他へは「集はれる祝」どもに持ち歸らしめられるので、延喜の時代にても已に不參のものが生じ、或は幣物を受けても、これを私したりして、その弊甚だしきものがあつたが、後世皇室の式微と共に、この祭儀も益々衰へ、應仁亂後全く行はれなくなつた。明治二年に至りて復興せられ、爾後種々の變遷を經て、今日では、官國幣社は勿論その他の神社にありても、嚴に行はるゝこととなつた。

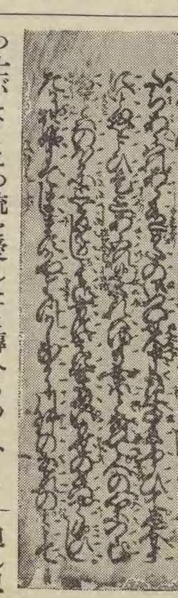
【參考】貞觀儀式○延喜式○祝詞考○祝詞講義○祝詞新講○神祇辭典（田中（義））

年並草（としなみぐさ）　歌文集　二十卷十九册【作者】似雲　【成立】作者三十八歳（寶永七年）より七十六歳（寬延元年）に及ぶ約四十年間の年序的歌文。【諸本】寬延二年作者自ら全卷を整理し、これを西行の菩提寺和泉の弘川寺に奉納した。その原本は、元文四年似雲の在世中、火災のため一部燒けたから、更に補寫して再納したとある。なほ別の一本を、その歿後、同國蹲尾（つくのを）の北村家に遺した。その行方は不詳。今、北村家本の轉寫（文政五年）が、內閣文庫に傳はつてゐる。刊本は未見。【內容】全二十卷ほゞ年序に依つてゐるが、卷十より卷十四までの五卷、及び卷十七・二十の二卷、併せて七卷だけ別輯されてゐる。（卷十・十一）十百首集で、作者が享保十五年石山寺に奉納したもの。武者小路實積の「和歌の浦のなみにもあらぬかず〳〵に磨ける玉の光をぞ見る」と云ふ讃がついてゐる。（卷十二・十三）特に「窓の曙」と題簽がついて、今獨立した傳本も別に存してゐる。享保十五年十月その草庵を出發し、難波・伊勢等に止錫し、東海道を下り三島に越年の上、二月江戸に着し、更に奥羽に旅立つて、仙臺・松島と巡錫、江戸に三月二十六日に歸着、暫く滯在の上歸庵した折の紀行である。本卷もやはり、石山寺奉納書に屬する。（卷十四）享保十八年十月上旬、實積の跋を貰つて例の石山寺に奉納した寄歌述懷歌。石山寺は似雲の信仰厚かつた寺で、晩年は毎年のやうに參籠してゐる。（卷十七）元文四年の百首兩度、寬保元年の百首及び延享元年七月葛城に參籠して詠んだ葛城山居百首、都合四百首を編んだもの。（卷二十）には「思出草」といふ別題がついてゐる。全卷の結びとして書かれたものらしく、懷舊及び思出歌約四十首等を主眼として、人事感想が澤山記述されてゐる。次に特輯外の年序を列記して見ると、卷一（寶永七年二月―享保七年十二月。但し享保七年に屬する歌は僅か二十七首に過ぎず、相當にあると思はれる。

【參考】聲曲類纂（齋藤月岑）○繪入淨瑠璃史（水谷不倒）○あづま物がたり○色音論○牟藝古雅志（瀨川如皐）○野郎三座詫○江戸鹿子○江戸圖鑑（守隨）

戸澤姑射（とざわはこや）　醵譯家　【本名】正保【閲歷】明治六年六月六日、水戸市上市長町に生る。父は菊池庸、母は筆子、兄は菊池幽芳、姑射は二男であるが、十四歳で親戚戸澤正之の養子となつた。水戸中學・第一高等學校を經、明治三十二年、東京帝大文科（英文科）卒業。同窓には彼の仕事の協力者たる淺野馮虚（別項）がゐた。卒業後、更に大學院に入つて英文學を專攻したが、三十四年、舊山口高等學校教授に任命、敎職にあること五年。三十八年、辭して東京に歸つた。この間、馮虚と協力して「沙翁全集」の醵譯を企て、沙翁の名篇十卷まで譯刊した。その譯出の苦心、語學的忠實、譯文の暢達の點で、今日なほ推賞に値するものがあらう。四十年再び敎壇の人となり、第五高等學校敎授に任ぜられてからは、專ら敎育界の人となり、後、再び山口高等學校敎授に轉じ、昭和四年弘前高等學校長となり、現在は東京外國語學校長である。【譯著】「愛と心」。沙翁全集中の「ハムレット」「オセロ」「リヤ王」「ロメオ」「シーザア」「から騒ぎ」「行違ひ物語」。小泉八雲全集中の「東の國から」「心」などがある。彼は又美文をよくし、大學在學中から帝國文學その他に寄稿家として有名であつた。その尤なるもの數篇は、「白露集」（馮虚・天隨との合著、新聲社刊）に收められてゐる。（柳田（泉））

祈年祭（としごひのまつり）　神道　【名義】「きねんさい」とも讀む。毎年二月に於て、年穀の豐



ぎず、卷四の攙入かと思はれる)、卷二(享保六年九月—同十月)、卷三(享保七年春—七月)、卷四(享保七年七月—同十月)、卷五(享保八年三月—同十月)、卷六(享保九年春—同十年八月)、卷七(享保十一年三月—九月)、卷八(享保十二年春—同十四年九月)、卷九(享保十五年正月—同十八年九月)、卷十五(享保十九年二月—元文元年十一月)、卷十六(元文二年正月—同四年十二月)、卷十八(元文五年四月—延享元年九月)、卷十九(延享二年二月—寛延元年九月)。この間、郷里廣島に享保四年、同十年、延享三年の三度歸つたその時の紀行、享保七年の富士見紀行、享保六年、同十一年その他數回に亙つた伊勢參宮紀行が、紀行中主なるものとして目立つてゐるが、「盆石記」(卷九)「種花記」(卷十八)「三寶殿記」「詞林拾葉跋」等の獨立した特殊の章句も混じてゐる。一般に歌日記と見るよりも紀行隨筆感想集と云ふべき性質のもの。卷八・十五・十六の如き歌集の體裁を具へてゐるのは寧ろその中で異例である。例へば卷三を繙くと、愛慾の道の畏るべきことを說いた後に虻の說が出て來る。更に客應接の心得を述べると云ふ風で、一種の道學者的風味は、漸次後に至るほど濃厚の度を增してゐる。ともあれ、近畿を四十年間と云ふもの殆ど足跡餘すなく歩いてゐるところ、全卷の內容に、大きい變化を與へてゐると言つてよい。石山・須磨・高野の外、晩年は多く河內・大和の間を往來した。西行の足跡を逐うて止錫した點も明瞭で、吉野にも庵居してゐたことがある。一乘院宮の殊遇をうけ、その歌會などに招かれたことも、卷十六以後に出てゐる。【價値】紀行文として見る時、その文辭、芭蕉のものに比して遙に劣り、表現に高い格調と流麗の抒情味が缺けてゐる。併し西行憧憬者の僞はりなき單純無技巧の自己表現として、そこに却つて素樸な妙趣が感ぜられる。亡母の幼友達であつた松貞尼の跡を訪ひ、その二人の弟子と母に關する懷舊にくれる一條(卷二)、高野籠りして煩惱の影拂へども拂ひかね、「佛前に向ひ禮拜するほどだに散亂やむ時なし。いかにせば寂靜ならむ」と、自己苛責に泣く一條(卷五)、「我は是本、隱者にあらず、道心にあらず、疎懶第一の放逸人」と、道士的態度に空嘯く一條(卷三)、又亡父の忌日には、父出家の時の詠三十一文字を頭にして三十一首詠をなすなど、孝養厚い志を示す卷々等(卷六その他)、いかにも讀み來り讀み去ると、釋似雲の俤の髣髴として浮びあがるのを否めない。そしてその中には、西行あり芭蕉あつて、まことに國文學の主流を思はせるに足るものが尠くない。彼も弱々しい人間の一人であつたらしい。「振りすてぬ心なりけりすゞか山うき世をよその身のたぐひにて」それは僞りのない赤裸の表現であつたであらう。「跡とひて今年もこゝにきさらぎや又袖ぬらす望月の頃」とは、弘川寺に西行の古墳を發見した翌年詠んだ歌である。これまで本書の傳本乏しく、世の顧るもの少いのは遺憾と言はねばならぬ。〔齋藤(清)〕

俊成(としなり)「俊成(しゅんぜい)」を見よ。

都氏文集(としぶんしふ)　文集　六卷(現存三卷)【著者】都良香【成立】明かでない。「三代實錄」卷三十五、元慶三年二月二十五日乙酉の條に、「都氏文集六卷云々」と見えるが、その中、卷一・二・六は散佚してしまつた。文中、卷四の狀五に、請以所ㇾ帶內記職、讓ㇾ與諸才ㇾ者狀の末に、元慶三年二月一日と記してゐる。然るに良香は同年三月二十五日四十六歲で歿した。思ふに「都氏文集」六卷は良香の歿後、門弟等の類聚して編したものと思はれる。恐らく元慶三・四年の頃の成立であらう。【諸本】群書類從本(一二九)以外に異本と見るべきものはない。彰考館本は「都氏文集補遺跋」と合綴してゐるが、類從本と異同は殆どない。同系の本で文字に二三の出入があるに過ぎない。又補遺は、次の目次だけがある。論奏(停ㇾ多褹島ㇾ大隅奏)、序(早春侍宴賦陽春詩序・聽源皇子初學周易詩序・第四皇子始受蒙求命宴詩序)、記(富士山記)、傳(道場法師傳)、對策(神仙・春澄朝臣善繩・漏刻・同。對文、在ㇾ上)、雜著(早春・蘭・晴鶴・山家・田家・將軍(朗詠)・早春・春興・水・餞別(新撰朗詠))。右のうち、論奏は、「類聚三代格」卷五太政官奏にも「朝野群載」卷六太政官の論奏にも見えてゐる。小野朝臣岑守の名になつてゐるが、「朝野群載」には作者都良香と記して、良香の作たることは明かである。序は、「本朝文粹」所載の第四皇子云云は「扶桑集」にも見える。また早春云云は「本朝文粹」卷八詩序の時節の部に、聽源皇子云云、第四皇子云云は共に卷九詩序の論文の部に載せてある。記は群書類從一三五及び「本朝文粹」卷十二に、傳は「本朝文粹」卷十二に見えてゐる。【內容】卷三は賦・論・序・銘・讃・表とあるが、本文中には序が載つてゐない。賦三のうち、一橋賦は諸本共に缺けてゐるから現存するものは二、論一、銘六、讃七、表十である。卷四は詔書・勅書・勅符・牒・狀であり、詔書五、勅書九、勅符五、牒一、狀九、卷五は對策・策問・策判・省試詩判で、對策二、策問八、策判(評定)四、省試詩判(文章生の詩の評定)二であるが、缺漏を有する殘卷であらう。【價値】當時の文體を見ると共に、策判や省試詩判の事情を知る點は興味がある。(良香參照)

【參考】扶桑集○朝野群載○本朝文粹〔山岸〕

利保(としやす)　歌人・歌學者【姓】前田氏【號】清薰・在樹・辨物舍・萬香亭【生歿】寛政十二年に生れ、安政六年(二五一九)に歿す。享年六十。【諡】龍澤【閱歷】天保六年(三十六歲)家督を相續し、越中國富山の城主となつた。人材を登用し、文武を振興し、殖產興業に努め、明君として知られた。和漢の學を初め、悉曇・蘭學にも通じ、本草學は筑前の城主黑田樂善と共に名高く、領國の千歲園には、雜多な藥草を植ゑて研究に資し、「本草通串」の大著述の編纂をした。歌人としては幼時冷泉家の歌風を學び、長ずるに及んで富士谷家の門に入り、次いで海野幸典を師とし、のち一家を成した。【著書】和歌の德○和歌の本義○贈答新式○歌道天地解○時運の差異○近隣○むかひごと道行觸○題詠のこと○山彥傳○活用雅俗風調の辨○古今集大論○古今和歌集夜話○園のすて草○歌判記臆○詞の大綱○網の綱手○手繰の絲まき○國頌專門○國頌專門言聶々○玩辭象○龍澤公歌道隨筆○清薰集。【業績】利保は歌學を廣く學び、多くの歌學書を著はしてゐる。それ等は概して、師說を素直に受け繼いでゐるものである。例へば、初期の著述と思はれる「和歌の德」の中では、堂上家の說を傳へ、安政四年、死去に先立つこと二年前に成つた「時運の差異」の中では、富士谷家・蘆庵・幸典等の師家の論を繼承してゐる。が、利保の歌論の中で、とりわけ重きをなしてゐるのは、幸典を通して學んだ「ただごと派」の歌論のやうである。しかし利保の歌論の獨自性は、ただごと派の歌論の眞髓と易の原理とを結びつけるに至つたところにある。「國頌專門」「國頌專門言聶々」「玩辭象」は、さうした歌論のあらはれである。他に利保は幸典の文法學をも承け繼いで、この方面の著述をもしてゐる。彼は又、藩士の歌の添削をしたり、歌學の講義をしたりして、歌のつどひの名を鳳凰連と稱してゐた。詠草十一卷は弘化三年(四十六歲)より死に至るまで、十五年間に成つた作品である。明治二十八年、二卷に纏められ、「清薰集」と題された。〔窪田〕

敏行(としゆき)　歌人(三十六歌仙の一)【姓】藤原【歿年】「古今集目錄」に「延喜七年卒、家傳云昌泰四年(延喜元年)卒」とあるが「古今集」卷十六に、友則がその死を悼む歌があり、友則は延喜五年に歿してゐるから、昌泰四年(一五六一)をとるべきか。【家系】富士麿の子にして伊衡の父。母は紀名虎女(尊卑分脈)。【閱法華經を二百部も書寫したが、身を愼しまなかつた爲め、寫經の功德によつて極樂に行ける筈のものが地獄に行つたので、その恨によつて敏行をとり殺して地獄に陷れた。敏行は未だ四卷經書寫を果してゐないとの理由で赦され蘇生したが、なほ身を愼しまず、四卷經も書寫しなかつたので死し、友則の夢に現はれて四卷經書寫の事を賴んだとあつて傳說化されてゐる。「古今集」卷十三に業平の家にゐる女に迷つた歌、卷十四に業平が女に代つて詠んだ歌があり、「後撰集」卷一に、二條后宮にて白い大袿を賜はつたとある。【作品】勅撰集に入る歌は古今集十八首、後撰集四首、その他凡そ六首あり、大部分は家集「敏行朝集臣」(別項)に收められてゐる。【批評】主觀を力强く詠む點に特色があるが、貫之の理想に適す「古今」「後撰」合せて二十一首は、本集の大部分であるから、本集も兩集その他から拾ひ集めたものであらう。〔西下〕

圖書(としよ)　書誌學【異名】ふみ・本・書・書籍・書册・册子・典籍・竹帛・方册・書册・書帙・書典・書志・書竹・書史・方策・書策【名義】「圖書」は河圖洛書の略。易繫辭傳「河出ㇾ圖洛出ㇾ書」から出た。「ふみ」は漢語ブン又はフン(文)の轉訛であらう。竹帛は、古への圖書の材料となつたもの。册・策は簡(竹のふだ)を編んだもので、古の圖書がさうであつたからいふ。【解說】紙又はその類似品に、文字又は繪畫等を書寫又は印刷したものを、或る形に綴つたものを稱し、稀には綴らざるものもこれを稱すると定義し得る。即ち普通の綴つた書物以外、圖表の如き綴らざるもの又古くは卷物の時は一枚づつ開いて行く。この中に、粘葉・胡蝶裝・袋綴(各別項)等の種類がある)の三つになる。(甲の二)文字又は繪や圖をあらはす方法の相違によつて分てば、(1)寫本(別項)(筆を以て書いたもの)、(2)刊本(別項)又は版本(印刷したもの。その印刷方法の相違によつて、整版本・活字本・活版本・石印本等の區別を生ずる)となる。(乙)內容によつて分類すれば、天文・地理・歷史・文學・語學以下多くの種類に分ち、その下に更にいくつかの部にわかつことが出來る。以上の外、その圖書の成立・筆寫又は刊行の年代や場所により、又刊行者により、繪畫の有無により、著者の自筆本又は原刻本であるか或は傳寫本又は複刻本であるかにより、又稀覯であつて、容易に得難いものであるか否かにより、その他種々の見方からいろ〳〵に分

る。「國頌專門」「國頌專門言譬々」「玩辭象」は、さうした歌論のあらはれである。他に利保は幸典の文法學をも承け繼いで、この方面の著述をもしてゐる。彼は又、藩士の歌の添削をしたり、歌學の講義をしたりして、歌のつどひの名を鳳鳳連と稱してゐた。詠草十一卷は弘化三年(四十六歳)より死に至るまで、十五年間に成つた作品である。明治二十八年、二卷に纏められ、「清薫集」と題された。〔羅田〕

敏行（としゆき）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【歿年】「古今集目錄」に「延喜七年卒、家傳云昌泰四年(延喜元年)卒」とあるが「古今集」卷十六に、友則がその死を悼む歌があり、友則は延喜五年に歿してゐるから、昌泰四年(一五六一)をとるべきか。【家系】富士麿の子にして伊衡の父。母は紀名虎女(尊卑分脈)。【閲歴】貞觀八年少內記に任じ、十五年從五位下に叙し、官は大內記・藏人・出羽介・中務少輔・太宰大貳・圖書頭・右兵衞佐・左近衞少將・備前權介(後に介)・權中將・春宮大進(後に權亮・亮)・藏人頭を歷任し、從四位下に進んだが、寬平八年、病によつて藏人頭を辭し、九年近江權守・右兵衞督に任じて從四位上に陞つた(以上古今集目錄)。「後撰集」卷十六に、病んで近江の關寺に籠つたとあるのは、藏人頭を辭した時か。「古今集」卷五の古註に、未だ殿上を許されてゐなかつたが、歌人たるの故を以て召上げられたとあり、同卷二十に、寬平元年賀茂の臨時の祭に作つた歌があり、その他寬平御時后宮歌合、惟貞親王家の歌合の作者であることも分る。書道にも通じてゐた如く、「江談抄」三に、村上天皇が道風を召して古の上手をお尋ねになつたとき、空海・敏行とお答へしたとあり、「宇治拾遺物語」八に、人に賴まれて法華經を二百部も書寫したが、身を愼しまなかつた爲め、寫經の功德によつて極樂に行ける筈のものが地獄に行つたので、その恨によつて敏行をとり殺して地獄に陷れた。敏行は未だ四卷經書寫を果してゐないとの理由で赦され蘇生したが、なほ身を愼しまず、四卷經も書寫しなかつたので死し、友則の夢に現はれて四卷經書寫の事を賴んだとあつて傳說化されてゐる。「古今集」卷十三に業平の家にゐる女に迷つた歌、卷十四に業平が女に代つて詠んだ歌があり、「後撰集」卷一に、二條后宮にて白い大柱を賜はつたとある。【作品】勅撰集に入る歌は古今集十八首、後撰集四首、その他凡そ六首あり、大部分は家集「敏行朝臣集」(別項)に收められてゐる。【批評】主觀を力强く詠む點に特色があるが、貫之の理想に適するには餘りに實が多かつたかも知れない。公任は歌仙のうちに入れてはゐるが、「金玉集」「十五番歌合」には入れてゐない。

【參考】古今集目錄 ○歌仙傳 ○大日本史卷一一四 ○宇治拾遺物語 ○江談抄 歌集 一卷 【西下】

敏行朝臣集（としゆきあそんしふ）　【作者】藤原敏行 【別名】「敏行集」【解說】群書類從二四八所載本は、歌の數が二十四首あり、歌仙歌集本は二十首ある。後者に缺けてゐるもの五首は、その內二首は他人の歌であることがわかり、前者に缺けてゐるもの一首は返しにて他人の歌であるから、敏行の歌としては二十二首となる。この內「古今集」に見える歌十八首はその內十七首が本集に見えるが、「住のえの岸による波」は見えない。これは「古今集」に於て同じく敏行の歌「戀ひわびて云々」の次にあるので、見落されたものか。「後撰集」に見える歌四首はすべて含まれてゐる。「古今」「後撰」合せて二十一首は、本集の大部分であるから、本集も兩集その他から拾ひ集めたものであらう。【西下】

圖書（としょ）　書誌學 【異名】ふみ・本・書・書籍・書册・册子・典籍・竹帛・方册・書册・書帙・書典・書志・書竹・書史・方策・書策 【名義】「圖書」は河圖洛書の略。易繫辭傳「河出ル圖洛出ル書」から出た。「ふみ」は漢語ブン又はフン(文)の轉訛であらう。竹帛は、古への圖書の材料となつたもの。册・策は簡(竹のふだ)を編んだもので、古の圖書がさうであつたからいふ。【解說】紙又はその類似品に、文字又は繪畫等を書寫又は印刷したものを、或る形に綴つたものを稱し、稀には綴らざるものもこれを稱すると定義し得る。卽ち普通の綴つた書物以外、圖表の如き綴らざるもの又古くは卷物の如きものも右の定義の中に含ませ得る。文字があつても、金石に刻したものは、この內に入らない。【種類】(甲)形態による分類と、(乙)內容による分類とがある。前者は圖書の物質的要素に基づくもの、後者は圖書に記載せる事柄によるものである。(甲)には、また二種の別がある。(一)製本(裝幀)の形式から分類するもの、(二)文字又は圖畫をどんな方法で圖書の中にあらはしたかといふ點から分類するものである。今、(甲の一)製本の形式から分類すれば、日本及び支那の普通の圖書は、圖表の如き綴らないものを除けば、(1)卷子本(別項)(紙を横に繼いで卷いたもの。讀む時は披げる)、(2)折本(別項)又は摺本(紙を横に繼いで、適宜の大きさに折り重ねたもの。讀む時は、一折づつ開いて行く。旋風葉(別項)はこの變種と觀るべきである)、(3)册子本(別項)又は葉子本(紙を重ねて、その一方を糊又は絲で接合したもの。讀む時は一枚づつ開いて行く。この中に、粘葉・胡蝶裝・袋綴(各別項)等の種類がある)の三つになる。(甲の二)文字又は繪や圖をあらはす方法の相違によつて分けば、(1)寫本(別項)(筆を以て書いたもの)、(2)刊本(別項)又は版本(印刷したもの。その印刷方法の相違によつて、整版本・活字本・活版本・石印本等の區別を生ずる)となる。(乙)內容によつて分類すれば、天文・地理・歷史・文學・語學以下多くの種類に分ち、その下に更にいくつかの部にわかつことが出來る。

以上の外、その圖書の成立・筆寫又は刊行の年代や場所により、又刊行者により、繪畫の有無により、著者の自筆本又は原刻本であるか或は傳寫本又は複刻本であるかにより、又稀覯であつて、容易に得難いものであるか否かにより、その他種々の見方からいろ〳〵に分類することが出來る。

以上は、理論上あり得べき種々の分類法であるが、實地の上から、日本に存する古書を取扱ふに、便利な分類法の一として私案を擧げれば、

第一類　古文書(一)原本、(二)摹本及び寫眞類。
第二類　古經類(一)寫經、(二)版經。
第三類　古寫本(佛經以外のもの)(一)日本古寫本(朝鮮を含む)、(二)支那古寫本。
第四類　稀覯新寫本(新しい寫本で、原本が滅びて、價値が生じたもの)(一)日本(朝鮮)、(二)支那。
第五類　名家手澤本(名家の手を經た本)(一)名家自筆本、(二)名家抄寫本、(三)名家書入本、(四)名家舊藏本。
第六類　古版本(一)日本版本(1、古活字版本、2、整版本、3、朝鮮版本、4、基敎版)(二)支那版本(時代別)。
第七類　繪畫本(一)卷子本(寫・刊)、(二)册子及

年詠んだ歌である。これまで本書の傳本乏しく、世の顧るもの少いのは遺憾と言はねばならぬ。〔齋藤(清)〕

俊成（としなり）　「俊成（しゅんぜい）」を見よ。

都氏文集（としぶんしふ）　文集　六卷(現存三卷)【著者】都良香 【成立】明かでない。「三代實錄」卷三十五、元慶三年二月二十五日乙酉の條に、「都氏文集六卷云々」と見えるが、その中、卷一・二・六は散佚してしまつた。文中、卷四の狀五に、請以所帶內記職、讓與諸才士者狀の末に、元慶三年二月一日と記してゐる。然るに良香は同年三月二十五日四十六歳で歿し卷十二に見えてゐる。【內容】卷三は賦・論・序・銘・讃・表とあるが、本文中には序が載つてゐない。賦三のうち、一橋賦は諸本共に缺けてゐるから現存するものは二、論一、銘六、讃七、表十である。卷四は詔書・勅書・勅符・牒・狀であり、詔書五、勅書九、勅符五、牒一、狀九、卷五は對策・策問・策判・省試詩判で、對策二、策問八、策判(評定)四、省試詩判(一題文章生の詩の評定)二であるが、缺漏を有する殘卷であらう。【價値】當時の文體を見ると共に、策判や省試詩判の事情を知る點は與【業績】利保は歌學を廣く學び、多くの歌學書を著はしてゐる。それ等は概して、師說を素直に受け繼いでゐるものである。例へば、初期の著述と思はれる「和歌の德」の中では、堂上家の說を傳へ、安政四年、死去に先立つこと二年前に成つた「時運の差異」の中では、富士谷家・鷹庵・幸典等の師家の論を繼承してゐる。が、利保の歌論の中で、とりわけ重きをなしてゐるのは、幸典を通して學んだ「ただごと派」の歌論のやうである。しかし利保の歌論の獨自性は、ただごと派の歌論の眞髓と易の原理とを結びつけるに至つたところにあ

び帖子本（寫・刊）、（三）挿畫本（寫・刊）。

第八類　名家筆蹟、（一）手鑑（名家の筆蹟を集めたもの）、（二）詞章・短册・懷紙・詠草等（但しそのまゝでなく帖又は册に裝幀せられたもの）、（三）書翰（同前）、（四）臨本（名家の筆蹟を臨寫したもの）、（五）摹寫本（名家の筆蹟を摸寫したもの）、（六）摹刻本。

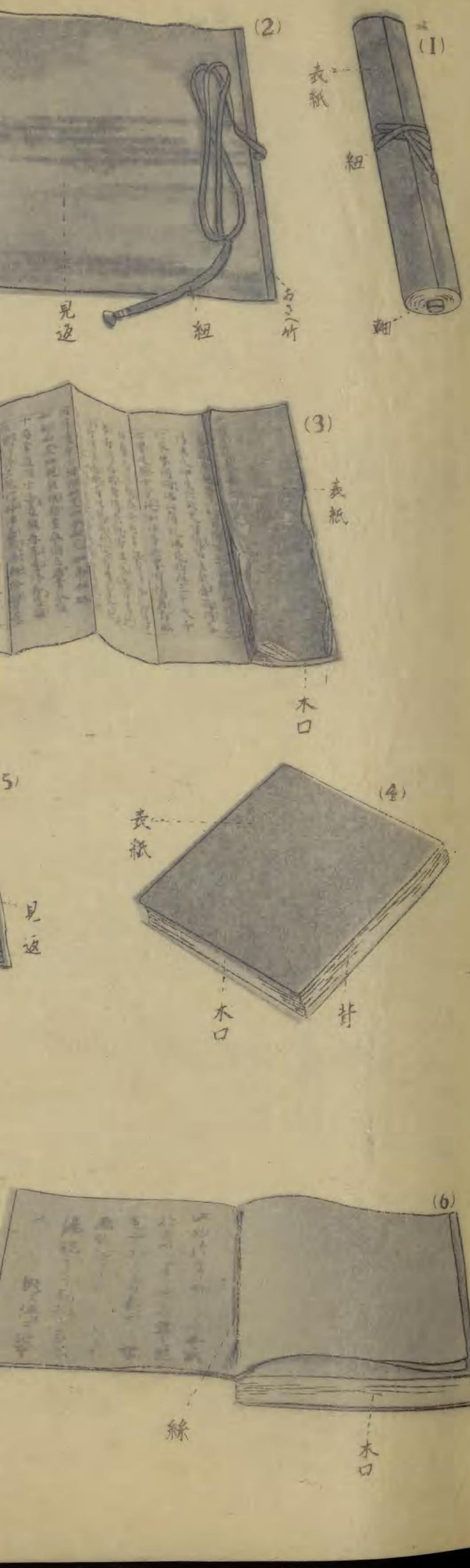
第九類　雜（一）金石文拓本、（二）法帖、（三）印譜、（四）泉譜。

第十類　札子類、寫眞帖類。

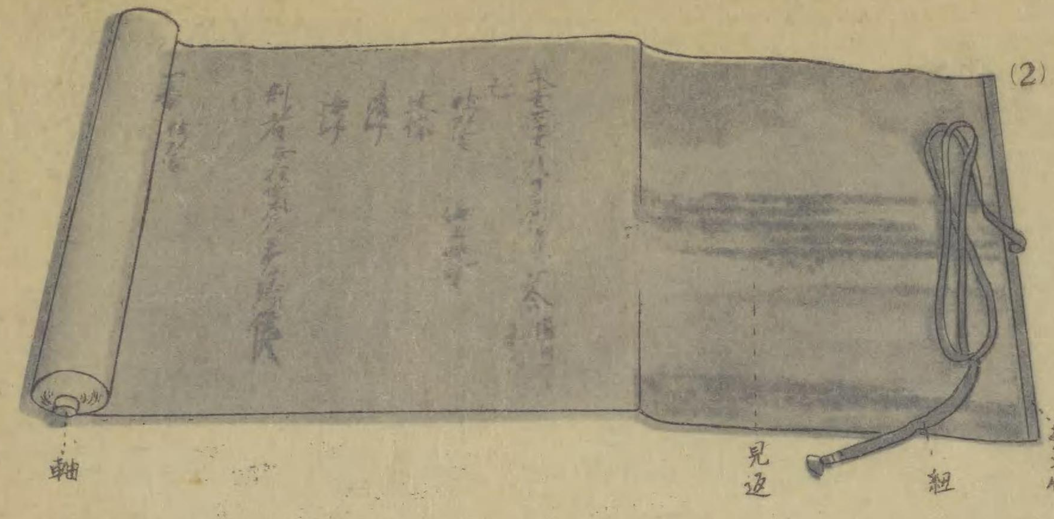
以上十類に分つ時は、現存の本邦古書は殆ど網羅し得る。古文書を圖書の中に加へる事については異議もあらうが、姑く加へておく。以上の外、圖書の形狀や目的から名づけた特殊の名目がある。册子本は、縱が長く横が短いのを常とする故、縱に比して横が長いのを「横本」と云ひ、縱横が大體同じほどであるものを「枡形本」と云ふ。携帶に便ずるために、特別に小形にしたものを袖珍本・豆本といふ。支那でこれを巾箱本又は馬上本などいふ。雛飾りに使用する非常に小形のものを雛本と云ひ、婚嫁する婦女の携へ行く美裝本（國文學書が多い）を嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名目としては、師匠その他權威者の校閲を經た、典據とするに足るべきものを證本と云ひ（後にはこれを正本とも書いた。淨瑠璃の正本もこれである）、漢文に、その訓讀を示す符號や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ（刊本・寫本參照）。

【圖書の構成と各部分の名目】　外面には表紙（標紙とも）（別項）を附けて、内部を保護する。表紙は卷子本では最初に、その他の本では最初と最後とにあるを常とする。洋裝本では前後の表紙は、紙を綴ぢた側の側面を越えて連續してゐるのが常である。この側面の部分を背といふ。表紙の裏を見返しといふ。卷子本は最後に軸をつけて、卷く時の心棒とする。書の題目（書名）の表紙の上にあるものを表題又は外題と云ひ、これに對して、内部の初めにあるものを内題と云ひ、本文の最後にあるものを尾題といふ。書によつては、外題・内題・尾題の互に一致しないものがあり、又その一又は二を缺くものがあり、又は全くこれを缺くものもある。洋裝本では、背に表題を出すのが普通である。書名は、又圖書の内部の第一丁にあることも少くない。この書名（時には、著者名・發行者名・發行年月などを）を載せた一丁を扉といふ。袋綴の刊本では、最初の表紙の見返しを以て扉にかへてこれに書名等を載せたものもある。本文の前には、題字・序・緒言・例言・凡例・目次（目錄）・圖畫（口繪）などある場合がある。これを總稱して前附といふ事がある。本文の後には、後序・跋などがある事がある。書寫の年月氏名、來由などを記した所謂奥書（別項）がある事もある。かやうな記載は、多くは本文の後にあるけれども、又他の場所にある事もある故、これを識語と名づける事もある。又刊本に存するその本刊行の年月・人名・由來等に關する記載は、これを刊記といふ。現代の刊行圖書には、その書の名・著者・發行者・印刷者等の名を記した一丁、又は一頁を最後に附する事となつてゐるが、それを奥附といふ。又圖書には、紙面に於ける文字（又は圖畫）の外限を劃し、又は文字を整齊ならしめんために、紙面に線を引くことがある。これを界又は格といふ。今普通には罫といふ。横線は行の高さをそろへ、縱線は行の幅を均一ならしめんために劃するが、時に縱線のみで横線を缺くことがある。卷子本又は折本では、行はどこまでも同じ間隔を以て進むが、册子本では一枚毎に紙面が截斷せられて、一紙毎に一段をなすため、紙面の四方に界を劃して、文字ある部分の外郭となすやうになる。これが匡郭である。匡郭の内には毎行線のあるものとないものとあるが、袋綴のものには、文字ある面の中央、即ち一紙の折目のところは、特に行間をひろげて、書名・卷名・丁附などを記す。こゝを版心又は柱といふ。界は寫本の卷子本には墨（多くは淡墨）を以て引き、稀には金銀泥を用ひることもある。寫本の粘葉本には、篦の如きもので押して跡をつけただけで、何等の色を用ひないのが常である。これを白界又は白格といふ。丁附は丁の順序をあやまらざらしめんためにつけるもので、卷子本・折本・胡蝶裝にはないのが常であるが、粘葉本には糊を以てした繼目の内に、袋綴本には折目に（刊本では柱に）、稀には右又は左の面の、綴目の方の側の下方欄外にある。圖書には本文の外に、行間・欄外などに、朱や墨などを以て、見出し、釋義、他本との校合、その他の事項を書き加へる事がある。これを書入といふ。又本文を低くしてその上方に、本文の註釋・補記、その他多少關係ある事項を載せたものがある。この本文の上の部分を鼇頭と云ひ、そこに註釋がある場合には、これを頭註といふ。又其處に繪畫のあるものもある。近來稀に本文の下方に註を置くものもある。これを脚註と稱する。本文の間に挿入した繪畫を挿繪（別項）と稱する。粘葉と胡蝶裝は、共に一紙の兩面に文字を書くのが普通であるから、紙の裏面に他のものを容れる餘地はないが、卷子本・折本・袋綴本には裏面に文字又は繪畫のある事がある。これには二種ある。一は文書又は他の圖書の裏をかへして、新に圖書を寫し、又は印刷する用紙に宛てたもので、その圖書とは内容上全く關係のないものであり、一はその圖書の書寫又は印刷が出來て後に、表面の文の註、見出し、參考資料、稀には奥書などを裏面に加へたものである。後者は、これを裏書・背記・背書など呼ぶ。圖書には、表紙・卷頭・卷尾などに所藏者の名を署し、又印を捺したものがある。卷子本には、裏面（稀には表面）の繼目のところに、前後の兩紙にかけて所有者の署名、又は捺印のあるものがある。

【圖書の用紙】　その主なるもののみを擧げる。古く奈良朝から用ひられたのは、麻紙・斐紙及び穀紙であつて、麻紙は麻の故布、又は麻皮を以て作つたもの、斐紙は、もと「かにひ」と稱へた植物、即ち雁皮の纖維から作つた雁皮紙であり、穀紙は楮紙とも云ひ、楮の皮で作つた楮紙である。麻紙は黄檗の皮の煎汁で染めて黄麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混へ繼ぎ合せて書卷としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙（雁皮紙）と穀紙（楮紙）とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の册子にも亦これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた鳥の子紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもので、厚薄種々の類があり（その薄

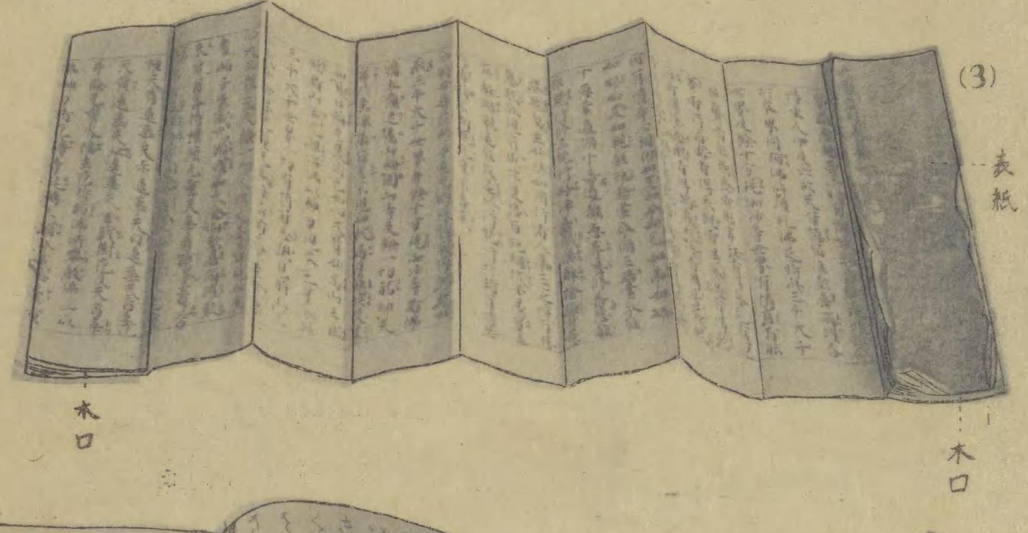


圖書一

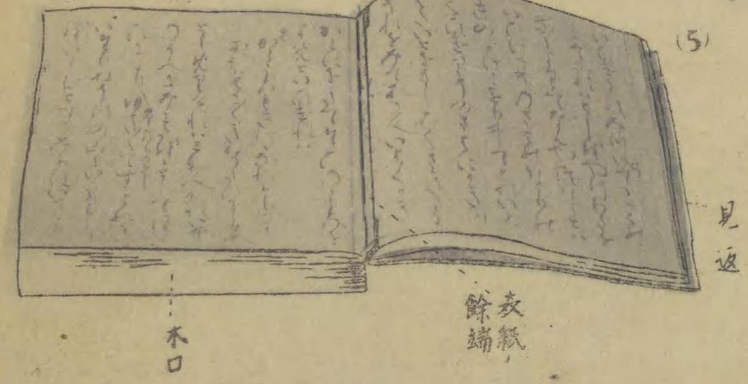


(1) 卷子本　卷いた所

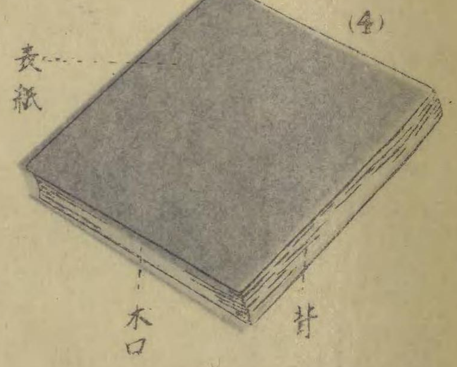
(2) 卷子本　初めの部分を開いた所



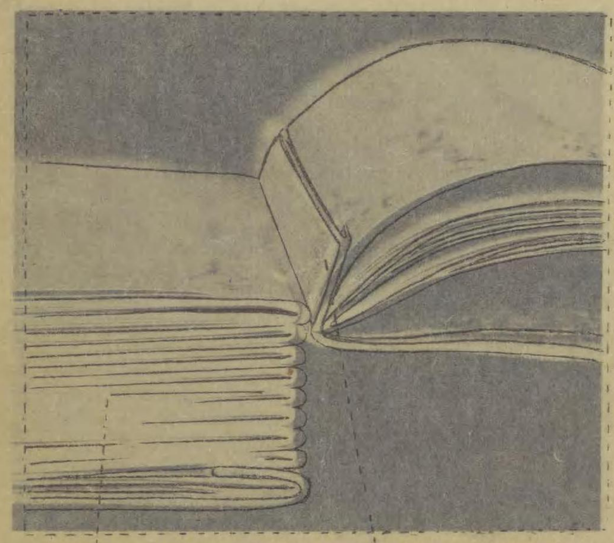
(3) 折本　開いた所



(4) 胡蝶裝　全形

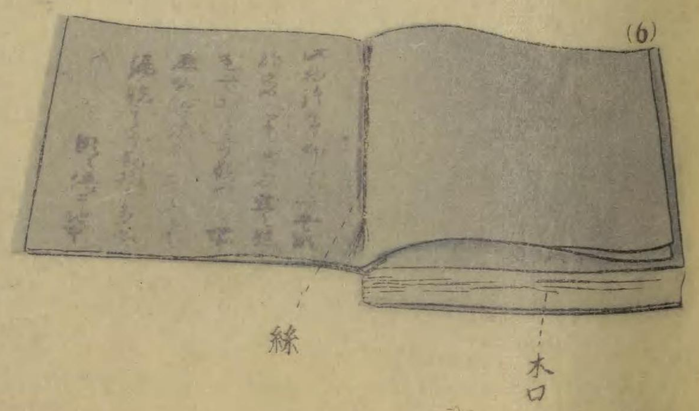


(5) 胡蝶裝　第一折と第二折との間を開いた所



(6) 胡蝶裝　最後の折を中央から開いた所

(7) 胡蝶裝　(5)の綴目の部分の擴大圖



が多いを嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名目としては、師匠その他權威者の校閲を經た、典據とするに足るべきものを證本と云ひ(後にはこれを正本とも書いた。淨瑠璃の正本もこれである)、漢文に、その訓讀を示す符號や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ(刊本・寫本參照)。

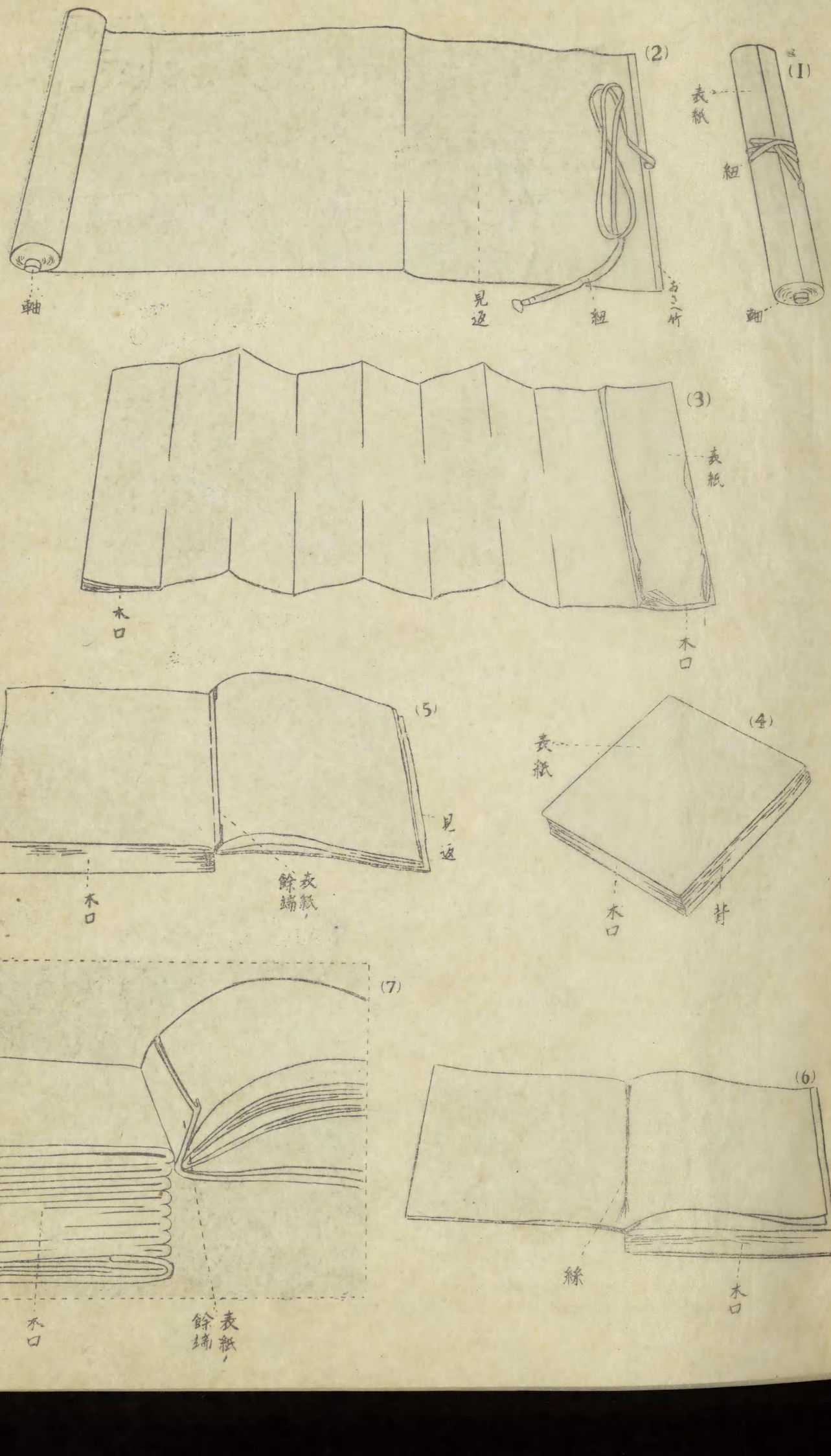
【圖書の構成と各部分の名目】　外面には表紙とある場合がある。これを總稱して前附といふ事がある。本文の後には、後序・跋などがある事がある。書寫の年月氏名、來由などを記した所謂奥書(別項)がある事もある。かやうな記載は、多くは本文の後にあるけれども、又他の場所にある事もある故、これを識語と名づける事もある。又刊本に存するその本刊行の年月・人名・由來等に關する記載は、これを刊記といふ。現代の刊行圖書には、その書の名・著者・發行者・印刷者等の名を記した一丁、又は一頁を最後に附する事となつてゐるが、それを奥附といふ。又圖書には、紙面に於ける文字(又は圖畫)の外限を劃し、又は文字を

が常であるが、料葉本には料を以てした綴目の内に、袋綴本には折目に(刊本では柱に)、稀には右又は左の面の、綴目の方の側の下方欄外にある。圖書には本文の外に、行間・欄外などに、朱や墨などを以て、見出し、釋義、他本との校合、その他の事項を書き加へる事がある。これを書入といふ。又本文を低くしてその上方に、本文の註釋・補記、その他多少關係ある事項を載せたものがある。この本文の上の部分を鼇頭と云ひ、そこに註釋がある場合には、これを頭註といふ。又其處に繪畫のあるものもある。近來稀に本文の下方に註を置くものもある。これを脚註と稱する。本文

稱へた植物、即ち雁皮の纖維から作つた雁皮紙であり、穀紙は梶紙(かぢ)とも云ひ、楮(かぢそ)の皮で作つた楮紙である。麻紙は黄檗の皮の煎汁で染めて黄麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混へ繼ぎ合せて書卷としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙(雁皮紙)と穀紙(楮紙)とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の册子にも亦これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた鳥の子紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもので、厚薄種々の類があり(その薄

が多いのを嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名目としては、師匠その他權威者の校閲を經た、典據とするに足るべきものを證本と云ひ(後にはこれを正本とも書いた。淨瑠璃の正本もこれである)、漢文に、その訓讀を示す符號や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ(刊本・寫本參照)。

【圖書の構成と各部分の名目】 外面には表紙・紐・

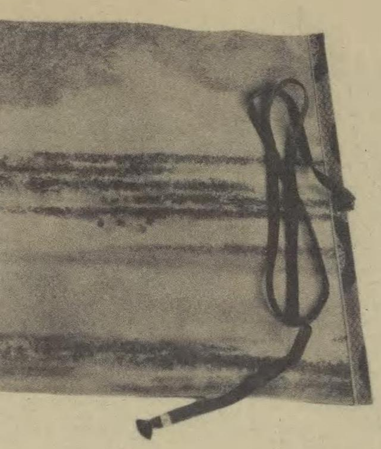


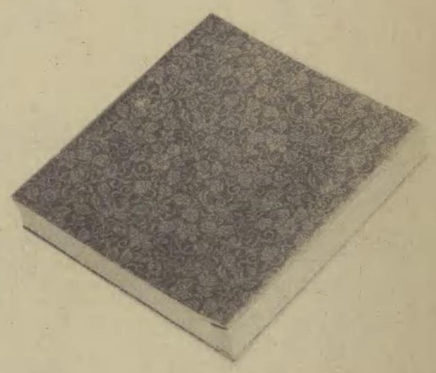
(1) 卷子本 卷いた所
(2) 卷子本 初めの部分を開いた所
(3) 折本 開いた所
(4) 胡蝶裝 全形
(5) 胡蝶裝 第一折と第二折との間を開いた所
(6) 胡蝶裝 最後の折を中央から開いた所
(7) 胡蝶裝 (5)の綴目の部分の擴大圖

どある場合がある。これを總稱して前附といふ事がある。本文の後には、後序・跋などがある事がある。書寫の年月氏名、來由などを記した所謂奥書(別項)がある事もある。かやうな記載は、多くは本文の後にあるけれども、又他の場所にある事もある故、これを識語と名づける事もある。又刊本に存するその本刊行の年月・人名・由來等に關する記載は、これを刊記といふ。現代の刊行圖書には、その書の名・著者・發行者・印刷者等の名を記した一丁、又は一頁を最後に附する事となつてゐるが、それを奥附といふ。又圖書には、紙面に於ける文字(又は圖畫)の外限を劃し、又は文字を

が常であるが、粘葉本には糊を以てした繼目の内に、袋綴本には折目に(刊本では柱に)、稀には右又は左の面の、綴目の方の側の下方欄外にある。圖書には本文の外に、行間・欄外などに、朱や墨などを以て、見出し、釋義、他本との校合、その他の事項を書き加へる事がある。これを書入といふ。又本文を低くしてその上方に、本文の註釋・補記、その他多少關係ある事項を載せたものがある。この本文の上の部分を鼇頭と云ひ、そこに註釋がある場合には、これを頭註といふ。又其處に繪畫のあるものもある。近來稀に本文の下方に註を置くものもある。これを脚註と稱する。本文

稱へた植物、卽ち雁皮の纖維から作つた雁皮紙であり、穀紙は楮紙とも云ひ、楮の皮で作つた楮紙である。麻紙は黄檗の皮の煎汁で染めて黄麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混へ繼ぎ合せて書卷としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙(雁皮紙)と穀紙(楮紙)とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の册子にも亦これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた鳥の子紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもので、厚薄種々の類があり(その薄





圖解要覽

第一卷 第二章 圖書の構成と各部分の名稱

としよ

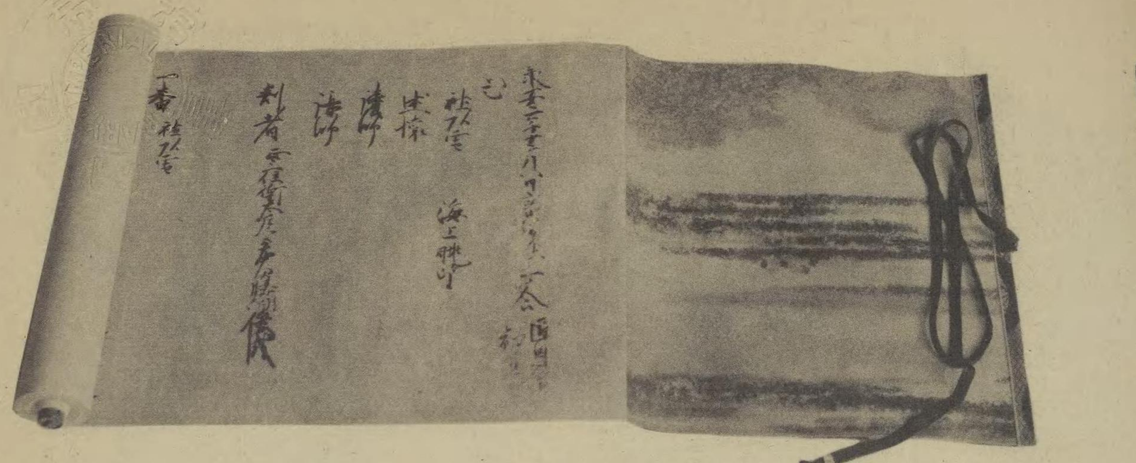
(1) 卷子本 卷子本

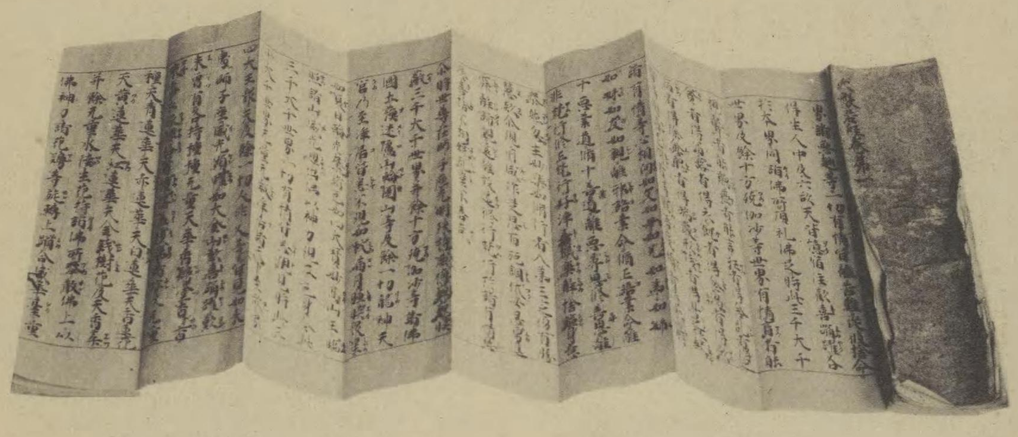
(巻子本)

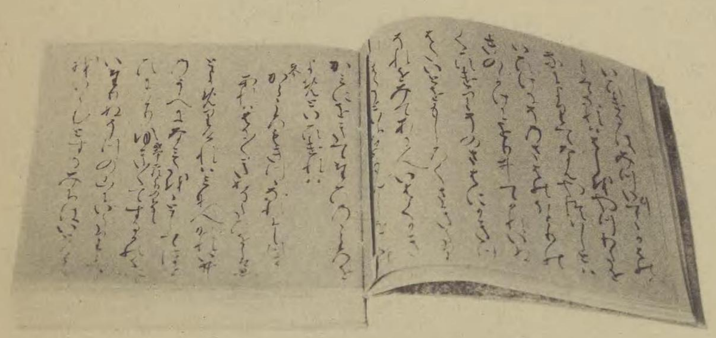
卷子本は、紙を横に長く繼ぎ合せて、これを軸に卷いたもので、我が國では古くから行はれた形式である。卷子本は、その性質上、卷き收めたり、讀んだりするのに不便であるから、後には次第に用ひられなくなつたが、古文書を圖書の中に加へる事については異議もあらうが、姑く加へておく。以上の外、圖書の形狀や目的から名づけた特殊の名目がある。册子本は、縱が長く横が短いのを常とする故、縱に比して横が長いのを「横本」と云ひ、婚嫁する婦女の携へ行く美裝本(國文學書が多い)を嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名稱としては、筆寫者その他關係者の校閲を經た、奥書ある本に起るべきものを證本と云ひ(後にはこれを正本とも書いたが、現今では本の正本もこれである)、漢文に、その訓讀を示す符號や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ(刊本參照)。

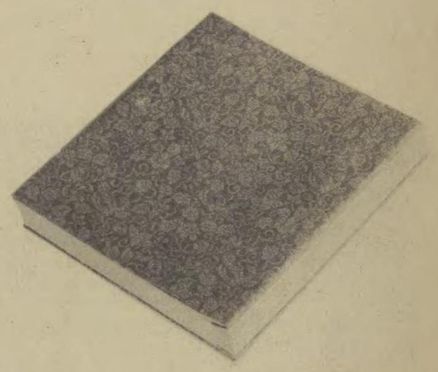
【圖書の用紙】その主なるものゝみを擧げる。古く奈良朝から用ひられたのは、麻紙・斐紙及び穀紙であつて、麻紙は麻の故布又は麻皮を以て作つたもの、斐紙は、もとかにひ」と稱へた植物、即ち雁皮の纖維から作つた雁皮紙であり、穀紙は楮紙とも云ひ、楮の皮で作つた楮紙である。麻紙は黄蘗の皮の煎汁で染めて黄麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混ぜ繼ぎ合せて書巻としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙(雁皮紙)と穀紙(楮紙)とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の册子にも本これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた斐紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもので、厚薄種々の類があり、

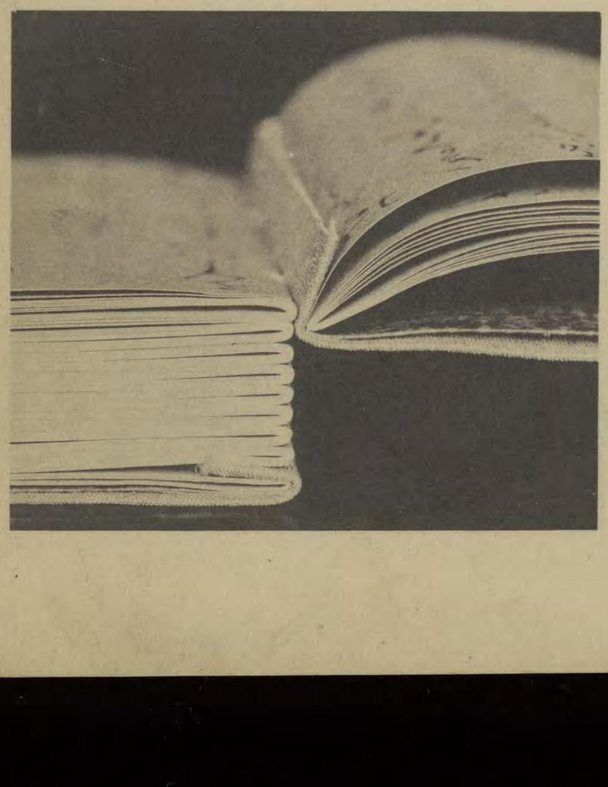
圖書一











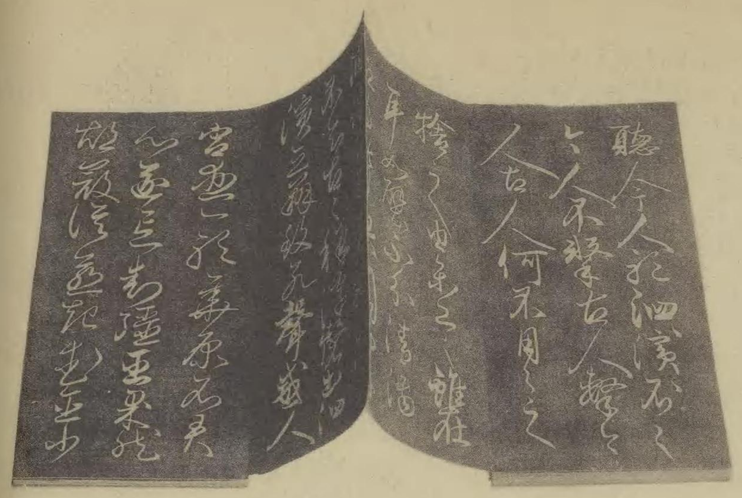
が多いを嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名稱では、開題者の校閲を經て、奥書又は刊記に記すべきものを證本と云ひ、(後にはこれを正本とも書いたが、漢文に、その訓讀を示す符號や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ(刊本參照)。

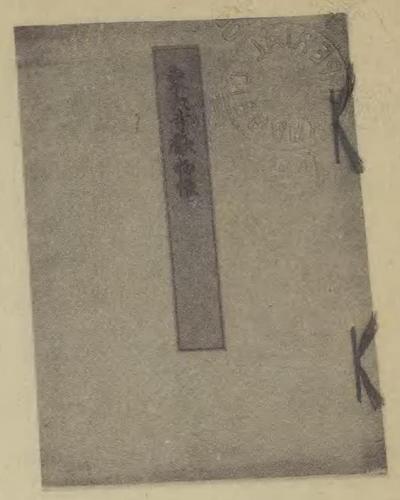
【圖1】構成と各部分の名稱　外面は表紙

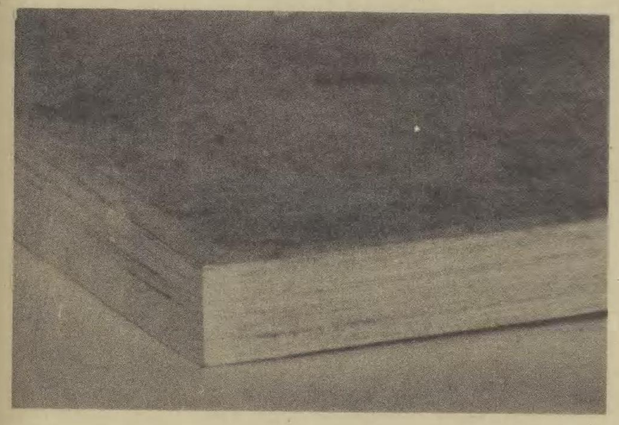
どある場合がある。これを總稱して附といふ事がある。本文の後には、後序・跋などがある事がある。書寫の年月氏名、來由などを記した所謂奥書(別項)がある事もある。かやうな記載は、多くは本文の後にあるけれども、又他の場所にある事もある。又刊本に存するその本刊行の年月・人名・版木等に關する記載は、これを刊記といふ。凝然の刊行圖書目錄にはその書の名・著者・發行者・印刷者等の名を記した一丁、又は一頁を最後に附する事となつてゐるが、それを奥附といふ。又圖書には、紙面に於ける文字(又は圖書)の外限を劃し、又は文字を

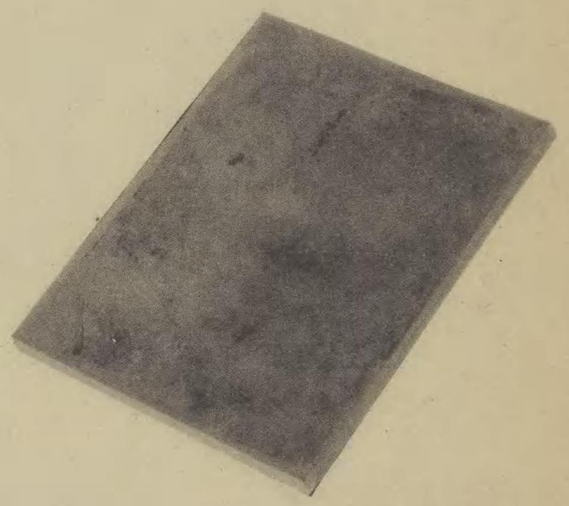
の内に、袋綴本には折目に(刊本では柱に)、稀には右又は左の面の、綴目の方の側の下方欄外にある。圖書には本文の外に、行間・欄外などに、朱や墨などを以て、見出し、釋義、他本との校合、その他の事項を書き加へる事がある。これを書入といふ。又本文を低くして上の部分を空頭と云ひ、そこに註釋がある場合にはこれを頭註といふ。又其處に繪畫のあるものもある。近來稀に本文の下方に註を置くものもあるこれを脚註と稱する。本文

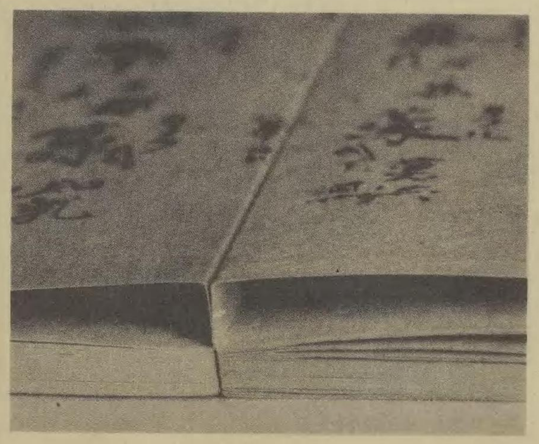
料紙には楮紙と雁皮紙とがあつた。楮紙は楮紙とも云ひ、楮の皮で作つた格紙である。楮紙は黄檗の皮の煎汁で染めて黄麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混ぜ漉き合せて雲紙としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙(雁皮紙)と穀紙(楮紙)とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の册子にも本これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた鳥の子紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもの、厚薄種々の類があり(その薄

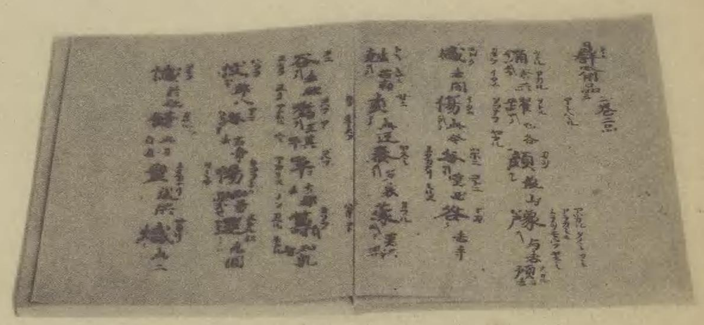


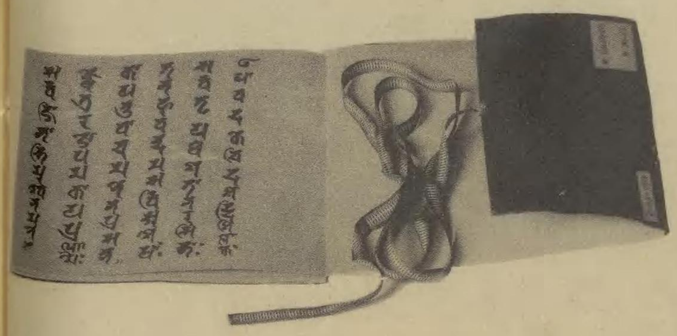


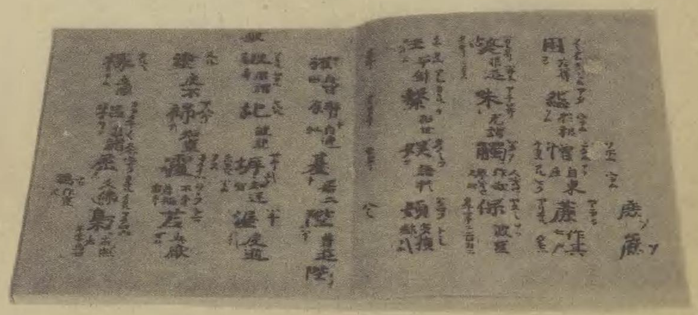


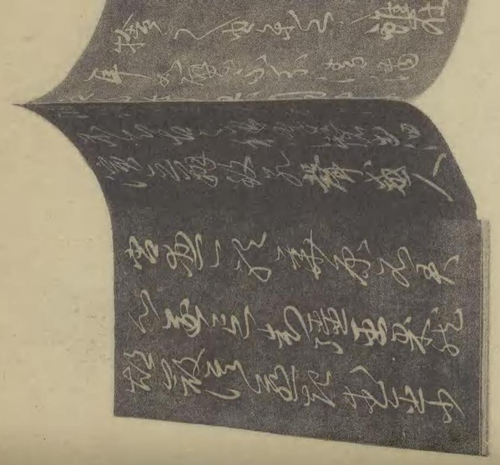


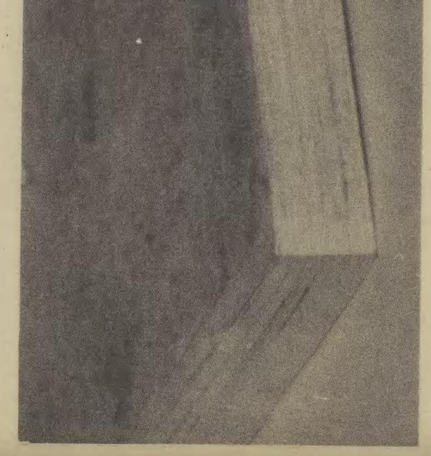


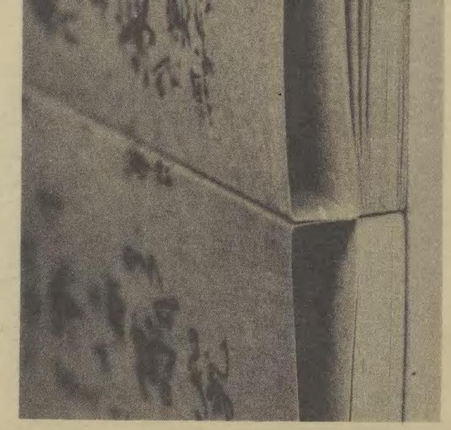


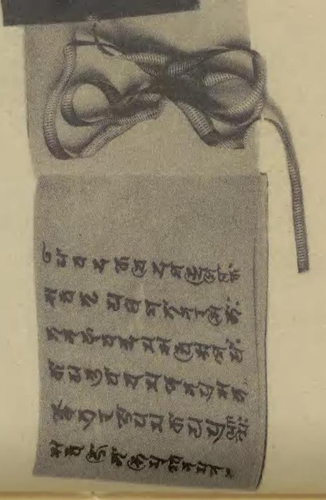










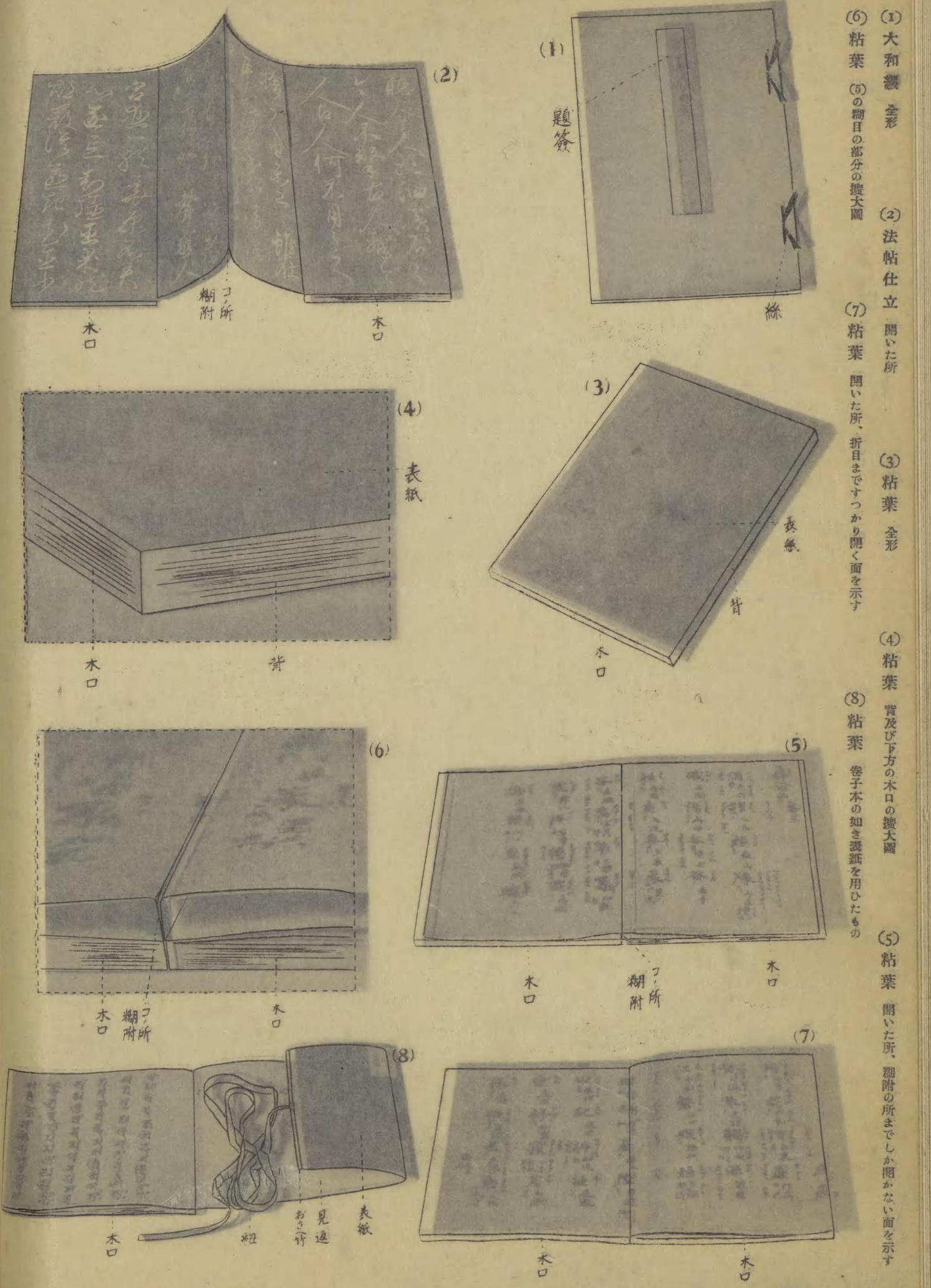


いものを[illegible]これで作つた色紙もあつた。[illegible]は[illegible]が用ひられたが、[illegible]は[illegible]の上に[illegible]をのり、その上に[illegible]模様を[illegible]いたもので、もと支那から輸入し、後、我が國で摸造したもので、いろ〳〵の色彩のものがある。平安朝には、これを料紙として作つた卷子本や册子本があつて、時にはその上に金銀泥を以て模様を畫いたものに箔を置いたり、又種々の色紙を破つて物の形に擬し、或は單重（ひとへかさね）の如く、色紙を重ねてその上に貼附するなど、技巧を凝らしたものもある。西本願寺本「三十六人家集」の如き。唐紙を圖書の料紙とすることは後久しく絶えたが、江戸初期に刊行せられた光悦本・嵯峨本には、これを摸したものを用ひた。奉書紙は檀紙（みちのくがみ）の系統に類するもので、檀紙は「まゆみ」の木から作り、皺文のある紙であるが、奉書紙は肌理の美なるものである。これは繪畫本などに用ひた。宿紙は故紙を原料とした所謂漉返しで、淡墨色を帶びたものであるが、これも古く書册に用ひられたことがある。江戸時代の黄表紙も亦漉返しで作つたものである。又古くは死者の冥福を祈る[illegible]、その生前に自ら書いた消息や圖繪の類を漉きかへして、これに經文を書寫する事もあつた。不用に歸した文書・消息などの裏をかへし、或はつぎ合せて卷子とし、或は折り重ねて袋綴として書册とすることがあつた。反故（ほうぐ）といふのは、元來かやうに用ひられた故紙をいつたのである。これも古くは故人の筆になるものを集めて、その裏に經を書寫し、又は印刷してその冥福を祈る事もあつた。支那の圖書に多く用ひられるのは唐紙で、黄褐色を帶び質の脆いものである。日本でもこれを摸造した。これを和唐紙といふ。漢籍の書にはこれを用ひたものがある。

〔圖書の沿革〕形態の變遷[illegible]述べる。我が國の圖書は、支那から輸入したものから始まる。それ故、勢ひ支那に於ける圖書の起原發達を顧みなければならない。今日文獻に徵し得る範圍に於て、圖書の發生及び發達に就いては、東洋・西洋互に聯絡がないと見るのが普通である。

〔支那〕支那の圖書で、今日までに發見された最古の形式は、細長く薄い木の札に字を書いた所謂木簡であつて、その實物は、近來西域地方から發掘せられた（羅振玉の「流沙墜簡」やシャバンヌ（Édouard Chavannes）の Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkistan Oriental, Oxford 1913 を見よ）。名を竹帛に垂る」の竹帛は、現今の圖書に當る。竹又は帛に文字を記したものが、古代支那の圖書であつたに違ひないが、竹は竹簡、即ち竹を以て作つた簡（ふだ）であらうし、帛は一種の布である。共に古代の實物は殘存せぬが、帛は清朝が將軍に下した命令書などに用ひた例があり、竹簡は木簡から推して存在を肯定し得る。竹と帛と何れが古いかは明かでないが、竹の方が一層簡單であるから、更に原始的のものと思はれる。この竹簡・木簡は、長い文章を記するには一箇では足りない故、數個又は數十個をも用ひたであらうが、これ等を誤りなく連續せしめねばならぬ必要上から、遂に絲又は紐革の類を以て一二個所を連結する事になつた。「册」といふ文字が、もとその簡を編んだ形を摸したものである事は、古來の定説である。我々は、これによつて最古の圖書形態を推察し、圖書發生の過程を推測し得る。尤も帛を用ひたものも、同時に存在したかも知れない。（石に文字を刻する事も、勿論早い時代から行はれたに相違ないが、今それは圖書の範圍外とする）。この簡と帛が何時頃發明され、使用され、何時頃まで續いたかは未だ決定し得ぬが、ただ紙の發明使用以前に使用せられ、紙が代つて用ひられると共に衰へ、遂に廢滅したことは疑ひない。紙は東漢の和帝の時（西暦九〇—一〇五）、蔡倫が樹皮・故帛・魚網・麻繒などを以て初めて作つたと歴史に傳へられてゐる。思ふに紙は必ずしも蔡倫一人の工夫考案で出來たのではなく、當時支那の各地方に於て、既に紙に近いものの發明があり、蔡倫はそれを大成して多分白紙の製造に成功し、その功を後世に認められたのであらう。紙の發明は圖書の發達に非常な影響を及ぼした。その後は、圖書には特別の場合を除く外、殆ど全く紙が使用され、隨つて圖書の形態も全く一變した。紙を用ひた圖書の最初の形式は、勿論卷物、即ち卷子に相違ない。前時代の圖書、即ち竹簡を横に並べて編んだものは、使用せぬ時は當然卷いて置いたものであらうから、その方法を紙の場合に襲用して、紙を横に繼ぎ合せ、これを卷くやうにしたであらう。これ即ち我々が今日卷子本と稱する圖書の形式の起原である。この卷子本はこれを讀むには卷いたり舒べたりしなければならぬ故、非常に長い場合に任意の處を閲讀せんとするには頗る不便である。この不便を除くため、卷物を卷首又は卷末から一定の長さに折り疊んで折本となし、卷中何處を閲讀するにも便利な形式を案出した。それから進んで紙を卷子本の如く繼ぎ合せる事を廢して、一葉一葉を重ね、これを何等かの方法で綴るといふ方法が案出せられて、册子本が出來、卷子本とは全く趣を異にする形式となつたのである。册子本にはこれを綴る方法に、糊を用ひるものと、絲を用ひるものと二種あるが、糊を用ひるものは、紙を[illegible]つ縱に二つ折として幾枚も重ね、一紙毎に次の紙と相對する面の何處かに糊をつけて接合せしめるのであるが、その糊をつける場所が折目の傍である場合には、所謂粘葉（別項）となり、折目と反對の[illegible]端である場合は、法帖式の本となる。絲を以てするものは、現今普通に見る和裝本の袋綴といふ綴法である。この三種の形式の初めの時代はまだ明かでないが、粘葉は唐代から現はれたものともおもはれ、法帖式及び袋綴は宋代には既にあつたもののやうである。さうしてその後、袋綴が次第に勢力を得て、遂に圖書に普通の形式となつた。

〔日本〕日本で初めて支那から輸入した當時の圖書の形態は、紙の卷子本であつたらう事は殆ど疑ひない。當時は恐らく他の形態のものは、未だ支那にも發達してゐなかつたかと思はれる。奈良朝に於ても、圖書は佛經も漢籍も圖畫も、この形式のものばかりであつたらしい。平安朝にもこの種のものが多く、刊本もこの形式であるが、この時代にはまた册子本が用ひられるやうになつた。即ち紙を一枚づつ縱に二つ折として積み重ね、折目に近く糊をつけて接合する所謂粘葉本で、これは多分支那から傳はつたものであらうと思はれるが、卷子本が紙の表面にしか文字を書かないに對して、これは表裏兩面に書く故、その分量が少くなつて簡便であるから、略式の場合に卷子本の代りに用ひられたらしく、佛書漢籍など、主として漢文のものに多く、また



(1) 大和綴 全形
(2) 法帖仕立 開いた所
(3) 粘葉 全形
(4) 粘葉 背及び下方の木口の擴大圖
(5) 粘葉 開いた所、糊附の所までしか開かない面を示す
(6) 粘葉 (5)の糊目の部分の擴大圖
(7) 粘葉 開いた所、折目まですつかり開く面を示す
(8) 粘葉 巻子本の如き表紙を用ひたもの

いものを薄様といった)、これで作つた色紙もあつた。平安朝には、唐紙が用ひられたが、これは雁皮紙の上に胡粉をぬり、その上に雲母で模様を置いたもので、もと支那から輸入し、後、我が國で摸造したもので、いろ〳〵の色彩のものがある。平安朝には、これを料紙として作つた巻子本や册子本があつて、時にはその上に金銀泥を以て模様を畫いたものに箔を置いたり、又種々の色紙を破つて物の形に擬し、或は單重の如く、色紙を重ねてその上に貼附するなど、技巧を凝らしたものもある(西本願寺本「三十六人家集」の如き)。唐紙を圖書の料紙とすることは後久しく絶えたが、江戸初期に刊行せられた光悦本・嵯峨本には、これを摸したものを用ひた。奉書紙は檀紙の系統に類するもので、檀紙は「まゆみ」の木から

ふ。漢籍の書にはこれを用ひたものがある。

【圖書の沿革】形態の變遷を主として述べる。

我が國の圖書は、支那から輸入したものから始まる。それ故、勢ひ支那に於ける圖書の起原發達を顧みなければならない。今日文獻に徵し得る範圍に於て、圖書の發生及び發達に就いては、東洋・西洋互に聯絡がないと見るのが普通である。

〔支那〕支那の圖書で、今日までに發見された最古の形式は、細長く薄い木の札に字を書いた所謂木簡であつて、その實物は、近來西域地方から發掘せられた(羅振玉の「流沙墜簡」やシャバンヌ(Édouard Chavannes) の Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkistan Oriental. Oxford 1913 を見よ)。「名を竹帛に垂る」の竹

用ひたものも、同時に存在したかも知れない(石に文字を刻する事も、勿論早い時代から行はれたに相違ないが、今それは圖書の範圍外とする)。この簡と帛が何時頃發明され、使用され、何時頃まで續いたかは未だ決定し得ぬが、ただ紙の發明使用以前に使用せられ、紙が代つて用ひられると共に衰へ、遂に廢滅したことは疑ひない。紙は東漢の和帝の時(西曆九〇一一〇五)、蔡倫が樹皮・故帛・魚網・麻繒などを以て初めて作つたと歷史に傳へられてゐる。思ふに紙は必ずしも蔡倫一人の工夫考案で出來たのではなく、當時支那の各地方に於て、既に紙に近いものの發明があり、蔡倫はそれを大成して多分白紙の製造に成功し、その功を後世に認められたのであらう。紙の發明は圖書の發達に非常な影響を及ぼした。その

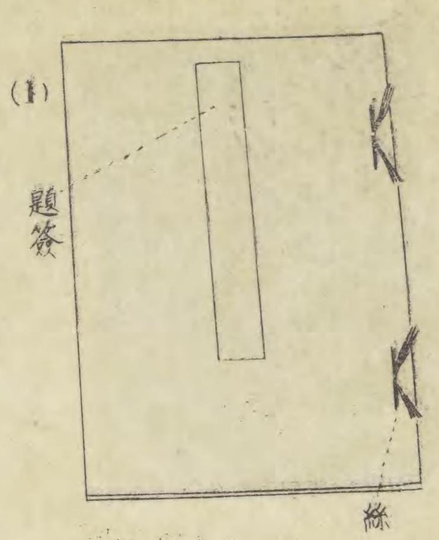
せられて、册子本が出來、巻子本とは全く趣を異にする形式となつたのである。册子本にはこれを綴る方法に、糊を用ひるものと、絲を用ひるものと二種あるが、糊を用ひるものは、紙を一枚づつ縦に二つ折として幾枚も重ね、一紙毎に次の紙と相對する面の何處かに糊をつけて接合せしめるのであるが、その糊をつける場所が折目の傍である場合には、所謂粘葉(別項)となり、折目と反對の側の紙端である場合は、法帖式の本となる。絲を以てするものは、現今普通に見る和裝本の袋綴といふ綴法である。この三種の形式の初めの時代はまだ明かでないが、粘葉は唐代から現はれたものともおもはれ、法帖式及び袋綴は宋代には既にあつたもののやうである。さうしてその後、袋綴が次第に勢力を得て、遂に圖

いものを薄様といった)、これで作つた色紙もあつた。平安朝には、唐紙が用ひられたが、これは雁皮紙の上に胡粉をぬり、その上に雲母で模様を置いたもので、もと支那から輸入し、後、我が國で摸造したもので、いろ〳〵の色彩のものがある。平安朝には、これを料紙として作つた巻子本や册子本があつて、時にはその上に金銀泥を以て模様を畫いたものに箔を置いたり、又種々の色紙を破つて物の形に擬し、或は單重の如く、色紙を重ねてその上に貼附するなど、技巧を凝らしたものもある(西本願寺本「三十六人家集」の如き)。唐紙を圖書の料紙とすることは後久しく絶えたが、江戸初期に刊行せられた光悦本・嵯峨本には、これを摸したものを用ひた。奉書紙は檀紙の系統に類するもので、檀紙は「まゆみ」の木からふ。漢籍の書にはこれを用ひたものがある。

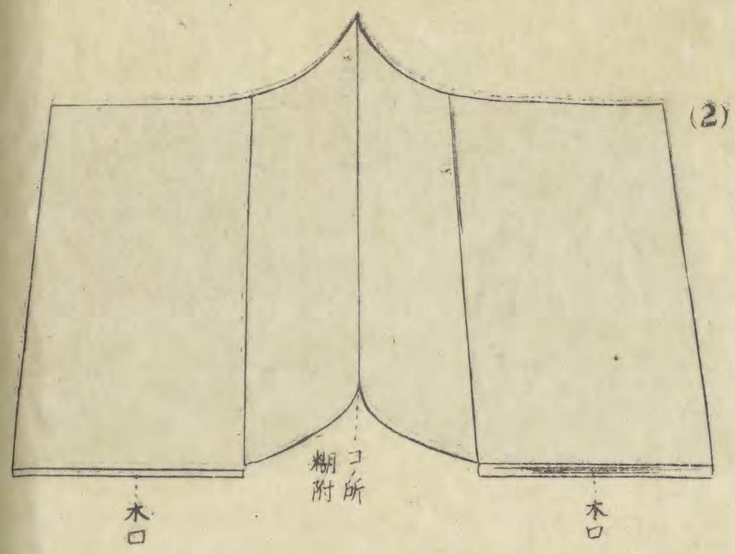
【圖書の沿革】形態の變遷を主として述べる。我が國の圖書は、支那から輸入したものから始まる。それ故、勢ひ支那に於ける圖書の起原發達を顧みなければならない。今日文獻に徵し得る範圍に於て、圖書の發生及び發達に就いては、東洋・西洋互に聯絡がないと見るのが普通である。

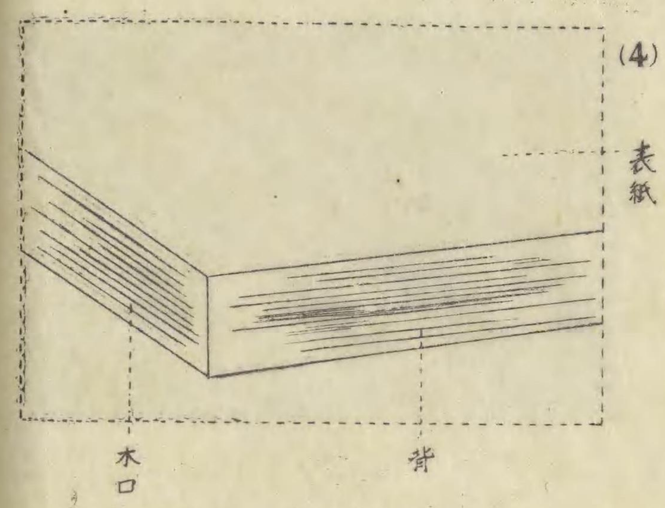
〔支那〕支那の圖書で、今日までに發見された最古の形式は、細長く薄い木の札に字を書いた所謂木簡であつて、その實物は、近來西域地方から發掘せられた(羅振玉の「流沙墜簡」やシャバンヌ(Édouard Chavannes)の Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkistan Oriental. Oxford 1913 を見よ)。「名を竹帛に垂る」の竹・用ひたものも、同時に存在したかも知れない(石に文字を刻する事も、勿論早い時代から行はれたに相違ないが、今それは圖書の範圍外とする)。この簡と帛が何時頃發明され、使用され、何時頃まで續いたかは未だ決定し得ぬが、ただ紙の發明使用以前に使用せられ、紙が代つて用ひられると共に衰へ、遂に廢滅したことは疑ひない。紙は東漢の和帝の時(西曆九〇一一〇五)、蔡倫が樹皮・故帛・魚網・麻繒などを以て初めて作つたと歴史に傳へられてゐる。思ふに紙は必ずしも蔡倫一人の工夫考案で出來たのではなく、當時支那の各地方に於て、既に紙に近いものの發明があり、蔡倫はそれを大成して多分白紙の製造に成功し、その功を後世に認められたのであらう。紙の發明は圖書の發達に非常な影響を及ぼした。その

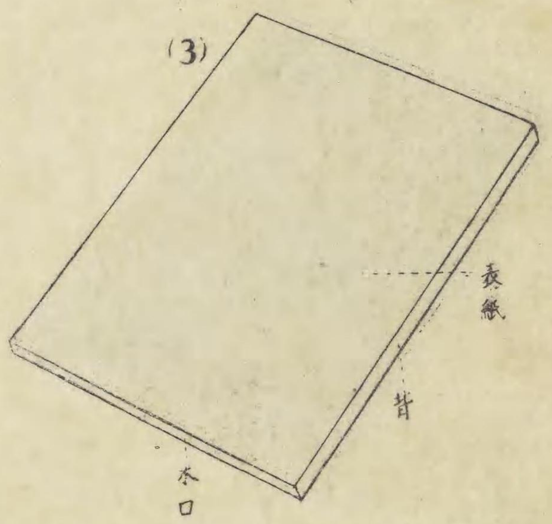
せられて、册子本が出來、巻子本とは全く趣を異にする形式となつたのである。册子本にはこれを綴る方法に、糊を用ひるものと、絲を用ひるものと二種あるが、糊を用ひるものは、紙を一枚づつ縦に二つ折として幾枚も重ね、一紙毎に次の紙と相對する面の何處かに糊をつけて接合せしめるのであるが、その糊をつける場所が折目の傍である場合には、所謂粘葉(別項)となり、折目と反對の側の紙端である場合は、法帖式の本となる。絲を以てするものは、現今普通に見る和裝本の袋綴といふ綴法である。この三種の形式の初めの時代はまだ明かでないが、粘葉は唐代から現はれたものともおもはれ、法帖式及び袋綴は宋代には既にあつたもののやうである。さうしてその後、袋綴が次第に勢力を得て、遂に圖

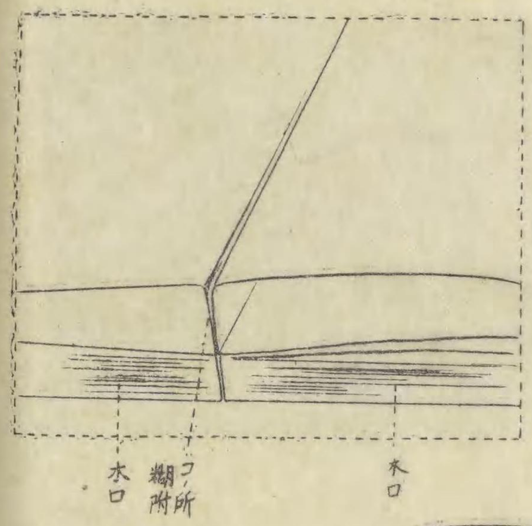


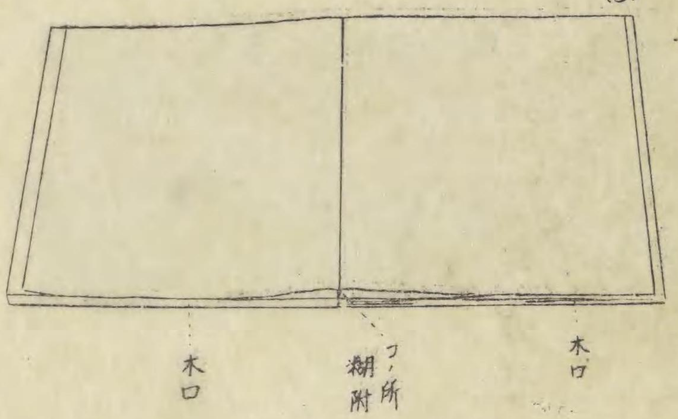
(1) 大和綴 全形　(2) 法帖仕立 開いた所　(3) 粘葉 全形
(4) 粘葉 背及び下方の木口の擴大圖　(5) 粘葉 開いた所、糊附の所までしか開かない面を示す
(6) 粘葉 巻子本の如き裁紙を用ひたもの　(7) 粘葉 開いた所、折目まですつかり開く面を示す
(8) 粘葉 糊附の所、折目と反對の側の紙端

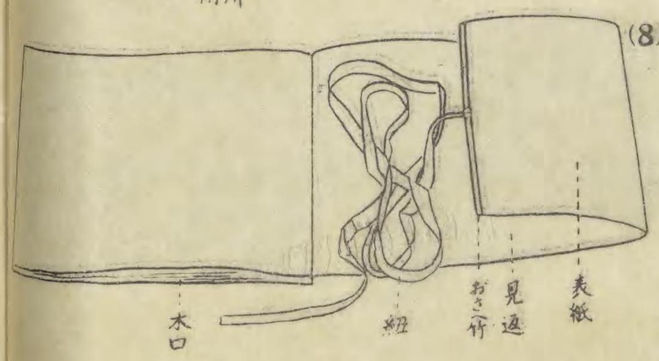


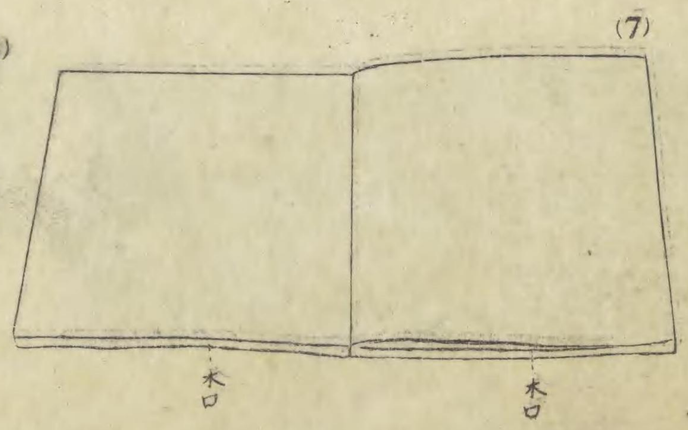












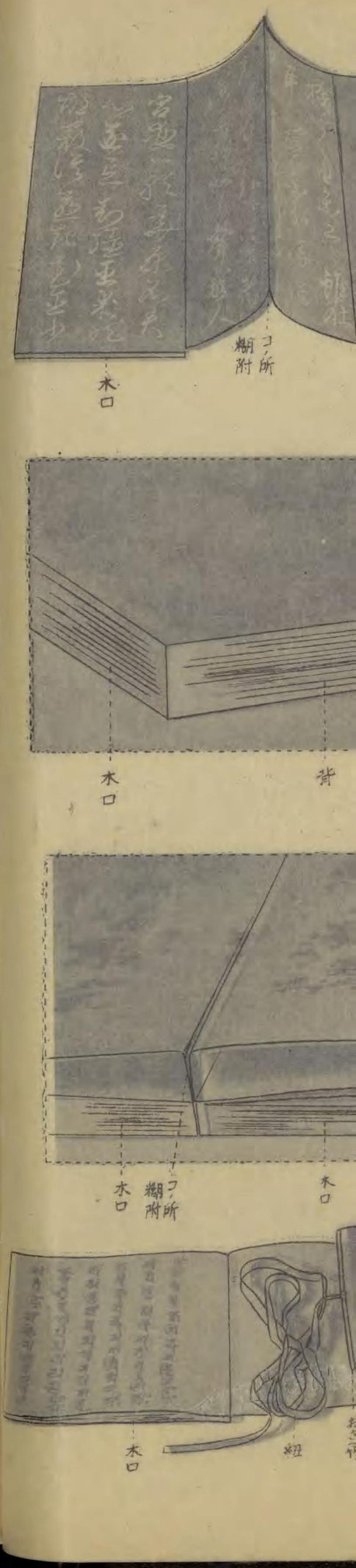
いものを薄様といつた)、これで作つた色紙もあつた。平安朝には、唐紙が用ひられたが、これは雁皮紙の上に胡粉をぬり、その上に雲母で模様を置いたもので、もと支那から輸入し、後、我が國で摸造したもので、いろ〳〵の色彩のものがある。平安朝には、これを料紙として作つた卷子本や册子本があつて、時にはその上に金銀泥を以て模様を畫いたものに箔を置いたり、又種々の色紙を破つて物の形に擬し、或は單重の如く、色紙を重ねてその上に貼附するなど、技巧を凝らしたものもある(西本願寺本「三十六人家集」の如き)。唐紙を圖書の料紙とすることは後久しく絶えたが、江戸初期に刊行せられた光悦本・嵯峨本には、これを摸したものを用ひた。奉書紙は檀紙の系統に類するもので、檀紙は「まゆみ」の木から作り、皺文のある紙であるが、奉書紙は肌理の美なるものである。これは繪畫本などに用ひた。宿紙は故紙を原料とした所謂漉返しで、淡墨色を帶びたものであるが、これも古く書册に用ひられたことがある。江戸時代の黄表紙も亦漉返しで作つたものである。又古くは死者の冥福を祈るため、その生前に自ら書いた消息や圖繪の類を漉きかへして、これに經文を書寫する事もあつた。不用に歸した文書・消息などの裏をかへし、或はつぎ合せて卷子とし、或は折り重ねて袋綴として書册とすることがあつた。反故といふのは、元來かやうに用ひられた故紙をいつたのである。これも古くは故人の筆になるものを集めて、その裏に經を書寫し、又は印刷してその冥福を祈る事もあつた。支那の圖書に多く用ひられるのは唐紙で、黄褐色を帶び質の脆いものである。日本でもこれを摸造した。これを和唐紙といふ。漢籍の書にはこれを用ひたものがある。

【圖書の沿革】形態の變遷を主として述べる。

我が國の圖書は、支那から輸入したものから始まる。それ故、勢ひ支那に於ける圖書の起原發達を顧みなければならない。今日文獻に徵し得る範圍に於て、圖書の發生及び發達に就いては、東洋・西洋互に聯絡がないと見るのが普通である。

【支那】支那の圖書で、今日までに發見された最古の形式は、細長く薄い木の札に字を書いた所謂木簡であつて、その實物は、近來西域地方から發掘せられた(羅振玉の「流沙墜簡」やシャバンヌ(Édouard Chavannes) の Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkistan Oriental. Oxford 1913 を見よ)。「名を竹帛に垂る」の竹・帛は、現今の圖書に當り、竹又は帛に文字を記したものが、古代支那の圖書であつたに違ひないが、竹は竹簡、即ち竹を以て作つた簡(ふだ)であらうし、帛は一種の布である。共に古代の實物は殘存せぬが、帛は清朝が將軍に下した命令書などに用ひた例があり、竹簡は木簡から推して存在を肯定し得る。竹と帛と何れが古いかは明かでないが、竹の方が一層簡單であるから、更に原始的のものと思はれる。この竹簡・木簡は、長い文章を記するには一箇では足りない故、數個又は數十個を用ひたであらうが、これ等を誤りなく連續せしめねばならぬ必要上から、遂に絲又は紐革の類を以て一二個所を連結する事になつた。「册」といふ文字が、もとその簡を編んだ形を摸したものである事は、古來の定説である。我々は、これによつて最古の圖書形態を推察し、圖書發生の過程を推測し得る。尤も帛も用ひたものも、同時に存在したかも知れない(石に文字を刻する事も、勿論早い時代から行はれたに相違ないが、今それは圖書の範圍外とする)。この簡と帛が何時頃發明され、使用されたかは未だ決定し得ぬが、ただ紙の發明使用以前に使用せられ、紙が代つて用ひられると共に衰へ、遂に廢滅したことは疑ひない。紙は東漢の和帝の時(西曆九〇一一〇五)、蔡倫が樹皮・故帛・魚網・麻繒などを以て初めて作つたと歷史に傳へられてゐる。思ふに紙は必ずしも蔡倫一人の工夫考案で出來たのではなく、當時支那の各地方に於て、既に紙に近いものの發明があり、蔡倫はそれを大成して多分白紙の製造に成功し、その功を後世に認められたのであらう。紙の發明は圖書の發達に非常な影響を及ぼした。その後は、圖書には特別の場合を除く外、殆ど全く紙が使用され、隨つて圖書の形態も全く一變した。紙を用ひた圖書の最初の形式は、勿論卷物、即ち卷子に相違ない。前時代の圖書、即ち竹簡を横に並べて編んだものは、使用せぬ時は當然卷いて置いたものであらうから、その方法を紙の場合に襲用して、紙を横に繼ぎ合せ、これを卷くやうにしたであらう。これ即ち我々が今日卷子本と稱する圖書の形式の起原である。この卷子本はこれを讀むには卷いたり舒べたりしなければならぬ故、非常に長い場合に任意の處を閲讀せんとするには頗る不便である。この不便を除くため、卷物を卷首又は卷末から一定の長さに折り疊んで折本となし、卷中何處を閲讀するにも便利な形式を案出した。それから進んで紙を卷子本の如く繼ぎ合せる事を廢して、一葉一葉を重ね、これを何等かの方法で綴るといふ方法が案出せられて、册子本が出來、卷子本とは全く趣を異にする形式となつたのである。册子本にはこれを綴る方法に、糊を用ひるものと、絲を用ひるものと二種あるが、糊を用ひるものは、紙を一枚づつ縦に二つ折として幾枚も重ね、一紙毎に次の紙と相對する面の何處かに糊をつけて接合せしめるのであるが、その糊をつける場所が折目の傍である場合には、所謂粘葉(別項)となり、折目と反對の側の紙端である場合は、法帖式の本となる。絲を以てするものは、現今普通に見る和裝本の袋綴といふ綴法である。この三種の形式の初めの時代はまだ明かでないが、粘葉は唐代から現はれたものともおもはれ、法帖式及び袋綴は宋代には既にあつたもののやうである。さうしてその後、袋綴が次第に勢力を得て、遂に圖書に普通の形式となつた。

【日本】日本で初めて支那から輸入した當時の圖書の形態は、紙の卷子本であつたらう事は殆ど疑ひない。當時は恐らく他の形態のものは、未だ支那にも發達してゐなかつたかと思はれる。奈良朝に於ても、圖書は佛經も漢籍も圖書も、この形式のものばかりであつたらしい。平安朝にもこの種のものが多く、刊本もこの形式であるが、この時代にはまた册子本が用ひられるやうになつた。即ち紙を一枚づつ縦に二つ折として積み重ね、折目に近く糊をつけて接合する所謂粘葉本で、これは多分支那から傳はつたものであらうと思はれるが、卷子本が紙の表面にしか文字を書かないに對して、これは表裏兩面に書く故、その分量が少くなつて簡便であるから、略式の場合に卷子本の代りに用ひられたらしく、佛書漢籍など、主として漢文のものに多く、また



「和漢朗詠集」「萬葉集」「古今集」のやうな詩歌集にも用ひられた。また册子本の一種である數枚の紙を重ねて中央より縦に二つに折つたもの幾折かを、折目に絲を通して綴り合せた所謂胡蝶裝(別項)のものは(これも文字を表裏兩面にかく)、遲くも平安末期から行はれ、主として物語や歌集の類に用ひられた。鎌倉時代に於ては、前代を承けて卷子本もかなり行はれたが、その代りにまた折本が用ひられる事が多く、粘葉本は盛んに行はれ、刊本でこの形式のものも少くない。胡蝶裝も歌書物語の類には相變らず用ひられた。さうしてこの時代に於て擡頭して來たのは袋綴で、これは紙を毎丁二つ折として重ね、折目と反對の側の紙端に近く孔をあけて絲で綴ぢるもので、いくらかは平安朝からも行はれたが、この時代から漸く多くなつた。室町時代以後は、卷子本は次第に衰へて、遂に普通には用ひられなくなり、折本もだん〳〵佛經に限られるやうになり、粘葉本も勢力を失つて佛者の間に纔に殘つたが、江戸時代以後は殆ど絕滅し、胡蝶裝も、貴紳の間に殘存するに過ぎなくなつた。これ等に代つて勢力を占めたものは袋綴であつて、室町時代から江戸時代に入つては、殆ど圖書形態の典型的のものとなり、刊本も大概この形式による事となつた。これは元明以來の支那の普通の刊本がこの形式をとつたから、その影響を受けたものと思はれ、絲のかけ方も支那の刊本の如く、背及び木口の方にまはして綴ぢる所謂明朝綴が標準的のものとなり(今、普通の和裝本に見る綴方である)、絲を背にまはさずして表紙の上で結び合せる所謂大和綴は、まゝ用ひるに過ぎない。又紙を一枚づつ二つ折として重ね、折目と反對の紙端を糊を以て貼り合せる法帖式の製本も、法帖の如き特殊のものに限つて用ひられた。かくの如く支那から輸入された圖書は、日本に於て種々の形態上の變遷を經てゐるのであるが、明治以後西洋文明の輸入と共に西洋紙が輸入せられ、後には作られ、圖書裝幀法も亦西洋流の所謂西洋綴(洋綴)となつて、圖書に大變革を來した。

〔西洋〕西洋に於ける文字の使用は、極く古い時代からであるが、圖書として今に殘存せるものは、バビロニア、アッシリヤに發掘されたクレータブレット(粘土版)を最初とせねばならぬ。その主なるものには、西曆一八五〇年レヤード(Layard)が發見したニネベのアスル・バニ・パル(Asurbanipal 669—625)王の宮趾中の一室から得たものである。竪一尺五分横一寸、厚さ四五分位の粘土やうのものに、何か土よりも堅い金屬か木材のやうなもので、當時の文字を彫りつけ、後それを多分燒いて煉瓦のやうにしたものである。これは長い文章を記するには、數個、數十個、數百個を用ひた。次に發明されたのは埃及に於けるパピルス papyrus である。これはパピルスといふ植物(葦の一種)の皮の内側の膜を細く剝いで、いくつも並べて接續させたものを更に縦横に重ね合せて壓搾して一枚とし、その表に文字を記したのであつて、長いものは繼ぎ合せて卷物とした。このパピルスの語は、紙を意味する現今英語のペーパー(paper)、獨語のパピーア(Papier)の根源であるが、現今の西洋の紙は、實質上からはこのパピルスの系統を引いたものではなく、全く別系統に發達したものである。さうしてパピルスはその後進化することなく、別種のものがこれに代つて用ひられた。即ち羊皮を精製したパーチメント(parchment)と、犢の皮を精製したベラム(vellum)であつて、これにインキ類で文字を書いた時代はかなり長く、ギリシヤからローマを經て殆ど最近迄もあり、現在ですら貴重なものにはこれ等の獸皮を用ひる。パーチメント、ベラムは多く一枚が用ひられたが、現存品中にも數葉を綴つて圖書の形式をなしたものがある。但しこれ等は頗る厚手で、折るといふことは不可能に近いから自然卷くといふ形式をとつた。この卷物時代を過ぎた後は、現今の洋綴と同樣に綴るやうになつたのである(第六世紀の中期には、殆ど現今のと同樣なものが出來てゐた)。このパーチメント、ベラムに代つて初めて眞の紙が用ひられたのであるが、西洋の紙は東洋から學んだのである。即ち唐の玄宗の天寶十年(西曆七五一)に、波斯の支那國境に事變が起り、アマルカンドの亞剌比亞人は支那人を擄にしてその町に引上げたが、その支那人が紙を抄する方法を知つてゐて、これを亞剌比亞人に教へた。その後その地方人は段々と工夫を重ねて、麻布の襤褸を片碎してこれを製紙の材料として用ひるに成功した。十世紀の頃になつて、アラビヤ文明が西漸して西歐基督教國に入ると同時に、紙は最も早く西班牙に入り、益々製法が發達進歩して後、南西獨逸・佛蘭西・英吉利に及んだのである。かやうにして得た紙をパーチメント、ベラムの代りに、圖書に用ひたのであるが、圖書の形態は、前時代を襲うて現在の西洋綴の形式となつたのである。それは數葉の紙を重ねて折り、幾折も重ねて每折の折目に孔をあけて絲で綴り合せたもので、偶然に我が國に古く用ひられた絲を以てする胡蝶裝と一致する。

【現代の日本】この西洋紙と西洋綴が我が國に入つて次第に勢力を得、現今西洋紙に印刷せらるゝ圖書は、稀れに明朝綴・大和綴もあるが、大抵は西洋綴を以てし、クロース或は皮を以て表紙を作り、又は表紙をクロースに、背のみを皮にし、背に金文字又は色文字などを用ひて、書名・著者名・發行者名等を印する。併し現今日本に用ひらるゝ圖書の用紙は和洋兩種で、裝幀の形式も自然兩樣並用の姿である。將來も用紙に變化を來さない以上、これ等兩系統の裝幀法も變化しないものと見られる(なほ圖書の沿革については「寫本」「刊本」參照)。

【參考】*Jahrbuch der Deutschen Vereins für Buchwesen und Schrifte.* (Buch und Schrift) 1. Jahrgang. 1927.

○右文故事 近藤正齋 ○訪書餘錄 和田維四郎 ○南葵文庫創立紀念會陳列目錄 ○版畫禮替 稻葉君山 ○紙譜 木村青竹 ○紙漉重寶記 堀越壽助編 ○和漢書の裝潢について 吉澤義則(圖書館雜誌大正五ノ七)

〔植松・橋本〕

俊賴 (としより) 歌人(中古三十六歌仙の一)

【姓】源 【生歿】未詳。天治元年(一一二四)「金葉集」撰修の命を奉じたのが六十七・八歳とする説がある。【家系】經信(別項)の子、俊惠の父 【閲歷】初め六位藏人右少將であつたが、五位に叙して殿上を允された(家集)。仕途は澁滯したものか、「下臈に越えられて歎き侍りける頃月のあかゝりけるに夜周防内侍のもとにまかりて云々」(家集)とある。寛治八年の高陽院七番歌合には左京權大夫、康和年中の堀河院太郎百首には木工頭、永久六年の六條宰相家歌合及び以後の歌合には前木工頭とある。後年さるゆかりで伊勢に下つて齋宮に仕へ、伊勢でよんだ歌が家集に多く見える。この齋宮は樋口齋宮であらう。堀河院の御時は宮中歌人として御寵愛を蒙つたものか、家集には「堀河院の御時云々」と記した詞書が多く、院の仰せによつて女房に具して花山の花を下見に行つたこと、高陽院殿にて舟遊があつた時汀に立つて歌をよんだこと、金椀を鳴らして響の内に歌をよめと仰せられたこと等を記してゐる。後には經信の引退してゐた近江の田上に閑居し、田園生活を謳みながら不遇を歎じた。「金葉集」の終りに、「七十になるまでつかさもなくて萬にあゝしきことを思ひつゞけて、七十にみちぬる汐の濱物久しく世にも埋れぬるかな」とあつて、家集にはこの歌に「金葉集の奥に御覽じ哀とおぼしくてかきつけて侍りける」と詞書を附してゐる。又家集には「恨躬恥つた某俊との關係を見ると、彼の人物がよくわかる。某俊は學識が有り、古典主義者で、多少偏狹であつた。俊賴は見識があり、自由主義的で、可なり包容的であつた。共に歌を新しくしようとする機運を持つてゐるが、個性の相違は二つの權威の對立となつたやうに見える。元永元年の內大臣家歌合は、俊賴・基俊が共判してゐるが、兩人の態度の相違を明瞭に示してゐる。俊賴は自らの歌は多くの場合負又は持とし、明かに勝である場合も判を言ひ切つてゐないが、某俊は遠慮なく自らの歌を勝とし、強ひて俊賴の歌を負としてゐる。彼の歌に、「信濃なる木曾路

寬治八年 高陽院七番歌合の作者。
承德元年 經信薨ず。
康和年中 堀河院太郎百首の作者。
天仁三年 山家五番歌合の作者。

【著作】俊賴髓腦 ○家集「散木奇歌集」十卷(各別項)○勅撰集に入る歌は金葉三十五、詞花十一、千載五十二、新古今十一、新勅撰集以下十三代集に亙つて凡そ九十二首、合計凡そ二百一首○私撰集に入るもの後葉集二十五、續詞花集十一、月詣集七。

【歌風】彼は題材に於ても表現に於ても自由な態度をとり、沈潛された情熱、餘裕のある心境を通してすべての題材と用語とがよくこなされてゐる。彼は典型美を標準としないで、素朴な氣持や生活をそのまゝ出さうとしてゐる。如何なるものも興味をもつて眺めるやうな拘束されない落ちついた心をもつて、人生を觀、自己を省み、人生の寂寥と不遇の悲哀とを感じ、技巧のない率直な心で山川草木を歌つてゐる。貫之と躬恒と何れが優るかの問

久藏 ○國文學研究史 野村八良 ○六條家の歌人とその歌學思想 能勢朝次(國語國文の研究 昭和三ノ一) ○俊賴及び基俊の研究 金子實英(同上)

俊賴髓腦 (としよりずゐなう) 歌學書 二卷

【著者】源俊賴

【名稱】「俊祕抄」「俊賴口傳集」「俊賴無名抄」ともいふ。【成立】平安朝後期 【諸本】傳本題名區々であつて、「無名抄」の名は「童蒙抄」「袖中抄」「和歌色葉集」「八雲御抄」等に見えるのであるが、現行傳本にはあまり見當らない。「俊賴髓腦」と題する本と「俊祕抄」と題する本とは、大體同じで著しい相異は見えない。歌學文庫第二編所收のものは「俊祕抄」と題し、原本は內閣文庫藏本で壽永二年の奥書がある。帝國圖書館に藏する「俊賴髓腦」と題する本は嘉禎三年・應永十六年の奥書がある。

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

時、彼は長老の故を以て初献を献じ、俊成にも定家にも崇拝された。

その影響も大きかつた。【人物】 歌人は顕季・公實・國信・長實・行宗・隆源・肥後等であり、中納言・中務卿・忠通父子からも愛された。俊成等の代作したものもあり、元永元年顕季が人麿影供を催したのは、俊成が時、彼は長老の故を以て初献を献じ、俊成にも定家にも崇拝されたので後代に重視された。【人物】 歌人は顕季・公實・國信・長實・行宗・隆源・肥後等であり、中納言・中務卿・忠通父子からも愛された。俊成等の代作したものもあり、元永元年顕季が人麿影供を催したのは、

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	
元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	
元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよんだ歌も注意される。金葉集には天治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集の後大治二年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよんだ歌も注意される。金葉集には天治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集の後大治二年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよ

家にも崇拝され、後代にも重視された。【人物】 歌人は顕季・公實・國信・長實・行宗・隆源・肥後等であり、中納言・中務卿・忠通父子からも愛された。俊成等の代作したものもあり、元永元年顕季が人麿影供を催したのは、

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよ

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよ

家にも崇拝され、後代にも重視された。【人物】 歌人は顕季・公實・國信・長實・行宗・隆源・肥後等であり、中納言・中務卿・忠通父子からも愛された。俊成等の代作したものもあり、元永元年顕季が人麿影供を催したのは、

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよ

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。	
嘉承元年	經信薨ず。	
天仁三年	山家五番歌合の作者。	
康和年中	堀河院太郎百首の作者。	
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	

緣は中納言と稱し、花苑苑の歌合に俊頼と交りのあつた事は後頼の代作したものもあり、俊頼の子俊恒は田上の閑

元永元年	内大臣家歌合の作者。	
保安元年	關白内大臣家歌合の作者。	
大治二年	金葉集奏覧の後大治元年白河法皇の院宣を奉じ、勅撰集には天治元年白河院の御製を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。	初めて御製歌も注意も注意を得た。承徳元年經信が太宰府に赴じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子敦兼も亦田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

音樂書・佛教に通達してをり、深く阿彌陀佛を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑

永久四年	堀河院次郎百首の作者。	
大治二年	六條宰相歌合の作者。	

雜歌百首・沙彌能食上人とした百首を初め自己を詠じた歌が多く、田上で田園生活をよ

七二

に既に引例が見え、俊頼の原著なる事は信じて差支へない。【内容】發端先づ和歌は男女貴賤好み詠むものであるが、情あるものは進み、情なきものは進まずと云つて歌心の必要を說き、又八病九品を分つて童蒙を敎へるものがあるが、習ひ傳へなければさとる事は難いとて、學問よりも稽古を先とし、次に八雲立つの詠、聖德太子と文殊菩薩との贈答を載せてゐる。次に旋頭歌・混本歌・折句・冠折句・廻文・短歌・俳諧歌・連歌・隱題の諸體を解說してゐるが、この中に短歌につき五文字七文字と續けて七七で結ぶと說けるは、例の「古今集」の分類によりて云へるもので、平安朝一般の通說に從つたものである。次に避病、字數多少等の項あり、又神詠・奉納歌・老幼・乞食等の歌を語り、題詠の心得を說き、次にひとへに優なる歌、たけたかくとほしろき歌、よきふしに優なる心具したる歌等、和歌の樣體を二十に分つて善歌惡歌の例を示す。次ににせものの事、返歌の事、雨名・風名等の事を記し、その後は、にほ鳥、野守鏡、鬼のしこ草等百餘條に亙つて證歌の解釋をし、最後に歌人逸話を出して結んでゐる(俊頼口傳集には、その後に更に連歌の項あり)。【價値】全體として分量大なるも雜駁の譏りを免れず、すでに「六百番陳狀」「簸川上」等これを指摘し、嘉禎三年の奥書にも云つてゐる。が、中に作歌の心得を說いて、心と詞と共に重んずべく、又一ふし珍らしき所あるべきを說き、歌の樣體の分類、連歌の說などは注意すべき言である。「金葉集」「散木奇歌集」の編者者として、歌壇に一轉機を作つた俊頼の立場を知る上にも、「童蒙抄」「奥義抄」以下、平安後期以後續出した歌學書の先蹤としても注意すべき書である。

【參考】大日本歌書綜覽福井久藏○日本歌學史佐佐木信綱○國文學研究史野村八良○俊頼無名抄の年代著者と其の著述岡田希雄(藝文大正一〇ノ七)　【中島】

渡世身持談義(とせいみもちだんぎ)　浮世草子五册【作者】江島屋其磧【刊行】享保二十年菊屋板【諸本】其磧自笑傑作集上(帝國文庫)所收。【解說】一卷は三話より成り、すべて五卷十五話であるが、前後脈絡あるものであるから一個の長篇とも考へられる。町人渡世の法を談義に託した作品である。丁銀町有德上人・簡略寺始末上人及び中堂寺松職上人・九軒寺寬潤上人等が長者町永代土藏寺に集まつて論議をなすといふ構想の下に描かれてゐる。即ち有德上人・始末上人といふは硬論者で、頗りに町人の勤勉節儉を說いてゐるに對し、松職上人・寬潤上人は軟論者で、遊里と傾城の魅力を稱へてゐる。兩者は勝敗を決し得ずに和解し、始末宗側では十露盤供養をなし、遊色宗側では開祖江口の君五百五十年忌を營むことに依つて解決がつくといふのである。八文字屋本としては特異な「談義」の構想を以て作られてゐる。「談義」の構想を應用せる作品に「傾城禁短氣」(別項)があつたが、これは好色生活の談義と解すべきであつた。町人生活を內容とせるもので、談義の形式を用ひた所に、この作品の特色を見るべきである。　【吉田】

十千萬堂派(とちまんだうは)　俳句流派【解說】明治二十三年頃、尾崎紅葉及び巖谷小波の門弟その他を以て成つた俳壇紫吟社一派を指す名稱で、十千萬堂は紅葉の別號である。即ち紅葉門としては、泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・德田秋聲・谷活東・星野麥人・鈴木菅花・泉斜汀・田村西男等、小波門としては、西村渚山・黑田湖山・生田蓑山・木戸解劍・永井荷風・尾上新兵衞・栗島狹衣等があつた。その傾向は、談林風を基調としてこれを新時代化せしめたものであつた。紅葉歿後は小波が斯派の代表的人物となつて今日に及び、その作調も平明穩健なものとなり來つてゐる。　【伊藤】

橡面坊(とちめんぼう)　俳人【姓名】安藤錬三郎後小田氏を嗣ぐ。【別號】橡庵・句仙・影人・舊號曉々・龍山。【生歿】明治二年八月十六日生れ、大正三年九月二十五日歿す。享年四十六。【法名】植衆院德本日錬信士【閱歷】岡山縣小田郡新山村に生る。大阪毎日新聞に校正次長の職にあること十餘年、令聞があり、大阪市南區西清水町一三四に住した。晚年傍ら大阪化粧品商報の編輯を依囑され、同社の隆盛を見ずして逝つたのは惜しむべきである。句作は國民新聞虚子選の俳句を見て始め、後龜田小蛄の糸瓜會の同人となつた。西攝武庫山下廬屋の里に歿し、大阪西念寺に葬儀を行つた。【著作】橡面坊句集　深山柴　龜田小蛄編(大正十年刊)○深山柴拾遺龜田小蛄編(大正十一年三月「糸瓜」第二十五號揭載)

【參考】現今俳家人名辭書紫芳社○糸瓜(大正八ノ一二、一一ノ三)　【萩原】

とつちりとん節(とつちりとんぶし)　歌謠【名義】三味線の前彈の終りの方に、トツチリトンと彈く手があるのによる。これがこの歌の三味線では甚だ耳立つからである。【解說】早く寬政十年頃に流行し始めた。寬政十年版の洒落本「辰巳婦言」に「トツチリとんと身を落せば」、寬政十一年版の洒落本「仲街艷談」に「トツチリトンと挽く三味に」「とつちりとんだ新手にはまり」などと見える。先づ深川の廓で流行し始めたのである。文政時代には關西でも大に流行してゐたことは、「浮れ草」(文政五年)に、歌詞が七首出てゐるので明かである。「守貞漫稿」には、文化年中より行はれたやうに記してゐるが、これは寬政より流行し始めたものの繼續であらう。文政頃には一時下火になつてゐたのが、天保四年二月頃から又行はれ始めて、全國に流行した(「巷街贅說」に據る)。「歌謠字數考」には、「此の節は扇歌(都々逸坊扇歌)の創作にて、多くは客人に題を出させ、卽時にこれを歌に綴りて歌ひたるものなり」とあるが、扇歌の創作と云ふは誤りとしても、かやうに寄席藝人により、世に廣められた事は確かであらう。幕末には草雙紙式の繪入唄本や瓦版の歌本が無數に出で、その中には、弘化三年刊行の「都津地里問屋」と題する扇歌が、東海道五十三驛を詠んだ歌十三首を集めたとつちりとん節の書なども存する。今もほそぼそ殘つてゐる。都々一(別項)と併稱された流行唄であるが、明治に入つて衰微した。前彈は賑かであるが、歌は優美で、大津繪節・伊豫節などに共通の特色を持ち、幕末情調の濃い節廻しである。後には、文句入とつちりとんなど、種々の形式のものが現はれた。歌詞は、古くは次の歌が有名であつて、前記の諸書にも多く引かれてゐる。　【藤田】

唐(から)と日本に出世の鏡、されば太閤秀吉の、素性を問へばその昔、國は尾張の中村に、筑阿彌彌助と云ふ猿師、妻は日吉の權現へ、宿願かけて懷胎し、程なく男子を生み落し、その名を名付けて日吉丸。

十百韻(とつぴやくゐん)　「百韻」「千句」を見よ。

土手のお六(どてのおろく)　「杜若艷色紫」を見よ。

土手節(どてぶし)　歌謠【異名】繼節(つぎぶし)・次歌と云ふものも同一の歌であらう。【名義】吉原に通ふ人々が日本堤の土手で歌つたので、かく名付けた。【解說】「傾城色三味線」序、一一目千軒「新町細見雛標」等によると、京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の繼節を、古來より三名物としてゐたと云ふ。歌詞は、「洞房語園集」に、

土手節　寬文の頃流行した卷歌　醉翁作

かゝる三谷の草深けれど、君が栖(すか)と思へばよしや、玉のうてなもおろかでござる、よその見る目もいざはぬ我じやに、お笑ひやるな名の立つに。

と見える。「當世小歌揃」には「山谷(さんや)土手節」と題して、右の歌の外六首を掲げてゐる。「用捨箱」には、三味線の名手原武太夫の門人より聞き傳へた土手節の歌として、「松の葉」卷三の「山谷歸(さんやかへり)」及び「失念」に類似の歌等を掲げ、別に「雜話見聞錄」によつて、「元祿の頃はやりしつぎぶしといふ歌」と題し、之は投節やうの小歌に妙なるものにやありけん、昔ある人の藏書に、直之直傳と記せし土手節の本を見たり。この二書は只今唯一本なるべきものにして、尤珍書とするに足れり」と記してゐるのでも察せられる。直之は吉原の幇間で流行唄の名人であつた。これが投節及び土手節の節付本を刊行したと見えるが、現在傳本は不明である。長唄の「吉原雀」の「それ網笠をそこにおけ、二階座敷は、右か左か、奥座敷までござりやす」のところは、原武太夫の注意で、土手節を取り入れて作つたものと云ふ。これによつて、その曲節の面影を知る事が出來る。尤も寬文の土手節と元祿以後の「失念」の系統を引く土手節とは、曲節が違つてゐたらしい。種彦は「洞房語園集」の歌は、誰名付けるとはなくて、ドヾイツぶしとはいひ初しと也」とある。都々逸・東都一・百々一・度獨逸・都々一等、さま〴〵の文字を宛てる。【起原】「都々逸節根元集」によると、寬政十二年に熱田に鷄飯が店と云ふ茶屋が出來、その茶屋女にお仲と云ふ者があつて(名古屋の人、後、同所神戸町鯛屋金右衞門の女房となり、嘉永三年病死)、これが最初に歌ひ出したといふ。この茶店の女のことをおかめと云ひ、やがて神戸の遊女のことをおかめと總稱するやうになつた。都々逸節は、お仲に始まつておかめの間に歌はれ、熱田に遊び、此處を通過する旅人によつて、東西に傳播せられるに至つた。「繪本どいつ惣まくり」(蜀々老人著、嘉永二年刊)は弘化三年に成つた書であるが、これには「ドイツといへる小唄、江戸にて唱初しは纔四

して結んでゐる(俊頼口傳集には、その後に更に連歌の項あり)。【價値】全體として分量大なるも雜駁の譏りを免れず、すでに「六百番陳狀」「簸川上」等これを指摘し、嘉禎三年の奥書にも云つてゐる。が、中に作歌の心得を說いて、心と詞と共に重んずべく、又一ふし珍らしき所あるべきを說き、歌の樣體の分類、連歌の說などは注意すべき言である。「金葉集」「散木奇歌集」の編者者として、歌壇に一轉機を作つた俊頼の立場を知る上にも、「童蒙抄」「奥義抄」以下、平安後期以後續出した歌學書の先蹤としても注意すべき書である。

られてゐる。「談義」の構想を應用せる作品に「傾城禁短氣」(別項)があつたが、これは好色生活の談義と解すべきであつた。町人生活を内容とせるもので、談義の形式を用ひた所に、この作品の特色を見るべきである。【吉田】

十千萬堂派 俳句流派【解說】明治二十三年頃、尾崎紅葉及び巖谷小波の門弟その他を以て成つた俳團紫吟社一派を指す名稱で、十千萬堂は紅葉の別號である。即ち紅葉門としては、泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・德田秋聲・谷活東・星野麥人・鈴木菅花・泉斜汀・田村西男等、小波門としては、西村渚山・

【參考】現今俳家人名辭書紫芳社〇糸瓜(大正八ノ二、一一ノ三)【萩原】

とつちりとん節 歌謠。【名義】三味線の前彈の終りの方に、トツチリトンと彈く手があるのによる。これがこの歌の三味線では甚だ耳立つからである。【解說】早く寛政十年頃に流行し始めた。寛政十年版の洒落本「辰巳婦言」に「トツチリとんと身を落せば」、寛政十一年版の洒落本「仲街艷談」に「トツチリトンと挽く三味に」「とつちりとんだ新手にはまり」などと見える。先づ深川の廓で流行し始めたのである。文政時代には關

とんなど、種々の形式のものが現はれた。歌詞は、古くは次の歌が有名であつて、前記の諸書にも多く引かれてゐる。【藤田】

唐(から)と日本に出世の鏡、されば太閤秀吉の、素性を聞へばその昔、國は尾張の中村に、筑阿彌彌助と云ふ繼師、妻は日吉の權現へ、宿願かけて懷胎し、程なく男子を生み落し、その名を名付けて日吉丸。

十百韻 「百韻」「千句」を見よ。

土手のお六 歌謠【異名】繼節・次歌と云ふものも同一の歌であらう。【名義】吉原に通ふ人々が日本堤の土手で歌つたので、か

どどいつ

く名付けた。【解說】「傾城色三味線」序、「一目千軒」「新町細見案標」等によると、京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を、古來より三名物としてゐたと云ふ。歌詞は、「洞房語園集」に、

土手節　寛文の頃流行した卷歌　醉翁作

かゝる三谷の草深けれど、君が栖と思へばよしや、玉のうてなもおろかでござる、よその見る目もいとはぬ我じやに、お笑ひやるな名の立つに。

と見える。「當世小歌揃」には「山谷土手節」と題して、右の歌の外六首を掲げてゐる。「用捨箱」には、三味線の名手原武太夫の門人より聞き傳へた土手節の歌として、「松の葉」卷三の「山谷歸」及び「失念」に類似の歌等を掲げ、別に「雜話見聞錄」によつて、「元祿の頃はやりしつぎぶしといふ歌」と題し、

ゆうべ色里ではやる小節を習うた、後さきは覺えなんだが、中の小節を忘れた、さこそあるべいとて書いてもらうたを、土手へすんと落いた、義理も諸分も此通り、面目ない、一口茄子の喰さしに、紅のついたを落いた、どこへ、船宿へおいて來た、でぐぼどうぞ智惠出せ、分別せい、あのやつこ。

と云ふ歌を掲げてゐるが、これは、原武太夫の門人の歌つた歌を、二首繼ぎ合せた形式となつてゐる。繼節とは、かやうに、土手節の二歌を混じて歌ふからの名稱で、土手節の崩れた一體の歌となすべきであらうか。右の歌は、幕末時代には、「忘れ唱歌」と云ひ、江戸端唄として行はれ、今日も僅に殘されてゐる歌で、此處に古い土手節の面影を見ることが出來るであらう(「忘れ唱歌」は、「北里見聞錄」所引「北女閻起原」以下、幕末の「江戸歌大集」その他の諸書に見える)。早く、土手節の節付本が出てゐたらしいことは、「元吉原の記」に、「この直之は投節やうの小歌に妙なるものにやありけん、昔ある人の藏書に、直之直傳と記せし土手節の本を見たり。この二書は只今唯一本なるべきものにして、尤珍書とするに足れり」と記してゐるのでも察せられる。直之は吉原の幇間で流行唄の名人であつた。これが投節及び土手節の節付本を刊行したと見えるが、現在傳本は不明である。長唄の「吉原雀」の「それ網笠をそこにおけ、二階座敷は、右か左か、奥座敷までござりやす」のところは、原武太夫の注意で、土手節を取り入れて作つたものと云ふ。これによつて、その曲節の面影を知る事が出來る。尤も寛文の土手節とは、曲節が違つてゐたらしい。種彦は「洞房語園集」の歌は、今聞き覺えた土手節の三味線に合はないと云つてゐる。思ふに吉原通ひの嫖客の好んで歌ふ流行唄は、すべて土手節と云はれる名稱であるから、時代のたつにつれて、前と後とでは、同じ土手節でも、その實を異にしてゐるのであらう。寛政頃の洒落本には、英一蝶が作つた「眞乳沈んで梢乘り込む今戸橋」(洞房語園集所載)の歌をも、土手節としてゐるものが散見するのである。【藤田】

【參考】用捨箱柳亭種彦〇日本歌謠史高野辰之

都々逸節 歌謠【名義】「都々逸節根元集」(小寺玉晁著、嘉永六年成)に、「唄へおかめ買奴天窓でしれる、油つけずの二つ折、此唄の亂其奴は殿奴者〳〵。と或大一座の客の節、囃子けるが、大に興ありて笑しかりければ、此唄諸時には必ず此囃子する事と成居しが、いつの程よりか殿々吃りて、ドヾイツドイ〳〵と成てより、浮世はさく〳〵と折返し囃子事とは成しと翼樓老人の話にて、夫故誰名付るとはなくて、ドヾイツぶしとはいひ初しと也」とある。都々逸・東都一・百々一・度獨逸・都々一等、さま〴〵の文字を宛てる。【起原】「都々逸節根元集」によると、寛政十二年に熱田に鶏飯が店と云ふ茶屋が出來、その茶屋女にお仲と云ふ者があつて(名古屋の人、後、同所神戸町鯛屋金右衞門の女房となり、嘉永三年病死)、これが最初に歌ひ出したといふ。この茶店の女のことをおかめと云ひ、やがて神戸の遊女のことをおかめと總稱するやうになつた。都々逸節は、お仲に始まつておかめの間に歌はれ、熱田に遊び、此處を通過する旅人によつて、東西に傳播せられるに至つた。「縮本どいつ惣まくり」(索々老人著、嘉永二年刊)は弘化三年に成つた書であるが、これには「ドヾイツといへる小唄、江戸にて唱初しは纔四五十年の往昔にして、其もあながち流行るとにもあらず、然程に同樣の小唄にて曲節も趣も異にして、ヨシコノ節といへるなん、二十年餘をちつかたは、世にもてはやして諸はぬ人なく、へ沖の暗いのに白帆が見えるあれは紀伊國蜜柑船、チョウチョ靜にさしこめコリヤヌヨシコノ。などうたひはやらしけらし。其を一盛にして復もとのドヾイツ節ぞ一統て行れ、當時の畧譜とは漸に變ぬれども年を經て廢らず。(中略)此歌根元は知らざれども、古く尾張の厚田の傀儡ドヾイツとて皆謠へる、亂のはやしにドヾイツドヾイ、浮世はサク〳〵と折返し囃し事を僕稚き小耳に挾て忘れねど、今は絶て更にいはず、然ども唱歌は今昔鄙も都も一齊くして、東都にも古來人の知るへ宮の厚田の明神さんへ遠ざかれとはいのりやせぬ。厚田に古く歌ひしは、此歌既に一つの證故、今猶宮驛に歌ふ所、吾嬬風と

た。彼の美聲で歌つた歌が、都々逸の今日行はれるが如き曲節の基礎となつたものと思はれる。都々逸は本調子がもとであるが、江戸には二上り都々逸が傳はり、又三下り都々逸もあり、江戸節と云ふものは前者で、名古屋節とは後者の謂であらうと云ふ（守貞漫稿・小唄のちまた）。その他、文句入都々逸、淨瑠璃入都々逸、字餘り都々逸、その他種々の形式のものが生れ、また幕末より、これを一つの詩形として、新作することが行はれ、情歌・浮禮唱歌・俚謠正調・俚歌等種々の名をもつて作られ、狂歌・川柳等と並んで、俗文學の雄なるものとなつた。種々の情歌會の如き團體も出來て、都々逸の判者が生じ、隆盛を極めた。この風は明治に入つても、明治中期頃までは少しも減退しなかつた。この方面の作法書、雜誌も刊行せられ、新聞雜誌の投書欄にも必ずこれがあり、都々逸集は無數に刊行せられてゐる。（よしこの節參照）

【參考】日本歌謠史高野辰之〇明治流行歌史藤澤衞彦〇小唄研究湯朝竹山人〇日本歌謠集成卷十一高野辰之〇江戸軟派放異尾崎久彌〇風流俗謠集湯朝竹山人　【藤田】

鳥名子舞の歌　神事歌謠【名稱】鳥名子とは、伊勢太神宮に仕へて驅使の役をする地下の童男女の稱である。鳥の子の意味で、天の岩戸の常世の長鳴鶏に擬して歌舞せしめたのに起因した名稱であらう。「延喜式」等の古書には鳥子名舞とあるから、これが古稱で、「長曆記」以下の書には何れも鳥名子と記してゐる。また「天照大神御天降記」には度利古那阿曾比と記してゐる。これも古い稱と見える。【儀式】「建久三年皇太神宮年中行事」の六月十七日「祭使參宮之間事」の條によると、舞姫候殿から鳥名子所の下部が鳥名子等を伴つて出で、齋王候殿と舞姫候殿との中間で、歌を歌ひ笛を吹き、又琴を彈じて十二首の歌を歌ふ。鳥名子等は手を組んで廻り、各々歌を一所に聚めて平伏し、起きて後何れも手を合せて退出する。琴彈は忌火屋殿に御琴を上げて退出する。次いで祭使が退出するのである。後世では、右方に三周し、三度伏拜をする事等、頻繁になつてゐる。「延喜式」によると、古くは六月十六日に外宮でこの舞があり、翌日太神宮で同じ儀を行つた。また三節の祭及び解齋直會の日にも童男童女が十六人乃至十八人青摺の衣裳を着て舞つた。彈琴二人、笛生二人、歌長三人が伴奏する（延喜式）。これは御饌歌として用ひられたものである。その他、九月十八日等にも行つた例がある。【由來】平安朝の初め頃からあつたものであらうが、起原は明かでない。明治維新前までも行はれて、度會郡野篠・矢野・山村等の諸村より鳥名子の幼童が出で、原村より歌長・彈琴・笛生等が出た。童男四人が奉仕すると云ふが今は絶えた。また春日社家の富田光義の家にも、十二首の鳥名子舞の譜が傳へられてゐるが、これは渡會延經の「三祭御遊次第」に依つて、古めかしい節博士を附けただけだと云ふ（「やまづら」「藤のしなひ」所載）。果して春日神社に於ても、古くにはこれが行はれたものかどうか明かでないが、近世では同社でも鳥名子舞を執行したことであらう。（志太良歌・雜藝參照）

【歌詞】「建久年中行事」所載十二首の中三首を錄する。

遠江引佐の山の椎が枝をふさ手折り持て驅使ぞ戻る
山川に榎むや鴛鴦の雌鳥汝や此の夜半に七度妻戀ひやする
大川柳葉廣くて立てる大川柳良き吾子に手を取りかけていざや遊ばむ　【藤田】

【參考】萬葉緯第六　今井似閑〇古諸集　栗田寬

となみ山　俳諧集　一册【編者】僧浪化【名稱】題簽に「浪化集下」とある如く「浪化集」の下卷で、上卷は「有磯海」（別項）である。【名義】越中の名勝有磯海に對して、同國の名勝のとなみ山を持つて來たのである。「凩や劍を振ふ礪浪山」といふ去來の賀句がある。【刊行】元祿八年暮春【諸本】續七部集・芭蕉翁全集・蕉門俳諧後集（俳書大系）所收。【内容】最初に其角の刀奈美山の引、其角發句のとなみ山の表十句（其角・浪化・嵐雪・桃隣・去來）、其角が大部分門人の句を催ほし集めた冬・春・夏・秋各六句の發句二十四章があつて、次に曲翠・浪化・正秀・臥高・胡故五吟歌仙一、浪化・去來・芭蕉三吟歌仙一、北枝・浪化・句空・林紅・牧童・萬子六吟の芭蕉百ケ日追悼の歌仙一、其角の「枯尾華」に間に合はなかつた加賀越中の追悼の發句十二章、去來・浪化・芭蕉之道・丈草・支考・惟然・野童・野明九吟歌仙一、嵐青・其繼・浪化・呂風・林紅・夕兆・路健七吟歌仙一を收めてゐる。刀奈美山の引によると、去來の斡旋によつて成つたものである事が知られるが、去來が元祿六年（推定）十月十一日木節・乙州へ送つた書簡によると、當時既に「浪化集」の撰に着手してゐたことが知られる。版下は「有磯海」と共に正竹の筆である。正竹は「猿蓑」の版下をも書いてゐる人で、芭蕉の書道の師北向雲竹の門人であらう。【價値】去來・浪化・芭蕉で始まる九吟歌仙は、前書によると、浪化が落柿舍に芭蕉を訪ねて「主客三句の情をむす」んだものが卷き足されたものであり、其角の引にもこの時の事を云つて浪化の芭蕉入門を云つてゐるので、浪化の芭蕉入門關係の資料として最も重要なものである。又芭蕉の墓參に來てゐた嵐雪・桃隣が、となみ山の表に加はつてゐることや、京に留まつてゐた其角の助力なども注意すべく、芭蕉に對する追憶・追悼の籠つてゐる事も見逃せない。作としても、浪化・去來・芭蕉の三吟や、「主客三句の情」の去來・浪化・芭蕉で始まる九吟などは、砂川の淺く流れるやうな、よい意味の輕みの調で、而も氣品がある。　【志田】

殿居嚢　故實　二帖【著者】大野廣城【刊行】初編天保八年十二月、後編同十年正月【諸本】江戸叢書所收。【解說】初編には「此書はおほやけのかしこき事共をかきしるしたれば、すり卷の數を三百部にとゞめ板を絕しぬ」とあり、後編には、禁商額限三百部とある。江戸幕吏の宿直用に便するために作つたもので、細長い小形の兩面折本で懷中用にしたものである。初編には、武家年中行事、武家諸役班列、服忌令公案集成、武具心得ぐさ、後編には、御曲輪朱引之略圖附諸御門番所御法令略記、五奉行御番衆指物略圖、日光山・紅葉山・東叡山・三緣山等の略圖附御傳略記、安國殿幷黑本尊御傳略記、東照宮御鎭座箇所略記、山王權現略圖附御傳略記、聖堂略圖附御傳略記を記し、また地圖・圖解を施し、青表紙（別項）と相並んで江戸幕府の事情を知るに便利なものである。　【石村】

殿樣踊　歌舞　【名義】殿樣の御前で、又は殿樣の上意によつて催された踊の意。【別名】上樣踊・上覽踊【解說】寬永十二年七月二十二日、將軍家光江戸城に於て踊の上覽あり、その際尾州家より奉つた踊がこれである。踊子二十三人を尾州より召し寄せ、尾張敬公自ら踊子の中に加はつて共に踊つた。踊子は何れも尾張藩の小姓で、種々扮裝をこらし、三絃はなく、小鼓・太鼓・笛・尺八の囃子で踊つた。原歌は堀正意（香庵と號す）の作で、囃子は、能の囃子方及び小姓の中から受け持つた。この踊歌はそれより後長く名古屋城下に傳へられ、瞽女・座頭が、これに箏・三味線・尺八の伴奏を加へて歌つた。

【歌詞】「寬永十二年跳記」には、「右此書者寬永十二年亥七月將軍家光公踊上覽有レ之。其節御家々々御差上之踊歌幷裝束等之記也。加藤氏カヂヤ町下藏本恩借而寫レ之畢。文化九年申九月中浣　野田重堅」と云ふ奥書がある。

（あづま踊（七首）、ちわ踊（五首）、手うち踊（九首）、こめて節（露の節とも七首）、なんぼゝ節（七首）、ゑゝんと節（十二首）、辛氣節（五首）、四本節（八首）、つらさ節（十首）、待夜節（七首）、八聲節（十首）、せりうた（十二首）、うつゝ節（五首）、いつか節（七首）、かりね節（七首）、見るや節（五首）、および節（七首）、しこふ節（五首）、來ぬから節（五首）、見れば節（六首）、うつゝ節（二首）

有馬節・さいこの節・ちん〳〵節の如き、元祿時代の流行唄も入つてゐて、後に段々とその時々の流行唄を加へていつたのであらう。故に歌詞は、書名の「百七十章歌」より增加して二百二十首に達してゐる。これは瞽女・座頭の所作であらう。なほ殿樣踊の歌は、名古屋の「元祿正德頃の流行唄」にも、上樣踊及び殿樣踊と題して入つて居り、尾州の御船唄を集めた「御船歌枕」にも見える所である。歌詞は概本も盛んに刊行された。

登張竹風　評論家　【本名】信

鳥羽繪　繪畫　【解說】戲畫の一種。鳥羽僧正覺猷は戲畫に巧みであつたと傳へられ、高山寺所藏の鳥獸戲畫の如きもその筆と喧傳されてゐるので、かくの如き樣式の滑稽なざれ繪を指して後世には鳥羽繪と呼ぶに至つた。いつ頃からこの名が出たか詳かでないが、江戸時代には鳥羽繪と稱し、日常茶飯のたわいもない滑稽事を、輕躁誇大の筆致で畫いた戲畫の一種が盛んに製作された。「本朝世事談綺」には、京の正田全暇が鳥羽繪を創めたとあり、「畫事備考」には、狩野昌運門下の佐野金藏が創めたといふ。それ等の點は詳かでないが、江戸時代には、滑稽洒落な趣味に伴うて耳鳥齋や春朝齋や、その他諸家の鳥羽繪版

皇鳥　鳥羽僧正覺猷が戲畫に巧みであつたと傳へられ、喧傳されてゐるので、かくの如き樣式の滑稽なざれ繪を指して後世には鳥羽繪と呼ぶに至つた。いつ頃からこの名が出たか詳かでないが、江戸時代には、滑稽洒落な趣味に伴うて耳鳥齋や春朝齋や、その他諸家の鳥羽繪版本も盛んに刊行された。

土肥春曙　どひしゅんしょ　俳優　【本名】庸元【生歿】明治二年十月六日、熊本縣玉名郡長洲に生れ、大正四年三月二日、東京牛込新小川町一丁目六番地にて歿す。享年四十七。【閱歷】父は蕉石と號する書家。東京專門學校の文科第一期生たり。坪内逍遙に親炙してその提唱を受け、すでに在學中から專念演劇改良を志してゐた。卒業後讀賣新聞・中央新聞の記者、或は母校の講師等を勤めたが、その間も演劇に對する不斷の研究に努めた。明治三十四年四月、川上音二郎一座の舞臺監督として、英・佛・獨・伊等歐洲諸國の巡業に從ひ、翌年九月歸朝した。三十八年、東儀鐵笛・水口薇陽等と謀り、坪内逍遙を顧問として易風會を興し、

焰錄「ニイチエと二詩人」等がある。　【高須】

飛梅千句　とびうめせんく　「守武千句」を見よ。

上覽あり、その際尾州家より奉つた踊がこれである。踊子二十三人を尾州より召し寄せ、尾張敬公自ら踊子の中に加はつて共に踊つた。踊子は何れも尾張藩の小姓で、種々扮裝をこらし、三絃はなく、小鼓・太鼓・笛・尺八の囃子で踊つた。原歌は堀正意(香庵と號す)の作で、囃子は、能の囃子方及び小姓の中から受け持つた。この踊歌はそれより後長く名古屋城下に傳へられ、簪女・座頭が、これに箏・三味線・尺八の伴奏を加へて歌つた。

【歌詞】「寛永十二年跳記」には、「右此書者寛永十二年亥七月將軍家光公踊上覽有レ之。其節御家ノ御差上之踊歌幷裝束等之記也。加藤氏カヂヤ町下藏本恩借而寫ノ之畢。文化九年申九月中浣　野田重堅」と云ふ奥書がある。

〈あづま踊(七首)、うちわ踊(五首)、手うち踊(九首)、三わけ踊(七首)、伊勢踊(十首)、がつしやう踊(六首)

を掲げてゐる。いづれも、組歌の形式より成り、一連の歌を歌ひ、舞臺でそれに合せて踊り、終りに、ちらしの歌がついてゐる。これよりやゝ後の殿樣踊の歌詞を集めたものに、「百七十章歌」と題する本がある。奥書には「寛永中、公方樣へ御三家諸大名衆より小姓踊をしくみて上られし事有。御家より御上げの踊の章歌多かりし其內專後々迄殘りたる有。是を御國にては殿樣おどりと云ならはしぬ。此歌は堀正意作にて後略す近松氏の昔咄にみゆ、此歌書堀家より得る。乙亥秋、小寺玉晁」とある。內容は、

四季花見の袖(五首)・同花の風(五首)・同笠の內(四首)・身棄節(十五首)・有馬節(十二首)・さいこの葉(十五首)・ちん〳〵節(九首)・ほんほ節(十五首)・帶節(十首)・さりとは節(七首)・しのぶ節(七首)・とめて節(露の節とも七首)・なんぼゝ節(七首)・こゝんと節(十二首)・辛氣節(五首)・四本節(八首)・つらさ節(十首)・待夜節(七首)・八聲節(十首)・せりうた(十二首)・うつゝ節(五首)・いつか節(七首)・かりね節(七首)・見るや節(五首)・およべ節(七首)・しこふ節(五首)・來ぬから節(五首)・見れば節(六首)・うつゝ節(二首)

有馬節・さいこの節・ちん〳〵節の如き、元祿時代の流行唄も入つてゐて、後に段々とその時々の流行唄を加へていつたのであらう。故に歌詞は、書名の「百七十章歌」より增加して二百二十首に達してゐる。これは簪女・座頭の所作であらう。なほ殿樣踊の歌は、名古屋の「元祿正德頃の流行唄」にも、上樣踊及び殿樣踊と題して入つて居り、尾州の御船唄を集めた「御船歌枕」にも見える所である。歌詞は概ね古雅で、俗謠調の歌も若干あるが、種々雜多の形式より成つてゐる。長篇の歌は一つもない。「浮れ草」所載の「津島踊」も上覽踊の一種であると云ふ。

雲の餘所なるもろともしまでも、靡けば靡く君が代にやふちよし、幾千代までも限らじや。チツホホホテンチタフホホイヤ(あづま踊)

【備考】「玉露叢」に據ると、寛永十二年の正月には、仙臺の伊達正宗も將軍家光に踊を御覽に供してゐる。これは仙臺の殿樣踊と云ふべきもので、この歌舞は諸國の藩より奉つた筈であるから、諸藩に殿樣踊は存したのであるが、尾州藩のみがこれを後世に傳へてゐて、他藩の事は全く不明となつてゐる。

【參考】名古屋市史風俗篇〇江戸文學研究(藤井乙男〇日本歌謠史(高野辰之〇近代歌謠集(藤田德太郎〇日本の小唄(藤澤衞彥〇玉晁小歌集(藤田德太郎(國語と國文學一一)　【藤田】

鳥羽繪 とばゑ

【解說】戲畫の一種。鳥羽僧正覺猷は戲畫に巧みであつたと傳へられ、高山寺所藏の鳥獸戲畫の如きもその筆と喧傳されてゐるので、かくの如き樣式の滑稽なざれ繪を指して後世には鳥羽繪と呼ぶに至つた。いつ頃からこの名が出たか詳かでないが、江戸時代には鳥羽繪と稱し、日常茶飯のたわいもない滑稽事を、輕躁誇大の筆致で畫いた戲畫の一種が盛んに製作された。「本朝世事談綺」には、京の正田全暇が鳥羽繪を創めたとあり、「畫事備考」には、狩野昌運門下の佐野金藏が創めたといふ。それ等の點は詳かでないが、江戸時代は、滑稽洒落な趣味に伴うて耳鳥齋や春朝齋や、その他諸家の鳥羽繪版本も盛んに刊行された。　【田中(一)】

登張竹風 とばりちくふう

【本名】信一郎【閱歷】明治六年一月、廣島縣佐伯郡能美島に生れた。廣島中學校・山口高等學校を經て東京帝大に入り、獨逸文科を卒業した。明治三十四年、高山樗牛がニイチェ主義を鼓吹した時、第一に樗牛に共鳴した彼は、「帝國文學」(別項)に據つてニイチェ主義のために健闘し、大に氣を吐いた。その評論は感情に馳せて、やゝもすれば正鵠を失するの弊があつたが、早稻田派の人々を相手に論難大に努めた。この間、ニイチェ主義の小說と稱する「洗ひ髮」を發表したが、結構・描寫共に傑れたところなく、論客竹風の名を輝かすものでなかつた。彼も亦小說を斷念せるのみならず、ニイチェ主義の衰へると共に、文壇より遠ざかり、第二高等學校教授となつて仙臺に赴き、久しく獨逸語學教授に專心したが、今は閑地に靜養してゐる。【著書】泉鏡花と共譯した「沈鐘」「如是經」(ツァラッストラ)、「舌筆錄」「氣焰錄」「ニイチェと二詩人」等がある。　【富須】

飛梅千句 とびうめせんく

「守武千句」を見よ。

土肥春曙 どひしゆんしよ

俳優　【本名】庸元【生歿】明治二年十月六日、熊本縣玉名郡長洲に生れ、大正四年三月二日、東京牛込新小川町一丁目六番地にて歿す。享年四十七。【閱歷】父は蕉石と號する書家。東京專門學校の文科第一期生たり。坪內逍遙に親炙してその提唱を受け、すでに在學中から專念演劇改良を志してゐた。卒業後讀賣新聞・中央新聞の記者、或は母校の講師等を勤めたが、その間も演劇に對する不斷の研究に努めた。明治三十四年四月、川上音二郎一座の舞臺監督として、英・佛・獨・伊等歐洲諸國の巡業に從ひ、翌年九月歸朝した。三十八年、東儀鐵笛・水口薇陽等と謀り、坪內逍遙を顧問として易風會を興し、牛込清風亭に雅樂「妹山脊山」を演じたが、これは新劇運動の實際的先蹤だと云ふことが出來る。三十九年第一次文藝協會(別項)成るやこれが演劇方面の主任となり、歌舞伎座に於ける演藝部大會に「桐一葉」の木村長門守、「ヹニスの商人」のポオシヤに扮したのが、世間的の初舞臺であつた。更に翌四十年本鄉座に於て「ハムレツト」を演ずるに及び、その新技藝が識者に成功を唱はれた。第二次文藝協會組織せられて附屬演劇研究所の幹事竝に講師となり、やがて四十四年の帝劇公演では再び「ハムレツト」の主人公に扮して一般から非常な好評を博した。續いて「人形の家」「二十世紀」「思ひ出」「シイザア」等にも主役を演じ、新劇界の長老たる實を見せた。文藝協會の解散分裂に當り、東儀鐵笛・池田大伍等と結んで演劇無名會を起し、大正三年「オセロ」「瀧口時賴」等に出演したが、同九月「靈驗」の飛雲上人を

鳥名子舞の歌 とりなこまひのうた

神事歌謠【名稱】鳥名子とは、伊勢太神宮に仕へて驅使の役をする地下の童男女の稱である。鳥の子の意味で、天の岩戸の常世の長鳴鷄に擬して歌舞せしめたのに起因した名稱であらう。「延喜式」等の古書には鳥子名舞とあるから、これが古稱で、「長曆記」以下の書には何れも鳥名子と記してゐる。また「天照大神御天降記」には度利古那阿曾比と記してゐる。これも古い稱と見える。【儀式】「建久三年皇太神宮年中行事」の六月十七日「祭使參宮之間事」の條によ

てゐるが、これは渡會延經の「三祭御遊次第」に依つて、古めかしい節博士を附けただけだと云ふ(やまづら)「藤のしなひ」所載)。果して春日神社に於ても、古くにはこれが行はれたものかどうか明かでないが、近世では同社でも鳥名子舞を執行したことであらう。(志太良歌・雜纂參照)

【歌詞】「建久年中行事」所載十二首の中三首を錄する。

遠江引佐の山の椎が枝をふさ手折り持て驅使ぞ戻る

十二首の鳥名子舞の譜が傳へられ一を收めてゐる。刀奈美山の引によると、去來の斡旋によつて成つたものである事が知られるが、去來が元祿六年(推定)十月十一日木節・乙州へ送つた書簡によると、當時既に「浪化集」の撰に着手してゐたことが知られる。版下は「有磯海」と共に正竹の筆である。正竹は「猿蓑」の版下をも書いてゐる人で、芭蕉の書道の師北向雲竹の門人であらう。【價値】去來・浪化・芭蕉で始まる九吟歌仙は、前書によると、浪化が落柿舍に芭蕉を訪ねて「主客三句

青・其繼・浪化・呂風・林紅・夕兆・路健七吟歌仙一嵐丈草・支考・惟然・野童・野明九吟歌仙一嵐道を收めてゐる。刀奈美山の引によると、去來の斡旋によつて成つたものである事が知られるが、去來が元祿六年(推定)十月十一日木節・乙州へ送つた書簡によると、當時既に「浪化集」の撰に着手してゐたことが知られる。版下は「有磯海」と共に正竹の筆である。正竹は「猿蓑」の版下をも書いてゐる人で、芭蕉の書道の師北向雲竹の門人であらう。【價値】去來・浪化・芭蕉で始まる九吟歌仙は、前書によると、浪化が落柿舍に芭蕉を訪ねて「主客三句

得ぐさ、後編には、御曲輪朱引之略圖附諸御門番所御法令略記、五奉行御番衆指物略圖、日光山・紅葉山・東叡山・三緣山等の略圖附御傳略記、安國殿幷黑本尊御傳略記、東照宮御鎭座箇所略記、山王權現略圖附御傳略記、聖堂略圖附御傳略記を記し、まゝ地圖・圖解を施し、青表紙(別項)と相並んで江戸幕府の事情を知るに便利なものである。　【石村】

殿樣踊 とのさまをどり

歌舞　【名義】殿樣の御前で、又は殿樣の上意によつて催された踊の意。【別名】上樣踊・上覽踊【解說】寛永十二年七月二十二日、將軍家光江戸城に於て踊の

最後の舞臺とし、麻痺狂症を以て斃れた。【批評】典雅な氣稟ある藝風で、つねに若々しい情熱を失はず、ハムレットの如き當時獨歩の當り役とされた。上品な姿體端麗な容貌、華やかな凛とした調子と變化ある白廻しで、單に先進といふだけでなく二枚目立役としては新劇舞臺の第一人者であつた。なほ新劇の草創期にあつて、演劇の理論及び實際に亙り絶えず論著に指導に當つた功績は、先覺者建設者としての彼を忘るべからざる存在にしてゐる。著書としては、「新譯社會劇」「社會劇鏑木秀子」があり、いづれも當時の實際舞臺に資せんがために執筆したものであるが、外に川上一座のために山岸荷葉と共譯した「ハムレット」がある。【水木】

飛談語　噺本　三册　【作者】初編には宇津山人菖蒲房、後編「さしまくら」には蛸壺庵、三編「都鄙談語」には龜文子の署名があるが、その誰であるかを詳かにしない。【名稱】初編及び三編には角書を興話とし、二編「さしまくら」は、特に下部の名稱を冠してゐる。下がかつた猥談を意味するのであらう。「とびだんご」は先に出た「鹿子餅」（別項）などの緣に由つた名稱である。【解說】殆ど新作咄である。中には舊話の作りかへも交つてゐる。例へば「鹿子餅」に「朝鮮人」と題して、朝鮮人が日本の蹴鞠を鳥と思ひ、鞠の破れるのを屁を放つて死んだとある話を、本書には「鞠」と題し、朝鮮人を田舍者として作り替へてある。一般に本書の話は言語の遊戲がなく、巧まない自然的なるをかしみを漂はしめてゐる。併しエロチックな情痴の話が多いところに、やゝ眉をひそめしむるものがある。それも危いところで綺麗に落すあたりに作者の誇りがあつたと思はれる。【小柴】

琢尾琴　「倭琴」を見よ。

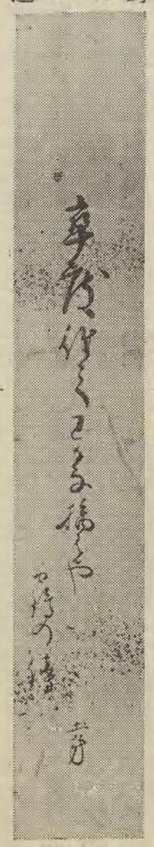
鳶眼集　俳諧集　一册　【編者】士朗門人【刊行】文化三年【解說】士朗等の連句を道彥の評したもので、第一の卷は岳輅・士朗・岱靑・羅城の四吟歌仙、第二の卷は岱靑・羅城・岳輅・士朗・白圖・紀鳳・桂五の七吟歌仙である。この二卷を句主の名を匿して道彥へ送つて批評を求め、道彥はこれに思ふまゝの評言を下して返したのである。士朗一派の連句附方を味ひ、道彥の所見を窺ふべき好資料である。士朗等はこれに社中の歌仙一卷を加へ、且つ跋を附して刊行したのであるが、後「士朗五七集」に編入した。「道彥七部集」にも編入されてゐるが、それは評言のある二卷だけである。【贄川】

都鄙問答　心學書　四卷　【著者】石田梅巖【刊行】元文四年【解說】諸人と梅巖との問答を錄せるもの、書名は最初の「都鄙問答の段」に據つてゐる。全卷十六條、凡て實際生活に卽した問題が扱はれてをり、今讀んでも感銘が深い。本書は、同じく梅巖の「齊家論」（別項）と共に、心學の經典として重んぜられ來つたが、事實梅巖その人の思想に觸るゝには、まづ本書に據るべきである。【白石】

井礫　能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちと傳へられる。【梗概】勾當が出て菊一を呼び出し、嵯峨へ行く供をさせる。途中替川を渡るのに水の出たけはひがあるから、菊一が瀨踏みをして見ると言つて石を打つ。どぶどぶと沈むのでこゝは深い、上手へ打つと、どぶりかつちりと當るので上が淺いと知り、やがて勾當は菊一に自分を負うて渡せと言ふ。そこへ通行人が來かゝり、勾當に代つて負はれて渡る。すると勾當は、汝ばかり渡つてなぜ某を置いて行つたと言ふ。菊一は合點が行かないが、再び立ち戻つて勾當を負ひ、深い所に陷つて轉ぶ。辛うじて上陸し、携へた竹筒（酒器）を出して、兩人酒を飲み始める。通行人は、負はれて川を渡つた上に、又酒も飲まうと立ち寄つて飲む。こゝに於て勾當と菊一との間に爭が始まる。併しこれは通行人の惡戲から起つたと氣附き、兩人通行人を追ひ込む。【構想】座頭の川渡と云ふをかしみのある事柄を設け、これに通行人の惡戲を絡ませてゐる。「鞠蹴座頭」の作意も同樣であるが、餘り優れた趣向ではない。【影響】十返舍一九の「道中膝栗毛」（東海道三編）掛川より袋井への條、鹽井川のところに、この趣向を使つて盲の川渡を仕組み、北八が川中へ振り落される事にしてゐる。【野村】

杜芳　「櫻川杜芳」を見よ。

土芳　俳人【姓名】服部保英。通稱半左衞門【別號】些中庵・蓑虫庵、初め蘆馬。【生歿】明曆三年に生れ、享保十五年（一三九〇）正月十八日歿す。享年七十四【墓所】伊賀上野郊外長田村西蓮寺【俳系】芭蕉門【閱歷】伊賀上野の藩士で內海流の槍術に達してゐたと云はれる。伊賀の上野に於ける芭蕉に因み深い所謂伊賀五庵のうち、蓑虫庵は土芳の建てたもので、芭蕉が面壁の達磨の畫に、「蓑虫の音を聞きに來よ草の庵」といふ句を讃した自畫自讃をくれたので名づけたのである（蓑虫庵集）。蓑虫庵は二度ばかりも荒廢したが、再興されて今日なほ遺存してゐる。芭蕉が大阪で病歿して遺骸が義仲寺へ運ばれた時、卓袋と共に伊賀を代表して義仲寺へ駈けつけて、初七日の追善百韻に加はり（枯尾華）、その歸りに芭蕉の遺髮を携へ歸つて、松尾家の菩提所愛染院に故鄕塚を築いた。芭蕉歿後も師の遺敎を堅く守り、伊賀俳人を率ゐて變風或は邪路に走るなどの事あらしめなかつたのもこの人である（伊賀實錄）。【著作】三册子　三册（別項）（安永五年刊）　○蓑虫庵集（自選句集。寫本。蕉門名家句集所收）　○橫日記（蓑虫庵風士會合の日記。存否不明）。



土芳筆蹟

【作風】「三册子」によつて見ると、同門中芭蕉の意を最も能く理解してゐたのは、この人であつたやうに思はれるが、唯それに比べては、作の技倆はさほどでないやうに思はれる。去來は、「仇なる事土芳に及ばず」（旅寢論序）と云ひ（この「あだ」は、あどけないやうな作風を云ふらしい）、伊賀には芭蕉在世中からこの風があつて、先師の敎であらう（旅寢論）と云ひ、其角も「是先師の一體なり」（花實集）と云つてゐるが、さう見られないでもないやうであるが、併しそれとしても技倆は優れてゐるとは云へない。【參考】冬の里廣岡吾友　○冬扇一路（附錄。伊賀實錄）白井鳥醉　○芭蕉翁全傳　川口竹人　○ばせを翁正傳集　竹二坊　○蕉門諸生全傳　遠藤日人　○犖の栖鶯秋・還水・求古　○俳林小傳　中村光久　○俳諧人物便覽　三浦若海　○古鄕集　無雲・翠香　○俳聖芭蕉翁の面影　木津碩堂　【志田】

留り字　「切字」を見よ。

富岡先生　新派脚本　三幕七場【原作】國木田獨步【脚色】眞山青果【由來・興行】大正十四年二月、雜誌「苦樂」に發表。「酒中日記」と同樣に、井上正夫のために書き卸されたと傳へるが、井上より先に澤田正二郎によつて大正十五年五月邦樂座に上演。井上は昭和三年にまづ映畫化し、翌年四月市村座で興行。【役割】富岡先生（井上正夫）、お梅（英太郎）、大津定次郎（梅島昇）、高山文助（伊志井寬）、お種（村田式部）、江藤侯爵（小堀誠）、細川繁（花柳章太郎）。【梗概】【序幕】富岡先生は、その昔高槻塾で同門だつた江藤三輔が、たとひ今、大勳位で、侯爵で、朝鮮總督であつたにしても、昔馴染の村にただ歸つて來るといふだけの事に、村の人事不省になつた先生は運ばれて來て、お種・お梅・細川たちに介抱される。その時ハルピンで不逞の徒にピストルで狙撃された侯爵が落命したといふ確報の號外が來る。それを聞いて先生は、ムックリ起き上つていふ、「江藤は立派に血を以て君國に酬いてくれた。おれは自分の不明を恥ぢない。……江藤は高槻先生の弟子だ、おれの舊友だ」と。そして細川にお梅の一身を託し、江藤々々と呼び續けながら先生も死んで行く。【解說】原作は明治三十五年九月、雜誌「敎育會」に發表された小說である。原作には、江藤侯爵の歸省問題、舊師の建碑問題、先生の上京中の事件などはなく、外交官夫人の姉娘は原作にない人物である。結末の先生の最期も全然脚色者の創作で、原作では高山がお梅を妻に、大津の代りに東京にゐる同じ弟子の高山文助を思ひ出し、急にお梅を連れて上京する。その跡の村塾では、密かにお梅を愛してゐる細川が一人寂しくもの思ひに沈む。【二幕】大磯の江藤侯爵の別邸へ大津と高山とが來て、富岡先生の身の上を侯爵に依賴する。先生とお梅とが來る。先生は上京後凡ての舊友たちと衝突し、遂には高山まで氣に入らなくなつてゐる。だが娘の身を思ふとさすがに氣が挫け、最後に侯爵にお梅を預けようとして來たのである。侯爵はわざと先生を腹たゝせるやうにする。先生はそれをぢつと堪へて只管娘のことを賴む。侯爵が承諾するので、先生は無邪氣に大喜びをするが、「今も大津と高山が來て心配してゐた」といふと、急にまた屹となる。先生は氣に入らない弟子達から同情されなくその人事不省になつた先生は運ばれて來て、お種・お梅・細川たちに介抱される。その時ハルピンで不逞の徒にピストルで狙撃された侯爵が落命したといふ確報の號外が來る。それを聞いて先生は、ムックリ起き上つていふ、「江藤は立派に血を以て君國に酬いてくれた。おれは自分の不明を恥ぢない。……江藤は高槻先生の弟子だ、おれの舊友だ」と。そして細川にお梅の一身を託し、江藤々々と呼び續けながら先生も死んで行く。【解說】原作は明治三十五年九月、雜誌「敎育會」に發表された小說である。原作には、江藤侯爵の歸省問題、舊師の建碑問題、先生の上京中の事件などはなく、外交官夫人の姉娘は原作にない人物である。結末の先生の最期も全然脚色者の創作で、原作では高山がお梅を妻

【題材】越前三國の玉屋新兵衞に關する卷說は明かでないが、元祿の初めには已に俚諺として諷はれてゐた事は咄本の「枝珊瑚珠」（元祿三年）中の「しんべどの」に窺はれ、「落葉集」（寶永元年）には、「三國玉屋踊」として收められて居り、それが人口に膾炙した事實は「傾城新色三味線」（享保三年）等でも知り得るが、今日なほ「俚諺集」京都府の部所收の「御國踊」に轉訛して傳へられる以外に、キヤリ（明和二年の長唄「花寄系圖咄」に見ゆ）や、「浮れ草」（文政五年）所收の「越前節」等としても行はれた。その他享保の頃には、既に各派の淨瑠璃や歌舞伎・浮世草子に脚色されて有名であつたが、五瓶はそれを借りて深川の岡場所を背景とする清新な世話物につくり上げたのである。【梗概】【序幕】（深川摩利支天橫町・同仲町梅

留り字（とまりじ）「切字（きれじ）」を見よ。

富岡先生（とみをかせんせい）

新派脚本　三幕七場

【原作】國木田獨歩【脚色】眞山青果【由來・興行】大正十四年二月、雜誌「苦樂」に發表。「酒中日記」と同樣に、井上正夫のために書き卸されたと傳へるが、井上より先に澤田正二郎によつて大正十五年五月邦樂座に上演。井上は昭和三年にまづ映畫化し、翌年四月市村座で興行。

〔役割〕富岡先生（井上正夫）、お梅（英太郎）、大津定次郎（梅島昇）、高山文助（伊志井寛）、お種（村田式部）、江藤侯爵（小堀誠）、細川繁（花柳章太郎）。

【梗概】〔序幕〕富岡先生は、その昔高槻塾で同門だつた江藤三輔が、たとひ今、大勳位で、侯爵で、朝鮮總督であつたにしても、昔馴染の村にただ歸つて來るといふだけの事に、村がそれを光榮にして大騷ぎをしてゐる事が氣に入らないのである。殊にその出迎へをさせるために、小學校の子供まで歸さずにあるといふ事を聞いて、一層機嫌を惡くする。そして侯爵が結局來ない事になつたので、元の弟子で今は小學校長の細川繁に、その違約を責めて來いといつても細川が躊躇するので、愈々風雲險惡になる。そこへ東京から歸省中の、これも元の弟子の大津定二郎が來る。大津には末娘のお梅を添はさうとしてゐる先生である。急に機嫌を直す。が、それも大津が、舊師の建碑に不同意だといふ侯爵からの傳言をすると、すぐ又腹を立てる。而も大津までそれを侯爵の見識だといふので、先生は大津を面罵する。やがて先生は細川を連れて小川へ釣に行く。そこで細川から大津がお梅を捨てて外の女と結婚することを聞かされる。さすがに先生は言葉が出ない。だが直ぐに先生は大津の代りに東京にゐる同じ弟子の高山文助を思ひ出し、急にお梅を連れて上京する。その跡の村塾では、密かにお梅を愛してゐる細川が一人寂しくもの思ひに沈む。〔二幕〕大磯の江藤侯爵の別邸へ大津と高山とが來て、富岡先生の身の上を侯爵に依頼する。先生とお梅とが來る。先生は上京後凡ての舊友たちと衝突し、遂には高山まで氣に入らなくなつてゐる。だが娘の身を思ふとさすがに氣が挫け、最後に侯爵にお梅を預けようとして來たのである。侯爵はわざと先生を腹たゝせるやうにする。先生はそれをぢつと堪へて只管娘のことを頼む。侯爵が承諾するので、先生は無邪氣に大喜びをするが、「今も大津と高山が來て心配してゐた」といふと、急にまた屹となる。先生は氣に入らない弟子達から同情されることに我慢が出來ないのである。憤激の果は侯爵までも氣概のない口舌の徒と罵る。そして大津と高山とが止めるのも諾かず、お梅を連れて立ち去る。〔三幕〕東京から歸つた後の富岡先生は、めつきり老衰し、不機嫌は募つて行く。外交官へ片附いてゐる姉娘のお種が、侯爵の意をうけてお梅と高山のことを話せば、それはお梅が父の辛いのを高山に訴へたのだらうと僻んだり、お梅を慰める細川を見ては、お前は師匠を見舞に來るのか、それとも娘の機嫌をとりに來るのかと極めつけたりする。やがて江藤侯爵がハルピンで怪我をしたといふ噂が村に傳はつて來る。だが先生はそれを信ぜず、却つて江藤を愧死させるのだといひ、急に高槻先生の建碑を今日中に仕上げろと言ひ出す。そして折からの雪の中を裏山の建碑所へ上つて行き、誤まつて碑石を倒し、その下になつて大怪我をする。間もなくその人事不省になつた先生は運ばれて來て、お種・お梅・細川たちに介抱される。その時ハルピンで不逞の徒にピストルで狙撃された侯爵が落命したといふ確報の號外が來る。それを聞いて先生は、ムツクリ起き上つていふ、「江藤は立派に血を以て君國に酬いてくれた。おれは自分の不明を恥ぢない。……江藤は高槻先生の弟子だ、おれの舊友だ」と。そして細川にお梅の一身を託し、江藤々々と呼び續けながら先生も死んで行く。

【解説】原作は明治三十五年九月、雜誌「教育會」に發表された小説である。原作には、江藤侯爵の歸省問題、舊師の建碑問題、先生の上京中の事件などはなく、外交官夫人の姉娘は原作にない人物である。結末の先生の最期も全然脚色者の創作で、原作では高山がお梅を妻に望んでゐたのを、ふとした行きがかりから、お梅はこれも落伍者である小學校長細川と平和な家庭を作ることになり、先生も安心して死んで行くといふ事になつてゐる。〔久保田〕

富岡戀山開（とみがをかこひのやまびらき）

脚本　四幕　十二場　世話物【作者】並木五瓶【角書】「玉屋新兵衞・三國小女郎・出村新兵衞」と三行にある。【通稱】「二人新兵衞」或は「出村玉屋」【諸本】書卸臺帳。演劇脚本集（文藝叢書）・脚本傑作集（續帝國文庫）・並木五瓶世話狂言集（日本戲曲全集）等所收【興行】寛政十年正月十五日初日、江戸桐座「着衣始（きなじめ）小袖曾我」の二番目狂言。

〔役割〕出村新兵衞（澤村宗十郎）、鵜飼九十郎・玉屋新右衞門（嵐三八）、手代三四郎（大谷友右衞門）、仕事師産毛の金太郎（坂東三津五郎）、玉屋嫁おえん・三國屋小女郎（瀬川菊之丞）、玉屋新兵衞（市川八百藏）等。

【題材】越前三國の玉屋新兵衞に關する巷説は明かでないが、元祿の初めには已に俚謠として謳はれてゐた事は咄本の「枝珊瑚珠」（元祿三年）中の「しんべどの」に窺はれ、「落葉集」（寶永元年）には、「三國玉屋踊」として收められて居り、それが人口に膾炙した事實は「傾城新色三味線」（享保三年）等でも知り得るが、今日なほ「俚謠集」京都府の部所收の「御國踊」に轉訛して傳へられる以外に、キヤリ（明和二年の長唄「花寄系圖咄」に見ゆ）や、「浮れ草」（文政五年）所收の「越前節」等としても行はれた。その他享保の頃には、既に各派の淨瑠璃や歌舞伎・浮世草子に脚色されて有名であつたが、五瓶はそれを借りて深川の岡場所を背景とする清新な世話物につくり上げたのである。

【梗概】〔序幕〕（深川摩利支天横町・同仲町梅本）玉屋新兵衞は何事か心に期するところがあつて、茶屋梅本に、遊女三國屋小女郎を招く。初會の客なのに小女郎は深い思慕の情を抱きそめる。その折、隣の割床（わりどこ）に臥してゐた茨原藤兵衞は、隔ての屏風を割いて密に新兵衞の印判を盗み取る。〔二幕〕（芝神明境内）藤兵衞と猪牙（ちよき）舟の船頭三ぶと玉屋の手代三四郎との密談。それによると、遊女小女郎はもと下總結城の家中鵜飼兵太夫の娘で小菊と言つたが、無頼の兄九十郎のために欺かれて三國屋に賣られたのであつた。藤兵衞も同家中の侍で、小菊に戀慕してゐたが、惡事のため追放されたものであつた。藤兵衞は盗んだ印判で玉屋を陷れ、小女郎を手に入れようと企み、三四郎も亦新兵衞の許嫁おえんを我が物にせんものと共に謀議する。一方、玉屋新兵衞は、舊主兵太夫の息で江戸に流浪中の鵜飼九十郎を庇護してゐるが、今日も社前に會し

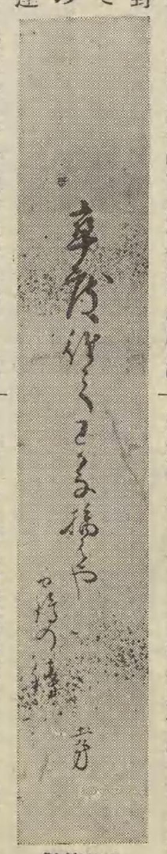
とびだんご」は先に出た「鹿子餅」（別項）などの縁に由つた名稱である。【刊行】安永二年より順次に出た。【解説】殆ど新作咄である。中には舊話の作りかへも交つてゐる。例へば「鹿子餅」に「朝鮮人」と題して、朝鮮人が日本の蹴鞠を鳥と思ひ、鞠の破れるのを屁を放つて死んだとある話を、本書には「鞠」と題し、朝鮮人を田舍者として作り替へてある。一般に本書の話は言語の遊戯がなく、巧まない自然的なるをかしみを漂はしめてゐる。併しエロチックな情痴の話が多いところに、やゝ眉をひそめしむるものがある。それも危いとこでも感銘が深い。本書は、同じく梅巖の「齊家論」（別項）と共に、心學の經典として重んぜられ來つたが、事實梅巖その人の思想に觸るゝには、まづ本書に據るべきである。〔白石〕

井礑（どぶかつちり）

能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちと傳へられる。

【梗概】勾當が出て菊一を呼び出し、嵯峨へ行く供をさせる。途中替川（かい）を渡るのに水の出たけはひがあるから、菊一が瀬踏みをして見ると言つて石を打つ。どぶどぶと沈むのでこゝは深い、上手へ打つと、どぶりかつちりと當るので上が淺いと知り、やがて勾當は菊一に

【生歿】明暦三年に生れ、享保十五年（二三九〇）正月十八日歿す。享年七十四【墓所】伊賀上野郊外長田村西蓮寺【俳系】芭蕉門【閲歴】伊賀上野の藩士で内海流の槍術に達してゐたと云はれる。伊賀の上野に於ける芭蕉に因み深い所謂伊賀五庵のうち、蓑虫庵は土芳の建てたもので、芭蕉が面壁の達磨の畫に、「蓑虫の音を聞きに來よ草の庵」といふ句を讃した自畫自讃をくれたので名づけたので



土芳筆蹟

う見られないでもないやうであるが、併しそれとしても技倆は優れてゐるとは云へない。

【參考】冬の里廣岡吾友○冬扇一路（附錄。伊賀實錄）白井鳥醉○芭蕉翁全傳川口竹人○ばせを翁正傳集竹二坊○蕉門諸生全傳遠藤曰人○聲の栞鷺秋・遠水・求古○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○古郷集無雲・翠香○俳聖芭蕉翁の面影木津碩堂【志田】

てその不身持を諫めるが聞き入れられない。（同いろは茶屋）結城家の重寶鯉の一軸の盜賊九十郎を召捕るべく出府してゐる氏原勇藏は、新兵衞を捉へて犯人を渡せと迫るが、新兵衞は十日の猶豫を乞ひ一軸を取戻さうと約する。（元の境内）手代三四郎はおえんに言ひ寄るが、玉屋出入の仕事師金太郎の頓智で耳孔に吹矢を射込まれて悶絶する。藤兵衞・三ぶは贋證文で新兵衞を强請るが見世物の羊が現はれて證文を喰つて了ふ。〔三幕〕（深川八幡境内・同二軒茶屋）玉屋新兵衞は、九十郎に逢ひ樣々諫めた上一軸を取戻しに赴かせる。小女郎を身請しようとしてゐる出村新兵衞と玉屋新兵衞との達引。玉屋は憤つて出村の額を傷ける。折しも九十郎から一軸請出しの代金二百兩を持參せよとの報せに、小女郎・玉屋は當惑するが俠氣の出村は意趣を捨てて身請金の百五十兩を投出す。玉屋は恩に感じ自らの額を傷け、小女郎苦面の五十兩と合せて九十郎の許に急ぐ。（夷の宮麥飯茶屋）新兵衞を誘ひ寄せた九十郎は、藤兵衞・三ぶと共に贋一軸で二百金を欺き奪はうとするが事露はれて逃走する。（猪の堀）九十郎に改心の望みなきを知つた新兵衞は、一軸詮議の刻限が過ぎたので絶望の極、雨中にこれを斬殺する。折から來合せた出村新兵衞とだんまり模樣の見得。〔四幕〕（玉屋内）玉屋の後家は新兵衞の父新右衞門を後夫としてゐるが、手代がはりの實の甥三四郎を愛し新兵衞を憎惡する。許嫁おえんを嫌ひ深川に通ひつめる新兵衞を今日も合はぬ帳尻の事で詰責するが、出入りの仕事師金太郎の執成で急場が救はれる。出村新兵衞は始めておえんの實の兄と明かして訪れて來る。死を決した小女郎も駈けつける。藤兵衞が强請の種にと三四郎に屆けて來た小女郎新兵衞の比翼紋の羽織をおえんは何心なく取上げると、小女郎に宛てた新兵衞の色文が落ちる。兄の出村はそれをおえんの不義の濡文と誤解し、小女郎を身請しようとしたのも、妹を無事に新兵衞と添はせたいための計らひであつたものをと歎き、妹の不義を知つた今は、新右衞門への義理立てからも、その面前でその文を讀み上げられたいと新兵衞に迫るが、やがてそれが玉屋から女への文と知れると、今度は新右衞門が、出村への義理合ひから、伜新兵衞に讀ましめようとする。おえんは仲に立つて煩悶する。新兵衞は比翼紋の羽織を割いて小女郎と切れることを誓ひ、おえんと祝言しようと申出る。押入に隱れた小女郎は嫉妬する。折から氏原勇藏が新兵衞を召捕りに來る。新右衞門・新兵衞・小女郎は交々その罪を負はうと爭ふ。出村は猪の堀で拾つた一軸入質の通帳を玉屋に與へる。（奥座敷）三四郎はおえんを捕へて逐電しようとするが金太郎に謀られ、玉屋の婆を入れた葛籠を擔いで滿悅して出て行く。暗闇の中に、小女郎・おえんを取違へて述懷する兩新兵衞のをかしみ。玉屋新兵衞は金子を得て、一軸を請け出すべく駈けて行く。（江戸橋）一軸を背負つた新兵衞が、大勢の捕方を相手に立ち廻り。出村新兵衞・金太郎が、惡人共を追つて出て落合ひ、賑やかに幕。

【脚色】役者を巧みに揃へ、路考菊之丞に生娘と遊女とを演じ分けさせたのは見物を喜ばせたであらう。特に友右衞門の三四郎が吹矢を吹き込まれて聾となる仕打は大好評であつたと言ふ。深川の岡場所や芝神明の情景の寫生的な描寫にも五瓶獨特の緻密な面白味を見せてゐる。猪牙舟・梅本・障子の覗穴（のぞき）・夷の宮の麥飯茶屋・二軒茶屋・洒落地口等で深川好きの見物を隨喜せしめ、神明の吹矢や羊では景物を巧みに舞臺技巧に活用して抱腹絶倒せしめてゐる。江戸文藝全體が漸く堅實なリアリズムを失ひ、手法としてのみ皮相的寫實を採り來つてゐた時期に際して五瓶の諸作がその寫生風の描寫を展開させて行つた事は十分注意されねばならぬ。なほこの作でも五瓶の臆病な程の常識的合理主義が全篇に漲つてゐるが、それが戯曲の全構成を緊密なものにすると共に、一方詩的情調を薄め、奔放さの代りに鈍重味を加重するといふ五瓶の作品共通の作風を示してゐる。【史的地位】三國小女郎・玉屋新兵衞の情話が巷間の俚謠から淨瑠璃に移されて流行したのは、「傾城歌三味線」（享保十七年）の序に、「梅の難波に時花淨瑠璃」とあるのや、「御伽名代紙衣」（元文三年）に「三國玉屋の淨瑠璃語りて」とあるので、大體享保頃と覺しく、豐後節に語られたのであらう。「道行比翼の初旅」（宮古路月下の梅所收）や、「玉屋新兵衞三國小女郎道行」（宮古路窓の梅所收）が現存するが、恐らくその頃の曲であらう。義太夫節ではやゝ下つて「三國小女郎曙櫻」（寶曆五年豐竹座）がある。歌舞伎でも、享保十八年八月大阪北新地嵐座に「三國小女郎」が演ぜられてゐる（中村十藏の新兵衞）。爾後「近江源氏軍功幟（にうな）」（享保二十一年、江戸中村座。初代宗十郎の新兵衞）や「江戸花陽向曾我（わかやぎ）」（明和六年、市村座。羽左衞門の新兵衞）などがあるが曲は詳かにし得ない。小説では「傾城歌三味線」（別項）が著名である。五瓶の本作は「罷出村助花（まかりでむらすにきさぎ）」（文化元年二月、中村座）以後、種々の替名題で屢々上演され今日に及んでゐる。改作物には、二世如皐の「艷色競廓操（はでくらべさとのみさを）」（文化五年三月、中村座二番目。日本戯曲全集所收）や、南北の「玉藻前御園公服（くもゐのはれぎる）」の第二番目（文政四年七月、河原崎座。大南北全集所收）や、更にこれを增訂した「月出村廿六夜諷（つきらでむらつくやのひとかし）」（元治元年八月、市村座）等が知られてゐる。〔近藤〕

【參考】歌舞伎年代記○江戸芝居年代記○大歌舞伎外題年鑑○京阪歌舞伎年代記○並木五瓶の事を記す三木竹二（「つきくさ」所收）

富永平兵衞（とみながへいびやうゑ）　脚本作者　【本名】未詳【俳號】辰壽【歿年】未詳。但し元祿十三年迄には歿してゐる。【閲歷】未だ傳記らしいものが發見されない。歌舞伎脚本作者の祖といはれた福井彌五左衞門に次いで、名作者と謳はれた斯道の古參作者で、延寶・天和の頃、上方に榮え、元祿年代まで活躍した。延寶八年の顔見世役番附に、初めて狂言作りとして自己の名を掲げたが、この事以來、世の嘲笑をかつて、人氣が落ちたと傳へる。併し彼は近松の現はれる前の上方の作劇界では重鎭であつた。當時は主として大阪劇壇のために奮鬪してゐたらしいが、晩年近くの元祿年代に入つては京都で活動した。然るに當時は、作劇法の著しい進歩もあり、京都は近松の作風には最も適した土地であつただけに、大阪に業を積んだ彼の態度とは、全然相反する點が多くあつた。かくて作劇家としての彼の晩年は、相當淋しく終りをつげた。なほ彼は、早く談林の俳諧を學び、演劇界に於ては、斯道の先達であつたらしい。

【作品・作風】全盛時代の延寶天和年間の作については、殆ど記錄がなく、元祿年代のものについてのみ所傳が發見せられるに過ぎない。それ等の名題は左の如くである。

丹波與作手綱帶（元祿三年。京、村山平右衞門芝居。丹波與作）○鹿島の要石（元祿四年。山下半左衞門芝居。常陸のお家騷動に要石傳說）○娘孝行記（元祿五年か。京、山下半左衞門芝居。但馬豐岡のお家騷動に幼兒の敵討）○武道達者（元祿六年か。京、小佐川重右衞門芝居。由良兵部遺兒の敵討）○日本月蓋長者（別項）○業平河内通（元祿七年。京、小佐川重右衞門芝居。河内通の改作）○鎌倉女郎花（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。曾我）○熊野山開帳（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。お家騷動に龍本觀音利益）等。

右のうち、「娘孝行記」「武道達者」「日本月蓋長者」等は傑作の部に入れらるべきであらう（元祿時代の三大作といはれる「嫁鏡」も彼の作といふ傳へがあるが、如何か）。彼の作は、すべてがお家騷動物と見られ、而も近松の作等に比して單なる輪廓に止まらず、騷動事件が主題になつてゐる場合が多い。よつて直接に内事の狂言を掲げた文獻として尊く、俳書「道頓堀花みち」は、當時の劇界人と俳壇との接觸を如實に物語るものである。

【參考】歌舞伎脚本史守隨憲治（國文學體系）○江戸歌舞伎同上（日本文學聯講）○元祿時代の歌舞伎劇黑木勘藏（近世演劇考說）〔守隨〕

富宮笥（とみのみやのけ）　假名草子風　一卷【作者】不詳【刊行】寶永四年か。【解說】寶永三年夏の末頃より京に富籤の流行した光景をうつした戯文。德川文藝類聚第一編事實小說に收む。〔小泉〕

富仁親王嵯峨錦（とみひとしんわうさがにしき）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】紀海音【名稱】發端の富仁親王の嵯峨紅葉遊覽の條による。【初演】明和版「外題年鑑」には、寶永六年六月豐竹座とあるが、内容や現存正本の奥附等から見て、享保六年かとの說がある。【諸本】七手織部に諫め諭され、改めて勅命によつて、雪姫には十日の間に高野山の寶藏に祕められた弘法大師筆の小野小町の姿繪を寫すべき命が下り、成就の曉は、親王は戀慕を思ひ止まらせ給ふ事となつた。千王丸は人質として引かれる。〔三段〕僧都は西嵯峨の別院を内裏に摸し、天下を奪ふ謀を練る。人形造りの名人左甚五郎を捕へ來り、僧都は自ら富仁親王と稱し、その老母を枷に、雪姫の繪に對抗すべき小町の像を七日の間に刻めと命ずる。甚五郎は歸宅後、苦心最中、浪人時代に討殺した度會源吾の妻子が巡禮姿で訪ねて來て、敵討を迫つたので、事情を話して期を延ばすために、女房を人質に渡す。〔四段〕甚五郎は、雪姫の住居に忍び入つて、姫が工夫に疲れた態を窺ひ知つたが、いつか木蔭に倒れ臥してしまつた。姫も眠りに入つた。二人の魂が胸から化の效果最も著しい脚色で、場面としては、甚五郎内の場が優れてゐる。四段目夢の場は七小町の案で、機巧を利用した舞臺面の興を思はせる。七小町の趣向は、海音が更に補綴して享保十二年「七小町」を發表した。甚五郎内の場は、後に「京人形」（左甚五郎參照）として完成され、雪姫の件は、「祇園祭禮信仰記」（別項）に發展した。

【參考】淨瑠璃名作集解說黑木勘藏〔守隨〕

富本延壽（とみもとえんじゆ）「清元節」を見よ。

富本節（とみもとぶし）　淨瑠璃の一流派【名稱】流祖富本豐前掾の名に據る。【沿革】富本豐前掾は常磐津文字太夫（常磐津節參照）の門に出で、寬延年中一派を起し、爾後芝居に出勤してゐたが、明和元年歿するに及び、門下の名手齋宮太夫は、松平南海侯やその他の庇護を得て、師の遺孤午之助を輔佐してよく斯流の發

居。丹波與作）○鹿島の要石（元祿四年。山下半左衞門芝居。常陸のお家騒動に要石傳說）○娘孝行記（元祿五年か。京、山下半左衞門芝居。但馬豐岡のお家騒動に幼兒の敵討）○武道達者（元祿六年か。京、小佐川重右衞門芝居。由良兵部遺兒の敵討）○日本月蓋長者（別項）○業平河內通（元祿七年。京、小佐川重右衞門芝居。河內通の改作）○鎌倉女郎花（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。曾我）○熊野山開帳（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。お家騒動に龜本觀音利益）等。

右のうち、「娘孝行記」「武道達者」「日本月蓋長者」等は傑作の部に入れらるべきであらう（元祿時代の三大作といはれる「嫁鏡」も彼の作といふ傳へがあるが、如何か）。彼の作は、すべてがお家騒動物と見られ、而も近松の作等に比して單なる輪廓に止まらず、騒動事件が主題になつてゐる場合が多い。よつて直接に內容を問題とするならば、近松の作より優れてゐるとも考へられる。彼の脚色上の特徵は、かゝる時代物の中で、殊に太刀打物を得意としたに拘はらず、輕快な滑稽味を巧妙に按排し了せる點にある。脚色法の多方面を自由にするについては、元祿年代に他に例を見ぬ作者であつた。彼の作は早く大阪に於て認められたと思はれるのに、何故か、元祿年代に入つて、京都に於て土地に不適合な時代物の作をつづけ、遂に新進の近松に壓倒されたのであつた。併し上方の時代歌舞伎、特に敵討物の如きは、彼によつて始めて脚色法を示されたのである。爾後大阪が特有の時代歌舞伎を發達させてゆく素地は、彼によつて構成されたとも見られる。なほ彼の著にかゝる「藝鑑」（「耳塵集」「別項」等と共に役者論語と稱される。新群書類從・隨筆文集・選集等に所收）は、衆道事、傾城事の狂言を掲げた文獻として尊く、俳書「道頓堀花みち」は、當時の劇界人と俳壇との接觸を如實に物語るものである。

【參考】歌舞伎脚本史（守隨憲治）（國文學體系）○江戸歌舞伎同上（日本文學聯講）○元祿時代の歌舞伎劇（黒木勘藏）（近世演劇考說）〔守隨〕

富宮筒（とみのみやのつけ）　假名草子風　一卷【作者】不詳【刊行】寶永四年か。【解說】寶永三年夏の末頃より京に富籤の流行した光景をうつした戲文。德川文藝類聚第一編事實小說に收む。〔小泉〕

富仁親王嵯峨錦（とみひとしんわうさがにしき）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】紀海音【名稱】發端の富仁親王の嵯峨紅葉遊覽の條による。【初演】明和版「外題年鑑」には、寶永六年六月豐竹座とあるが、內容や現存正本の奥附等から見て、享保六年かとの說がある。【諸本】七行八十五丁本。淨瑠璃名作集上卷（日本名著全集）所收。【題材】近松作の「傾城反魂香」（別項）を書き替へたものであるが、狩野雪姬の繪と左甚五郎の彫刻を主に、その背景として富仁親王（花園帝）の兄宮蟠海僧都の叛逆事件を据ゑた。

【梗概】〔初段〕永享二年の暮秋、男裝された富仁親王は、嵯峨の紅葉御遊覽に行かれる。先帝の一の宮で親王の兄なる高雄の蟠海僧都は、帝位を窺ひ、親王を失はうと高雄の紅葉へと招いたが、關白兼定公、早くもこれを看破し、笹目の千王丸が機轉と奮闘を以て危地を脫した。〔二段〕親王は千王丸の妻雪姬に戀慕と稱し、僧都を迎への使者としたが、千王丸は僧都を打擲して逐ひ返し、雪姬と共に近江へ落ちる（狩野雪姬道行）。醒ケ井で再び追手に追付かれてこれを打拂つたが、雪姬の父膳手繼部に諫め諭され、改めて勅命によつて、雪姬には十日の間に高野山の寶藏に祕められた弘法大師筆の小野小町の姿繪を寫すべき命が下り、成就の曉は、親王は戀慕を思ひ止まらせ給ふ事となつた。千王丸は人質として引かれる。〔三段〕僧都は西嵯峨の別院を內裏に摸し、天下を奪ふ謀を練る。人形造りの名人左甚五郎を捕へ來り、僧都は自ら富仁親王と稱し、その老母を拘に、雪姬の繪に對抗すべき小町の像を七日の間に刻めと命ずる。甚五郎は歸宅後、苦心最中、浪人時代に討殺した度會源吾の妻子が巡禮姿で訪ねて來て、敵討を迫つたので、事情を話して期を延ばすために、女房を人質に渡す。〔四段〕甚五郎は、雪姬の住居に忍び入つて、姬が工夫に疲れた態を窺ひ知つたが、いつか木陰に倒れ臥してしまつた。姬も眠りに入つた。二人の魂が胸から出て空中に迷ふと見えたが、館は忽ち照り輝いて、古の小町の姿が浮び出でた。草紙洗小町から通小町、卒塔婆小町へと移り、七小町の有樣がまざ〳〵と現はれて、二人は共に靈感を得た。〔五段〕甚五郎は小町の人形を、雪姬も姿繪を持つて參內する。親王は千王丸を殺したと僞つて僧都に叛逆を自白させ、一味を悉く縛せしめた後、始めて女帝の姿で出御される。雪姬は繪所を命ぜられ、甚五郎は細工の司を賜はる。源吾は僧都一味と知れたが、一子は特に瀧口に召されて、甚五郎への怨念を捨てさしめ給ひ、僧都は遠島となつた。

【解說】全篇の結構は大規模で、場面の變化と詩趣に富み、海音の作中傑作となすべきであらう。狩野雪姬の件は既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姬」に見られたが、本曲の方が戲曲的に優れてゐると思ふ。三段目は照應變化の效果最も著しい脚色で、場面としては、甚五郎內の場が優れてゐる。四段目夢の場は七小町の案で、機巧を利用した舞臺面の興を思はせる。七小町の趣向は、海音が更に補綴して享保十二年「七小町」を發表した。甚五郎內の場は、後に「京人形」（左甚五郎參照）として完成され、雪姬の件は、「祇園祭禮信仰記」（別項）に發展した。

【參考】淨瑠璃名作集解說　黒木勘藏　〔守隨〕

富本節（とみもとぶし）　淨瑠璃の一流派【名稱】流祖富本豐前掾の名に據る。【沿革】富本豐前掾は常磐津文字太夫（常磐津節參照）の門に出で、寬延年中一派を起し、爾後芝居に出勤してゐたが、明和元年歿するに及び、門下の名手齋宮太夫は、松平南海侯やその他の庇護を得て、師の遺孤午之助を輔佐してよく斯流の發展に努めた。午之助の二代豐前太夫また名人の譽れ高く、安永から寬政にかけては常磐津と對抗して、その勢力遙かにこれを凌駕し、富本を知らなくては江戸音曲を語る資格がないとまでいはれた。かくて斯流は二代と齋宮太夫との力によつて大成すると共に、その基礎を固めた。然るにか程の全盛も齋宮太夫事延壽が享和に歿し、二代豐前掾が文政に歿してからは、分派の新興清元節（別項）に漸次壓倒されて、三代・四代を經た明治初期には昔日の面影なく、四代の歿するに至つて富本の芝居出勤は勿論、社會的位置も殆ど失はれた。今は四代門弟筋で新派家元の富本豐前の娘二代富本豐前によつて滅亡を免れてゐる。

【傳系】〔初代〕本名、福田彈司。初名、宮古路品太夫・常磐津小文字太夫。別號、豐洲。明和元年十月二十二日江戸に歿す。享年四十九。

法名、榮廣院譽誉良聲流音居士。菩所、淺草專修院法福寺。但し市外王子に改葬。初代常磐津文字太夫がまだ宮古路と稱した時代の門下（一說に初め宮古路豐後掾門下）。小文字太夫の名で師の脇語を勤めたのは、延享元年八月中村座の「浮名の毛氈」が最初で、同四年十月師が常磐津と改姓すると同時に彼も亦改姓した。然るに寛延二年師と分離して一流を立て、その最初に語つたのが「歲朝嘉例壽」だと傳へる。受領して富本豐前掾藤原敬親と稱へたが、寶曆十年十一月更に筑前掾と改めた。門下から齋宮太夫（淸元節參照）と大和太夫との名手を出した。〔二代〕幼名、午之助。別號、豐翁。法名、榮豐院量譽壽松道繁居士。文政五年七月十七日江戸に歿す。享年六十九。初代の實子。十歲で父に別れ、齋宮太夫が後見。明和三年七月中村座に亡父三回忌追善として「文月笹一夜」（下卷）を語つたのが初舞臺で、同七年十一月豐志太夫と改め、安永六年正月二代豐前太夫襲名。松平不昧公から「七重八重野邊のにしきや櫻草」の句を祝つて賜はつたので、初代の鶴の丸の紋所を櫻草に改め、爾來斯流の紋所と定め、替紋を銀杏鶴懸追結一輪櫻に作つた。文化十四年十一月受領して豐前掾藤原敬政と稱した。幼時から美音を謳はれた名人で、斯流の名曲の多くは彼の全盛期に成つた。實子なく、五代瀨川路考の兄の豐太郎を養子としたが、夭折した（文化十三年七月）。〔三代〕幼名、善太郎。後に林之助。別號、豐珠翁。文化二年に生れ、明治九年五月二日歿す。享年七十二。江戸日本橋人形町鶯屋善八の子。十四歲で養子となり、文政五年十一月市村座で午之助を名乘つて初舞臺。同十一年三月同座で、三代豐前太夫を襲名して「更名櫻の盞」を語つた。嘉永三年正月受領して豐前掾藤原政弘となり、同五年更に豐前大掾と稱し、安政六年隱居して豐珠（壽）翁と改めた。明治

四年三月中村座で（坂東龜藏の一世一代と共に）、彼の一世一代として「壽名殘島臺」を語つた。〔四代〕本名、保太郎。別號、豐洲。天保元年六月十六日に生れ、明治二十二年九月七日歿す。享年六十。三代の長男。弘化二年正月中村座で、豐紫太夫の名で父の脇語を勤めたのが初舞臺。嘉永五年正月、四代富本豐前太夫を襲ぎ、明治三年豐洲と改む。彼は斯流中興の名人といはれたほど、非凡な藝能を有し、斯流再起に力を盡したが、保守的な富本は江戸人の好尙から厭かれ、昔日の全盛を挽回することが出來ず、遂に淸元に壓倒さるゝに至り、不遇に世を終つた。〔五代〕幼名、玉次郎。明治十三年八月二十三日歿す。享年二十。明治九年五代豐前太夫襲名。〔六代〕四代と同人。五代夭折後、適當な相續者がないので、再び家元を繼承。明治十三年十一月、豐前掾と稱し、中村座の「年市廓內入」と「廓文章」とを語つた。明治十七年先代富士松加賀太夫（當時津賀太夫）を養子に迎へ、豐紫太夫と名乘らせたが、故あつて間もなく離緣。六代歿後一時中絕したが、富本はこれで一段落を告げたといつてよい。〔七代〕本名、複本淸久。骨董屋の次男。明治三十一年春、六代の三絃方名見崎友治の奔走で、彼の祖父が先代の藝を愛し、その家に寄寓せしめたといふ緣故から、九歲で豐志太夫と名乘り、七代家元を相續。同四十二年六月、七代豐前太夫を襲名。後に美音會幹事住田淺吉夫人に豐前太夫の家名を預けられた。〔新派豐前〕本名、坂田らく。安政四年正月十一日淺草に生れ、昭和八年八月三日歿。享年七十七。三代及び四代に師事。夫に死別後、二代名見崎得壽齋の名見崎流に入つて得梅の名を得、その後七代宗家の門に走り、豐鶴と改む。明治四十二年九月、新派を樹立して家元の認可を受け、富本都路と改名。大正九年豐前を襲名、斯流を今日に傳へた。

【三絃方】斯流の立三味線を彈いた主なものに宮崎忠五郎（豐千）・名見崎德治・鳥羽屋里長・佐々木市四郎・三保崎兵助等がある。

【詞章】その大部分は劇場音樂として濡場・道行・所作等に用ひられたが、また座敷にも語られたので、端物が多く、段物は至つて少い。時代物と世話物とが相半ばしてゐるが、時代物でも世話に碎けてをり、これを道行物・準狂言物・浮世風俗物・祝言物等に分け得られる。その內容や構造も一樣でないが、概ね遊里趣味を中心としたもの多きを占め、就中天明趣味のものに名作がある。又これを文學的に見ると、「長生」の如き傑作もあるが、所作事地として役者本位に作られた爲めに、文理の整はない作も尠くない。併し上品で、優艶な詞藻に富んでゐる。作詞者は松平南海侯の如きもあるが、大部分は狂言作者で、その主なものは壕越菜陽・金井三笑・初代二代瀨川如皐・松井由輔等である。【曲節】豐後節（別項）のよく江戸化されたもので、また江戸淨瑠璃を最も醇化したものである。常磐津（別項）よりも派手であるが、高雅で、樂曲の組織からいへば、師流の常磐津との差違は殆どないが、富本の趣味なり、表情なり、又は發聲の差違によつて特色が自づと生れたものである。卽ち個性化が擴大されて一つのスタイルとなつたのは、恰も富本が淸元となつたと同樣である。その特徵は纖麗で、詞章が明瞭に聞え、且つ子音に節をつけず、聲を變ぜしめるところに妙味がある。從つて常磐津よりもその節廻しに於ける技巧が多いともいへる。調子に無理がないために富本を左程知らぬ人でも、箏曲の奧義を究めた程の人には、琴の糸に乘つて、斯流の曲が彈奏さるゝほど、他流にも珍重されたものであつた。併し習得が困難なために、今日の凋落を見るに至つた。

【傳存曲】語物は約五百番に上るといふが、傳

存曲は七十種ぐらゐで、そのうち普通に行はれるものは四十種內外ある。【代表曲】歲朝嘉例壽（作詞、傳松平宗衍（南海））。初代豐前掾が獨立して一派を樹てた最初の春興行に、侯から賜はつたので、これに節附をしたものと傳へる。富本の祝言物中第一位の名曲）○百夜菊色の世中（通稱關寺）（小町參照）○夫婦酒替奴中仲（通稱鞍馬獅子）○追善其俤淺間嶽（通稱淺間）○新曲高尾儀悔（通稱高尾さんげ）（作詞、櫻田治助。作曲、名見崎德治。天明二年八月中村座。頽廢のために非業の最期をとげた高尾の幽魂が、土手の道哲に懺悔話をする趣向）○春夜障子梅（通稱夕ぎり）○徒髮戀曲者（通稱松風）○幾菊蝶初音道行（通稱忠信）（作詞、二代瀨川如皐。作曲、二代鳥羽屋里長）。因みに文化・文政時代は「道行戀飛脚」（梅川忠兵衞。現存）と「夜花袋三日月」（三日

小山田與清

年（二五〇七）三月二十五日、江戸で歿した。享年六十五。【法名】天眞院性譽知非文儒居士

【閱歷】小山田氏は、葛原親王を遠祖とする。その第十三世別當有重初めて小山田を稱し、後、また田中を氏として與淸の父本孝に至つた。與淸二十四歲にして江戸の商家高田氏の養子となつた。一に高田與淸ともいふのはその故である。高田家は富有であつたので、與淸は漢學を古屋昔陽に、國學を村田春海に學び、群書を蒐むること五萬卷に及び、家業の傍ら學に勵み、平田篤胤・伴信友と共に三大家を以て稱せらるゝに至つた。文政八年、四十三歲にして家を孫淸常に讓り、本姓小山田氏書第十二編）○倭學戴恩日記一冊（東京專門學校講義錄附錄）○相馬日記四冊○鹿島日記二冊○松屋棟梁集一冊（別項）。【雜】藥師寺金石記一冊（文政十一年刊）○百人一首讀書法一冊○賀茂眞淵翁家傳一冊○墓相小言一冊（文政三年刊）○常總夜話二卷（孝子・義僕・貞女等のことを記す。文政十年刊）。以上ただ刊本のみを擧ぐ。

【學風】與淸の學は、博洽を以て稱せられた。文政の末年より「色葉類函」といふを作り、それによつて更に「群書搜索目錄」二千餘卷を編纂し、あらゆる題目の檢出に便ならしめた。彼は考證家を以て任じ、その著述には一節も孫引のないのを誇つてゐる。【以上森】

【歌風】與淸の本領は考證の學にあるから、その歌は餘技と見るべきであるが、春海に和學を學ぶと共に、その提撕を受け、その作も少くなかつたやうである。自筆の詠草もあるが、

伴大納言繪

朝長（ともなが）「源氏物の諸曲」を見よ。

伴大納言繪詞（とものだいなごんえことば）　繪卷　【解說】酒井伯爵所藏三卷。「看聞御記」によれば嘉吉の頃若狹國松永庄の八幡宮に在つたもので、その後江戸時代には小濱藩の武久庄兵衞これを藏し、やがて藩主酒井家の有に歸して今日に及んでゐる。貞觀年間伴大納言善男の

存曲は七十種ぐらゐで、そのうち普通に行はれるものは四十種内外ある。【代表曲】歳朝嘉例壽（通稱長生）（作詞、傳松平宗衍（南海）。初代豐前掾が獨立して一派を樹てた最初の春興行に、侯から賜はつたので、これに節附をしたものと傳へる。富本の祝言物中第一位の名曲）○百夜菊色の世中（通稱關寺）（小町參照）○夫婦酒替奴中仲（通稱鞍馬獅子）○追善其俤淺間嶽（通稱淺間）○新曲高尾懺悔（通稱高尾さんげ）（作詞、櫻田治助。作曲、名見崎德治。天明二年八月中村座。頼兼のために非業の最期をとげた高尾の幽魂が、土手の道哲に懺悔話をする趣向）○春夜障子梅（通稱夕ぎり）○徒髮戀曲者（通稱松風）○幾菊蝶初音道行（通稱忠信）（作詞、二代瀨川如皐。作曲、二代鳥羽屋里長）。因みに文化・文政時代は「道行戀飛脚」（梅川忠兵衛。現存）と「夜花姿三日月」（三日月おせん。廢滅）とが代表的名作とされ、また大好評を博したものに「道行瀨川の仇浪」（お半長右衛門。殆ど廢滅）があつた。

【參考】聲曲類纂・同補遺（新燕石十種第四）○江戸時代音樂通解町田博三○富本節の歴史中内・田村共編（日本音曲全集第九卷）○日本歌謠史高野辰之○歌舞伎圖說守隨・秋葉共撰○劇代集○唄と三味線中川愛氷○近世邦樂年表（富本）○日本歌謠集成卷十　〔秋葉〕

富本豐前太夫　「富本節」を見よ。

富本豐前掾　「富本節」を見よ。

留め字　「切字」を見よ。

知章　「平家物の謠曲」を見よ。

巴　「木曾物の謠曲」を見よ。

與清　國學者【姓名】高田氏。本姓小山田氏。字は文儒。通稱將曹。【號】松屋・知非齋・擁書倉等。【生歿】天明三年三月十七日、武藏國多摩郡上小山田村に生れ、弘化四年（二五〇七）三月二十五日、江戸で歿した。享年六十五。【法名】天眞院性譽知非文儒居士

【閲歴】小山田氏は、葛原親王を遠祖とする。その第十三世別當有重初めて小山田を稱し、後、また田中を氏として與清の父本孝に至つた。與清二十四歳にして江戸の商家高田氏の養子となつた。一に高田與清ともいふのはその故である。高田家は富有であつたので、與清は漢學を古屋昔陽に、國學を村田春海に學び、群書を蒐むること五萬卷に及び、家業の傍ら學に勵み、平田篤胤・伴信友と共に三大家を以て稱せらるゝに至つた。文政八年、四十三歳にして家を孫清常に讓り、本姓小山田氏に復した。その後、學を以て華頂宮尊超法親王に仕へ、また德川齊昭の聘に應じて水戸の史館に出仕し、「八州文藻」「扶桑拾葉集注釋」等を撰進した。高田早苗氏は曾孫に當る。

小山田與清（高田早苗氏藏）

【著作】〔註釋〕竺志船物語二册○十六夜日記殘月抄三册○佛國禪師家集一册○樂章類語抄五册（別項）○佐野のわたり一册○慕景集標註一册。〔考證〕松屋叢考三册（別項）○武州高幡不動緣起一册。〔隨筆〕松屋叢話二册（文政十一年刊）○松屋筆記三册（各別項）○擁書漫筆四册（文化十三年刊）○積德叢談一册○國鎭記一册。〔日記紀行文集〕擁書樓日記（近世文藝叢書第十二編）○倭學戴恩日記一册（東京專門學校講義錄附錄）○相馬日記四册○鹿島日記二册○松屋棟梁集一册（別項）。〔雜〕藥師寺金石記一册（文政十一年刊）○百人一首讀書法一册○賀茂眞淵翁家傳一册○墓相小言一册（文政三年刊）○常總夜話二卷（孝子・義僕・貞女等のことを記す。文政十年刊）。以上ただ刊本のみを擧ぐ。

【學風】與清の學は、博洽を以て稱せられた。文政の末年より「色葉類函」といふを作り、それによつて更に「群書搜索目錄」一千餘卷を編纂し、あらゆる題目の檢出に便ならしめた。彼は考證家を以て任じ、その著述には一節も孫引のないのを誇つてゐる。　〔以上森〕

【歌風】與清の本領は考證の學にあるから、その歌は餘技と見るべきであるが、春海に和學を學ぶと共に、その提撕を受け、その作も少くなかつたやうである。自筆の詠草もあるが、流布してゐるのは、猿渡盛章が編せる「松屋棟梁集」三卷で、これは與清の委囑を受けてその死後成したもの、弘化四年の跋に一切が記されてゐる。彼の歌は全體的に見て巧みではない。趣向と理窟が先に立つてゐて、どことなく素人じみた樣子を見せてゐる。

宿にさかせよそに薫らせ梅の花さてもちらさぬ風心あり（梅花風靜）

春の野に遊べる糸やあめつちの袋をぬひしあまりなるらむ（遊糸）

これ等はその極端な例であるが、興味の感じ方が、やゝ狂歌に近いやうに思はれる。あれほどの學者でも、藝術的の創意がない悲しさは、かやうな低卑な程度で滿足してゐたのであらう。　〔以上窪田〕

【參考】小山田與清紀淑雄（偉人史叢第十八卷・德川三百年史中卷）○水戸文籍考清水正健

朝長　「源氏物の謠曲」を見よ。

伴大納言繪詞　繪卷【解說】酒井伯爵所藏三卷。「看聞御記」によれば嘉吉の頃若狹國松永庄の八幡宮に在つたもので、その後江戸時代には小濱藩の武久庄兵衛これを藏し、やがて藩主酒井家の有に歸して今日に及んでゐる。貞觀年間伴大納言善男の應天門放火の事件を取扱つた繪卷で、この事件は當時世の耳目を欹てしめた政治問題で、「三代實錄」を初め「宇治拾遺」等にも精しく記されてゐる。伴大納言はおのが政敵たる源左大臣信を陷れんがために應天門に放火し、これを信の仕業として誣告したので、朝廷は左大臣を配流せんとした。然るに伴大納言の從

伴大納言繪卷（酒井伯爵藏）